レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

別巻 I

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

No. 11
1972. 10. 26
大月書店

レーニン10巻選集　別巻I

『ロシアにおける資本主義の発展』について

豊田四郎

一　この著作の歴史的背景

この著作は、レーニン自身が述べているように、「ロシア革命の前夜の時期に、すなわち一八九五―九六年にいくつかの大規模なストライキが爆発したあとに到来したやや静穏な時期に、書かれた」ものである。「労働運動は当時、沈静していたかのようであったが、広くまた深くひろがりながら、一九〇一年のデモンストレーションの開始を準備していた。」（本書、第二版序文）

ロシアの農民改革（一八六一年）以後、一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、ツァーリズムと封建的残存物の緻密な網にからめながらもロシアに産業資本主義が急速に発展し、階級的諸矛盾が激化し、政治闘争が先鋭化した。当時のロシアのプロレタリアートのまえには、一八四〇年代のドイツ・プロレタリアートがおかれた諸条件よりも、より広範で深刻な諸矛盾が成熟し、当時のロシアのプロレタリアートは世界のプロレタリアートの「前衛」として世界史の舞台に押しだされ、当面するブルジョア民主主義革命＝社会主義革命を遂行するという歴史的任務に直面した。

しかし、ロシアにおいても、科学的社会主義の学説と労働運動とは別個の道を歩いていた。だれか人民のなかからえらばれた指導者が、祖国ロシアの動向と発展方向を正しく予見し、深くその世界史的意義を洞察し、ロシアのプロレタリアートにかわって、彼ら自身がその世界的使命（ツァーリズムと資本主義制度の打倒と社会主義、共産主義の建設）を理解できるような説得力をもって、ロシアの社会経済的構造、階級構成の基本的特徴を解明することが必要となってきた。

レーニンが、ロシアで科学的社会主義と労働運動とを結合し、新しい型の党――帝国主義段階で新しい政治的任務を遂行できない第二インタナショナル型の古い党でなく――を建設するために、独自の理論的組織的活動を開始したのは、一八八八年末ごろである。彼は、当時の共産主義者の任務、すなわち、「労働運動のそれぞれの段

階においてこの労働運動に受動的に奉仕することではなく、総体としての全運動にその終局の目標と、その政治的任務とをしめし、この運動の政治的・思想的独自性をまもることである」(『われわれの運動の緊急な諸任務』、一九〇〇年、全集第四巻)と述べている。『ロシアにおける資本主義の発展』(一八九九年)は、その主要な思想的、理論的な柱として、構築された科学的労作である。

当時、ロシアの最初の革命政党であるナロードニキ(人民主義)は、ツァーリズム、膨大な封建的残存物、資本主義にうちひしがれ窮乏したロシアの農民層を一様に「灰色」に塗りつぶし、農民層の多様な分化と分解を正しく分析することができず、小生産者の没落の結果としてロシアには資本主義発達の市場的基盤がない、と結論した。この結論にもとづいて、彼らは、ロシアに生まれたプロレタリアートの形成と革命におけるその力と役割をみることができず、古い農村共同体を通じて農民が社会主義(「人民主義」)を建設しうると空想し、革命はインテリゲンツィアが指導すると判断し、テロリズムの手段にさえ走った。

ロシアの最初のマルクス主義の組織である「労働解放団」(一八八三年)をつくったプレハーノフ(一八五六—一九一八)は、ナロードニキから分かれ、これを批判し、労働者にはじめて「最終の目標」(共産主義社会)をあたえ、「理論的には社会民主主義派を創設」(レーニン)した。しかし、彼は、労働者の同盟者としての農民の役割を正しく規定することができず、自由主義ブルジョアジーの進歩性を過大評価するという右翼的誤りをおかしていた。

レーニンは、ナロードニキおよび「合法マルクス主義」(マルクス主義文献における自由主義ブルジョアジーの反映)と妥協することなく闘争してマルクス主義の独自性をまもりつつ(たとえば、非合法の『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか?』(一八九四年)、ペテルブルグにおける非合法組織「労働者階級解放闘争同盟」(一八九五年末)を組織した。そして、ロシアの最初の社会民主労働党第一回大会(一八九八年)は、単一の綱領、規約、戦術をもたなかった。

レーニンは、流刑地から帰ってのち、『イスクラ』(一九〇〇年)を創刊し、ナロードニキの結集であるエス・エルを批判しつつ「綱領草案」(一九〇二年)を書き、また「経済主義」者との思想闘争を強めながら(『なにをなすべきか?』、一九〇二年)、ロシア労働運動の政治的思想的独自性をまもり、第二回党大会を準備した。

こうして、レーニンは、ブルジョア民主革命におけるプロレタリアートのヘゲモニー、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)、労農同盟の思想でつらぬかれた「綱領草案」でメンシェヴィキとたたかいながら、一九〇三年の第二回

党大会で、規約は採択されなかったが、綱領を採択し、党を確立した（ただし、ボリシェヴィキ党の組織的確立のためのレーニンの闘争は、一九一二年のプラハにおける第六回協議会まで精力的につづけられた）。

右の歴史的背景のなかで、『ロシアにおける資本主義の発展』は、科学的社会主義の歴史に創造的な寄与をおこなった学問的労作として書かれただけでなく、綱領的文書、ロシア共産党（ボ）の綱領を理論的に基礎づけたものとして書かれたものである。

この著作は、奥深い書斎ではなく、激しい政治的組織的活動のなかで、しかも、獄中と流刑地で、完成された。レーニンは、一八九八年八月に大部分を書き、一八九九年二月に最後の部分の原稿が出版におくられ、直接、三ヵ年を費やしている。一八九八年一〇月に、エヌ・カ・クループスカヤはエム・ア・ウリヤーノヴァにあてて、最近ウラヂーミル・イリイチは、「自分の市場論に首ったけになり、朝から晩まで書いています」（レーニン『一八九八年一〇月一四日、エム・ア・ウリヤーノヴァあての手紙』、全集第三七巻、五四三ページ）と書いている。

レーニンが、この著作の一般的理論的部分をまとめるためにどれだけ精密に準備したか、また理論的な諸命題をロシアの資料に応用するために、いかに精力的にゼムストヴォ刊行物（統計をふくむ）や政府刊行物を入手するのに苦心したか。これらの事柄については、当時の革命家のあいだで論争されていた「市場問題」についてのレーニンの一連の論文や、近親者にあてた「書籍目録」によっても、うかがい知ることができる。進歩的な商人や統計学者をふくむ知人の助力を得ながら、レーニンは獄中や流刑地の途中でさえ、図書館などを利用しながら、書籍や雑誌を研究し、抜粋をつくった。そしてエヌ・カ・クループスカヤがそのために、どれだけ協力したかということも、よく知られている。

こうして、あらゆる困難にもかかわらず、必要なすべての資料が利用された。この著作を完成する過程での、レーニンの仕事の大きさや方法を特徴づける準備資料の一部は、全集第三三巻におさめられている。

なお、主要なことは、レーニンは、この著作が専門的な学者ばかりでなく、広範な革命的知識人層と先進的労働者に理解されることをのぞんでいた。各章の末尾に、かならず要約がかかげられているが、これはレーニンのこの配慮の現れといえよう。

二　この著作の目的・限定・概要

著者みずから、この本の目的について、次のように書いている（「第一版の序文」）。

「本書で著者が目的としたことは、ロシア資本主義の

ための国内市場がどのように形成されつつあるかという問題を究明することである。」

後述するように、主要なことは、レーニンが当時の革命家のあいだで論争されていた「市場問題」を、サロン的なまたアカデミックな枠からはずしてプロレタリアートの立場から視野を広げ、弁証法的唯物論・史的唯物論とマルクス主義経済学の基本的命題を土台として、そのうえに構築しなおし、この問題をロシア革命の運命の問題として、深く考察したことにある。

この問題は、ナロードニキの代表者たちによってすでに提起されたが、彼らは、小生産者の没落の結果として、また外国市場をもたない結果として、ロシアでは剰余価値の実現は不可能であり、大工業のための国内市場は縮小し、したがって、「ロシアの資本主義は基盤のないものであり、流産の運命にある」、と考えた。

これにたいして、レーニンは、資本の生産・蓄積の過程を流通や分配の基礎においたマルクスの『資本論』の思想と命題にもとづいて、次のように述べている。

「資本主義の発展段階の問題から、独立した、別個の自立した問題としての国内市場の問題というものは、けっして存在しない。だから、マルクスの理論も、この問題を個別的に提起するようなことは、いちども、またどこでもしていない」「だから、ロシアの資本主義のための国内市場はどのようにつくられていくかという問題も、次の問題に帰着する。——ロシアの国民経済の種々の側面は、どのように、またどういう方向に、発展しているか？ これらの種々の側面のあいだの連関と相互依存性とはどういう点にあるか？」

レーニンは、このように問題を正しく提起しなおし、ロシアの国民経済は、緻密な封建的残存物の網にからまれながらも、農業においても、工業においても資本主義経済のなかにまきこまれ全体として商品＝資本主義経済を構成し、基本的に資本主義の方向に発展していること、農民層のブルジョアジーとプロレタリアートへの分解は、工業の資本主義化とあいまって、大工業のための国内市場を形成している、と回答した。こうして、資本主義と半封建的残存物との二重の搾取と圧迫のもとにあるロシアの工業プロレタリアートおよび農民層の多様な姿を生きいきと浮かびあがらせ、国民経済の種々の経済制度、種々の産業部門間の相互関係の基本的特徴をリアルにえがき、国民経済を多様性の統一において再構成し、ロシアの社会的経済的構造とその基本的階級構成を明確にした。

しかし、レーニンみずから、この著作の対象を次のように限定している（「第一版の序文」）。

この本は、「ロシアにおける資本主義発展の全過程を全体として考察」するものではない。レーニンは、もともと、この本の題名をもっと狭くし、「大工業のための

国内市場形成の過程」とつけるよう主張していたが、普及の側からの要請で、これは副題として残されることになった。

第一の限定は、「ロシアにおける資本主義の発展という問題」をもっぱら国内市場の見地からとりあげて、外国市場の問題や外国貿易の資料をのけたこと。

第二に、対象を農民改革後の時代だけに限ったこと。

第三に、辺境をのぞき国内の純ロシア的な諸県の資料だけをとりあげたこと。

第四に、過程の経済的側面に限ったこと。

それにしても、ロシア資本主義のための国内市場の問題を解明するためには、社会経済のすべての分野で起こった過程の個々の側面のあいだの関連と相互依存とをしめすことが、「無条件に必要」であると、レーニンは考えた。したがって、「われわれは、この過程の基本的な特徴」の考察にとどめた、と述べられている。そして、レーニンは、過程のより専門的な究明は、「今後の研究にゆずる」としている。この約束は、よく知られているように、『一九〇五―一九〇七年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』(全集第一三巻)、『一九世紀末のロシアの農業問題』(全集第一五巻)その他の論文で、発展的に果たされている。

レーニンは、この労作の概要について、第一版の序文で述べているが、若干の問題点だけにふれておきたい。

第一章は国内市場の問題にかんする抽象的な経済学の、基礎的な理論的諸問題を考察し、この事実をとりあつかっている他の章の「序論」として役だっている。ここで主要なことは、レーニンが経済学の命題を史的唯物論の土台のうえにすえて、変革の立場から発展的にかつより深刻に問題をとりあつかっていることである。したがって、「経済学の従事するところは、けっして『生産』ではなくて、生産における人間の社会的関係、生産の社会的構造」であるという指摘や、ナロードニキや「合法マルクス主義」の理論の批判と関連して、「資本主義の諸矛盾は、その歴史的＝過渡的性質を立証し、その分解をいっそう高い形態への転化と諸条件との諸原因を明るみに出している」という指摘が、軽視されてはならない。

第二―三章は、農業における商品＝資本主義関係の発展過程の分析にあてられている。すなわち、第二章では、一八六一年の改革後のロシア農民層が農村ブルジョアジーと農村プロレタリアートとに急速に分解していること、これと不可分に結びついて、地主経営も封建制度から資本制への過渡的様相をおび、地主経営の賦役制度が地主経営の資本主義的制度に移行しつつあることを明確にしている。そして、第四章では、商業的および資本主義的農業に形成されてゆく諸形態が分析されている。

このように、レーニンは、農業における資本主義的諸関係の特徴や指標、階級区分の基準、農民プロレタリア

ートの特殊性などを理論的に明確にしつつ、資本主義関係の総体と発展方向を明確に認識してから、それを阻止する封建的残存物の存在とその役割を浮彫りにした。こうして、農民の二重の社会経済的位置づけが明確にされ、当時、戦略問題であった「農民問題」が正しく解明されることになる。

これらの章で、具体的に明らかにされているロシア農業における資本主義的進化の確認、それとの関連での封建的残存物の存在の評価、そうしてのち、レーニンはロシア農業資本主義進化の型とテンポの問題にもふれている。この問題は、さらに後の結論まで、ロシア農業資本主義の進化をめぐる、地主型（プロシャ型）と農民型（アメリカ型）との「二つの道」のたたかいの理論として定式化され、ロシアのブルジョア民主主義革命における政治・社会・思想の全過程を深く合法則的に把握する武器として、発展せしめられた。

つづく三つの章は、工業における資本主義の発展の形態と段階にあてられている。もちろん、この分野でも、レーニンはマルクスの『資本論』の命題を具体化した。たとえば、レーニンは、工業における資本主義の主要な発展段階を三つに分けている。また、産業資本と商業資本の性格・差異・関連についてのいくつかの定式化、資本主義的家内労働の問題の解明、機械制工業と他の資本主義的工業形態との支配・従属の関係、工業プロレタリアートの多様な形態、農業における中世的搾取形態と大工業における先進的搾取形態との併存などの問題で、まえの三章と同じく、戦前の日本資本主義を究明するうえで、重要な示唆をあたえている。

最後の第八章で、レーニンは、この過程の個々の側面のあいだの関連をしめしつつ、この全般的な様相を描きだすようつとめている。ここで重要なことは、たとえば、ナロードニキが「出稼労働」をセンチメンタルにえがいているのにたいして、それを農業人口を犠牲にして工業人口を増大させる資本主義的発展のひとつの結果として、ひとつの必然的構成部分であるととらえ、「古い生活様式にたいして非常に進歩的意義がある」と述べていることである。

レーニンは、資本主義の歴史的役割の進歩性を承認することと、その否定的な暗黒的な側面を承認すること、および、この経済制度の歴史的に経過的な性格を暴露する資本主義に不可避な社会的諸矛盾を承認することとは、「完全に両立する」（本書五二三ページ）と考えた。

ナロードニキは、資本主義の歴史的進歩性を承認することは、その弁護を意味するかのように描きだしたが、彼ら自身がロシア資本主義自体にめばえ成長している深刻な諸矛盾を不十分に評価するという誤りをおかし、農民層の分解や農業進化の資本主義的性格、農村的または小営業者的賃金労働者（若干の生産手段・土地片をもっ

ている）の階級の形成、工業の資本主義の第一段階で現われている資本主義の最劣悪の諸形態の完全な支配を塗りつぶした。

以上、全巻にわたって、レーニンはマルクスの『資本論』の思想と命題を農民改革後のロシアに適用し、具体化して、一言でいえば、当時のロシアの経済制度の二つの基本的特徴は、貨幣経済と労働力の売買とが「基礎」になっていることをしめした。こうして、ロシアではすでに、プロレタリアートが「現代の社会関係の精髄」を体現し、全勤労者大衆の「前衛」であること、したがって、プロレタリアートの立場に立って考察してはじめて、社会の種々の基本的関係を解剖し、この経済構造の発展の基本的方向、経済の発展法則を深く認識しうることを明示した。

レーニンは、この客観的な経済法則を正しく認識し、この法則にしたがって政治的活動をおこなうことの必要性を強調し、空想的で主観的な願望から出発してテロリズムをもてあそびさえする、ナロードニキの反動的見解を、膨大な客観的な具体的事実にもとづいて、徹底的に批判しつくしている。

三　「市場問題」論争の意義

経済学の歴史のうえではじめて、資本主義のもとでの小生産者の没落、人民の購買力の減少、国内市場の縮小、剰余価値の実現困難、過少消費による恐慌という、資本主義発展の「行きづまり」理論を打ちたてたのは、シモン・ド・シスモンディ（一七七三―一八四二年、古典経済学派のうちのロマン主義の立場で資本主義制度を批判した反動的な小ブルジョア社会主義を代表）であった。彼は、小生産者の没落、剰余価値の実現困難という狭い角度から、資本主義の諸矛盾を矮小化し、資本主義的進化の不可避性とその進歩的役割に目をおおい、科学的分析を徹底させるかわりに、資本主義の矛盾をセンチメンタルに訴えるのにとどまった。

これに反して、同じ古典派経済学者で、マニュファクチュア時代の産業資本家のイデオローグであったアダム・スミス（一七二三―一七九〇年、古典経済学の創始者。彼は、労働価値説を説いたが、商品の価値構成における不変資本部分を見ることができなかった。これが「スミスのドグマ」である）は、農業における資本主義の発達が都市の成長および工業の発展と併存すること、すなわち、社会的分業の細分化が産業資本のために国内市場をつくることを説いた。そして、興隆期の産業資本家の楽天主義を代弁して、資本主義の進歩的役割と恒久的性格を謳歌し、資本主義制度の深刻な諸矛盾とその経過的性質を見ることができなかった。

先進的プロレタリアートの世界観を体系づけたカー

ル・マルクス（一八一八—一八八二）だけが、資本主義制度の歴史的使命（社会的生産力の発達）とそれに固有な社会的構造（人民大衆による技術的成果の利用の排除）に照応する矛盾、すなわち、生産拡張への無制限な衝動と人民大衆の限られた消費とのあいだにある矛盾を正しくつかみ、かつ、小生産者（農民や親方）の没落過程は、裏をかえせば、農村における資本主義の形成過程であり、これはまた大工業資本のための国内市場をつくりだす過程であることを科学的に明確にした。

マルクスは、『資本論』第一巻第七篇の最後の項「本源的蓄積」で、一国における資本主義の構造、「型」の決定について、原始蓄積の時代が重要な役割を果たすことを述べている。そして、さらに、マルクスは、資本制生産の発展段階に照応させて、資本主義のための国内市場の範囲（広さ×深さ）の拡大過程を考察している。

マルクスは第一に、資本のための国内市場の発展の出発点は前資本主義的生産方法の分解そのものであると問題を提起し、この照応関係を理論的に分析し、「農村家内工業の破壊だけが、一国の国内市場に資本主義的生産様式の必要とする広さと強固な存立とをあたえることができるのである」（第一巻第二分冊、九七六ページ）、と看破している。

第二に、マニュファクチュア時代から生みだした「新しい部類の小農民」を分析し、資本主義的経済制度は「かの独立自営農民の破滅のなかからくる」と説明した。

第三に、大工業は巨大な数の農村民を徹底的に収奪し、農業と家内的・農村的工業——紡績と織物——の根を引き抜いて、こうしてはじめて「産業資本のために国内市場の全体を征服する」（同、九七七ページ）と、結論している。

ロシアでは、すでに述べたように、一八九三年にナロードニキ経済学者のエヌ・エフ・ダニエリソン（一八四四—一九一八年）が、一九世紀末ロシアのシスモンディとして、現われた。彼は、同じ論理で、小生産者の没落はロシアにおける資本主義発展の地盤を掘りくずすと主張した。

レーニンは、これとの闘争のなかで、マルクスの「国内市場」についての命題を発展させ、精密化し、定式化した。彼は、まず自然経済→単純商品経済→資本主義的商品経済の内面的な合法則性を明確に分析し、有名な「国内市場形成の表式」さらには、資本の拡大再生産過程と国内市場発展との関連を表としてしめした。

レーニンによれば、資本主義の歴史的発展においては、直接生産者の自然経済の商品経済への内面的転化、商品経済の資本制経済への転化という、二つの契機が必要である。第一の転化は、社会的分業——孤立分散的な個々の生産者たちが産業のそれぞれただ一つの部門に従事して専門化すること——の出現によって遂行される。第二

の転化は、孤立した生産者が市場のために商品を生産し、競争の関係にはいることにより遂行される。すなわち、各人がより高く売りより安く買おうとする必然的結果として、結局、小商品生産者は、少数の富裕者と多数のプロレタリアートに分解し、多数のプロレタリアートへの没落は消費資料の国内市場のみならず労働力にたいする国内市場をつくりだし、少数のブルジョアジーへの上昇はたんに消費資料の国内市場のみならず生産手段の国内市場をもつくりだす。

以上の過程は、レーニンによれば、価値法則にもとづく経済的な内面的な転化の問題であって、けっして経済外的な外部的な「発展」の問題ではない。

さらに、レーニンは、資本制生産の発展諸段階が資本のための国内市場をつりだす過程を、内面的な連係をもつ精密な計数的照応関係としてとらえ、資本制生産力の発達の高さが正確に市場の大きさに投影されるものと考え表式化している（『いわゆる市場問題について』、全集第一巻、八六ページ以下）。『ロシアにおける資本主義の発展』の序章で、この関係は、次のように、精密に理論化される。

「国内市場は商品経済が現われるときに現われる。国内市場はこの商品経済の発展によってつくりだされ、社会的分業の細分化の程度が国内市場の発展の高さを規定する。国内市場は、商品経済が生産物から労働力へ移るにしたがって、広まっていく。そして、この労働力が商品に転化する度合に応じてのみ、資本主義は国の全生産をとらえ、主として、資本主義社会でますます主要な地歩を占めていく生産手段の増大によって発展していく。資本主義のための「国内市場」は、発展しつつある資本主義それ自体によってつくりだされるが、この資本主義は社会的分業をふかめ、直接的生産者を資本家と労働者とに分解していく。国内市場の発展の程度は、その国における資本主義の発展の程度である。国内市場の限界の問題を、資本主義の発展の程度の問題から切りはなして提起すること（ナロードニキ経済学者たちがやるように）は、正しくない」（序章の結論）。

「市場問題」をめぐる一九世紀末ロシアでの論争は、一見アカデミックな形をとっていたが、この論争には、ロシア革命の運命がかけられていた。「ロシア資本主義の運命」をめぐって、ナロードニキと「合法マルクス主義」とのあいだでおこなわれた論争問題は、結局、ロシア革命の推進力はなにか？　プロレタリアートか農民か？　革命家はいずれの階級に立脚すべきか？　ということ、したがって、ロシア資本主義の発展の現実と展望、当面するロシア革命の性格、戦略、展望の問題にかかわっていた。

レーニンは、ナロードニキや「合法マルクス主義」者の、ロシアでも資本主義の発展は一般に可能であるとか、

また資本主義発展の基盤はないから農村共同体を基盤として社会主義にすすむべきであるというような、観念的な論争の無意味を理論と事実の分析で暴露した。レーニンは、ロシアのマルクス主義経済学の研究は、ロシア資本主義の「現実の土台」のうえに、「ロシアの経済制度はいかに構成されているか、そしてそれは、なにゆえにそのように構成されていて、それとは異なって構成されていないのか、ということの研究と説明」に移されねばならないと主張した。

このような立場と方法と観点にもとづいて、レーニンのこの著作は、「市場問題」をマルクスの『資本論』の思想と命題のうえにすえ、『資本論』の思想を一九世紀末ロシアの現実に具体化し、ロシアの社会的経済的構造、階級的構成を分析し、ロシア・ブルジョア民主主義革命＝社会主義革命の社会経済的内容をあたえた。

四　政治過程におけるこの著作の検証、いくつかの教訓

この著作におけるロシアの社会経済的構造、階級構成の分析とその発展の展望の正しさは、第一次ロシア革命がブルジョア民主主義革命を提起したその途上で立証された。ロシア資本主義発展の合法則性は、その後の一〇年間の社会的法制的文化的諸条件によって育成され、成長し、満開して、第一次革命の時期に諸階級の動向、諸政党の旗印、社会運動の諸潮流のうちに、その鮮明な極印を見いだした。

レーニン自身が「第二版の序文」で書いているように、それは、第一に、第一次ロシア革命の途上で、黒百人組から、カデット、エス・エル、トルドヴィキ、共産党（ボ）にいたるまで、すべての階級の公然たる政治的行動によって、立証された。

第二に、同じ途上で、プロレタリアートの指導的役割、および歴史の動きにおけるプロレタリアートの力がその人口比重にくらべてはるかに大きいことも明白となったが、この二つの現象の経済的基礎は、すでにこの著作のなかで証明されている。

第三に、歴史は農民の二重の立場と役割、すなわち、資本主義と農奴制の残存物にうちひしがれた小ブルジョア農民層の経営主的傾向とプロレタリアートと反革命的ブルジョアジーとのあいだでの、プロレタリア的傾向、革命的プロレタリアートと反革命的ブルジョアジーとのあいだでの、貧窮化した小経営主の動揺性も、明白となった。すなわち、農民のあいだでの二つの潮流の経済的基礎は、すでにこの著作で証明されている。

われわれは、レーニンのこの著作から、それぞれに自分の体験と結びつけて、いろいろの教訓を引きだすことができる。したがって、筆者は、その教訓を「定式化」するつもりは毛頭ないが、筆者なりの若干の教訓を引き

だして、解説者としての責任を終えたい。

第一に、この著作は、特殊的な「ロシアの経済史」などではなく、『資本論』の命題を一国にいかに具体的に創造的に適用するかをしめした模範であるが、そのさいレーニンは、自主的な立場に立って、マルクスの命題を適用しているということである。レーニンはこの著作を完成してのち、「われわれはマルクスの理論を、けっしてなにか完成された、不可侵のものとは考えてならない。その反対に、この理論は、社会主義者が実生活に立ちおくれたくないならば、こんごさらにあらゆる方向へ前進させなければならない一つの科学のかなめ石をおいたにすぎないと、われわれは確信している。われわれは、ロシアの社会主義者にとってマルクスの理論を自主的に仕あげることがとくに必要である、と考える。というのは、この理論は、一般的な指導的な諸命題を提供しているだけで、それらの原理は個別的には、イギリスにたいしてはフランスとちがったふうに、フランスにたいしてはドイツとちがったふうに、ドイツにたいしてはロシアとちがったふうに適用されるからである」(『われわれの綱領』、全集第四巻)と書いている。

といっても、このことは「特殊性」理論の創造を意味するのでないことは、レーニンが当時まだマルクス主義者であったカウツキーの著作『農業問題』でとりあつかわれたドイツにおける農業資本主義の発展の分析成果において、一般的な共通のマルクス主義的命題の具体化を発見し、これを積極的に評価していることからも、明らかである。

第二に、レーニンはロシアの現実を分析するにあたり、教条から出発せず、具体的な資料から出発している。レーニンは、ロシア革命は不可避的にブルジョア民主主義革命であり、この命題をつねにロシア革命のあらゆる経済的および政治的問題に応用することが必要だが、「しかし、この命題を応用する能力をもたねばならない」として、プレハーノフの機械論を批判しつつ、次のように述べている(「第二版の序文」)。

この真理をあれこれの問題に適用するばあい、種々異なった階級の立場や利害について具体的な分析をやって、その真理の正確な意義を規定する(革命の社会経済的内容を明らかにする)のに役立てねばならない。プレハーノフを先頭とする右翼社会民主主義者は、これとは逆の考え方、すなわち、具体的な問題に対する答を、ロシア革命の基本的性格にかんする一般的真理のたんなる論理的展望のうちにもとめようと志向したが、これは、マルクス主義の卑俗化、弁証法的唯物論の愚ろうを意味するものである。

プレハーノフは、ロシア革命の性格にかんする一般的真理から、この革命ではブルジョアジーが指導的役割をもつとか、社会主義者は自由主義を支持するとか、と結

論したが（その詳細な批判は『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』で展開されている）、レーニンは、分析された社会的経済的構造、階級的構成を土台として、すでに一九〇七年に、当面のブルジョア革命の発展と結果には、客観的には、なしくずし的な改良と抜本的な革命との、二つの基本路線がありうることを展望している。

第三に、レーニンはこれらの論争と具体的事実の分析を通じて、経済学上の命題を、弁証法的唯物論・史的唯物論の土台のうえに再構築することに、大きな努力を費やしている。これと関連する、この著作の準備的な理論活動は、非合法に出版された『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか？』のなかで、十分に果たされている。このことによって、『ロシアにおける資本主義の発展』が、より深く思想的にプロレタリアートを武装するために役だった。

第四に、レーニンは、マルクス主義の純潔をまもる闘争、すなわち、ナロードニキや「合法的マルクス主義」との妥協のない思想的理論的闘争によって、マルクス主義理論そのものをきたえつつ、これを自主的かつ創造的に、ロシアの現実に適用している。

しかし他面、レーニンは、たんにマルクス主義的な論文や資料を利用するだけでなかった。彼はブルジョア的なゼムストヴォ統計や政府刊行物を必要なかぎり、あまねく収集し、これをマルクス主義の立場から批判的に加工することによって、ロシアの経済構造、階級構成をリアルに描きだした。そのためには、身近な人々はもちろん、進歩的な自由主義者と協力しつつ、資料収集や筆写の仕事など著作準備の仕事に集中した。

こうして、この著作は、ロシアにおけるマルクス主義的労働者政党の綱領作成の準備、第一次革命（一九〇五年）におけるボリシェヴィキの戦略と戦術の決定に巨大な役割を演じた。この歴史的な意義は、いまなお、日本の革命運動にとって生きており、われわれはいまなお、いろいろな角度から、この著作から多大な生きた教訓を学びとることができよう。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

別巻 I

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

* * *

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。
一　本巻は、『レーニン全集』（第五版）第三巻所収の『ロシアにおける資本主義の発展』の全訳である。
一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。
一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。
一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号（一）（二）……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』（全八冊）のものである。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。
一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。
一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

ロシア特有の度量衡
(メートル法への換算)

長　　さ

1ヴェルスタ……………………………………………… 1.067 km

1ヴェルショーク………………………………………… 4.445 cm

面　　積

1デシャチーナ……………………………………………1.092 ha

容　　積

1ヴェドロ……………………………………………12.3 ℓ (液量)

1チェトヴェルチ=8チェトヴェリーク…………209.21 ℓ (穀量)

重　　量

1プード=1/10ベルコヴェツ=40フント ………………… 16.38 kg

1フント=96ゾロートニク……………………………… 409.5 g

1ゾロートニク…………………………………………4.27 g

目　次

ロシアにおける資本主義の発展

大工業のための国内市場形成の過程(一)

一八九六―一八九九年に執筆
一八九九年三月末に単行本として発行
全集第五版、第三巻、一―六〇九ページ所収
邦訳全集、第三巻、一―六四三ページ所収

第一版の序文

本書で著者が目的としたことは、ロシア資本主義のための国内市場がどのように形成されつつあるかという問題を究明することである。周知のように、この問題は、すでに久しい以前から（ヴェ・ヴェ氏やニコライ—オン氏を先頭とする）ナロードニキ[三]的見解の代表者たちによって提起されている。そこでわれわれの課題は、これからこれらの見解を批判することにある。われわれはこの批判にさいして、論敵の見解のなかにある誤りや不正確な点の検討だけにかぎることはできないと考えた。提起された問題に答えるためには、国内市場の形成と成長をものがたる諸事実をあげるだけでは不十分に思われた。なぜなら、それらの事実は恣意的に選びだされており、逆のことをものがたる諸事実は省かれているという反論が、出るかもしれないからである。そこでわれわれには、ロシアにおける資本主義発展の全過程を全体として考察し、そしてそれを描きだすように試みることが必要と思われた。いうまでもなく、このように広範な課題は、次のような一連の限定をおかないかぎり、一個人の力のおよぶところではないであろう。すなわち、第一に、すでに本書の表題から明らかなように、われわれはロシアにおける資本主義の発展という問題をもっぱら国内市場の見地からとりあげるのであって、外国市場の問題や外国貿易にかんする資料は度外視する。第二に、われわれは農民改革[四]後の時代に限定する。第三に、主として、いやほとんどもっぱら、国内の純ロシア的な諸県にかんする資料をとりあげる。第四に、もっぱら過程の経済的側面だけに限定する。上記のすべての限定をつけてもなお、残されたテーマはきわめて広範なものである。私は、このように広範なテーマをとりあげることの困難と、さらにはその危険性を、けっしてかくしはしない。しかし、ロシア資本主義にとっての国内市場の問題を解明するには、社会経済のすべての分野で進行している過程の個々の側面の関連と相互依存性をしめすことが、無条件に必要であると思われた。したがってわれわれはここでは過程の基本的諸特徴を考察するだけにとどめ、その過程のより専門的な究明は今後の研究にゆだねることにする。

本書のプランは次のとおりである。第一章では、資本主義にとっての国内市場という問題にかんする抽象的経済学の基本的な理論的諸命題を、できるだけ簡潔に考察する。これは、この著作の残りの実証的な部分にたいするいわば序論ともなり、その後の叙述にあたって理論を何度も引証

する必要をなくすであろう。次の三つの章では、農民改革後のロシアにおける農業の資本主義的進化の性格をしめすことにつとめる。すなわち、第二章では農民層の分解にかんするゼムストヴォ統計[四]資料を検討し、第三章では地主経営の過渡的状態にかんする資料、地主経営の賦役制度から資本主義制度への転移にかんする資料を、そして第四章では、商業的および資本主義的農業が形成されるさいの諸形態にかんする資料を検討する。ひきつづく三つの章は、わが国の工業における資本主義発展の諸形態と諸段階の研究にあてられる。すなわち、第五章では工業における、ほかならぬ農民的小工業（いわゆるクスターリ工業）における、資本主義の初期の諸段階を考察し、第六章では資本主義的マニュファクチュアと資本主義的家内労働にかんする資料を、そして第七章では機械制大工業の発展にかんする資料を考察する。最後の第八章では、右にあげた個々の側面のあいだの関連をしめして、この過程の全容を描きだすように試みよう。

追記[五] 非常に残念なことに、われわれは、K・カウツキーがその著『農業問題』（シュトゥットガルト、ディーツ、一八九九年、第一篇「資本主義社会における農業の発展」*）であたえた、「資本主義社会における農業の発展」にかんするすぐれた分析を、本書のために利用することができなかった。

* ロシア語訳がある。

この著書（私はそれを、本書の大部分がすでに[六]植字されおわったころに手に入れた）は、『資本論』第三巻以後の最新の経済学文献のうちで最も注目すべきものである。カウツキーは農業の資本主義的進化の「基本的傾向」を研究している。彼の課題は、現代農業におけるさまざまな現象を、「一つの一般的過程の部分的現象」[七]として考察することである（序文、六ページ）。経済の面でも経済以外の面でもロシアにはきわめて大きな特殊性があるにもかかわらず、西ヨーロッパとロシアでこの一般的過程の基本的諸特徴がどれほど同様であるかということを指摘するのは、興味深いことである。たとえば、資本主義的な現代（moderne）農業にとっては、分業と機械使用との進行が一般に典型的であるが（カウツキー、第四章b、c）、これは農民改革後のロシアにおいても注意をひくことである（本書、第三章第七および第八節と、第四章のとくに第九節を見よ）。「農民層のプロレタリア化」（カウツキーの著書の第八章の標題）の過程は、どこでも、小農民のあらゆる種類の賃労働の普及のうちに現われている（カウツキー、第八章b）。

それと並行してわがロシアでは、分与地をもつ賃金労働者の膨大な階級の形成が見られる（本書第二章を見よ）。どの資本主義社会にも小農民層が残存しているのは、農業における小生産の技術的優越性によるものではなくて、小農民たちが自分の欲望を賃金労働者の欲望の水準以下に引きさげ、後者とは比較にならないほどの激しい労働に精根を傾けていることによるものである（カウツキー、第六章b。「農業労働者は小農民よりも良い状態にある」とカウツキーは何度も述べている。一一〇、三一七、三二〇ページ[八]）。同様の現象はロシアでも見られる（本書、第二章第一一節Bを見よ）[九]。だから、西ヨーロッパとロシアのマルクス主義者がたとえば次のような現象、すなわち、ロシア的表現をつかえば「農業出稼ぎ営業」、あるいはドイツ人[一〇]の言う「浮浪農民の農業賃労働」（カウツキー、一九二ページ、本書、第三章第一〇節を参照）とか――、あるいは農村から都市や工場への労働者と農民の流出（カウツキー、第九章e、とくに三四三ページ[一一]、その他多くの箇所、本書、第八章第二節を参照）、――資本主義的大工業の農村への移動（カウツキー、一八七ページ[一二]、本書、第七章第八節を参照）というような現象の評価で一致しているのは、当然である。彼らが農業資本主義の歴史的意義を同じように評価していること（カウツキー、随所、とくに二八九、二九二、二九八ページ[一三]、本書、第四章第九節を参照）、農業における前資本主義的関係とくらべての資本主義的関係の進歩性を同じように認めていることは、あらためて言うまでもない（カウツキー、三八二ページ[一四]、「労働するとき以外は自由な人間である日雇労働者によって、Gesinde〔僕婢〕（人格的に隷属している雇農（バトラーク）、召使（チェーリャヂ））や Instleute〔小屋住農民〕（『雇農と小作人との中間物』、すなわち雇役を代償に土地を借りる農民）が駆逐されることは、大きな社会的進歩であろう。」本書、第四章第九節四を参照）。カウツキーは、農村共同体が近代的大規模農業の共同経営に移行することは「まったく考えられない」こと（三三八ページ[一五]）、西ヨーロッパで共同体の強化と発展を要求している農学者たちは、けっして社会主義者ではなく、一片の土地をあたえることで労働者をつなぎとめておこうとねがっている大土地所有者の利益の代表者であること（三三四ページ[一六]）、すべてのヨーロッパ諸国で土地所有者の利益の代表者たちは、土地の分与によって農村労働者をつなぎとめておこうとねがっており、すでにそのための方策を法制化しようと試みていること（一六二ページ[一七]）、クスターリ工業（Hausindustrie）〔家内工業〕――資本主義的搾取のこの最悪の種類――の扶植によって小農民層を援助しようとするあらゆる試みにたいしては、「最も断固としてたたかわな

ければならない」(一八一ページ)(一八)ことを、断定的に承認している。われわれは、西ヨーロッパとロシアのマルクス主義者の見解の完全な一致を強調することが必要であると考える。というのは、最近ナロードニキの代表者たちは、両者を厳格に区別しようと試みているからである(一八九九年二月一七日のロシア商工業育成協会におけるヴェ・ヴォロンツォフ氏の声明を見よ、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』第八二五五号、一八九九年二月一九日付)(一九)。

第二版の序文(二〇)

本書はロシア革命前夜の時期に、すなわち一八九五―一九〇六年にいくつかの大規模なストライキが爆発したあとに到来したやや静穏な時期に、書かれた。労働運動は当時、沈静していたかのようであったが、広くまた深くひろがりながら、一九〇一年のデモンストレーションの開始を準備していた。

本書では、統計的情報の経済的研究と批判的検討とにもとづいて、ロシアの社会=経済体制と、したがってまた階級構成が分析されているが、その分析はいまでは革命途上におけるすべての階級の公然たる政治行動によって実証されている。プロレタリアートの指導的役割はまったく明らかになった。歴史の運動におけるプロレタリアートの力が、人口全体のなかに占めるその比率よりも測りしれないほど大きいということもまた、明らかになった。これら二つの現象の経済的な基礎は、本書のなかで立証されている。

さらに、革命はいまや、農民の二重の立場と二重の役割をますますはっきりさせている。一方では、貧農のこれまでにない貧困化と零落のもとでの賦役経済の膨大な遺物と

農奴制度のありとあらゆる残存物とは、革命的農民運動の深部の源泉を、大衆としての農民の革命性の深部の根源を、完全に説明している。他方では、革命の経過のなかにも、いろいろな政党の性格のなかにも、また多くの政治思想上の潮流のなかにも、農民大衆の内的に矛盾した階級構成が、その小ブルジョア性が、またその内部における経営主的傾向とプロレタリア的傾向との対立が、しめされている。貧困化した小経営主が反革命的ブルジョアジーと革命的プロレタリアートとのあいだで動揺することは、避けられない。それは、小生産者のなかのとるにたりない少数のものがもうけ、「出世し」、ブルジョアになる一方、圧倒的多数がまったく零落して賃金労働者あるいは窮民になるか、それともたえずプロレタリアとすれすれの状態で生活するという現象が、あらゆる資本主義社会で避けられないのと、まったく同じである。農民層のなかの二つの潮流の経済的基礎は、本書で証明されている。

　このような経済的基礎のうえでは、ロシアにおける革命は、もちろん、不可避的にブルジョア革命である。マルクス主義のこの命題はまったく打ちやぶりえないものである。この命題はけっして忘れてはならない。それをロシア革命のあらゆる経済的および政治的問題につねに応用することが必要である。

　しかしこの命題を応用する能力がなければならない。右の真理をあれこれの問題に応用するにあたっては、種々の階級の状態や利害の具体的な分析が、この真理の正確な意義を規定するのに役だたなければならない。ところが、プレハーノフを先頭とする右翼社会民主主義者によく見られるような、これとは逆の考え方、すなわち、具体的な問題にたいする回答をわが国の革命の基本的性格にかんする一般的真理のたんなる論理的展開のうちに求めようとする傾向は、マルクス主義の卑俗化であり、弁証法的唯物論にたいするまったくの愚弄である。たとえば、この革命の性格にかんする一般的真理から、革命では「ブルジョアジー」が指導的役割を演ずるとか、あるいは社会主義者は自由主義者を支持する必要があるとかいう結論を引きだす人々にたいしては、マルクスは、おそらく、彼がかつてハイネから引用したことのある次のことばを繰りかえすことであろう。「私は竜の歯を播いたが、収穫したのは蚤だった」(三)。

　ロシア革命の目下の経済的基礎のうえでは、革命の発展と結末について二つの基本路線が客観的に可能である。

　一つは、幾千もの糸で農奴制度と結びつけられている古い地主経営が存続しながら、徐々に純資本主義的な「ユンカー」(三)経営に転化してゆくという路線である。賦役から資本主義への終局的移行の基礎となるものは、農奴制的地主

経営の内部的改造である。国の農業構造全体は資本主義的になるが、農奴制的特徴が長期間維持される。もう一つは、革命が古い地主経営を粉砕し、農奴制のあらゆる遺物、なによりも大土地所有を破壊するという路線である。雇役から資本主義への終局的移行の基礎となるものは、農民のために地主の土地が収奪されたことから巨大な刺激をうけた小農民経営の自由な発展である。農業構造全体が資本主義的になる。なぜなら、農奴制の痕跡がより完全に絶滅されればされるほど、農民層の分解はそれだけより急速に進むからである。いいかえれば、次のようになる。一つは、地主的土地所有の大部分と古い「上部構造」の主要な基柱とが維持される路線である。このことから、自由主義的＝君主主義的ブルジョアと地主が優勢な役割を演じ、富裕な農民が彼らの側へ急速に移行する反面、農民大衆は貧困化する。彼らは大々的に収奪されるだけでなく、それに加えてあれこれのカデット[註]流の買取操作によって債務奴隷化され、反動の支配によって打ちのめされ、愚鈍にされる。このようなブルジョア革命の遺言執行人になるのは、オクチャブリスト[註]に近いタイプの政治家であろう。もう一つは、地主的土地所有とそれに照応する古い「上部構造」のすべての主要な基柱とを破壊する路線である。その場合には、ふらついたあるいは反革命的なブルジョアジーを中立化させながら、プロレタリアートと農民大衆が優勢な役割を演ずる。そして商品生産の状況下で一般に考えうる労働者と農民大衆の最善の状態のもとで、資本主義的な基礎のうえに生産力がきわめて急速で自由に発展する。このことから、社会主義的改造という労働者階級の本当の根本的な課題を、これからさき実現してゆくのに最も有利な条件がつくりだされる。もちろん、あれこれの型の資本主義的進化の諸要素が際限なく多様に組みあわされることもありうる。だが、その場合に生ずる独特で複雑な問題を、別の歴史的時代にかんするマルクスのあれこれの論評からの引用だけによって解決したりするのは、どうにも救いようのない空論家だけであろう。

本書は、革命前のロシア経済の分析にあてられている。革命の時代には国の状況はきわめて急速かつ突発的に変わるので、政治闘争のさなかに経済的進化の大きな成果を確定することは不可能である。一方ではストルィピン一味の諸氏が、他方では自由主義者たち（それもけっしてストルーヴェ流のカデットだけでなく、一般にすべてのカデット）が、第一の型の革命をなしとげようと系統的に、執拗に、一貫して活動している。われわれが経験したばかりの一九〇七年六月三日のクーデタ[註]は、いわゆるロシア国民議会で地主の完全な優位を確保しようと志向する反革命の勝

利を意味する。しかし、この「勝利」がどれだけ堅固なものであるかは別問題であり、そして革命の第二の型の結末をめざすたたかいはなおつづけられている。プロレタリアートだけでなく、広範な農民大衆もまた、第二の型の結末をめざして、多かれ少なかれ断固として、多かれ少なかれ一貫して、多かれ少なかれ自覚して、努力している。どんなに反革命が露骨な暴力で抑圧しようと努めても、どんなにカデットがその卑劣で偽善者的な反革命思想で抑圧しようと努めても、直接的な大衆闘争は、そこここで、なにがなんでも爆発する。また、小ブルジョア政治家の上層（とくに「人民社会主義者」(三六)とトルドヴィキ(三七)）は、穏健できちょうめんな町人あるいは役人の裏切りやモルチャリン(三八)的へつらいや自己満足という、カデット的精神によって疑いもなく毒されているにもかかわらず、直接的な大衆闘争は「勤労者的」、ナロードニキ的諸政党の政策に自己の刻印を押すのである。

この闘争がなにをもって終わるか、ロシア革命の最初の急襲の総決算がどんなものかは、いまはまだ語ることができない。だから本書の全面的改訂のためには時期はまだ早い*（しかも、労働運動の一参加者の直接の党活動上の義務が、その余暇をあたえない）。第二版も、革命前のロシア経済を特徴づけるという範囲を越えることはできない。そこで私は、本文の点検と訂正および最新の統計資料のうち最も必要なものの追加だけにとどめるほかはなかった。それらの統計資料とは、最近の馬匹調査資料、収穫統計、一八九七年の全ロシア人口調査結果、工場統計の新しい資料その他である。

一九〇七年七月　　著者

* おそらく、このような改訂には本書の続篇が必要であろう。そのときには、第一巻は革命前のロシア経済の分析にとどめ、第二巻を革命の決算とその帰結の研究にあてるようなことになるであろう。

第一章　ナロードニキ経済学者の理論的誤り〔三〕

市場は商品経済のカテゴリーである。そして商品経済はその発展のうちに資本主義経済に転化し、それのもとではじめて完全な支配と全面的な普及をとげる。だから、国内市場にかんする基本的な理論的諸命題を検討するためには、われわれは単純商品経済を出発点とし、それの資本主義経済への漸次的転化をあとづけなければならない。

一　社会的分業

商品経済の基礎は社会的分業である。加工工業が採取産業から分離し、さらにそのおのおのが、独自の生産物を商品の形態で生産してそれを他のあらゆる生産部門と交換する、小さな種や亜種に細分される。こうして、商品経済の発展は個々の自立した産業部門の数を増加させる。このような発展の傾向は、個々の生産物の生産だけでなく、生産物の個々の部分の生産をも、さらには生産物の生産だけでなく、生産物を消費のために準備する個々の業務さえをも、独自の産業部門に転化させることにある。現物経済のもとでは、社会は多数の同種の経済単位（家父長制的農民家族、原始的農村共同体、封建領地）から成りたっており、そしてこれらの各単位は、さまざまな種類の原料の採取からそれらを消費のために最終的に準備することまでのあらゆる種類の経済活動をおこなっていた。商品経済のもとでは、種類の異なる経済単位がつくりだされ、個々の経済部門の数は増加し、同一の経済機能を遂行する経営の数は減少する。社会的分業のこの累進的発展こそ、資本主義のための国内市場の創出過程における基本的契機である。マルクスはこういっている。「……商品生産およびその絶対的形態である資本主義的生産の基礎のうえでは、……生産物が商品であり、ある交換価値をもつ、それも実現されうる、貨幣に転化しうる交換価値をもつ使用価値であるのは、ただ、他の商品がその生産物にとっての等価物をなし、他の生産物が商品として、価値として右の生産物に相対しているかぎりでのことである。つまり、これらの生産物がその生産者自身のための直接的な生活維持手段として生産されるの

ではなく、商品として、すなわち、ただ交換価値（貨幣）への転化によって、それらの譲渡によって、使用価値になる生産物として、生産されるかぎりでのことである。これらの商品のための市場は、社会的分業によって発展する。いろいろな生産的労働の分離は、これらの労働のそれぞれの生産物をたがいに商品に転化させ、相互にとっての等価物に転化させ、それらの生産物をたがいに市場として役だたせる」（『資本論』、第三巻第二冊、一七七―一七八ページ。ロシア語訳、五二六ページ[三〇]、傍点は私のもの。とくに断わらないかぎり、以下の引用文でも同様）。

いうまでもなく、上述したような加工工業の採取産業からの分離、製造業の農業からの分離は、農業自身をも産業に、すなわち商品を生産する経済部門に転化させる。種々の生産物加工を相互に分離させ、ますます多数の産業部門をつくりだしてゆく専門化過程は、農業にも現われて、専門化した農業地帯（および農業経営方式*）をつくりだし、農業生産物と工業生産物のあいだだけでなく、種々の農業生産物のあいだにも交換をひきおこす。商業的（および資本主義的）農業のこの専門化はすべての資本主義国に現われ、国際的分業のうちに現われているが、それはまた、以下にくわしくしめすように、農民改革後のロシアにも現われている。

* たとえば、イ・ア・ステブートはその著書『耕種農業の基礎』のなかで、農業における経営方式を主要な市場向け生産物別に区別している。おもな経営制度は次の三つである。（一）耕種方式（ア・スクヴォルツォフ氏の表現によれば、穀作方式）、（二）畜産方式（主要な市場向け生産物は畜産物）、（三）工業用作物方式（ア・スクヴォルツォフ氏の表現によれば工芸作物方式）、主要な市場向け生産物は工芸的加工を受ける農産物。ア・スクヴォルツォフ『農業にたいする蒸気力輸送の影響』、ワルシャワ、一八九〇年、六八ページ以下を参照。

このように、社会的分業は商品経済と資本主義との発展過程全体の基礎である。だから、わがナロードニキ派の理論家たちが、この発展過程を人為的措置の結果だとか、「道からの逸脱」の結果だとか、その他等々のことを申したてて、ロシアにおける社会的分業の事実を塗りつぶそうと、あるいはこの事実の意義を弱めようと努力したのも、当然のことである。ヴェ・ヴェ氏は論文『ロシアにおける農業と工業との分業』（『ヴェーストニク・エヴローピィ』〔『ヨーロッパ通報』〕、一八八四年、第七号）で、「ロシアにおける社会的分業の原理の支配」を「否定し」（三四七ページ）、わが国では社会的分業は「国民生活の深部から成長したものではなく、脇から割りこもうとしたものである」と宣言した（三三八ページ）。ニコライ―オン氏はそ

の著書『概要』のなかで、販売に向けられる穀物量の増加について次のように論じた。「この現象は、生産された穀物が国中に、より均等に分配されることを、すなわちアルハンゲリスクの漁夫がいまではサマラの穀物を食べ、サマラの農夫はアルハンゲリスクの魚を夕食に添えるということを、意味することになろう。ところが実際には、そのようなことはなにも起きていない」(『農民改革後のわが国社会経済の概要』、サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、三七ページ)。なんの資料もなしに、周知の事実に反して、ここではあっさりと、ロシアには社会的分業はない、と宣告されているのだ！　ロシアにおける資本主義の「人為性」というナロードニキの理論は、あらゆる商品経済の基礎そのもの――社会的分業――を否定するか、または「人為的」と宣言するよりほかには、打ちたてることができなかったのである。

二　農業人口の減少による工業人口の増加

商品経済に先行する時代には、加工工業は採取産業と結合しており、そして後者の首位にあるのは農業であるから、商品経済の発展は工業部門がつぎつぎと農業から分離することとして現われる。商品経済の発展が微弱な(あるいはまったく未発展な)国の住民は、ほとんどもっぱら農業的である。しかしこのことを、住民が農業だけに従事しているというように解釈してはならない。このことが意味するのは、農業に従事する住民が自身で農業生産物を加工しているということ、交換と分業がほとんど欠如しているということでしかない。したがって商品経済の発展は、eo ipso〔まさにそのことによって〕住民のますます多くの部分が農業から分離すること、すなわち、農業人口の減少によって工業人口が増加することを意味する。「農業人口を非農業人口とくらべて絶えず減少させることは、資本主義的生産様式の本性に根ざすことである。なぜなら、工業(狭い意味で)では可変資本とくらべての不変資本の増大は、可変資本が相対的には減少しても絶対的には増大することと結びついているが、他方、農業では、一定の地所を利用するのに必要な可変資本は絶対的に減少し、したがって可変資本は、新しい土地が耕作されるかぎりでのみ増大しうるのであるが、このことはまた非農業人口のいっそう大きな増加を前提するからである」(『資本論』[三一]、第三巻第二冊、一七七ページ。ロシア語版、五二六ページ)。このように、農業人口の減少による商工業人口の増加のない資本主義を考えることはできないのであり、まただれでも知っている

ように、この現象はすべての資本主義国でまさにきわだって現われているのである。この事情が国内市場の問題でもつ意義が重大であることは、証明する必要もあるまい。というのは、それは工業の進化とも農業の進化とも不可分に結びついているからである。工業的中心地の形成、その数の増加、そこへの人口の吸引は、農村の全構造に深刻な影響をあたえずにはおかないし、商業的および資本主義的農業の発展をひきおこさずにはおかない。ナロードニキ的経済学の代表者たちが、その純理論的な議論においても、またロシアの資本主義にかんする議論においても、この法則をまったく無視しているという事実は、それだけにますます注目すべきである（ロシアにおけるこの法則の現れの特殊性については、あとで、第八章でくわしく述べる）。資本主義のための国内市場にかんするヴェ・ヴェ氏とニコライ—オン氏の理論では、農業から工業への人口流出と、その事実の農業にたいする影響という、まったくもって些細なことが、見おとされている。*

* 西ヨーロッパのロマン派とロシアのナロードニキが工業人口の増加という問題にたいして同様の態度をとっていることについては、私は『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて。シスモンディとわが祖国のシスモンディ主義者たち』(三三)のなかで指摘しておいた。

三　小生産者の零落

これまでわれわれは単純商品生産をとりあつかってきた。今度は資本主義生産に移ろう。すなわち、単純商品生産者のかわりに、一方には生産手段の所有者、他方には賃金労働者、労働力の販売者がいるものと仮定しよう。小生産者の賃金労働者への転化は、小生産者が生産手段——土地、労働用具、仕事場、その他——を失うこと、すなわち小生産者の「貧困化」、「零落」を前提する。この零落は「住民の購買力を低下させ」、資本主義のための「国内市場を縮小させる」という見解がある（ニコライ—オン氏、前掲書、一八五ページ。同じく二〇三、二七五、二八七、三三九—三四〇ページその他。同じ見解はヴェ・ヴェ氏のたいていの著書にもある）。われわれはここでは、ロシアにおけるこの過程の進行にかんする事実資料にはふれない。事実資料にはあとの諸章でくわしく考察する。いまは問題が純理論的に提起されている。すなわち、商品生産が資本主義に転化するさいの商品生産一般の問題である。上記の著者たちもこの問題をやはり理論的に提起している。すなわち、小生産者の零落という事実だけから国内市場の縮小を結論しているのである。このような見解はまったく誤りであるが、それ

がわが国の経済学文献に根強く生きのこっているのは、ひとえにナロードニキ主義のロマン主義的偏見によるものである（さきの注にあげた論文を参照）。一部の生産者が生産手段から「自由になる」ことは、必然的に次のことを、――すなわち、生産手段が他人の手に移ること、生産手段が資本に転化すること、――したがってそれらの生産手段の新しい所有者は、以前には生産者自身が自分で消費していた生産物を商品として生産する、すなわち国内市場を拡大すること、――これらの新しい所有者は、自分の生産を拡大することによって、新しい用具、原料、輸送手段その他にたいする需要を市場に提供することを、予想する（これらの新しい所有者の富裕化は当然彼らの消費の増加をも予想する）ものであるが、彼らはこれらのことを忘れているのだ。市場にとって重要なのは、けっして生産者が富裕なことではなく、生産者の手に貨幣資金が存在することである、ということを忘れているのだ。以前には主として現物経済を営んでいた家父長制的農民の富裕さが低下することは、彼の手中にある貨幣資金の量が増大することと、完全に両立しうる。なぜなら、こういう農民が零落すればするほど、彼はますます労働力の販売に頼らざるをえなくなり、自分の生活手段のますます大きな部分を（たとえ、より貧弱なものであっても）市場で入手しなければならなくなるからである。（土地から）「農村民の一部分が遊離するにつれて、彼らの以前の食糧もまた遊離する。この食糧はいまや可変資本」（労働力の購入に支出される資本）「の素材的要素に転化する」（『資本論』、第一巻、七七六ページ[註]）。「農村民の一部分の収奪と放逐は、労働者とともに彼らの生活手段や労働材料をも産業資本のために遊離させるだけでなく、それはまた国内市場をつくりだすのである」（前掲書、七七八ページ[註]）。このように、抽象的＝理論的見地からすれば、発展しつつある商品経済と資本主義の社会における小生産者の零落は、ニコライ—オン氏やヴェ・ヴェ氏がそのことからみちびきだしたいと望んでいるのとはまさに反対のことを意味する。すなわち、国内市場の縮小ではなくその創出を意味する。ロシアの小生産者の零落は国内市場の縮小を意味するとア・プリオリに宣言する当のニコライ—オン氏が、それにもかかわらず、反対の内容をもつ前掲のマルクスの主張を引用している（『概要』、七一、一一四ページ）のは、この著者が『資本論』からの引用文によってわれわれとわが身を打つというみごとな能力をもっていることを、証明するだけである。

四　剰余価値の実現は不可能だというナロードニキ理論

国内市場の理論におけるその次の問題は、以下のことにある。周知のように、資本主義的生産における生産物の価値は三つの部分に分かたれる。（一）第一の部分は不変資本を、すなわち、以前にも原料、補助材料、機械、生産用具その他の形で存在していて、製品の一定部分のうちに再生産されるにすぎない価値を、補塡する。（二）第二の部分は、可変資本を補塡する。すなわち、労働者の生活費を補償する。最後に、（三）第三の部分は、資本家にわたる剰余価値を構成する。ふつうは次のように考えられている（われわれはこの問題をニコライ—オン氏やヴェ・ヴェ氏の流儀で叙述する）。はじめの二つの部分の実現（すなわち、それに相当する等価の発見、市場での販売）は困難でない。なぜなら、第一の部分は生産にあてられ、第二の部分は労働者階級の消費にあてられるからである。だが第三の部分——剰余価値——は、どのようにして実現されるか？それが資本家によってそっくり消費されることはできない！　そこでわが経済学者たちは、剰余価値実現における「困難からの活路」は、「外国市場の獲得」にあるという結論に到達する（ニコライ—オン『概要』、第二篇、第一五節全体と、とくに二〇五ページ、ヴェ・ヴェ『市場への商品供給の過多』——『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』、一八八三年所収——および『理論経済学概論』、サンクト-ペテルブルグ、一八九五年、一七九ページ以下）。資本主義的国民にとって外国市場が必要であるのは、右の著述家たちによると、それなしには資本家は生産物を実現できないからである。ロシアの国内市場は、農民の零落の結果、また外国市場なしには剰余価値の実現は不可能であることとの結果、縮小しており、他方、外国市場は、資本主義の道にはいるのがあまりにも遅すぎた若い国にとって近づきがたいものになっている。こうして、ロシアの資本主義は基盤をもたないこと、流産の運命にあることが、ひとえにア・プリオリな（しかも理論的にまちがった）考えにもとづいて、論証ずみと宣言されるのである！

ニコライ—オン氏は、実現について論じたさいに、明らかに、この題目についてのマルクスの学説を念頭においていた（もっとも彼は、『概要』のこの部分ではマルクスについてひとことも言及していないが）。しかし彼はその学説を全然理解できず、すぐあとでしめすように、見分けもつかないほどそれをゆがめてしまった。そのため、マルクスの見解が本質的な点で完全にヴェ・ヴェ氏の見解と一致

するというような奇妙なことが起きたのであるが、このヴェ・ヴェ氏を理論の「無理解」のゆえに非難することはけっしてできない。というのは、その理論をほんのすこしでも知っているのだろうかとヴェ・ヴェ氏を疑うことは、きわめて不当なことだろうからである。この二人の著者は、自分の学説を述べるにあたって、まるで自分たちがはじめてこの題目についてかたり、「自分の頭」で一定の解決に到達したかのようにいっている。二人ともこの問題にかんする旧時の経済学者たちの議論をきわめて尊大な態度で無視し、『資本論』第二巻で詳細にわたって論破された古い誤りを繰りかえしている。*二人の著者はともに、明らかに、不変資本の実現には困難はないと考えて、全問題を剰余価値の実現に帰着させている。この素朴な見解はきわめて深刻な誤りをふくんでおり、実現にかんするナロードニキ学説のそれ以後の誤りはすべてここから出ている。実際には、実現を説明するさいの問題の困難さは、不変資本の実現を説明することにこそある。実現されるためには、不変資本はふたたび生産に向けられなければならないが、そのことが直接的に実行されうるのは、生産手段を生産する資本にとってだけである。もし不変資本部分を補塡する生産物が消費資料であるなら、それを生産に直接向けることは不可能である。必要なのは、生産手段を製造する社会的生産部門と消費資料を製造する社会的生産部門とのあいだの交換である。問題の全困難はまさにこの点にあるのだが、わが経済学者たちはそれに気がつかないのである。ヴェ・ヴェ氏は一般に問題を、あたかも資本主義生産の目的が蓄積ではなく消費であるかのようにあらわしており、「発展のある時点では、有機体」（原文のまま！）「の消費能力を上まわる大量の物資が少数者の手にはいる」（前掲書、一四九ページ）とか、「生産物の過剰の原因は、工場主の質素や節制ではなく、剰余価値が増大するのと同じ速さで消費能力を拡大することのできない人間有機体（!!）の限界あるいは不十分な弾力性である」（前掲書、一六一ページ）と、考え深げに論じている。ニコライ—オン氏は、彼が消費資本主義的生産の目的とは考えておらず、実現の問題におけける生産手段の役割と意義を考慮に入れているかのように、事態をえがこうと努めているが、しかし実際には彼は、社会的総資本の流通と再生産の過程について全然わからず、おびただしい矛盾のなかでわけがわからなくなったのである。われわれはこれらの矛盾のすべて（ニコライ—オン氏の『概要』二〇四—二〇五ページ）を詳細に検討するつもりはない。それはあまりにもありがたくない仕事である（部分的にはすでにブルガーコフ氏がその著書『資本主義的生産のもとでの市場について』、モスクワ、一八九七年、

二三七―二四五ページで、遂行している)。[**]それだけでなく、ニコライ―オン氏の議論にたいするいまあたえたばかりの評価を立証するためには、彼の最終的結論、すなわち、剰余価値実現での困難からの活路は外国貿易であるという結論を、検討すれば十分である。ニコライ―オン氏のこの結論(本質においてヴェ・ヴェ氏の結論のたんなる繰りかえし)は、彼が資本主義社会における生産物の実現(すなわち国内市場の理論)をも、外国市場の役割をも、まったく理解していなかったことを、まったくまざまざとしめしている。実際に、「実現」の問題に外国市場をこのように引きいれることが、わずかでも常識にかなったことだろうか? 実現の問題は、資本主義的生産物のおのおのの部分が価値(不変資本、可変資本、剰余価値)の点で、また物的形態(生産手段、消費資料、詳細には必要品と奢侈品)の点で、市場でそれと入れかわる他の生産物部分をどのようにして見いだすかということにある。外国貿易がこのさい捨象されなければならないことは、明らかである。というのは、外国貿易を引きいれることは、いささかも問題解決を前進させるものではなく、問題を一国から数ヵ国に移すことによって解決を引きのばすにすぎないからである。剰余価値実現の「困難からの活路」を外国貿易に見いだした当のニコライ―オン氏は、たとえば賃金については次のように言っている。年生産物のうち直接的生産者――労働者――が賃金の形で受けとる部分によっては、「生活手段のうち価値の点で賃金総額に等しい部分だけを、流通から引きだすことができるにすぎない」(二〇三ページ)。いったい、ある国の資本家が、ちょうど賃金によって実現されうるだけの量と質の生活手段を生産するということを、わが経済学者はどうして知るのだろうか? そのさい外国貿易なしですましうるということを、彼はどうして知るのだろうか? 明らかに、彼はそれを知りえないし、彼は外国貿易の問題をあっさり排除してしまったのである。というのは、可変資本の実現を論ずるうえで重要なことは、生産物の一部分が他の部分と入れかわることであって、この入替りが一国内でおこなわれるか二国間でおこなわれるかはなんら重要でないからである。しかし剰余価値については、彼はこの必然的な前提からそれて、問題解決のかわりに、外国貿易を口にすることによって問題をあっさり回避してしまうのである。外国市場での生産物販売そのものが説明を要する。すなわち、販売される生産物部分にとっての等価を見いだすこと、この部分にとってかわることのできる資本主義的生産物の別の部分を見いだすことが、必要である。だからこそマルクスは次のように言っているのである。実現の問題を考察するさいには外国貿易を「考慮に入れる

必要はまったくない」。なぜなら、「一年間に再生産される生産物価値を分析するさいに外国貿易をもちこむことは、混乱をひきおこしうるだけであって、問題にとってであれその解決にとってであれ、なんら新しい契機を提供しはしない」（『資本論』、第二巻、四六九ページ）[三二]からである。

ヴェ・ヴェ氏とニコライ―オン氏は、剰余価値実現にかんする困難を指摘することによって、資本主義の諸矛盾を奥底から評価したつもりになった。だが実際には、彼らは資本主義の諸矛盾をまったく表面的に評価したのである。なぜなら、もし実現の「困難」やそこから生ずる恐慌その他について語るとすれば、これらの「困難」が、けっしてただ剰余価値だけについてではなく資本主義的生産物のすべての部分について、ありうるばかりでなく必然的でさえあるということを、認めなければならないからである。種々の生産部門の配分の不均衡からくるこの種の困難は、剰余価値の実現の場合だけでなく可変資本や不変資本の実現の場合にも、また消費資料としての生産物の実現の場合だけでなく生産手段としての生産物の実現の場合にも、たえず発生する。一般にこの種の「困難」や恐慌なしには、資本主義的生産は、すなわち未知の世界市場めあての孤立した生産者たちの生産は、存在しえないのである。

＊　この場合、ヴェ・ヴェ氏が文献上ゆるされるあらゆる限界を超越している大胆さは、とくに驚くべきものである。ヴェ・ヴェ氏は、自分の学説を述べたさいに、まさに実現をとりあつかっている『資本論』第二巻についての完全な無知を暴露して、同じ場所で、彼はほかならぬマルクスの理論を「自分の構想に利用した」と、不当にも言明している!!（『理論経済学概論』、第三部『生産、分配、消費の資本主義的法則（原文のまま!?）』一六〇ページ）。

＊＊　ブルガーコフ氏や、またあとでよく引用するストルーヴェ氏、トゥガン-バラノフスキー氏が、一八九九年にはマルクス主義者であろうとつとめていたということを、現代の読者に注意するのは余計なことではないであろう。いまでは彼らはみな、「マルクス批判家」からありふれたブルジョア経済学者に首尾よくなりかわってしまった（第二版の注）。

五　資本主義社会における社会的総生産物の生産と流通にかんするアダム・スミスの見解と、この見解にたいするマルクスの批判

実現の学説を究明するためには、われわれはこの問題についてのまちがった理論――マルクス以前の経済学で全一的に支配していた理論――の基礎をすえた、アダム・スミ

スからはじめなければならない。A・スミスは商品の価格を二つの部分だけに分割した。すなわち、可変資本（彼の用語法では賃金）と剰余価値である（彼にあっては「利潤」と「地代」とが一つにまとめられていないから、じつは彼は三つの部分を数えていた）。* これとまったく同様に、彼は商品の総体、すなわち社会の年総生産物をも同じ諸部分に分割して、それらを直線的に社会の二つの階級の、すなわち労働者と資本家（スミスにあっては企業家および地主）の、「収入」とした。**

* アダム・スミス『諸国民の富の性質と諸原因にかんする一研究』、第四版、一八〇一年、第一巻、七五ページ。第一篇「労働の生産力における改善の諸原因について、またその生産物が国民のさまざまな階級のあいだに自然的に分配される秩序について」、第六章「商品の価格の構成部分について」。ビビコフのロシア語訳（サンクト・ペテルブルグ）、第一巻、一七一ページ。[三六]

** 前掲書、第一巻、七八ページ、ロシア語訳、第一巻、一七四ページ。[三七]

ところで、彼が価値の第三の構成部分――不変資本――をぬかしたのは、どういう根拠によるのだろうか？ アダム・スミスはこの第三の部分に気がつかないわけにはゆかなかったが、しかし彼は、それもまた賃金と剰余価値に還元されると考えたのである。彼はこの問題について次のように論じた。「たとえば穀物価格においては、一部分は地主の地代を支払い、次の部分はその生産に雇用された労働者と役畜の賃金あるいは維持費を支払い、第三の部分は農業経営者の利潤を支払う。これら三つの部分は、直接的にか究極的にか、全穀物価格を構成しているように思われる。農業者の資財を回収するために、あるいは役畜その他の農業用具の消耗を補償するために、第四の部分が必要だ、と考える人がおそらくいるであろう。しかしなんらかの営農用具、たとえば役馬の価格は、それ自体同じ三つの部分」（すなわち地代、利潤、賃金）「から構成されているということが、考慮されなければならない」。「それゆえ、穀物価格は馬の維持費はもとよりその価格をも支払うとしても、その全価格はやはり、直接的にか究極的にか、地代、賃金、利潤という同じ三つの部分に分割されるのである」。* マルクスはこのスミスの理論を「驚くべき」ものとよんでいる。「彼の論証はたんに同じ主張の繰りかえしでしかない」（第二巻、三六六ページ）。[三九] スミスは、「われわれをポンティウスからピラトゥスへひきまわす」（第一巻、第二版、六一二ページ）[四〇]。経営用具の価格がそれ自体前記の三つの部分に分解されるというとき、スミスは、それらの用具を製造するさいにもちいられた生産手段の価格にも、とつけくわえるのを忘れているのである。生産物価格から資本の不変部

分を誤って除外することは、A・スミスにあっては（そして後続の経済学者たちにあっても同様であるが）、資本主義経済における蓄積、すなわち生産の拡大、剰余価値の資本への転化を、まちがって理解していることと結びついている。A・スミスはここでも不変資本をぬかして、剰余価値のうち蓄積されて資本に転化される部分はすべて、生産的労働者によって消費される、すなわち、すべて賃金にあてられる、と考えたのである。ところが実際には、剰余価値の蓄積部分は不変資本（生産用具、原料、補助材料）プラス賃金に支出される。マルクスは『資本論』第一巻（第七篇「資本の蓄積過程」、第二二章「剰余価値の資本への転化」、第二節「拡大された規模での再生産にかんする経済学上の誤った見解」）で、スミス（およびリカード、ミルその他）のこの見解を批判して、次のように指摘した。すなわち、第二巻で「A・スミスが彼のすべての後継者に遺したドグマは、経済学が社会的再生産過程の基本的機構さえも理解するのを妨げたということを、しめすだろう」（第一巻、六一二ページ）[37]、と。アダム・スミスがこの誤りにおちいったのは、生産物の価値と新たにつくりだされた価値とを混同したためである。じつは、後者は可変資本と剰余価値とに分解されるが、前者はそれ以外に不変資本をもふくんでいるのである。この誤りの暴露は、マルクスが価値を分析して、新しい価値をつくりだす抽象的労働と、以前から存在する価値を新しい形の有用物のうちに再生産する具体的有用労働との相違を確定したときに、すでにおこなわれていたのである。

＊ 前掲書、[38]第一巻、七五一―七六ページ。ロシア語訳、第一巻、一七一ページ。

社会的総資本の再生産と流通の過程の解明は、資本主義社会における国民所得の問題を解決する場合にとくに必要である。A・スミスがこの問題について語るときには、一国の総生産物から不変資本を除外するという彼のまちがった理論をもはや維持できなかったということは、きわめて興味深いことである。「ある大国のすべての住民の総収入(gross revenue)は彼らの土地と労働との年生産物の全部をふくんでおり、純収入(neat revenue)は、第一に彼らの固定資本の、第二に彼らの流動資本の維持費を控除したのちに彼らの自由に処分できる部分を、すなわち、彼らがその資本にくいこむことなく直接の消費のために留保される自分たちの資財(stock)に繰りいれうる、あるいは彼らの生活資料、便益品および娯楽品につかいうる部分を、ふくんでいる」（A・スミス、第二篇「資財の性質、蓄積および用途について」[39]、第二章、第二巻、一八ページ、ロシア語訳、II二一ページ）。このようにA・スミスは、資本は

賃金、利潤、地代に、すなわち（純）収入に分解されると主張して、一国の総生産物から資本を除外したが、しかし、社会の総収入には、彼は資本をふくめ、それを消費資料（＝純収入）から区別している。マルクスはアダム・スミスのこの矛盾をとらえた。もし資本が生産物のうちにないとしたら、どうして資本は収入のうちにありうるだろうか？（『資本論』、第二巻、三五五ページ(四三)を参照）。自分では気づかずにアダム・スミスはここでは、総生産物の価値の三つの構成部分を、すなわち、可変資本と剰余価値だけでなく不変資本をも、認めている。そしてその後の議論でアダム・スミスは、実現理論で重大な意義をもつもう一つの重要な区別にぶつかるのである。彼は言う。「固定資本を維持するための全費用は、明らかに、社会の純収入から除外されなければならない。彼らの有用な機械や事業上の用具、彼らの有利な建築物その他を整備しておくのに必要な原料も、これらの原料を適当な形態にこしらえるのに必要な労働の生産物も、いずれもこの純収入の一部分をなしうるものではない。なるほど、この労働の価格は純収入の一部分をなしうる。なぜなら、こういうことに雇用される労働者は、その賃金の全価値を、彼らの直接的消費のために留保される資財に繰りいれるかもしれないからである。」しかし、その他の種類の労働の場合には、（労働の）「価格」も（労働の）「生産物も」、「直接的消費のこの資財にはいりこむ。すなわち、労働の価格は労働者の資財に、その生産物は他の人々の資財に」（Ａ・スミス、同所(四四)）。ここには、二種類の労働を区別する必要があるという意識がほのみえている。すなわち、一つは「純収入」のなかにはいりうる消費資料を提供する労働であり、もう一つは、「有用な機械、事業上の用具、建築物その他」を、すなわち、けっして個人的消費にはいることができないような物資を提供する労働である。ここから、実現の説明には二種類の消費を、すなわち個人的消費と生産的消費（＝生産に充用）とを区別することが無条件に必要であるということを認めるまでには、あと一歩である。スミスの前記の二つの誤り（生産物の価値から不変資本をぬかしたこと、および個人的消費と生産的消費とを混同したこと）を訂正することによって、マルクスは資本主義社会における社会的生産物の実現にかんする見事な理論を打ちたてることができたのである。

アダム・スミスとマルクスとのあいだにいる他の経済学者たちについていえば、彼らはみなアダム・スミスの誤りを繰りかえしていたのであって、* だから一歩も前進しなかったわけである。そのため所得にかんする学説でどんな混乱が支配しているかということについては、またあとで述

べる。リカード、セー、ミルその他と、シスモンディ、チョーマース、キルヒマンその他とが、商品の全般的過剰生産の可能性についておこなった論争では、双方ともスミスのまちがった理論に立脚していたのであって、だからエス・ブルガーコフ氏が正当に意見を述べたように、「出発点の見地が正しくなく、問題の定式化自体がまちがっているのだから、これらの論争は空虚でスコラ的なことばの争いに終わるほかはなかった」（前掲書、二一ページ。これらの争いについては、トゥガン－バラノフスキー『近代イギリスの産業恐慌』、サンクト－ペテルブルグ、三七七－四〇四ページを見よ）。

* たとえばリカードは次のように主張した。「各国の土地と労働との全生産物は三つの部分に区分される。このうち一つの部分は賃金に、次の部分は利潤に、もう一つの部分は地代にあてられる」（著作集、ジーベル訳[32]、サンクト－ペテルブルグ、一八八二年、二二一ページ）。

六　マルクスの実現理論

右に述べたことからすでにおのずから結論されることだが、マルクスの理論が構成される土台になっている基本的前提は次の二つの命題にある。第一は、資本主義国の総生産物は、個々の生産物と同じく、三つの部分、すなわち（一）不変資本、（二）可変資本、（三）剰余価値から成るということである。マルクス『資本論』第一巻における資本の生産過程の分析を知っている人にとっては、この命題は自明のことである。第二の命題は、資本主義的生産の二大部門、すなわち（第一部門）生産手段――生産的消費のために、すなわち生産への充用のために役だち、個人によってではなく資本によって消費される物資――の生産と、（第二部門）消費資料、すなわち個人的消費にあてられる物資の生産とを、区別する必要があるということである。「この区分のなかだけにでも、市場理論にかんしてそれ以前におこなわれてきたあらゆる論争にまさる、より多くの理論的意義がある」（ブルガーコフ、前掲書二七ページ）。ところで、個別的資本の生産と再生産の分析のさいにはこのような区別をしないですみ、生産物の現物形態の問題はまったく度外視しておいたのに、いま社会的資本の再生産の分析をするときには、生産物を現物形態によって右のように区分することが必要になるのはなぜか、という問題が生ずる。どういう根拠があってわれわれは、まったく生産物の交換価値のうえに構築されている資本主義経済の理論的研究のなかに、生産物の現物形態の問題をもちこむことができるのか？　その事情はこうである。すなわち、個別

的資本の生産の分析のさいには、生産物がどこでどのように売られるか、労働者が消費資料を、資本家が生産手段をどこでどのように買うかという問題は、この分析になんの寄与もしないし、なんの関係もないとして、のけておかれた。そこでは、個々の生産要素の価値と生産の結果という問題だけが考察されるべきであった。ところがいまや問題はまさに次の点にある。労働者と資本家は自分の消費の対象をどこから手にいれるか？ 資本家は生産手段をどこから手にいれるか？ 生産された生産物はどのようにしてこれらの全需要をみたし、そして生産を拡大する可能性をあたえるか？ したがってこの場合には、「価値の補塡だけでなく、素材補塡」(Stoffersatz.——『資本論』、第二巻、三八九ページ)(四八)も問題となるのであり、それゆえ、社会経済の過程でまったく異種の役割を演ずる生産物を区別することが、絶対に必要なのである。

ひとたびこれらの基本的諸命題を考慮に入れるなら、資本主義社会における社会的生産物の実現の問題はもはやなんの困難も呈さない。まず単純再生産を仮定しよう。すなわち、従前の規模で生産過程が繰りかえされ、蓄積はないと仮定しよう。第二部門の可変資本と剰余価値(消費資料の形態で存在する)がこの部門の労働者と資本家の個人的消費によって実現されることは、明らかである(というのは、単純再生産は、全剰余価値が消費され、その一部分たりとも資本に転化しない、と仮定するからである)。つぎに、生産手段の形態で存在する(第一部門の)可変資本と剰余価値が実現されるためには、それらは、生産手段の製造に従事する資本家と労働者のための消費資料と交換されなければならない。他方、消費資料の形態で存在する(第二部門の)不変資本は、ふたたび翌年の生産に充用されるためには、生産手段と交換されるほかには実現されない。こうして生産手段の形の可変資本と剰余価値が、消費資料の形の不変資本と交換される。労働者と資本家(生産手段の部門の)はこのようにして生活手段を手に入れ、資本家は(消費資料の部門の)その生産物を販売して、新しい生産のための不変資本を手に入れる。単純再生産の条件のもとでは、交換されるこれらの部分はたがいに等しくなければならない。すなわち、生産手段の形の可変資本と剰余価値が消費資料の形の不変資本と等しくなければならない。それとは反対に、もし拡大された規模での再生産すなわち蓄積を仮定すれば、前者は後者よりも大きくなければならない。なぜなら、新しい生産を開始するための余剰の生産手段がなければならないからである。しかし単純再生産にもどろう。まだ社会的生産物の一部分が、すなわち生産手段の形の不変資本が、実現されずに残っている。その一部

はこの同じ部門の資本家のあいだの交換によって実現され（たとえば石炭が鉄と交換される、というのは、これらの生産物はそれぞれ他の生産物の生産に必要な材料あるいは用具となるからである）、一部は生産に直接充用されることによって実現される（たとえば採掘された石炭はその同じ企業でふたたび石炭採掘に充用され、穀物は農業で充用される、等々）。蓄積についていえば、その出発点は、すでに見たように、余剰の生産手段（この部門の資本家の剰余価値から得られる）があるということであり、この余剰分はまた、消費資料の形の剰余価値の一部がやはり資本に転化することを要求する。この追加的生産が単純再生産とどのように結合されるかという問題を詳しく考察することは、いまは余計なことと思う。われわれの課題には実現理論の専門的考察はふくまれないのであって、ナロードニキ経済学者の誤りを明らかにし、国内市場について一定の理論的結論をあたえることができるためには、前述したことで十分である。*

＊『資本論』、第二巻、第三篇を見よ。そこでは、蓄積も、必需品と奢侈品とへの消費資料の区分も、貨幣流通も、固定資本の消耗等々も、くわしく研究されている。『資本論』第二巻を知る可能性のない読者には、エス・ブルガーコフ氏の前掲書にあるマルクスの実現理論の叙述を推奨することができる。ブルガーコフ氏の叙述は、トゥガン－バラノフスキー氏の叙述（『産業恐慌』、四〇七－四三八ページ）よりも満足できるものである。後者は自身の表式を作成するさいにマルクスから逸脱しているし、マルクスの理論の説明も不十分である。ブルガーコフ氏の叙述はまた、スクヴォルツォフ氏の叙述（『経済学原理』、サンクト－ペテルブルグ、一八九八年、二八一－二九五ページ）よりも満足すべきものである。後者は利潤や地代というきわめて重要な問題でまちがった見解を保持している。

われわれがとりあげている国内市場の問題で、マルクスの実現理論から得られるおもな結論は次のとおりである。資本主義的生産の、したがってまた国内市場の発展は、消費資料の増大によるよりも、むしろ生産手段の増大によって進行する。いいかえると、生産手段の増加は消費資料の増加を上まわるのである。実際に、すでに見たように消費資料の形の不変資本（第二部門）が、生産手段の形の可変資本＋剰余価値（第一部門）と交換される。しかし、資本主義的生産の一般的法則によれば、不変資本は可変資本よりも急速に増加する。したがって、消費資料の形の不変資本は、消費資料の形の可変資本と剰余価値よりも急速に増加しなければならないし、一方、生産手段の形の不変資本は、生産手段の形の可変資本（＋剰余価値）の増加をも、消費資料の形の不変資本の増加をも上まわって、最も急速

に増加しなければならない。したがって、生産手段を製造する社会的生産部門は、消費資料を製造する部門よりも急速に成長しなければならない。このように、資本主義のための国内市場の発展は、ある程度まで個人的消費の増加とは「独立」しており、生産的消費の増加によってより多くおこなわれる。しかしこの「独立性」を、生産的消費と個人的消費との完全な分離と理解したら、それは誤りである。前者は後者よりも急速に増加しうるし、また増加しなければならない（その「独立性」というのもそれだけの意味である）。しかし、いうまでもなく、究極においては、生産的消費は個人的消費とつねに結びついている。マルクスはこの点について次のように述べている。「すでに見たように（第二巻、第三篇）、不変資本と不変資本とのあいだにも不断の流通がおこなわれており……」（マルクスが念頭においているのは、生産手段生産部門の資本家のあいだの交換によって実現される、生産手段の形の不変資本である）、「……この流通は、けっして個人的消費にはいらないというかぎりでは、一応は個人的消費から独立しているが、しかし究極的にはこれによって制限されている。なぜなら、不変資本の生産はけっして不変資本そのもののためにおこなわれるのではなく、個人的消費にはいる生産物を供給する生産部面でより多くの不変資本が使用されるからこそおこなわれるのだからである」（『資本論』、第三巻第一冊、二八九ページ、ロシア語訳、二四二ページ）。[四七]

不変資本がこのようにより多く使用されることは、生産力のより高度の水準が交換価値で表現されたものにほかならない。というのは、急速に発展する「生産手段」の主要な部分は、大規模生産とくに機械制生産のための材料、機械、用具、建物その他のあらゆる設備から成るからである。だから、社会の生産力を発展させ、大規模生産と機械制工業を生みだす資本主義的生産が、社会の富のうち生産手段から成る部分をとくに拡大することを特色とするのも、まったく当然である。……「ここで」（すなわち、生産手段の生産で）「資本主義社会を未開人から区別するものは、シーニアの考えるように、収入に、すなわち消費手段に分解されうる（転換されうる）ような成果をなにも自分にもたらさない労働をある時間だけ支出することが、未開人の特権であり特性であるということにあるのではなく、区別はむしろ次の点にある。

（a）資本主義社会は、その処分可能な年労働のより多くを生産手段（つまり不変資本）の生産に使用するが、これは賃金の形態でも剰余価値の形態でも収入には分解できず、ただ資本としてのみ機能することができるものである。

（b）未開人が弓、矢、石槌、斧、籠などをつくるとき、

彼はこのように費やされた時間は消費手段の生産にもちいられたのではないということ、したがって自分は生産手段にたいする自分の必要をみたしたにほかならないということを、まったく正確に知っている」(『資本論』、第二巻、四三六ページ、ロシア語訳、三三三ページ)[48]。生産にたいする自身の関係のこのような「明確な自覚」は、資本主義社会では失われてしまった。それは、人々の社会的関係を諸生産物の関係としてあらわす資本主義社会に固有の物神性の結果であり、それぞれの生産物が、未知の消費者のために生産されて未知の市場で実現されるべき、商品に転化する結果である。そして個々の企業家にとっては、彼が生産する物資の種類はまったくどうでもよいことだから——どんな生産物でも「収入」をもたらすから——、この同じ皮相的な、個人の立場に立った見地が、理論経済学者によって社会全体についてもとりいれられ、資本主義経済における社会的総生産物の再生産過程の理解を妨げたのである。

生産の(したがってまた国内市場の)発展が主として生産手段の増大によるということは、逆説的であるように思われるし、また疑いもなく、一つの矛盾である。これは本当の「生産のための生産」であり、対応する消費の拡大のない生産の拡大である。しかし、これは学説の矛盾ではなく、現実生活の矛盾である。これはまさに、資本主義の本性そのものに対応し、この社会経済制度の残余の諸矛盾に対応する、そういう矛盾である。対応する消費の拡大のない生産の拡大こそは、まさに、資本主義の歴史的使命とその特有の社会的構造に対応するものである。その歴史的使命は社会の生産力の発展にあるが、社会的構造はこの技術的成果の住民大衆による利用を排除している。資本主義に固有の生産拡大への無制限の志向と人民大衆の制限された(彼らのプロレタリア的状態のゆえに制限された)消費とのあいだには、疑いのない矛盾がある。ほかならぬこの矛盾は、ナロードニキが国内市場の縮小とか資本主義の非進歩性、等々という彼らの見解の証明として好んであげる諸命題のなかで、マルクスが確証しているものである。それらの命題のいくつかをつぎにしめそう。「資本主義的生産様式における矛盾。労働者は商品の買い手としては市場にとって重要である。しかし彼らの商品——労働力——の売り手としては、資本主義社会はその価格を最低限に制限する傾向がある」(『資本論』、第二巻、三〇三ページ)[49]。

「……実現の諸条件は……種々の生産部門のあいだの均衡によって、また社会の消費力によって、制限されている。……だが、生産力が発展すればするほど、それはますます消費関係が立脚する狭い基礎と矛盾してくる」(『資本論』、第三巻第一冊、二二五—二二六ページ)[50]。「生産者大衆の収

奪と貧困化とにもとづく資本価値の維持と増殖は、このような制限のなかでのみ運動できるのであるが、このような制限は、資本が自分の目的のために充用せざるをえない生産方法、しかも生産の無制限な増加、自己目的としての生産、労働の社会的生産力の無条件的発展にむかって突進する生産方法と、たえず矛盾するようになる。……だから、資本主義的生産様式が、物質的生産力を発展させてこれに対応する世界市場をつくりだすための歴史的な手段だとすれば、それはまた同時に、このようなそれの歴史的任務とこれに対応する社会的生産関係とのあいだの恒常的矛盾なのである」（第三巻第一冊、一二三二ページ、ロシア語訳、一九四ページ）(三二)。「すべての現実の恐慌の究極の原因は、やはりつねに、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限であって、この衝動たるや、あたかも社会の絶対的消費能力だけが生産力の限界をなしているかのように生産力を発展させようとするのである」*（第三巻第二冊、二一ページ、ロシア語訳、三九五ページ）(三三)。これらすべての命題のなかで、生産を拡大しようとする無制限の志向と制限された消費とのあいだの前述の矛盾が確認されているのであるが、それ以上ではない。**『資本論』のこれらの箇所から、マルクスが資本主義社会における剰余価値実現の可能性を認めなかったとか、また彼は恐慌を過少消費によって説明したとか、等々のように結論することほどばかげたことはない。マルクスにおける実現の分析は、「不変資本と不変資本とのあいだの流通が、……究極的には個人的消費によって制限されている」(三四)ことをしめしたが、しかしこの分析はまた、この「限界」の真の性格をしめし、国内市場の形成においては消費資料は生産手段とくらべてより小さな役割しか演じないことをしめした。だから、資本主義の諸矛盾から資本主義の不可能性、非進歩性、等々を結論することほどばかげたことはない。それは、不愉快ではあるが疑うことのできない現実からロマンティックな夢想の天界に逃避することを意味する。無制限の生産拡大への志向と制限された消費とのあいだの矛盾は、一般に矛盾なしには存続も発展もできない資本主義にとって、唯一の矛盾なのではない。資本主義の諸矛盾はそれの歴史的に過渡的な性格を証明するものであり、資本主義が崩壊してより高度の形態に転化するための条件と原因を明らかにするものである。しかしこれらの矛盾はけっして、資本主義の可能性をも、先行の社会経済諸制度とくらべての資本主義の進歩性をも排除するものではない。***

* かの有名な（ヘロストラトス的に有名な）エドゥアルト・ベルンシュタインはその著『社会主義の諸前提』（シュトゥットガルト、一八九九年、六七ページ）のなかで、ほかなら

ぬこの部分を引用している。もちろん、マルクス主義から古いブルジョア経済学に反転したわが日和見主義者は、これはマルクスの恐慌理論における矛盾であるとか、マルクスのこのような見解は「ロードベルトゥスの恐慌理論とあまりちがわない」とか、言明することを急いだ。ところが実際には、「矛盾」は、一方におけるベルンシュタインのうぬぼれと、他方における彼のばかげた折衷主義や、マルクスの理論を十分に考えようとしないこととのあいだにあるにすぎない。ベルンシュタインがどんなに実現理論を理解していないかは、彼のまことに奇妙な次の議論から明らかである。すなわち、剰余生産物の膨大な増加は、必然的に有産者数の増加（あるいは労働者の福祉の向上）を意味する。なぜなら、資本家自身――まあ聞きたまえ――とその「召使い」（原文のまま！――五一―五二ページ）とでは、剰余生産物全部を「消費」できないからだ!!（第二版への注）〔三〇〕

** トゥガン－バラノフスキー氏は、マルクスはこれらの命題を設定することによって自分自身の実現にかんする分析と矛盾におちいったと考えているが、彼のこの見解は誤りである（『ミール・ボージー』〔『神の世界』〕、一八九八年、第六号、一二三ページ、論文『資本主義と市場』）。マルクスにはなんの矛盾もない。なぜなら、実現の分析においても生産的消費と個人的消費との関係が指摘されているからである。

*** 『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて、シスモンディとわが祖国のシスモンディ主義者たち』を見よ。

七　国民所得の理論

われわれは、実現にかんするマルクスの理論の基本的諸命題を叙述したが、さらに国民の「消費」、「分配」、「所得」の理論における彼の理論の巨大な意義について簡単に指摘しなければならない。これらすべての問題とくに最後の問題は、これまで経済学者にとってつまずきの石であった。この問題について論じたり書いたりすればするほど、A・スミスの基本的な誤りから生じる混乱はますます大きくなった。以下にこの混乱の例をいくつかしめそう。

たとえば、プルードンが、古い理論にいくらかちがう定式化をあたえただけで、本質的には同じ誤りを繰りかえしたことを指摘するのは、興味深いことである。彼は次のようにいった。

「A（これはすべての所有者、企業家および資本家のことである）は、一万フランで企業をはじめ、それで労働者に前払いし、労働者はその代償として生産物を生産しなければならない。Aはこのように自分の貨幣を商品にかえたのち、生産の終りには、たとえば一年後には、商品をふたたび貨幣にかえなければならない。彼はその商品をだれに売るのか？　もちろん、労働者にである。なぜなら、社会

には二つの階級しか、一方に企業家、他方に労働者しかいないからである。労働者は、その労働の生産物のかわりに、彼らの必要な生活欲求をみたすための賃金として一万フランを受けとったが、しかし彼らはこんどは、一万フラン以上を、すなわち、*A*がその年の始めに期待していた利子およびその他の利潤の形態で受けとるべき追加分だけ多く、支払わなければならない。労働者はこの一万フランを、借金によってのみ償うことができるのであり、その結果、彼はますます大きな負債を負って貧窮におちいる。そこで、次の二つのうちのどちらかがかならず起きるにちがいない。すなわち、労働者は一〇だけ生産したのに九しか消費できないか、それとも彼は企業家に自分の賃金分しか支払わないか、である。だがそうなると、企業家自身が破産と貧困状態におちいる。なぜなら、彼は資本の利子を受けとらないのに、その利子を彼はやはり支払わなければならないからである」(ディール『プルードン』、第二巻、二〇〇ページ、論文集『工業』から引用。『国家学辞典』所収の論文、モスクワ、一八九六年、一〇一ページ)。

読者が見られるように、これもまた、ヴェ・ヴェ氏やニコライーオン氏が苦労しているのと同じ困難——どのようにして剰余価値を実現するか——である。プルードンはそれをいくらか特殊な形で表現したにすぎない。そして彼の定式化のこの特殊性は、わがナロードニキたちをなおいっそう彼に近づけるものである。すなわち、彼らもまたプルードンとまったく同じように、まさに剰余価値(プルードンの用語によれば、利子または利潤)の実現のうちに「困難」を見ているのであって、そのさい、彼らが古い経済学者から借りてきた混乱が、剰余価値の実現だけでなく不変資本の実現をも説明できなくしているということ、すなわち、彼らの「困難」は資本主義社会における生産物実現の全過程の無理解に帰着するということは、彼らにはわからないのである。

マルクスはこのプルードンの「理論」について、皮肉って次のように述べている。

「プルードンは、このこと」(すなわち、資本主義社会における生産物の実現)「を理解できない自分の無能を、次のようなばかげた定式でかたっている。l'ouvrier ne peut pas racheter son propre produit(労働者は自分自身の生産物を買いもどすことはできない)、なぜなら、それには利子がふくまれていてそれが prix-de-revient(原価)につけくわわるからである、と」(『資本論』、第三巻第二冊、三七九ページ。[35]ロシア語訳、六九八ページ、ただし誤りがある)。

マルクスはまた俗流経済学者のフォルカード(Forcade)

という人がプルードンに向けて述べた意見を引用して、この人は「プルードンが限定された観点のもとでのみ述べた困難を正しく一般化している」といった。すなわちフォルカードは、商品の価格が賃金を越える超過分、利潤だけでなく、不変資本を補塡する部分をもふくんでいる、といった。つまり、資本家も自分の利潤で商品を買いもどすことはできないと、フォルカードはプルードンに反対して結論をくだしたのである（フォルカード自身はこの問題を解決しなかっただけでなく、それを理解することさえできなかったのだが）。

それとまったく同様に、ロードベルトゥスもこの問題でなにも寄与しなかった。ロードベルトゥスは、「地代、資本利得および賃金は所得である」*という命題をとくに強調したが、しかし自分では「所得」という概念を全然明らかにしなかった。彼は、経済学が「正しい方法」（前掲書、二六ページ）に従うとしたらその課題はどんなものか、ということについて叙述したさいに、国民生産物の分配についても述べている。「それは」（すなわち真の「国民経済学」は——傍点はロードベルトゥスのもの）「国民総生産物のうち、どのようにしてその一部がつねに、生産に費やされもしくは消耗された資本の補塡にあてられ、他の部分は国民所得として社会とその成員の直接的欲望の充足にあてられるかをしめすべきであろう」（前掲書、二七ページ）。たしかに真の科学はそれをしめすべきであろうが、しかしロードベルトゥスの「科学」はなんらそのことをしめさなかった。読者がごらんのように、ロードベルトゥスはアダム・スミスのことばをそのまま繰りかえしただけで、問題はまさにそこからはじまるのだということには、どうやら気づきもしなかったのである。いったいどんな労働者が国民的資本を「補塡」するのか？　彼らの生産物はどのようにして実現されるのか？　——これらのことについては彼はひとことも述べなかった。ロードベルトゥスは自分の理論（diese neue Theorie, die ich der bisherigen gegenüberstelle, S. 32）（私がこれまでの理論に対置するこの新しい理論、三二ページ）をいくつかのテーゼに要約したさいに、まずはじめに、国民生産物の分配について次のように言っている。「レンテ」（周知のように、彼はこの術語を、ふつう剰余価値とよばれるものの意味に理解した）「と賃金とは、だから、生産物が所得であるかぎりで、生産物が分割される部分である」（三二ページ）。このきわめて重大な留保は、彼を最も本質的な問題に直面させるはずのものであった。彼はたったいま、所得とは「直接的欲望の充足」にもちいられる物資を意味すると言ったばかりである。つまり、個人的消費には役だたない生産物があるわ

けである。それらの生産物はいったいどのようにして実現されるのか？――だがロードベルトゥスはそこに不明確な点があることに気がつかず、この留保をすぐに忘れて、「三つの部分への生産物の区分」（賃金、利潤、地代）についてかたるのである（四九―五〇ページ、その他）。このように、ロードベルトゥスは本質的にはアダム・スミスの学説をその根本的な誤りもろとも繰りかえしたのであって、所得の問題においてまったくなにひとつ明らかにしなかった。国民生産物の分配の新しい、完全でよりすぐれた理論という約束**は空語だったわけである。実際に、ロードベルトゥスはこの問題にかんする理論をただの一歩も前進させなかった。彼の「所得」概念がどれほど混乱したものであったかは、貨幣を国民所得に入れるべきかどうか、賃金は資本から支払われるのかそれとも所得からかということについて、彼がフォン・キルヒマンあての第四社会書簡（『資本』、ベルリン、一八八四年）で述べた長たらしい議論がしめしている。エンゲルスはその議論を、「スコラ学に属する」といっている（『資本論』、第二巻への序文、二一ページ）。(三六)***

* ロードベルトゥス－ヤゲッツォフ博士『社会問題の解明のために』、ベルリン、一八七五年、七二ページ以下。

** 前掲書、三二ページ。「……私は、一つのよりすぐれた方法のこの概説にこのようなすぐれた方法にふさわしい完全な理論を、少なくとも国民生産物の分配の理論を、つけくわえなければならない。」

*** だから、ディールが、ロードベルトゥスは「所得分配の新しい理論」をあたえたといっているのは、まったく誤りである（『国家学辞典』、「ロードベルトゥス」の項目、第五巻、四四八ページ）。

国民所得にかんする観念の完全な混乱は、いまにいたるまで経済学者たちのあいだでなお完全に支配している。たとえばヘルクナーは、『国家学辞典』所収の「恐慌」にかんする論文のなかで（前掲論文集、八一ページ）、資本主義社会における生産物の実現について述べるさいに（第五節「分配」）K・H・ラウの議論を「成功」と見ている。しかしこのラウは、A・スミスの誤りを繰りかえしているだけで、社会の全生産を諸所得に分解している。またR・マイヤーは、「所得」にかんする論文（前掲書、二八三ページ以下）でA・ヴァグナー（やはりA・スミスの誤りを繰りかえしている）の混乱した規定を引用して、「所得と資本を区別することは困難である」が、「最も困難なのは収益（Ertrag）と所得（Einkommen）との区別である」と、率直に告白している。

このように、「分配」と「消費」にたいする古典派学者（およびマルクス）の注意が不十分だとして多くのことを

論じてきたし、いまも論じている経済学者たちが、「分配」と「消費」の最も基本的な諸問題をすこしも解明できなかったということを、われわれは知るのである。これも当然である。なぜなら、社会的総資本の再生産と社会的生産物の個々の構成部分の補塡との過程を理解しないでは、「消費」について論じることもできはしないからである。「分配」と「消費」とを、経済生活上のなにか独立の過程や現象に対応する、なにか独立の科学部門として切りはなすことがどんなにばかげているかは、この例によってもう一度確証された。経済学がとりあつかうのは、けっして「生産」ではなく、生産における人々の社会的関係であり、生産の社会的構造である。ひとたびこれらの社会的関係が究極まで解明され分析されれば、まさにそのことによって、生産におけるそれぞれの階級の地位も、したがってまた国民消費のなかでそれらの階級が受けとる分け前も、明確になる。そして古典派経済学がそのまえで停止し、また「分配」や「消費」の問題にかんするあらゆる専門家たちがそこから一歩も前進できなかったこの問題の解決は、まさに古典学派に直接つづいて現われ、個別的資本と社会的資本の生産を究極まで分析した理論によって、あたえられたのである。

「国民所得」や「国民消費」の問題は、それを独立させて提起しているかぎり絶対に解決されず、ただスコラ的な論議、定義、分類をならべたてるだけであったが、社会的総資本の生産過程が分析されると、それは完全に解決されることになった。それだけでなく、この問題は、国民生産物にたいする国民消費の関係と国民生産物の各個の部分の実現とが解明されると、別個には存在しなくなる。残ることは、これらの個々の部分に名称を付与することだけである。

「もし無用な困難にまきこまれたくなければ、総収益(Rohertrag)と純収益を、総収入と純収入から区別しなければならない。

総収益または総生産物は、再生産された生産物全体である。……

総収入は、総生産物(Bruttoprodukts oder Rohprodukts)のうち前貸しされて生産で消費された不変資本を補塡する価値部分およびそれによって測られる生産物部分を引き去ったあとに残る価値部分、およびそれによって測られる生産物部分である。だから総収入は、賃金(または生産物のうちふたたび労働者の収入になるという使命をもつ部分)＋利潤＋地代に等しい。これに反して純収入というのは剰余価値であり、したがって賃金を引き去ったあとに残る剰余生産物であり、だから事実上、資本によって実現されて

土地所有者とのあいだで分割されるべき剰余価値、(およびそれによって測られる剰余生産物)を表わしている。……社会全体の収入を見れば、国民的収入〔国民所得〕は、賃金＋利潤＋地代から、つまり総収入から成っている。とはいえ、これもまた、全社会が資本主義的生産の基礎のうえでは資本家的立場に立っており、したがって利潤と地代とに分解する収入だけを純収入とみなすというかぎりでは、抽象である」(第三巻第二冊、三七五—三七六ページ、ロシア語訳、六九六—六九七ページ)[三七]。

このように、実現の過程の解明は、この問題で解明を妨げていた根本的な困難、すなわち、どうして「あるものにとっての収入が他のものにとっては資本となる」[三八]のか、個人的消費資料から成っていて、賃金、利潤、地代に完全に分解する生産物が、けっして収入とはなりえない不変資本部分をどうして自分のなかにふくむことができるのか、という困難を解決することによって、収入の問題をも解明したのである。『資本論』第二巻第三篇における実現の分析は、これらの問題を完全に解決した。そこでマルクスは、「所得」の問題にあてた『資本論』第三巻の最後の篇では、社会的生産物の個々の部分に名称をあたえ、第二巻の右の分析を引証するだけでよかったのである。*

* 『資本論』第三巻第二冊、第七篇「諸収入」、第四九章「生産過程の分析のために」を見よ(ロシア語訳、六八八—七〇六ページ)。ここでマルクスは、従来の経済学者がこの過程を理解するのを妨げていた事情をも指摘している(三七九—三八二ページ。ロシア語訳、六九八—七〇〇ページ)[三九]。

八　資本主義的国民にとってなぜ外国市場が必要か?

資本主義社会における生産物の実現についての前述の理論に関連して、次のような質問が出るかもしれない。この理論は、資本主義的国民は外国市場なしにはやってゆけないという命題と矛盾しはしないか?

資本主義社会における生産物実現についての前述の分析は、外国貿易がないという仮定にもとづいているということを、思いだす必要がある。この仮定のことはすでにさきに指摘しておいたし、あのような分析の場合にはこの仮定が必要であるということもしめしておいた。生産物の輸出入が問題の解明にすこしも役だたず、事態を紛糾させるだけだということは、明らかである。ヴェ・ヴェ氏やニコライ—オン氏の誤りは、彼らが剰余価値の実現を説明するのに外国市場を引きいれていることにこそある。外国市場に言及することはなに一つ明らかにせず、彼らの理論的誤り

をおおいかくすだけである。これが一面である。他面では、それは、これらのまちがった「理論」は、ロシア資本主義のための国民市場の発展という事実を説明する必要から、彼らをまぬかれさせてくれる。* 彼らにとってはまた「外国市場」は、国内における資本主義の（したがってまた市場の）発展を塗りかくす口実でしかない。しかもそれは、ロシア資本主義による外国市場の略取を立証する諸事実を考察する必要からも彼らを解放するから、いっそうつごうのよい口実である。**

* ブルガーコフ氏は前掲書で非常に正しい指摘をしている。「農民市場をあてにする木綿生産の成長は、今日にいたるまでたえまなくおこなわれている。したがって……」（ニコライ―オン氏が述べている）「国民消費のこの絶対的減少は、理論的に考えうるにすぎない」。（二一四―二一五ページ）

** ヴォルギン『ヴォロンツォフ氏の諸労作におけるナロードニキ主義の基礎づけ』、サンクト・ペテルブルグ、一八九六年、七一―七六ページ。

資本主義国にとっての外国市場の必要性は、けっして社会的生産物（および特殊的には剰余価値）の実現の法則によって規定されるものではなく、第一に、資本主義は、商品流通が国家の境界をこえるほど広範に発展する結果はじめて現われる、ということによって規定されるのである。だから外国貿易のない資本主義国民を考えることはできないし、またそのような国民は存在しもしない。

読者がおわかりのように、この原因は歴史的性質のものである。「資本家にとっての剰余価値消費の不可能性」についての数言の古ぼけた空文句によってこの原因から逃避することは、ナロードニキたちもできないであろう。その場合は――もし彼らが実際に外国市場の問題を提起したいと思うならば――、外国貿易の発展史、商品流通の発展史を研究すべきであろう。そしてこの歴史を研究すれば、資本主義を道からの偶然的な逸脱として描くようなことは、もちろんできないであろう。

第二に、社会的生産物の個々の部分間の対応関係（価値の点でと現物形態の点での）は、社会的資本の再生産の理論によって必然的に前提されたものであり、そして実際には一連の不断の動揺のうちに、ある平均的な大きさとしてのみ成立するものであるが――この対応関係は、資本主義社会では、未知の市場のためにはたらく個々の生産者たちがそれぞれ孤立した存在であるため、たえず破壊される。相互に「市場」として役だつ種々の産業部門は、不均等に発展し、相互に追いこしあい、より発展した産業は外国市場を探し求める。だがこのことは、ナロードニキが考え深げに結論したがるような、「資本主義国民にとっての剰余価値実現の不可能性」を意味するものではけっしてない。

それは、個々の生産部門の発展における不均衡をしめすものにすぎない。国民的資本が別様に配分されれば、同じ量の生産物が国内で実現されうるであろう。しかし、資本がある産業部門を去って他の部門に移るためには、その部門での恐慌が不可欠である。いったい、資本家がこのような恐慌に脅かされているとき、外国市場も求めず、輸出助成のための補助金や奨励金等々を求めないように資本家をひきとめる、どんな原因がありうるだろうか？

第三に、資本主義以前の諸生産様式の法則は、従来の規模での、従来の技術的基礎のうえでの生産過程の反復である。地主の賦役経済、農民の現物経済、営業者の手工業的生産がそうであった。反対に、資本主義的生産の法則は生産方法の不断の革新と生産規模のはてしない拡大である。古い諸生産様式のもとでは、経済単位は、その性格も規模も変えずに、地主の世襲領地、農民の村落、あるいは村の手工業者や小工業者（いわゆるクスターリ）のための近傍の小さな市場の限界をこえることなしに、何世紀も存続することができた。反対に、資本主義企業は不可避的に、共同体、地方市場、州の境界をこえ、のちには国家の境界をもこえて成長する。そして国家の孤立性と閉鎖性はすでに商品流通によって破壊されているから、資本主義的な各産業部門の自然的志向は各部門を、「外国市場を探求する」必然性へとみちびくのである。

このように、外国市場を探求する必然性は、ナロードニキ経済学者が好んで描写するような、資本主義の破産を証明するものではけっしてない。正反対である。この必然性は資本主義の進歩的な歴史的活動をまざまざとしめしている。資本主義は経済制度の古い孤立性と閉鎖性を（したがってまた精神生活と政治生活の狭さをも）破壊して、世界のすべての国を単一の経済的全体に結びあわせるのである。

以上のことからわかるように、外国市場の必然性のあとの二つの理由もまた歴史的性格のものである。それらの理由を究明するためには、個々の各産業部門、国内におけるその発展、資本主義的産業部門へのそれの転化を考察しなければならない。ひとことでいえば、国内における資本主義の発展の諸事実をとりあげなければならない。そして、ナロードニキが、国内市場も国外市場も「不可能」だというなんの役にもたたない（またなにごともかたらない）空文句のかげにかくれて、これらの事実を回避しようとしているのは、なんら驚くにあたらない。

九　第一章からの結論

さて、国内市場の問題に直接の関係がある、以上に検討

した理論的諸命題を要約しよう。

（一）国内市場の創出（すなわち商品生産と資本主義の発展）の基本的過程は、社会的分業である。それは、いろいろな種類の原料加工（およびこの加工の種々の作業）がつぎつぎに農業から分離して、自己の生産物（いまではもはや商品）を農業生産物と交換する独立の産業部門が形成されることにある。農業自体もこうして産業（すなわち商品生産）となり、そのなかで同じ専門化の過程が生じる。

（二）右の命題からの直接の結論は、工業（すなわち非農業）人口が農業人口よりも急速に増加し、ますます多くの人口が農業から加工工業に流出するという、発展しつつあるすべての商品経済の、とりわけ資本主義経済の法則である。

（三）生産手段からの直接的生産者の分離、すなわち直接的生産者の収奪は、単純商品生産から資本主義への移行を特徴づける（そしてこの移行の必然的条件となる）ものであって、それは国内市場を創出する。この国内市場の創出過程は二つの側面からすすむ。一方では、小生産者がそれから「解放」される生産手段が新しい所有者の手中で資本に転化し、商品の生産にもちいられ、したがってそれ自身がまた商品に転化する。こうして、これらの生産手段の単純再生産でさえ、いまではもはやその購買を必要とし（以前にはこれらの生産手段は大部分が現物の形で再生産されており、一部は家庭内で製造されていた）、すなわちこれらの生産手段にたいする市場を提供する。つぎに、いまやこれらの生産手段をもちいて生産される生産物も、やはり商品に転化する。他方では、この小生産者のための生活手段が、可変資本の、すなわち企業家（土地所有者であろうが、請負人であろうが、木材業者であろうが、工場主であろうが、その他だれでもかまわない）が賃金労働者の雇用に支出する貨幣額の、物的諸要素になる。こうしてこれらの生活手段もいまではやはり商品に転化し、つまり消費資料のための国内市場を創出する。

（四）資本主義社会における生産物の実現は（したがってまた、剰余価値の実現も）、次のことを明らかにしなければ解明できない。——(1) 社会的生産物は、個々の生産物と同様に、価値の点では二つではなく三つの部分に（アダム・スミスや彼につづくマルクス以前のすべての経済学が説いているように可変資本＋剰余価値だけにではなく、不変資本＋可変資本＋剰余価値に）分解するということ。(2) 現物形態の点では、それは二大部門に、すなわち生産手段（生産的に消費される）と消費資料（個人的に消費される）とに分割されなければならないということ。マルクスはこれらの基本的な理論的命題を確認することによって、

資本主義的生産における生産物一般の、特殊的には剰余価値の実現過程を完全に解明し、実現の問題に外国市場をもちこむことの完全な誤りを明るみに出した。

（五）マルクスの実現理論は国民消費と国民所得の問題にたいしても光をそそいだ。

以上に述べたことからおのずから明らかなように、資本主義の発展段階の問題とは関係のない、別個の独立した問題としての国内市場の問題というものは、けっして存在しない。だからこそ、マルクスの理論は、この問題を別個に提起するようなことは、どこでもまた一度もしていない。国内市場は商品経済が現われるときに現われる。それは商品経済の発展によって創出され、そして社会的分業の細分化の程度は国内市場の発展水準を規定する。国内市場は商品経済が生産物から労働力へ移るにつれてひろまる。そして資本主義は、労働力が商品に転化する程度に応じてのみ国の生産全体をとらえ、資本主義社会でますます重要な地位を占めてくる生産手段の増大に主として依存しながら発展してゆく。資本主義のための「国内市場」は、発展しつつある資本主義自体によってつくりだされるのであって、この資本主義は社会的分業を深め、直接的生産者を資本家と労働者に分解する。国内市場の発展の程度はその国における資本主義の発展の程度である。国内市場の限界という問題を（ナロードニキ経済学者のように）資本主義発展の程度の問題と切りはなして提起するのは、誤りである。

だから、ロシア資本主義のための国内市場はどのようにして形成されるかという問題も、次の問題に帰着する。すなわち、ロシア国民経済の種々の側面はどのように、またどの方向に、発展しているか？　これらの種々の側面のあいだの関連と相互依存性はどういう点にあるか？

以下の諸章は、これらの問題にたいする回答をふくむ諸資料の考察にあてられるであろう。

第二章　農民層の分解

われわれが見たように、資本主義的生産における国内市場の形成の基礎は、小農耕者が農業企業家と農業労働者とに分解する過程である。農民改革後の時代のロシア農民層の経済状態にかんするほとんどどの著作も、いわゆる農民層の「分化」を指摘している。したがってわれわれの課題は、この現象の基本的諸特徴を研究し、その意義を明確にすることにある。以下の叙述では、われわれはゼムストヴォ統計の戸別調査の資料を利用する。

一　ノヴォロシアにかんするゼムストヴォ統計資料

ヴェ・ポストニコフ氏(三〇)はその著『南ロシアの農民経済』(モスクワ、一八九一年)のなかで、タヴリーダ県についての、また部分的にはヘルソン、エカテリノスラフの両県についての、ゼムストヴォ統計の資料を集めて、整理した。この著作は第一位におかれるべきものであって、われわれは、ポストニコフ氏が集めた資料を、ときにはゼムストヴォ統計集の資料によって補足しながら、われわれの採用した体系にしたがって、整理することが必要だと考える。タヴリーダ県のゼムストヴォ統計家たちは、農家を作付の大きさによって分類した。これははなはだ適切な方法であって、この地方では粗放農業のもとで穀作経営方式が優勢であるため、この方法によると各グループの経済状態について正確に判断することができる。つぎにかかげるのは、タヴリーダ県(三一)の農民の経営グループにかんする一般的資料である。*〔第一表〕

* 以下にかかげる資料は、大部分がタヴリーダ県の北部の内陸部の三つの郡、すなわちベルヂャンスク、メリトーポリおよびドニエプルの三郡についてのもの、またはこの最後の郡だけについてのものである。

作付面積の分布の不均等がすこぶる顕著である。すなわち、農家総数の五分の二(それは人口の約一〇分の三を占める、というのは、ここでは家族員数は平均以下であるから)は、総作付面積の約八分の一を占めて、作付の少ない、貧しいグループに属しており、このグループは自己の必要

〔第 1 表〕

農民グループ	ドニェプル郡 農家総数中の%	ドニェプル郡 1戸あたり 男女人員	ドニェプル郡 1戸あたり 男子働き手	3郡合計 農家総数中の%	3郡合計 一戸あたり平均作付面積（デシャチーナ）	3郡合計 総作付面積（デシャチーナ）	3郡合計 同、総数にたいする%		3郡合計 農家総数中の%
I 作付しないもの	9	4.6	1.0	7.5	—	—	—	12.1	40.2
II 作付面積5デシャチーナ未満のもの	11	4.9	1.1	11.7	3.5	34,070	2.4		
III 〃 5—10 デシャチーナ 〃	20	5.4	1.2	21	8.0	140,426	9.7		
IV 〃 10—25 〃 〃	41.8	6.3	1.4	39.2	16.4	540,093	37.6	37.6	39.2
V 〃 25—50 〃 〃	15.1	8.2	1.9	16.9	34.5	494,095	34.3	50.3	20.6
VI 〃 50デシャチーナ以上 〃	3.1	10.1	2.3	3.7	75.0	230,583	16.0		
総数	100	6.2	1.4	100	17.1	1,439,267	100		

を農業からの収入でまかなうことができない。つぎに、中位の農民層は、これまた農家総数の約五分の二を占めるが、これらの農家は土地からの収入で自己の平均支出をまかなっている（ポストニコフ氏は、一家族の平均支出をまかなうには、一六—一八デシャチーナの作付が必要だとみなしている）。最後に、富裕な農民層（農家の約五分の一で、人口の約一〇分の三）は、総作付面積の半分以上をその手に集中しており、この場合、一戸あたりの作付の規模は、このグループの農業の「コマーシャルな」、商業的な性格を明白にしめしている。異なるグループにおけるこの商業的農業の規模を正確に算定するために、ポストニコフ氏は次のような方法をもちいている(三)。経営の総作付面積から、彼は食糧用地（家族および雇農の生活維持のための生産物をあたえる）、飼料用地（家畜の飼料のための）、経営用地（作付用の粒穀のための、また宅地その他）を分離し、こうして、その生産物が売りに出される市場用あるいは商業用地の規模を算定している。それによると、作付面積五—一〇デシャチーナのグループでは、作付面積のわずか一一・八％が市場向け生産物を提供するにすぎないが、作付面積が大きくなるにつれて（グループごとに）、このパーセントは次のように、すなわち三六・五％—五二％—六一％と高まっていることが、わかる。したがって、富裕な農

〔第 2 表〕

農家グループ	タヴリーダ県ドニェプル郡 1戸あたり耕地（デシャチーナ）			
	分与地	購入地	借地	合計
I　作付しないもの	6.4	0.9	0.1	7.4
II　作付面積5デシャチーナ未満のもの	5.5	0.04	0.6	6.1
III　〃　5—10 デシャチーナ　〃	8.7	0.05	1.6	10.3
IV　〃　10—25　〃　〃	12.5	0.6	5.8	18.9
V　〃　25—50　〃　〃	16.6	2.3	17.4	36.3
VI　〃　50デシャチーナ以上　〃	17.4	30.0	44.0	91.4
平均	11.2	1.7	7.0	19.9

民層（上位の二つのグループ）は、すでに商業的農業を営んでおり、一年に五七四―一、五〇〇ルーブリの総貨幣収入をえている。この商業的農業はもはや資本主義的農業に転化しつつある。なぜなら、富農の作付規模は家族の労働基準量（すなわち、家族が自己の労働によって耕作できるだけの土地面積）を超えており、そのため彼らは労働者の雇用にたよることをよぎなくされているからである。タヴリーダ県の北部の三郡では、富裕な農民層は、著者の計算によると、一四、〇〇〇人以上の農村労働者をやとっている。これに反して、貧しい農民層は（五、〇〇〇人以上の）「労働者を送りだしている」、すなわち、自己の労働力の販売にたよっている。というのは、農業からの収入は、たとえば作付面積五―一〇デシャチーナのグループでは、一戸あたりわずか三〇ルーブリほどの貨幣にしかならないからである。* したがって、われわれはここに、資本主義的生産の理論がかたっている、ほかならぬあの国内市場創出過程を見る。すなわち、「国内市場」は、一方では、商業的な、企業家的な農業の生産物が商品に転化する結果として、他方では、資力のない農民の売る労働力が商品に転化する結果として、成長するのである。

* ポストニコフ氏がただしく指摘しているところによると、土地からの貨幣収入の大きさの点での各グループのあいだの相違は、実際にはもっといちじるしい。なぜなら、右の計算では（一）収穫率は同一であり、（二）販売される穀物の価格は同一である、とされているからである。だが実際には、富農は、よりよい収穫をあげ、より有利に穀物を売っている。

〔第 3 表〕

農家グループ	タヴリーダ県の3郡				ドニェプル郡	
	1戸あたり家畜頭数			役畜をもたない農家の%	1戸あたり農機具数*	
	役畜	その他の家畜	合計		運搬用具	耕作用具
I 作付しないもの	0.3	0.8	1.1	80.5	—	—
II 作付面積5デシャチーナ未満のもの	1.0	1.4	2.4	48.3	—	—
III 〃 5—10 デシャチーナ〃	1.9	2.3	4.2	12.5	0.8	0.5
IV 〃 10—25 〃 〃	3.2	4.1	7.3	1.4	1.0	1.0
V 〃 25—50 〃 〃	5.8	8.1	13.9	0.1	1.7	1.5
VI 〃 50デシャチーナ以上 〃	10.5	19.5	30.0	0.03	2.7	2.4
平均	3.1	4.5	7.6	15.0		

* 運搬用具とは軽四輪荷馬車，四輪荷馬車，有蓋荷馬車，等であり，耕作用具とはプラウ，ブッケル（速耕機）その他である．

この現象をもっとよく知るために、農民層の各グループの状態を見よう。上位のグループからはじめよう。つぎにかかげるのは各グループの土地所有と土地利用にかんする資料である。〔第二表〕

したがって、富裕な農民層が、分与地(六三)を最も多く確保しているにもかかわらず、多大な購入地(六四)と借地をその手に集中して、小さな土地所有者兼農業企業家に転化しつつあることがわかる。* 一七—四四デシャチーナを賃借するのに、この地方の値段では一年に約七〇—一六〇ルーブリが支出される。明らかに、われわれはここでもはや商業取引に出あう。すなわち、土地が商品に、「貨幣を獲得するための機械」になりつつあるのである。

* 作付しないものの購入地の面積が比較的大きいのは、このグループのなかには小店主や工業事業所の所有者その他がふくまれているからである、ということを指摘しておこう。この種の「農民」を農耕者とまぜこぜにしているのは、ゼムストヴォ統計資料のいつもながらの欠陥である。この欠陥については、あとでまた論じよう。

つぎに、家畜と農機具にかんする資料をあげよう。〔第三表〕

富裕な農民層は貧しい農民層とくらべて、さらには中位の農民層とくらべてさえ、数倍の家畜と農機具を確保して

いることがわかる。「農民層」についてかたるときにわが国であれほども好んで利用される「平均」数字が、まったく虚構のものであることを理解するには、この表を一見するだけで十分である。農民ブルジョアジーの商業的農業に、この場合さらに商業的畜産が、すなわち粗毛種緬羊の商業的飼育が結合されている。農機具にかんしては、もう一つ、改良農具についての資料をゼムストヴォ統計集から借りてあげておこう。＊穀物刈取機と草刈機の総数（三、〇六一）のうち、二、八四一すなわち九二・八％が、農民ブルジョアジー（農民総数の五分の一）の手にある。

＊『メリトーポリ郡統計報告集』、シンフェローポリ、一八八五年（『タヴリーダ県統計報告集』、第一巻）。——『ドニェプル郡統計報告集』、第二巻、シンフェローポリ、一八八六年。

まったく当然のことだが、富裕な農民層にあっては、農業技術も中位の農民層よりいちじるしく高い（経済規模はより大きく、農機具はより豊富で、自由につかえる資金の手持ちがある、等々）。すなわち、富農は、「その作付をよりはやくおこない、好都合な天候をよりよく利用し、より湿気のある土を種子にかぶせ」、適時に穀物の取入れをおこない、搬入と同時に脱穀する、等々。同様にまた当然のことだが、農産物の生産に要する経費は、経営規模が大きくなるにつれて（生産物一単位あたりで）低下する。ポストニコフ氏は、次の計算をもちいてこの状況をとくにくわしく立証している。すなわち彼は、農民層の種々のグループにおける作付面積一〇〇デシャチーナあたりの働き手（雇い人をふくむ）の数、役畜の頭数、農具の数その他を算定している。この数は、経営規模が大きくなるにつれて小さくなることがわかる。たとえば、作付面積五デシャチーナ未満のものの場合は、分与地一〇〇デシャチーナあたりの働き手二八人、役畜二八頭、プラウとブッケル四・七台、軽四輪荷馬車一〇輛であるが、五〇デシャチーナ以上を作付するものの場合は、働き手七人、役畜一四頭、プラウとブッケル三・八台、軽四輪荷馬車四・三輛である。（われわれは、すべてのグループについてのもっとくわしい資料は省略する。詳細を知りたい人はポストニコフ氏の著書を見ていただきたい。）著者の総括的結論は次のとおりである。「農民の経営規模と耕作地が大きくなるにつれて、労働力の、すなわち人間および家畜の維持費、農業におけるこの最も主要な経費は累進的に減少し、作付の多いグループにあっては、一デシャチーナあたりで、耕地の小さいグループの場合のほぼ半分である」（前掲書、一一七ページ）。大農経営のほうが生産性が高く、したがってまた安定性も大きいというこの法則に、ポストニコフ氏はまったく正当

にも重大な意義を付与し、それをきわめてくわしい資料によって、ノヴォロシアについてだけでなく、ロシアの中央諸県についても、立証している。* 農業への商品生産の浸透がすすめばすすむほど、したがって、農耕者のあいだの競争、土地のための闘争、経営上の自立のための闘争がはげしくなればなるほど、農民ブルジョアジーによる貧中農民層の駆逐にみちびくこの法則は、ますます大きな力で現われてこずにはおかない。ただ、農業における技術の進歩は、農業経営方式のいかんにより、農耕方式のいかんによって、異なる現われ方をするということを、指摘しておかなければならない。穀作経営方式の場合と粗放農業の場合には、この進歩は、たんに、作付面積の拡大とか、作付面積一単位あたりの労働者数や家畜頭数その他の減少のうちに現われることになるが、畜産経営方式または工芸作物経営方式の場合や、集約的農業への移行の場合には、この同じ進歩は、たとえば、作付面積一単位あたりにより多数の労働者を必要とする根菜類の作付とか、あるいは乳用家畜の飼育、牧草の作付、その他等々のうちに現われることになる。

* 「ゼムストヴォ統計は、農民経営の規模が大きければ大きいほど、一定の耕地面積あたりに保有されている農機具、働き手、役畜の数はより少ないということを、争う余地のない明白さでしめしている」(前掲書、一六二ページ)。

この法則がヴェ・ヴェ氏の議論にどう反映したかを指摘することは、興味深い。さきに引用した論文(『ヴェーストニク・エヴロープィ』、一八八四年、第七号)で、彼は次のような対比をおこなっている。中央黒土地帯では、農民の馬一頭あたりで耕地は五―七―八デシャチーナとなっているが、「三圃式輪作の基準によれば」、それは七―一〇デシャチーナでなければならない(バターリンの『カレンダー』)。「したがって、ロシアのこの地方の住民の一部が馬をもたなくなったことは、ある程度は、役畜の頭数と耕作されるべき面積とのあいだの正常な比率の回復と見るべきである」(前掲論文の三四六ページ)。だから、農民層の零落は農業の進歩をもたらす。もしヴェ・ヴェ氏が、この過程の農学的側面だけではなく、その社会経済的側面にも注意を向けたなら、彼は、それは資本主義的農業の進歩であることを知りえたであろう。なぜなら、役畜と耕地との「正常な比率の回復」をなしとげるのは、自分の役畜や農機具を調達する地主か、または農民のうちで作付の多いもの、すなわち農民ブルジョアジーであるからである。

上位の農民グループの特徴として、賃労働の使用がいちじるしいことを、なお付言しておかなければならない。次にかかげるのは、タヴリーダ県の三つの郡にかんする資料である。〔第四表〕

ヴェ・ヴェ氏は前記の論文で、この問題について次のように論じた。彼は、農民経営総数にたいする雇農をもつ経

〔第 4 表〕

農家グループ	雇農をやとう経営の割合(%)	各グループの作付面積の割合(%)
I　作付しないもの	3.8	—
II　作付面積5デシャチーナ未満のもの	2.5	2
III　〃　5—10 デシャチーナ　〃	2.6	10
IV　〃　10—25　〃　〃	8.7	38
V　〃　25—50　〃　〃	34.7	34 }50
VI　〃　50デシャチーナ以上　〃	64.1	16 }
総数	12.9	100

営数のパーセントをとりあげて、こう結論した。「土地耕作のために賃労働にたよっている農民の数は、国民の総数とくらべれば、まったくとるにたりないものであって、一〇〇人の経営主のうちで二—三人、最大限五人である。そしてこれだけが農民資本主義の代表者なのである。これ」（ロシアにおける雇農使用の農民経営）「は、現代の経済生活の諸条件にしっかり根をおろしている制度ではなくて、一〇〇年まえにも二〇〇年まえにもあった偶然的なものである」（『ヴェーストニク・エヴロープィ』、一八八四年、第七号、三三二ページ）。「農民」経営の総数のなかには雇農の経営もふくまれているのに、雇農をもつ経営の数をこの「農民」経営総数と対比させたところで、なんの意味があろうか？ このようなやりかたによるなら、ロシアの工業における資本主義をもかたづけてしまうことができるだろう。ロシアにおける営業者世帯総数にたいする、賃金労働者を有する営業者世帯（すなわち、大小工場主の世帯）の数のパーセントをとりさえすればよい。そうすれば、「国民大衆」にたいして「まったくとるにたりない」比率が得られるであろう。雇農使用の経営数を、実際に自立している経営、すなわち、農業だけで生活していて自分の労働力の販売にはたよらない経営だけの数と対比させるほうが、比較にならないほど正しい。さらに、ヴェ・ヴェ氏はちょっとしたことを見おとした。それは、雇農使用の農民経営は最大級の経営に属するということである。雇農をもつ経営のパーセントは、「全体として平均的」には「とるにたりない」が、それは、生産全体の半分以上をその手ににぎっていて、販売用の大量の穀物を生産している富裕な農民層のあいだでは、目だって大きい（三四—六四%）のである。この雇農使用の経営が一〇〇—二〇〇年

〔第 5 表〕

農家グループ		ドニェプル郡	
		分与地を貸しだしている世帯主の%	貸しだされた分与地の%
I	作付しないもの	80	97.1
II	作付面積5デシャチーナ未満のもの	30	38.4
III	〃 5—10 デシャチーナ 〃	23	17.2
IV	〃 10—25 〃 〃	16	8.1
V	〃 25—50 〃 〃	7	2.9
VI	〃 50デシャチーナ以上 〃	7	13.8
郡全体		25.7	14.9

まえにもあった「偶然的なもの」であるかのようにいう見解のばからしさは、このことから判断できよう！　第三に、農業の実際の特殊性を無視してはじめて、「農民資本主義」について判断するのに、日雇いを度外視して、雇農すなわち常雇労働者だけをとりあげることができるのである。だが周知のように、農業では日雇労働者の雇用はとくに大きな役割を演じるのである。*

* イギリスは農業資本主義の古典的な国である。この国でも農業企業家の四〇・八%は賃金労働者をつかっていない。また農業企業家の六八・一%が二人以下の労働者しか使用せず、八二%が四人以下しか使用していない（ヤンソン『比較統計』、第二巻、二二一―二三ページ。カブルーコフ『農業における労働者の問題』、一六ページから引用）。だが、渡り歩く者であろうが、定住の者すなわち自分の村で「賃仕事」を見つける者であろうが、日雇いで仕事をする農村プロレタリアの大衆のことを忘れるとは、なんとりっぱな経済学者だろう。

下級のグループに移ろう。それを構成するのは、作付しない経営主と作付の少ない経営主である。彼らは「その経済状態では大差がなく……どちらも、同村の人のところで雇農としてはたらくか、あるいは村外で、それも大部分は農耕の賃仕事をおこなうかしている」（前掲書、一三四ページ）。すなわち、彼らは農村プロレタリアートの隊列にはいる。たとえば、ドニェプル郡では農家の四〇%が下級のグループに属しており、農家総数の三九%は農耕用具をもっていないことを、指摘しておこう。農村プロレタリアートは、自分の労働力の販売とならんで、自分の分与地の賃貸から収入を引きだしている。〔第五表〕

タヴリーダ県の三つの郡の総計では、（一八八四―一八八六年に）農民の耕地全体の二五%が貸しだされていたが、

〔第 6 表〕

経営主（1戸あたり）	タヴリーダ県の3郡で 隣人から借りうけた分与地	
	デシャチーナ	%
I 作付面積10デシャチーナ未満のもの	16,594	6
II 〃 10—25デシャチーナ 〃	89,526	35
III 〃 25デシャチーナ以上 〃	150,596	59
総数	256,716	100

しかもこれには、農民にではなくラズノチーネツ(二三)に貸しだされた土地はふくまれていない。これらの三郡では住民の約三分の一が土地を貸しだしているが、そのさい農村プロレタリアートの分与地を借りているのは、主として農民ブルジョアジーである。そのことをしめす資料をあげよう。〔第六表〕

「分与地は、現在、南ロシアの農民生活では広範な投機の対象になっている。土地を担保に手形振出しによる借入れがおこなわれている。……土地は一年、二年、さらにはもっと長期、すなわち八年、九年、一一年にわたって、貸しだされるか、あるいは売られている」(前掲書、一三九ページ)。このように、農民ブルジョアジーは、商業資本や高利貸資本の代表者でもある。* ここにわれわれは、「クラーク」〔富農〕や「高利貸」が「経営上手な百姓」とはなんの共通点ももたないかのようにいうナロードニキ的偏見が、明瞭に論破されているのを見る。じつはそれどころか、農民ブルジョアジーの手には、商業資本の糸(土地を担保とする貸幣貸付、さまざまな生産物の買占め、その他)も、産業資本の糸(労働者の雇用による商業的農業、その他)もたぐりよせられている。資本のこれらの形態のうちのどちらが他を犠牲にして今後発展してゆくかは、周囲の事情に、すなわち、わが国の農村でどれだけアジア的後進性が駆逐され、文化が普及するかということに、かかっている。

* 彼ら自身が、「資産のある農民」に「本質的な援助」をもたらす、「非常に多数の」農村金庫や貸付貯蓄組合を利用している。「資力の乏しい農民は、保証人が見つからず、貸付を受けられない」(前掲書、三六八ページ)。

最後に、中位のグループ(一戸あたりの作付一〇―二五デシャチーナ、平均一六・四デシャチーナ)の状態を見よう。このグループの状態は過渡的なものである。農業からの貨幣収入(一九一ルーブリ)は、平均的なタヴリーダ県

ドニェプル郡*

借地		貸出地		各グループの総土地利用		作付面積	
デシャチーナ	%	デシャチーナ	%	デシャチーナ	%	デシャチーナ	%
7,839	6	21,551	65.5	44,736	12.4	38,439	11
48,398	35	8,311	25.3	148,257	41.2	137,344	43
81,646	59	3,039	9.2	166,982	46.4	150,614	46
137,883	100	32,901	100	359,975	100	326,397	100

地をふくむ郡全体にかんするものである．「各グループの総土地利用」の欄の資料は，
である．

人の年間支出額（二〇〇―二五〇ループリ）をやや下まわっている。役畜はここでは一戸あたり三・二頭であるが、完全な「チャグロ〔六六〕」にとっては四頭が必要である。だから中農の経営は不安定な状態にあり、自分の土地を耕作するために共同畜耕（スプリャーガ）にたよらなければならない。*

* メリトーポリ郡では、このグループの農家一三、七八九戸のうち自力で土地を耕作しているのは四、二一八戸にすぎず、九、二〇一戸は共同畜耕をしている。ドニェプル郡では、八、二三四戸のうち四、〇二九戸が自力で耕作し、三、八三五戸が共同畜耕をしている。ゼムストヴォ統計集、メリトーポリ郡（B、一九五ページ）およびドニェプル郡（B、一二三ページ）を参照。

共同畜耕による土地耕作は、もちろん、生産性が低い（移動のさいの時間の浪費、馬の不足、その他）。だから、たとえば、ある村でポストニコフ氏が耳にしたように、「共同畜耕のものはしばしば、一日に一デシャチーナ以下しか、すなわち基準の半分以下しか耕作しない」*。もしこれに、中位のグループでは農家の約五分の一が耕作用具をもたないこと、このグループは労働者をやといいれるよりもむしろ多くの労働者を送りだしている（ポストニコフ氏の計算による）ことをつけくわえるなら、われわれにとって、農民ブルジョアジーと農村プロレタリアートとのあいだでのこのグループの不安定な、過渡的な性格が明白になるであろう。中位のグループの駆逐についてのもうすこしくわしい資料を、つぎにかかげよう。〔第七表〕

* ヴェ・ヴェ氏は、前記の論文で共同畜耕について、「協業の原則」だとかなんだとか、いろいろと論じたてている。農民層がはっきり異なるグループに分解しつつあるという事実、共同畜耕は農民ブルジョアジーによって駆逐されつつある没

〔第 7 表〕

世帯主グループ	タヴリーダ県					
	総数		分与地		購入地	
	農家の％	男女人口の％	デシャチーナ	％	デシャチーナ	％
貧農	39.9	32.6	56,445	25.5	2,003	6
中農	41.7	42.2	102,794	46.5	5,376	16
富農	18.4	25.2	61,844	28	26,531	78
郡総計	100	100	221,083	100	33,910	100

* ゼムストヴォ統計集からの資料．これらの資料は郷のなかに入れられなかった移民
私が算出したもので，分与地，借地および買入地を合算して，貸出地を控除したもの

落経営の協業であるという事実を黙殺しておいて、つぎに「一般に」「協業の原則」について――おそらくは、農村プロレタリアートと農村ブルジョアジーとのあいだの協業について――かたることは、実際、なんと単純なことではないか！

このように、分与地の分布は、たしかにここでも上級のグループによる下級のグループの駆逐が見られるとはいえ、きわめて「均等」である。だがひとたびこの拘束的な土地所有から自由な土地所有に、すなわち、購入地や借地に移ると、事態は根底から一変する。これらの土地の集中は顕著であり、そのため、農民の土地用益全体の分布は、分与地の分布とは似ても似つかないものになっている。中位のグループは第二位に押しのけられて（分与地では四六％なのが土地用益では四一％）、富裕なグループはその土地所有をきわめていちじるしくひろげており（分与地では二八％なのが土地用益では四六％）、貧しいグループは農耕者のなかから押しだされている（分与地では二五％なのが、土地用益では一二％）。

前掲の表は、われわれがこれから出あう興味深い現象をしめしている。すなわち、農民たちの経営における分与地の役割の減少が、それである。これは、下級のグループでは土地を貸しだす結果として起こり、上級のグループでは、全経営面積のなかで購入地と借地が圧倒的優位を占める結果として起こっている。農民改革以前の制度（農民の土地への緊縛、納税のための均等な土地保有）の残存物は、農業に侵入してくる資本主義によって終局的に破壊されつつある。

とくに借地についていえば、前掲の資料によってわれわれは、この問題にかんするナロードニキ経済学者たちの議

〔第 8 表〕

	借地する農家の％	借地する農家1戸あたりの耕地（デシャチーナ）	1デシャチーナの価格（ルーブリ）
作付面積5デシャチーナ未満のもの	25	2.4	15.25
〃　5—10デシャチーナ　〃	42	3.9	12.00
〃　10—25　〃　〃	69	8.5	4.75
〃　25—50　〃　〃	88	20.0	3.75
〃　50デシャチーナ以上　〃	91	48.6	3.55
郡　全　体	56.2	12.4	4.23

論のなかできわめて普及している一つの誤りを、解析することができる。ヴェ・ヴェ氏の議論をとってみよう。さきに引用した論文で、彼は農民層の分解にたいする借地の関係という問題をまっこうから提起した。「借地は、農民経営が大経営と小経営とに分解して中位の典型的なグループが絶滅するのを、促進するか？」（『ヴェーストニク・エヴロープィ』、前掲号、三三九―三四〇ページ）。この設問にヴェ・ヴェ氏は否定的に答えた。彼の論拠は次のとおりである。（一）「借地にたよる人々のパーセントが大きいこと」。その実例は、さまざまな県のさまざまな郡についてみると、三八―六八％、四〇―七〇％、三〇―六六％、五〇―六〇％である。（二）農家一戸あたりの借地の面積が大きくないこと。タンボフ県の統計資料によれば、それは三―五デシャチーナである。（三）分与地の少ない農民が、分与地の多い農民よりも多くを借地している。

このような論拠が成りたつかどうかはともかく、それが適切なものかどうかということだけでも、読者がはっきり評価できるように、ドニェプル郡についての該当資料をつぎにかかげよう。* 〔第八表〕

＊　メリトーポリ郡についても、ベルヂャンスク郡についても、資料はまったく同様である。

さて、この場合「平均」数字はどんな意義をもちうるだろうか？　借地する人が「多い」――五六％――という事実は、はたして富者による借地集中を抹殺するものであろうか？　農民のうち、あるものは、明らかに困りはてて、破滅的な条件で、二デシャチーナを法外な価格（一五ルーブリ）で手に入れているのにたいし、他のものは、自分の土地が十分にあるのにくわえて、くらべものにならないほど安い、一デシャチーナあたり三・五五ルーブリという大口の値段で土地を「買い」、四八デシャチーナを手に入れ

ているのだが、これらの農民をいっさいがっさいいっしょにして、借地の「平均」規模〈借地をする農家一戸あたり一二デシャチーナ。ときには、借地農家一戸あたりではなく、現存農家一戸あたりで計算する人さえある。たとえばカルィシェフ氏は、その著『農民の分与地外借地』（デルプト、一八九二年、『ゼムストヴォ統計の総括』第二巻）で、そのようにしている〉をとりあげるのは、笑うべきことではないだろうか？　第三の論拠もこれに劣らず無内容である。ヴェ・ヴェ氏自身、「共同体全体」にかんする資料（農民が分与地の大きさによって区分されている）は、「その共同体自体のなかで起こっていることについての正しい理解をあたえるものではない」ことを認めて、この論拠の論破に心をくだいたのである（前掲論文、三四二ページ）。*

＊　ポストニコフ氏は、ゼムストヴォの統計家たちのこの種の誤りのおもしろい例をあげている。彼は、富農の商業的経営の事実と土地にたいする彼らの要求とに注意を向けて、次のように指摘している。――「ゼムストヴォ統計家たちは、どうやら、農民生活におけるこのような現象をなにか不条理なものと考えたらしく、それを過小評価しようとつとめ」、借地は富者の競争によってではなく、農民の土地不足によって決定されるということを証明しようとしている、と。『タヴリーダ県覚え帳』（一八八九年）の編者ヴェルネル氏は、このことを証明するために、タヴリーダ県全体の農民を分与地の大きさによって分類し、一―二人の働き手と二―三頭の役畜をもつ農民のグループをとりあげてみた。そうすると、このグループの範囲内では、分与地の規模が大きくなるにつれて、借地農家の数と借地面積とが小さくなることがわかった。このような方法がまったくなにも証明しないことは、いうまでもない。なぜなら、同数の役畜をもつ農民だけをとり、ほかならぬ両極端のグループは除外されているからである。役畜の頭数が等しければ、耕作される土地の規模も等しいはずだし、したがって、分与地が小さければ小さいほどそれだけ借地が大きくなるのは、まったく当然である。問題はまさに、役畜頭数、農機具数、等々が等しくない農家のあいだでの借地の分布がどうなっているか、という点にこそあるのである。

農民ブルジョアジーの手への借地の集中は個人的借地にかぎられており、組合的、ミール的借地にはおよばないと考えたなら、それは大きなまちがいであろう。まさにそうではないのである。借地はつねに「貨幣に応じて」配分されるのであって、農民層の諸グループのあいだの関係は、ミール的借地の場合でもすこしも変わらない。だから、たとえばカルィシェフ氏の次のような議論――個人的借地にたいするミール的借地の関係のうちには「共同体的原理と個人的原理という二つの原理（!?）の闘争」が現われている（前掲書、一五九ページ）とか、共同体的借地には「勤労原理と、共同体員のあいだでの借入地の均等配分の原則

〔第 9 表〕

	借地する農家の数	借地面積（デシャチーナ）	合計にたいする％		借地する農家1戸あたりの借地面積（デシャチーナ）
作付面積5デシャチーナ未満のもの	83	511	1	4	6.1
〃　5—10デシャチーナ　〃	444	1,427	3		3.2
〃　10—25　〃　〃	1,732	8,711	20		5.0
〃　25—50　〃　〃	1,245	13,375	30	76	10.7
〃　50デシャチーナ以上　〃	632	20,283	46		32.1
総　数	4,136	44,307	100		10.7

とが特有である」（二三〇ページ）とかいう議論——は、まったくナロードニキ的偏見の領域に属する。カルィシェフ氏は、「ゼムストヴォ統計の総括」をすることが自分の課題であるにもかかわらず、富裕な農民層の小さなグループの手への借地の集中にかんする豊富なゼムストヴォ統計資料のすべてを、けんめいに回避した。実例をあげよう。タヴリーダ県の前記の三郡では、農民の組合が国庫から借りいれた土地は、グループ別に次のように配分されている。〔第九表〕

これが「勤労原理」と「均等配分の原則」とのささやかな例証である！

以上が南ロシアの農民経済についてのゼムストヴォ統計の資料である。農民層の完全な分解、農村における農民ブルジョアジーの完全な支配は、これらの資料によって疑いをいれないものとなっている。* だから、これらの資料にたいするヴェ・ヴェ氏とニコライ—オン氏の態度は、きわめて興味深いものであるが、まして、これらの著述家はともに、かつては農民層の分解の問題を提起する必要を認めていたのだから、なおさらである（ヴェ・ヴェ氏は一八八四年の前記の論文で、またニコライ—オン氏は一八八〇年の『スローヴォ』で、「経営下手な」百姓は土地をなげやりにするが、「経営上手な」百姓はよりよい土地を拾いあつめるという、共同体自体のなかでの興味深い現象を指摘することによって。『概要』、七一ページを参照）。ポストニコフ氏の著作は二重の性格をもっていることを、指摘する必要がある。一方では、この著者は、きわめて貴重なゼムストヴォ統計資料をたくみに集め、念入りに加工し、そのさい彼は、「農民のミールを、今日になってもまだわが国の都市インテリゲンツィアがそう思っているような、なにか全一的で同質なものと見ようとする志向」（前掲書、三五一ページ）からまぬかれることができた。だが他方では、

理論の導きのないこの著者は、自分が加工した資料を評価することがまったくできず、それらの資料を「施策」というきわめて狭い観点からながめて、「農耕＝手工業＝工場共同体」についての企画や、「制限」、「義務づけ」、「監視し」等々することとの必要についての企画を編みだすことにふけった。ところでわがナロードニキたちは、ポストニコフ氏の著作の、第一の、肯定的な部分には気がつかないようにつとめ、全注意を第二の部分に向けた。ヴェ・ヴェ氏もニコライーオン氏も、大まじめなようすをして、ポストニコフ氏のまったくどうでもいいような「企画」の「論破」にとりかかった（ヴェ・ヴェ氏は一八九四年の『ルースカヤ・ムィスリ』第二号で、ニコライーオン氏は『概要』二三三ページの注で）。そして両氏とも、ポストニコフ氏はロシアに資本主義を導入しようというよくない願望をもっているとして彼を非難し、今日の南ロシアの農村で資本主義的諸関係が支配していることを明るみに出した資料を、念入りに回避したのである。**

* ノヴォロシアについての資料からは、この地方の特殊性のため、一般的結論はくだせない、とふつう言われている。農耕農民層の分解がここではロシアのその他の地方におけるよりも激しいことを、われわれは否定しない。だが、後述するところからわかるように、ノヴォロシアの特殊性は、ときどきあたえられているほどに大きなものではない。

** ニコライーオン氏はこう書いたことがある――ポストニコフ氏が「六〇デシャチーナの農民経営を企画しているのはおもしろい」。だが、「ひとたび農業経営が資本家の手におちれば」、労働生産性は「明日」にはもっと向上するかもしれず、「六〇デシャチーナの経営を二〇〇ないし三〇〇デシャチーナの経営に変えることが必要になるだろう（！）」。見たまえ、なんと単純なことだろう。わが国の農村における今日の小ブルジョアジーを、明日は大ブルジョアジーが脅かすのだから、――だからニコライーオン氏は、今日の小ブルジョアジーをも明日の大ブルジョアジーをも、知ろうとしないのだ！

二　サマラ県にかんするゼムストヴォ統計資料

南部の辺境から、東部の辺境サマラ県に移ろう。調査日時が最も新しいノヴォウゼンスク郡をとりあげよう。この郡にかんする統計集では、経済的標識による農民の最も詳細な分類がなされている。* 次の表〔第一〇表〕は、農民層の諸グループについての一般的資料である（以下の諸報告は、分与地をもつ農家二八、二七六戸、その男女人口一六四、一四六名、すなわち、この郡のロシア人住民だけにかんするものであって、ドイツ人と「フートル農民」(三)――共

〔第 10 表〕

世帯主グループ		農家総数にたいする%		1戸あたりの平均作付規模(デシャチーナ)	総作付面積にたいする%	
貧農	役畜をもたないもの	20.7	37.1	2.1	2.8	8.0
	役畜1頭をもつもの	16.4		5.0	5.2	
中農	2—3頭 〃	26.6	38.2	10.2	17.1	28.6
	4頭 〃	11.6		15.9	11.5	
富農	5—9頭 〃	17.1	24.7	24.7	26.9	63.4
	10—19頭 〃	5.8		53.0	19.3	
	20頭以上 〃	1.8		149.5	17.2	
総数		100		15.9	100	

同体とフートルの両方で経営をしている世帯主―をふくんでいない。ドイツ人とフートル農民を加えると、分解の状況はいちじるしく激しいものとなるであろう)。

農業生産の集中は非常に顕著であることがわかる。「共同体」資本家(農家総数の一四分の一、すなわち、役畜一〇頭以上もつ農家)が、全作付の三六・五%を手にしている。これは、農家総数の七五・三%を占める貧農と中農とを全部あわせたものと、同じである！「平均」数字(一戸あたりの作付一五・九デシャチーナ)は、ここでもまた、例のとおりまったく虚構のものであって、全般的に裕福であるかのような幻影をつくりだしている。さまざまなグループの経済状態についての他の資料を見よう。(第一一表)

このように、下級のグループでは、自立的経営主ははなはだ少ない。改良農具を、貧農は全然もっていないし、中農はわずかしかもっていない。家畜の集中は作付の集中よりもいっそう激しい。明らかに、富裕な農民層は大規模な資本主義的作付に資本主義的畜産を結合している。反対の極には、分与地をもつ雇農と日雇いのなかに入れられるべき「農民」が見られる。というのは、彼らにあっては、生活手段の主要な源泉は(すぐに見るように)労働力の販売だからである。ときには地主がその雇農に一―二頭の家畜

* 『サマラ県統計報告集、第七巻、ノヴォウゼンスク郡』、サマラ、一八九〇年。ニコラエフスク郡についても、これと同様の分類がなされている(第六巻、サマラ、一八八九年)。だがここでは情報がはるかにくわしくない。『サマラ県集成』(第八巻、第一冊、サマラ、一八九二年)では、分与地による分類しかなされていない。この分類が不満足なものであることについては、のちに述べる。

〔第 11 表〕

世帯主グループ	全分与地を自分の農具でたがやす経営主の％	改良農具をもつ経営主の％	1戸あたりの家畜頭数（大家畜に換算）	家畜総頭数にたいする％	
役畜をもたないもの	2.1	0.03	0.5	1.5	6.4
役畜1頭をもつもの	35.4	0.1	1.9	4.9	
〃　2—3頭　〃	60.5	4.5	4.0	16.8	28.6
〃　4頭　〃	74.7	19.0	6.6	11.8	
〃　5—9頭　〃	82.4	40.3	10.9	29.2	65.0
〃　10—19頭　〃	90.3	41.6	22.7	20.4	
〃　20頭以上　〃	84.1	62.1	55.5	15.4	
総　　数	52.0	13.9	6.4	100	

をあたえることがあるが、これは、雇農を地主の経営にしばりつけて賃金の切下げをおこなうためである。

いうまでもなく、農民の各グループは、経営規模によってだけでなく、経営方法によっても区別される。第一に、上級のグループでは、経営主のうちの非常にいちじるしい部分（四〇―六〇％）が、改良農具（おもにプラウ、ついで馬および蒸気力による脱穀機、簸浄機、刈取機、その他）をそなえている。二四・七％を占める上級のグループの農家の手に、全改良農具の八二・九％が集中されているのにたいし、三八・二％を占める中位のグループの農家には改良農具の一七％が、三七・一％を占める貧農には〇・一％（五、七二四台のうちの七台）があるにすぎない。[*] 第二に、ノヴォウゼンスク郡統計集の編者がかたっているように（四四―四六ページ）、馬の少ない農民のもとでは、必要にせまられて、馬の多い農民とくらべて、「別の経営方式、全経済活動の別の制度」が見られる。資力のある農民は、「土地を休ませ……秋にはプラウですきおこし……春にはすきかえし、ハローでならしてから種子をまく。……すきおこした休耕地は、土に風をとおしてから、均土機でならす……ライ麦の場合は二度たがやす」。ところが資力の乏しい農民は、「土地を休ませず、毎年ロシア小麦をその土地にまく、……小麦の場合は春に一度だけすきおこす。……ライ麦の場合は畑を休ませず、すきおこしもしないで、畝間にまく。……小麦の場合は春おそくすきおこすので、穀物が発芽しないことがしばしばある。……ライ麦の場合は一度すきおこすが、畝間に播き、時期はずれにもなる。……毎年いたずらに同じ土地をすきおこし、休ませることをしない」。「その他、等々、際限がない」――編者はこの

分与地の借地				借地の総面積にたいする%	土地を貸しだして経営をもたない農家の%
他の共同体内で		自分の共同体内で			
農家の%	1戸あたり（デシャチーナ）	農家の%	1戸あたり（デシャチーナ）		
1.4	5.9	5	3	0.6	47.0
4.3	6.2	12	4	1.6	13.0
9.4	5.6	21	5	5.8	2.0
15.8	6.9	34	6	5.4	0.8
19.7	11.6	44	9	16.9	0.4
29.6	29.4	58	21	24.3	0.2
36.1	67.4	58	74	45.4	0.1
11.0	15.1	25	11	100	12

リストをこうしめくくっている。「資力の大きなものと資力の乏しいものとでは経営方式が根本的に異なるという、この検証された事実は、その結果として、あるもののところでは質の劣った穀物と悪い収穫を、他のもののところでは比較的よい収穫をもたらすこととなっている」（同上）。

＊ 興味深いことに、この同じ資料からヴェ・ヴェ氏は（『農民経済における進歩的潮流』、サンクト・ペテルブルグ、一八九二年、二二五ページ）は、旧式農具を改良農具にとりかえる「農民大衆」の運動という結論を引きだしている（二五四ページ）。このまったくいつわりの結論を得る方法は、きわめて簡単である。ヴェ・ヴェ氏は、農具の分布をしめす表を一見する労をとらずに、ゼムストヴォ統計集から総計の資料をとったのである！ 商品穀物の生産を安くするために機械を使用する資本家的農業企業家（共同体構成員である）の進歩が、筆の一走りで「農民大衆」の進歩に変えられている。そしてヴェ・ヴェ氏は、はばかるところなくこう書いたのである――「機械は富裕な経営主が買いいれるとはいえ、それを利用するのはすべての（原文のまま!!）農民である」（二二一ページ）。注釈は無用である。

だが、このような大ブルジョアジーが、農耕的な共同体経済のなかでどのようにしてつくりだされるようになったのだろうか？ 回答は、グループ別に見た土地所有および土地用益の数字があたえてくれる。われわれがとりあげた

〔第 12 表〕

世帯主グループ	購入地をもつ農家の%	1戸あたり（デシャチーナ）	購入地全体にたいする%	分与地外の借地	
				借地農家の%	1戸あたり（デシャチーナ）
役畜をもたないもの	0.02	100	0.2	2.4	1.7
役畜1頭をもつもの	—	—	—	10.5	2.5
〃　2—3頭　〃	0.02	93	0.5	19.8	3.8
〃　4頭　〃	0.07	29	0.1	27.9	6.6
〃　5—9頭　〃	0.1	101	0.9	30.4	14.0
〃　10—19頭　〃	1.4	151	6.0	45.8	54.0
〃　20頭以上　〃	8.2	1,254	92.3	65.8	304.2
総　数	0.3	751	100	19.8	31.7

部類の農民は、全部で五七、一二八デシャチーナの購入地（七六戸がもつ）と三〇四、五一四デシャチーナの借地をもっている。後者のうち、一七七、七八九デシャチーナは分与地外の借地で、五、六〇二戸がもち、四七、四九四デシャチーナは他の共同体内の分与地を借りいれたもので、三、一二九戸がもち、七九、二三一デシャチーナは自分の共同体内の分与地を借りいれたもので、七、〇九二戸がもっている。農民の作付面積全体の三分の二以上を占めるこの膨大な面積の分布は、次のとおりである。〔第一二表〕

われわれはここに、購入地および借地の巨大な集中を見る。購入地全体の一〇分の九以上が、農家の一・八%にあたる最も大きな富農の手にある。また全借地のうち六九・七%は農民資本家の手に、八六・六%は上級の農民グループの手に集中されている。借地にかんする資料と分与地の貸出しにかんする資料とを対比すると、土地が農民ブルジョアジーの手に移動していることが、明らかに見られる。土地の商品化は、ここでもまた、土地の大口買入れの低廉化を（したがってまた、土地の賃取り転売を）もたらしている。分与地外の借地一デシャチーナの価格を算定すると、下級のグループから上級のグループに移るにつれて、順次に、三・九四、三・二〇、二・九〇、二・七五、二・五七、二・〇八、一・七八ルーブリという数字が得られる。

〔第 13 表〕

世帯主グループ	賃金労働者をやとう世帯の%	農業的営業に従事する男子働き手の%
役畜をもたないもの	0.7	71.4
役畜1頭をもつもの	0.6	48.7
〃 2―3頭 〃	1.3	20.4
〃 4頭 〃	4.8	8.5
〃 5―9頭 〃	20.3	5.0
〃 10―19頭 〃	62.0	3.9
〃 20頭以上 〃	90.1	2.0
総数	9.0	25.0

この借地集中を無視することからナロードニキがどんな誤りをおかすようになるかをしめすために、一例として、有名な書物『ロシア国民経済の若干の側面にたいする収穫と穀物価格の影響』(サンクトーペテルブルグ、一八九七年)のなかのカルィシェフ氏の議論をあげよう。カルィシェフ氏はこう結論している、――収穫がよくなって穀物価格がさがるが、しかし借地料はあがるとすれば、借地農業企業家は需要を削減するにちがいない。つまり、借地料があがるのは消費のための経営をする人々のせいである(第一巻、二八八ページ)。この結論はまったく専断的である。農民ブルジョアジーが、穀物価格の下落にもかかわらず借地料をあげるということは、まったくありうることである。というのは、収穫がよいと価格の下落をうめあわせることができるからである。また、富農が、このような補償がない場合でも、機械を導入することによって穀物の生産費を引きさげ、こうして借地料を引きあげることも、まったくありうることである。われわれは、農業で機械の使用が増大していること、そしてこれらの機械が農民ブルジョアジーの手に集中されていることを、知っている。カルィシェフ氏は、農民層の分解を研究するかわりに、平均的な農民についての専断的でまちがった前提をもちだしている。だから、さきに引用した著作のなかで彼が同様にしてつくりあげたあらゆる断定や結論は、なんの意義ももちえない。

農民層のなかの種々さまざまな要素を明らかにしたので、われわれはもはや国内市場の問題を容易に解明することができる。富裕な農民層が農業生産全体の約三分の二をその手ににぎっているとすれば、この層が、売りに出される穀物のうちの、比較にならないほど大きな部分を提供するは

ずであることは、明白である。この層は、売るために穀物を生産している。これにたいして資力のない農民層は、自分の労働力を売って穀物を買いたさなければならない。つぎにかかげるのは、そのことにかんする資料である。* 〔第一三表〕

* 統計家たちが「農業的営業」（地元でのおよび出稼ぎの）と名づけているものを、われわれは労働力の販売と同じものと見る。これらの「営業」が雇農労働と日雇労働を意味することは、諸営業の表から明白である（『サマラ県集成』、第八巻）。「農業的営業」に従事している男子一四、〇六三人のうち、雇農と日雇い（牧夫と農夫をふくむ）は一三、二九七人である。

わがナロードニキの議論を、国内市場の創出過程にかんするこれらの資料とくらべてみることを、読者におすすめする。……「百姓が富んでいれば工場はさかえるし、逆の場合は逆である」（ヴェ・ヴェ『進歩的潮流』、九ページ）。ヴェ・ヴェ氏は、「工場」にとって必要な富、一方では生産物と生産手段が、他方では労働力が商品に転化するのでなければつくりだされないあの富の社会的形態という問題に、明らかにまったく関心をもっていないのである。ニコライ―オン氏は、穀物の販売についてかたるとき、この穀物が「耕作百姓」の生産物であること（『概要』二四ページ）と、この穀物を輸送するのだから「鉄道は百姓によって成りたっている」（一六ページ）ことで、自分を慰めている。だが実際に、これらの「共同体員」の資本家は、はたして「百姓」なのか？　ニコライ―オン氏は一八八〇年に次のように書き、一八九三年にそれを重版した。「われわれはなおいつかは、次のことをしめす機会をもつであろう。それは、共同体的土地所有が優勢な地方では、資本主義原理にもとづく農業はほとんどまったく欠如している（原文のまま!!）ということ、またそのような農業が可能であるのは、共同体的つながりがまったく断ちきられているか、あるいはくずれつつあるところだけである、ということである」（五九ページ）。ニコライ―オン氏は、そのような「機会」についぞ出あわなかったし、また出あうことはできなかった。なぜなら、諸事実は、まさに「共同体員」のあいだで資本主義的農業が発展しつつあること、* および、かの名高い「共同体的つながり」は作付規模の大きなものの雇農使用経営に完全に適応していることを、しめしているからである。

* 例証としてわれわれがとりあげたノヴォウゼンスク郡は、特別な「共同体の生命力」（ヴェ・ヴェ氏一派の用語法による）をしめしている。『集成』の表（二六ページ）からわれわれは、この郡では共同体の六〇％が土地の割替えをしたのにたいして、他の諸郡ではわずか一一―二三％（全県では共

同体の一三・八%）しかしていないことを知る。

ニコラーエフスク郡について見ても、農民の各グループのあいだの関係はまったく同様である（前掲の集成、八二六ページ以下。他所に居住するものと土地をもたないものを除く）。たとえば、農家総数の七・四%にあたる富農（一〇頭以上の役畜をもつもの）は、人口の一三・七%を占め、家畜総数の二七・六%と借地の四二・六%を集中しているのにたいして、農家総数の二九%にあたる貧農（馬をもたないもの、および馬一頭をもつもの）は、人口では全体の一九・七%であるが、家畜の七・二%と借地の三%をもっているにすぎない。残念ながら、くりかえしていうが、ニコラーエフスク郡にかんする表はあまりにも簡単すぎる。サマラ県を終えるにあたって、サマラ県についての『集成』から、農民層の状態のきわめて教訓的な次の特徴づけを引用しよう。

「……人口の自然増加は、西部諸県からの土地の少ない農民の移住によっていっそうはげしくなっているが、金もうけを目的とする土地投機商人が農業生産の舞台に現われるのと関連して、一年ごとに、土地貸借の形態はますます複雑になり、地価は高まり、土地が商品になり、こうして一部の人々は急速にいちじるしく富み、他の多くの人々は零落した。この最後の点の例証として、南部の若干の商人経営と農民経営の耕地の規模を指摘しよう。それらの経営では、三、〇〇〇―六、〇〇〇デシャチーナの耕作地もまれではなく、いくつかの経営にいたっては、官有地を数万デシャチーナ借りいれて、八、〇〇〇―一万―一万五、〇〇〇デシャチーナもの作付を実施している。

サマラ県で農耕（農村）プロレタリアートが存在して増大するようになったのは、いちじるしい程度に、販売のための穀物の生産の増大、借地料の騰貴、処女地や放牧地の開墾、森林の開拓、その他の現象と結びついている、最近時のことである。土地をもたない農家は県全体で二一、六二四戸しかないが、経営をもたない農家は（分与地をもつ農家のうち）三三、七七二戸あり、さらに、馬をもたない農家と馬一頭をもつ農家は、あわせて一一〇、六〇四家族であって、一家族あたり五人強として計算すれば、その男女人口は六〇万人である。たとえ彼らは法律上は共同体の土地のうちのどれほどかをもっているとしても、われわれはあえて彼らをもプロレタリアートとみなす。事実上、これは大経営ではたらく日雇い、農夫、牧夫、刈取人その他の労働者であって、家にのこっている家族を養うために、〇・五―一デシャチーナの自分の分与地に作付をしているのである」（五七―五八ページ）。

このように、調査員は、馬をもたない農民だけでなく、

馬一頭をもつ農民をも、プロレタリアートとみなしている。この重要な結論を強調しておこう。それは、ポストニコフ氏の結論と（およびグループ別の諸表の資料とも）まったく一致しており、下級の農民グループの真の社会経済的意義をしめしているのである。

三　サラトフ県にかんするゼムストヴォ統計資料

こんどは、中央黒土地帯に、サラトフ県に移ろう。カムイシン郡をとりあげる。この郡は、役畜数による農民の分類が十分完全になされている唯一の郡である。*

* この県の他の四郡については、役畜数による分類は中農層と富農層をいっしょにしている。『サラトフ県統計報告集成』、第一部、サラトフ、一八八八年、B、サラトフ県の農民部類別組合せ表を参照。サラトフの統計家たちは組合せ表を次のように作成している。すなわち、すべての世帯主が分与地の大きさによって六つのカテゴリーに分けられ、それぞれのカテゴリーが役畜数によって六つのグループに、それぞれのグループが男子働き手の数によって四つの小部類に分けられている。合計はカテゴリー別にだけなされており、そのためグループ別には自分で計算しなければならない。このような表の意義についてはあとで述べる。

つぎにかかげるのは、郡全体についての資料である（農家戸数四〇、一五七戸、男女人口二六三、一三五人、作付面積四三五、九四五デシャチーナ、すなわち「平均的」農家一戸あたり一〇・八デシャチーナ）。〔第一四表〕

このように、われわれはここでもまた、作付の大きなものの手に作付が集中されているのを見る。すなわち、農家のわずか五分の一（そして人口の約三分の一）*しか占めていない富裕な農民層が、作付全体の半分以上（五三・三％）をその手ににぎっている。しかもその作付の規模は、作付が商業的性格のものであることを明白にしめしている。すなわち、一戸あたり平均二七・六デシャチーナである。富裕な農民層にあっては、一戸あたりの家畜頭数もまたいちじるしく多い。すなわち、それは一四・六頭（大家畜に換算して、つまり小家畜一〇頭を大家畜一頭と計算して）であって、この郡の農民の家畜の総頭数のほぼ五分の三（五六％）が、農民ブルジョアジーの手に集中されている。農村の反対の極では、われわれは反対の現象を、すなわち最下級のグループである農村プロレタリアートには持ち分が全然ないことを見る。彼らは、われわれの例では農家の二分の一弱（人口では約三分の一）を占めているのに、作付全体のわずか八分の一しかもたず、家畜総頭数ではもっと少ない部分（一一・八％）しかもっていない。これはも

〔第 14 表〕

世帯モ群	農家の%		男女人口の%	平均作付規模（デシャチーナ）	総作付面積の%		作付をしない農家の%	1戸あたりの家畜頭数（大家畜に換算）	家畜総頭数にたいする%	
役畜をもたないもの	26.4	46.7	17.6	1.1	2.8	12.3	72.3	0.6	2.9	11.8
役畜1頭をもつもの	20.3		15.9	5.0	9.5		13.1	2.3	8.9	
〃 2頭 〃	14.6	32.2	13.8	8.8	11.8	34.4	4.9	4.1	11.1	32.1
〃 3頭 〃	9.3		10.3	12.1	10.5		1.5	5.7	9.8	
〃 4頭 〃	8.3		10.4	15.8	12.1		0.6	7.4	11.2	
〃 5頭以上 〃	21.1	21.1	32.0	27.6	53.3	53.3	0.2	14.6	56.1	56.1
総数	100		100	10.8	100		22.7	5.2	100	

はや、主として、分与地をもつ雇農、日雇い、工業労働者である。

＊ 農家を資産状態または経営規模によって分類すると、つねに、家族員数は富裕な農民層のほうが多い、ということを指摘しておく。この現象は、農民ブルジョアジーと、より多くの分与地を受けとっている大家族とのあいだに関連があることをしめしている。部分的には逆にもいえる。すなわち、この現象は、富裕な農民層にあっては分割の志向がより少ないことを証明している。しかし、富農は家族員が多いということの意義を、過大視してはならない。われわれの資料からわかるように、富農は最も大規模に労働者の雇用にたよっている。わがナロードニキが好んで口にする「家族的協業」は、このように、資本主義的協業の基礎となっているのである。

作付の集中および農業の商業的性格の増大とならんで、農業の資本主義的農業への転化が進行している。われわれは、すでにおなじみの現象を、すなわち、下級のグループにおける労働力の販売と上級のグループにおける労働力の購買を見る。〔第一五表〕

ここで重要な説明が必要である。すでにペ・エヌ・スクヴォルツォフがその論文の一つでまったく正当に指摘したことだが、ゼムストヴォ統計では「営業」（または「賃仕事」）という術語に、法外に「広い」意義があたえられている。実際、「営業」には、分与地外での農民のありとあらゆる生業が入れられている。工場主も労働者も、製粉所や瓜畑の持ち主も日雇いや雇農も、買占人や商人も雑役夫も、木材業者も木こりも、請負業者も建築労働者も、自由職業の人や事務員も乞食も、その他等々――これらすべてが「営業者」なのである！ この乱暴な用語法は、「分与地」は百姓の「本当の」、「自然の」生業であるが、その他

〔第 15 表〕

世帯主のグループ	男子の賃金労働者をもつ経営主の%	営業に従事する経営の%
役畜をもたないもの	1.1	90.9
役畜1頭をもつもの	0.9	70.8
〃 2頭 〃	2.9	61.5
〃 3頭 〃	7.1	55.0
〃 4頭 〃	10.0	58.6
〃 5頭以上 〃	26.3	46.7
総数	8.0	67.2

の生業はみな一様に「副」業に属するという、伝統的な――公式の、とさえいってよいのだが――見解の遺物である。農奴制度のもとではこのような用語法にも raison d'être〔存在理由〕があったが、いまでは、それはひどい時代錯誤である。このような用語がわが国で存続しているのは、いくぶんかは、それが「平均的」農民層という擬制とみごとに調和していて、農民層の分解を研究する可能性を、まっこうから排除するからである（農民の「副」業が豊富にあって多種多様である地方では、とくにそうである。カムィシン郡が縞木綿製造業の著名な中心地であることを、思いおこそう）。農民経済にかんする戸別報告の加工*は、農民の「営業」がその経済的類型にしたがって分類されないかぎり、「営業者」のなかで経営主が賃金労働者から区別されないかぎり、不十分であろう。これらは経済的類型の最小限のものであって、これらを区分してなければ、経済統計は十分なものとは認められない。もちろん、もっとくわしい分類がのぞましい。たとえば、賃金労働者を使用する経営主――賃金労働者を使用しない経営主――商人、買占人、小売商、その他――顧客のために仕事をする営業者という意味での手工業者、等々。

* われわれは「加工」というが、そのわけは、戸別調査のさいに農民の営業にかんしてきわめて立ちいったくわしい情報が集められているからである。

前掲の表にもどって、「営業」を労働力の販売のことだとするには、われわれとしてやはり一定の理由があったことを、指摘しておこう。というのは、農民「営業者」のあいだでは賃金労働者が通常優勢だからである。もし営業者のなかから賃金労働者だけを抜きだすことができるなら、上級のグループのなかでの「営業者」のパーセントは、も

〔第 16 表〕

世帯主のグループ	分与地をもつ農家1戸あたり（デシャチーナ）			土地総面積にたいする％			総土地用益（％）（分与地＋借地－貸出地）
	分与地	借地	貸出地	分与地	借地	貸出地	
役畜をもたないもの	5.4	0.3	3.0	16	1.7	52.8	5.5
役畜1頭をもつもの	6.5	1.6	1.3	14	6	17.6	10.3
〃 2頭 〃	8.5	3.5	0.9	13	9.5	8.4	12.3
〃 3頭 〃	10.1	5.6	0.8	10 }34	9.5 }30.1	4.8 }17.3	10.4 }34.6
〃 4頭 〃	12.5	7.4	0.7	11	11.1	4.1	11.9
〃 5頭以上 〃	16.1	16.6	0.9	36	62.2	12.3	49.6
総数	9.3	5.4	1.5	100	100	100	100

ちろん、比較にならないほど小さなものとなるであろう。

賃金労働者にかんする資料についていえば、われわれはここで、ハリゾメノフ氏の見解がまったくまちがっていることを指摘しなければならない。彼は、「穀物刈入れ、草刈りおよび日雇仕事のための」（労働者の）「短期の雇用は、あまりにも普及している現象であって、経営の強弱を特徴づける標識としては役だたない」（『集成』の「序論」、四六ページ）かのようにいっている。だが、理論的判断によっても、西ヨーロッパの例によっても、ロシアの資料（それについては後述）によっても、逆に、日雇労働者の雇用を農村ブルジョアジーのきわめて特徴的な標識と見ないわけにはいかないのである。

最後に、借地にかんしては、資料はここでもまた、やはり農民ブルジョアジーが借地を手中におさめていることをしめしている。サラトフ県の統計家たちの組合せ表には、土地を借りいれている経営主と土地を貸しだしている経営主の数があたえられておらず、借地と貸出地との面積*しかあたえられていないことを、指摘しておこう。だからわれわれは、借地と貸出地の大きさを、借地農家一戸あたりではなく、現在農家一戸あたりで算定しなければならない。

〔第一六表〕

* この郡全体で六一、六三九デシャチーナの耕地が、すなわち分与地全体（三七七、三〇五デシャチーナ）の約六分の一が貸しだされている。

このように、ここでもまたわれわれは、農民が富裕であればあるほど、分与地をより多く確保しているにもかかわらず、ますます多くを借地していることを見る。ここでも

またわれわれは、富裕な農民層が中農層を押しのけていること、農民経済のなかでの分与地の役割が農村の両極では減少する傾向にあることを見る。

借地にかんするこれらの資料について、もっとくわしく論じよう。カルィシェフ氏のすこぶる興味ある重要な研究と議論(前出『総括』)と、それにたいするニコライ――オン氏の「修正」は、これらの資料と関連している。

カルィシェフ氏は、「借地が借地人の裕福さに依存すること」に特別の章(第三章)をあてた。彼が到達した一般的結論は、「他の条件がひとしければ、土地借入れのためのたたかいは、より資力のある者に有利となりがちである」(一五六ページ)、ということである。「比較的資力のある農家は……比較的資力のない農家グループを後景に押しやっている」(一五四ページ)。したがって、ゼムストヴォ統計資料の全般的概観からの結論は、われわれの研究しでいる資料がもたらす結論と同一であることがわかる。そのさい、借地の規模が分与地の規模に依存する程度の研究の結果、カルィシェフ氏は、分与地による分類は「われわれのあつかっている現象の意味をぼかしてしまう」(一三九ページ)という結論に到達した。すなわち、「より多く
の借地を……用益しているのは、(イ)土地をより保障されていない部類であるが、しかし(ロ)それらの部類のなかではより多く保障されているグループである。明らかに、ここでわれわれは、二つのまっこうから対立する影響力とかかわりあっているのであって、それらを混同すると、それぞれの意義の理解が妨げられる」(同所)。この結論は、もしわれわれが資産状態によって農民グループを区別するという見地を一貫してつらぬくなら、自明のことである。われわれの資料のいたるところで見たように、富裕な農民層は、土地をより多く分与されているにもかかわらず、借地を横奪している。まさに農家の富裕度こそ借地にさいしての規定的要因であること、そしてこの要因は、分与の条件や借入れの条件の変化につれて変形しはするが、しかし規定的なものでなくなることはないということは、明白である。だがカルィシェフ氏は、「裕福さ」の影響を研究したものの、前記の見地に一貫して立つことをしなかった。だから、借地人の土地確保の程度と借地とのあいだの直接的依存関係について述べたものの、この現象を不正確に特徴づけてしまった。これが一面である。他面では、カルィシェフ氏は彼の研究の一面性のため、富農による借地の横奪ということの全意義を評価することを妨げられた。彼は、「分与地外の借地」を研究しながら、借地人の自分の土地での経営とは無関係に、借地にかんするゼムストヴォ統計の資料をまとめるにとどまっている。このような、より形

式的な研究では、「裕福さ」にたいする借地の関係という問題、借地の商業的あるいはコマーシャルな性格という問題を解決できなかったのも、当然である。カルィシェフ氏は、たとえば、カムィシン郡についてのわれわれのと同じ資料を手にしてはいたが、借地だけの絶対数をひきうつし(付録第八、三六ページを参照)、分与地をもつ農家一戸あたり平均の借地面積を計算(本文、一四三ページ)するにとどまった。富裕な農民層の手中への借地の集中、借地の営業的性格、借地と下級の農民グループによる土地貸出しとの関連――これらすべては度外視されてしまった。こうしてカルィシェフ氏は、ゼムストヴォ統計資料が借地にかんするナロードニキ的な考えをくつがえして、富裕な農民層による貧農の駆逐をしめしていることを認めないわけにはいかなかったが、しかし彼はこの現象を不正確に特徴づけた。そして、それをあらゆる側面から研究しはしなかったので、彼は、これらの資料との矛盾におちいり、「勤労原理」等々という古い小歌を繰りかえしたのである。だが農民層における経済的不和と闘争をたんに確認することだけでも、ナロードニキの諸氏には異端におもわれた。そこで彼らは、カルィシェフ氏を彼らなりに「訂正」することに着手した。ニコライ―オン氏は、彼が言明している(一五三ページの注)ように、カルィシェフ氏にたいするエヌ・カブルーコフ氏の反論を「利用」して、まさにそのことをしている。ニコライ―オン氏はその著『概要』の第九章で、借地とそのさまざまな形態について論じている。彼はこう言っている。「農民が自分の土地での農耕労働によって生きてゆくのに十分なだけの土地を所有しているならば、彼は土地を借りはしない」(一五二ページ)。こうしてニコライ―オン氏は、農民の借地のうちに企業家精神が存在すること、商業的作付をおこなう富農が借地を横奪していることを、なんのためらいもなしに否定するのである。彼の証拠は? 絶対になに一つない。「人民的生産」の理論は、証明されているのではなく、宣告されているのである。カルィシェフ氏に反対してニコライ―オン氏はフヴァルィンスク郡のゼムストヴォ統計集から一表を引用しているが、その表は次のことを証明する、というのである。すなわち、「役畜の現有数が同一であれば、分与地が少なければ少ないほど、この不足をそれだけ借地でおぎなわなければならない」(一五三ページ)*。さらに言う。「もし農民が家畜所有の点でまったく同一の条件におかれているなら、また、もしその経営に労働力が十分にあるなら、農民は、自分の所有する分与地が少なければ少ないほど、それだけ多く土地を借りいれる」(一五四ページ)。読者が見られるように、このような「結論」はカルィシェフ氏の不正確な

定式化にたいするたんなることばのうえの言いがかりであり、借地と裕福さとの関連という問題をニコライ―オン氏は無内容なくだらないことの羅列でごまかしているだけである。役畜の現有数が同一であるなら、土地が少なければ少ないほど、それだけ借地が多くなるのは、自明のことではないか？　それについては、いまさら言うことはない。なぜなら、その場合は、その相違が問題であるのに、まさにその裕福さが同一だとされているからである。土地を十分にもつ農民は借地をしないというニコライ―オン氏の主張は、このことによっては絶対に証明されない。そしてニコライ―オン氏の表は、彼が自分の引用した数字を理解していないことをしめすだけである。彼は農民を分与地の大きさで同等なものとしているが、そのことによって、「裕福さ」の役割と、貧農による土地の貸出し（もちろん、ほかならぬ富裕な農民への貸出し）と関連する借地横奪を、いっそうくっきりきわだたせているのである。** 読者は、いま引用したカムィシン郡の借地分布にかんする資料を思いだしてほしい。われわれが、「役畜の現有数が同一である」農民をとりだし、彼らを分与地の大きさによっていくつかのカテゴリーに分け、さらに働き手数によって小部類に分け、そのうえで、土地が少なければ少ないほど、彼らはそれだけ多くを借地する、と言明したと想像してみたまえ。はたしてこのようなやりかたによって、富裕な農民層のグループが消えてなくなるであろうか？　だがニコライ―オン氏は彼の空文句によってまさに、このグループは消えてなくなったことにしてしまい、そしてナロードニキ主義の古くからの偏見を繰りかえすことができたのである。

* これとまったく同じ表を、統計家たちはカムィシン郡についてもあたえている。『サラトフ県統計報告集』、第一一巻、カムィシン郡、二四九ページ以下。だからわれわれは、われわれがとりあげた郡の資料を利用してまったくさしつかえない。

** ニコライ―オン氏が引用した資料は彼の結論を打ちやぶるものであることは、すでにペ・ストルーヴェ氏がその『批判的覚え書』で指摘したところである。

ニコライ―オン氏の絶対に役にたたない方法――すなわち、働き手〇人、一人、二人等々をもつグループ別に一戸あたりの農民の借地を計算するというもの――を、エリ・マレッス氏も『収穫および穀物価格の影響』という本のなかで踏襲している（第一巻、三四ページ）。マレッス氏が（偏見にとらわれたナロードニキ的見地で書かれた同書の他の執筆者たちと同様に）臆面もなく利用している「平均」というものの、ちょっとした実例をあげよう。彼は次のように論じている。メリトーポリ郡では、借地農家一戸あたりの借地面積は、男子働き手のいない農家で一・六デ

シャチーナ、働き手一人の農家で四・四デシャチーナ、二人の農家で八・三デシャチーナ、三人の農家で一四・〇デシャチーナである(三四ページ)。そこで結論は――「借地のほぼ均等な一人あたり分布」ということになる!! マレッス氏は、ヴェ・ポストニコフ氏の著書からもゼムストヴォ統計集からも知りえたのに、経済的資力のちがう農家グループ別の借地の実際の分布を観察することが必要だとは考えなかったのである。男子働き手一人をもつ農家グループで借地農家一戸あたりの借地が四・四デシャチーナという、この「平均」数字は、五―一〇デシャチーナを作付し、二―三頭の役畜をもつ農家グループでの四デシャチーナとか、五〇デシャチーナ以上を作付し、四頭以上の役畜をもつ農家グループでの三八デシャチーナとか、そういう数字の合算から得られたものである(メリトーポリ郡統計集、D、一〇―一一ページを参照)。富農と貧農をいっしょに合算し、合算されたものの数でそれを割れば、どこででも「均等な分布」が得られることに、不思議はない!

実際には、メリトーポリ郡では、戸数の二一%、農民人口の二九・五%を占める富農(二五デシャチーナ以上を作付するもの)が、分与地と購入地を最も多く確保しているにもかかわらず、借入耕地全体の六六・三%をもっている(メリトーポリ郡統計集、B、一九〇―一九四ページ)。逆に、戸数の四〇%、農民人口の三〇・一%を占める貧農(一〇デシャチーナ未満を作付するもの)は、分与地と購入地を最もわずかしか確保していないにもかかわらず、借入耕地全体の五・六%をもつにすぎない。ごらんのように、「均等な一人あたり分布」になんとよく似ていることだろう!

マレッス氏は、「借地農家は、豊かさの点では」(分与地・を確保しているという点では)「主として下級の二つのグループに属しており」、「借地は、借地人口のあいだで一人あたり(原文のまま!)均等に分布しており」、「借地は、農民が豊かさの点で下級のグループから上級のグループに移行する条件となっている」(三四―三五ページ)という「仮定」を基礎にして、農民の借地にかんする彼自身のすべての計算をしている。われわれはすでに、マレッス氏のこれらすべての「仮定」がまっこうから現実と矛盾することをしめした。実際に、これらすべてはまさに逆なのであって、マレッス氏も、経済的生活状態の不平等について論ずるさいに(三五ページ)、経済的標識による農家の分類(分与地の所有によるのではなく)についての資料をとりあげたなら、また、ナロードニキ的偏見による根拠のない「仮定」にあまんじなかったなら、そのことを認めないわけにはいかなかったであろう。

〔第 17 表〕

サラトフ県の4郡							
世帯主のグループ	総数にたいする%						
	農家	男女人口	家畜総頭数	分与地	借地	総土地用益	作付面積
役畜をもたないもの	24.4	15.7	3.7	14.7	2.1	8.1	4.4
役畜1頭をもつもの	29.6	25.3	18.5	23.4	13.9	19.8	19.2
役畜2頭以上をもつもの	46.0	59.0	77.8	61.9	84.0	72.1	76.4
総数	100	100	100	100	100	100	100

　こんどは、カムィシン郡をサラトフ県の他の郡とくらべてみよう。農民の諸グループのあいだの関係は、四つの郡（ヴォリスク、クズネツク、バラショーフおよびセルドブスク）についての次の資料がしめすように、どこでも同様である。この資料では、すでに述べたように、中位の農民層と富裕な農民層がいっしょにされている。〔第一七表〕

　したがって、いたるところでわれわれは裕福な農民層による貧農の駆逐を見るのである。だがカムィシン郡では、富裕な農民層は他の郡におけるよりも人数が多くて富んでもいる。こうして、この県の五つの郡（カムィシン郡をもふくめて）では、農家の役畜頭数別分布は次のとおりである。役畜をもたないもの——二五・三%、一頭をもつもの——二五・五%、二頭をもつもの——二〇%、三頭をもつもの——一〇・八%、四頭以上をもつもの——一八・四%。ところがカムィシン郡については、われわれが見たように、富裕なグループはこれよりも多く、そのかわり資力の乏しいグループはいくらか少ない。さらに、もし中位の農民層と富裕な農民層をいっしょにすると、すなわち二頭以上の役畜をもつ農家をとると、これらの郡について次の資料が得られる。〔第一八表〕

　すなわち、カムィシン郡では裕福な農民層はより富んでいる。この郡は、最も土地の多い郡の一つであって、登録農奴人口男子一人あたりの分与地が、県全体では五・四デシャチーナであるのにたいして、ここでは七・一デシャチーナである。したがって、「農民層」の土地が多いということは、農民ブルジョアジーがより多数でより豊かであることを意味するにすぎない。

　これでサラトフ県の資料の概観を終わるにあたって、われわれは、農家の分類の問題を論ずることを必要と考える。おそらく、読者もすでに気づかれたであろうが、われわれ

〔第 18 表〕

2頭以上の役畜をもつ農家1戸あたり					
	カムィシン郡	ヴォリスク郡	クズネツク郡	バラショーフ郡	セルドブスク郡
役畜の頭数	3.8	2.6	2.6	3.9	2.6
全家畜の頭数	9.5	5.3	5.7	7.1	5.1
分与地（デシャチーナ）	12.4	7.9	8	9	8
借地（デシャチーナ）	9.5	6.5	4	7	5.7
作付面積（デシャチーナ）	17	11.7	9	13	11

は分与地による分類をa limine〔ただちに〕しりぞけて、もっぱら経済的資力による（役畜頭数別、作付面積別）分類をもちいている。このようなやりかたをしたわけを明らかにしておかなければならない。分与地による分類は、わが国のゼムストヴォ統計では最も広くもちいられており、それを弁護するのに、通常次の二つの、一見したところきわめてもっともらしい論拠がもちだされている。*第一に、農耕農民の生活状態を研究するためには土地による分類が自然であり必要である、という人がいる。だがこのような論拠は、ロシアの生活の本質的な特殊性、すなわち、分与地的土地所有は不自由な性格を無視している。この分与地的土地所有は、法律の力によって、均分的な性格をおびており、その動産化は極度に拘束されている。農耕農民層の分解の全過程は、実生活がこれらの法的な枠をのりこえてゆくところにこそある。分与地による分類をもちいると、われわれは、土地を貸しだす貧農と土地を借りいれたり購入したりする富農とを、――土地を投げだす貧農と土地を「寄せあつめる」富農とを、――家畜をわずかしかもたずにきわめて劣悪な経営をいとなんでいる貧農と、家畜を多数もち、土地に肥料をほどこし、改良をとりいれ等々している富農とを、ひとからげにすることになる。いいかえれば、われわれは農村プロレタリアと農村ブルジョアジーに属する人々をひとからげにすることになる。このような合算によって得られる「平均」は、分解を塗りつぶすものであり、それゆえまったく虚構のものである。**さきに述べたサラトフ県の統計家たちの組合せ表は、分与地による分類が役にたたないことを明瞭にしめす可能性をあたえている。たとえば、カムィシン郡における分与地をもたない農民のカテゴリーをとってみよう（『集成』、四五〇ページ以下、カムィシン郡統計集、第一一巻、一七四ページ以下を参照）。『集成』の編者は、このカテゴリーを特徴づけて、その作付面積を「き

わめて微々たるもの」と称している（「序論」、四五ページ）。すなわち、このカテゴリーを貧農のなかに入れている。表をとってみよう。このカテゴリーの「平均」作付面積は、一戸あたり二・九デシャチーナである。だが、このような「平均」がどのようにしてつくられたのかということに、目を向けてみたまえ。それは、大きな作付をするもの（五頭以上の役畜をもつグループでは一戸あたり一八デシャチーナ。このグループの戸数はこのカテゴリー全体のうちの約八分の一であるが、このカテゴリーの全作付面積の約半分がこれらの農家のものである）と、馬をもたず、一戸あたり作付面積が〇・二デシャチーナである貧農とを、いっしょに合算することによってである！　雇農をもつ農家をとってみたまえ。このカテゴリーのなかでは雇農をもつ農家は非常に少なく、わずか七七戸、すなわち二・五％である。だがこの七七戸のうちの六〇戸は、一戸あたり一八デシャチーナを作付する最上級のグループに属しており、このグループのなかでは雇農をもつ農家は二四・五％にもおよんでいる。明らかに、これでは農民たちの分解を塗りつぶしてしまい、無産の農民層を（彼らに富農を加えることによって、また平均を算出することによって）実情よりも明るく描きだし、反対に、富裕な農民層を実力以下に描きだすことになる。なぜなら、多くの分与地をもつもののカテゴリーのなかには、大多数を占める資力のあるものといっしょに資力のないものもはいっている（周知のように、分与地の多い共同体のなかにも資力のないものがつねにいる）からである。いまやわれわれには、分与地による分類を弁護する第二の論拠も正しくないことが、明白である。人はいう。このような分類によると、分与地の規模の上昇につれて資産状態の標識（家畜頭数、作付面積、その他）の規則正しい上昇がつねに見られる、と。その事実は争う余地がない。なぜなら、分与地は福祉の最も重要な要因の一つだからである。それゆえ、多くの分与地をもつ農民層のなかにはつねに、農民ブルジョアジーに属する人々がより多くおり、そのため、分与地によるこのカテゴリー全体についての「平均」数字も上昇することになる。しかし、だからといって、農村ブルジョアジーと農村プロレタリアートとをひとからげにするやりかたが正しいと結論することは、けっしてできない。

＊　たとえば、サラトフ県の『集成』、サマラ県の『集成』、ヴォロネジ県の四郡の価格査定報告『集』それぞれの序論、およびその他のゼムストヴォ統計刊行物を参照。

＊＊　めったにない機会を利用して、われわれとヴェ・ヴェ氏との意見の合致を指摘しておこう。彼は、一八八五年およびその後数年間に書いた雑誌論文で「ゼムストヴォ統計刊行物の新しい型」を、すなわち、戸別報告をたんに分与地によって

だけでなく、経済的資力によっても分類できる組合せ表を、歓迎していた。そのころヴェ・ヴェ氏はこう書いた。「数字資料を、村や共同体のような、きわめて多様な経済的グループの混合物にではなく、これらのグループそのものに合わせなければならない」（ヴェ・ヴェ『地方統計刊行物の新しい型』、一八八九、一九〇ページ。『セーヴェルヌィ・ヴェーストニク』、一八八五年第三号所載。サラトフ県の『集成』の「序論」、三六ページから重引）。最大に残念なことに、ヴェ・ヴェ氏は、その最近のどの労作においても農民層のいろいろなグループについての資料に目を向けようとしなかったばかりか、われわれが見たように、ヴェ・ポストニコフ氏——彼は、「きわめて多様なグループの混合物」の資料ではなく、農民層のいろいろなグループについての資料を吟味しようとした、おそらく最初の人であるが——の著書のうちの、事実をあつかった部分を黙殺さえした。どうしてなのだろうか？

結論しよう。農民層にかんする戸別資料を整理するにあたっては、分与地による分類に限定してはならない。経済統計は、かならず経営の規模と型を分類の基礎におくべきである。これらの型を区別するための標識は、農業の地方的条件と形態に応じて採用されるべきである。すなわち、もし粗放的な穀作経営であれば、作付面積による（あるいは役畜頭数による）分類に限定してもよいが、その他の条件のもとでは、工業用作物の作付、農産物の加工、根菜類または牧草の作付、酪農経営、園芸、等々を考慮に入れる必要がある。農民が農耕の仕事と営業の仕事を広範な規模で結合しているならば、さきに述べた二つの分類方式の、すなわち、農耕の規模と型による分類と、「営業」の規模と型による分類との、組合せが必要である。農民経済の戸別調査表の総括の方法の問題は、けっして、一見してそうおもわれるかもしれないような、狭く専門的で、第二義的な問題ではない。反対に、現在ではそれはゼムストヴォ統計の基本的問題だといっても、すこしも誇張ではないであろう。戸別情報の充実度とその収集の技術*は高度の完璧の域に達した。しかし総括が不満足なため、きわめて貴重な大量の資料がまったく失われており、研究者の手にはいるものは（共同体や郷や農民の諸部類についての、分与地の大きさその他についての）「平均」数字だけである。だがこれらの「平均」は、すでに見たように、またこれからも見るように、しばしばまったく虚構のものなのである。

＊ ゼムストヴォ調査の技術については、上記の刊行物のほかに、『ゼムストヴォ統計の総括』の第一巻にあるフォルトゥナートフ氏の論文を見よ。戸別調査票の見本は、『サマラ県集成』とサラトフ県の『集成』のそれぞれの「序論」に、また、『オリョール県統計報告集』（第二巻、エレツ郡）、『ペルミ県クラスノウフィムスク郡の統計のための資料』第四冊にも掲載されている。ペルミ県の調査票はとくにきわだって充実している。

四　ペルミ県にかんするゼムストヴォ統計資料

こんどは、まったく異なる条件下にある県、ペルミ県のゼムストヴォ統計資料の概観に移ろう。クラスノウフィムスク郡をとりあげるが、この郡については農業経営の規模による農家の分類がある。* つぎにかかげるのは、この郡の農耕地区にかんする一般的資料である（農家数二三、五七四戸、男女人口一二九、四三九人）。〔第一九表〕

* 『ペルミ県クラスノウフィムスク郡の統計のための資料』、第三冊、表の部、カザン、一八九四年。比較のため、われわれは、これと同じ分類がなされているエカテリンブルグ郡についても、おもな資料をのちにかかげよう。『ペルミ県エカテリンブルグ郡統計報告集』、エカテリンブルグ郡ゼムストヴォ刊行、エカテリンブルグ、一八九一年。

したがって、作付の規模がいちじるしく小さいにもかかわらず、ここでもまたわれわれは、諸グループのあいだの関係がまったく同じであること、富裕な農民層の小さなグループの手に作付と家畜が同様に集中していることを見る。土地所有と土地の実際の経済的用益とのあいだの関係は、ここでもまた、われわれのすでに知っている諸県における

〔第 19 表〕

世帯主のグループ	農家戸数 %	男女人口 %	1戸あたりの作付 デシャチーナ	作付総面積にたいする%			1戸あたりの家畜 役畜	総頭数（大家畜に換算）	家畜総頭数にたいする%		
土地を耕さないもの	10.2	6.5	—	—	8.9		0.3	0.9	1.7	15.4	
作付面積5デシャチーナ未満のもの	30.3	24.8	1.7	8.9			1.2	2.3	13.7		
〃　5—10デシャチーナ　〃	27.0	26.7	4.7	22.4			2.1	4.7	24.5		
〃　10—20　〃　〃	22.4	27.3	9.0	35.1		68.7	3.5	7.8	33.8		60.1
〃　20—50　〃　〃	9.4	13.5	17.8	28.9	33.6		6.1	12.8	23.2	26.3	
〃　50デシャチーナ以上　〃	0.7	1.2	37.3	4.7			11.2	22.4	3.1		
総　数	100	100	5.8	100			2.4	5.2	100		

と同様である。* 〔第二〇表〕

* これらの農民（すべてのグループの）のもっている分与地は全部で四一〇、四二八デシャチーナ、すなわち、一戸あたり「平均」一七・五デシャチーナである。つぎに、農民は五三、八八二デシャチーナの耕地と五九七、一八〇デシャチーナの採草地を、

〔第 20 表〕

世帯主のグループ	パーセント					
	農家	男女人口	土地の総計にたいする			
			分与地	借地	貸出地	総土地用益
土地を耕さないもの	10.2	6.5	5.7	0.7	21.0	1.6
作付面積5デシャチーナ未満のもの	30.3	24.8	22.6	6.3	46.0	10.7
〃 5—10デシャチーナ 〃	27.0	26.7	26.0	15.9	19.5	19.8
〃 10—20 〃 〃	22.4	27.3	28.3	33.7	10.3	32.8
〃 20—50 〃 〃	9.4	13.5	15.5	36.4	2.9	29.8
〃 50デシャチーナ以上 〃	0.7	1.2	1.9	7.0	0.3	5.3
総数	100	100	100	100	100	100

〔第 21 表〕

世帯主のグループ	1戸あたり		耕地を借りいれる農家の%	耕地を借入れる農家1戸あたりの借入耕地（デシャチーナ）	採草地を借りいれる農家の%	採草地を借りいれる農家1戸あたりの借入採草地（デシャチーナ）
	男女人口	分与地（デシャチーナ）				
土地を耕さないもの	3.51	9.8	0.0	0.7	7.0	27.8
作付面積5デシャチーナ未満のもの	4.49	12.9	19.7	1.0	17.7	31.2
〃 5—10デシャチーナ 〃	5.44	17.4	34.2	1.8	40.2	39.0
〃 10—20 〃 〃	6.67	21.8	61.1	4.4	61.4	63.0
〃 20—50 〃 〃	7.86	28.8	87.3	14.2	79.8	118.2
〃 50デシャチーナ以上 〃	9.25	44.6	93.2	40.2	86.6	261.0
総数	5.49	17.4	37.7	6.0	38.9	65.0

したがって合計六五一、〇六二デシャチーナを借りいれており（耕地を借りいれている農家——八、九〇三戸、採草地を借りいれている農家——九、一六七戸）、分与地を次のように貸しだしている。耕地——五〇、五四八デシャチーナ（世帯主は八、五五三人）、採草地——七、一八六デシャチーナ（世帯主は二、一八〇人）、合計——五七、七三四デシャチーナ。

最も満ちたりた富裕な農民層が同じように借地を横奪しており、分与地が資力のない農民層から資力のある農民層に（貸出しによって）同じように移っており、分与地の役割が農村の両極で、二つの異なった方向に、同じように減少している。読者がこれらの過程をもっと具体的に頭に描くことができるように、借地にかんするもっとくわしい

〔第 22 表〕

経営のグループ	1戸あたりの男子労働者数	労働者をやとう経営の数				労働者をやとう経営の%			
		定期雇労働者を	草刈りのために	穀物刈入れのために	脱穀のために	定期雇労働者を	草刈りのために	穀物刈入れのために	脱穀のために
土地を耕さないもの	0.6	4	16	—	—	0.15	0.6	—	—
作付面積5デシャチーナ未満のもの	1.0	51	364	340	655	0.7	5.1	4.7	9.2
〃　5—10デシャチーナ　〃	1.2	268	910	1,385	1,414	4.2	14.3	20.1	22.3
〃　10—20　〃　〃	1.5	940	1,440	2,325	1,371	17.7	27.2	43.9	25.9
〃　20—50　〃　〃	1.7	1,107	1,043	1,542	746	50.0	47.9	69.6	33.7
〃　50デシャチーナ以上　〃	2.0	143	111	150	77	83.1	64.5	87.2	44.7
総数	1.2	2,513	3,884	5,742	4,263	10.6	16.4	24.3	18.8

資料をあげよう。〔第二一表〕

農民層の上級の諸グループ（われわれが知っているように、借地の最大の部分を集中している）では、したがって、一般に普及しているナロードニキ経済学者たちの意見とは反対に、借地は明白な営業的、企業家的性格をおびている。

賃労働にかんする資料に移ろう。これは、完全なものであるので（すなわち、日雇労働者の雇用にかんする資料がつけくわえられている）、この郡についてはとくに貴重である。〔第二二表〕

われわれはここで、日雇労働者の雇用が経営の強弱をしめす特徴的な標識ではないかのように考えている、サラトフ県の統計家たちの意見が明瞭に論破されているのを見る。まさに逆で、日雇労働者の雇用は農民ブルジョアジーの最高度に特徴的な標識である。すべての種類の日雇いについて、雇用する経営主のパーセントは資力の高まるにつれて高まることを、われわれは見うける。最も資力のある農民層は家族労働者を最も多く確保しているにもかかわらず、そうなのである。家族の協業はここでもまた資本主義的協業の基礎である。さらに、われわれが見るように、日雇労働者をやとう経営の数は――いま穀物刈入れのための日雇いの雇用をとると――、定期雇労働者をやとう経営の数の二倍半（郡平均で）である。残念なことに、統計家たちは、その資料があったにもかかわらず、日雇労働者をやとう経営の総数を出さなかった。上級の三つのグループでは、七、六七九戸の農家のうち雇農をやとっているのは二、一九〇戸であるが、穀物刈入れのための日雇労働者は、四、〇一七戸が、すなわち富裕なグループに属する農民の過半数が、

賃金労働者				家畜総頭数の%	分与耕地の%	土地を貸借する農家の%	
定期雇い		日雇い					
実数	%	実数	%			借りいれるもの	貸しだすもの
56	3.2	16,031	10.6	1.4	5.5	7.9	42.3
218	12.4	28,015	18.6	24.5	27.6	23.7	21.8
1,481	84.4	106,318	70.8	74.1	66.9	35.3	9.1
1,755	100	150,364	100	100	100	27.4	18.1

やとっている。もちろん、日雇労働者の雇用は、けっしてペルミ県の特性ではない。そしてわれわれはさきに、富裕な農民グループではこれらのグループの経営主総数の一〇分の二から六ないし九が雇農をやとっていることを見たので、そのことから直接に次の結論が出てくる。富裕な農家の過半数はなんらかの形態での賃労働を利用している。富裕な農民層の存在のための不可欠な条件は、雇農と日雇いの一隊が形成されることである。最後に、それを指摘するのはきわめて興味深いことであるが、雇農をやとう経営の数にたいする、日雇いをやとう経営の数の割合は、農民層の下級のグループから上級のグループにゆくにつれて低下している。下級の諸グループでは、日雇いをやとう経営の数が、雇農をやとう経営の数をつねに、それも何倍も上まわっている。反対に、上級の諸グループでは、雇農をやとう経営の数が、日雇いをやとう経営の数よりも多いことさえ、ときおりある。この事実は、農民層の上級の諸グループでは、賃労働の常時使用に基礎をおく真の雇農使用経営が形成されていることを、明白にしめしている。賃労働は一年の各季節に比較的均等に配分されており、より高くついて、よりわずらわしい思いをする日雇いの雇用をしないでやっていけるようになっている。ついでに、ヴャトカ県エラブガ郡の賃労働にかんする情報をあげておこう（富裕な農民層は、ここでは中位の農民層とひとからげにされている）。〔第二三表〕

各日雇いが一ヵ月（二八日）ずつはたらくと仮定すると、日雇いの数は定期雇労働者の数の三倍いることになる。ヴャトカ県でもまた、諸グループのあいだには、労働者の雇用についても土地の貸借についても、すでにわれわれにおなじみの関係が見られることを、ついでに指摘しておこう。

ペルミ県の統計家たちがあげている、土地の施肥にかんする戸別調査資料は、きわめて興味あるものである。つぎ

〔第 23 表〕

世帯主のグループ	農家 実数	農家 %	男女人口 %
馬をもたないもの	4,258	12.7	8.3
馬1頭をもつもの	12,851	38.2	33.3
馬数頭 〃	16,484	49.1	58.4
総数	33,593	100	100

に、その資料を加工した結果をあげよう。〔第二四表〕

このように、ここでもまたわれわれは、貧農と富農とでは経営の方式と様式に深い相違があるのを見る。そして、このような相違はどこにもあるにちがいない。なぜなら、富裕な農民層はどこでも農民の家畜の大部分をその手に集中していて、自分の労働を経営の改善に支出する可能性をより多くもっているからである。だから、もしわれわれが、たとえば、農民改革後の「農民層」は、同じときに、馬や家畜をもたない農

〔第 24 表〕

世帯主のグループ	一般に厩肥の投与をおこなう経営の%	農家（施肥をおこなう）1戸あたりの施肥量（厩肥車台数）
作付面積5デシャチーナ未満のもの	33.9	80
〃　5—10デシャチーナ　〃	66.2	116
〃　10—20　〃　〃	70.3	197
〃　20—50　〃　〃	76.9	358
〃　50デシャチーナ以上　〃	84.3	732
総数	51.7	176

家の一群をつくりだしもしたし、土地に施肥するようになって「農業文化を向上させ」もした（ヴェ・ヴェ氏がその著書『農民経済における進歩的潮流』一二三—一六〇ページ以下にくわしく書いているが）ことを知るならば、それは、この「進歩的潮流」というものがまったくもって農村ブルジョアジーの進歩を告知するにすぎないことを、まったく明白にわれわれにしめしている。それは、改良農具の分布にいっそうはっきり現われているが、この点については、やはりペルミ県の統計

〔第 25 表〕

世帯主のグループ	100 経営あたりの改良農具数	改良農具総数	改良農具の合計にたいする%
土地を耕さないもの	0.1	2	0.1
作付面積5デシャチーナ未満のもの	0.2	10	0.6
〃 5—10デシャチーナ 〃	1.8	60	3.7
〃 10—20 〃 〃	9.2	299	18.4
〃 20—50 〃 〃	50.4	948	58.3 }77.2
〃 50デシャチーナ以上 〃	180.2	309	18.9 }
総数	10.8	1,628	100

に資料がある。ただしこの資料は、この郡の農耕地区全体についてではなく、一二三、五七四戸の農家のうちの一五、〇七六戸をふくむ第三、第四、第五の地区だけについてあつめられたものである。改良農具は次のように登録されている——簸浄機一、〇四九、選別機二二五、脱穀機三五四、総計一、六二八。そのグループ別分布は次のとおりである。〔第二五表〕

改良農具を「すべての」農民がつかっているかのようにいうヴェ・ヴェ氏の「ナロードニキ的」命題にたいする、もう一つの例証である！

「営業」にかんする資料によって、われわれはこんどは「営業」の二つの基本的な型を、すなわち、(一)農村ブルジョアジーへの農民の転化（商工業施設の所有）と、(二)農村プロレタリアートへの農民の転化（労働力の販売、いわゆる「農業的営業」）とを告知する二つの型を、区別することができる。つぎにかかげるのは、これらの正反対の型の「営業者」のグループ別分布である。*〔第二六表〕

* 「農業的営業」もまた、前記の三つの地区についてしか、とりだされていない。商工業施設は全部で六九二ある。すなわち、水車式製粉所一三二、搾油所一六、樹脂およびタール製造所九七、「鍛冶工場その他」二八三、「売店、飲食店その他」一六四である。

この資料を、作付の分布および労働者の雇用にかんする資料と対比すると、農民層の分解が資本主義のための国内市場をつくりだすことが、またもやわれわれにわかる。

また、きわめて多種多様な型の職業が「営業」とか「賃仕事」とかいう名称のもとにひとからげにされるとき、「農業と営業との結合」が、（たとえば、ヴェ・ヴェ氏やニコライ—オン氏におけるように）なにかそれ自身同等な、

〔第 26 表〕

世帯主のグループ	経営主100人あたりの商工業施設数	グループ別の商工業施設の分布，総数にたいする%		農業的営業をもつ経営の%
土地を耕さないもの	0.5	1.7		52.3
作付面積5デシャチーナ未満のもの	1.4	14.3		26.4
〃　5—10デシャチーナ　〃	2.4	22.1		5.0
〃　10—20　〃　〃	4.5	34.3	61.9	1.4
〃　20—50　〃　〃	7.2	23.1		0.3
〃　50デシャチーナ以上　〃	18.0	4.5		—
総数	2.9	100		16.2

同質なもの、そして資本主義を排除するものとして描かれるとき、どんなにひどく現実がゆがめられるかということも、われわれは知るのである。

終りに、エカテリンブルグ郡の資料も同種のものであることを、指摘しておこう。この郡の農家五九、七〇九戸のうちから、土地をもたないもの（一四、六〇一戸）、採草地だけをもつもの（一五、六七九戸）、分与地全部を放棄しているもの（一、六一二戸）を除くと、残りの二七、八一七戸の農家について以下のような資料が得られる。二万戸の作付をしない農家と作付の少ない（五デシャチーナ未満の）農家は、一二万四〇〇〇デシャチーナの作付面積のうちわずか四万一〇〇〇デシャチーナ、すなわち三分の一以下しかもっていない。反対に、二、八五九戸の富裕な農家（一〇デシャチーナ以上を作付する）は、四九、七五一デシャチーナを作付し、全部で六万七〇〇〇デシャチーナある借地（借りいれられた農民の土地五万五〇〇〇デシャチーナのうちの四万七〇〇〇デシャチーナをふくむ）のうち五万三〇〇〇デシャチーナをもっている。「営業」の、ならびに雇農をもつ農家の、二つの対立する型の分布は、エカテリンブルグ郡でも、クラスノウフィムスク郡における分解のこれらの標識の分布とまったく同じなのである。

五　オリョール県にかんする
ゼムストヴォ統計資料

われわれの手もとには、この県のエレッツ郡とトルブチェフスク郡にかんする二つの統計集があるが、*それらは農家を役馬の数によって分類している。

* 『オリョール県統計報告集』、第二巻、モスクワ、一八八七

購入地	借地農家	借　地	貸出地	総土地用益		家畜頭数（大家畜に換算）	
%				%	1戸あたり	1戸あたり頭数	家畜総数の%
3.1	11.2	1.5	85.8	4.0	1.7	0.5	3.8
7.2	46.9	14.1	10.0	25.8	7.5	2.3	23.7
40.5	77.4	50.4	3.0	49.3	13.3	4.6	51.7
49.2	90.2	34.0	1.2	20.9	28.4	9.3	20.8
100	52.8	100	100	100	9.8	3.2	100

年、エレッ郡、および第三巻、オリョール、一八八七年、トルプチェフスク郡。後者の郡については、資料のなかに都市近郊の共同体はふくまれていない。借地の資料では、われわれは分与地の借地と分与地以外の借地とをあわせた総数をとる。貸出地の面積は、分与地を全部貸しだしている農家の数によって、近似値的に算定した。こうして得られた数字を基礎にして、各グループの土地用益も算定されている（分与地＋購入地＋借地－貸出地）。

この二つの郡をいっしょにして、グループ別の全般的資料をかかげよう。〔第二七表〕

この表からわかるように、諸グループのあいだの一般的関係は、ここでもまた、われわれがさきに見たところと同じである（富農による購入地および借地の集中、貧農から富農への土地の移動、その他）。また、諸グループのあいだの関係は、賃労働についても、「営業」についても、経済における「進歩的潮流」についても、やはりまったく同じである。〔第二八表〕

以上のように、オリョール県でも、われわれは農民層が二つの対極的な型に分解しているのを見る。すなわち、一方では農村プロレタリアートに（土地の放棄と労働力の販売）、他方では農民ブルジョアジーに（土地の購入、いちじるしい規模での借地、とりわけ分与地の借地、経営の改善、この表ではぬけているが雇農や日雇いの雇用、農業への商工業企業の結合）、である。だが、農民の農業経営の規模は、ここでは一般に、さきにあげたいくつかの場合よりもはるかに小さい。大きな作付をする者の数は比較にならないほど少なく、だから農民層の分解は、この二つの郡について判断すると、より弱いように見える。われわれが「見える」というのは、つぎのような根拠によってである。第一に、もしわれわれがここで、「農民層」ははるかに急速に農村プロレタリアートに転化しつつあって、ほとんど

〔第 27 表〕

世帯主のグループ	家族（％）	男女人口（％）	1戸あたりの分与地（デシャチーナ）	分与地
馬をもたないもの	22.9	15.6	5.5	14.5
馬1頭をもつもの	33.5	29.4	6.7	28.1
馬2—3頭 〃	36.4	42.6	9.6	43.8
馬4頭以上 〃	7.2	12.4	15.2	13.6
総数	100	100	8.6	100

目だたない程度のグループの農村ブルジョアしか分離させていないのを見うけるとしても、しかし他方ではわれわれはすでに、農村のこの後者の極がとくに顕著になりつつあるという逆の例をも見てきたからである。第二に、ここでは農耕農民（われわれはこの章ではまさに農耕農民に問題をかぎっている）の分解が、とくに発展している「営業」（家族の四〇％）によってぼかされている。この「営業者」のなかには、ここでもまた、多数を占める賃金労働者とならんで、少数の商人、買占

〔第 28 表〕

世帯主のグループ	賃金労働者をもつ経営（％）	営業をもつ経営（％）	100経営あたりの商工業施設	改良農具（エレツ郡）	
				100経営あたりの数	総数の％
馬をもたないもの	0.2	59.6	0.7	0.01	0.1
馬1頭をもつもの	0.8	37.4	1.1	0.2	3.8
馬2—3頭 〃	4.9	32.2	2.6	3.5	42.7
馬4頭以上 〃	19.4	30.4	11.2	36.0	53.4
総数	3.5	39.9	2.3	2.2	100

人、企業家、経営主その他がふくまれている。第三に、ここでは農民層の分解が、この地方の農業の、最も強く市場と結びついている側面にかんする資料がないため、ぼかされている。ここでは商業的、市場的農業の発展は、穀物販売のための作付拡大にはむかわず、大麻の生産にむかっている。ここでは商取引の最も多量のものがこの生産物と関連しているのであるが、統計集にある諸表の資料は、さまざまなグループの農業のほかならぬこの側面を取りだしていない。ところが、「大麻畑は

農民たちに主要な収入」（すなわち貨幣収入。トルブチェフスク郡統計集、村落別記述の五ページ、その他多くの箇所）「をあたえており」、「農民のおもな注意は大麻の栽培にむけられている。……厩肥は全部……大麻畑の施肥につかわれている」（前掲書、八七ページ）。借金はいたるところで「大麻を担保に」なされ、大麻で債務が弁済されている（前掲書、随所）。大麻畑の施肥のために、富裕な農民は貧農から厩肥を買いいれている（オリョール郡統計集、第八巻、オリョール、一八九五年、一〇五ページ）。大麻畑は自分の共同体や他の共同体のなかで貸借されている（前掲書、二六〇ページ）。大麻の加工をやっているのは「工業施設」の一部であって、それの集中についてはさきに述べた。この地方の農業のほかならぬ主要な商業的生産物についての情報のないような分解の描写が、どれほど不完全なものであるかは、明らかである。*

＊　オリョール郡統計集の編者のつたえるところ（第五七表）によると、大家畜一頭からとれる厩肥は、富裕な農民にあっては資力のない農民のほとんど二倍である（一戸あたりの家畜七・四頭の場合には一頭あたり三九一プードであるのにたいして、一戸あたりの家畜二・八頭の場合には一頭あたり二〇八プードである）。しかもこの結論は、分解の実際の深さをやわらげる分与地別分類のもとで得られたものである）。そうなるのは、貧農が藁や厩肥を燃料にもちいたり、それを売ったり、等々しなければならないからである。したがって、家畜一頭からとれる厩肥の「標準」量（四〇〇プード）を達成できるのは、農民ブルジョアジーだけである。ヴェ・ヴェ氏は、これについてもまた（馬の喪失について論じるときのように）、家畜の数と厩肥の量との「正常な関係の回復」を論ずるかもしれない。

六　ヴォロネジ県にかんする　ゼムストヴォ統計資料

ヴォロネジ県の統計集は、報告がとくに充実していることと分類が豊富であることを特色としている。分与地によるありきたりの分類のほかに、いくつかの郡については、役畜による分類、働き手による分類（家族労働力による）、営業による分類（営業に従事しないもの、営業に従事するもの――〈a〉農業的営業、〈b〉混合的営業、〈c〉商工業的営業）、雇農による分類（雇農としてやとわれるもののいる経営、雇農をやといもせず、雇農としてやとわれるものもいない経営、雇農をやとう経営）がなされている。この最後の分類は大多数の郡についてなされているので、一見したところ、農民層の分解の研究にはこの分類はきわめて適していると思われるかもしれない。しかし実際には

そうではないのである。すなわち、雇農を出している経営のグループはけっして農村プロレタリアート全体を包括していない。なぜなら、このグループには、日雇い、雑役夫、工場労働者、建築および土木労働者、召使等々を出している経営がはいっていないからである。雇農は、「農民層」が提供する賃金労働者の一部をなすにすぎない。雇農をやとう経営のグループもまた同様にきわめて不完全である。なぜなら、日雇いをやとう経営がそれにはいっていないからである。中間のグループ（雇農を出しもしないし、雇いもしないもの）は、馬をもたない数千の農家と多数の馬をもつ数千の農家をいっしょにし、土地を借りいれる農家と貸しだす農家をいっしょにし、農耕者と非農耕者をいっしょにし、数千の賃金労働者と少数の経営主をいっしょくたにする、等々して、各郡について数万の家族をいっしょくたにしている。中間のグループ全体の総「平均」は、たとえば、土地をもたない農家または一戸あたり三—四デシャチーナ（分与地と購入地をあわせて）をもつ農家と、一五とか五〇デシャチーナ以上の分与地をもち、さらに数十、数百デシャチーナの土地を自分の所有として買いたしている農家とをいっしょに合算することによって（ボブロフ郡統計集、三三六ページ、第一四八欄。ノヴォホピョールスク郡統計集、二二二ページ）、また、一家族あたりの家畜総頭数が〇・八—二・七頭の農家と、一二—二一頭の農家を合算することによって（上掲書）、得られるのである。もちろん、このような「平均」によっては農民層の分解は描けないのであって、われわれは、農業経営の規模別分類に最も近いものとして、役畜頭数別の分類をとらなければならない。われわれの手もとには、そういう分類をした統計集が四つある（ゼムリャンスク郡、ザドンスク郡、ニジネデヴィツク郡、コロトヤク郡）。そのなかからわれわれはザドンスク郡をえらぶべきである。というのは、その他の郡については購入地と貸出地の報告がグループごとにあたえられていないからである。あとでわれわれは、これら四郡全部についての総括的資料をあげるが、読者は、その資料からもまったく同じ結論が得られることを見るであろう。つぎにかかげるのは、ザドンスク郡（農家数一五、七〇四戸、男女人口一〇六、二八八人、分与地一三五、六五六デシャチーナ、購入地二、八八二デシャチーナ、借地二四、〇四六デシャチーナ、貸出地六、四八二デシャチーナ）の諸グループにかんする全般的資料である。〔第二九表〕

諸グループのあいだの関係は、ここでも、前出の県や郡の場合と同じである（購入地と借地の集中、分与地を貸しだす資力のない農民から、それを借りいれる富裕な農民への分与地の移動、その他）。しかし、富裕な農民層の重要

土地の%			総土地用益		耕地合計		1戸あたり家畜総頭数
購入地	借地	貸出地	1戸あたり	%	1戸あたり	%	
2.0	1.5	36.9	4.7	11.2	1.4	8.9	0.6
14.3	19.5	41.9	8.2	32.8	3.4	35.1	2.5
35.9	54.0	19.8	14.4	45.4	5.8	47.0	5.2
47.8	25.0	1.4	33.2	10.6	11.1	9.0	11.3
100	100	100	10.1	100	4.0	100	3.2

さは、ここでは他とは比較にならないほど弱いことがわかる。農民の農業経営の規模がきわめて小さいので、この地方の農民は農耕者ではなく、「営業者」に属しているのではなかろうか、という疑問さえおのずから出てくる。つぎに「営業」にかんする資料を、まずはじめにそのグループ別分布にかんする資料を、かかげよう。〔第三〇表〕

改良農具と、二つの対立する型の「営業」(労働力の販売と商工業企業活動)との分布は、ここでもまた、さきに見た資料におけると同じである。「営業」をもつ経営のパーセントがきわめて大きいこと、穀物を売った経営よりも買った経営のほうが多いこと、農業からの貨幣収入よりも「営業」からの貨幣収入のほうが多いこと*——これらすべてのことは、この郡を農業的というよりはむしろ「営業的」な郡とみなすべき根拠をあたえる。しかし、この営業とはどんなものなのかをみよう。『ゼムリャンスク、ザドンスク、コロトヤクおよびニジネデヴィツクの諸郡における農民の土地所有にかんする価格査定報告集』(ヴォロネジ、一八八九年)には、地元での「営業者」と出稼ぎの「営業者」のすべての職業の一覧表(全部で二二二の職業)がのっており、それらの職業の分与地別諸グループへの分布と、それぞれの職業での稼ぎ高がしめされている。この一覧表から農民の「営業」の圧倒的大多数は賃労働であることがわかる。ザドンスク郡における二四、一三四人の「営業者」のうち、一四、一三五人は雇農、荷馬車ひき、牧夫、雑役夫であり、一、八一三人は建築労働者、二九八人は都市、工場その他の労働者、四四六人は家事奉公人、三〇一人は乞食その他である。いいかえれば、「営業者」の圧倒的大多数は農村プロレタリアートに属する人々であり、農村企業家や工業企業家に自分の労働力を売る、分与地をもつ賃金労働者なのである。** このように、ある県またはある郡における農民

〔第 29 表〕

世帯主のグループ	農家戸数の%	1戸あたり男女人口	男女人口の%	1戸あたり分与地（デシャチーナ）	分与地
馬をもたないもの	24.5	4.5	16.3	5.2	14.7
馬1頭をもつもの	40.5	6.1	36.3	7.7	36.1
馬2—3頭　〃	31.8	8.7	40.9	11.6	42.6
馬4頭以上　〃	3.2	13.6	6.5	17.1	6.6
総数	100	6.8	100	8.6	100

の種々のグループのあいだの関係をとりあげてみると、われわれはいたるところで、農民が比較的大規模な作付をおこなっている、土地の多いステップ地帯の諸県においても、農民「経営」の規模が零細な、きわめて土地の少ない地方においても、分解の典型的な諸特徴を見るのである。土地関係および農業経営上の諸条件がきわめて大きく相違しているにもかかわらず、下級の農民グループにたいする上級の農民グループの関係は、どこでも同一である。種々の地方を比較すると、ある地方

〔第 30 表〕

世帯主のグループ	改良農具		経営の%		100経営あたり	経営の%			貨幣所得の%	
	100経営あたり	総数にたいする%	雇農をやとうもの	雇農を出すもの	商工業施設	「営業」をもつもの	穀物を売ったもの	穀物を買ったもの	「営業」からの	農産物販売からの
馬をもたないもの	—	—	0.2	29.9	1.7	94.4	7.3	70.5	87.1	10.5
馬1頭をもつもの	0.06	2.1	1.1	15.8	2.5	89.6	31.2	55.1	70.2	23.5
馬2—3頭　〃	1.6	43.7	7.7	11.0	6.4	86.7	52.5	28.7	60.0	35.2
馬4頭以上　〃	23.0	54.2	28.1	5.3	30.0	71.4	60.0	8.1	46.1	51.5
総数	1.2	100	3.8	17.4	4.5	90.5	33.2	48.9	66.0	29.0

では農民のなかからの農村企業家の形成がとくにくっきり現われているが、他の地方では農村プロレタリアートの形成がとくにくっきりと現われている。いうまでもなく、ロシアでは、他のあらゆる資本主義国と同様に、分解過程の後者の側面が、前者の側面よりも比較にならないほど多数の小農耕者を（そしておそらくより多数の地方を）とらえている。

＊ 人数の少ない上級の農民グループでは、われわれは逆のことを、すな

わち、穀物の販売が購入よりも多いこと、貨幣収入が主として土地から得られること、雇農をやとい、改良農具をそなえ、商工業施設をもつ経営主のパーセントが高いことを、見る。農民ブルジョアジーのすべての典型的特徴がここでもはっきり現われており、(彼らの数は少ないとはいえ)、商業的および資本主義的農業の成長という形で現われている。

** ゼムストヴォ統計における「営業」という概念についてさきに述べたことへの補足として、この地方の農民の営業にかんするもっとくわしい資料をあげよう。ゼムストヴォ統計家たちは、それを六つの部類に分けた。(一)農業的営業(四つの郡における「営業者」総数九二、八九九人のうちの五九、二七七人)。しかし圧倒的大多数をなす賃金労働者のなかに、ここでは経営主(瓜栽培者、菜園主、養蜂家、おそらくは馭者の一部、その他)も入れられている。(二)手工業者とクスターリ(二〇、七八四人)。ほんとうの手工業者(消費者の注文によって仕事をする)のなかに、ここでは非常に多数の賃金労働者、とくに建築労働者その他が入れられている。後者をわれわれは八、〇〇〇人以上と算定した(おそらくは、製パン業者などの経営主もはいっていよう)。(三)召使――一、七三七人。(四)商人と産業経営主――七、一〇四人。すでに述べたように、「営業者」の一般的集団からこの部類を区別することは、とくに必要である。(五)自由職業――一、八八一人。このなかには一、〇九〇人の乞食がはいっており、そのほかに浮浪人、憲兵、売春婦、巡査などもいる。(六)都市、工場その他の労働者――一、一〇六人。地元での営業者は七一、一二二人で、出稼ぎの営業者は二一、七七七人である。また男は八五、二五五人で、女は七、六三四人である。稼ぎ高はきわめてまちまちである。たとえばザドンスク郡では、八、五八〇人の雑役夫が二三四、六七七ルーブリを稼いでいるのにたいして、六四七人の商人および産業経営主は七一、七九九ルーブリを稼いでいる。性格がきわめてまちまちなこれらすべての「営業」をひとからげにするならどのような混乱がおこるかは、想像できる。だがわがゼムストヴォ統計家たちやわがナロードニキたちは、通常そうしているのである。

七 ニジェゴロド県にかんするゼムストヴォ統計資料

ニジェゴロド県[六七]の三つの郡――クニャギニノ、マカリヨーフおよびヴァシーリスクの三郡――については、ゼムストヴォ統計の戸別調査資料はグループ別の一表にまとめられているが、この表は農民経営(分与地の経営だけ、それも自分の村に住んでいる農民の経営だけ)を、役畜頭数別に五つのグループに分けている(『ニジェゴロド県土地価格査定資料。経済の部』、第四、第九および第一二分冊、ニジニ-ノヴゴロド、一八八八年、一八八九年および一八九〇年)。

この三郡をいっしょにすると、経営グループについて次

の資料が得られる（上記の三郡でこの資料は農家五二、二六〇戸、男女人口二九四、七九八人を包括している。分与地は四三三、五九三デシャチーナ、購入地は五一、九六〇デシャチーナ、借地は、分与地も分与地外の土地も、耕地も採草地も、いっさいの土地の借入れをあわせて、八六、〇〇七デシャチーナ、貸出地は一九、二七四デシャチーナである）。〔第三一表〕

したがって、ここでもわれわれは、富裕な農民層が、分与地をより多く確保しているにもかかわらず（上級の諸グループが分与地全体のなかで占めるパーセントは、それらが人口全体のなかで占めるパーセントよりも高い）、購入地を集中し（農家戸数の九・六％の富裕な農家が購入地の四六・二％をもっているのにたいして、農家戸数の三分の二を占める無産の農民層には、購入地全体の四分の一以下しかない）、借地も集中し、貧農が貸しだす分与地をも「あつめている」のを見る。そして、これらすべてのことの結果、「農民」が利用している土地の実際の分布は、分与地の分布とはまったく似ても似つかないものになっている。馬をもたない者が実際に手にしている土地の大きさは、法律が彼らに保障している分与地の大きさよりも小さい。馬一頭をもつものと二頭をもつものは、その土地保有をわずか一〇―三〇％ふやしているにすぎない（八・一デシャチーナから九・四デシャチーナへ、一〇・五デシャチーナから一三・八デシャチーナへ）のにたいして、富裕な農民はその土地保有を一倍半―二倍にふやしている。分与地の大きさの点でのグループのあいだの差はとるにたりないものであったのに、農業経営の実際の規模の点でのグループのあいだの差は、さきにあげた家畜にかんする資料からも、つぎにあげる作付にかんする資料〔第三二表〕からもわかるように、きわめて大きなものである。

作付規模の点でのグループのあいだの差は、それらのグループの実際の土地保有や土地用益の規模の点での差――分与地の規模の点での差についてはいうまでもなく――よりも大きい。* そのことはまたしても、分与地の土地所有による分類がまったく役にたたないことをわれわれにしめしており、分与地所有の「均等性」はいまではたんなる法律上の虚構に転化してしまったのである。表の他の欄は、「農業と営業との結合」が農民層のなかでどのようにおこなわれているかを、しめしている。すなわち、富裕な農民層は商業的および資本主義的農業を商工業企業と結合させている（雇農をもつ農家の高いパーセント）のにたいして、貧農は自分の労働力の販売（「出稼ぎ」）を、とるにたりない規模の作付と結合させており、つまり彼らは、分与地をもつ雇農や日雇いに転化しつつある。出稼ぎをする農家の

地	購入地	総数にたいする%		総土地用益		家畜総頭数	
総数にたいする%	総数にたいする%	借地	貸出地	1戸あたり（デシャチーナ）	総数にたいする%	1戸あたり頭数	総数にたいする%
18.6	5.7	3.3	81.7	4.4	13.1	0.6	7.2
36.6	18.8	25.1	12.4	9.4	34.1	2.4	33.7
28.5	29.3	38.5	3.8	13.8	30.2	4.3	34.9
11.6	22.7	21.2	1.2	21.0	14.8	6.2	16.5
4.7	23.5	11.9	0.9	34.6	7.8	9.0	7.7
100	100	100	100	10.3	100	2.7	100

パーセントに規則的な低下が見られないのは、ニジェゴロドの農民のこれらの「賃仕事」や「営業」がはなはだ多種多様であるためだということを、指摘しておこう。すなわち、農業労働者、雑役夫、建築および船舶労働者その他のほかに、かなり多数の「クスターリ」や、工業作業場の持主、商人、買占人などが、ここでは営業者のなかにはいっている。これほどさまざまな型の「営業者」を混ぜあわせれば、「賃仕事をする農家」についての資料の正しさがそこなわれるのは、当然である。**

* 馬をもたないもののグループの（一戸あたり）分与地の大きさを一〇〇とすると、より上級のグループの分与地の大きさは一五九、二〇六、二五九、三二一という数字であらわされる。各グループの実際の土地保有についての数字はそれぞれ一〇〇、二一四、三一四、四七七、七八六となり、各グループの作付規模については一〇〇、二三一、三七八、五六八、八七三となる。

** ニジェゴロドの農民の「営業」については、エム・プロトニコフの『ニジェゴロド県のクスターリ営業』（ニジニーノヴゴロド、一八九四年）の巻末の諸表、およびゼムストヴォ統計集、とくにゴルバートフ郡およびセミョーノフ郡のそれを参照。

いろいろの農民グループの農業経営における相違の問題については、ニジェゴロド県では「施肥が、耕地の生産性の程度を規定する最も主要な条件の一つとなっている」（クニャギニノ郡統計集、七九ページ）ことを、指摘しておこう。ライ麦の平均収量は、施肥量がふえるにしたがって規則的にふえている。すなわち、厩肥が分与地一〇〇デシャチーナあたり三〇〇—五〇〇車[三]だと、ライ麦の収量は一デシャチーナから四七・一メーラであるが、一、五〇〇車以上の場合には六二・七メーラである（前掲書、八四ペ

〔第 31 表〕

世帯主の群別	農家の%	1戸あたりの男女人口	男女人口の%	分与
				1戸あたり(デシャチーナ)
馬をもたないもの	30.4	4.1	22.2	5.1
馬1頭をもつもの	37.5	5.3	35.2	8.1
馬2頭　〃	22.5	6.9	27.4	10.5
馬3頭　〃	7.3	8.4	10.9	13.2
馬4頭以上　〃	2.3	10.2	4.3	16.4
総数	100	5.6	100	8.3

ージ)。だから、農業生産の規模の点でのグループのあいだの差異は、作付規模の点での差異よりもさらにいっそう大きいにちがいないこと、また、ニジェゴロドの統計家たちが、資力のない農民層と富裕な農民層の耕地のそれぞれの収穫率ではなく、農民の耕地一般の収穫率の問題を研究したのは大きな誤りだったことは、明らかである。

〔第 32 表〕

世帯主の群別	1戸あたり作付面積(デシャチーナ)	総作付面積にたいする%	雇農をもつ農家の%	商工業施設をもつ経営主の%	出稼ぎをする農家の%
馬をもたないもの	1.9	11.4	0.8	1.4	54.4
馬1頭をもつもの	4.4	32.9	1.2	2.9	21.8
馬2頭　〃	7.2	32.4	3.9	7.4	21.4
馬3頭　〃	10.8	15.6	8.4	15.3	21.4
馬4頭以上　〃	16.6	7.7	17.6	25.1	23.0
総数	5.0	100	2.6	5.6	31.6

* クニャギニノ郡だけについてのもの。

八 他の諸県にかんするゼムストヴォ統計資料の概観

読者がすでに気づかれたように、われわれは農民層の分解を研究するにあたって、もしゼムストヴォ統計の戸別調査が多少とも注目に値する諸地域を包含しているなら、もしそれらの調査が分解の最重要の諸標識についての十分にくわしい情報を提供しているなら、またもし（これがとくに重要なのだが）それらの調査が、農民をその経済的資力によって種々のグループに区別できるようにつくられているなら、もっぱらそれらの調査を利用している。これらの条件をみたしていて、われわれとして利用することができたゼムストヴォ統計の材料は、七つの県にかんする上記の資料でつきている。完全を期するために、こんどは、同じ種類の（すなわち、全面的な戸別調査にもとづく）、それほど完全ではないその他の資料をも、簡単にしめそう。

ノヴゴロド県のデミャンスク郡については、馬の頭数による農民経営の分類表がある（『ノヴゴロド県土地価格査定資料、デミャンスク郡』、ノヴゴロド、一八八八年）。ここには土地の借入れと貸出しについての（面積の）情報はない。しかし、ここにある資料も、この県における富裕な農民層と無産の農民層のあいだの関係が、他の諸県とくらべてまったく同一であることを、証明している。ここでもまた、たとえば、最下級のグループから最上級のグループへ（馬をもたないグループから三頭以上をもつグループへ）移るにつれて——多くの馬をもつ農民は分与地を平均以上に確保しているにもかかわらず——、購入地と借地をもつ経営のパーセントが大きくなっている。三頭以上の馬をもつ一〇・七％の農家は、全人口の一六・一％を占めているが、分与地全体の一八・三％、購入地の四三・四％、借地の二六・二％（借地におけるライ麦と燕麦の作付の規模によって判断してよいならば）、「営業用建物」の総数の二九・四％をもっている。ところが、馬をもたない、および馬一頭をもつ五一・三％の農家は、全人口の四〇・一％を占めているが、分与地の三三・二％、購入地の一三・八％、借地の二〇・八％（上記の意味で）、「営業用建物」の二八・八％しかもっていない。いいかえれば、ここでも富裕な農民層は土地を「よせあつめ」、農業と商工業的「営業」とを結合させているのにたいして、無産の農民層は土地を放棄して、賃金労働者に転化しつつある（「営業をもつ人々」のパーセントは、最下級のグループから最上級のグループへ移るにつれて、馬をもたないものの二六・六％から三頭以上の馬をもつものの七・八％に、低下してい

る)。これらの資料は不完全なので、われわれは、のちに農民層の分解にかんする資料を総括するさいに、これらの資料をふくめるわけにはいかない。

それと同じ理由で、われわれはチェルニーゴフ県コゼレーツ郡の一部についての資料もふくめない(『チェルニーゴフ県ゼムストヴォ参事会付属統計部のあつめた土地価格査定資料』、第五巻、チェルニーゴフ、一八八二年。この郡の黒土地帯の八、七一七戸にかんする資料は、役畜頭数によって分類されている)。グループのあいだの関係は、ここでもまたまったく同様である。すなわち、役畜をもたない三六・八%の農家は、人口の二八・八%を占め、自己所有地と分与地の二一%、借地の七%をもっているにすぎないが、そのかわり、この八、七一七戸が貸しだしている土地全体の六三%を占めている。四頭以上の役畜をもつ一四・三%の農家は、人口の一七・三%を占め、自己所有地と分与地の三三・四%、借地の三一・一%をもっているが、貸出地についてはわずか七%である。残念なことに、その他の農家(役畜一—三頭をもつもの)はより小さなグループに細分されていない。

『イルクーツク県およびエニセイ県の農村住民の土地用益と経済的生活状態の調査資料』には、エニセイ県の四つの管区の農民と開拓民の経営についての、きわめて興味深い(役馬の数による)グループ別の表がある(第三巻、イルクーツク、一八九三年、七三〇ページ以下)。開拓民にたいする富裕なシベリア人の関係が(この関係のなかには、最も熱烈なナロードニキといえども、かの名だたる共同体精神を探しもとめようとはあえてしないであろう!)、わが富裕な共同体農民の、馬をもたない、および馬一頭しかもたない、彼らの「仲間」にたいする関係と、本質的にはまったく同一であることを見るのは、きわめて興味深いことである。開拓民と昔から在住の農民を結びつけると(前者は後者のための労働力として役だつのだから、この結合は必要である)、上級と下級のグループのおなじみの特徴が得られる。三九・四%の下級の諸グループの農家(馬をもたないもの、馬一頭および二頭をもつもの)は、人口の二四%を占めているが、全耕地の六・二%と家畜総頭数の七・一%しかもっていない。ところが、馬五頭以上をもつ三六・四%の農家は、人口の五一・二%を占めて、耕地の七三%と家畜総頭数の七四・五%をもっている。後者のグループ(馬五—九頭をもつものと一〇頭以上をもつもの)は、一戸あたり一五—三六デシャチーナの耕地をもち、広範囲に賃労働にたよっている(経営の三〇—七〇%が賃金労働者をやとっている)。ところが、下級の三つのグループは、一戸あたり〇—〇・二—三—五デシャチーナの耕地

をもち、(経営の二〇—三五—五九%が) 労働者を送りだしていいる。土地の借入れと貸出しにかんする資料は、(富裕な農民による借地の集中という) 通則からの、われわれが見うけた唯一の例外をしめしている。だがこれは、通則を確証する例外である。問題はこうである。すなわち、シベリアには、この通則をつくりだしたあの条件そのものがなく、義務的で「均等な」分与地がなく、形成された私的土地所有がない。富裕な農民は、土地を買いも借りもせず、土地を占拠するのである(少なくとも、いままではそうであった)。土地の貸借は、むしろ隣人間の交換という性格をおびており、そのため借入れと貸出しにかんするグループ別資料は、なんらの合法則性もしめさないのである。*

* 「土地の貸借の事実についてこの地方であつめられた資料は、特別の検討に値しないと認められた。というのは、この現象そのものが萌芽的な形でしか存在しないからである。貸借の個々の事例はまれにしかなく、まったくの偶然事であって、エニセイ県の経済生活にたいしてまだなんらの影響をおよぼしていない」(『資料』、第四巻、第一冊、序論五ページ)。エニセイ県の昔からの在住農民のもつ熟畑四二四、六二四デシャチーナのうち、四一七、〇八六デシャチーナは、「父祖伝来の占拠」地である。借地(二、六八六デシャチーナ)は貸出地(二、六三九デシャチーナ)とほぼひとしく、占拠地の総計の一%にもあたらない。

ポルタワ県の三つの郡については、われわれは作付の分布を近似的に算定することができる(統計集で幾デシャチーナ「以上—未満」とされているいろいろな作付規模の経営数を知り、おのおのの小部類の農家数を、しめされている両限の中位の値の作付面積に乗ずることによって)。三六二、二九八デシャチーナを作付する七六、〇三二戸(すべてが開拓民であって、町人はいない)について、次の資料が得られる。三一、〇〇一戸(四〇・八%)は、作付をしないか、または一戸あたり三デシャチーナ未満しか作付せず、その作付面積は全部で三六、〇四〇デシャチーナ(九・九%)にすぎない。一九、〇一七戸(二五%)は、一戸あたり六デシャチーナ以上を作付しており、その作付面積は二〇九、一九五デシャチーナ(五七・八%)である(『ポルタワ県経済統計集』、コンスタンチノグラード、ホロールおよびピリャーチンの諸郡を参照)。作付規模は一般により小さいとはいえ、作付の分布は、われわれがタヴリーダ県で見たのと非常によく似ている。もちろん、これほどまでに不均等な分布が可能なのは、購入地と借地が少数者の手中に集中されている場合だけである。われわれは、そのことについての完全な資料をもっていない。というのは、統計集には経済的資力による農家の分類がないからである。そこでわれわれは、コンスタンチノグラード郡にか

〔第 33 表〕

	相対数 当事者数（％）	相対数 借地面積（％）	当事者1人あたりの借地（デシャチーナ）	借地のうち又貸しされる土地の％
小借地（10デシャチーナ未満）	86.0	35.5	3.7	6.6
中借地（10—30デシャチーナ）	8.3	16.6	17.5	3.9
大借地（30デシャチーナ以上）	5.7	47.9	74.8	12.9
総数	100	100	8.6	9.3

んする次の資料にとどめなければならない。農村の諸身分の経営にかんする章（第二章第五節「農業」）で、統計集の編者は次のような事実をつたえている。「一般に、借地を三つの部類に、すなわち、関係者一人あたりの借地を（一）一〇デシャチーナ未満、（二）一〇デシャチーナ以上三〇デシャチーナ未満、（三）三〇デシャチーナ以上に区分すると、これらの部類のそれぞれについて次の資料が得られる」*。〔第三三表〕

＊ 統計集、一四二ページ。

注釈は不要である。

カルーガ県については、八、六二六戸（県の農家総数の約二〇分の一）における穀物の作付にかんするき

〔第 34 表〕

	作付規模別の農家群 秋播穀物の作付（メーラ） 作付しないもの	15未満	15—30	30—45	45—60	60以上	総計
農家の％	7.4	30.8	40.2	13.3	5.3	3.0	100
男女人口の％	3.3	25.4	40.7	17.2	8.1	5.3	100
作付面積の％	—	15.0	39.9	22.2	12.3	10.6	100
役馬総頭数の％	0.1	21.6	41.7	19.8	9.6	7.2	100
作付からの総所得の％	—	16.7	40.2	22.1	21.0		100
1戸あたりの作付面積（デシャチーナ）	—	2.0	4.2	7.2	9.7	14.1	—

わめて断片的で不完全な次の資料があるだけである*。〔第三四表〕

＊『カルーガ県一八九六年度統計概観』、カルーガ、一八九七年、付録の四三ページ以下、八三ページ、一一三ページ。

すなわち、人口の三〇・六％を占める二一・六％の農家が、役馬の三六・六％、作付の四五・

一%と、作付からの総所得の四三・一%をもっている。明らかに、これらの数字も、富裕な農民層による購入地と借地の集中をものがたっている。

トヴェーリ県については、統計集にある情報が豊富であるにもかかわらず、戸別調査の整理がきわめて不完全である。経済的資力による農家の分類がない。この欠陥を、ヴィフリャーエフ氏は『トヴェーリ県統計報告集』（第一三巻第二冊、『農民経済』、トヴェーリ、一八九七年）のなかで利用して、農民層の「分化」を否定し、「より大きな均等性」への志向を見てとり、「人民的生産」（三一二ページ）と「現物経済」への賛歌をうたっている。ヴィフリャーエフ氏は、農民の諸グループにかんする正確な資料をなにひとつ引用しないばかりか、分解が共同体の内部で起こっており、だから、「分化」について論じてもっぱら共同体別あるいは郷別の分類をとりあげるのはまったくこっけいだという、初歩的な真理を理解することさえしないで、「分化」についてのきわめて危険で根拠のない判断にふけっているのである。*

* 珍品として、一つの見本をあげておこう。ヴィフリャーエフ氏の「一般的結論」はこういっている――「トヴェーリ県の農民による土地の購入は、土地所有の規模を均等化する傾向をもっている」（一一ページ）。証拠は？ もし共同体の諸グループを分与地の規模別にとりあげると、分与地の少ない共同体では購入地をもつ農家のパーセントはより大きくなるだろう。――だが、分与地の少ない共同体の富裕な成員が土地を買っていることについては、ヴィフリャーエフ氏は考えおよびもしないのだ！ もちろん、熱烈なナロードニキのこのような「結論」を検討する必要はない。まして、ヴィフリャーエフ氏の大胆さは彼と同じ陣営の経済学者たちをさえ当惑させたのだから、なおさらである。カルィシェフ氏は『ルースコエ・ボガーットヴォ』[七二]（一八九八年、第八号）で、ヴィフリャーエフ氏が「現時点においてわが国の経済に課せられている諸課題をよく理解している」ことに深い共感を表明しているものの、それでもやはり、ヴィフリャーエフ氏があまりにも「楽天家」であること、均等性への志向という彼の結論が「証拠に乏しい」こと、彼の資料が「なにものがたっておらず」、彼の結論が「根拠をもたない」ことを、認めないわけにはいかないのである。

九 農民層の分解にかんする、以上に検討したゼムストヴォ統計資料の総括

農民層の分解にかんする、以上にあげた資料をたがいに比較して総括するのに、われわれは、明らかに、絶対数をとってそれをグループ別に合計することはできない。そう

するには、各地方のすべてのグループについて完全な資料があり、分類方法が同一であることが、必要であろう。われわれが比較して対照できるのは、上級の諸グループと下級の諸グループとのあいだの関係（土地、家畜、農機具、等々の所有の点での）だけである。たとえば、一〇%の農家が作付の三〇%を占めているということによってあらわされる関係は、絶対数の相違を捨象しており、それゆえ任意の地方のこの種の関係のどれとでも比較するのに適している。だがそのような比較をするためには、他の地方でもやはり一〇%――それより多くも少なくもなく――の農家を取りわけなければならない。ところが、グループの大きさは、郡や県がちがえば同じでない。つまり、各地方について同一のパーセントの農家をとるためには、これらのグループを分割しなければならない。富裕な農民層として二〇%の農家を、資力のない農民層として五〇%の農家をとる、ということにしよう。すなわち、上級の諸グループから二〇%の農家の一グループを、下級の諸グループから五〇%の農家の一グループをつくってみよう。このやりかたを例で説明しよう。下級から上級へ順次三〇%、二五%、二〇%、一五%、一〇%の農家（合計＝一〇〇%）という大きさの五つのグループがあると仮定する。下級のグループをつくるためには、第一グループと第二グループの五分の四とをとり（$30+\frac{25\times4}{5}=50\%$）、上級のグループをつくるためには、最後のグループと最後から二番目のグループの三分の二とをとる（$10+\frac{15\times2}{3}=20\%$）。そのさいもちろん、作付、家畜、農機具その他のパーセントも同様にして算定される。すなわち、さきにしめした農家のパーセントに対応する作付のパーセントが一五%、二〇%、二〇%、二一%、二四%（合計＝一〇〇%）だとすれば、二〇%の農家からなるわれわれの上級のグループの作付の割合は（$24+\frac{21\times2}{3}=$）38%となり、五〇%の農家からなるわれわれの下級のグループの作付の割合は（$15+\frac{20\times4}{5}=$）31%となる。グループをこのように分割しても、農民の上層と下層とのあいだの実際の関係をいささかも変えることにならないことは、明らかである。* このような分割が必要なのは、第一に、こうすることによってわれわれは、四―五―六―七などというさまざまなグループのかわりに、はっきりと規定された標識** をもつ三つの大きなグループを得ることになるからであり、第二に、このような方法によってはじめて、種々さまざまな条件をそなえた種々さまざまな地方における農民層の分解にかんする資料を比較することができるようになるからである。

* このようなやりかたは、ちょっとした誤差を許容する。その結果、分解は実際よりも軽微にあらわされる。すなわち、

上級のグループにつけくわえられるのは、すぐ下のグループの上層の人々ではなく、平均的な人々であり、下級のグループにつけくわえられるのは、すぐ上のグループの下層の人々ではなく、平均的な人々だからである。グループが大きければ大きいほど、また、グループの数が少なければ少ないほど、この誤差がそれだけ大きいことは、明白である。

** 次の節でわれわれは、われわれのとったグループの大きさが、一戸あたりの馬の頭数によって分けたロシア農民層全体のグループにきわめて近いものであることを、見るであろう。

グループの相互関係を判断するために、われわれは、分解の問題で最大の重要性をもつ次の資料をとりあげる。(一) 農家戸数、(二) 男女農民人口数、(三) 分与地の大きさ、(四) 購入地の大きさ、(五) 借地の大きさ、(六) 貸出地の大きさ、(七) グループの総土地保有または総土地用益 (分与地+購入地+借地−貸出地)、(八) 作付面積、(九) 役畜頭数、(一〇) 家畜総頭数、(一一) 雇農をもつ農家数、(一二) 賃仕事をもつ農家数 (賃労働すなわち労働力の販売が重きをなすような種類の「賃仕事」をできるだけ区別する)、(一三) 商工業施設の数、および (一四) 改良農具の数。傍点をうった資料 (「土地の貸出し」と「賃仕事」) は、消極的意義をもつものであり、経営の没落、農民の零落、農民の労働者への転化をしめす。それ以外のすべての資料は積極的意義をもつものであり、経営の拡大、農民の農村企業家への転化をしめす。

これらすべての資料によって、われわれは、各経営グループについて、ある県の一郡または数郡別の総計にたいするパーセントを算出し、つぎに (前記のやりかたによって)、上級の諸グループからの二〇%の農家と下級の諸グループからの五〇%の農家に土地、作付、家畜、等々がそれぞれ何パーセントあるかを算出する。*

* いまわれわれが問題にしているのは絶対数ではなく、農民層の上層と下層とのあいだの関係だけであることを、読者は忘れないでいただきたい。だから、いまわれわれがとりあげるのは、たとえば、雇農をもつ (または「賃仕事」をもつ) 農家数の、そのグループの農家数にたいするパーセントではなく、そのグループにおける雇農をもつ (または「賃仕事」をもつ) 農家の総数にたいするパーセントである。すなわち、いまわれわれが算出するのは、それぞれのグループがどれほど賃労働を利用しているか (あるいは労働力の販売にたよっているか) ということではなく、賃労働の使用という点での (あるいは「賃仕事」すなわち労働力の販売への参加という点での) 上級と下級のグループのあいだの関係だけである。

このようにしてつくられた表をつぎにかかげるが、この表は、七つの県の二一郡について、三、五二三、四一八人の

男女人口をもつ五五八、五七〇の農民経営にかんする資料を包括している。〔第三五表AおよびB〕

〔第三五表の〕A表およびB表への注

一　タヴリーダ県については、貸出地の情報はベルチャンスクとドニェプルの二郡だけにかんするものである。

二　同県については、改良農具とされているのは草刈機と穀物刈取機である。

三　サマラ県の二郡については、貸出地のパーセントのかわりに、分与地を貸しだして経営していない農家のパーセントをとっている。

四　オリョール県については、貸出地面積は（したがって土地用益総面積も）おおよその算定である。ヴォロネジ県の四郡については同じ。

五　オリョール県については、改良農具の情報はエレツ郡についてしかない。

六　ヴォロネジ県については、賃仕事をもつ農家数のかわりに、（ザドンスク、コロトヤクおよびニジネデヴィツクの三郡について）雇農を送りだしている農家数をとってある。

七　ヴォロネジ県については、改良農具の情報は、ゼムリャンスクとザドンスクの二郡についてしかない。

八　ニジェゴロド県については、「営業」一般をもつ農家のかわりに、出稼営業をする農家をとってある。

九　いくつかの郡については、商工業施設数のかわりに、商工業施設をもつ農家数をとらなければならなかった。

一〇　統計集のなかに「賃仕事」についていくつかの欄があるときには、賃労働すなわち労働力の販売を最も正確にあらわす「賃仕事」をとりだすようにつとめた。

一一　借地はできるだけそのすべてを、すなわち分与地も分与地外の土地も、耕地も採草地も、とりあげた。

一二　読者に次のことを思いだしてもらおう。——ノヴォウゼンスク郡についてはフートル農民とドイツ人を除外した。クラスノウフィムスク郡については郡の農耕地帯だけをとりあげた。エカテリンブルグ郡については土地をもたない農家と採草地しかもたない農家を除外した。トルプチェフスク郡については都市近郊の共同体を除外した。クニャギニノ郡については工業村ボリショーエ・ムラシキノを除外した、等々。これらの除外は、一部分はわれわれがしたことであるが、一部分は資料の性質のせいである。だから、明白に、実際には農民層の分解はわれわれの表と図表がしめすよりもはげしいにちがいない。

この総括表を図解して、種々さまざまな地方における農

つくられた20%の農家グループ

郡または郡グループのパーセント

土地				作付面積	家畜		商工業施設	雇農をもつ農家	改良農具
分与地	購入地	借地	用益総面積		役畜	家畜総頭数			
36.7	78.8	61.9	49.0	49.1	42.3	44.6	—	62.9	85.5
—	99	82	—	56	62	57	—	78.4	72.5
—	—	60.1	—	—	48.6	47.1	—	62.7	—
—	99	71	—	56	55.3	52.0	—	70.5	72.6
34.1	—	59	47	50.5	57.4	53.2	—	65.9	—
30	—	58.3	49.6	49.2	42.5	41.2	42.8	66.4	86.1
—	—	83.7	—	55.1	42.3	41.8	37.0	74.9	—
30	—	71	49.6	52.1	42.4	41.5	39.9	70.6	86.1
29.0	63.4	51.7	38.2	—	42.1	37.8	49.8	57.8	75.5
29.1	66.8	53.6	34.6	33.9	41.7	39.0	47.4	56.5	77.3
30.9		49.2	34.1	—	38	37.2	45.9	48.4	70.1
29.4	59.7	50.8	36.5	38.2	46.3	40.3	51.2	54.5	—

民の上級と下級のグループのあいだの関係がまったく同一であることを一目瞭然にするため、われわれは、この表の百分率資料を書きうつした次の図表（一二六ページと一二七ページのあいだの図表）を作成した。農家総数のパーセントを指定している欄から右方へは、経済的資力の積極的標識（土地保有の拡大、家畜頭数の増加など）をしめす線が走っており、左方へは、経済力の消極的標識（土地の貸出し、労働力の販売。これらの欄は特別の細線で影をつけてある）をしめす線が走っている。図表の上辺の横線から各実線の折線までの距離は、農民経営の総数のなかで富裕なグルー

〔第 35 表 A〕*　　上級の諸グループから

県	郡	図表中の線の番号	総数にたいする			
			貸出地	「賃仕事」をもつ農家	農家戸数	男女人口
タヴリーダ	ドニェプル，メリトーポリ，ベルヂャンスク…	1	9.7	12.6	20	27.0
サマラ	ノヴォウゼンスク………	—	0.7	—	20	28.4
	ニコラーエフスク………	—	0.3	4.1	20	29.7
	平　均………………	2	0.5	4.1	20	29
サラトフ	カムィシン…………	3	11.7	13.8	20	30.3
ペルミ	クラスノウフィムスク…	—	7.8	0.6	20	26.8
	エカテリンブルグ………	—	—	4.3	20	26.1
	平　均………………	4	7.8	2.4	20	26.4
オリョール	エレツ，トルブチェフスク………………	5	2.7	15.8	20	27.4
ヴォロネジ	ザドンスク…………	6	11.9	11.6	20	28.1
	ザドンスク，ゼムリャンスク，コロトヤク，ニジネデヴィツク………	—	12.5	12.6	20	28.1
ニジェゴロド	クニャギニノ，ヴァシーリスク，マカリョーフ………………	7	3.8	13.7	20	27.8

＊ 本表にたいする注は119ページを見よ。

プが占める割合をしめし、図表の下辺の横線から各点線の折線までの距離は、農民経営の総数のなかで資力のない農民グループが占める割合をしめしている。最後に、総括資料の一般的性格をいっそうはっきり描きだすために、われわれは「平均」線を書きいれた（それは、図表に書きこまれた百分率資料から算術平均を算出して、きめた。「平均」線は、他の線と区別するために、赤色にしてある）。この「平均」線は、いわば、現在のロシア農民層の典型的な分解をわれわれにしめしている。

さて、分解についての前出の（第一—七節）資料の総括をするために、この図

つくられた50%の農家グループ

郡または郡グループのパーセント

土地				作付面積	家畜		商工業施設	雇農をもつ農家	改良農具
分与地	購入地	借地	用益総面積		役畜	総頭数			
33.2	12.8	13.8	23.8	21.5	26.6	26	—	15.6	3.6
—	0.4	5.0	—	16.3	11.3	14.4	—	4.4	2.8
—	—	11.1	—	—	17.8	20.3	—	7.1	—
—	0.4	8	—	16.3	14.5	17.3	—	5.7	2.8
33	—	9.8	18.6	14.9	9.6	14.3	—	7.5	—
35	—	14.1	25.2	21	14.7	19.7	—	—	—
37.4	—	6.5	19.2	16.7	23.1	24	23.8	6.1	2
—	—	8.7	—	21.2	30.5	30.8	35.6	10.4	—
37.4	—	7.6	19.2	18.9	26.8	27.4	29.7	8.2	2
37.2	8.9	12.9	24.9	—	17.7	23	20.2	7.8	2.4
37.5	11	13.8	31.9	31	20	24.6	23.2	9.1	1.3
33.6		15.4	29.9	—	20.3	23.4	17.3	13.1	3.6
37.7	15.4	16.4	30.9	28.6	17.2	24.8	16.1	18.9	—

表の各欄を逐次考察しよう。

農家のパーセントをしめす欄から右へむかっての最初の欄は、上級のグループと下級のグループに帰属する人口の割合をあらわしている。われわれは、家族の構成はどこでも富裕な農民層にあっては平均より大きく、資力のない農民層にあっては平均より小さいことを見る。この事実の意義については、われわれはすでに述べた。ここで一つつけくわえることは、なにを比較するにも単位として農家、家族をとらずに、(ナロードニキが好んでです

〔第 35 表 B〕*　　下級の諸グループから

県	郡	図表中の線の番号	総数にたいする			
			貸出地	「賃仕事」をもつ農家	農家戸数	男女人口
タヴリーダ	ドニェプル，メリトーポリ，ベルヂャンスク…	1	72.7	68.2	50	41.6
サマラ	ノヴォウゼンスク………	—	93.8	74.6	50	39.6
	ニコラーエフスク………	—	98	78.6	50	38
	平　均………………	2	95.9	76.6	50	38.8
サラトフ	カムィシン………………	3	71.5	60.2	50	36.6
	ヴォリスク，クズネツク，バラショーフ，セルドブスク………………	—	64.6	—	50	37.6
ペルミ	クラスノウフィムスク…	—	74	93.5	50	40.7
	エカテリンブルグ………	—	—	65.9	50	44.7
	平　均………………	4	74	79.7	50	42.7
オリョール	エレツ，トルプチェフスク…………………	5	93.9	59.3	50	39.4
ヴォロネジ	ザドンスク………………	6	63.3	65.3	50	39.2
	ザドンスク，ゼムリャンスク，コロトヤク，ニジネデヴィツク………	—	67	63.8	50	37.2
ニジェゴロド	クニャギニノ，ヴァシーリスク，マカリョーフ…	7	88.2	65.7	50	40.6

*　本表にたいする注は119ページを見よ．

るように）人口一人をとるのはまちがいである，ということである。富裕な家族の支出は家族構成がより大きい結果増大するが，他方では，家族の多い農家では支出の多くが減少する（建物，家内調度や家事その他等々のための支出。家族の多いことが経済の点で有利であることは，エンゲリガルトが『農村からの手紙』で，またトリロゴフが著書『共同体と租税』，サンクト－ペテルブルグ，一八八二年で，とくに強調している）。だから，この支出減少を考慮に入れないで，比較の単位と

して人口一人をとることは、大きな家族と小さな家族の「一人」の状態を、人為的に、またいつわって、等しいものとすることを意味する。しかし図表は、富裕な農民グループは、人口一人あたりで計算した場合にそうなるよりもはるかに大きな部分の農業生産を集中していることを、明白にしめしている。

次の欄は分与地である。その分布には、分与地の法律上の性格によってそうあるべきだが、最高の均等性が見られる。しかしここでさえも、富裕な農民による貧農の駆逐の過程がはじまっている。われわれはどこでも、上級のグループはその人口の割合よりもやや多い割合の分与地をもち、下級のグループはやや少ない割合の分与地をもっているのを見る。「共同体」は農民ブルジョアジーの利益に味方しているのである。だが実際の土地保有とくらべれば、分与地の分布における不均等はまだまったくとるにたりない。分与地の分布は、(図表ではっきり見られるように) 土地と経営の実際の分布についてなんの理解もあたえないのである。*

* 分与地による分類が農民の分解の研究にとって役だたないことを知るには、図表を一見するだけで十分である。

次は購入地の欄である。いたるところで、それは富裕な農民によって集中されている。すなわち、農家の五分の一が農民の購入地全体の約六割ないし七割をその手におさめているのにたいして、農家の半分にあたる貧農には、最高一五%しか帰属していない! だから、「農民」ができるだけ多くの土地をできるだけ安く購入できるようにという「ナロードニキ的」配慮が、どういう意義をもつものであるかを、判断できよう。

次の欄は借地である。ここでもまたわれわれは、いたるところで土地が富裕な農民によって集中されているのを見る (農家の五分の一の手に借地全体の五—八割がある)。しかも、富農は、われわれがさきに見たように、土地を安く借りているのである。農民ブルジョアジーによるこの借地横奪は、「農民の借地」が営業的性格をおびていること(生産物を販売するための土地の購入) を、はっきり証明している。* しかしこうはいっても、われわれはけっして困窮による借地という事実を否定するものではない。それどころか、図表は、土地にしがみついている貧農のもとに (農家の半分の手に借地全体の一—二割しかないが)、まったく別の性格の借地があることを、われわれにしめしている。農民にもいろいろあるのだ。

* 借地にかんするカルィシェフ氏の著書における「結論」(第六章) は、きわめて奇妙なものである。農民の借地には営業的性格はないという、根拠のない、そしてゼムストヴォ

統計の資料に矛盾する主張をいろいろならべたてたあとで、カルィシェフ氏はここで（W・ロッシャーその他から借りてきた）「借地理論」をもちだしている。すなわち、学問的なソースをかけて叙述された、西ヨーロッパの農業企業家階級の desiderata（願望）、つまり、「借地期限が長いこと」（「農耕者」が『主人らしく』土地をあつかうことが……必要である、三七一ページ）、借地農の手に賃金、投下資本の利子と償却費、企業家利潤をのこすような、適度な高さの借地料（三七三ページ）が、それである。だがカルィシェフ氏は、このような「理論」が、「予防」（三九八ページ）といういつものナロードニキ的処方箋とならんで現われていることに、すこしもあわてない。農業企業家階級を「未然に防ぐ」ために、カルィシェフ氏は農業企業家階級の「理論」をもちだしているのだ！ このような「結論」は、当然カルィシェフ氏の著書の基本的矛盾の仕上げをした。彼は、一方では、すべてのナロードニキ的偏見を分かちもっていて、シスモンディのような小ブルジョアジーの古典的理論家たちに心から共感している（カルィシェフ『ヨーロッパ大陸における永代借地』、モスクワ、一八八五年を参照）が、他方では、借地が農民層の分解に「刺激」（三九六ページ）をあたえること、「より資力のある層」が、より資力のない層を押しのけていること、土地関係の発展がほかならぬ雇農制度をもたらしていること（三九七ページ）を、認めないわけにいかないのである。

借地が「農民経済」においてもつ矛盾した意義は、借地の欄を土地の貸出しの欄（左側の、すなわち消極的標識のうちの第一欄）と対比すると、とくにはっきりしてくる。ここではわれわれはまさに反対のことを見る。すなわち、土地のおもな貸出人は下級の諸グループであって（農家の半分に貸出地の七―八割がある）、これらのグループは分与地からのがれようとつとめており、分与地は（法律による禁止や制限にもかかわらず）経営主の手に移りつつある。こうして、「農民」は土地を借りいれるが、おなじ「農民」が土地を貸しだす、といわれるとき、われわれは、前者はおもに農民ブルジョアジーのことであり、後者は農民プロレタリアートのことであることを、知るのである。

　分与地にたいする、土地の購入、借入れおよび貸出しの関係は、諸グループの実際の土地保有（右側の第五欄）をも規定している。どこでもわれわれは、農民の管理下にあるすべての土地の実際の分布が、分与地の「均等性」とはもはやなんの共通点をもたないことを見る。二〇%の農家の手に土地全体の三五%から五〇%があり、他方五〇%の農家の手に二〇%から三〇%がある。作付面積の分布（次の欄）では、上級のグループによる下級のグループの駆逐がさらにするどく現われている。これはおそらく、無産の農民がしばしば自分の土地を経済的に利用することができずに、それを放棄するからであろう。二つの欄（総土地保

有と作付面積の）は、土地の購入と借入れが、全経済体系のなかでの下級の諸グループの持ち分の減少を、すなわち富裕な少数者による下級のグループの駆逐を、もたらしていることをしめしている。富裕な少数者は、残りの農民を全部あわせたのとほぼ同じ割合の作付面積をその手に集中していて、すでにいまでは農民経済で支配的な役割を演じているのである。

次の二つの欄は、農民層のなかでの役畜と全家畜の分布をしめしている。家畜のパーセントは、作付面積のパーセントときわめてわずかしかちがわない。そうなる以外はありえない。なぜなら、役畜（ならびに全家畜も）の頭数は作付規模を規定するが、それ自体また作付規模によって規定されるからである。

次の欄は、商工業施設の総数のなかでいろいろな農民グループが占める割合をしめしている。五分の一の農家（富裕なグループ）はこれらの施設の約半数を集中しているが、農家の半数を占める貧農は約五分の一しかもっていない。* すなわち、農民のブルジョアジーへの転化を表現する「営業」は、主として最も資力のある農耕者の手に集中されている。したがって、富裕な農民は資本を農業（土地の購入、借地、労働者の雇用、農具の改良、その他）にも、工業施設にも、商業にも、高利貸業にも投下している。商業資本と企業家資本とは緊密に結びついていて、資本のこれらの形態のうちのどれが優勢になるかは、周囲の諸条件にかかっている。

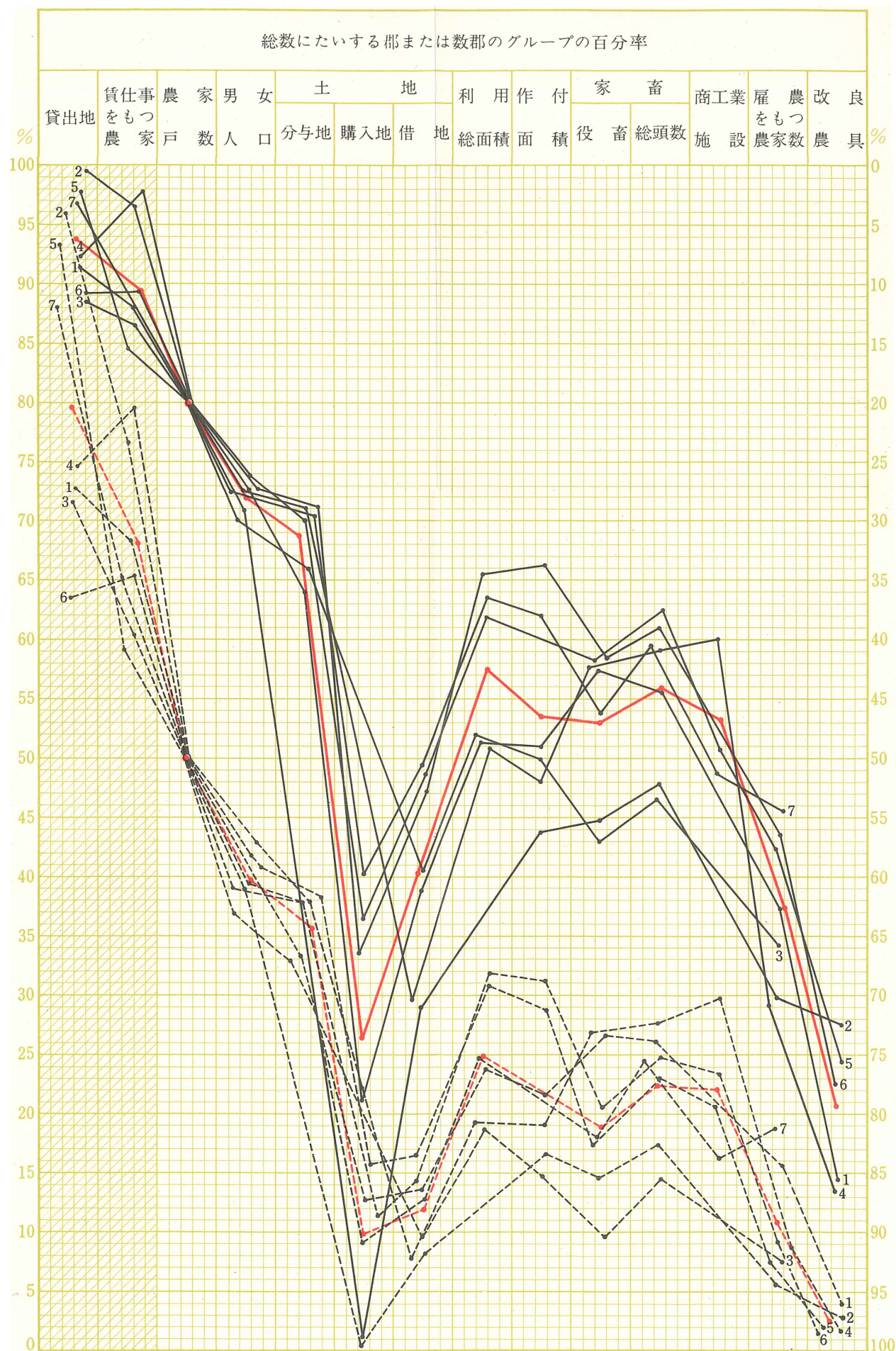
* この数字（施設総数の約五分の一という）も、もちろん誇張されている。なぜなら、作付をしない農民、馬をもたない農民、馬一頭をもつ農民の部類には、農業労働者、雑役労働者その他が、非農耕者（小商人、手工業者その他）とまぜあわされているからである。

「賃仕事」をもつ農家にかんする資料（消極的標識のうち左へむかって第一の欄）も、やはり「営業」の特質をしめしているが、ただしこれは、農民のプロレタリアへの転化を意味するという、逆の意義をもつものである。これらの「営業」は貧農の手に集中されている（五〇％の農家が、賃仕事をもつ農家総数の六〇—九〇％を占めている）。ところが富裕な諸グループは、それにはほんのわずかしか関与していない（「営業者」のこの部類でも、われわれは経営主と労働者を正確には区別できなかったことを、忘れてはならない）。この二つの型の「営業」がまったく対立したものであることを知るためには、また、通常なされているこれらの型の混合がどれほど驚くべき混乱をつくりだすものであるかを理解するためには、「賃仕事」にかんする資料を「商工業施設」にかんする資料と対比すればよい。

雇農をもつ農家は、どこでも富裕な農民のグループに集中している（二〇%の農家が雇農をもつ経営総数の五—七割を占めている）。富裕な農民は（家族が多いにもかかわらず）、彼らを「補充する」農業労働者の階級がなければ存立できないのである。ここにわれわれは、さきに述べた命題、すなわち、雇農使用経営の数を農民「経営」の総数（雇農の「経営」もふくまれている）と対比することはばかげているという命題の、明瞭な確証を見る。雇農使用経営の数を農家の五分の一と対比するほうが、はるかに正しい。なぜなら、少数の富者で、雇農使用経営の総数の約五分の三を、さらには三分の二を、占めているからである。農民のあいだで労働者を企業家的に雇用することは、家族労働者の不足のため、困窮から労働者を雇用することよりも、はるかに多い。すなわち、五〇%にあたる無産で家族の少ない農民層には、雇農使用経営の総数の約一〇分の一しかない（ただし、ここでも、無産者のなかには、けっして困窮から労働者を雇用するのではない小商人、工業者その他がふくまれている）。

最後の、改良農具の分布をしめす欄を、われわれは、ヴェ・ヴェ氏の例にならって「農民経済における進歩的潮流」と題することができよう。サマラ県ノヴォウゼンスク郡ではこれらの農具が最も「公正に」分布しているが、そこでは農家総数の五分の一を占める富裕な農家のもとには農具一〇〇個のうちわずか七三個しかないのに、農家総数の半分にあたる貧農のもとには一〇〇個のうちのなんと三個もある。

さてこんどは、いろいろな地方を農民層の分解程度によって比較することにしよう。図表では、この点で二種類の地方がはっきり区別される。すなわち、タヴリーダ、サマラ、サラトフ、ペルミの諸県では、オリョール、ヴォロネジ、ニジェゴロドの諸県よりも、農耕農民層の分解は目だってはげしい。はじめの四県の線は、図表では赤い平均線の下を走っているが、あとの三県の線は平均線の上を走っており、すなわち少数の富農の手への経営の集中がより少ないことをしめしている。第一種の地方は、最も土地が多くて厳密に農耕的な諸県であって（ペルミ県では各郡のなかの農耕地帯だけをとりだしてある）、農業は粗放的な性格をおびている。農業がこのような性格のものであれば、農耕農民層の分解は容易に考えられるところであり、だからそれは明瞭に現われている。これに反して第二種の地方では、一方では、われわれの資料がまだ考慮に入れていない商業的農業の、たとえばオリョール県における大麻の作付の発展が見られる。他方では、ここでは、賃仕事という意味でも（ヴォロネジ県ザドンスク郡）、非農耕的生業

第35表　AとBをあらわす図表

実線は，土地，作付，家畜，等々の総数にたいする，**富裕な**農民の持ち分のパーセントをしめす（上の水平線からかぞえて）．

点線は，土地，作付，家畜，等々の総数にたいする，**無産の**農民の持ち分のパーセントをしめす（下の水平線からかぞえて）．

黒線は，A表およびB表において番号（1－7）がしめされている個々の郡または郡グループ別の分解の程度をしめす．

赤線は，分解の「平均」程度（すなわち，図表中に記入された百分率資料の算術平均）をしめす．

という意味でも（ニジェゴロド県）、「営業」が巨大な意義をもっていることが見られる。農耕農民層の分解の問題では、この二つの事情のもつ意義は絶大である。第一の事情（種々の地方における商業的農業の形態および農業の進歩の相違）については、われわれはすでに述べた。第二の事情（「営業」の役割）の意義も、それに劣らず明白である。もしある地方で農民大衆が、分与地をもつ雇農、日雇いあるいは営業に従事する賃金労働者から成っているとすれば、そこでは農耕農民層の分解は、もちろん、はなはだ微弱にあらわされる。* しかし、事態を正しく描きだすためには、農村プロレタリアートのこれらの典型的な代表者を農民ブルジョアジーの典型的な代表者と対比しなければならない。「賃仕事」をもとめて南部に出かける、分与地をもつヴォロネジ県の日雇いが、大規模な作付をするタヴリーダ県の農民と対比されなければならない。カルーガ県、ニジェゴロド県、ヤロスラヴリ県の大工が、ヤロスラヴリ県やモスクワ県の野菜栽培者や乳を売るために家畜を飼っている農民と、対比されなければならない、等々。まったく同様に、もしある地方の多くの農民が加工工業に従事していて、自分の分与地からは生活手段のわずかな部分しか得ていないとすれば、農耕農民層の分解にかんする資料は、営業に従事する農民層の分解にかんする資料によって補足されなければならない。第五章でわれわれはこののちの問題をとりあつかうが、さしあたっていまわれわれがとりあつかうのは、典型的な農耕農民層の分解だけである。

* オリョール県、ヴォロネジ県その他のような、中央黒土地帯の諸県では、農民層の分解が実際に他よりもはるかに微弱であるということは、はなはだありうることである。それは、土地が少なく、租税が重いためであり、雇役が大いに発展しているためである。それらはすべて、分解をはばむ条件なのである。

一〇　ゼムストヴォ統計と軍馬調査の総括的資料（三）

われわれは、農民層の上級のグループと下級のグループとのあいだの関係が、農村ブルジョアジーの農村プロレタリアートにたいする関係にとって特徴的な、ほかならぬあの特質をもっていること、これらの関係が、多種多様な条件をもつ多種多様な地方で驚くほど同じであること、これらの関係の数的表現（すなわち、作付、家畜、その他の総数のなかに占めるこれら二つのグループのパーセント）さえも、比較的ごく小さな限界内で上下するにすぎないこと、をしめした。そこで当然、次のような問題が出てくる。い

ろいろな地方のこれらのグループのあいだの関係についてのこれらの資料は、ロシアの全農民層が分かれているこれらのグループについての観念を構成するのに、どれほど利用できるであろうか？　いいかえれば、ロシアの全農民層における上級と下級のグループの構成および相互関係については、どのような情報によって判断できるであろうか？

そういう情報は、わが国には非常に少ない。なぜなら、ロシアでは、国内のすべての農業経営を大がかりにしらべるような農業調査はおこなわれていないからである。わが国の農民層が分かれている経営グループについて判断するための唯一の材料は、ゼムストヴォ統計の総括的資料と、農家のあいだでの役畜（すなわち馬）の分布にかんする軍馬調査の総括的資料とである。この資料がどんなに貧弱であるにせよ、やはり興味深い結論（もちろん、きわめて一般的な、近似的な、総体的なものだが）をこれらから引きだすことが可能である。それはとくに、馬の多い農民と馬の少ない農民とのあいだの関係がすでに分析されていて、それが多種多様な地方で驚くほど同じであることがわかったためである。

ヴラゴヴェシチェンスキー氏の『ゼムストヴォの戸別調査による経済情報集成』（第一巻、『農民経済』、モスクワ、一八九三年）の資料によれば、ゼムストヴォの調査は、二一九八三、七三三戸の農家と一七、九九六、三一七人の男女人口をもつ、二二県下の一二三郡を包括している。だが役畜による農家の分類の資料は、どこでも同種なわけではない。すなわち、三つの県で一一の郡をとりのけなければならない。* これらの郡については、四つではなく三つのグループに分類されているだけである。残りの、二一県下の一一二郡について、われわれは次のような総括的資料を得た。これは、一五〇〇万人の人口をもつ約二五〇万戸の農家にかんするものである。〔第三六表〕

* サラトフ県の五郡、サマラ県の五郡、ベッサラビア県の一郡。

この資料は、ヨーロッパ・ロシアの農家総数の四分の一弱を包括している（『ヨーロッパ・ロシアの農村住民の経済状態にかんする統計資料集成』——内閣官房発行、サンクトーペテルブルグ、一八九四年——では、ヨーロッパ・ロシアの五〇県の郷における全戸数は一一、二二三、九六二戸、そのうち農家は一〇、五八九、九六七戸と計算している）。ロシア全体については、農民のあいだでの馬の分布にかんする資料が、『ロシア帝国統計、第二〇巻。一八八八年度軍馬調査』（サンクトーペテルブルグ、一八九一年）と、同じく『ロシア帝国統計、第三一巻。一八九一年度軍馬調査』（サンクトーペテルブルグ、一八九四年）にある。前者

〔第 36 表〕

経営グループ	農家戸数	農家の%		農家グループ別役畜頭数*	役畜総頭数の%	1戸あたり役畜頭数
役畜をもたないもの	613,238	24.7	53.3	—	—	—
役畜1頭をもつもの	712,256	28.6		712,256	18.6	1
〃 2頭 〃	645,900	26.0		1,291,800	33.7	2
〃 3頭以上 〃	515,521	20.7		1,824,969	47.7	3.5
総数	2,486,915	100		3,829,025	100	1.5

* ここでは牡牛も，2頭を1頭として，馬に加算されている．

〔第 37 表〕　　ヨーロッパ・ロシアの49県で

経営グループ	農家			農家のもつ馬の頭数			1戸あたりの頭数
	総数	%		総数	%		
馬をもたないもの	2,777,485	27.3	55.9	—	—		—
〃 1頭をもつもの	2,909,042	28.6		2,909,042	17.2		1
〃 2頭 〃	2,247,827	22.1		4,495,654	26.5		2
〃 3頭 〃	1,072,298	10.6	22.0	3,216,894	18.9	56.3	3
〃 4頭以上 〃	1,155,907	11.4		6,339,198	37.4		5.4
総数	10,162,559	100		16,960,788	100		1.6

は、一八八八年に四一県（そのうち一〇県はロシア領ポーランド）についてあつめられた資料を整理したもの、後者は、ヨーロッパ・ロシアの一八県ならびにカフカーズ、カルムィック・ステップおよびドン地方にかんするものである。

ヨーロッパ・ロシアの四九県をとりだし（ドン地方については情報は完全なものではない）、一八八八年と一八九一年の資料をあわせて一つにすれば、農村共同体内の農民に属している馬の総頭数の分布の次の表が得られる。〔第三七表〕

このように、ロシア全体で、農民層のあいだでの役馬の分布は、われわれがさきに図表で描写した分解の「平均的な」大きさに、非常に近いものである。実際には、分解はもうすこし深刻でさえある。すなわち、二二％の農家（一〇二〇万戸のうちの二二〇万戸）の手に、一七〇〇万頭の馬のうちの九五〇万頭、すなわち総頭数の五六・三％が集中されている。二八〇万戸という膨大な数の農家が馬を全然もっていないし、馬一頭をもつ二九〇万農家は、馬の総頭数の一七・二％しかもっていない。*

＊　農民層のあいだでの馬の分布が最近どのように変化しているかについては、一八九三―一八九四年度の軍馬調査の次の資料によって判断することができる（『ロシア帝国統計』、第三七巻）。ヨーロッパ・ロシアの三八県で、一八九三―一八九四年に農家戸数は八、二八八、九八七戸、そのうち馬をもたないもの――二、六四一、七五四戸すなわち三一・九％、馬一頭をもつもの――三一・四％、馬二頭をもつもの――二〇・二％、馬三頭をもつもの――八・七％、馬四頭以上をもつもの――七・八％であった。農民のもっていた馬は一一、五六〇、三五八頭であって、そのうち二一・五％は馬一頭をもつもの、二八・九％は馬二頭をもつもの、一八・八％は馬三頭をもつもの、そして二九・八％は多数の馬をもつものの、手にあった。このように、一六・五％の富裕な農民が馬の総頭数の四八・六％をもっていたのである。

各グループのあいだの関係に見られる、さきに引きだした法則に立脚して、われわれはいまや、これらの資料の真の意義を判定することができる。農家の五分の一が馬の総頭数の半分を集中しているとすれば、そのことから、農民の全農業生産の少なくとも半分（おそらくはそれ以上）が彼らの手中にあるということを、まちがいなく結論することができる。このような生産集中は、購入地の大部分、および分与地外ならびに分与地の農民借地の大部分が、この資力ある農民層の手に集中されていてはじめて、可能である。まさにこの資力ある少数者が、おそらくは分与地を最も多く確保しているにもかかわらず、主として、土地を買いいれたり借りいれたりしているのである。ロシアの「中位の」農民が最上作の年にどうにかこうにか収支のつじつまをあわせているとすれば（はたしてあわせているかどうか、わからないが）、平均よりもずっと多くの土地を確保している、この資力ある少数者は、自立した経営によっていっさいの支出をまかなっているだけでなく、剰余を手に入れてもいる。そしてそれは、彼らが商品生産者であること、彼らが売るために農産物を生産していることを意味する。それればかりか、彼らは、比較的大きな農業経営を商工業企業と結びつけて、農村ブルジョアジーに転化しつつある。われわれが見たように、まさにこの種の「営業」こそがロシアの「経営上手な」百姓にとって最も典型的なものである。家族が最も大きいにもかかわらず、また家族の働き手の数が最も多いにもかかわらず（資力のある農民層はいつもこの標識を特徴としており、全農家の五分の一が人口ではそれより多い割合を、大体のところ約一〇分の三を占めているにちがいない）、この資力ある少数者は、雇農と日雇労働を最も大規模に利用している。雇農と日雇いの雇用にたよっているロシアの農民経営の総数のうち、大多数が、この資力ある少数者に該当するにちがいない。われわれは、上記の分析にもとづいても、またこのグループに

おける人口の割合を役畜頭数の割合と、したがってまた作付面積および経営一般の割合と対比することによっても、この結論をくだしうるのである。最後に、この資力ある少数者だけが、「農民経済における進歩的潮流」に着実に参加することができる。これこそが、この少数者がそれ以外の農民層にたいしてもつ関係であるにちがいないが、しかし、いうまでもなく、土地関係の条件や農業経営方式や商業的農業の形態のいかんによって、この関係はさまざまな形をとり、ちがった現れかたをする。* 農民層の分解の基本的な傾向と、さまざまな地方的条件に依存する分解形態とは、それぞれ別個の問題である。

* たとえば、酪農業をいとなむ地方では、馬の頭数ではなく牝牛の頭数による分類のほうが比較にならないほど正しい、ということはきわめてありうることである。また、野菜栽培という条件のもとでは、どちらの標識も満足できるものではありえない、等々。

馬をもたない農民と馬一頭をもつ農民の地位は、まさにこれと反対である。ゼムストヴォ統計が後者をも（前者についてはいうまでもないが）農村プロレタリアートとしていることを、われわれはさきに見た。だから、馬をもたない農民の全部と馬一頭をもつ農民の四分の三と（これで農家総数の約二分の一になる）を農村プロレタリアートとするわれわれの概算には、まずもって誇張はないであろう。この農民層は、分与地を最もわずかしかあたえられていないのだが、農具や種子などがないためしばしばその分与地を貸しだしている。農民の借地と土地購入の全体のうちで、彼らによるものはみじめなほどわずかである。彼らは、自分の経営によってはどうにも暮らしてゆけないのであって、生活手段のおもな源泉は彼らにあっては「営業」あるいは「賃仕事」、すなわち自分の労働力の販売なのである。これは、分与地をもつ賃金労働者、雇農、日雇い、雑役夫、建築労働者、その他等々の階級である。

一一 一八八八―一八九一年の軍馬調査と一八九六―一九〇〇年の軍馬調査の比較

一八九六年と一八九九―一九〇一年の軍馬調査があるので、最新の資料をさきにあげた資料と比較することができる。

南部の五県（一八九六年）とその他の四三県（一八九九―一九〇〇年）をあわせると、ヨーロッパ・ロシアの四八県について次の資料が得られる。〔第三八表〕

一八八八―一八九一年については、われわれは四九県に

〔第 38 表〕　1896—1900年

経営グループ	農家戸数 総数	農家戸数 %		農家のもつ馬の頭数 総数	農家のもつ馬の頭数 %		1戸あたり馬の頭数
馬をもたないもの	3,242,462	29.2	59.5	—	—		—
〃 1頭をもつもの	3,361,778	30.3		3,361,778	19.9		1
〃 2頭 〃	2,446,731	22.0		4,893,462	28.9		2
〃 3頭 〃	1,047,900	9.4	18.5	3,143,700	18.7	51.2	3
〃 4頭以上 〃	1,013,416	9.1		5,476,503	32.5		5.4
総数	11,112,287	100		16,875,443	100		1.5

〔第 39 表〕　1888—1891年

経営グループ	農家戸数 総数	農家戸数 %		農家のもつ馬の頭数 総数	農家のもつ馬の頭数 %		1戸あたり馬の頭数
馬をもたないもの	2,765,970	27.3	55.8	—	—		—
馬1頭をもつもの	2,885,192	28.5		2,885,192	17.1		1
〃 2頭 〃	2,240,574	22.2		4,481,148	26.5		2
〃 3頭 〃	1,070,250	10.6	22.0	3,210,750	18.9	56.4	3
〃 4頭以上 〃	1,154,674	11.4		6,333,106	37.5		5.5
総数	10,116,660	100		16,910,196	100		1.6

かんする資料をあげた。それらのうちで最近の情報がないのは、一県すなわちアルハンゲリスク県だけである。さきにあげた資料からこの県にかんする資料を除くと、一八八八―一八九一年についての、同じ四八県について次の表が得られる。〔第三九表〕

一八八八―一八九一年と一八九六―一九〇〇年とを比較すると、農民層の収奪が増大しつつあることがしめされる。農家数はほぼ一〇〇万戸が増加した。馬の頭数は、ごくわずかではあるが減少した。馬をもたない農家の数はとくに急激にふえて、そのパーセントは二七・三%から二九・二%に高まった。貧農（馬をもたないものと馬一頭をもつもの）は、五六〇万ではなく、もはや六六〇万である。農家数の増大分がすべて、貧農の戸数の増加だったわけである。馬をたくさんもっている農家のパーセントは低下した。多くの馬をもつ農家は、二二〇万ではなく、いまや二〇〇万にすぎない。中農と富農をあわせた農家（馬二頭以上を

もつもの）の数は、ほとんど変化がなかった（一八八八―一八九一年には四四六万五〇〇〇戸、一八九六―一九〇〇年には四五〇万八〇〇〇戸）。

こうして、これらの資料から次の結論が得られる。

農民層の窮乏と収奪の増大は疑う余地がない。

農民層の上級と下級のグループのあいだの関係についていえば、この関係はほとんど変わらなかった。もしわれわれが、さきに述べたやりかたによって、農家の五〇%からなる下級グループと二〇%からなる上級グループをつくると、次のようになる。一八八八―一八九一年には、五〇%の貧農が一三・七%の馬をもち、二〇%の富農は五二・六%の馬をもっていた。一八九六―一九〇〇年には、五〇%の貧農は農民の馬の総頭数のやはり一三・七%をもっており、二〇%の富農は五三・二%をもっていた。したがって、両グループの関係はほとんど変わらなかったわけである。

最後に、農民は全体として馬の点で貧しくなった。多くの馬をもつものの数もパーセントも低下した。一方では、これは明らかに、ヨーロッパ・ロシアにおける農民経済全体の衰微を表示している。他方では、ロシアでは農業における馬の頭数が可耕地とくらべて異常に多いことを、忘れてはならない。小農民の国ではそうであるほかはなかった。したがって、馬の頭数の減少は、ある程度までは、農民ブルジョアジーのもとでの「耕地面積にたいする役畜の正常な関係の回復」なのである（さきに第二章第一節であげた、この点についてのヴェ・ヴェ氏の議論を参照）。

ここで、ヴィフリャーエフ氏（『ロシア農業の現状概説』、サンクト・ペテルブルグ、『ホジャーイン』（『経営主』）誌発行所刊）およびチェルネンコフ氏（『農民経済の性格規定によせて』、第一冊、モスクワ、一九〇五年）の最近の著作のなかの、この問題にかんする議論にふれておくのが適切であろう。彼らは、農民層のなかでの馬の分布についての数字の多様さに心をうばわれたあまりに、経済学的分析を統計学演習に変えてしまった。農民経営の型（日雇い、中農、企業家）を研究するかわりに、彼らは、好事家らしく、算術にたいする熱心さで世間を驚かそうと目的を立てて、かぎりなくならべたてた数字の研究をしている。

このような数字遊びをやっているからこそ、チェルネンコフ氏は、あたかも私が「先入観にとらわれて」、「分化」を新しい（古くからあるものではない）、そして、なぜかわからないが、かならず資本主義的にちがいない現象だと論じているかのような反論を、私に向けることができたのである。私が経済学を忘れて統計から結論をくだしているとか、私が馬の頭数とその分布との変化だけによってなにかを証明しているかのように考えるのは、チェルネンコフ

氏の自由だ！　しかし農民層の分解を道理だてて観察するためには、すべてのものを、すなわち、借地も、土地購入も、機械も、賃仕事も、商業的農業の成長も、賃労働も、全体としてとらえなければならない。あるいは、おそらく、チェルネンコフ氏にとってはそのこともまた「新しく」もなければ「資本主義的」でもない現象なのであろうか？

二　農民の家計にかんするゼムストヴォ統計資料

農民層の分解の問題にきりをつけるために、問題をもう一つの側面から、すなわち、農民の家計にかんするきわめて具体的な資料によって、観察しよう。こうしてわれわれは、農民の種々の型——われわれはそれを問題にしているのだが——のあいだの相違の深刻さをまざまざと知るであろう。

『ゼムリャンスク、ザドンスク、コロトヤクおよびニジネデヴィツクの諸郡における農民の土地所有にかんする価格査定報告集』（ヴォロネジ、一八八九年）の付録に、「典型的な経営の構成と家計にかんする統計資料」があるが、それは非常に充実している点できわだっている。*　われわれは、六七の家計のうちから一つをまったく不完全なものとしてとりのぞき（コロトヤク郡の家計第一四号）、残りを役畜頭数によって六つのグループに分ける。すなわち、(*a*) 馬をもたないもの、(*b*) 馬一頭をもつもの、(*c*) 馬二頭をもつもの、(*d*) 馬三頭をもつもの、(*e*) 馬四頭をもつもの、(*f*) 馬五頭以上をもつもの、の六グループである（以下では、各グループをしめすのに*a*—*f*の文字だけをもちいる）。この標識による分類は、たしかに、この地方にとってかならずしも完全に適当なものではない（上級のグループの経営でも下級のグループの経営でも「営業」が絶大な意義をもっているから）。しかしわれわれは、家計の資料をさきに検討した戸別調査の資料と比較できるようにするために、この分類をとらなければならない。そのような比較は、「農民層」をいくつかのグループに区分した場合にだけなしうるのであって、一般的で概括的な「平均」というものは、われわれがすでに見たし、これからも見るように、まったく擬制的な意義をもつにすぎない。**　ついでながらここで興味ある現象を指摘しておけば、「平均的な」家計の資料は、ほとんどいつでも、平均型よりも上位にある経営の特徴をしめし、現実を実際よりも明るくえがくものなのである。***　そのようなことになるのは、おそらく、「家計」という概念そのものがいくらかでも釣合いのとれた経営を前提としており、そういうものは貧農のあ

〔第 40 表〕

経営グループ	総数 実数	総数 %		家計の数(%) ヴォロネジ県の4郡で	ヴォロネジ県の9郡で	21県の112郡で	ヨーロッパ・ロシアの49県で
役畜をもたないもの	12	18.18		17.9	21.7	24.7	27.3
〃 1頭をもつもの	18	27.27		34.7	31.9	28.6	28.6
〃 2 〃	17	25.76		28.6	23.8	26.0	22.1
〃 3 〃	9	13.64	28.79	18.8	22.6	20.7	22.0
〃 4 〃	5	7.575					
〃 5頭以上 〃	5	7.575					
総数	66	100		100	100	100	100

いだではなかなか見つからないからである。例証のため、農家の役畜頭数別分布を、家計その他の資料によって対比してみよう。〔第四〇表〕

* この資料の大きな欠陥は、第一に、種々の標識による分類がないこと、第二に、抽出された経営についての、表にもりこむことはできなかった情報をつたえる本文がないこと（たとえば、オストロゴージスク郡の家計資料にはそのような本文がついている）、第三に、すべての非農業的生業とあらゆる種類の「賃仕事」にかんする資料が、きわめて未整理であること（すべての「営業」にわずかに四欄しかあてがわれていないのにたいして、衣服と履物の記述だけで一五二欄も占めている！）。

** たとえば、シチェルビーナ氏は、ヴォロネジのゼムストヴォの刊行物のなかでも、『収穫および穀物価格の影響……』という書物のなかの農民の家計にかんする論文のなかでも、もっぱらこのような「平均」を利用している。

*** このことは、たとえば、モスクワ県（『統計集』第六巻と第七巻）、ヴラヂーミル県（『ヴラヂーミル県の営業』）、ヴォロネジ県オストロゴージスク郡（『統計集』第二巻第二冊）についての家計資料、およびとくに、『クスターリ工業調査委員会報告書』(三)（ヴャトカ、ヘルソン、ニジェゴロド、ペルミその他の県についての）に引用されている家計について、いえる。この『報告書』のなかにあるカルポフ氏とマノーヒン氏の家計、およびペ・セミョーノフ氏の家計（『農村共同体研究資料集』、サンクト・ペテルブルグ、一八八〇年、にある）とオサドチー氏の家計（ヘルソン県、エリサヴェトグラード郡シチェルバコフ郷）は、農民の個々のグループを特徴づけている点できわだってすぐれている。

この表から明らかなように、家計資料の利用は、個々の農民グループのそれぞれにとって平均的なものを引きだすことによってはじめて可能である。われわれは上記の資料

〔第 41 表〕

	1家族あたりの男女人口	1経営あたり（ルーブリ）							
		総額		純収入	貨幣		収支差額	負債額	租税滞納額
		収入	支出		収入	支出			
a	4.08	118.10	109.08	9.02	64.57	62.29	＋ 2.28	5.83	16.58
b	4.94	178.12	174.26	3.86	73.75	80.99	－ 7.24	11.16	8.97
c	8.23	429.72	379.17	50.55	196.72	165.22	＋ 31.50	13.73	5.93
d	13.00	753.19	632.36	120.83	318.85	262.23	＋ 56.62	13.67	2.22
e	14.20	978.66	937.30	41.36	398.48	439.86	－ 41.38	42.00	—
f	16.00	1,766.79	1,593.77	173.02	1,047.26	959.20	＋ 88.06	210.00	6
	8.27	491.44	443.00	48.44	235.53	217.70	＋ 17.83	28.60	7.74

〔第 42 表〕

	1経営あたりの平均支出額									
	食費		その他の個人的消費		経営用支出		租税と公課		総計	
	ルーブリ	%	ルーブリ	%	ルーブリ	%	ルーブリ	%	ルーブリ	%
a	60.98	55.89	17.51	16.05	15.12	13.87	15.47	14.19	109.08	100
b	80.98	46.47	17.19	9.87	58.32	33.46	17.77	10.20	174.26	100
c	181.11	47.77	44.62	11.77	121.42	32.02	32.02	8.44	379.17	100
d	283.65	44.86	76.77	12.14	222.39	35.17	49.55	7.83	632.36	100
e	373.81	39.88	147.83	15.77	347.76	37.12	67.90	7.23	937.30	100
f	447.83	28.10	82.76	5.19	976.84	61.29	86.34	5.42	1,593.77	100
	180.75	40.80	47.30	10.68	180.60	40.77	34.35	7.75	443.00	100

をそのように加工した。その結果を、(A) 家計の総括的結果、(B) 農業経営の特徴づけ、(C) 生活水準の特徴づけ、という三つの項目に分けて述べよう。

(A) 収支の大きさにかんする総括的資料は次のとおりである。〔第四一表〕

このように、グループごとの家計の規模の差異ははなはだしい。両極のグループをべつにしても、しかも *e* の家族員数は *b* の三倍弱であるのに、*e* の家計は *b* の五倍強である。

つぎに支出の配分をみよう。* 〔第四二表〕

* 『報告集』は、「食費以外の個人的および経営上の必要のための支出」全部と家畜飼育のための支出とを区別しており、そのさい前者の項目には、たとえば、照明のための支出と借地のための支出とがならんではいっている。明らかに、これは正しくない。われわれは、個人的消費を経

〔第 43 表〕

	1経営あたりの平均収入				「営業」からの収入の構成			
	農耕から(74)	「営業」から	前年からの繰越高	総計	「個人的営業から」	「馬車運送業から」	「工業施設と企業から」	「雑収入」
a	57.11	59.04	1.95	118.10	36.75	—	—	22.29
b	127.69	49.22	1.21	178.12	35.08	6	2.08	6.06
c	287.40	108.21	34.11	429.72	64.59	17.65	14.41	11.56
d	496.52	146.67	110	753.19	48.77	22.22	48.88	26.80
e	698.06	247.60	33	978.66	112	100	35	0.60
f	698.39	975.20	93.20	1,766.79	146	34	754.40	40.80
	292.74	164.67	34.03	491.44	59.09	19.36	70.75	15.47

営上の（「生産的」）消費から区別し、後者には、タール、縄、馬の装蹄、建物の修繕、農具、馬具などのための支出、働き手および出来高払いの仕事のための支出、牧夫のため、借地のため、家畜と家禽の飼育のための支出をふくめた。

われわれのまえにはいまプロレタリアも経営主もいるのだということを知るためには、各グループの総支出額のなかで経営用支出が占める割合を一目見るだけで十分である。aでは経営用支出が全支出のわずか一四%であるが、fでは六一%である。経営用支出の絶対額の開きについては、いうまでもない。馬をもたない農民だけでなく、馬一頭をもつ農民にあっても、この支出はごくわずかであり、馬を一頭もつ「経営主」は、分与地をもつ雇農や日雇いの（資本主義諸国における）普通の型にはるかに近いところにある。食費のパーセントにきわめて顕著な開きがあることも、指摘しておこう（aにあってはeのほぼ二倍である）。周知のように、このパーセントが高いことは、生活水準が低いことを証明するものであり、経営主の家計と労働者の家計の違いを最もはっきりあらわすものである。

つぎに収入の構成をとりあげよう。*〔第四三表〕

＊「前年からの繰越高」は、穀物（現物）と貨幣から成る。ここではその総額を出してあるが、それは、われわれが問題にするのが現物および貨幣の総支出と総収入だからである。「営業」の四つの項目は『報告集』の表頭からうつしとったものであって、同書は「営業」についてそれ以上はなにもしめしていない。eグループでは馬車運送業もおそらく営業的企業のなかに入れるべきであろうということを、指摘しておこう。これは、このグループの二人の経営主に二五〇ルーブリずつの収入をもたらしており、しかもそのうちの一人は雇

農をかかえている。

このように、両極のグループ、すなわち、プロレタリア——馬をもたないもの——と農村企業家にあっては、「営業」からの収入が農業からの総収入を上まわっている。下級の農民グループの「個人的営業」は、もちろん、主として賃労働であるが、「雑収入」のなかでは、土地の貸出しからの収入が大きな項目になっている。土地の貸出しからの収入が農業からの総収入よりわずか少ないものも、また農業からの総収入がもっとも多いものまでも、「農業経営主」ときとしては前者のほうが多いものまでも、「農業経営主」の総数のなかにはいっている。たとえば、馬をもたないある経営では、農業からの総収入が六一・九ルーブリ、土地の貸出しからの収入が四〇ルーブリであるし、もう一つの経営では、農業からの総収入が三一・九ルーブリ、土地の貸出しからの収入が四〇ルーブリである。この場合、土地の貸出しあるいは雇農労働からの収入はそっくり「農民」の個人的必要にあてられるが、農業からの総収入からは農業経営のための支出を控除しなければならない、ということを忘れてはならない。そのような控除をすると、馬をもたない経営では、農業からの純収入は四一・九九ルーブリ、「営業」からの純収入は五九・〇四ルーブリになり、馬一頭もつ経営では、六九・三七ルーブリと四九・二二ルーブリになる。これらの数字を対比するだけで、ここにいるのが、分与地をもち、それで生計費の一部をまかなっている（そしてそのため賃金を低めている）、そういう型の農業労働者だということがわかる。このような人々を経営主（農耕者や営業者）とまぜこぜにすることは、科学的研究のすべての要求にはなはだしくそむくことを意味する。

農村のもう一つの極には、数百ルーブリにも達する多額の（現在の生活水準のもとでは）収入をもたらす商工業業務を自立的な農業経営と結びつけている、まさにそういう経営主が見られる。「個人的営業」という項目がまったくあいまいなものなので、この点での下級と上級のグループの相違は、われわれからかくされている。しかし、これらの「個人的営業」からの収入の大きささそのものがすでに、この相違の深刻さをしめしている（ヴォロネジ県の統計の「個人的営業」の部類には、物乞いも、雇農労働も、店員や番頭その他等々の職の勤務もはいりうることを、想起しよう）。

純収入の額についてみても、きわめて貧弱な「繰越高」（一—二ルーブリ）しかなかったり、貨幣収支が赤字でさえある、馬をもたない農家および馬一頭をもつ農家が、またもやはっきりと区別される。これらの農民の資産は、賃金労働者の資産より、少なくはないとしても、多くはない。馬二頭をもつ農民になってはじめて、わずかながらではあ

るが純収入と数十ルーブリの繰越高が見られるようになる（それがなければ、経営をすこしでも規則正しくおこなうことなど、問題になりえない）。富裕な農民にあっては、純収入の額は、ロシアの労働者階級の一般的水準から彼らをはっきり区別するほどの額（一二〇—一七〇ルーブリ）に達している。*

＊ 外見上の例外をなすのは、巨額の赤字（四一ルーブリ）をもつeの部類であるが、しかしこの赤字は借金でうめあわされている。それは、（この部類の農家五戸のうちの）三戸で婚礼がおこなわれ、それに二〇〇ルーブリかかったからである（この五戸の赤字総計は二〇六ルーブリ九〇カペイカ）。そのため、このグループの、食費以外の個人的消費のための支出は非常に大きな数字になり、男女一人あたりで一〇ルーブリ四一カペイカにのぼった。ところがその他のグループでは、富農のグループ（f）もふくめて、どれ一つとして、この支出が六ルーブリに達していない。したがって、この赤字は、その性質上、貧農の赤字とはまったく対蹠的なものである。これは、最小限の欲求を充足できないことから生じた赤字ではなく、その年の収入とつりあわない欲求の増大から生じた赤字なのである。

もちろん、労働者と経営主を一つにまとめて「平均的」家計を引きだせば、収入四九一ルーブリ、支出四四三ルーブリ、剰余四八ルーブリ、そのうち貨幣での剰余一八ルーブリという、「適度に満ちたりた状態」と「適度な」純収入の情景が得られる。だがこのような平均は、まったくの虚構である。それは、下層の農民大衆（aとb、すなわち、六六の家計のうちの三〇）の赤貧をおおいかくすだけである。彼らは、収入がとるにたりないほどの額であるため（一家族あたりの総収入が一二〇—一八〇ルーブリ）、収支のつじつまをあわせることができず、おもに雇農労働と日雇労働によって生きているのである。

貨幣収支と現物収支を正確に計算すると、われわれは、農民層の分解が市場にたいしてもつ関係を判定することができる。市場にとっては貨幣収支だけが重要である。家計全体のなかでの貨幣部分の割合は、グループ別には次のようになっている。〔第四四表〕

したがってわれわれは、貨幣収入と貨幣支出のパーセントが（支出のはとりわけ規則正しく）、中間のグループから両極のグループにむけて高まっていることがわかる。商業的性格が最も鋭く現われているのは、馬をもたない経営主と多くの馬をもつ経営主の経営である。そのことは、両者が主として商品の販売によって生活していることを意味する。ただその場合、商品となるのが、前者では彼の労働力であるが、後者では、賃労働を（あとで見るように）かなり多くつかって販売のために生産した生産物、すなわち

資本の形態をとる生産物なのである。いいかえれば、これらの家計もまたわれわれに、農民層の分解が、一方では農民を雇農に転化させ、他方では農民を小商品生産者、小ブルジョアに転化させることによって、資本主義のための国内市場をつくりだすことを、しめしている。

　これらの資料から得られる、これにおとらず重要なもう一つの結論は、農民層のすべてのグループで経営がきわめていちじるしい程度にすでに商業的になり、市場に依存するにいたった、ということである。すなわち、収入または支出のうちの貨幣部分が、どのグループでも四〇%以下にはなっていない。そしてこのパーセントは高いものと認めなければならない。なぜなら、ここで問題にしているのは小農耕者の総収入であり、そのなかには家畜の飼育費さえもが、すなわち薬、籾殻その他が、算入されているからである。* 明らかに、中央黒土地帯（ここでは貨幣経済の発展は、工業地帯あるいは辺境のステップ地帯よりも概して微弱である）の農民でさえ、売買しないでは絶対に生存できないのであって、彼らはすでに市場に、貨幣の権力に、まったく依存しているのである。この事実がどんなに大きな意義をもつか、そしてわがナロードニキが、ふたたび帰るよしもなく永遠に姿を消してしまった現物経済への同情におぼれて、この事実を黙殺しようとつとめるとき、彼らがどんなに深い誤りにおちこんでいるかは、いまさらいうまでもない。** 現代の社会では販売することなしには生きてゆけないのであり、商品経済の発展をはばむいっさいのものは生産者の状態の悪化にみちびくだけである。マルクスは農民についてこう言っている。「資本主義的生産様式の短所が、……ここでは、資本主義的生産様式の不十分な発展から生ずる短所といっしょになる。農民は、自分の生産物を商品として生産できる条件なしに、商人となり、産業家となる」（『資本論』、[三二] 第三巻第二冊、三四六ページ。ロシア語訳、六七一ページ）。

〔第 44 表〕

	総支出にたいする貨幣支出部分の%	総収入にたいする貨幣収入部分の%
a	57.10	54.6
b	46.47	41.4
c	43.57	45.7
d	41.47	42.3
e	46.93	40.8
f	60.18	59.2
	49.14	47.9

＊　家畜の飼育のための支出は、ほとんどすべてが現物である。すなわち、このために六六経営の全部が支出した六、三一六・二一ルーブリのうち、貨幣で支出したのはたった一、五三五・二一ルーブリしかない。このうち一、一〇二・五ルーブリは、

経営主の数		1戸あたり分与地（デシャチーナ）	1戸あたりの作付（デシャチーナ）			男女1人あたり作付面積（デシャチーナ）	私有地にたいする借地の%
貸地する	借地する		所有地	借 地	総面積		
5	—	5.9	1.48	—	1.48	0.36	—
3	5	7.4	2.84	0.58	3.42	0.69	20.5
—	9	12.7	5.62	1.31	6.93	0.84	23.4
—	6	18.5	8.73	2.65	11.38	0.87	30.4
—	5	22.9	11.18	6.92	18.10	1.27	61.9
—	5	23	10.50	10.58	21.08	1.32	100.7
8	30	12.4	5.32	2.18	7.5	0.91	41.0

明らかに営業的な目的で二〇頭の馬を飼っている一人の企業家的経営主の分である。

** この誤りは、低い穀物価格の意義についての討論（一八九七年）のさいに、とくにしばしば見うけられた。

商品経済の発展にあたって租税が重要な役割を演じるとする、まだかなりひろまっている見解を、家計の資料は完全にくつがえしているということを、注意しておこう。貨幣による年貢と租税がかつては交換を発展させる重要な要因であったことは、疑いない。しかし現在では、商品経済はすでに完全にひとりだちになり、租税の上記のような意義は、はるか後景に退いている。農民の租税と公課のための支出をその貨幣支出総額と対比すると、一五・八％という比率が得られる（グループ別では、*a*——二四・八％、*b*——二一・九％、*c*——一九・三％、*d*——一八・八％、*e*——一五・四％、*f*——九・〇％）。したがって、租税のための最大の支出は、社会経済の現在の条件のもとで農民にとって必須の他の貨幣支出の三分の一である。だがもし交換の発展における租税の役割をではなく、収入にたいする租税の比率を問題にすると、われわれはその比率が法外に高いことを見るであろう。農民改革以前の時代の伝統が現在の農民にどれほど重くのしかかっているかは、小農耕者の、あるいは分与地をもつ雇農さえもの、総支出の七分の一を吸いあげてしまう租税の存在から、なによりも明瞭にわかる。そればかりか、共同体の内部での租税の配分は驚くほど不均等であって、農民に資力があればあるほど、その総支出にたいする租税の割合はますます小さい。馬をもたない農民は、その収入と比較すると、多くの馬をもつ農民のほぼ三倍を支払っている（前掲の支出配分の表を参照）。われわれは共同

〔第 45 表〕

グループ	経営主の数	1家族あたり男女人数	1家族あたり働き手の数			雇農をもつ農家数
			家族員	賃金労働者	総数	
a	12	4.08	1	—	1	—
b	18	4.94	1	0.17	1.17	3
c	17	8.23	2.17	0.12	2.29	2
d	9	13.00	2.66	0.22	2.88	2
e	5	14.20	3.2	0.2	3.4	1
f	5	16.00	3.2	1.2	4.4	2
総数	66	8.27	1.86	0.21	2.07	10

体の内部での租税の配分についてかたっているのだが、それは、もし租税と公課の額を分与地一デシャチーナあたりで計算すると、その額はほぼ均等であるからである。以上にいろいろ述べてきたからには、この不均等もわれわれを驚かすはずはない。わが国の共同体では、この共同体が強制的な、賦役的な性格をたもっているかぎり、この不均等は避けられない。周知のように、農民はすべての租税を土地に応じて分けている。租税の持ち分と土地の持ち分とは、彼らにとっては「農奴（ドゥシャ）」という一つの概念のなかに融けあっている。* ところが、われわれが見たように、農民層の分解は現在の農村の両極における分与地の役割を減少させつつある。このような条件のもとでは、分与地に応じた租税配分（それは共同体の強制的性格と不可分に結びついている）が富裕な農民から貧農への租税の転嫁をもたらすのは、当然である。共同体（すなわち、連帯責任(七)と、土地を放棄する権利の欠如）は、貧農にとってますます有害なものになりつつある。**

* ヴェ・オルロフ『農民経済』、『モスクワ県統計報告集』、第四巻第一冊、――トリロゴフ『共同体と租税』、――コイスラー『ロシアにおける農民の共同体的所有の歴史と批判によせて』、――ヴェ・ヴェ『農民共同体』（『ゼムストヴォ統計の総括』、第一巻）を参照。

** ストルィピンによる共同体の破壊(八)（一九〇六年一一月）がさらに大きな損害を貧農にあたえることは、自明である。これは《enrichissez-vous》〔富め〕のロシア版である。すなわち、黒百人組(九)のいう、富農よ！ 全力をあげて奪いとれ、没落しつつある絶対主義をひたすらたすけよ！ である。（第二版の注）

（B）農民的農業の特徴づけの問題に移ることにして、

〔第 46 表〕

	1戸あたり*							
	馬をもたない農家における				馬1頭をもつ農家における			
	男女人数	借地（デシャチーナ）	作付面積（デシャチーナ）	家畜総頭数	男女人数	借地（デシャチーナ）	作付面積（デシャチーナ）	家畜総頭数
家計	4.1	—	1.5	0.8	4.9	0.6	3.4	2.6
ヴォロネジ県の4郡	4.4	0.1	1.4	0.6	5.9	0.7	3.4	2.7
サマラ県ノヴォウゼンスク郡	3.9	0.3	2.1	0.5	4.7	1.4	5.0	1.9
サラトフ県の4郡	3.9	0.4	1.2	0.5	5.1	1.6	4.5	2.3
サラトフ県カムィシン郡	4.2	0.3	1.1	0.6	5.1	1.6	5.0	2.3
ニジェゴロド県の3郡	4.1	0.2	1.8	0.7	5.2	1.1	4.4	2.4
オリョール県の2郡	4.4	0.1	?	0.5	5.7	1.0	?	2.3

＊ 作付面積は，ヴォロネジ県のは4郡ではなく，ザドンスク郡だけにかんするものである．

まずはじめに、経営にかんする一般的資料をあげよう。〔第四五表〕

この表から明らかなように、土地の貸出しと借入れ、家族数と作付面積、雇農の雇用その他の点での諸グループのあいだの関係は、家計の資料によっても、さきに検討した多数の資料によっても、まったく同様である。そればかりでない。それぞれのグループの経営にかんする絶対数の資料もまた、郡全体についての資料にきわめて近いものであることがわかる。つぎにかかげるのは、家計の資料とさきに検討した資料との比較である。〔第四六表〕

このように、馬をもたない農民と馬一頭をもつ農民の状態は、ここにしめしたすべての地方でほとんど同じであり、それゆえ家計の資料は十分に典型的なものとみなすことができる。

つぎに、種々のグループの農民経営の資産と農機具にかんする資料をあげよう。〔第四七表〕

この表は、われわれがさきに多数の資料にもとづいて述べた、いろいろなグループの農機具および家畜の所有の点での差異を、はっきり例証している。ここでは、相異なるグループの資産状態がまったく相違することがわかる。しかも、その相違は、馬までが、無産の農民のものは資力のある農民のとまったく別ものであるほどである。* 馬一頭をもつ農民の馬は、[三]本当の「生きている分数」であり、なるほど「四分の一の馬」でこそないが、たっぷりみて「五二分の二七」の馬なのである！**

＊ ドイツの農業文献のなかにドレクスラーの単行論文があるが、それには、土地面積別のいろいろなグループの土地所有

者のもつ家畜の重量にかんする資料がある。この資料は、大農およびとくに地主とくらべると、小農のもつ家畜の質がはるかに悪いことを、われわれが引用したロシアのゼムストヴォ統計の数字よりもいっそう明瞭にしめしている。私は、近い将来にこの資料を整理して出版したく思っている(第二版の注)。

** もし、農民のいろいろなグループにおける建物、農機具および家畜の価額にかんするこれらの家計の標準を、さきにあげたヨーロッパ・ロシアの四九県についての総括的資料に適用すると、五分の一の農家が残りの農民全体よりもはるかに多くの生産手段をもっていることがわかるであろう。

さらに、経営用支出の構成にかんする資料をとりあげよう。* 〔第四八表〕

* 家畜飼育のための支出はおもに現物でなされているが、その他の経営用支出は大部分が貨幣支出である。

この資料は非常に多くのことをものがたっている。それは、馬をもたない農民だけでなく、馬一頭をもつ農民の「経営」もまったくみじめなものであること、このような農民を、経営のために数百ルーブリを支出し、また年に五〇―一〇〇―二〇〇ルーブリも支払って借地しながら、農機具を改良することも、「働き手」をやとうことも、土地をひろく「買いあつめる」こともできるような、少数ではあるが強力な農民といっしょにして観察する、ありきたりの方法がまったくまちがいであることを、われわれにはっきりしめしている。* ついでに注意しておけば、馬をもたない農民が「働き手および出来高仕事」への支出が比較的多いのは、おそらく、統計家がこの項目のもとに二つのまったく異なるものを、すなわち、雇い主の農機具で作業しなければならない労働者の雇用、すなわち雇農または日雇いの雇用と、自分の農機具で雇い主の土地を耕さなければならない隣人の経営主の雇用とを、まぜこぜにしたからであろう。その意義の点で正反対のものであるこれらの「雇用」形態は、たとえばヴェ・オルロフがやったように(『モスクワ県統計報告集』、第六巻第一冊を参照)、厳密に区別する必要がある。

* 長期の借地期限、借地料の引下げ、改良にたいする補償その他を要求するカルィシェフ氏の「借地理論」は、このような「経営上手な百姓」にはどんなにか好ましいにちがいない。これこそまさに、このような百姓に必要なものなのである。

こんどは、農業からの収入にかんする資料を観察しよう。残念ながら、そういう資料は『統計集』ではごく不十分にしかつくられていない(いくぶんかは、おそらく、そういう資料の数が多くないからであろう)。たとえば、収穫率の問題が研究されていないし、個々の種類の生産物の販売

ーブリ							
家畜と農機具類	同、作付一デシャチーナあたり	一経営あたり建物の数	一経営あたり家畜総数（大家畜に換算）	役畜一頭の価額	耕作用具をもたない経営主の数	改良農具をもつ経営主の数	改良農具の価額
26.60	18.04	3.8	0.8	—	8	—	—
91.07	26.56	5.9	2.6	27	—	—	—
222.24	32.04	7.6	4.9	37	—	—	—
454.04	39.86	10.2	9.1	61	—	1	50
616.22	34.04	11.4	12.8	52	—	1	50
1,208.05	57.30	13.0	19.3	69	—	3	170.3
287.03	38.20	7.5	5.8	52	8	5	270.3

〔第 48 表〕

群別	1戸あたりの経営用支出の構成（ルーブリ）								
	牧夫への支出および雑費	補充と修理			借地	働き手および出来高仕事への支払い	左欄の合計	家畜の飼料	総計
		建物	農機具と家畜	計					
a	0.52	2.63	0.08	2.71	0.25	3.52	7.00	8.12	15.12
b	2.94	4.59	5.36	9.95	6.25	2.48	21.62	36.70	58.32
c	5.73	14.38	8.78	23.16	17.41	3.91	50.21	71.21	121.42
d	12.01	18.22	9.70	27.92	49.32	6.11	95.36	127.03	222.39
e	19.32	13.60	30.80	44.40	102.60	8.20	174.52	173.24	347.76
f	51.42	56.00	75.80	131.80	194.35	89.20	466.77	510.07	976.84
平均	9.37	13.19	13.14	26.33	35.45	10.54	81.69	98.91	180.60

やその販売の条件についての情報もない。だから次の簡単な表をあげるだけにとどめる。

〔第四九表〕

この表では、はなはだしい例外がすぐに目につく。すなわち、最上級のグループでは、作付面積が最大であるにもかかわらず、農業からの貨幣収入のパーセントがはなはだしく低い。こうして、最も大規模な農業経営が、一見、最も現物経済的であるように見える。この外観上の例外をもっと立ちいって観察することは、きわめて興味深い。この例外は、農業と企業的性格の「営業」との結びつきという、きわめて重要な問題を明らかにしてくれる。われわれがすでに見たように、多くの馬をもつ経営主の家計では、この種

〔第　47　表〕

グループ	1経営あたりの価額（ルーブリ）						ル
	建物	農機具	家畜と家禽	家財道具	衣類	総計	総額男女一人あたりの
a	67.25	9.73	16.87	14.61	39.73	148.19	36.29
b	133.28	29.03	62.04	19.57	61.78	305.70	61.83
c	235.76	76.35	145.89	51.95	195.43	705.38	85.65
d	512.33	85.10	368.94	54.71	288.73	1,309.81	100.75
e	495.80	174.16	442.06	81.71	445.66	1,639.39	115.45
f	656.20	273.99	934.06	82.04	489.38	2,435.67	152.23
総数	266.44	74.90	212.13	41.24	184.62	779.33	94.20

〔第　49　表〕

グループ	農業からの収入（ルーブリ）				
	総収入		貨幣収入		
	1経営あたり	男女1人あたり	1経営あたり	農業からの総収入にたいする　%	1経営あたりの営業収入
a	57.11	13.98	5.53	9.68	59.04
b	127.69	25.82	23.69	18.55	49.22
c	287.40	34.88	54.40	18.93	108.21
d	496.52	38.19	91.63	18.45	146.67
e	698.06	49.16	133.88	19.17	247.60
f	698.39	43.65	42.06	6.02	975.20
	292.74	35.38	47.31	16.16	164.67

の営業の意義はとりわけ大きい。いま観察している資料から判断すると、この地方の農民ブルジョアジーにとっては、農業を商工業企業と結びつけようという志向がとくに典型的である*。第一に、この種の経営主を純粋の農耕者と対比するのはまちがいであること、第二に、このような条件のもとにある農業はしばしば現物経済的に見えるにすぎないことは、容易にわかる。農業に農産物の工業的加工（製粉、搾油、じゃがいも澱粉の製造、酒の醸造、その他の生産業）が結びつけられる

〔第 50 表〕

グループ	男女1人あたりの消費								
	穀類生産物					同左，ライ麦に換算（プード）			肉類
	ライ麦粉（メーラ）	大麦粉と黍粉（プード）	黍とそば（メーラ）	小麦粉と上質小麦粉（フント）	じゃがいも（メーラ）	ライ麦と小麦	その他の穀類	計	（プード）
a	13.12	0.12	1.92	3.49	13.14	13.2	4.2	17.4	0.59
b	13.21	0.32	2.13	3.39	6.31	13.4	3.0	16.4	0.49
c	19.58	0.27	2.17	5.41	8.30	19.7	3.5	23.2	1.18
d	18.85	1.02	2.93	1.32	6.43	18.6	4.2	22.8	1.29
e	20.84	—	2.65	4.57	10.42	20.9	4.2	25.1	1.79
f	21.90	—	4.91	6.25	3.90	22.0	4.2	26.2	1.79
	18.27	0.35	2.77	4.05	7.64	18.4	3.8	22.2	1.21

と、そのような経営の貨幣収入は、農業からの収入ではなく産業施設からの収入だとされかねない。ところが実際には、農業はこの場合、現物経済的ではなく、商業的であろう。同じことが、なんらかの産業企業（たとえば駅伝業）のために役だてられる雇農を扶養し馬を飼育するのに大量の農産物を現物で消費する経営についても、言われなければならない。そしてまさにこの種の経営を、われわれは最上級のグループの経営のなかに見いだすのである（コロトヤク郡の家計第一号。一八人の家族で、家族の働き手四人、雇農五人、馬二〇頭。農業からの収入は一、二九四ルーブリで、そのほとんどすべてが現物であるが、産業企業からの収入が二、六七五ルーブリある。そして一般的「平均」を引きだすのに、このような「現物経済的農民経営」が、馬をもたない経営および馬一頭をもつ経営といっしょにされている）。われわれはこの例によって、農業経営の規模と種類による分類を「営業的」経営の規模と型による分類と結合することがどれほど重要であるかを、またもや知るのである。

＊　産業施設や企業から収入を得ているものは、馬をもたない一八一二人の経営主のうちには一人もおらず、馬一頭をもつ一八人の経営主のうちには一人、馬二頭をもつ一七人の経営主のうちには二人、馬三頭をもつ九人の経営主のうちには三人、馬四頭をもつ五人の経営主のうちには二人、馬四頭以上をもつ五人の経営主のうちには四人いる。

（C）こんどは農民の生活水準にかんする資料を見よう。食料のための現物支出は、『統計集』にはその全部がしめされているわけではない。われわれは主要なもの、すな

〔第 51 表〕

グループ	1 人 あ た り (ループリ)									
	すべての粉類と，ひき割	野菜，植物油および果物	じゃがいも	農産物計	畜産物計*	購入生産物計**	生産物総計	そのうち貨幣で支払われる分	貨幣支出 農産物にたいする	貨幣支出 畜産物にたいする
a	6.62	1.55	1.62	9.79	3.71	1.43	14.93	5.72	3.58	0.71
b	7.10	1.49	0.71	9.30	5.28	1.79	16.37	4.76	2.55	0.42
c	9.67	1.78	1.07	12.52	7.04	2.43	21.99	4.44	1.42	0.59
d	10.54	1.34	0.85	12.64	6.85	2.32	21.81	3.27	0.92	0.03
e	10.75	3.05	1.03	14.83	8.79	2.70	26.32	4.76	2.06	—
f	12.70	1.93	0.57	15.20	6.37	6.41	27.98	8.63	1.47	0.75
	9.73	1.80	0.94	12.47	6.54	2.83	21.84	5.01	1.78	0.40

* 牛肉，豚肉，豚脂，羊肉，バター，乳製品，鶏および卵．

** 塩，塩漬魚と鮮魚，にしん，ウォトカ，ビール，茶および砂糖．

わち農産物と肉類を*とりだそう。〔第五〇表〕

* このことばのもとに、『統計集』のなかの牛肉、羊肉、豚肉、豚脂の欄をまとめた。なお、ライ麦への他の穀類の換算は、ヤンソンの『比較統計』の規準によっておこなったが、この規準はニジェゴロドの統計家たちによって採用されている（ゴルバートフ郡についての『材料』を参照。換算の根拠は蛋白質の含有率である）。

この表から、われわれが馬をもたない農民と馬一頭をもつ農民をいっしょにして、それをその他の農民と対置させたのは正しかった、ということがわかる。上記の二つの農民グループの特徴的な標識は、食物の不足とその質の劣悪化（じゃがいも）である。馬一頭をもつ農民の食事は、ある点では、馬をもたない農民よりも劣悪ですらある。一般的な「平均」は、この問題についてさえまったくの虚構であることがわかるのであって、それは、貧農のほぼ一倍半の農耕生産物と三倍の肉を*消費する、資力ある農民の満足な食物によって、農民大衆の不十分な食物をつつみかくすのである。

* 農村での農民の肉の消費が都会人とくらべてどれほど少ないかは、次の断片的な資料からでも明らかである。すなわち、モスクワでは一九〇〇年に市の屠殺場で屠殺された家畜が約四〇〇万プード、価額にして一八、九八六、七一四ルーブリ五九カペイカであった（『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』〔『モスクワ報知』〕、一九〇一年、第五五号）。これは、男女一人あたりで年間約四プード、または約一八ルーブリにあたる（第二版の注）。

農民の食物にかんするその他の資料を比較するためには、

〔第 52 表〕

グループ	男女1人あたり(ルーブリ)								
	家財,衣類	燃料(藁)	衣類,靴類	照明	その他の家庭用品	食物を除く個人的消費総額	そのうち貨幣支出	食物その他の個人的消費総額	そのうち貨幣支出
a	9.73	0.95	1.46	0.23	1.64	4.28	3.87	19.21	9.59
b	12.38	0.52	1.33	0.25	1.39	3.49	3.08	19.86	7.84
c	23.73	0.54	2.47	0.22	2.19	5.42	4.87	27.41	9.31
d	22.21	0.58	1.71	0.17	3.44	5.90	5.24	27.71	8.51
e	31.39	1.73	4.64	0.26	3.78	10.41	8.93	36.73	13.69
f	30.58	1.75	1.75	0.21	1.46	5.17	3.10	33.15	11.73
	22.31	0.91	2.20	0.22	2.38	5.71	4.86	27.55	9.87

すべての生産物をルーブリであらわしたその価額でとらえなければならない。〔第五一表〕

このように、農民の食物にかんする一般的資料は、さきに述べたことを確認している。三つのグループがはっきりと区別される。すなわち、下級のグループ(馬をもたないものと、馬一頭をもつもの)、中位のグループ(馬二頭をもつものと、馬三頭をもつもの)、および、下級のグループのほぼ二倍もよい食物をとっている上級のグループである。一般的な「平均」は両極のグループを消しさるものである。食料にたいする貨幣支出は、両極のグループで、すなわち、農村プロレタリアと農村ブルジョアジーのもとで、絶対的にも相対的にも最大となっている。前者は、中位の農民よりも消費は少ないのにより多く購入している。彼らは最も必要な農耕生産物に不足していて、それを買っているのである。後者がより多く購入するのは、とくに非農産物の消費をひろげて、より多くを消費するからである。この両極のグループを対比すると、資本主義国で個人的消費資料のための国内市場がどのようにしてつくりだされるかが、はっきりしめされる。*

* 農産物にたいする貨幣支出のうちで第一位を占めるのはライ麦の購入——おもに貧農による——であり、次は野菜の購入である。野菜のための支出は、男女一人あたり八五カペイカ(グループ別に見るとbグループの五六カペイカからeグループの一ルーブリ三一カペイカまで)で、そのうち貨幣支出は四七カペイカである。この興味深い事実は、都市住民についてはいうまでもなく、農村住民のなかにさえ商業的農業の形態の一つ——すなわち野菜栽培——の生産物のための市場が形成されつつあることを、われわれにしめしている。植物油のための支出は、三分の二が現物でなされている。つまり、この分野ではまだ家内生産と原始的な手工業が優勢なのである。

〔第 53 表〕

グループ	1経営あたりの貨幣支出(ルーブリ)				同　(%)				支出における貨幣部分の%	
	個人的消費用	経営用	租税と公課	計	個人的消費用	経営用	租税と公課	計	個人的消費用	経営用
a	39.16	7.66	15.47	62.29	62.9	12.3	24.8	100	49.8	50.6
b	38.89	24.32	17.77	80.98	48.0	30.0	22.0	100	39.6	41.7
c	76.79	56.35	32.02	165.16	46.5	34.1	19.4	100	34.0	46.4
d	110.60	102.07	49.55	262.22	42.2	39.0	18.8	100	30.7	45.8
e	190.84	181.12	67.90	439.86	43.4	41.2	15.4	100	38.0	52.0
f	187.83	687.03	84.34	959.20	19.6	71.6	8.8	100	35.4	70.3
	81.27	102.23	34.20	217.70	37.3	46.9	15.8	100	35.6	56.6

個人的消費のためのその他の支出は、次のとおりである。〔第五二表〕

これらの支出を男女一人あたりで計算することは、かならずしも正しくない。なぜなら、たとえば燃料、照明、家内調度品などの価額は、家族の人数に比例するものではないからである。

この資料もまた、農民層が（生活水準の高さの点で）三つの異なるグループに分かたれることをしめしている。そのさい、次のような興味ある特徴が見られる。すなわち、個人的消費全体にたいする支出のうちの貨幣部分は、下級の諸グループで最大になっている（*a*では支出の約半分が貨幣による）。ところが上級の諸グループでは貨幣支出は高くならず、約三分の一を占めるにすぎない。このことを、貨幣支出のパーセントは一般に両極のグループで高くなるという、さきに指摘した事実と、どのように調和させたらよいであろうか？　明らかに、上級の諸グループでは貨幣支出は主として生産的消費（経営のための支出）に向けられるのにたいして、下級の諸グループでは個人的消費に向けられるのである。つぎにかかげるのは、そのことについての正確な資料である。〔第五三表〕

したがって、農村プロレタリアートへの農民の転化は主として消費資料のための市場をつくりだし、農村ブルジョアジーへの農民の転化は主として生産手段のための市場をつくりだす。いいかえれば、「農民層」の下級のグループでは労働力の商品への転化が、上級のグループでは生産手段の資本への転化が、見うけられるのである。これら二つの転化こそ、まさに、資本主義国一般にかんする理論で確かめられるあの国内市場創出過程をもたらすのである。だからこそフリードリヒ・エンゲルスは一八九一年の飢饉について、それは資本主義のための国内市場の創出を意味する、と書いたのである[三]。この命題は、農民層の零落のなか

に「人民的生産」(六三)の衰微だけを見て、家父長制経済の資本主義経済への転化を見ないナロードニキには、理解できないものである。

ニコライーオン氏は国内市場について一書を書いたが、農民層の分解による国内市場の創出過程には注意を向けなかった。その彼は論文『わが国家収入の増大はなんによって説明すべきか?』(『ノーヴォエ・スローヴォ』(六四)、一八九六年、第五号、二月)のなかでは、この問題にふれて次のように論じている——アメリカ労働者の収入の表は、収入が低ければ低いほど食料のための支出が相対的に大きいことをしめしている。したがって、もし食料の消費が減少すれば、他の生産物の消費はなおいっそう減少する。ところでロシアでは穀物とウォトカの消費が減少しているが、これは他の生産物の消費も減少していることを意味する。このことから、資力ある農民「層」(七〇ページ)のより多くの消費も大衆の消費の低下によって相殺されてあまりがあることになる、と。この議論には三つの誤りがある。第一に、ニコライーオン氏は農民を労働者にすりかえて、問題を飛びこえている。問題になっているのはまさに労働者と経営主の創出過程のことである。第二に、ニコライーオン氏は、農民を労働者にすりかえたため、いっさいの消費を個人的消費に帰してしまい、生産的消費のこと、生産手段の市場のことを忘れている。第三に、ニコライーオン氏は、農民層の分解過程は、同時にまた商品経済が現物経済にとって代わる過程でもあるということを、したがってまた、市場は、消費の増加によってではなく、現物的消費(たとえより多量であるとしても)が貨幣的消費(たとえより少量であるとしても)に転化することによって創出されうるということを、忘れている。われわれはたったいま個人的消費資料にかんして、馬をもたない農民は中位の農民よりも消費は少ないがより多く購入していることを見た。前者はいっそう貧しくなってゆくが、それと同時にいっそう多くの貨幣を受けとって支出するのである。そしてこの過程のまさにこの二つの側面こそが資本主義にとって必然的なのである。*

* 一見したところ逆説的に見えるこの事実は、現実生活で一歩ごとに出あう資本主義の基本的諸矛盾と、実際にはまったく調和している。だから、農村の日常生活を注意深く観察するものは、理論とはまったく無関係にこの事実に気づくことができた。エンゲリガルトは、クラークや、商人その他について こう言っている——「彼の活動の発展にとっては、農民が貧乏であること……農民が多くの貨幣を手に入れることが重要である」(『農村からの手紙』、四九三ページ)。「堅実な(原文のまま!!)農耕生活」(同所)への共感も、ときにはエンゲリガルトがかの名高い共同体のきわめて奥深い矛盾をあ

〔第 54 表〕

グループ	成年の働き手1人あたり									
	消費した生産物							支出（ルーブリ）		
	ライ麦粉（メーラ）	大麦粉と黍粉（プード）	黍とそば（メーラ）	小麦粉と上質小麦粉（フント）	じゃがいも（メーラ）	農産物計（ライ麦に換算）	肉（プード）	食料	その他の個人的消費	計
a	17.3	0.1	2.5	4.7	17.4	23.08	0.8	19.7	5.6	25.3
b	18.5	0.2	2.9	4.7	8.7	22.89	0.7	22.7	4.8	27.5
c	26.5	0.3	3.0	7.3	12.2	31.26	1.5	29.6	7.3	36.9
d	26.2	1.4	4.3	2.0	9.0	32.21	1.8	30.7	8.3	39.0
e	27.4	—	3.4	6.0	13.6	32.88	2.3	32.4	13.9	46.3
f	30.8	—	6.9	8.5	5.5	36.88	2.5	39.3	7.2	46.5
	24.9	0.5	3.7	5.5	10.4	33.78	1.4	29.1	7.8	36.9

ばくことを妨げなかったのである。

最後に、家計の資料を利用して農民と農村労働者の生活水準を比較しよう。個人的消費の規模を、人口一人あたりではなく、成年働き手一人あたりで（さきに統計集でのニジェゴロドの統計家の規準によって）算出すると、次の表が得られる。〔第五四表〕

これを農村労働者の生活水準にかんする資料と対比するためには、われわれは、第一に、労働の平均価格をとることができる。一〇年間（一八八一－一八九一年）に、ヴォロネジ県における年雇いの雇農一人への平均支払額は五七ルーブリで、生計費も計算に入れると九九ルーブリであったから、*生計費は四二ルーブリかかったわけである。分与地をもつ雇農と日雇い（馬をもたない農民と馬一頭をもつ農民）の個人的消費の規模は、この水準よりも低い。一家族の生計費総額は、馬をもたない「農民」にあっては（四人家族で）わずか七八ルーブリ、馬一頭をもつ「農民」にあっては（五人家族で）九八ルーブリにすぎず、すなわち、雇農の生計費にかかるよりも少ない。（われわれは、馬をもたない農民と馬一頭をもつ農民の家計から経営用支出および租税と公課のための支出を除いた。なぜなら、この地方では分与地は租税よりも安くない価格で貸しだされているからである。）当然予期されたように、分与地に緊縛されている労働者の状態は、このきずなから解放されている労働者の状態よりも悪い（分与地への緊縛が債務奴隷制や人格的隷属の関係をどれほどはなはだしく発展させるかについては、いまさらいうまい）。雇農の貨幣支出は、馬一頭をもつ農民や馬をもたない農民の個人的消費のための貨

〔第 55 表〕

	オリョール県における雇農1人の生計			ヴォロネジ県における「農民」1人の生計	
	最低	最高	平均	馬1頭をもつ農民	馬をもたない農民
ライ麦粉（プード）	15.0	24.0	21.6	18.5	17.3
ひき割（プード）	4.5	9.0	5.25	{ 2.9	2.5 }
きび（プード）	1.5	1.5	1.5	{ + 4.8（フントの黍粉）	4.9 }
じゃがいも（メーラ）	18.0	48.0	26.9	8.7	17.4
計（ライ麦に換算）*	22.9	41.1	31.8	22.8	23.0
脂肪（フント）	24.0	48.0	33.0	28.0	32.0
全食糧の年間価額（ループリ）	—	—	40.5	27.5	25.3

* さきにしめした方法で算出.

幣支出よりも、比較にならないほど多い。したがって、分与地への緊縛は国内市場の成長をはばむのである。

* 『経営主から得られた農業上および統計上の情報』、農務省刊行、第五冊、サンクト・ペテルブルグ、一八九二年。エス・ア・コロレンコ『経営における自由な賃労働……』。

第二に、われわれは雇農の消費についてのゼムストヴォ統計の資料を利用することができる。『オリョール県統計報告集』のなかから、一五八件の雇農労働にかんする情報にもとづいたカラチェフ郡についての資料（第五巻第二冊、一八九二年）をとりあげよう。* 一ヵ月分の食扶持を一年間に換算すると、次の表が得られる。〔第五五表〕

* オリョール県とヴォロネジ県との条件の相違は大きなものではないし、あげられている資料も、ごらんのとおり、普通のものである。われわれは、エス・ア・コロレンコの前掲書の資料はとらない（マレッス氏の論文『収穫の影響……』、第一巻、一一ページにおけるこれらの資料の対比を参照）。なぜなら、これらの資料を提供した地主諸君がときとして「空想をたくましくした」ことは、著者自身でさえ認めているところだからである。

したがって、馬一頭をもつ農民と馬をもたない農民は、その生活水準の点では雇農よりも高くはなく、むしろ雇農の最低の生活水準に近くさえある。

農民の下級のグループにかんする資料の概観から得られる一般的結論は、したがって、次のとおりである。下層の農民を農業から駆逐しつつある他の諸グループにたいする関係という点でも、家族の生計費の一部をまかなうにすぎない経営規模という点でも、生活水準の源泉（労働力の販売）という点でも、最後にまた、生活水準の点でも、この

グループは、分与地をもつ雇農および日雇いのなかに入れられるべきものである。*

* おそらく、ナロードニキは、われわれが雇農と下級の農民グループの生活水準の高さを対比したことから、われわれが農民の土地喪失に「賛成している」等々の結論を引きだすであろう。だがそのような結論はまちがっていよう。さきに述べたことから出てくることは、土地を自由に処分し、分与地を拒否し、共同体から脱退するという農民の権利にたいするいっさいの拘束の廃止にわれわれは「賛成する」、ということだけである。分与地をもつ雇農であるほうが有利か、あるいは分与地をもたない雇農であるほうが有利かの判定者となりうるのは、農民自身だけである。だから、右のような拘束は、どんな場合にも、またなにによっても、是認されうるものではない。ナロードニキはこれらの拘束を弁護することによって、自分をわが国の大土地所有者たちの利益への奉仕者にしているのである。

農民の家計にかんするゼムストヴォ統計資料の叙述を終えるにあたって、われわれは、『価格査定報告集』の編者で、有名な書物『収穫および穀物価格の影響……』(第二巻) のなかの農民の家計についての論文の筆者であるシチェルビーナ氏が、家計の資料の加工のためにもちいている方法の検討に、数言ついやさないわけにはいかない。シチェルビーナ氏はなぜか『報告集』のなかで、自分は「有名な経済学者K・マルクス」の理論を利用している、と言明している(一一一ページ)。だが実際には、彼は、不変資本と可変資本の区別を固定資本と流動資本の区別と混同したり(同所)、発展した資本主義のこれらの術語やカテゴリーをまったくなんの意味もなく農民的農業に引きうつしたり(随所)等々して、マルクスの理論をまるっきりゆがめている。シチェルビーナ氏における家計資料の加工は、帰するところ、「平均値」の全面的な、信じがたいほどの乱用につきる。すべての価格査定報告は、「平均的」農民にかんするものである。四つの郡について算出した土地からの収入が、経営数で除されている(馬をもたない農民では、この収入は一家族あたり約六〇ルーブリであるが、富農では約七〇〇ルーブリであることを、想起されたい)。「一経営あたりの」「不変資本の大きさ」(原文のまま!?)(一一四ページ)、すなわち全資産の価格が算定され、農機具の「平均」価額が算定され、商工業施設(原文のまま!)の平均価額が一経営あたり一五ルーブリと算定されている。シチェルビーナ氏は、これらの施設は富裕な少数者の私的所有となっているという些事を無視して、それらをすべてのものに「均分に」分けている! 借地のための「平均」支出が算定されている(一一八ページ)が、それは、われわれが見たように、馬一頭をもつ農民にあっては六ルーブリであるが、富農にあっては一〇〇―二〇〇ルーブリであ

る。これらすべてが合算されて、経営数で除されているのである。「資本の修理」のための「平均」支出さえもが算定されている(同所)。それがなにを意味するかは、アラーの神しかご存じない。もしそれが農機具や家畜の補充と修理を意味するのなら、われわれがすでにあげた数字がここにある。すなわち、この支出は、馬をもたない農民にあっては八(ただの八)カペイカであるが、富農にあっては七五ルーブリである。もしわれわれがこのような「農民経営」を合算し、合算された経営の数でそれを除するなら、シチェルビーナ氏がすでにオストロゴージスク郡統計集(第二巻第二冊、一八八七年)のなかで発見し、その後これほどもみごとに適用している「平均的消費の法則」というものが得られることは、明らかではないか? そしてそのつぎに、このような「法則」から、「農民は、最小限の欲望ではなく、欲望の平均水準をみたしている」(一二三ページその他多くの箇所)とか、農民経営は特殊な「発展の型」を呈示している(一〇〇ページ)とか、その他等々の結論をくだすことは、もはやわけはない。農村プロレタリアートと農民ブルジョアジーとを「均す」というこの単純な方法を補強するのが、すでにわれわれにおなじみの、分与地による分類である。もしわれわれがこの方法を、たとえば、家計の資料に適用するなら、われわれは、たとえば次のような農民を一つのグループに(一家族あたり一五—二五デシャチーナの分与地をもつ、分与地の多い農民のカテゴリーに)合併することになるであろう。すなわち、あるものは、分与地(二三・五デシャチーナ)の半分を貸しだし、一・三デシャチーナの作付をし、主として「個人的営業」によって生活し(不思議なことに、それはなんと聞こえのよいことであろう!)、男女一〇人にたいして一九〇ルーブリの収入を得ている(コロトヤク郡の家計第一〇号)。他のものは、一四・七デシャチーナを借地してつけくわえ、二三・七デシャチーナの作付をし、数人の雇農をおき、男女一〇人にたいして一、四〇〇ルーブリの収入を得ている(ザドンスク郡の家計第二号)。雇農や日雇いの経営を、労働者をやとう農民の経営と合算し、合算された経営の数でその総計を除するなら、特殊な「発展の型」が得られることは明白ではないか? いつでも、もっぱら、農民経営にかんする「平均」資料を利用しさえすればよい。そうすれば、農民層の分解といういっさいの「倒錯した考え」は未来永劫に追いはらわれてしまうことになろう。シチェルビーナ氏は、『収穫の影響……』という書物のなかの論文でこのような方法を en grand〔大規模に〕適用して、まさにそのようにふるまっている。ここでは、ロシアの農民層全体の家計を計算しようという壮大な企てがなさ

れているが、すべてが、試験ずみの、あの同じ「平均」によってなされている。経営主と賃金労働者とは、彼らがどのような形態の土地所有によって統一されていようとも、また彼らのあいだの過渡的な型がどのように多数で多様であろうとも、厳密に区別されなければならないという、経済統計の最も初歩的な要求が、ナロードニキ主義の偏見のために忘れさられたという事実を、後世のロシア経済学文献史家たちは驚きの念をもって書きしるすであろう。

一三　第二章からの結論

以上に観察した資料から出てくる最も主要な命題を要約しよう。

（一）現在のロシアの農民層のおかれている社会経済的環境は、商品経済である。中央農業地帯（ここは東南辺境地方や工業的諸県とくらべて、この点で最もおくれている のだが）においてさえ、農民はまったく市場に従属しており、租税についてはいうまでもなく、個人的消費においても経営においても市場に依存している。

（二）農民層（農耕的および共同体的）のなかの社会経済関係の構造は、あらゆる商品経済とあらゆる資本主義に固有なすべての矛盾が現存することを、われわれにしめしている。すなわち、競争、経済的自立のための闘争、土地の横奪（購入と借入れ）、少数者の手への生産の集中、プロレタリアートの隊列への多数者の追いやり、商業資本と雇農雇用による少数者の多数者搾取が、それである。農民層のなかには、資本主義体制に特有な、この矛盾した形態をもたないような、すなわち、闘争と利益の反目をあらわさず、あるものにとってのプラスと他のものにとってのマイナスを意味しないような経済現象は、なに一つない。借地も、土地購入も、正反対の型の「営業」も、そうであり、経営の技術的進歩もまたそうである。

ロシアにおける資本主義という問題ばかりでなく、ナロードニキの学説一般の意義という問題においても、われわれはこの結論に絶大な意義を付与する。これらの矛盾こそわれわれに、「共同体的」農村における経済関係の構造がけっして特殊な制度（ウクラード）ではなく、通常の小ブルジョア的制度（ウクラード）であることを、明瞭に、そして反論の余地なくしめしている。この半世紀のあいだわが国を支配していた諸理論がなんといおうとも、ロシアの共同体農民は、資本主義の敵対物ではなく、それどころか、資本主義の最も奥深く最も堅固な基礎である。最も奥深いというわけは、まさにここで、どんな「人為的な」働きかけからも遠くはなれていて、資本主義の発展を拘束する諸

制度があるにもかかわらず、われわれは「共同体」そのものの内部に資本主義の諸要素が不断に形成されつつあるのを見るからである。最も堅固な、というわけは、一般に農業にたいして、とりわけ農民にたいして、昔からの伝統、家父長制的生活様式の伝統が、きわめて大きな力でのしかかっており、その結果、資本主義の変革的作用（生産力の発展、すべての社会関係の変化、その他）が、ここでは最も緩慢にまた漸次に現われているからである。*

＊『資本論』、第一巻、第二版、五二七ページを参照。(六)

(三) 農民層のなかのすべての経済的矛盾の総体こそ、われわれが農民層の分解と名づけているものを構成する。農民自身が、「脱農民化（ラスクレスチャニヴァーニエ）」という用語で、この過程をこのうえなく適切かつ鮮明に特徴づけている。*この過程は、古い家父長制的農民層の根本からの破壊と新しい型の農村住民の創出を意味する。

＊『ニジェゴロド県農業概観』一八九二年度版。

これらの型の特徴づけに移るまえに、次のことを注意しておこう。この過程の指摘は、わが国の文献では非常に古くから非常にしばしばなされてきた。たとえば、すでにヴァシーリチコフ氏は、ヴァルーエフ委員会(六)の仕事を利用して、ロシアにおける「農村プロレタリアート」の形成と「農民身分の分解」とを確認した（『土地所有と農業』、第一版、第一巻、第九章）。この事実については、ヴェ・オルロフも（『モスクワ県統計報告集』、第四巻第一冊、一四ページ）、その他多くの人たちも指摘した。だがこれらの指摘はすべてまったく断片的なものにとどまっていた。この現象を系統的に研究する試みは、一度もなされたことがなかった。そのため、ゼムストヴォ統計の戸別調査のきわめて豊富な資料があるにもかかわらず、われわれはいままでのところこの現象について不十分な知識しかもっていない。この問題にふれた著者の大多数が農民層の分解を、ナロードニキ一般やとりわけカルィシェフ氏（彼の『借地』にかんする著書や『ルースコエ・ボガーツトヴォ』所収の諸論文を参照）が好んでかたるように、たんなる財産上の不平等の発生として、たんなる「分化」として見るという事情もまた、このことと関連している。財産上の不平等の発生が全過程の出発点であることは疑いないが、しかし過程はけっしてこの「分化」だけにつきるものではない。古くからの農民層は「分化」するだけではない。それはまったく破壊され、存在しなくなるのであり、まったく新しい型の――商品経済と資本主義的生産とが支配する社会の基盤である複数の型の――農村住民によって駆逐されるのである。それらの型とは、農村ブルジョアジー（主として小ブルジョアジー）と農村プロレタリアートであり、農業に

おける商品生産者の階級と農業賃金労働者の階級である。

農業資本主義の形成過程の純理論的分析が、小生産者の分解をこの過程の重要な要因として指摘していることは、最高度に教訓的である。われわれが念頭においているのは、『資本論』第三巻の最も興味深い章のひとつ、ほかならぬ第四七章「資本主義的地代の創生」である。この創生の出発点として、マルクスは雇役地代（Arbeitsrente〔労働地代〕*）をとっている——「この場合には直接的生産者は、週の一部分では、事実上または法律上彼のものである労働用具（犂、家畜、その他）をもって、事実上彼のものである土地を耕し、週の残りの日を領主の所有地で領主のために無償で労働する」（『資本論』、第三巻第二冊、三二三ページ、ロシア語訳、六五一ページ）(43)。その次の形態の地代は、生産物による地代（Produktenrente）または現物地代であって、この場合は、直接的生産者は、全生産物を彼自身の耕作する土地で生産し、全剰余生産物を土地所有者に現物で引きわたす。生産者は、ここではより自主的となり、自分の労働によって、彼の不可欠の要求をみたすだけの生産物量以上に、いくらかの超過分を獲得できるようになる。地代の「この形態とともに、個々の直接的生産者たちの経済状態にこれまでよりも大きな相違が生ずるであろう。少なくともその可能性が存在し、この直接的生産者が、こんどはみずから他人の労働を直接に搾取する手段をすでに手に入れているという可能性が、存在する」（三二九ページ、ロシア語訳、六五七ページ）(44)。こうして、現物経済が支配しているときにすでに、隷属農民の自立性が拡大しはじめると、はやくも彼らの分解の萌芽が現われる。だがこれらの萌芽が発展しうるのは、次のような地代形態のもと、すなわち、現物地代のたんなる形態変化である貨幣地代のもとでだけである。直接的生産者は土地所有者に、生産物ではなく、これら生産物の価格を引きわたす。**この種類の地代の基礎は、いままでと同じである。すなわち、直接的生産者は従来どおり土地の伝統的な保有者である。しかしこの基礎はここでは解体にむかっている」（三三〇ページ）。貨幣地代は「商業、都市工業、商品生産一般が、したがってまた貨幣流通が、すでにかなり発展していることを前提する」（三三一ページ）(45)。隷属農民の土地所有者にたいする伝統的な、慣習法的な関係が、ここでは、契約にもとづく純粋に貨幣的な関係に転化する。このことは、一方では、旧来の農民層の収奪にみちびくが、他方では、農民による自分の土地と自分の自由との買取りにみちびく。「現物地代の貨幣地代への転化は、さらに、無産の、貨幣でやとわれる日雇労働者階級の形成を必然的にともなうだけでなく、それによって先行されさえする。だから、この

新しい階級がまだ散在的にしか現われていないその発生期には、よりよい地位にある地代負担（rentepflichtigen）農民のもとでは、……自分の計算で農村賃金労働者を搾取する習慣が必然的に発展した。こうして彼らのもとでは、ある特殊の財産をためて自分自身を将来の資本家に転化させる可能性がしだいに発展する。こうして、旧来の、みずから労働する土地保有者たち自身のあいだに、資本主義的借地農業者の培養所ができるのであるが、その発展は、農村の外部での資本主義的生産の全般的発展によって条件づけられる」（『資本論』、第三巻第二冊、三三二ページ、ロシア語訳、六五九—六六〇ページ）[20]。

* ロシア語訳では（六五一ページ以下）、この術語は「勤労地代（トルドヴァーヤ・レンタ）」という表現で訳されている。私は私の翻訳のほうが正しいと考える。なぜなら、ロシア語には、まさに、土地所有者のための隷属農民の労働を意味する、「雇役（オトラボートカ）」という特別の表現があるからである。

** 貨幣地代は、資本主義的地代から厳密に区別されなければならない。後者は、農業に資本家と賃金労働者がいることを前提するが、前者は隷属農民がいることを前提する。資本主義的地代は、企業家利潤を控除したあとに残る剰余価値の一部であるが、貨幣地代は、農民が土地所有者に支払う、全剰余生産物の価格である。ロシアにおける貨幣地代の実例は、地主にたいする農民の年貢である。わが国の農民の現在の租税のなかにも貨幣地代が一定部分あることは、疑いない。ときには農民の借地料も、土地にたいする高額の支払いのために農民の分け前として貧弱な賃金以上のものが残らないときには、貨幣地代に近いものである。

（四）農民層の分解は、中位の「農民層」の減少によって両極のグループを発展させながら、農村住民の二つの新しい型をつくりだす。これら二つの型に共通な標識は経済の商品的、貨幣的性格である。第一の新しい型は、農村ブルジョアジーあるいは富裕な農民層である。これに属するのは、多様なあらゆる形態の商業的農業（われわれはこれらの形態のうちの最も主要なものを第四章で記述する）をいとなむ自立した経営主、それについで商工業施設の所有者、商業企業の経営主、等々である。商業的農業と商工業企業との結合は、この農民層に特有な種類の「農業と営業との結合」である。この富裕な農民層のなかから借地農業者の階級がつくりあげられる。というのは、穀物販売のための借地は（農耕地帯では）、彼らの経営できわめて大きな役割を、しばしば分与地よりも大きな役割を、演じるからである。ここではたいていの場合、経営の規模は家族労働力を上まわっている。だから農村の雇農の、それ以上にまた日雇いの一隊の形成が、富裕な農民層の存立の不可欠な条件である。* この農民層が純収入の形で手に入れる自由

な貨幣は、わが国の農村で過度に発展している商業と高利貸業に向けられるか、あるいは——好条件がある場合には——土地の購入、経営の改善その他に投下される。ひとことでいえば、これは小さな土地経営者である。人数のうえでは、農民ブルジョアジーは全農民層のうちのわずかな少数者をなすにすぎず、おそらく、農民総数の五分の一（これは人口のほぼ一〇分の三にあたる）を超えない。しかもこの比率は、もちろん、いろいろな地方でいちじるしく大小がある。だが、農民経済の総体のなかでの——農民のもつ生産手段の総額のなかでの、農民が生産する農産物の総量のなかでの——意義という点では、農民ブルジョアジーは無条件に優勢である。彼らは今日の農村の主人である。

* 賃労働の使用は小ブルジョアジーという概念の必須の標識ではないことを、注意しておこう。社会的経済体制のなかにわれわれがさきに（第二項）でしるした矛盾がある場合、とくに生産者大衆が賃金労働者に転化している場合は、この概念には市場めあてのいっさいの自立的生産がはいる。

（五）もう一つの新しい型は農村プロレタリアートであり、分与地をもつ賃金労働者の階級である。これにはいるのは、まったく土地をもたないものをもふくむ無産の農民層であるが、しかしロシアの農村プロレタリアートの典型的な人物は、分与地をもつ雇農、日雇い、雑役夫、建築労働者、その他の労働者である。一片の土地のうえでの経営の、しかもまったく衰退している（そのことをとりわけはっきり立証するのが土地の貸出しである）経営の、規模がごく小さいこと、労働力の販売（＝無産の農民の「営業」）なしには生きてゆけないこと、生活水準がごく低く、分与地をもたない労働者の生活水準よりおそらく劣ってさえいること——それがこの型の特徴である。* 少なくとも農家総数の半分（これは人口のほぼ一〇分の四にあたる）、すなわち、馬をもたない農民の全部と馬一頭をもつ農民の半数以上（もちろん、これは大量的なおよその計算にすぎず、いろいろな地方で、その地方的条件に応じて多少ともいちじるしい違いがある）は、農村プロレタリアートに属する人々とされるべきである。農民のうちのこれほどいちじるしい部分がいまではもはや農村プロレタリアートに属すると考えざるをえない根拠は、さきにあげておいた。** なおここで、資本主義は自由な、土地のない労働者を必要とするという理論的命題が、わが国の文献ではしばしばあまりにも紋切型に理解されている、ということをつけくわえておくべきである。この命題は基本的傾向としてはまったく正しいが、農業には資本主義はとくにゆっくり、またきわめて多種多様な形態をとって侵入してくる。農村労働者への土地の分与は、非常にしばしば農村経営者自身の利益のた

めにおこなわれる。だから、分与地をもつ農村労働者という型は、どの資本主義国にも固有である。国が異なれば、それはいろいろ異なる形態をとる。イギリスのコターー〔小屋住農〕(cottager) はフランスやライン諸州の分割地農民と同じものではなく、後者はまたプロイセンの住込百姓またはクネヒト〔作男〕と同じものではない。彼らはそれぞれ独自の土地制度、土地関係の独自の歴史の痕跡を身につけている。しかしそのことは、経済学者が彼らを農業プロレタリアという一つの型のもとに一括することを妨げるものではない。一片の土地にたいする彼の権利の法律上の根拠は、このような性格規定にとってまったくどうでもよいことである。土地が完全な所有権にもとづいて彼に属しているのか(分割地農民のように)、あるいは、ランドロード〔地主〕または Rittergutsbesitzer〔騎士領領主〕が土地を彼にあたえてただ用益させるだけなのか、あるいは、最後に、彼が大ロシアの農民共同体の一員として土地を保有しているのか――そのことによっては問題はいささかも変わらない。***無産農民を農村プロレタリアートに入れても、われわれはなにも新しいことを言っているわけではない。この表現は、多数の著述家がすでになんどももちいてきたものであって、ナロードニキ主義の経済学者だけが、農民一般をなにか反資本主義的なものと解し、大部分の「農民層」がすでに資本主義的生産の全体系のなかでまったくはっきりした地位を、すなわち農業および工業の賃金労働者という地位を占めていることに、眼をとじているのである。わが国では、たとえば、共同体や農民層やその他を保存しているわが国の土地制度を賛美して、それを、資本主義的農業組織をもつバルト海沿岸地方の制度に対置するようなことが、大いに好んでおこなわれている。だから、バルト海沿岸地方ではどのような型の農村住民がときには雇農や日雇いの階級に入れられているかを見ることも、興味ないことではない。バルト海沿岸の諸県の農民は、多くの土地をもつもの(単独の地所で二五―五〇デシャチーナ)、ボブィリ〔家なし百姓〕(三―一〇デシャチーナ、ボブィリの地所)、土地をもたないものに分かたれている。このボブィリは、エス・コロレンコ氏がただしく指摘しているように、「中部諸県のロシア農民の一般的な型に最も近い」(『自由な賃労働』、四九五ページ)のであって、彼はいつも自分の時間を、いろいろな賃仕事探しと自分自身の経営での仕事に振りわけることをよぎなくされている。だが、われわれにとってとりわけ興味があるのは、雇農の経済状態である。要は、地主自身が賃金の一部として彼らに土地を分与することを有利と見ていることにある。バルト海沿岸地方の雇農の土地所有の実例をあげよう。(一)

二デシャチーナの土地（1 Lofstelle＝$^1/_8$デシャチーナとして、ロフシュテルレをデシャチーナに換算）。一日二五カペイカの労賃で、年に夫は二七五日、妻は五〇日はたらく。（二）二$^2/_8$デシャチーナの土地。「雇農は馬一頭、牝牛三頭、羊三頭、豚二頭を飼っている」（五〇八ページ）。この雇農は一週間おきにはたらき、妻は五〇日はたらく。（三）六デシャチーナの土地（クールランド県バウスカ郡）。「雇農は馬一頭、牝牛三頭、羊三頭、豚数頭を飼っている」（五一八ページ）。彼は週に三日、妻は年に三五日はたらく。（四）クールランド県ハーゼンポート郡では、八デシャチーナの土地。「あらゆる場合に雇農は無料で製粉してもらい、無料で医療と投薬を受け、子供たちは学校で学んでいる」（五一九ページ）、その他等々。われわれは読者の注意を、これらの雇農の土地所有と経営の規模に向けよう。これは、ナロードニキの意見によれば、ほかならぬ資本主義的生産に照応するヨーロッパ共通の農地制度からわが国の農民を区別するところの条件である。いま引用した書物のなかでつたえられているすべての例を合計しよう。そうすると、一〇人の雇農に三一・五デシャチーナの土地、つまり平均して雇農一人あたり三・一五デシャチーナになる。ここでは、地主のために一年の半分近くをはたらく（夫は半年、妻は三五—五〇日）農民も、馬一頭をもつ農民で、そのうえ牝牛二頭をもつものも、さらには三頭をもつものさえ、雇農のうちに入れられている。いったい、わが国の「共同体農民」とこのような型のバルト海沿岸地方の雇農とのあいだの、あの有名な違いはどこにあるのだろうか？　バルト海沿岸地方では、事物がその本当の名でよばれているのに、わが国では、馬一頭をもつ雇農が富裕な農民といっしょにされ、「平均」が引きだされ、「共同体精神」、「勤労原理」、「人民的生産」、「農業と営業との結合」……が、感動的に論じられているのである。

* 無産の農民層を、分与地をもつ賃金労働者の階級に入れるのが正しいことを証明するためには、どのような農民がどのように労働力を販売するかということだけでなく、どのような企業家がどのように労働力を購買するかということをも、しめさなければならない。これはあとの諸章でしめされよう。

** コンラード教授は、ドイツの真の農民については役畜二頭（Gespannbauerngüter）を標準とみなしている。『土地所有と農業』（モスクワ、一八九六年）、八四—八五ページを参照。ロシアについては、この標準はむしろもっと高くとるべきであろう。「農民」という概念を規定するにあたって、コンラードはまさに、「賃労働」あるいは「副業」一般に従事している人あるいは農家のパーセントをとっている（同所）。ステブート教授は——事実問題では彼の権威を否定できない——一八八二年にこう書いた。「したがって、農奴制度の崩壊とともに、もっぱら穀物を栽培している小さな経営単位の

農民は、おもにロシアの中央黒土地帯ではすでに多くの場合、副業としてだけ農業に従事する手工業者、雇農または日雇いになってしまった」（『ロシアの農業と、その欠陥、および改善策にかんする論説』、モスクワ、一八八三年、一一ページ）。明らかに、ここでは工業における賃金労働者（建築労働者その他）も手工業者に入れられている。この用語法はひどいまちがいなのだが、わが国の文献では、専門の経済学文献においてさえ、それははなはだ普及している。

*** 農業における賃労働のさまざまなヨーロッパ的形態の実例を、『国家学中辞典』から引用しよう（『土地所有と農業』、モスクワ、一八九六年）。J・コンラードはこう言っている――「農民の所有地を分割地から、すなわち、その所有者がやむをえずさらに副業や賃仕事を探さなければならないような、『住込百姓』または『野菜作り』の地所から、区別しなければならない」（八三―八四ページ）。「フランスでは、一八八一年の調査によれば、一八〇〇万人すなわち人口の半分弱が農業で生活していた。約九〇〇万の土地所有者、五〇〇万の借地農と分益農、主として賃労働で生活している四〇〇万の日雇いと小土地所有者あるいは借地農が、それである……。フランスでは農村労働者の少なくとも七五％は自分の土地をもっている、と推定されている」（二三三ページ、ゴルツ）。ドイツでは土地を保有する次のカテゴリーのものが、農村労働者に入れられている。（一）小百姓、住込百姓、小屋住農夫〈わが国の贈与地農民[二]のようなもの〉。（二）契約日雇い。彼らは土地を所有するが、一年の一定期間はやとわれている〈わが国の「三日雇い」[三]と対比せよ〉。「契約日雇いは、ドイツの大土地所有が優勢な地方では、農村労働者の大多数を構成している」（二三六ページ）。（三）借地で経営をおこなう農業労働者（二三七ページ）。

（六）農民改革後の上記の型の「農民」の中間にあるのは、中農層である。これは、商品経済の発展が最も微弱であることを特徴とする。自立的な農業労働は、豊作の年にしか、そして特別な好条件のもとでしか、この農民層の生計をまかなえないのであって、だからこの層はきわめて不安定な状態にある。多くの場合、中農は、雇役などで返済する借金にたよることなしには、また一部はやはり労働力の販売からなる、よそでの「副業的な」賃仕事を探す等々のことをしないでは、収支をあわせることができない。不作のたびに、多数の中農がプロレタリアートの隊列に投げこまれる。このグループは、その社会関係の点では、上級のグループ――中農はこのグループに心をひかれているのだが、それにうまくはいりこめるのはわずかな少数のしあわせものだけである――と、下級のグループ――社会的進化の歩み全体が中農をこのグループに押しやっている――とのあいだを動揺している。われわれは、農民ブルジョアジーが農民の下級のグループだけでなく中間のグループをも押しのけていることを見た。こうして、資本主義経済に特有な、中間層の衰滅と両極の強化――「脱農民化（ラスクレスチヤニヴアーニエ）」

――が進行するのである。

（七）農民層の分解は、資本主義のための国内市場をつくりだす。下級のグループでは、この市場形成は消費資料の点で起こる（個人的消費の市場）。農村プロレタリアは、中農とくらべて、より少なく消費し、しかも品質の劣る生産物を消費するが（パンのかわりにじゃがいも、等々）、より多く購入する。農民ブルジョアジーの形成と発展は、二重の方法で市場をつくりだす。第一に、また主として、生産手段の点で（生産的消費の市場）。というのは、富裕な農民は、彼らが「貧しくなった」地主からも零落しつつある農民からも「よせあつめる」生産手段を、資本に転化させようとつとめるからである。第二に、市場はここでは、より資力のある農民の欲望が拡大する結果、個人的消費の点でもつくりだされる。*

* 農民層の分解による国内市場形成のこの事実だけが、たとえば木綿製品――その生産は、農民改革後の時期に農民の大量的零落と手をたずさえて非常に急速に増大した――にたいする国内市場の巨大な成長を説明することができる。ニコライ―オン氏は、国内市場についての理論をほかならぬわが国の繊維工業の例で説明しているが、この矛盾した現象がどのようにして起こりえたのかをまったく説明できなかった。

（八）農民層の分解は進行しているか、またどれほど急速に進行しているか、という問題については、われわれは、組合せ表の資料（第一―六節）とならべて出しうるような正確な統計資料をもっていない。それも不思議ではない。なぜなら、これまでのところ（すでに指摘したように）、せめて農民層の分解の静態でも研究して、この過程の起こる諸形態をしめそうとする試みさえ、なされなかったからである。* だがわが国の農村の経済にかんするすべての一般的資料は、分解がたえまなくかつ急速に進展していることを証明している。すなわち、一方では、「農民」が土地を放棄して貸しだしている。馬をもたないものの数がふえている、「農民」が都市へ逃散している、等々。また他方では、「農民経済における進歩的潮流」も順調に進行している。「農民」が土地を買いとり、経営を改善し、プラウをとりいれ、牧草栽培、酪農経営を発展させている、等々。われわれはいまでは、どのような「農民」がこの過程の極端に対立する二つの側面に関与しているかを、知っている。

* 唯一の例外は、イ・グールヴィチのすばらしい労作 The Economics of the Russian Village ニューヨーク、一八九二年、ロシア語訳『ロシア農村の経済状態』、モスクワ、一八九六年、である。経済的資力別の農民グループの組合せ表をあたえていないゼムストヴォ統計集をグールヴィチ氏が加工した腕前は、驚くべきものである。

つぎに、移住の動きの発展は農民層の分解に、とりわけ

農耕民層の分解に、巨大な刺激をあたえている。周知のように、農民はおもに農業諸県から移住をしており（工業諸県からの移民はまったくとるにたりない）、しかもほかならぬ人口稠密な中央諸県から移住をしているのであるが、そこでは、（農民層の分解をはばむ）雇役が最も発展している。これが第一。そして第二に、転出地方から出てゆくのはおもに中位の資産の農民であり、郷土に残るのはおもに両極の農民グループである。こうして移住は、転出地での農民層の分解を強め、分解の諸要素を移住先にもってゆく（シベリアに新しく移住したものは、その新生活の初期には雇農としてはたらく）。* 移住と農民層の分解とのこの関連は、イ・グールヴィチがそのすぐれた研究『シベリアへの農民の移住』（モスクワ、一八八八年）で完全に立証している。われわれは、わがナロードニキの出版物が黙殺しようと懸命につとめたこの書物を、読者に切におすすめする。**

* したがって、移住をおさえつけることは農民層の分解に巨大な阻止的影響をおよぼす。

** ブリーマク氏の労作『シベリアへの移住の研究のための数字的資料』をも参照（第二版の注）。

（九）わが国の農村では、周知のように、商業資本と高利貸資本が巨大な役割を演じている。われわれは、この現象について多くの事実をあげその典拠をしめすことは、よけいなことと考える。それらの事実は一般に知られており、われわれのテーマには直接の関係がない。われわれの関心をひくのは次の問題だけである。——わが国の農村における商業資本と高利貸資本は農民層の分解とどのような関係にあるか？ 農民層の諸グループのあいだのさきに概説した関係と、農民債務者にたいする農民債権者の関係とのあいだには、関連があるか？ 高利貸業は分解の要因であり原動力であるか、それともそれは分解をはばむものであるか？

まず、理論がこの問題をどのように提起しているかを、しめそう。『資本論』の著者がおこなった資本主義的生産の分析では、周知のように、商業資本と高利貸資本に非常に重要な意義があたえられている。この問題にかんするマルクスの見解の基本的命題は、次のとおりである。（一）一方における商業資本と高利貸資本、他方における産業資本〈すなわち、生産に投下された資本〉は、農業生産であろうと工業生産であろうとを論ぜず、儲けをもって販売するための商品の購買という一般的定式に包括される、一つの型の経済現象である（『資本論』、第一巻、第二篇第四章、とくに、ドイツ語版第二版の一四八―一四九ページ）。[63]（二）商業資本と高利貸資本はつねに、歴史的には産業資本の形

成に先行するものであり、論理的にはこの形成の必要な条件である（『資本論』、第三巻第一冊、三一二―三一六ページ、ロシア語訳、二六二―二六五ページ。第三巻第二冊、一三二―一三七、一四九ページ、ロシア語訳、四八八―四九二、五〇二ページ）[(四)]。だが、商業資本も高利貸資本も、それ自体としてはまだ産業資本（すなわち資本主義的生産）の発生のための十分な条件ではない。それらはかならずしもつねに、古い生産様式を崩壊させてそのあとに資本主義的生産様式を打ちたてるものではない。後者の形成は「まったく、歴史的発展段階およびそれによってあたえられる諸事情に依存する」（前掲書、第二冊、一三三ページ、ロシア語訳、四八九ページ）[(五)]。「だが、どの程度までそれ」（商業と商業資本）「が古い生産様式の分解をひきおこすかは、なによりもその生産様式の堅固さと内部編制に依存する。また、この分解過程がどこにゆきつくか、すなわち、古い生産様式にかわってどのような新しい生産様式が現われるかは、商業にではなく、旧生産様式そのものの性格に依存する」（前掲書、第三巻第一冊、三一六ページ、ロシア語訳、二六五ページ）[(六)]。（三）商業資本の自立的発展は、資本主義的生産の発展の程度に反比例する（前掲書、三一二ページ、ロシア語訳、二六二ページ）[(七)]。商業資本と高利貸資本の発展が強ければ強いほど、産業資本（＝資本主義的生産）の発展はそれだけ弱く、逆の場合は逆である。

したがって、ロシアに適用すれば、次の問題を解決しなければならない。わが国で商業資本と高利貸資本は産業資本と結びついているか？　商業と高利貸業は、古い生産様式を崩壊させつつ、それにかわって資本主義的生産様式を、あるいはなにか他のものをもたらしているか？*　これは事実問題であり、ロシア国民経済のあらゆる側面について解決されなければならない問題である。農民的農業については、さきに検討した資料がこの問題への回答を、ほかならぬ肯定的な回答を、それ自身のうちにふくんでいる。「クラーク」と「経営上手な百姓」は、同一の経済現象の二つの形態なのではなく、たがいになんの結びつきもない対立した型の現象であるとする、通例のナロードニキ的見解は、まったくなんの根拠もない見解である。これは、いままでだれも正確な経済的資料の分析によって証明しようと試みもしなかった、あのナロードニキ主義の偏見の一つである。資料は反対のことをものがたっている。農民が労働者を生産の拡大のためにやとっていようが、農民が土地をあきなない（富農の大規模な借地にかんする、さきにあげた資料を想起されたい）、あるいは食料雑貨をあきなっていようが、大麻、乾草、家畜その他を、あるいは貨幣を（高利貸）あきなっていようが、彼は一つの経済的型を表

示しているのであって、その業務は基本的には同一の経済関係に帰着する。さらに、ロシアの共同体的農村では資本の役割は債務奴隷制と高利貸業につきはしないこと、資本は生産にも向けられていることは、富裕な農民層がたんに商業上の施設や企業に貨幣を投下する（既述を参照）だけでなく、経営の改善、土地の購入や借入れ、家畜や農具の改良、労働者の雇用、等々にも投下していることから、明らかである。もし資本に、わが国の農村で債務奴隷制と高利貸業以外のなにかをつくりだす力がないとするなら、われわれは、生産にかんする資料によって、農民層の分解、農村ブルジョアジーと農村プロレタリアートとの形成を確認できないであろうし、農民層全体が、困窮におしひしがれた経営主という、かなり均一な型として現われるであろうし、彼らのうちでは高利貸だけが区別され、農業生産の規模と組織によってではなく、もっぱら貨幣財産の大きさによって区別されることであろう。最後に、さきに検討した資料から、わが国の農村における商業資本と高利貸資本の自立的な発展は農民層の分解をはばんでいない、という重要な命題が出てくる。商業の発展がいっそうすすんで、農村を都市に近づけ、農村の原始的な市場を駆逐し、農村の小売商人の独占的地位を打ちこわしてゆけばゆくほど、また、ヨーロッパ的な正規な信用形態が発達して農村の高利貸を駆逐してゆけばゆくほど、農民層の分解はそれだけ進行し深まらないではおかない。富裕な農民たちの資本は、小規模な商業や高利貸業から追いたてられて、ますます大規模に生産に向けられるであろう。生産への資本投下は現在すでにはじまっているのである。

* ヴェ・ヴェ氏は、その著『資本主義の運命』のまさに第一ページでこの問題にふれた。だが彼は、この著作でも、その他のどの著作でも、ロシアにおける商業資本と産業資本との関係にかんする資料を検討しようとはしなかった。ニコライ―オン氏は、自分ではマルクスの理論を忠実にうけついでいると称しているが、「商業資本」という正確で明瞭なカテゴリーをやめて、むしろ自分で考案した「資本化」とか「収入の資本化」とかいう、不明瞭であいまいな術語にとりかえるほうをえらんだ。そしてこのもやもやした術語にかくれて、この問題をうまく避けてしまった。まったく避けてしまった。彼にあっては、ロシアにおける資本主義的生産の先行者は、商業資本ではなくて、……「人民的生産」なのである！

（一〇）わが国の農村の経済で農民層の分解をはばんでいるもう一つの重要な現象は、賦役経済の遺物、すなわち雇役である。雇役は、労働にたいする現物支払いを、したがって商品経済の微弱な発展を、基礎としている。雇役が前提し要求するのは、まさに、十分に資力があるわけではなく（もしあれば彼は雇役による債務奴隷にはならないで

あろう)、プロレタリアでもない(雇役をひきうけるために は、自分の農具類をもっている必要があるし、多少とも「きちんとした」経営主である必要がある)中農なのである。

さきに、農民ブルジョアジーは現在の農村の主人公であると述べたとき、われわれは、分解をはばんでいる諸要因、すなわち、債務奴隷制、高利貸業、雇役その他を捨象していた。実際には、現今の農村の真の主人公は、しばしば、農民ブルジョアジーに属する人々ではなくて、農村の高利貸業者や近隣の地主である。しかし、このような捨象は十分に正当な方法である。なぜなら、そうしなければ農民層のなかの経済関係の内部構造を研究できないからである。ナロードニキもこういう方法をもちいてはいるが、中途で立ちどまって、自身の考察を最後まで推しすすめていない、ということを指摘するのは興味深いことである。ヴェ・ヴェ氏は、その著『資本主義の運命』のなかで租税の重圧その他について かたり、共同体にとって、「ミール」にとっては、これらの原因のため「自然的(原文のまま!)生活の諸条件はもはや存在しない」(一八七ページ)と述べている。けっこうだ。しかし問題全体はまさに、わが国の農村にとってはすでに存在しないこれらの「自然的条件」がどのようなものであるか、ということにある。この設問に答えるためには、わが国の農村の生活のこれらの「自然的条件」をわかりにくくしている、農民改革以前の往時の遺物を——もしそういってよければ——取りのぞいて、共同体内部の経済関係の構造を研究しなければならない。もしヴェ・ヴェ氏がそれをしたなら、彼は、農村の諸関係のこの構造が農民層の完全な分解をしめしていることを、また、債務奴隷制、高利貸業、雇役その他がより完全に駆逐されればされるほど、農民層の分解はそれだけ深まってゆくことを、知ったであろう。* さきにわれわれはゼムストヴォ統計資料にもとづいて、この分解がいまではもはや完了した事実であること、農民層があい対立する諸グループに完全に分裂したことをしめした。

* ついでながら、ヴェ・ヴェ氏の『資本主義の運命』と、とくに、引用文を取りだした第六章についていえば、そのなかに非常にすぐれた、まったく正しい箇所があることを、指摘しておかなければならない。すなわち、著者が「資本主義の運命」についてではなく、また、けっして資本主義についてでさえもなく、租税徴集の方法についてかたっている箇所が、それである。ヴェ・ヴェ氏がそのさい、これらの方法と、彼が(われわれがあとで見るように)うまく理想化している賦役経済の遺物とのあいだの不可分の関連に気づいていないことは、特徴的である!

第三章　賦役経済から資本主義経済への地主の移行（九七）

さて、われわれは農民の経済から地主の経済へ移らなければならない。われわれの課題は、地主経済の所与の社会経済構造を、基本的諸特徴の点で研究し、農民改革後の時代におけるこの構造の進化の性格を描くことにある。

一　賦役経済の基本的諸特徴

現在の地主経済制度を考察するさいの出発点として、農奴制度の時代に支配的であった地主経済の構造をとりあげることが必要である。当時の経済制度の本質は、農業の所与の単位の、すなわち所与の世襲領地のすべての土地が、地主の土地と農民の土地とに分かたれていたことにあった。前者は分与地として農民に引きわたされていて、彼らは（それ以外にも生産手段を——たとえば森林やときには家畜その他をも——受けとって）、自分の労働と自分の農具でその土地を耕し、そこから自分の生活の資を得ていた。農民のこのような労働の生産物は、理論経済学の用語法によれば、必要生産物であった。それは、農民にとっては彼に生活の手段をあたえるものとして必要生産物であり、地主にとっては彼に働き手をあたえるものとしてそうであった。それは、資本主義社会で、資本価値の可変部分を補塡する生産物が必要生産物であるのと、まったく同じである。他方、農民の剰余労働は、彼らがその同じ農具をつかって地主の土地を耕すことにあった。この労働の生産物は地主のものになった。したがって、ここでは、剰余労働は必要労働と空間的に分離されていた。すなわち、農民は地主のために地主の土地を耕し、自分のために自分の分与地を耕し、また地主のために一週間のうちのある日数をはたらき、自分のために残りの日数をはたらいていた。以上のように、この経済では、農民の「分与地」はいわば現物の賃金（現代の概念をもちいて表現すれば）、あるいは地主に働き手を保障する手段になっていた。分与地における農民の「自分の」経営は地主経済の一条件であって、その目的は、農民に生活手段を「保障」することではなく、地主に働き手

を「保障」することであった。*

* ア・エンゲリガルトは、彼の『農村からの手紙』（サンクト－ペテルブルグ、一八八五年、五五六―五五七ページ）で、この経済構造を非常にあざやかに特徴づけている。彼は、農奴制経済がある規則的で完成した制度であって、その支配者は、農民に土地を分与して彼らにあれこれの仕事をいいつけていた地主であったことを、まったく正当に指摘している。

この経済制度はわれわれが賦役経済と名づけるものである。明らかに、賦役経済の優勢は次のような必要条件を前提としていた。第一に、現物経済の支配である。農奴制領地は、他の世界とはきわめて弱いつながりしかもたない、自足的、閉鎖的な全一体でなければならなかった。地主による販売のための穀物生産は農奴制度の存在の末期にとくに発展したが、それはすでに旧制度の崩壊の前兆であった。第二に、このような経済にとっては、直接的生産者が一般に生産手段を、とくに土地を分与されていることが必要である。それだけでなく、直接的生産者が土地に緊縛されていることが必要である。というのは、そうでなければ地主は働き手を保障されないからである。したがって、剰余生産物を獲得する方法は、賦役経済の場合と資本主義経済の場合とでは、たがいに正反対に対立している。すなわち、前者は生産者への土地の分与を、後者は生産者の土地からの解放を基礎としている。* 第三に、このような経済制度の一条件は地主にたいする農民の人格的隷属である。もし、地主が農民の人格にたいする直接的権力をもっていないならば、地主は、土地を分与されて自分自身の経営をいとなんでいる人間を、地主のためにはたらかせることはできないであろう。したがって、マルクスがこの経済制度を特徴づけていっているように、「経済外的強制」が必要である（すでにさきにも指摘したように、マルクスはこの経済制度を労働地代のカテゴリーに入れている。『資本論』、第三巻第二冊、三二四ページ）(九)。この強制の形態と程度は、農奴的地位から農民の身分上の不完全権利にいたるまで、きわめて多様でありうる。最後に、第四に、前記の経済制度の条件であり結果でもあったのは、技術の極度に低い停滞的な状態であった。というのは、困窮におしひしがれ、人格的隷属と知的暗愚とによっておとしめられている小農民の手で、経営がおこなわれていたからである。

* エンゲルスは、住民大衆の収奪が貧困と抑圧の大きな、そして普遍的な原因であると述べたヘンリー・ジョージを反駁して、一八八七年に次のように書いた。「歴史的に見れば、これはかならずしもまったく正しくはない……。中世に封建的抑圧の源泉になったのは、人民から土地を収奪（expropriation）することではなく、反対に、彼らを土地に所属（appropriation）させることであった。農民は自分の土地

を保持していたが、農奴または隷農として土地に緊縛され、労働または生産物で領主に貢納する義務を負っていた」(『一八四四年のイギリスにおける労働者階級の状態』、ニューヨーク、一八八七年、序文、三ページ)。[100]

二　賦役経済制度と資本主義経済制度との結合

賦役経済制度は農奴制度の廃止によってくつがえされた。この制度のすべての重要な基礎、すなわち、現物経済、地主の世襲領地の閉鎖性と自足的性格、その個々の要素のあいだの密接な結合、農民にたいする地主の権力が、くつがえされた。農民経済は地主経済から分離した。農民は自分の土地を購入して完全な所有にするようになり、地主は、さきに指摘したように、正反対に対立した基礎のうえにある資本主義経済制度に移行することになった。しかし、まったく別の制度へのこのような移行は、もちろん、一挙にはおこなわれえないのであり、それができないのは二つの相異なる理由からであった。第一に、資本主義的生産のために必要な諸条件がまだ現存しなかった。賃労働になれた人々の階級が必要であり、地主の農具が農民の農具にとってかわることが必要であった。また農業が、殿様の仕事としてではなく、あらゆる他の商工業企業と同じように組織されることが必要であった。これらの条件はすべて徐々にしか成立しえないものであったし、農民改革後の初期に一部の地主が外国の機械やさらには外国の労働者を輸入しようとした試みも、完全な失敗に終わらざるをえなかった。資本主義的なやりかたに一挙に移ることができなかったもう一つの理由は、古い賦役経済制度がやっとくつがえされたばかりで、最終的に駆逐されてはいなかったということにあった。農民経済は地主経済と完全には分離していなかった。というのは、農民分与地のうちのきわめて重要な部分、すなわち、「切取地」[101]、森林、採草地、水飼場、放牧場、その他が地主の手に残されていたからである。これらの土地(あるいはその用益権)なしには、農民は自立した経営をいとなむことがまったくできなかったし、地主は、こうして、古い経済制度を雇役の形態でつづける可能性をもっていたのである。「経済外的強制」[102]の可能性もまた残っていた。一時義務負担身分、連帯責任、農民の体罰、公共事業への農民の徴用、等々がそれである。

このように、資本主義経済は一挙には発生しえなかったし、賦役経済も一挙には消滅しえなかった。したがって、ただ一つ可能な経済制度は、過渡的な制度、すなわち、賦役制度と資本主義制度の特徴をあわせもつ制度であった。

そして実際に、農民改革後の地主経済の構造はまさにそのような特徴をもっていた。過渡期につきものの、その形態の数かぎりない多様性にもかかわらず、現代の地主経済の経済組織は、さまざまな組合せのなかの二つの基本的制度に、すなわち雇役制度*と資本主義制度とに帰着する。前者は、近隣の農民が自分の農具で耕作することであり、そのさい支払いの形態は（それが賃仕事の場合のように貨幣による支払いであろうと、分益小作の場合のように生産物による支払いであろうと、狭義の雇役の場合のように土地または用益地による支払いであろうと）、この制度の本質を変えるものではない。これは賦役経済の直接の遺物であり**、さきにしめしたそれの経済的特徴は雇役制度にほとんどそのままあてはまる（ただ一つの例外は、ある形態の雇役制度のもとでは賦役経済の諸条件の一つがなくなることである。すなわち、出来高払いの雇用の場合には、労働にたいする現物支払いのかわりに貨幣支払いが見られる）。資本主義制度は、土地所有者の農具で耕作する労働者（年雇い、季節雇い、日雇い、その他の）を雇用することにある。上記の二つの制度は、実際にはきわめて多様で気まぐれな仕方でからみあっている。多くの地主領地では二つの制度が結合されて、いろいろな経済活動に順応させられている***。これほども種類のちがう、対立的でさえある経済制度が結合していることから、現実生活のなかに一連のきわめて深刻で複雑な衝突や矛盾が生みだされること、これらの矛盾の圧力で多くの経営主が破滅すること等々は、まったく当然である。これらすべてのことは、あらゆる過渡的時代に固有の現象である。

* われわれは今後、「賦役」という用語を「雇役」という用語にとりかえる。なぜなら、後者の表現のほうが農民改革後の諸関係によりよく照応しているし、すでにわが国の文献で市民権を得ているからである。

** とくにきわだった例をあげよう。農業省の一通信員は次のように書いている。「エレツ郡（オリョール県）南部の大規模な地主経営では、年雇労働者による耕作とならんで、土地のかなりの部分が、農民に賃貸された土地の代償として、農民によって耕作されている。かつての農奴は自分の以前の地主からひきつづき土地を借りており、その代償として地主の土地を耕している。このような村は、ひきつづき地主某の『所領』という名称をもっている」（エス・ア・コロレンコ『自由な賃労働……』、一一八ページ）。あるいはまた、別の地主はこう書いている。「私の農場では、仕事はすべて、私のかつての農民によっておこなわれており（八村、約六〇〇〇人）、その代償として彼らは家畜の放牧地を手に入れている（二、〇〇〇―二、五〇〇デシャチーナ）。季節雇労働者は、はじめ一回だけ土地をすきかえして、播種器で種をまくだけである」（同、三二五ページ、カルーガ郡から）。

*** 「きわめて多数の経営が次のようにいとなまれている。

〔第 56 表〕

地主の土地での支配的な経済制度による県の分類	県の数			私有地における全穀物とじゃがいもの作付面積 (1000デシャチーナ)
	黒土地帯	非黒土地帯	合計	
I 資本主義制度の優勢な諸県	9	10	19	7,407
II 混合制度の優勢な諸県	3	4	7	2,222
III 雇役制度の優勢な諸県	12	5	17	6,281
総数	24	19	43	15,910

すなわち、たとえきわめてわずかであっても、土地の一部は、所有主が自分の農具と年雇いその他の労働者をつかって耕作し、残りの土地はすべて農民に、あるいは分益小作で、あるいは土地で、あるいは貨幣で、耕作のために貸しだされている」(前書、『自由な賃労働』、九六ページ)。……「大多数の領地には、雇用方法(すなわち『経営の労働力調達』方法)のすべてかそれとも多数のものが、同時に存在している。」(『ロシアの農林業』、シカゴ博覧会のための農業省出版物、サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、七九ページ)。

もしこの二つの制度の比較という問題を出すとすると、まず第一に、この問題についての正確な統計資料がないし、そしてまたそのような資料は到底あつめられないだろうと、いわなければならない。この問題のためには、すべての領地を調査するだけでなく、すべての領地におけるすべての経営業務を調査することが必要である。資料としては、個々の地方についてどちらかの制度の優勢をしめす一般的特徴づけという形の、近似的なものがあるだけである。ロシア全体について総括したこの種の資料は、さきに引用した農業省の出版物『自由な賃労働……』にあげられている。アンネンスキー氏は、これらの資料にもとづいて、二つの制度の普及度をしめす一目瞭然とした統計図表を作成した(『収穫の影響……』(103)、第一巻、一七〇ページ)。これらの資料を表にして対比し、それに、一八八三―一八八七年の私有地の作付面積にかんする情報を補足しておこう(『ロシア帝国統計』による。第四巻、一八八三―一八八七年の五年間のヨーロッパ・ロシアにおける平均収穫、サンクト・ペテルブルグ、一八八八年)*。〔第五六表〕

* ヨーロッパ・ロシアの五〇県のうち、アルハンゲリスク、ヴォログダ、オロネッツ、ヴャトカ、ペルミ、オレンブルグ、アストラハンは除かれている。これらの県では一八八三―一

〔第 57 表〕

クルスク県の諸郡	自由な雇用によって労働者を獲得する領地の比率(%)		雇農をもつ領地の比率(%)	
	中規模	大規模	中規模	大規模
ドミートロフ	53.3	84.3	68.5	85.0
ファテージ	77.1	88.2	86.0	94.1
リゴーフ	58.7	78.8	73.1	96.9
スジャ	53.0	81.1	66.9	90.5

八八七年に、私有地での作付面積は、ヨーロッパ・ロシアのこの種の作付面積の総計一六四七万二〇〇〇デシャチーナのうち、わずか五六万二〇〇〇デシャチーナであった。——第Iグループにはいるのは次の諸県、すなわち、バルト海沿岸の三県、西部の四県（コヴノ、ヴィリノ、グロドノ、ミンスク）、西南部の三県（キエフ、ヴォルィニ、ポドリスク）、南部の五県（ヘルソン、タヴリーダ、ベッサラビア、エカテリノスラフ、ドン）、東南部の一県（サラトフ）、それからペテルブルグ、モスクワ、ヤロスラヴリの諸県である。第IIグループにはいるのは、ヴィテブスク、モギレフ、スモレンスク、カルーガ、ヴォロネジ、ポルタワ、ハリコフの諸県である。第IIIグループには残りの県がはいる。——より正確を期するためには、私有地での作付面積の合計から借地農に属する作付面積を控除しなければならないが、この種の資料はない。そのような修正をしても、資本主義制度が優勢だというわれわれの結論はおそらく変わらないだろうということを、指摘しておこう。というのは、黒土地帯では私有耕地の大部分が貸しだされているが、この地帯の諸県では雇役制度が優勢だからである。

このように、純ロシア的諸県では雇役が優勢であるとしても、ヨーロッパ・ロシア全般では、地主経済の資本主義制度が現在は優勢であると認めなければならない。なお、われわれの表はこの優勢をけっして完全には表現していない。というのは、第Iグループの県のなかには雇役が全然おこなわれていないような県（たとえば、バルト海沿岸の諸県）があるのにたいして、第IIIグループでは、たとえ部分的にでも資本主義制度がおこなわれていないものは、県のなかに一つもなく、おそらくは自分の経営をいとなんでいる領地のなかにも一つもないだろうからである。そこで、ゼムストヴォ統計の資料にもとづいてこのことを例証しよう（ラスポーピン『ゼムストヴォ統計資料によるロシアの私有地経営』、『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』

〔『法律通報』〕一八八七年、第一一―一二号、第一二号、六三四ページ)。〔第五七表〕

最後に、雇役制度はときには資本主義制度に移行しつつあり、両者を切りはなして区別することはほとんど不可能なほど後者と融合しているということを、指摘する必要がある。たとえば、農民は一片の土地を借りて、その代償に一定の日数だけはたらく義務を負う(周知のように最も普及している現象、次節にある例を見よ)。このような「農民」と、一定の日数だけはたらくという義務を負って一片の土地を手に入れる西ヨーロッパあるいはバルト海沿岸の「雇農」とのあいだに、どのように区別をつけられるだろうか? 実生活は、基本的な特徴の点で対立的な経済制度をきわめて徐々に結びつけるような諸形態をつくりだしている。どこで「雇役」が終わり、どこで「資本主義」がはじまるかについて、かたることが不可能になりつつある。

このように、現代の地主経済のあらゆる多様な形態は、結局は、いろいろに組みあわされた二つの制度、雇役制度と資本主義制度に帰着するという基本的事実を確認したので、われわれはこんどは二つの制度の経済的な特徴づけに移り、これらの制度のどちらが経済的進化の歩み全体の影響のもとで他方を排除しつつあるかを見よう。

三　雇役制度の特徴づけ

さきにすでに指摘したように、雇役の種類はきわめて多様である。ときには農民は貨幣でやとわれて、自分の農具で地主の土地を耕す*——いわゆる「出来高払いの雇用」**(四〇)、「デシャチーナ稼ぎ」、「輪耕地」耕作(すなわち、春播きの一デシャチーナと秋播きの一デシャチーナの)、等々である。ときには農民が穀物あるいは貨幣を借り、その負債全部または負債の利子を支払うためにはたらく義務を負う***。この形態のもとでは、雇役制度一般に固有の特徴、すなわち、このような労働雇用の債務奴隷的、高利貸的性格が、とくにはっきり現われる。ときには農民は、「家畜による耕地の被害を補償するため」にはたらき(すなわち、この被害の補償として法律できめられた罰金を支払うためにはたらく義務を負い)、地主からもらう他の「賃仕事」を失わないようにと、もっぱら「誠意から」(エンゲリガルト、前掲書、五六ページを参照)、つまりただで、わずかに食事をもてなされるだけではたらく。最後に、土地の代償としての雇役は、分益小作の形態か、あるいは、農民に貸与された土地、用益地、その他の代償としての労働という直接的な形態かで、きわめて広く普及している。

* 『リャザン県統計報告集』。

** エンゲリガルト、前掲書。

*** 『モスクワ県統計報告集』、第五巻第一冊、モスクワ、一八七九年、一八六―一八九ページ。われわれはこれらの出典を一例としてあげるにすぎない。農民経済や私有地経済にかんするすべての文献が、この種の指摘を多数ふくんでいる。

この場合、借地にたいする支払いはきわめて多様な形態をとることが非常に多く、ときには諸形態がいっしょに結合して、貨幣支払いとならんで現物支払いや「雇役」がおこなわれているほどである。ここに二―三の例をしめそう。借地一デシャチーナについて一・五デシャチーナの耕作＋卵一〇個＋雌鶏一羽＋婦人の一労働日。春播きの四三デシャチーナにたいして一二ルーブリ、また秋播き[103]の五一デシャチーナにたいして一六ルーブリの現金＋何コプナかの燕麦と七コプナのそばと二〇コプナのライ麦との脱穀＋農民自身の畜舎から出る厩肥を一デシャチーナあたり三〇〇車の割合で少なくとも五デシャチーナ以上借地に施肥すること（カルィシェフ『借地』、三四八ページ）。ここでは、農民の厩肥までが私有地経営の構成部分に転化している！雇役にかんする術語の多いことがすでに雇役の普及度と多様性をしめしている。オトラボートキ、オトブーチ、オトブートキ、バールシチナ、バサリンカ、ポソーブカ、パニシチーナ、ポーストゥポク、ヴィエムカ、その他（同上、三四二ページ）。なおときには農民は「地主の命ずること」（同上、三四六ページ）をする義務を負い、一般に地主に「服従し」、彼の「言いつけを聞き」、地主を「たすける」義務を負っている。雇役は「農村の日常の仕事の全範囲を包含している。雇役によって、畑の耕作とか穀物や乾草の刈入れとかの農作業がすべておこなわれ、薪が貯えられ、積荷が運搬され」（三四六―三四七ページ）、屋根や煙突が修理され（三五四、三四八ページ）、雌鶏や卵を提供する義務が遂行される（同上）。サンクト・ペテルブルグ県グドーフ郡の一研究家は、正当にも、現に見うけられる諸種の雇役は「かつての農民改革以前の賦役の性格」をもっていると、言っている*（三四九ページ）。

* 驚くべきことだが、ロシアにおける雇役のいろいろな形態のまったくはなはだしい多様さ、あらゆる追加払いその他をともなう借地料のいろいろな形態――これらは、マルクスが『資本論』第三巻第四七章で明らかにした、前資本主義的制度の基本的諸形態によって完全にきわめつくされている。前章ですでに指摘したように、これらの基本的形態は、(一)労働地代、(二)生産物地代または現物地代、(三)貨幣地代の三つである。だから、マルクスが地代にかんする篇の例示のために、ほかならぬロシアの資料を手にしたいと考えたのは、まったく当然である。

とくに興味深いのは、土地の代償としての雇役の形態、いわゆる雇役借地と現物借地である。* われわれは前章で、資本主義的関係が農民の借地にどのように現われているかを見たが、ここでは、賦役経済のたんなる遺物であるような、** そして、ときには一片の土地を分与することによって農業労働者を領地に確保するという資本主義制度へいつのまにか移行してゆく、そういう「借地」を見るのである。ゼムストヴォ統計の資料は、このような「借地」と土地貸与者の自家経営とのこの関連を、争う余地なく確証している。「地主の私有領地における自家耕作が発展するにつれて、必要なときに労働者が手にはいるように保証することが必要になる。そのため、雇役で、あるいは雇役をともなう生産物折半によって、農民に土地を割りあてようという傾向が、多くの地方で地主のあいだに深まってくる……」。このような経済制度は「……少なからず普及している。貸与者の自家経営がますます頻繁におこなわれるようになればなるほど、借地の供給が少なければ少ないほど、借地にたいする需要が強ければ強いほど、この種の土地貸借もそれだけ広くおこなわれるようになる」（同書、二六六ページ、また三六七ページをも参照）。こうして、われわれはここにまったく特別な種類の借地を見るのであるが、これは、地主による自家経営の放棄ではなく、私有地耕作の発展をあらわすものであり、また農民の土地所有の拡大による農民経済の強化ではなく、農民の農業労働者への転化をあらわすものである。われわれは前章で、農民経済においては、借地は、ある者にとっては有利な経営拡大であるが、他の者にとっては窮乏にせまられての取引であるという、正反対の意義をもつことを見た。そしていまやわれわれは、地主経済においても土地の貸与が正反対の意義をもつこと、すなわち、それは、ときには地代の支払いをうけて経営を他人に引きわたすことであり、ときには自家経営をいとなむ方式、領地に労働力を確保する方式であるということを、見るのである。

* 『ゼムストヴォ統計の総括』（第二巻）によると、農民はその借地全体の七六%を貨幣で借り、三―七%を雇役で、一三―一七%を生産物の一部で借り、そして二―三%の土地を混合的な支払いで借りている。

** 一三四ページ〔本訳書では一七三ページ〕の注にあげた例を参照。賦役経済の場合、地主は、農民が地主のためにはたらくように、農民に土地をあたえた。雇役を代償に土地を貸与する場合にも、事がらの経済的側面は明らかに同一である。

雇役のもとでの労働支払いの問題に移ろう。種々の出典からの資料が一致して立証していることだが、雇役的および債務奴隷的な雇用の場合の労働支払いは、資本主義的な「自由な」雇用の場合よりもつねに低い。第一に、このこ

とは、現物借地、すなわち雇役借地や分益小作（これは、われわれがいま見たように、雇役的および債務奴隷的な雇用をあらわすものにすぎない）は、通則としてどこでも貨幣借地より高く、しかもいちじるしく高く（同、三五〇ページ）、ときには二倍にも達する（同、三五六ページ、トヴェーリ県ルジョーフ郡）ということによって、証明されるのである。第二に、現物借地は、最も貧しい農民グループのなかでとくに強くひろまっている（同、二六一ページ以下）。これは窮乏からの借地であり、農民から農業労働者へとこのように転化することにもはや抵抗できない農民の「借地」である。資力のある農民はつとめて貨幣で土地を借りようとする。「借地人は、借地料を貨幣で支払い、それによって他人の土地を利用する価格を安くするための、どんなに小さな可能性をも利用する」（同、二六五ページ）、――そして、私がつけくわえていえば、借地料を安くするだけでなく、債務奴隷的雇用を免れるためにも、である。ドン河畔ロストフ郡では、借地料の増大につれて貨幣借地からスコープシチナ[105]に移行する――スコープシチナでは農民の分け前が減少するにもかかわらず――という驚くべき事実さえ確認された（同、二六六ページ）。農民を決定的に零落させ、彼を雇農に転化させる現物借地の意義は、この事実によってまったく明瞭に例証されている。* 第三に、雇役的雇用と資本主義的な「自由な」雇用との労働の価格を直接比較すると、後者のほうが高い水準にあることがわかる。さきに引用した農業省の出版物『自由な賃労働……』では、農民の農具をつかった秋播き穀物一デシャチーナの完全な耕作にたいする平均支払いは六ルーブリとみなすべきだと、計算されている（一八八三―一八九一年の八年間の中央黒土地帯にかんする資料）。一方、自由な雇用による同じ仕事の価格を計算すると、馬の作業を考慮せず（馬の作業にたいする支払いを四ルーブリ五〇カペイカ以下に見つもることはできない。前掲書、四五ページ）、馬なしの労働にたいしてだけで六ルーブリ一九カペイカになる。編者は、正当にも、このような現象を「まったく異常なもの」とみなしている（同所）。ただ一つ指摘すれば、債務奴隷制その他の前資本主義的諸関係のあらゆる形態とくらべて、純資本主義的な雇用のもとでの労働支払いがより高いことは、農業についてだけでなく、工業についても、ロシアについてだけでなく他の諸国についても、確認される事実である。つぎに、この問題についてのより正確でよりくわしいゼムストヴォ統計の資料をあげよう（『サラトフ郡統計報告集』、第一巻、第三篇、一八―一九ページ、カルィシェフ氏の『借地』、三五三ページから引用）。〔第五八表〕

* 借地にかんする最も新しい資料の総括（『収穫の影響……』、

〔第 58 表〕　サラトフ郡で1デシャチーナの耕作に支払われる平均価格

（ループリ）

仕事の種類	賃金 980―100％を前払いする冬季請負の場合	耕地借入れの代償としての雇役の場合		自由な雇用の場合	
		文書にしめされた条件	借地人の証言	雇主の証言	被雇用者の証言
全耕作，および収穫，運搬・脱穀をふくむ	9.6	—	9.4	20.5	17.5
同上，脱穀を除く（春播き穀物）	6.6	—	6.4	15.3	13.5
同上，脱穀を除く（秋播き穀物）	7.0	—	7.5	15.2	14.3
耕作	2.8	2.8	—	4.3	3.7
収穫（刈取りと運搬）	3.6	3.7	3.8	10.1	8.5
収穫（運搬を除く）	3.2	2.6	3.3	8.0	8.1
草刈り（運搬を除く）	2.1	2.0	1.8	3.5	4.0

第一巻におけるカルィシェフ氏）が完全に証明しているように、困窮だけが農民に分益小作あるいは雇役で土地を借りることをよぎなくさせるのであって、資力のある農民は貨幣で借地するほうをえらぶ（三一七―三二〇ページ）。なぜなら、現物借地は、どこでも、農民にとって貨幣借地とは比較にならないほど高くつくからである（三四二―三四六ページ）。しかしこれらすべての事実も、カルィシェフ氏が、「資力のない農民は……分益小作で他人の土地に自分の作付をいくらかふやすことによって、食物の必要をよりよくみたす可能性を手に入れる」（三二一ページ）というように事態を描きだすことを、妨げなかった。「現物経済」にたいする先入主的な共感は、人をなんという奇怪な思考にみちびくものであろう！　現物借地が貨幣借地よりも高いこと、それは農業における一種の truck-system[103] であること、それが農民を決定的に零落させ、彼を雇農に転化させることは証明ずみである。ところが、わが経済学者は食物の改善などというのである！　見たまえ、分益小作は「農村住民の窮乏部分が」借地するのを「たすけるにちがいない」（三二〇ページ）。ここで経済学者氏は、最悪の条件で、雇農に転落するという条件で土地を手に入れることを、「助け」とよんでいるのだ！　いったい、ロシアのナロードニキと、「農村住民の窮乏部分」にこの種の「助け」をあたえようといつでも待ちかまえていたし、いまもつねに待ちかまえているロシアの大地主との違いは、どこにあるのだろうか？　ついでながら、ここにおもしろい例がある。ベッサラビア県ホチン郡では、分益小作人の平均の一日の稼ぎは六〇カペイカで、日雇いのは夏季に三五―五〇カペイカと算定されている。「分益小作人の稼ぎはやはり雇農の労賃よりも高い、ということになる」（三四四ページ、傍点はカルィシェフ氏）。この「やはり」がきわめて特徴的である。しかし、分益小作人は雇農とちがって経営費がかかるのではないか？　彼には馬や馬具がなければならないのではないか？　なぜこれらの費用を計算

に入れないのか？　ペッサラビア県での夏季の平均日給が四〇—七七カペイカ（一八八三—一八八七年と一八八八—一八九二年）であるのにたいして、馬具をもつ労働者の平均日給は一二四—一八〇カペイカ（一八八三—一八八七年と一八八八—一八九二年）である。むしろ、雇農は「やはり」分益小作人よりも多く受けとっている「ということになる」のではないだろうか？　馬なしではたらく人の平均日給（年間平均）は、ペッサラビア県で一八八二—一八九一年には六七カペイカと算定されている（同、一七八ページ）。

このように、雇役のもとでは（高利貸と結びついた債務奴隷制的雇用のもとでもまったく同様に）、ふつう、労働の価格は資本主義的雇用とくらべれば半分以下である。* 雇役をひきうけることができるのは、その土地の、しかもかならず「分与地を供与された」農民だけであるから、労賃が非常に低いということの事実は、分与地が現物賃金としての意義をもつことを、明白にしめしている。このような場合の分与地は、現在でもひきつづき、土地所有者に安い働き手を「保障する」手段として役だっている。しかし、自由な労働と「なかば自由な」** 労働との相違は、けっして支払高の相違だけにつきはしない。後者の種類の労働がつねに雇い主にたいする被雇用者の人格的隷属を前提し、つねに「経済外的強制」が多少とも維持されていることを前提するという事情もまた、非常に重要である。エンゲリガルトは非常に適切に次のように言っている。——雇役を条件に金銭を貸与するのは、このような債務が最も確実だからである。執行令状によっては農民から取りたてることは困難だが、「農民に義務を負わせた労働は、たとえ農民自身の穀物がまだ刈りとられずに残っているとしても、当局がその履行を強制する」（前掲書、二一六ページ）。農夫が自分の穀物を雨ざらしにしたまま、他人の穀物束を運びに出かけるというほどの「このような冷淡さ」（外見だけの）「を育てあげることができたのは、ただ長年の隷従、旦那のための農奴的労働だけである」（同、四二九ページ）。住居を居住地に、「共同体」に、あれこれの形態で緊縛することなしには、市民的権利のなんらかの制限なしには、制度としての雇役は不可能だったであろう。いうまでもなく、雇役制度の上述の特徴から不可避的に生ずる結果は、低い労働生産性である。雇役にもとづく経営方法はきわめて旧態依然たるものでしかありえず、債務奴隷化された農民の労働は質の点で農奴の労働に近いものにならざるをえないのである。

* そうである以上、たとえば、ヴァシーリチコフ公爵のようなナロードニキがおこなっている資本主義批判を、どうして反動的とよばずにおられよう。彼は悲壮にこう叫んでいる。「自由雇用の」ということば自体に矛盾がふくまれている。

なぜなら、雇用は非自立性を前提しており、非自立性は「自由」を排除するからである、と。資本主義は債務奴隷的な非自立性のかわりに自由な非自立性を打ちたてるということを、ナロードニキぶるこの地主は、もちろん忘れているのである。

＊＊ カルィシェフ氏の表現、前掲書。カルィシェフ氏は、分益小作は「なかば自由な」労働の遺物を「たすける」という結論をくださなかったが、むなしいことだ。

雇役制度と資本主義制度との結合によって、現代の地主経済の構造は、経済組織の点で、機械制大工業が現われるまでわが国の繊維工業で優勢であった構造に、非常に近いものになっている。そこでは、作業の一部（紡糸の整経、染色、織物の仕上げ、その他）を、商人が自分の道具と賃金労働者をつかっておこない、一部は、商人の原料で彼のためにはたらくクスターリ農民の道具によっておこなわれていた。だがここでは、作業の一部は、地主の農具をもちいる賃金労働者によっておこなわれ、一部は、他人の土地ではたらく農民の労働と農具によっておこなわれている。そこでは、商業資本が産業資本と結合し、クスターリの上には、資本のほかに、債務奴隷制、親方の仲介、トラックーシステムその他がのしかかっていた。ここでも、まったく同様に、商業資本と高利貸資本が産業資本と結合して、あらゆる形態で支払いを引きさげ、生産者の人格的隷属を強めている。そこでは、過渡的制度が原始的な手工業技術を基礎にして数世紀つづいてきたが、機械制大工業によって三〇年ばかりのあいだに打ちこわされた。ここでは、雇役がほとんどルーシ[102]の初めから（土地所有者たちは、すでに『ルースカヤ・プラウダ[103]』の時代に、スメルドを奴隷化していた）旧来の技術をながくつたえながら維持されてきたが、ようやく農民改革後の時代になって急速に資本主義に地位をゆずりはじめている、そこでもここでも、古い制度は、生産の形態における（したがってまたすべての社会関係における）停滞とアジア的性格の支配とを意味するにすぎない。そこでもここでも、新しい資本主義的経済形態は、それに固有のあらゆる矛盾にもかかわらず、巨大な進歩なのである。

四　雇役制度の衰退

さてそれでは、雇役制度はロシアの農民改革後の経済にたいしてどのような関係にあるだろうか？

なによりもまず、商品経済の成長は雇役制度と両立しない。なぜなら、この制度は、現物経済、変化しない技術、地主と農民の不可分の結びつきを基礎とするからである。だから、この制度は完全な形ではまったく実現されえないのであって、商品経済の商業的農業の発展は一歩ごとに、この制度が実現される条件を打ちこわしてゆく。

ついで、以下の事情を考慮に入れる必要がある。上述のことから、現代の地主経済における雇役は二つの種類に分けなければならないということになる。(一) 役畜と農具をもつ農民経営主だけが遂行できる雇役 (たとえば、「輪作」地の耕作、耕起、その他) と、(二) なんの農具ももたない農村プロレタリアでも遂行できる雇役 (たとえば、刈取り、草刈り、脱穀、等々) とである。農民経済にとっても、地主経済にとっても、第一種と第二種の雇役が反対の意義をもっていること、後者の雇役が、まったくとらえがたい多数の過渡形態で資本主義と融合しながら、資本主義への直接の過渡段階をなしていることとは、明らかである。ふつう、わが国の文献では、この区別をしないで雇役一般についてかたっている。ところが、資本主義が雇役を駆逐する過程では、第一種の雇役から第二種の雇役への重心の移動が巨大な意義をもっているのである。つぎに『モスクワ県統計報告集』から例をあげよう。「大多数の領地では……畑の耕作や種播き、すなわち、それを念入りにおこなうかどうかで収穫が影響されるような仕事は常雇労働者によっておこなわれるが、穀物の取入れ、すなわち、適時にまた迅速におこなわれることがなによりも重要であるような仕事は、金銭あるいは用益地を代償として近傍の農民にまかされる」(第五巻第二冊、一四〇ページ)。このような経営では働き手の大部分が雇役によって得られるが、しかし資本主義制度が疑いもなく優勢であって、「近傍の農民」は実質的には農業労働者――やはり土地をもち、やはり一年の一定の期間やとわれている、ドイツの「契約日雇い」に類似のもの――に転化している (前出、一二四ページ〔本訳書一四〇ページ〕の注を見よ)。九〇年代の凶作の影響で、農民のもつ馬の頭数が激減し、馬をもたない農家の数が増大したことは、[*] 資本主義制度による雇役制度の駆逐のこの過程を促進するうえに強い影響をあたえないではおかなかった。[**]

* 一八九三―一八九四年の馬匹調査は、四八県で、馬所有者全体のもつ馬が九・六%減少し、馬所有者の数が二八、三二一人減少したことを明らかにした。タンボフ、ヴォロネジ、クルスク、リャザン、オリョール、トゥーラ、ニジェゴロドの諸県では、一八八八年から一八九三年までの馬の減少は二一・二%であった。黒土地帯の他の七県では、一八九一年から一八九三年までの減少は一七%であった。ヨーロッパ・ロシアの三八県では、一八八八―一八九一年に、七、九二二、二六〇戸の農家があり、そのうち馬をもつものは五、七三六、四三六戸であった。一八九三―一八九四年にはこれらの県に八、二八八、九八七戸の農家があり、そのうち馬をもつものは五、六四七、二三三戸であった。したがって、馬をもつ農家の数は八万九〇〇〇戸減少し、馬をもたない農家の数は四五万六〇〇〇戸増加した。馬をもたない農家の比率は二七・六%

から三一・九%に高まった（『ロシア帝国統計』、第三七巻、サンクト・ペテルブルグ、一八九六年）。さきにしめしたように、ヨーロッパ・ロシアの四八県については、馬をもたない農家の数は一八八八―一八九一年の二八〇万戸から一八九六―一九〇〇年の三二〇万戸に、すなわち二七・三%から二九・二%に増加した。南部の四県（ベッサラビア、エカテリノスラフ、タヴリーダ、ヘルソン）では、馬をもたない農家の数は一八九六年の三〇五、八〇〇戸から一九〇四年の三四一、六〇〇戸に、すなわち、三四・七%から三六・四%に増加した（第二版への注）。

** エス・ア・コロレンコ、『自由な賃労働……』、四六―四七ページをも参照。そこには、一八八二年と一八八八年の馬匹調査にもとづいて、農民のもつ馬の頭数が減少する一方、私的土地所有者のもつ馬の頭数が増大しているという実例があげられている。

最後に、雇役制度の衰退の最も重要な原因として、農民層の分解をあげなければならない。雇役（第一種の）とほかならぬ中位の農民グループとの結びつきは――すでにさきに指摘したように――ア・プリオリにも明らかであるが、それはまたゼムストヴォ統計の資料によっても証明することができる。たとえば、ヴォロネジ県ザドンスク郡の統計集には、種々の農民グループで出来高払いの仕事をひきうけた経営の数にかんする情報が掲載されている。次の表は、これらの資料を百分率でしめしたものである。〔第五九表〕

この表からはっきりわかるように、出来高払いの仕事への参加の比率が両極のグループでは低くなっている。出来高払いの仕事をもつ農家の比率が最大なのは中位の農民グループである。ゼムストヴォ統計集では出来高払いの仕事もしばしば「賃仕事」一般に入れられているので、したがってわれわれはここに中農層の典型的な「賃仕事」の例を見るわけである。これは、前章でわれわれが下級と上級の農民グループの典型的な「賃仕事」を知ったのと、まったく同様である。そこで考察した種類の「賃仕事」は資本主義の発展（商工業施設と労働力の販売）をあらわしているが、ここに見る種類の「賃仕事」は、反対に、資本主義の遅れと雇役の優勢をあらわしている（もし、「出来高払いの仕事」全体のなかで優勢なのが、われわれが第一種の雇役に入れたような仕事であるとするならば）。

現物経済の衰退と中農層の衰退が進行すればするほど、雇役はますますはげしく資本主義によって駆逐されるにちがいない。富裕な農民層は、当然、雇役制度の基礎にはなりえない。というのは、極度の困窮だけが、農民に、報酬が最低で彼の経済にとって破滅的な仕事をひきうけさせるのだからである。だがまた農業プロレタリアートも、他の理由からではあるが、同様に雇役制度には適さない。農業プロレタリアはなにも経営をもたないか、あるいはとるに

〔第 59 表〕

世帯主のグループ	各グループの世帯主総数のうち，出来高払いの仕事をひきうけた世帯主の%	農家総数にたいする%	出来高払いの仕事をひきうけた農家の総数にたいする%
馬をもたないもの	9.9	24.5	10.5
馬1頭をもつもの	27.4	40.5	47.6
馬2—3頭 〃	29.0	31.8	39.6
馬4頭以上 〃	16.5	3.2	2.3
総　数	23.3	100	100

たりない小さな土地しかもっていないから、「中」農のように土地に緊縛されていない。その結果、彼ははるかに容易によそに出かけて、「自由な」条件で、すなわち、より高い賃金で、なんら債務奴隷関係なしにやとわれることができる。ここからして、農民が都市へ、また一般に「出稼ぎ」へ出かけることにたいするわが大地主たちの不満がいたるところで出てくるのであり、またここからして、農民が「あまり緊縛されていない」という大地主たちの苦情が出てくるのである（後出、一八三ページ〔本訳書二二二ページ〕を見よ）。純資本主義的な賃労働の発展は雇役制度を根底からくつがえすのである。*

＊ とくにきわだった例をあげよう。ゼムストヴォ統計家たちは、エカテリノスラフ県バフムート郡のいろいろな地方における貨幣借地と現物借地の相対的普及度を、次のように説明している。

「貨幣借地が最も普及している地方は石炭産業と岩塩産業の地帯にあり、最も普及していない地方はステップ地帯と純農業地帯といわれるところにある。農民は一般に、他人の仕事、とくに私有の『大農場』での拘束が多くて報酬が十分でない仕事には、ゆきたがらない。炭鉱内での労働、また一般に採鉱や冶金業での労働は、きつくて労働者の健康に害があるけれども、一般的にいえば、この労働は報酬がよく、また毎月あるいは毎週貨幣を受けとる見込みがあるので、労働者をひきつけている。『大農場』ではたらいていては、ふつう、貨幣を見ることはない。なぜなら、そこでは『一片の土地』、『一束のわら』、『一切れのパン』のためにはたらくか、あるいはすでに日常の入用につかう貨幣をすべてさきに借りてしまっているか、等々だからである。これらすべてのことが労働者に、もし『大農場』以外で貨幣をかせぐ可能性があれば、実際にそうしているように『大農場』での仕事を避けるようにさせるのである。そしてこのような可能性は、労働者に『よりよく』貨幣を支払う炭鉱が多数ある地方にこそ、どこ

よりも多い。炭鉱で『小銭』をかせげば、農民は『大農場』の仕事に束縛されずに、稼いだ金で土地を借りることができる。こうして、貨幣借地の優勢が確立されるのである」(『ゼムストヴォ統計の総括』、第二巻、二六五ページから引用)。ところがこの郡のステップ地帯の非工業的な郷では、スコープシチナと雇役借地とが確立されている。

このように、農民は雇役からのがれて炭鉱にゆくことさえ辞さないのだ！　現金での定期的な支払い、個人関係のない雇用形態および規則的な仕事が農民を強く「ひきつける」ので、彼は地下の炭鉱でさえ、農業よりは、わがナロードニキたちがあれほど牧歌的に描きたがっているあの農業よりは、ましだとするほどである。問題はまさに、大地主やナロードニキたちが理想化している雇役がなにに値するか、純資本主義的関係のほうが雇役よりどれほど良いかということを、農民が身をもって知っているという点にある。

農民層の分解と資本主義による雇役の駆逐とのこの不可分の関連――理論上これほども明白な関連――は、地主の領地における種々の経営方法を観察した農業著述家たちによってすでに早くから注目されていた、ということを指摘するのはきわめて重要である。ステブート教授は、一八五七年から一八八二年のあいだに書いたロシア農業にかんする論文集の序文で、次のように指摘している……。「わが国の共同体的農民経済のなかで、企業家的農業経営主と農業日雇いとのあいだに分化が生じている。前者は大規模な作付者となって雇農をかかえはじめており、作付のためにさらにいくらかの土地をつけくわえようとか、あるいは家畜の放牧のために用益地――これは大部分出来高払いの仕事の代償としてでなければ入手できない――を利用しようとかいう要求がさしせまっているのでないかぎり、ふつうは出来高払いの仕事をひきうけなくなっている。他方、後者は馬をもたないため、どんな出来高払いの仕事もひきうけることができない。このことから、雇農経済への移行、しかもますます急速な移行の必然性は明らかであるが、そうなるのは、デシャチーナ単位の出来高払いの仕事をまだひきうけている農民が、その所有する馬の力の弱さと取りこんだ仕事の大量なこととのため、質の点でも、仕事を適時に果たすという点でも、劣等な作業遂行者になりつつあるためである」(二〇ページ)。

農民の零落が資本主義による雇役の駆逐をもたらすという指摘は、現在のゼムストヴォ統計でもなされている。たとえば、オリョール県では穀物価格の低落が多数の借地農を零落させ、地主には経済採算耕地の拡大をよぎなくさせたことが、指摘されている。「経済採算耕地の拡大とならんで、出来高払いの労働を雇農労働にとりかえ、農民の農具の利用から脱却しようという気運、……改良農具をとりいれて畑の耕作を改善し、……経営方式を変え、牧草栽培

をとりいれ、家畜飼育を拡張および改良し、それに畜産業としての性格をあたえようという気運が、いたるところで見られる」(『一八八七／八八年度オリョール県農業概観』、一二四—一二六ページ。ペ・ストルーヴェ『批判的覚え書』、二四二—二四四ページから引用)。ポルタワ県では一八九〇年に、低い穀物価格のため「全県で……農民による土地の賃借の減少……」が確認されており、——「それに対応して、多くの地方で、穀物価格のはげしい低落にもかかわらず地主の自家耕作の規模が拡大された」(『収穫の影響……』、第一巻、三〇四ページ)。タンボフ県では、馬の仕事の価格がいちじるしく上昇したという事実が指摘されている。すなわち、一八九二—一八九四年の三年間には、この価格は一八八九—一八九一年の三年間にくらべて二五—三〇％高くなった(『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九五年、第三号、一八七ページ)。馬の仕事の価格騰貴——農民の馬が減少したことの当然の帰結——は、資本主義制度による雇役の駆逐に影響しないではおかない。

もちろん、われわれには、資本主義による雇役の駆逐をこれらの個々の指摘によって証明するつもりはけっしてない。このことについての完全な統計資料は存在しない。われわれはただ、農民層の分解と資本主義による雇役の駆逐との関連についての命題を、これによって例証するだけである。この駆逐が現におこなわれていることを争う余地なく証明するような全般的な大量の資料は、農業における機械の使用および自由な賃労働の使用にかんするものである。しかし、われわれはこれらの資料に移るまえに、ロシアにおける現代の私有地経済にたいするナロードニキ経済学者たちの見解に、ふれておかなければならない。

五　この問題にたいするナロードニキの態度

雇役制度は賦役経済の直接の遺物であるという命題は、ナロードニキも否定していない。それどころか、ニコライ—オン氏も(『概要』、第九節)、ヴェ・ヴェ氏も(論文『わが国の農民経済と農学』、『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』〔『祖国通信』〕、一八八二年、第八—九号でとくにはっきり)、この命題を——十分に一般的な形ではないとしても——認めている。それだけに、次のような事情はいっそう驚くべきことである。すなわち、ナロードニキは、現代の私有地経済の構造が雇役制度と資本主義制度との結合からなっており、したがって、前者が発展していればそれだけ後者は弱く、逆の場合は逆であるという、この簡単明瞭な事実の承認を極力さけている——これら二

つの制度が労働生産性、労働者の賃金、ロシアの農民改革後の経済の基本的諸特徴、等々にたいしてどのような関係にあるのかということとの分析をさけている、という事情がそれである。このような基礎のうえに、すなわち、実際に生じている「交代」の確認という基盤のうえに、問題を提起することは、資本主義による雇役の駆逐の不可避性とこの駆逐の進歩性とを承認することを意味した。このような結論をさけるために、ナロードニキは雇役制度の理想化をさえためらわなかった。このような途方もない理想化が、地主経済の進化についてのナロードニキ的見解の基本的特徴なのである。ヴェ・ヴェ氏は、「人民は農耕の形態をめぐる闘争では、たとえ、そのかちとった勝利が人民の零落をいっそう強めたとしても、やはり勝利者である」(『資本主義の運命』、二八八ページ)と書いたほどである。このような「勝利」の承認は敗北の確認よりもいっそうきわだっている! ニコライーオン氏は、賦役経済と雇役経済の場合の農民への土地の分与のなかに、「生産者と生産手段との結合」の「原理」を見いだしたが、そのさい彼は、このような土地分与が地主に働き手を保障する手段となったということ、ちょっとした事情を忘れていた。われわれがすでに指摘したように、マルクスは、前資本主義的農業の諸制度を記述するさいに、まさにロシアにあるような経済関係のあらゆる形態を分析し、労働地代のもとでも現物地代のもとでも貨幣地代のもとでも、小規模生産および農民と土地との結合が必然的であることを、きわだって強調した。しかし彼は、隷属農民へのこのような土地分与を、生産者と生産手段との永遠の結合という「原理」にまで高めることを、思いつくことができたであろうか? 彼は、生産者と生産手段とのこのような結合が中世的搾取の源泉と条件であり、技術と社会の停滞を条件づけるものであり、あらゆる形態の「経済外的強制」を必然的に要求するものであったということを、一瞬でも忘れたことがあるであろうか?

オルロフ氏とカブルーコフ氏もモスクワのゼムストヴォ統計『集』のなかで、ポドリスク郡のコスチンスカヤ夫人とやらの経営を典型としてとりあげて、雇役と債務奴隷制のまったく同様な理想化をしてみせている(第五巻第一冊、一七五—一七六ページおよび第二巻、五九—六二ページ、第二部を見よ)。カブルーコフ氏の意見によれば、この経営は、「このような対立」(すなわち、地主経済と農民経済との利害の対立)「を取りのぞき(原文のまま!;)、農民経済と私営経済との両方の繁栄した(原文のまま!)状態を助成するような事物の組立てが可能であること」を、証明している(第五巻第一冊、一七五—一七六ページ)。農民の繁栄した状態は……雇役と債務奴隷制のなかにある、と

いうわけである。農民は牧場や家畜の通路をもっていない（第二巻、六〇—六一ページ）——このことは、ナロードニキ諸君が農民を「正常な」経営主と考えることを妨げない——ので、地主のところでの労働を代償にこれらの用益地を借りうけ、「地主所有地でのすべての仕事を念入りに、適時に、迅速に」おこなうのである。*

* ヴォルギン、前掲書、二〇八—二八一ページを参照。

賦役の直接の遺物である経済制度を理想化することでは、これ以上にはいきようがない！

すべてこの種のナロードニキの議論の仕方はきわめて簡単である。農民への土地の分与は、賦役経済あるいは雇役経済の条件の一つであるということを忘れさえすればよい。この「自立的」農耕者とやらが労働地代、現物地代あるいは貨幣地代の義務を負っているという事情を、捨象しさえすればよい。そうすれば、「生産者と生産手段との結合」という「純粋の」観念が得られる。しかし、前資本主義的搾取諸形態にたいする資本主義の真の関係は、これらの形態をただ捨象しただけでは少しもかわりはしない。*

* 「貨幣借地にかわって雇役借地がひろまることは……逆行的な事実である、と言われる。だがいったいわれわれはこれを望ましい有益な現象だと言っているだろうか？　われわれは、これが進歩的な現象だとはけっして主張したことはない」——チュプロフ氏は、『収穫の影響……』という本のすべての著者の名において、こう言明した[10]（一八九七年三月一日と二日の自由経済学会における討論会の速記録、三八ページを見よ）。この言明は形式的にも正しくない。なぜなら、カルィシェフ氏（前述を見よ）は雇役を農村住民にたいする「助け」として描いているからである。また本質的には、この言明は、雇役を理想化するすべてのナロードニキ理論の実際の内容と完全に矛盾している。トゥガン-バラノフスキーとストルーヴェの両氏の大きな功績は、低い穀物価格の意義について正しく問題を提起したこと（一八九七年）にある。すなわち、穀物価格を評価する基準は、その価格が資本主義による雇役の駆逐を促進するか否かということでなければならない、というのである。このような問題は、明らかに、事実の問題である。そしてそれにたいする答では、われわれは右の著者たちと多少意見を異にしている。本文で叙述される（とくに本章第七節と第四章を見よ）資料にもとづいて、われわれは、低い穀物価格の時期も、それに先だつ高い穀物価格の歴史的時期にくらべて、資本主義による雇役の駆逐が、より急速ではないとしても、それに劣らない速さを特徴とするということがありうるし、またそれが確実であると考えている。

カブルーコフ氏のもう一つのきわめて目新しい議論について若干のべよう。われわれは彼が雇役を理想化していることを見たが、注目すべきことには、彼が統計学者としてモスクワ県の純資本主義的経営の実際の型を特徴づけると

きには、彼の叙述のなかで――彼の意思に反して、また歪められた形においてではあるが――ほかならぬロシア農業における資本主義の進歩性を証明するような事実が描きだされている。以下に読者の注意をお願いするが、抜粋がかなり長くなることを、あらかじめおわびしておく。

モスクワ県には自由な賃労働をもつ古い型の経営のほかに、

「あらゆる伝統を完全にすてて、どの生産をも収入の源泉として役だつべきものと見るほどに、事物を単純に見る、新しい、最近できたばかりの型の経営がある。農業はいまではもう旦那の道楽や、だれにでもできる仕事とは考えられていない……。いや、そこでは専門的知識をもつ必要があると認められている……。」（生産の組織にかんする）「計算のための基礎は、他のあらゆる種類の生産の場合とまったく同じである」（『モスクワ県統計報告集』、第五巻第一冊、一八五ページ）。

カブルーコフ氏は、七〇年代にやっと「最近生まれたばかりの」新しい型の経営の特徴が、まさに農業における資本主義の進歩性を証明していることに、気づいてもいない。資本主義こそがはじめて、農業を「旦那の道楽」からふつうの産業に転化させたのであり、資本主義こそがはじめて、「事物を単純に見る」ようにさせ、「伝統と縁を切って」、「専門的知識」を備えるようにさせたのである。資本主義以前には、このようなことは必要でも可能でもなかった。なぜなら、個々の領地、共同体、農民家族の経営は、他の経営とは関係がなく、「自足して」いて、どんな力もそれらの経営を永遠の停滞からぬけださせることはできなかったからである。資本主義は、個々の生産者の生産の社会的計算を（市場を媒介として）実現させ、彼らに社会発展の要求を考慮するようにさせた、まさにそのような力であった。この点にこそ、すべてのヨーロッパ諸国の農業における資本主義の進歩的意義があるのである。

つぎに、カブルーコフ氏がわが国の純資本主義的経営をどのように特徴づけているかを聞こう。

「そのため、労働力は、それなしには領地のどんな組織もなにももたらさないような、自然への働きかけの必要な要素として、すでに計算にはいっている。このように、人々はこの要素の意義をすべて認めながら、同時に、それを収入の独立の源泉とは見ない。それは農奴制度のもとでそうであったのと同様であり、あるいはまた、今日、領地の収益性の基礎におかれるものが、労働生産物――その獲得が労働を充用する直接の目的ではあるが――ではなく、またこの労働をより価値ある労働生産物の生産に充用してそれによって労働の成果を利用しよう

とする欲求でもなくて、労働者が受けとる生産物部分をへらそうという志向であり、経営主にとっての労働の価値をできるだけゼロに近づけようという願望であるという場合でも、そうである」(一八六ページ)。また切取地をつかわせてもらうかわりにおこなう経営にかんする指摘がある。「このような条件のもとでは、収益をあげるのに知識も特別の資質も経営主にとって必要でない。この労働のおかげで獲得されるものはすべて地主の純収入であり、あるいは少なくとも、流動資本の支出がほとんどなにもなくて手にはいる収入である。しかしこのような経営はもちろんうまくゆくはずがないし、厳密な意味で経営とよぶことはできない。それは、すべての用益地の賃貸を経営とよぶことができないのと同様である。そこには経営組織がない」(一八六ページ)。そして、雇役とひきかえに切取地を貸与する例をあげて、著者はこう結論している。「経営の重心、土地から収入を引きだす方法は、物質とその諸力とへの働きかけのうちにではなく、労働者への働きかけに根ざしている」(一八九ページ)。

この議論は、実際に観察される事実が、誤った理論の観点から見るとどんなに歪んで現われるかということの、きわめて興味ある見本である。カブルーコフ氏は生産と生産の社会構造とを混同している。どのような社会構造のもとでも、生産は物質とその諸力とにたいする労働者の「働きかけ」である。どのような社会構造のもとでも、地主にとっての「収入」の源泉となりうるのは剰余生産物だけである。この二つの点では、雇役経済制度は、カブルーコフ氏の意見にもかかわらず、資本主義経済制度とまったく同質である。両者の実際上の相違は次の点にある。すなわち、雇役は、必然的に、きわめて低い労働生産性を前提する。だから、収入の増大のために剰余生産物の量を増加させる可能性はない。そのためにはただ一つの手段、すなわち、あらゆる債務奴隷的雇用形態の適用しか残されていない。反対に、純資本主義的経済のもとでは、債務奴隷的雇用形態は消滅しなければならない。なぜなら、土地に緊縛されていないプロレタリアは債務奴隷の対象として不適当だからである。労働生産性の向上が、収入をふやして激しい競争に耐えぬくための唯一の手段として、可能になるだけでなく必要にもなる。このように、わが国の純資本主義的経済の特徴——それは、あれほど熱心に雇役を理想化しようとつとめた当のカブルーコフ氏によってあたえられたものであるが——は、次の事実を完全に確認している。すなわち、ロシアの資本主義は、農業の合理化と債務奴隷の消滅を必然的に要求するような社会的条件をつくりだすのにたいして、雇役はその反対に、農業合理化の可能性を排除し、

技術的停滞と生産者の奴隷的従属を永久化する、という事実である。わが国の農業における資本主義は弱いという、おきまりのナロードニキ的歓呼ほどあさはかなものはない。もし資本主義が弱いのなら、いっそう悪い。なぜなら、それは、生産者にとって比べものにならないほど苛酷な前資本主義的搾取形態の威力を意味するだけだからである。

六　エンゲリガルトの経営物語

ナロードニキのなかにあってエンゲリガルトはまったく独自の地位を占めている。雇役と資本主義とにたいする彼の評価を批判することは、前節で述べたことの繰りかえしになるであろう。われわれは、エンゲリガルトのナロードニキ的見解にエンゲリガルト自身の経営物語を対置することのほうが、はるかに目的にかなっていると考える。このような批判は積極的意義をもつであろう。なぜなら、この経営の進化は、農民改革後のロシアのすべての私有地経営の進化の基本的特徴を、あたかも縮図として映しだしているからである。

エンゲリガルトが経営にのりだしたとき、それは、「正常な経営」を排除する、伝統的な雇役と債務奴隷を基礎としていた（『農村からの手紙』、五五九ページ）。雇役は、劣悪な畜産、劣悪な土地耕作、陳腐化した農耕方式の永続の原因となっていた（一一八ページ）。「私は、従来どおりの経営をすることは不可能だとさとった」（一一八ページ）。ステップ地帯の穀物の競争は価格を低下させ、経営を不利にした＊（八三ページ）。ここで注意しておくと、雇役制度とならんで、この経営では当初から資本主義制度も一定の役割を演じていたのである。すなわち、賃金労働者がごく少数ながら古い経営のもとにもいた（家畜番、その他）。そしてエンゲリガルトは、彼の雇農（土地を分与された農民出身の）の賃金が「話にならないほど低」（一一ページ）かったこと――その理由は畜産の状態が悪くて「それ以上あたえることはできない」からであった――を、証言している。低い労働生産性が賃金の引上げを不可能にしていたのである。このように、エンゲリガルトの経営の出発点は、すでにわれわれにおなじみの、すべてのロシアの経営の諸特徴、すなわち、雇役、債務奴隷、きわめて低い労働生産性、「信じられないほど安い」賃金、旧態依然とした農耕なのである。

＊　安い穀物の競争が、技術の改造の、したがって、雇役を自由な雇用にとりかえることの動機であるというこの事実は、とくに注目に値する。ステップ地帯の穀物の競争は穀物価格の高い年にも現われていた。そして価格の低い時期には、こ

の競争がとくにはげしくなるのである。

では、この秩序のなかにエンゲリガルトがもたらした変化はどのようなものか？　彼は、多数の働き手を必要とする商工業的作物、亜麻の作付に移行する。したがって、農業の商業的、資本主義的性格がつよまる。だが働き手はどのようにして手に入れるか？　エンゲリガルトは、はじめは、新しい（商業的）農業に古い方式、すなわち雇役を適用しようと試みた。これはうまくいかなかった。仕事ぶりは悪く、「デシャチーナ単位の雇役」は農民の力に余るものであり、彼らは「一括された」、債務奴隷的な労働に極力反抗した。「方式を変える必要があった。ところで、私はもう一人前になっていた。自分の馬、馬具、四輪荷馬車、木製犂、馬鍬を備えていて、すでに雇農をつかう経営をいとなむことができた。私は、一部は自分の雇農をつかい、一部は出来高払いで、一定の仕事に人をやとって亜麻をつくりはじめた」（二一八ページ）。このように、新しい経営方式と商業的農業へ移行するには、雇役を資本主義制度にとりかえることが必要であった。労働生産性を高めるために、エンゲリガルトは資本主義的生産の試験ずみの手段、出来高払労働を採用した。農婦はコプナ単位、プード単位でやとわれてはたらいた。そしてエンゲリガルトはこの方式の成功についてものがたっている（いくらか素朴に勝ち誇るという感じがないでもないが）。耕作費は上昇した（一デシャチーナあたり二五ルーブリから三五ルーブリに）が、そのかわり収入も一〇—二〇ルーブリがたふえた。債務奴隷的労働から自由な賃労働へ移行したので、女子労働者の労働生産性が向上し（一日あたり二〇フントから一プードに）、彼女たちの賃金は一日三〇—五〇カペイカに上昇した（「この地方ではかつてないこと」）。土地の織物商人はまた心からエンゲリガルトをほめて、「亜麻によって商業に大きな変化を起こさせなさった」（二一九ページ）といった。

はじめ商業的作物の耕作にもちいられた自由な賃労働は、しだいに他の農作業をもとらえるようになった。資本が雇役から取りあげた最初の作業の一つは、脱穀であった。周知のように、一般にすべての私有地経営で、この種の仕事は資本主義的におこなわれることが最も多い。エンゲリガルトはこう書いている。「私は土地の一部を輪耕地として耕作するよう農民にまかせている。なぜなら、そうしなければライ麦の刈入れを始末することがむつかしいからである」（二一一ページ）。したがって、雇役は、最も忙しい時期に経営主に日雇いの労働を保障することによって、資本主義への直接の移行に役だっている。はじめは、輪耕地の耕作は脱穀をふくめてまかされていたが、しかしこの場合にも、仕事の質の悪いことが自由な賃労働への移行をよぎ

なくさせた。輪耕地の耕作は脱穀ぬきでまかされるようになり、そして、脱穀は一部は雇農の労働でおこなわれ、一部は賃金労働者の組合をもつ請負人に出来高払いでまかされた。雇役を資本主義制度にとりかえた結果は、この場合にも次のとおりであった。(一) 労働生産性の向上。以前は一六人が一日に九〇〇束を脱穀していたが、いまでは八人で一一〇〇束を脱穀する。(二) 脱穀した穀物量の増大。(三) 脱穀時間の短縮。(四) 労働者の賃金の上昇。(五) 経営主の利潤の増加 (二一二ページ)。

つぎに、資本主義制度は土地耕作の作業をもとらえる。古い木製犂(ソハー)のかわりに鉄製犂(プラウ)がとりいれられ、仕事は隷属農民から雇農に移る。エンゲリガルトはほこらしげに、改革の成功、労働者の誠実な態度をつたえ、まったく正当にも次のように証言している。すなわち、労働者が怠惰だとか不誠実だとかいう通例の非難は、「農奴の刻印」と「旦那のため」の債務奴隷的労働の結果であるということ、新しい経営組織は、経営主にたいしても企業心や人間についての知識、人々をつかう手腕、仕事とその方法についての知識、農業の技術的および商業的な側面の知識を、すなわち、農奴制的あるいは債務奴隷制的な村のオブローモフ[三]たちにはなかったし、またありえなかった資質を、要求するということ、である。農業技術における種々の変化はたがいに結びつきあっていて、不可避的に経済の改造をもたらす。「たとえば、亜麻とクローヴァーの作付をはじめたと仮定しよう。そうすれば、それ以外の数多くの変更がすぐにも必要になる。もし変更をしなければ、事業はうまくいかない。農耕用具をとりかえ、木製犂にかえて鉄製犂をつかい、木製の馬鍬にかえて鉄製のをつかうことが必要になる。そしてそのことがつぎには、別の馬、別の労働者、労働者雇用の点での別の経営方式、等々を要求する」(一五四―一五五ページ)。

このように、農業技術の変化は資本主義による雇役の駆逐と不可分に結びついていたのである。ここでとくに興味があるのは、この駆逐がおこなわれる漸進性である。すなわち、経営方式は従来どおり雇役と資本主義とを結合していながら、重心がすこしずつ前者から後者へ移動するのである。つぎに、エンゲリガルトの改造した経営組織がどのようなものであったかをしめそう。

「いま、私のところにはたくさんの仕事がある。なぜなら、私は経営方式全体を変えたからである。仕事のかなりの部分が雇農と日雇いによっておこなわれている。仕事はきわめて多様である。すなわち、小麦のために林を焼く。亜麻のために白樺の林を抜きとる。ドニェプル河畔に草地を借りた。クローヴァーを播いた。ライ麦は大量だ。亜麻

もたくさんある。人手はいくらでも必要だ。働き手を手に入れるためにはあらかじめ手をうつ必要がある。なぜなら、仕事の時期がくると、だれもがあるいは家の仕事で、あるいはよその経営の仕事で忙しいからである。働き手を募集するために、仕事をする約束で貨幣や穀物の前渡しがおこなわれる」(一一六—一一七ページ)。

したがって、「正常に」くみたてられた経営にも雇役と債務奴隷制は残った。しかし、第一に、それらは自由な雇用にくらべるとすでに従属的な地位にあったし、第二に、雇役自体が変形していた。残ったのは、主として、経営主農民をではなく、雇農や農業日雇いを前提する第二種の雇役であった。

こうして、エンゲリガルトの自家経営はどんな議論よりもみごとに、エンゲリガルトのナロードニキ的理論をくつがえしている。彼は合理的経営を打ちたてるという目的を立てたが、所与の社会経済関係のもとでは、雇農経営を組織する以外にはそうすることができなかった。農業技術の向上と資本主義による雇役の駆逐とは、この経営のなかであいたずさえてすすんだ。それは、一般にロシアのすべての私有地経営で両者があいたずさえてすすんでいるのとまったく同様である。ところでこの過程は、ロシアの農業における機械の使用に最もはっきり現われている。

七　農業における機械の使用

農民改革後の時代は、農業機械の製造と農業における機械使用との発展の点で四つの時期に分けられる。* 第一期は農民改革直前の数年と直後の数年である。地主は農奴の「ただの」労働なしでもすむように、また自由な労働者の雇用での困難を除くために、外国製機械の購入につきすすんだ。もちろん、この試みは失敗に終わった。熱はすぐさめて、一八六三—一八六四年以後、外国製機械にたいする需要は低下した。七〇年代の末から第二期がはじまり、一八八五年までつづいた。この時期の特徴は、外国からの機械の輸入がきわめて規則的に、またきわめて急速に増大したことである。国内生産もまた規則的に増大したが、しかし輸入よりは緩慢であった。一八八一年から一八八四年までは農業機械の輸入がとくに急速に増大したが、これは、一部は、農業機械製作工場でもちいられる銑鉄と鋳鉄の免税輸入が一八八一年に廃止されたことによる。第三期は一八八五年から九〇年代の初めまでである。このときまで無税で輸入されていた農業機械はこの年に関税を課される(一プードあたり五〇金カペイカ)。高い関税のため機械の輸入は大幅に減少し、しかも国内生産は、ちょうどこの時

〔第 60 表〕

期　　　間	1000 プード	1000 ルーブリ
1869—1872年	259.4	787.9
1873—1876年	566.3	2,283.9
1877—1880年	629.5	3,593.7
1881—1884年	961.8	6,318
1885—1888年	399.5	2,032
1889—1892年	509.2	2,596
1893—1896年	864.8	4,868

期にはじまった農業恐慌の影響で発展が緩慢である。最後に第四期は、おそらく一八九〇年代初めからはじまっているが、この時期には農業機械の輸入がふたたび増加し、国内生産はとくに急速に増加している。

* 以下を見よ。『ロシア産業の歴史的=統計的概観』、第一巻、サンクト・ペテルブルグ、一八八三年（一八八二年の博覧会のために出版）所収のヴェ・チェルニャーエフの論文『農業機械製作業』。——同、第二巻、サンクト・ペテルブルグ、一八八六年、第九グループ。——『ロシアの農林業』（サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、シカゴ博覧会のために出版）所収のヴェ・チェルニャーエフの論文『農器具と農業機械』。——『ロシアの生産力』（サンクト・ペテルブルグ、一八九六年、一八九六年の博覧会のために出版）所収のレーニン氏の論文『農機具と農業機械』（第一部）。——『ヴェーストニク・フィナンソフ』（『財政通報』）、一八九六年第五一号および一八九七年第二一号。——ヴェ・ラスポーピン、前出論文。最後の論文だけが経済学にもとづいて問題を提起しているが、前の論文はすべて農学専門家が書いたものである。

以上述べたことを例証する統計資料をあげよう。外国からの農業機械の年平均輸入高は、時期別には次のとおりであった。〔第六〇表〕

残念ながら、ロシアにおける農業機械・器具の生産については、このような完全で正確な資料がない。わが国の工場統計の不十分さ、機械一般の生産とほかならぬ農業機械の生産との混淆、農業機械の「工場」生産と「クスターリ」生産とを区別するためのきちんときまったあらゆる基準の欠如——これらすべてのことがロシアにおける農業機械製作業の完全な姿を描くことを不可能にしている。

〔第 61 表〕　農業機械・器具の生産，輸入，消費（1000ルーブリ）

年　別	生産				産	外国から農業機械の輸入	農業機械の消費
	ロシア領ポーランド	バルト海沿岸の3県	南部ステップ地帯の4県（ドン，エカテリノスラフ，タヴリーダ，ヘルソン）	ヨーロッパ・ロシアのその他の県	ヨーロッパ・ロシアの50県とロシア領ポーランドとの合計		
1876年	646	415	280	988	2,329	1,628	3,957
1879年	1,088	433	557	1,752	3,830	4,000	7,830
1890年	498	217	2,360	1,971	5,046	2,519	7,565
1894年	381	314	6,183	2,567	9,445	5,194	14,639

前掲の出典にある資料を総括すると、ロシアにおける農業機械製作業の発展の次のような姿が得られる。〔第六一表〕

この資料から、改良農具が原始的農具を駆逐する過程（したがってまた資本主義が原始的経営形態を駆逐する過程）がどのような力で現われているかがわかる。一八年間に農業機械の消費は三・五倍以上に増加したが、これは主として国内生産の発展によるもので、それは四倍以上に増大した。また、この生産の主要な中心地がヴィスラ河沿岸およびバルト海沿岸の諸県から南ロシアのステップ地帯の諸県に移ったことも、注目すべきことである。七〇年代には、ロシアにおける農業資本主義のおもな中心地は西部辺境の諸県であったのにたいして、一八九〇年代には純ロシアの諸県に農業資本主義のいっそう卓越した地方が形成された。*

＊　事態が近年どう変わったかを判断するために、『ロシア年鑑』（中央統計委員会刊行、サンクト・ペテルブルグ、一九〇六年）から一九〇〇—一九〇三年の資料をあげよう。ここでは、帝国における農業機械の生産はその間に一二〇五万八〇〇〇ルーブリ、外国からの輸入は一九〇二年に一五二四万ルーブリ、一九〇三年に二〇六一万五〇〇〇ルーブリと算定されている。（第二版の注）

いまあげた資料に関連してつけくわえておくべきことは、この資料がいま考察している問題についての公式の（そして、われわれが知るかぎりでは唯一の）情報にもとづくものであるにもかかわらず、それはきわめて不完全であって、異なる年度について十分には比較できないということである。一八七六—一八七九年については、一八八二年の博覧会のためにとくにあつめられた情報がある。それは、農業用具の「工場」生産だけでなく「クスターリ」生産をもふくんでいて、きわだって完全である。平均すると、一八七六—一八七九年にはロシア領ポーランドをふくむヨーロッ

パ・ロシアに三四〇の事業所がかぞえられた。ところが一八七九年の「工場」統計の資料によると農業機械・器具を製造する工場はヨーロッパ・ロシアで六六を超えなかった（一八七九年度のオルロフ『工場案内』によって計算）。この二つの数字の大きなくいちがいは、三四〇の事業所のなかには蒸気機関をもつ三分の一以下（一〇〇）の事業所と二分の一以上（一九六）の手工業的事業所とがふくまれていたためである。三四〇事業所のうち二三六は自身の鋳物工場をもたず、鋳物部品はよそで鋳造していた（『歴史的＝統計的概観』、前掲）。ところが、一八九〇年と一八九四年については、情報は『ロシアにおける工場工業にかんする資料集成』（商工局刊行）からとられている。* これらの情報は農業機械・器具の「工場」生産をさえ完全には包括していない。たとえば、一八九〇年には、『資料集成』はこの生産に従事する工場をヨーロッパ・ロシアで一四九としているが、他方、オルロフの『案内』では農業機械・器具を製造する工場が一六三以上あげられている。一八九四年には、前者の資料によるとこの種の工場はヨーロッパ・ロシアに一六四あったが（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第二一号、五四四ページ）、『工場一覧表』によると一八九四／九五年度には農業機械・器具を製造する工場が一七三以上があげられている。農業機械・器具の小規模な「クスターリ」生産についていえば、それはこれらの資料にはまったくふくまれていない。** したがって、一八九〇年と一八九四年にかんする情報が実際よりいちじるしく低いということは、疑う余地がない。このことは専門家の批評も確認していることであり、彼らは、ロシアでは一八九〇年代の初めに農業機械・器具は総額約一〇〇〇万ルーブリ生産され（『農林業』、三五九ページ）、一八九五年には総額約二〇〇〇万ルーブリ生産された（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九六年、第五一号）と計算している。

* 『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二一号では、一八八八—一八九四年間のこれらの資料が対比されているが、その出所は正確にはしめされていない。

** 農耕用具の製造と修理をおこなう作業場の数は全部で、一八六四年——六四、一八七一年——一一二、一八七四年——二〇三、一八七九年——三四五、一八八五年——四三五、一八九二年——四〇〇、一八九五年——約四〇〇であった（『ロシアの農林業』、三五八ページ、『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九六年、第五一号）。ところが『集成』は、一八八八—一八九四年にこの種の工場の数をわずか一五七—二一七（七年間の平均は約一八三）だったとしている。ここで、農業機械の「工場」生産と「クスターリ」生産との関係をしめす例をあげよう。ペルミ県では一八九四年にわずか四「工場」で、その生産総額は二万八〇〇〇ルーブリであった

が、他方、この部門の「クスターリ事業所」は一八九四／九五年度の調査によれば九四で、生産総額は五万ループリであった。しかも、「クスターリ事業所」のなかには、たとえば賃金労働者六人をもち八〇〇〇ルーブリ以上の生産額をあげているようなのもふくまれていた（『ペルミ県におけるクスターリ工業の状態の概要』、ペルミ、一八九六年）。

ロシアで製作される農業機械・器具の種類と数量について、もうすこしくわしい資料をあげよう。一八七六年には二五、八三五の農具が、一八七七年には二九、五九〇、一八七八年には三五、二二六、一八七九年には四七、八九二の農業機械・器具が生産された、と計算されている。現在はこれらの数字をどのくらい多く突破しているかは、次の指摘からわかる。プラウは一八七九年に約一四、五〇〇生産されていたが、一八九四年には七五、五〇〇生産された（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第二一号）。「五年まえには農民経営でプラウを普及する方法の採用という問題が解決を要する問題であったが、現在ではそれはおのずから解決されている。あれこれの農民がプラウを購入することはもう珍しいことではなく、ありふれた現象になった。現在では農民が入手するプラウの年々の数量は数千をもってかぞえることができる」*。ロシアでつかわれている原始的な農具が大量なため、プラウの生産と販売にとってまだ広い余地が残っている。** プラウの使用がすすんだので電気の応用という問題さえ出てきた。『トルゴヴォープロムィシレンナヤ・ガゼータ』（『商工業新聞』）（一九〇二年第六号）の報道によると、第二回電気技術者大会で「ヴェ・ア・ルジェフスキーの『農業における電気』という報告が大きな関心をひきおこした」。報告者は、見事なできばえの図をつかってドイツにおける電力をもちいたプラウによる畑地の耕耘を図解し、この方法による耕耘の経済性をしめす数字資料を、報告者が南部のある県の地主の求めに応じてその領地のためにつくった企画と計算をもとにしてしめした。その企画によると、毎年五四〇デシャチーナを耕起し、一部は年に二度耕起することになっていた。耕起の深さは四・五—五ヴェルショークで、土地は純黒土である。この企画には、プラウのほかに、それ以外の畑仕事のための機械の設備や、さらに脱穀機、製粉機もあり、最後のものは二五馬力で年間二〇〇〇時間稼働することになっていた。報告者はこの領地を完全に設備するための費用を、太さ五〇ミリメートルの架線六ヴェルスタをふくめて、四一、〇〇〇ルーブリと計算した。一デシャチーナの耕作費は、製粉機も設備した場合には七ルーブリ四〇カペイカ、製粉機なしなら八ルーブリ四〇カペイカかかる。働き手、家畜、その他の地方価格で計算すると、電気設備を

使用することによる節約は、前者の場合は一、〇一三ルーブリ、後者の場合は製粉機がないので電力の消費が少ないが、節約は九六六ルーブリという数字になる。

* 『ロシアにおけるクスターリ工業にかんする報告と研究』、国有財産省刊行、第一巻、サンクト・ペテルブルグ、一八九二年、二〇二ページ。農民によるプラウの生産は、工場生産に駆逐されて、同じ期間に減少している。

** 『ロシアの農林業』、三六〇ページ。

脱穀機と簸浄機の生産にはこのような激変は認められない。なぜなら、その生産はすでに早くから比較的しっかり確立されていたからである。* これらの農具の「クスターリ」生産の特別の中心地――リャザン県サポジョーク市とその近郊農村――さえできていて、この地方の農民ブルジョアジーに属する人々は、この「営業」で結構な金もうけをしていた（『報告と研究』、第一巻、二〇八―二一〇ページを参照）。穀物刈取機の生産にはとくに急速な拡大が見うけられる。一八七九年には年に約七八〇台生産された。一八九三年には年に七、〇〇〇―八、〇〇〇台が販売されていると算定されたが、一八九四／九五年には約二万七〇〇〇台になった。たとえば、一八九五年にタヴリーダ県ベルチャンスク市のデ・グリエヴズの工場――「この生産ではヨーロッパ最大の工場」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九六年第五一号、すなわち穀物刈取機の生産では最大）――は、四、四六四台の穀物刈取機を生産した。タヴリーダ県の農民のあいだに穀物刈取機が普及したため、機械で他人の穀物を収穫するという特別の営業さえできたほどである。**

* 一八七九年には約四、五〇〇台の脱穀機が、一八九四―九五年には約三、五〇〇台が生産された。後者の数字はクスターリ生産をふくんでいない。

** たとえば、一八九三年には「ファルツ－フェイン（二〇デシャチーナの所有者）のウスペンスカヤ農場に、サーヴィスを供給するところの七〇〇台の農民の機械があつまったが、その半数はなすところなく退去した。というのは、わずか三五〇台がやとわれただけだからである」（シャホフスコイ『農業出稼ぎ』、モスクワ、一八九六年、一六一ページ）。しかし、ステップ地帯の他の諸県、とくに外ヴォルガの諸県では穀物刈取機はまだあまり普及していない。それでも、近年はこれらの県も熱心にノヴォロシアに追いつこうとしている。たとえば、スィズラニ＝ヴャジマ鉄道で輸送された農業機械、蒸気牽引車およびそれらの部品は、一八九〇年――七万五〇〇〇プード、一八九一年――六万二〇〇〇プード、一八九二年――八万八〇〇〇プード、一八九三年――一二万プード、一八九四年――二一万二〇〇〇プードであった。すなわち、およそ五年のあいだに輸送量はほぼ三倍になった。ウホロヴォ駅が発送した地方製の農業機械は、一八九三年――約三万プード、一八九四年――約八万二〇〇〇プードであった。ところが一

八九二年までは、この駅からの農業機械の発送は年に一万プードに達しなかった。「ウホロヴォ駅からは、主としてリャザン県のカニノ村、スムィコヴォ村、また一部は郡都サポジョークで製造される脱穀機が発送される。カニノ村には三つの鋳物工場があるが、これらはエルマコフ、カレフ、ゴリコフの所有であって、おもに農業機械の部品をつくっている。機械の仕上げと組立てには上記の二つの村(スムィコヴォとカニノ)がほとんど村をあげて従事している」(『一八九四年における スィズラニ＝ヴャジマ鉄道の商業活動の概要』、第四冊、カルーガ、一八九六年、六二—六三ページ)。この例で興味があるのは、第一に、まさに近年、すなわち穀物価格が低い諸年に生産が著増したという事実、第二に、「工場」生産といわゆる「クスターリ」生産との結合という事実である。後者はまったくもって工場の「外業部」になっている。

同種の資料は、普及度の低い他の農具についてもある。たとえば、撒播機はすでに数十の工場で製造されているし、また、それより完全な条播機は、一八九三年にはわずか二工場で製造されているだけだったが(『農林業』、三六〇ページ)、現在ではすでに七工場で製造されていて(『生産力』、第一巻、五一ページ)、その製品はこれまた南ロシア全域でとくに広く普及している。機械の使用は農業生産の全部門と個々の生産物の生産の全作業をおおっている。すなわち、専門家の概観では、簸浄機、選別機、穀種精選機(トリエル)、穀物乾燥機、乾草圧搾機、亜麻打ち機、等々の普及が指摘されている。プスコフ県ゼムストヴォ参事会刊行の『一八九八年度農業報告付録』(『セーヴェルヌィ・クリエール』〔『北国の急使』〕、一八九九年第三二号)では、自家消費の亜麻栽培から商業的亜麻栽培への移行と関連して、機械とくに亜麻打ち機が普及していることが確認されている。プラウの数がふえている。出稼ぎが農業機械の数の増加と賃金の上昇に影響をあたえていることが、指摘されている。スタヴローポリ県では(同誌、第三三号)、同県への移住の増加と関連して農業機械の普及が急激にすすんでいる。一八八二年には農業機械の数は九〇八台であったが、一八九一—一八九三年には平均二九、二七五台、一八九四—一八九六年には平均五四、八七四台で、一八九五年には農業器具と機械は約六四、〇〇〇台になった。

機械使用の増加は、当然、発動機にたいする需要を呼びおこす。蒸気機関とならんで、「近頃、わが国の経営では石油発動機が急速に普及しはじめている」(『生産力』、第一巻、五六ページ)。外国でこの種の発動機がはじめて現われたのはやっと七年まえのことであるのに、わが国にはもうそれを製造する工場が七つある。ヘルソン県には、七〇年代には農業用の蒸気発動機の統計のための資料』、サンクト・ペテルブルグ、一八八二年)、一八八一年には約五〇

〇台あった（『歴史的＝統計的概観』、第二巻、農業用具の部）。一八八四―一八八六年にはこの県の三つの郡（六つのうち）に四三五台の蒸気脱穀機があった。「現在（一八九五年）では、これらの機械の数は少なくともこの二倍あると見なければならない」（デジャコフ『ヘルソン県の農業労働者と彼らの衛生管理組織』、ヘルソン、一八九六年、七一ページ）。『ヴェーストニク・フィナンソフ』（一八九七年、第二一号）のいうところでは、ヘルソン県では蒸気脱穀機は「約一、一五〇台をかぞえ、クバン州の蒸気脱穀機の数はこれと同数のあたりを上下している、等々……。近頃は、蒸気脱穀機の入手は産業的性格をもつようになった……。豊作の二―三年のあいだに蒸気牽引車つきの五、〇〇〇ルーブリの脱穀機を完全に償却し、すぐに同じ条件で新しいのを入手したというような例がたびたびあった。こうして、クバン州のあまり大きくない経営でもこの種の機械を五台、さらには一〇台見かけることもまれではない。この地方では、これらの機械は多少とも設備のよいすべての経営にとって不可欠の付属品となった」。「現在、南ロシアでは、農業の用途をもつ蒸気牽引車が全部で一万台以上運転されている」（『生産力』、第九巻、一五一ページ）。*

* 『ルースキエ・ヴェードモスチ』（『ロシア通報』）一八九八年八月一九日付の（第一六七号）のタヴリーダ県ペレコープ郡からの通信を参照。「わが郡の農夫のあいだに刈取機や蒸気脱穀機や馬力脱穀機が大いに普及したおかげで、畑仕事は非常にはかどる。『転子』をつかうこれまでの脱穀方法は過去のものとなった。クリミアの農夫は、作付面積を年々しだいに広げているので、否応なしに改良農具や機械の助けを借りなければならなくなっている。『転子』では一日にせいぜい一五〇―二〇〇プードの穀物しか脱穀できないのに、一〇馬力の蒸気脱穀機は一日に二、〇〇〇―二、五〇〇プード、馬力脱穀機は一日に七〇〇―八〇〇プード脱穀する。だからこそ、農耕用具、刈取機や脱穀機にたいする需要は年々増大して、農機具工場には今年もそうだったが商品在庫がなく、農夫の需要をみたすことができないでいる」。改良農具が普及する重要な理由の一つとみなすべきものは、農業経営主に生産費の引下げをよぎなくさせるような穀物価格の低落である。

一八七五―一八七八年には、ヨーロッパ・ロシア全体で農業における蒸気牽引車の数は一、三五一台にすぎなかったのに、一九〇一年には不完全な情報（『一九〇三年度工場監督官報告集』）によっても一二、〇九一台、一九〇二年には一四、六〇九台、一九〇三年には一六、〇二一台、一九〇四年には一七、二八七台の農業用蒸気牽引車があったことを思いおこすなら、最近二〇―三〇年のあいだに資本主義がわが国の農業にどんなに巨大な革命をひきおこしたかが、われわれにとって明白になるであろう。この過程の促

〔第 62 表〕

	1894年	1895年
プラウ，ブッケル，覆土機……………………(地主所有)	5,220	6,752
同　上　……………………(農民所有)	27,271	30,112
馬力脱穀機……………………(地主所有)	131	290
同　上　……………………(農民所有)	671	838

(『ヴェーストニク・フィナンソフ』，1896年，第5号)

進に大きな貢献をしたのはゼムストヴォである。一八九七年の初めごろには、農業機械・器具のゼムストヴォ保管所を「すでに一一県と二〇三郡のゼムストヴォ参事会がもっていて、その流動資本の総額は約一〇〇万ルーブリであった」(『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二一号)。ポルタワ県では、ゼムストヴォ保管所の取引高は一八九〇年の二二、六〇〇ルーブリから一八九二年の九四、九〇〇ルーブリ、一八九五年の二一〇、一〇〇ルーブリへと上昇した。六年間に一二、六〇〇のプラウ、五〇〇台の簸浄機と選別機、三〇〇台の刈取機、二〇〇台の馬力脱穀機が販売された。「ゼムストヴォ保管所の農具の主要な買い手はコサックと農民である。販売されたプラウや馬力脱穀機全体の七〇％は彼らに売られた。播種機や刈取機の買い手は主として地主で、しかも一〇〇デシャチーナ以上の土地をもつ大地主であった」(『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第四号)。

一八九五年のエカテリノスラフ県ゼムストヴォ参事会の報告によると、「本県では改良農具がきわめて急速に普及している」。たとえばヴェルフネドニェプロフスク郡では次のとおりであった。〔第六二表〕

モスクワ県ゼムストヴォ参事会の資料によると、モスクワ県の農民のもっていたプラウは一八九五年にプラウ四一、二一〇台で、世帯主総数の二〇・二％がプラウをもっていた(『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九六年、第三一号)。トヴェーリ県には、一八九六年の特別の計算によると五一、二六六台のプラウがあったが、この数は世帯主総数の一六・五％にあたる。トヴェーリ郡には、一八九〇年にプラウがわずか二九〇台しかなかったが、一八九六年には五、五八一台あった(『トヴェーリ県統計報告集』、第一三巻第二冊、九一、九四ページ)。農民ブルジョアジーのところで経営の強化と改善がどんなに急速にすすんでい

るかは、これによって判断することができる。

八　農業における機械の意義

われわれは、農民改革後のロシア農業における農業機械製作と機械使用の極度に急速な発展という事実を確認したので、こんどは、この現象の社会経済的意義という問題を考察しなければならない。農民と地主のおこなう農業の経済について上述したことから、次のような命題が出てくる。すなわち、一方では、まさに資本主義こそが、農業における機械使用をひきおこし拡大する要因であり、他方では、農業への機械の応用は資本主義的性格をもつ、すなわち、それは資本主義的諸関係の形成とそのいっそうの発展にみちびく、ということである。

これらの命題のうち、第一のものについて議論しよう。われわれが見たように、雇役経済制度およびそれと不可分に結びついている家父長制的農民経済は、その本性上、旧態依然たる技術、旧来の生産方法の維持を基礎としている。この経済体制の内部構造には技術の改造への刺激はなにもない。それどころか、経済の封鎖性と孤立性、隷属農民の貧困と卑しめられた状態が、改良をとりいれる可能性を排除している。とくに指摘しておけば、雇役経済における労賃は（われわれが見たように）自由な賃労働をもちいる場合にくらべてはるかに低い。ところで周知のように、低い賃金は機械の採用にたいする重要な障害の一つを成す。また実際、事実がかたっているように、農業技術の改造をめざす広範な運動は、農民改革後の商品経済と資本主義の発展の時期にようやくはじまったばかりである。資本主義が生みだした競争と世界市場への農耕者の依存とは技術の改造を必然的にし、そして穀物価格の低落はこの必然性をとくに鋭くしたのである。*

* 「この二年間、低い穀物価格と農業労働の生産をどうあっても安価にしなければならない必要とに影響されて、刈取機がきわめて急速に普及しはじめ、保管所が全要求を適時にみたすことはできないほどである」（テジャコフ、前掲書、七一ページ）。現代の農業恐慌は資本主義的恐慌である。すべての資本主義的恐慌と同様に、それはある地方、ある国、ある農業部門の農場主や経営主を零落させるとともに、他の地方、他の国、他の農業部門における資本主義の発展に巨大な刺激をあたえる。このテーマにかんするニコライ―オン氏、カブルーコフ氏、等々の議論のおもな誤りは、現代の恐慌のこのような基本的特徴とその経済的本性を理解していない点にある。

第二の命題を説明するためには、われわれは地主経済と農民経済を別々に考察しなければならない。地主が、機械

あるいは改良農具を備えつけるとき、彼は農民（地主のためにはたらいていた）の農具を自分の農具にとりかえる。したがって、地主は雇役経済制度から資本主義経済制度に移行する。農業機械の普及は資本主義による雇役の駆逐を意味する。もちろん、たとえば刈取機や脱穀機その他をもちいる、日雇労働の形態での雇役が土地貸与の条件になることもありうるが、しかし、これはすでに第二種の雇役、すなわち農民を日雇いに転化させる雇役であろう。したがって、この種の「例外」は、私有地経営が改良農具を備えつけることは債務奴隷的（ナロードニキの用語法では「自立的」）農民の賃金労働者への転化を意味するという一般原則を、確認するものでしかない。それは、仕事を家内労働に下請させる買占人が自分の生産用具をもつことが、債務奴隷的「クスターリ」の賃金労働者への転化を意味するのと、まったく同じである。地主経営が自分の農具を備えつけることは、不可避的に、雇役によって生産手段を手に入れている中農層の崩壊をもたらす。すでに見たように、雇役こそまさに中農層の特有の「営業」であり、したがって、その農具は農民経営だけでなく地主経営の構成部分でもある。*だから、農業機械や改良農具の普及と農民層の収奪とは、相互に不可分に結びついた現象である。農民層のあいだでの改良農具の普及も同様な意義をもつこと——このことについては前章で述べたから説明は必要ないであろう。農業における機械の常時の使用は、蒸気織機が手織のクスターリ織工を駆逐するのと同じように、仮借なく家父長制的「中」農を駆逐するのである。

* ヴェ・ヴェ氏はこの真理（中農層の存在は、地主のもとに雇役経済制度が存在することにかなりの程度制約されているということ）を、次のような独特の言い方で表現している。「地主は、いわば、彼（農民）の農具の維持費を分担している」と。サーニン氏がこれについて次のように指摘しているのは正しい。「それでは、労働者が地主のためにはたらくのではなく、地主が労働者のためにはたらくということになる。」ア・サーニン『人民的生産の理論にかんする若干の意見』、グールヴィチ『ロシア農村の経済状態』のロシア語訳、モスクワ、一八九六年、付録、四七ページ。

農業への機械の応用の結果は、資本主義的進歩のすべての典型的特徴をそれに固有のあらゆる矛盾とともにしめすことによって、さきに述べたことを確認している。機械は、現代にいたるまで社会的発展の歩みからほとんど完全にとりのこされてきた農業における労働生産性を、きわめて大きく向上させる。だから、ロシア農業における機械使用の拡大という事実だけでも、ロシアの穀物生産の「絶対的停滞」（『概要』、三二ページ）とか、さらには農業労働の「生産性の低下」とかいうニコライ—オン氏の主張がまったく

根拠のないものであることを知るのに、十分である。一般に確認されている事実とは矛盾するが、ニコライーオン氏にとっては前資本主義的制度を理想化するために必要であったこの主張には、あとでもう一度たちかえろう。

さらに、機械は農業における生産の集積と資本主義的協業の適用をもたらす。一方では、機械の導入は多額の資本を必要とするから、それは大経営主だけに可能である。他方では、機械はそれでつくられる生産物が大量である場合にはじめてひきあうので、機械の導入は生産の拡大を必要とする。それゆえ、刈取機、蒸気脱穀機、その他の普及は農業生産の集積をしめすものである。そして実際にわれわれは、ロシアの農業でとくに機械の使用が発達している地方（ノヴォロシア）は経営規模がきわめて大きいという特徴をもつことを、あとで見るであろう。ここではただ、農業の集積を作付の広さの拡張という一つの形態だけで考える（ニコライーオン氏がやっているように）のは誤りだ、ということを指摘するだけにしておこう。実際には、農業生産の集積は、商業的農業の形態に応じてきわめて多様な形態で現われるのである（このことについては次章を見よ）。生産の集積は、経営における労働者の広範な協業と不可分に結びついている。われわれはさきに、穀物の取入れのために同時に数百台の刈取機を運転する大農場の例を見た。「馬四―八頭だての馬力脱穀機は一四人から二三人以上の労働者を必要とするが、そのうちの半分は婦人と少年、すなわち半人前の労働者である……。すべての大経営に存在する八―一〇馬力の蒸気脱穀機は」（ヘルソン県）「五〇人から七〇人の労働者を同時に必要とするが、そのうちの半分以上が半人前の労働者、すなわち一二歳から一七歳までの少年と少女からなっている」（テジャコフ、前掲書、九三ページ）。「同時に五〇〇―一〇〇〇人の労働者をあつめる大経営は、あえて工業の工場になぞらえることができる」――同じ著者は正当にもこう述べている*（一五一ページ）。このように、わがナロードニキが、「共同体は」農業に協業を導入することが「容易にできるであろう」と論じているあいだに、実生活はどんどんすすんでいって、資本主義は、共同体を利害の対立する経済的諸グループに分解しながら、賃金労働者の広範な協業にもとづく大経営をつくりだしたのである。

* 次章第二節をも参照。そこにはロシアのこの地方の資本主義的農業経営の規模について、もっとくわしい資料をあげてある。

以上のことから明らかなように、機械は資本主義のための国内市場を、第一に生産手段（機械工業、鉱業、等々の生産物）にたいする市場を、第二に労働力にたいする市場

をつくりだす。すでに見たように、機械の導入は雇役の自由な賃労働への交代と雇農をつかう農民経営の形成とをもたらす。農業機械の大量使用は大量の農業賃金労働者の存在を前提する。農業資本主義が最も発展している地方では、機械の導入とならんでの賃労働の導入のこの過程が、もう一つの過程、すなわち機械による賃金労働者の駆逐と、交錯している。一方では、農民ブルジョアジーの形成と雇役から資本主義への地主の移行が、賃金労働者にたいする需要をつくりだす。他方では、経営がすでに早くから賃労働を基礎としていたところでは、機械が賃金労働者を駆逐する。ロシア全体についてこの二つの過程の全般的結果がどのようなものであるか、すなわち、賃金労働者の数は増加しているかそれとも減少しているか——このことについては正確で大量な統計資料がない。いままでこの数が増加してきたことは、疑う余地がない（次節を見よ）。われわれは、いまでもそれはふえつづけていると考える。*第一に、農業における賃金労働者の機械による駆逐の資料は、ノヴォロシアについてだけあるが、他の資本主義的農業の地方（バルト海沿岸地方と西部地方、東部辺境地方、若干の工業諸県）では、この過程は広い規模ではまだ確認されていない。屋役の優勢な広大な地方がまだ残っており、そしてこの地方では機械の導入が賃金労働者にたいする需要をつくりだしている。第二に、農業の集約性の増大（たとえば根菜類の導入）は賃労働にたいする需要を大規模に増加させる（第四章を見よ）。農業賃金労働者の絶対数の減少は（工業賃金労働者とは反対に）、資本主義発展の一定の段階では、すなわち、全国の農業が完全に資本主義的に組織され、農業の多種多様な作業のための機械の使用が全般的になるときには、当然はじまるにちがいない。

* 農民が大量にいる国では、農業賃金労働者数の絶対的増加が、農村人口の相対的減少とだけでなく絶対的減少とも完全に両立しうるということは、ほとんど説明を要しないであろう。

ノヴォロシアについていえば、地方の研究者たちは、高度に発展した資本主義の通例の帰結をそこに確認している。機械は賃金労働者を駆逐し、農業における資本主義的予備軍をつくりだす。「働き手の法外な高価格の時代は、ヘルソン県ではすぎさった。農具の急激な普及……のせいで」（およびその他の理由によって）「働き手の価格は不断に低下している」（傍点は著者のもの）……。「農具の普及は大経営を労働者への依存から解放し、*それと同時に働き手にたいする需要をへらし、労働者を困難な状態におく」（テジャコフ、前掲書、六六—七一ページ）。同じことを、もう一人のゼムストヴォの保健医師クゥドリャフツェフ氏も

その労作『一八九五年のタヴリーダ県カホフカ町ニコラーエフ定期市の外来農業労働者とその衛生管理』（ヘルソン、一八九六年）で、確認している。──「働き手の価格は……ますます低下し、外来の労働者のかなりの部分がなんの稼ぎも得られないであぶれている、すなわち、経済科学の用語でいう労働予備軍──人為的過剰人口──がつくりだされている」（六一ページ）。この予備軍によってひきおこされる労働価格の低下は、しばしば、「多くの経営主が自分の機械をもっていながら」（一八九五年には）「機械による取入れよりも手による取入れのほうをえらぶ」（同、六六ページ、『ヘルソン・ゼムストヴォ統計集』、一八九五年八月、から）ほどひどいこともある！　この事実は、機械の資本主義的使用に固有な矛盾のあらゆる深刻さを、どんな議論よりも明瞭にかつ説得力をもってしめしている。

＊　ポノマリョーフ氏はこのことについて次のように表現している。「機械は取入れの費用を規制したが、また同時に、九分どおり確実なことだが、労働者をも訓練する」（雑誌『農業と林業』所載の論文、『ヴェーストニク・フィナンソフ』一八九六年第一四号から引用）。「資本主義工場のピンダロス」[(三)]であるユア博士（Andrew Ure）が、労働者のあいだに「秩序」と「規律」をつくりだす機械をどんなに歓迎したかを想起されたい。ロシアにおける農業資本主義は、「農業工場」だけでなく、それらの工場の「ピンダロス」をもつくりだすことに成功したのだ。

機械使用のもう一つの結果は、婦人労働と児童労働の使用の強化である。形成された資本主義農業は一般に、工場労働者の等級制を大いに思いおこさせるような、労働者の等級制をつくりだした。たとえば、南ロシアの農場では次のような区別がなされている。（a）一人前の労働者──どんな仕事でもできる成年男子。（b）半人前の労働者。婦人と二〇歳未満の男子。半人前の労働者は二つのカテゴリーに分けられる。すなわち、(イ) 一二─一三歳から、一五─一六歳まで──狭い意味の半人前の労働者、(ロ) より力のある半人前の労働者、「農場のことばでは『四分の三』人前の労働者」[*]──刈取りを除けば一人前の労働者の仕事をすべて遂行できる一六歳以上二〇歳未満のもの。最後に（c）わずかな手助けをする半人前の労働者、八歳以上一四歳以下の子供。彼らは、豚飼い、牛飼い、草取り、プラウを曳く牛追いの仕事をする。彼らはしばしば食べ物と着る物だけで奉公する。農具の導入は「一人前の労働者の労働の価値を引きさげ」、それを婦人や未成年者のより安い労働でおきかえることを可能にする。外来の労働者にかんする統計資料は、婦人労働による男子労働の駆逐を立証している。すなわち、一八九〇年にはカホフカ町とヘルソン市で登録されていた労働者のうち、婦人は一二・七

%であったが、一八九四年には県全体で一八・二%（五六、四六四人のうち一〇、二三九人）、一八九五年には二五・六%（四八、七五三人のうち一三、四七四人）であった。児童は一八九三年に〇・七%（一〇歳以上一四歳未満）、一八九五年に一・六九%（七歳以上一四歳未満）であった。ヘルソン県エリサヴェトグラード郡におけるその地方の農場労働者のあいだで、児童は一〇・六%を占めている（同）。

　＊　テジャコフ、前掲書、七二ページ。

　機械は労働者の労働の強度を増大させる。たとえば、最も普及している種類の刈取機（手で投棄するもの）には、「額焦がし」あるいは「前髪焦がし」という特徴的な呼び名がつけられた。というのは、それをつかう仕事は労働者に極度の緊張を要求するからである。すなわち、労働者が投棄装置のかわりをするのである（『生産力』、第一巻、五二ページを参照）。まったく同様に、脱穀機の場合にも労働の緊張度が増大する。資本主義的に使用される機械は、この場合にも（どこでもと同じように）、労働日の延長にたいする巨大な刺激をつくりだす。農業にも、かつて見られなかった夜間労働が現われる。「豊作の年には……一部の農場と多数の農民経営で、労働が夜も」（テジャコフ、前掲書、一二六ページ）人工照明のもとで――たいまつをたいて（九二ページ）――「おこなわれる」。最後に、機械の常時使用は農業労働者の外傷をともなう。機械のもとでの娘や児童の労働は、当然ながらとくに多くのけがをひきおこす。たとえば、ヘルソン県のゼムストヴォ病院と診療所は、農繁期には「ほとんど全部外傷患者で」満員になり、「農業機械や器具の仮借ない破壊的な活動によって、農業労働者の大軍の隊列からたえず離脱する人々のための一種の野戦病院」（同、一二六ページ）になっている。農業機械が原因となったけがについては、すでに専門の医学文献ができている。農業機械の使用について行政命令を出せという提案が現われている（同所）。機械制大規模産業は、農業でも、工業におけると同様、生産にたいする社会的監督と規制の要求を鉄の力をもって提起している。このような監督の試みについては、さらにあとで述べよう。

　終りに、農業における機械使用の問題にたいするナロードニキたちのきわめて首尾一貫しない態度を指摘したい。機械使用の利益と進歩性を認めること、それを発展させ容易にするあらゆる手段を弁護すること――そして同時に、機械がロシアの農業で資本主義的に使用されていることを無視すること、これは、大小の地主の立場まで落ちこむことを意味する。ところでわがナロードニキたちは、まさに農業機械や改良農具の使用の資本主義的性格を無視し、どんな型の農民経営と地主経営が機械をとりいれているかと

いうことを分析しようと試みさえしていない。ヴェ・ヴェ氏は憤然として、ヴェ・チェルニャーエフ氏を「資本主義的技術の代表者」とよんでいる（『進歩的潮流』、一一ページ）。ロシアで機械が資本主義的に使用されるのは、ほかならぬヴェ・チェルニャーエフ氏あるいはだれか他の農業省の役人のせいにちがいない！　ニコライーオン氏は——「事実からはなれない」（『概要』、序文一四ページ）という大げさな約束をしておきながら——、まさに資本主義がわが国の農業における機械の使用を発展させたという事実を避けることをえらび、交換は農業における労働生産性を低下させるというこっけいな理論まで編みだした（七四ページ）！　資料をなんら分析することなく宣言されたこの理論を批判することは、可能でないし必要でもない。ニコライーオン氏の議論のちょっとした見本を引用するだけにとどめよう。「わが国で労働生産性が二倍に高まったとすれば、いまや、小麦一チェトヴェルチにたいして一二ループリではなく六ループリが支払われることであろう。それだけのことである」（一二四ページ）。それだけのことどころではない、尊敬すべき経済学者先生よ。「わが国で」（あらゆる商品経済社会におけると同様に）技術の向上をはかるのは個々の経営主であって、他のものはただ漸次にそれを見ならうのである。「わが国では」技術を向上させる力があるものは農業企業家だけである。「わが国では」大小の農業企業家のこのような進歩は、農民層の窮乏化および農業プロレタリアートの形成と不可分に結びついている。だから、農業企業家の経営で向上した技術が社会的に必要なものになったとすれば（このような条件のもとでのみ価格は半分にさがるであろう）、このことは農業がほとんど全部資本家の手に移ったことを意味し、幾百万の農民が完全にプロレタリア化したことを意味し、非農業人口の膨大な増加と工場の成長を意味するであろう（わが国の農業における労働生産性が二倍に高まるためには、機械製作業、鉱業、蒸気運輸の巨大な発展、大量の新しい型の農業用建物、売店、倉庫、運河、その他等々の建設が必要である）。ニコライーオン氏は、ここでも、彼の議論のいつものちょっとした誤りを繰りかえしている。彼は、資本主義が発展するさいに必然的な逐次的な歩みをとびこえ、資本主義の発展が必然的にともなう社会経済的変革の複雑な総体をとびこえ——そしてそのうえで、資本主義的「破壊」の危険を嘆き悲しむのである。

九　農業における賃労働

つぎにわれわれは、農業資本主義の主要な現れ——自由

な賃労働の使用——に移ろう。農民改革後の経済のこの特徴は、ヨーロッパ・ロシアの南部と東部の辺境で最も強く現われ、「農業出稼ぎ」という名称で知られる農業賃金労働者の大量移動のうちに現われた。そこでわれわれはまず、ロシアにおける農業資本主義のこの主要な地方の資料をとりあげ、ついでロシア全体にかんする資料を検討しよう。

賃仕事を求めてわが国農民が大量に移動していることは、かなりまえからわが国の文献で指摘されている。このことは、いろいろな県における移動の相対的な広がりを明確にしようと試みたフレロフスキーがすでに指摘しているところである（『ロシアにおける労働者階級の状態』、サンクト-ペテルブルグ、一八六九年）。一八七五年にはチャスラフスキー氏が「農業出稼ぎ」の一般的概観をして（『国家学論集』、第二巻）、その真の意義を指摘した（「……半浮浪人のようなもの……将来の雇農のようなもの……が形成された」）。一八八七年には、ラスポーピン氏がこの現象にかんする一連のゼムストヴォ統計資料をまとめて、それを農民一般の「賃仕事」としてではなく、農業における賃金労働者階級の形成過程として観察した九〇年代には、エス・コロレンコ、ルドネフ、テジャコフ、クドリャフツェフ、シャホフスコイの諸氏の労作が現れ、それらのおかげでこの現象は比較にならないほど完全に研究された。

農業賃金労働者が流入したおもな地方は、ベッサラビア、ヘルソン、タヴリーダ、エカテリノスラフ、ドン、サマラ、サラトフ（南部）、オレンブルグの諸県である。われわれはヨーロッパ・ロシアだけをとりあげるが、しかし、この運動は北カフカーズやウラル州等々をもまきこんで、ますますすすんでいる（とくに最近）ということを、指摘しておく必要がある。この地方（商業的穀物経営の地方）における資本主義的農業にかんする資料は次章でとりあげる。そこでは農業労働者が流入する別の諸地方をもしめすであろう。農業労働者が流出するおもな地方としては、中央黒土地帯の諸県、すなわち、カザン、シンビールスク、ペンザ、タンボフ、リャザン、トゥーラ、オリョール、クルスク、ヴォロネジ、ハリコフ、ポルタワ、チェルニーゴフ、キエフ、ポドリスク、ヴォルィニがある。* このように、労働者の移動は、最も人口の多い地方から最も人口の少ない植民しうる地方へ、——農奴制度が最も強力に発展していた地方からそれが最も弱かった地方へ、** ——雇役が最も発展していた地方から雇役の発展が弱くて資本主義が高度に発展していた地方へと、むかっている。したがって、労働者は「なかば自由な」労働から自由な労働へと逃げているわけである。この逃走が、もっぱら、人口緻密な地方から人口稀薄な地方への移動だけに帰着すると考えたら、誤り

であろう。労働者の移動の研究（エス・コロレンコ氏、前掲書）は、流出地方の多くからあまりにも多数の労働者が出てゆくので、これらの地方では労働者の不足が生じ、他の地方からの労働者の流入で補われているという、特異な、しかも重要な現象を明らかにした。つまり、労働者の転出は、人口が一定の地域により均等に配分されるという傾向だけではなく、労働者がより良いところへ出てゆこうとする志向をもあらわしているのである。この志向は、流出地方、雇役の地方では農業労働者の賃金がとくに低く、流入地方、資本主義の地方では賃金が比較にならないほど高いということを想起すれば、われわれにとって十分に理解できるものになるであろう。***

* 第八章で、ロシア全土における賃金労働者の移動の過程を考察するときに、われわれはいろいろな地方の出稼ぎの性格と傾向をもっとくわしく叙述する。

** すでにチャスラフスキーは、労働者の流入地方では農奴のパーセントが四—一五％であるのにたいし、流出地方では四〇—六〇％であったことを、指摘している。

*** 第八章第四節「労働力にたいする国内市場の形成」における一〇年間の資料の表（第一一四表）を見よ。

「農業出稼ぎ」の規模についていえば、これにかんする一般的な資料はエス・コロレンコ氏の前記の労作にしかない。彼は、過剰労働者（労働者にたいする現地の需要とくらべての）を、ヨーロッパ・ロシア全体で六三六万人、そのうち、さきにあげた一五の農業出稼県で二一三万七〇〇〇人と計算し、他方、八つの流入県における労働者の不足を二一七万三〇〇〇人と計算している。エス・コロレンコ氏の計算方法はかならずしも満足すべきものではないが、彼の一般的結論は（あとで何度も見るように）ほぼ正しいと考えるべきであり、そして渡り歩く労働者の数は過大でないばかりか、むしろ実際より少ないほどである。もちろん、南部に流入しているこれら二〇〇万人の労働者のうち、一部分は非農業労働者に属する。しかし、シャホフスコイ氏（前掲書）がこの半数は工業労働者であると計算しているのは、まったくあてずっぽうで、目分量である。第一に、われわれは、この地方への労働者の流入が主として農業労働者であることを、あらゆる典拠から知っているし、第二に、農業労働者は前記の諸県からだけ来るのではない。シャホフスコイ氏自身が、エス・コロレンコ氏の計算を立証するような一つの数字をあたえている。すなわち、彼は、黒土地帯の一一県（さきにあげた農業労働者の出身地方にふくまれる）で一八九一年に二、〇〇〇、七〇三通の旅券と身分証明書が交付されたとつたえているが（前掲書、二四ページ）、これにたいして一方、エス・コロレンコ氏の計算によると、これらの諸県から送りだされる労働者は一、七

四五、九一三人にすぎない。したがって、エス・コロレンコ氏の数字はけっして過大なものではなく、ロシアにおける渡り歩きの農業労働者の総数は、明らかに二〇〇万人以上にちがいない。* 自分の家と分与地を放棄する（彼らには家も分与地もあるのだが）このように多数の「農民」は、小農耕者が農業プロレタリアに転化する巨大な過程を、賃労働にたいする発展する農業資本主義の膨大な需要を、まざまざと立証している。

* エス・コロレンコ氏の数字を検算する方法がもう一つある。さきに引用したテジャコフ氏とクドリャフツェフ氏の著書から、われわれは、「賃仕事」に出てゆくときに部分的にでも鉄道を利用する農業労働者は、総数の約一〇分の一であるということを知っている（二人の著者の資料をあわせると、調査対象労働者七二、六三五人のうち七、八二七人だけが、行路の一部分でも鉄道で旅行したということになる）。ところが、いまとりあげている方面の三つの主要な鉄道によって一八九一年に輸送された労働者数は——シャホフスコイ氏がつたえるように（前掲書、七一ページ、鉄道の資料による）——二〇万人を超えない（一七万—一八万九〇〇〇人）。したがって、南部に出てゆく労働者の総数は約二〇〇万人とみなすべきである。ついでながらいえば、鉄道を利用する農業労働者がとるにたりない比率であるということは、わが国の鉄道の旅客輸送の基調をあたえるのは農業労働者だと考えたニコライ—オン氏の見解の誤りをしめしている。ニコライ—オン氏は、非農業労働者が、より高い賃金を受けとって鉄道を大規模に利用するのであり、そしてこれらの労働者（たとえば建設労働者、土方、仲仕、その他多数）の出稼ぎの時期もやはり春と夏にあたっているということを、忘れている。

次の問題は、ヨーロッパ・ロシアにおける農業賃金労働者——渡り歩きと定着の——の総数はどれほどか、ということである。われわれの知るかぎりでは、この問題に答える唯一の試みは、ルドネフ氏の労作『ヨーロッパ・ロシアの農民の営業』（『サラトフ・ゼムストヴォ統計集』、一八九四年、第六および第一一号）でなされている。このきわめて貴重な労作は、ヨーロッパ・ロシアの一九県の一四八郡にかんするゼムストヴォ統計資料の総括をしている。「営業者」の総数は、男子働き手（一八—六〇歳）五、一二九、八六三人のうち二、七九八、一二二人、すなわち、農民の働き手総数の五五％と算定された。* 著者が「農業的営業」に入れたのは、雇用による農業労働（雇農、日雇い、牧夫、畜舎番）だけである。著者は、ロシアのさまざまな地方や県について成年男子労働者総数にたいする農業労働者のパーセントを計算した結果、黒土地帯では男子労働者全体の約二五％が、非黒土地帯では約一〇％が、農業雇用労働に従事しているという結論に達している。ここからして、ヨーロッパ・ロシアの農業労働者数は三三九万五〇〇

〇人、あるいは端数をまるめて三五〇万人という数字になる（ルドネフ、前掲書、四四八ページ。この数は成年男子労働者総数の約二〇％にあたる）。この場合、次のことを指摘する必要がある。すなわち、ルドネフ氏の言明によると、「日雇仕事や出来高払いの農業労働は、ある個人あるいはある家族の主要な生業だと認められるときだけ、統計家は営業としてとりあげた」のである[**]（前掲書、四四六ページ）。

* したがって、雇用による農業労働を最も主要な生業とはしないが、しかし自分の自家経営と同じくらいに重要な生業としている多数の農民が、この数字にはふくまれていない。

** ルドネフ氏も指摘しているように、自分の土地、購入地および借地の双方における農業以外のあらゆる種類の農民の生業が、「営業」に入れられている。疑いもなく、これらの「営業者」の大部分は農業と工業における賃金労働者である。だから、われわれは、これらの資料がわれわれの計算した農業プロレタリアの数に近いことに、読者の注意を向けさせたい。すなわち、第二章では農業プロレタリアは農民の約四〇％にあたるとされた（本訳書、一六一ページを参照）。ここでは「営業者」は五五％となっているが、おそらく、そのうちの四〇％以上がありとあらゆる雇用労働に従事しているのである。

ルドネフ氏のこの数字は最小限と見るべきである。なぜなら、第一に、ゼムストヴォ調査の資料は八〇年代、ときには七〇年代のものさえあって、多少とも古くなっているからであり、第二に、農業労働者のパーセントを算定するさいに、高度に発展した農業資本主義の地方——バルト海沿岸と西部の諸県——が、まったく考慮に入れられていないからである。しかしほかに資料がないのだから、三五〇万人というこの数字をとらなければならない。

したがって、農民の約五分の一は、すでに、その「主要な生業」が富農と地主のところでの賃労働であるという状態に移ったことがわかる。われわれはここで、農業プロレタリアートの労働力にたいする需要をしめす企業家の第一グループを見いだす。これは、下級の農民グループの約半数をやとう農業企業家である。このように、農業企業家階級の形成と下級の「農民」グループの拡大すなわち農業プロレタリアの数の増加とのあいだに、完全な相互依存関係が見られる。これらの農業企業家のうちで重要な役割を演じるのは、農民ブルジョアジーである。たとえばヴォロネジ県の九郡では、雇農総数のうち四三・四％が農民にやとわれている（ルドネフ、四三四ページ）。かりにこのパーセントを農業労働者全体とロシア全体についての規準とみなすと、農民ブルジョアジーは一五〇万人の農業労働者にたいする需要をしめしていることになるであろう。同じ「農民層」が、雇い主を求める数百万の労働者を市場に投

げいれてもいれば——賃金労働者にたいする大きな需要をしめしてもいるのである。

一〇　農業における自由な賃労働の意義

こんどは、自由な賃労働の使用にともなって農業に形成されつつある新しい社会関係の基本的特徴を描き、その意義を明らかにしてみよう。

このように大量に南部に流入する農業労働者は、農民の極貧層に属している。ヘルソン県に流入する労働者のうち一〇分の七は、鉄道の切符を買う金がないので徒歩で、「飛ぶように走る列車や軽快に航行する汽船の美しい景色に見とれながら、鉄道の土手や船の通る河の岸にそって、数百、数千ヴェルスタを歩いてゆく」（テジャコフ、三五ページ）。労働者は平均約二ルーブリもっている。* 彼らは、旅券をもらうための貨幣にさえ不足することもまれではなく、彼らは一〇カペイカ払って一ヵ月間の身分証明書を手に入れる。旅行は一〇—一二日間つづき、歩行者の足はこのような長途の行程（ときにはつめたい春のぬかるみをはだしでゆく）のためにはれあがり、まめや擦り傷だらけになる。労働者の約一〇分の一は河舟（板でつくった大きな舟で五〇—八〇人収容でき、普通はぎっしりつめこまれる）でゆく。ある公的委員会（ズヴェギンツェフ委員会(一三)）の報告書は、このような移動方法がきわめて危険であることを指摘している。「超満員の河舟が一隻、二隻、またはそれ以上、乗客もろとも沈没しなかった年はない」（前掲書、三四ページ）。労働者の大多数は分与地をもっているが、その大きさはまったくとるにたりない。テジャコフ氏は正当にも次のように指摘している。「本質的には、これら数千の農業労働者はすべて土地をもたない農村プロレタリアであり、彼らにとっては全生活はいまや出稼ぎにかかっている……。土地収奪は急速にすすんでおり、それとともに農業プロレタリアートの数も増大している」（七七ページ）。この増加の速さを明瞭に証明するものは新前の労働者、すなわち、はじめてやとわれにゆく労働者の数である。こういう新前の労働者は約三〇％いる。ちなみに、この数字によって、常雇農業労働者の要員をつくりだす過程の速さを判断することができる。

* 旅費は、財産や、はては家財道具を売ったり、分与地を抵当に入れたり、手回り品、衣類などを質に入れたり、「司祭や地主や地主のクラークから」雇役で借金までして、手に入れる（シャホフスコイ、五五ページ）。

労働者の大量移動は、高度に発展した資本主義に固有の

特殊な雇用形態をつくりだした。南部や東南部には、数千人の労働者があつまり雇い主もやってくる労働市場が、数多く形成された。こういう市場はしばしば、都市や工業中心地や商業的な村に、また定期市のときに、ひらかれる。中心地の工業的性格は、非農業的な仕事にもやとわれることをよろこぶ労働者をとくにひきつける。たとえば、キエフ県ではシポラ町やスメラ町(ともに甜菜糖工業の大中心地)やベーラヤ・ツェールコフィ市が、労働市場になっている。ヘルソン県では、労働市場になっているのは商業村(ノヴォウクラインカ、ビルズラ、日曜日ごとに九、〇〇〇人以上の労働者があつまるモストヴォーエ、その他多く)や鉄道の駅(ズナメンカ、ドリンスカヤ、その他)や諸都市(エリサヴェトグラード、ボブリーネツ、ヴォズネセンスク、オデッサ、その他)である。オデッサの町人や雑役夫や「カデット」(浮浪人の地方的呼び名)も、夏には農業労働にやとわれにやってくる。オデッサでは、農業労働者はいわゆるセレヂンスカヤ広場(あるいは「コサルカ」)でやとわれる。「労働者は、他の市場を避けてそこでもっとましな賃金を得ようと期待してオデッサをめざす」(テジャコフ、五八ページ)。クリヴォイ・ログ町は農業労働や鉱山労働の大きな雇用市場である。タヴリーダ県ではカホフカ町の労働市場がとくにぬきんでている。そこには、かつて四万人ほどの労働者があつまり、九〇年代には二一三万人の労働者があつまったが、いまでは、若干の資料から判断すれば、もっと少なくなった。ベッサラビア県ではアッケルマン市、エカテリノスラフ県ではエカテリノスラフ市とロゾヴァヤ駅、ドン県では、毎年一五万人ほどの労働者がやってくるドン河畔ロストフをあげなければならない。北カフカーズでは、エカテリノダール市とノヴォロシースク市、チホレツカヤ駅、その他である。サマラ県では、ポクロフスカヤ自由村(サラトフの対岸)、バラコヴォ村、その他である。サラトフ県では、フヴァルィンスク市、ヴォリスク市である。シンビールスク県ではスィズラニ市である。このように、資本主義は辺境地方に新しい形態の「農業と営業との結合」を、すなわち、農業賃労働と非農業賃労働との結合をつくりだした。このような結合が広範な規模で可能になるのは、資本主義の最後の、最高の段階――技能や「手工業」の意義を打ちくだき、ある職業から他の職業への移行を容易にし、雇用の形態を標準化する機械制大工業――の時代においてだけである。*

* シャホフスコイ氏は農業労働と非農業労働との結合の別の形態をも指摘している。ドニエプル河では下流の都市にむかって数千の筏(いかだ)が流れている。それぞれの筏には一一五―二〇人の労働者(筏乗り)――大部分はオリョール県のベロルシ

ア人と大ロシア人――が乗っている。「彼らは、航行の全期間について、文字どおり二束三文しかもらわない」が、これは主として刈入れや脱穀でうまくやとわれることを当てにしてのことである。だがこの目算があたるのは「豊作の」年だけである。

また実際に、この地方の雇用形態は非常に特異で、資本主義的農業にとってきわめて特徴的なものである。中央黒土地帯にあれほどよくある半家父長制的な、半債務奴隷制的な形態の賃労働はすべて、ここでは消滅している。あとに残るのはただ一つ、雇い主と被雇用者との関係だけ、労働力売買の商取引だけである。発展した資本主義的関係のもとでつねにそうであるように、労働者は一日ごとあるいは一週間ごとの雇用を好むが、こういう雇用は、彼らが労働にたいする需要に応じて賃金をより正確に調節することを可能にする。「賃金は、各市場の周辺（周囲四〇ヴェルスタ）について、数学的な正確さできめられていて、賃金を悪化させることは雇い主にはきわめてむつかしい。なぜなら、よそからくる百姓は、より安い賃金にされるよりは、むしろ、市場で寝てすごすか、あるいはもっと遠くへ行くかするからである」（シャホフスコイ、一〇四ページ）。いうまでもなく、労働賃金のはげしい変動は――雇い主が一般に断言するように一方の側からだけではなく、両方の側から――無数の契約違反をひきおこし、「両方の側からのストライキが生ずる。労働者はより高い金額を要求することを申しあわせ、雇い主はより安い金額を出すことを申しあわせる」*（同、一〇七ページ）。この場合、「無情な現金」が階級間の関係をどの程度まであからさまに支配するかは、たとえば、次のような事実からわかる。すなわち、「経験を積んだ雇い主は」、労働者が自分のパンをすべて食べてしまったときにはじめて「屈服する」ことを、「よく知っている」。「ある経営主がかたったところでは、労働者をやとうために市場にいったとき……彼は多数の労働者のあいだを歩きながら、杖で彼らの袋にさわってみることにした（原文のまま！）。それで袋にパンがあれば、そのような労働者とは交渉しないで市場から立ち去る」。そして「空の袋が市場に現われる」まで待つのである（『セーリスキー・ヴェーストニク』〔『農村時報』〕、一八九〇年、第一五号。前掲書、一〇七―一〇八ページ）。

* 「豊作のときは、収穫期に労働者は鼻息が荒く、彼らを説きふせるのに骨が折れる。労働者に賃金をしめしても見向きもせず、要求するだけ払え、そうすれば仕事をしようと、繰りかえすだけである。だが、これは働き手が少ないためではなくて、労働者がいうように『おれたちに分がある』からである」（ある郷書記の報告、シャホフスコイ、一二五ページ）。「穀物が不作で働き手の賃金がさがったときには、雇い主

のクラークはこれを利用して労働者を期限まえに解雇する。そして労働者が同じ地方で仕事をさがすにしても、あるいは旅に出るにしても、農繁期はすぎてしまう」――ある地主の通信員はこううちあけている（前掲書、一三二ページ）。

あらゆる発展した資本主義のもとでと同様に、ここでも、小資本が労働者をとくに圧迫しているのが見うけられる。大きな雇い主は、たんなる商業的打算からも、*あまり得にならず、衝突が起きれば大きな損害を受けるおそれがあるような小さな圧迫は断念せざるをえない。だから、たとえば、大きな雇い主（三〇〇―八〇〇人の労働者をやとう）は、一週間すぎても労働者を解雇しないようにつとめ、労働の需要に対応して自分で賃金をきめる。ある者は、近所で賃金があがれば割増賃金制さえとりいれる。そしてあらゆる証言がものがたっているように、仕事ぶりがよくなり衝突がなくなるので、この割増はつぐなって余りがあるほどである（前掲書、一三〇―一三二ページ、一〇四ページ）。その反対に、小さな経営主は手段をえらばない。「フートル百姓やドイツ人入植者たちは、『お好みしだいに』労働者をよりぬき、一五―二〇％高く支払うが、しかしこれらの経営主が労働者から『しぼりとる』労働の総量もまた五〇％がた多い」（前掲書、一一六ページ）。このような経営主のところの「百姓娘」には、彼女たち自身が言うように、「昼も夜も」ない。入植者たちは、草刈人をやとうと、自分の息子たちに交代であとをつけさせる（すなわち、労働者を追いたてさせる！）。そして、追立て係は日に三度交代して新鮮な力で労働者を追いたてる。「ドイツ人入植者のところではたらいていたものは、疲れきった様子なのですぐわかる」。「一般にフートル百姓やドイツ人は、以前に地主の農場ではたらいていた労働者をやとうことを避ける。『お前たちは、わしのところではもたない』、と彼らは率直にいう」**（同所）。

* エンゲルス『住宅問題』序文を参照。(一二四)

** 同じような特徴がクバン州の「コサック」にもある。「コサックは、あらゆる方法で働き手の賃金を引きさげようとつとめる。個々別々に、また全共同体をあげて」（原文のまま！ 残念ながら、われわれには「共同体」のこの最新の機能についてのよりくわしい情報がない！）。「食物や仕事に圧迫を加える。勘定のときに労働者の旅券を差し押える。個々の経営主を罰金でおどして、一定の賃金以上で労働者をやとわないように共同決議をする、等々」（『クバン地方の外来労働者』、ア・ベロボロドフ、『セーヴェルヌィ・ヴェーストニク』、一八九六年、二月、五ページ）。

機械制大工業は、多数の労働者をいっしょにあつめ、生産方法を改革し、いままで階級間の関係をあいまいにしてきたすべての伝統的、家父長制的な覆いや上衣を引きさい

て、つねに、社会の注意をこれらの階級関係に向けさせ、社会的統制と規制を試みるようにさせる。この現象——工場監督にとくに明瞭に表現された——は、ロシアの資本主義農業でも、まさにその最も発展した地方に、現われはじめている。労働者の衛生状態の問題は、ヘルソン県ではすでに一八七五年に、ヘルソン・ゼムストヴォ医師の第二回県大会で提起され、その後一八八八年にふたたびとりあげられ、一八八九年には労働者の状態を調査する計画がたてられた。一八八九—一八九〇年におこなわれた衛生調査(けっして完全な規模のものではないが)は、農村僻地での労働条件をおおいかくしている幕の一端をわずかにもちあげた。たとえば、労働者用の住宅は多くの場合ないことがわかった。労働者宿舎があっても、それは普通きわめて非衛生的につくられていて、土小舎——たとえばそこに羊飼い(羊の牧夫)が住んでいて、湿気、狭さ、寒さ、暗さ、息づまるような空気のためひどく苦しんでいる——を見かけることも「特別珍しくはない」。労働者の栄養は非常にしばしば不十分である。労働日は一般に一二時間半から一五時間という長さで、つまり、大工業の普通の労働日(一一—一二時間)よりもはるかに長い。仕事の休憩は、酷暑の時期でも「例外的に」見られるだけで、脳病にかかる場合も珍しくない。機械をつかう仕事は職業別分業と職業病をつくりだす。たとえば、脱穀機には「ドラム係」(穀物束をドラムに入れる係。その仕事はきわめて危険でひどく骨が折れる。作物の大きなほこりがドラムから顔にとんでくる)や「渡し手」(穀物束をわたす係、その仕事はあまり辛いので、一—二時間ごとに交代してはたらくほどである)が従事する。婦人は、少年が脇へ運びだす籾殻を掃きためて、それを三—五人の労働者が山に積みあげる。脱穀作業をするものの数は、県全体では二〇万人を超えるにちがいない*(テジャコフ、九四ページ)。農業労働の衛生事情にかんするテジャコフ氏の結論は次のとおりである。「一般に、百姓の労働は『きわめて楽しく有益な仕事』だと考えていた老人たちの意見は、資本主義の精神が農業の分野を支配する現在では、あまりありそうにもない。機械耕作が農業活動にとりいれられてから、農業労働の衛生条件は改善されるどころか悪くなった。機械耕作は農業の分野に、それまでこの分野ではあまり知られていなかった労働の専門化をもたらした。そのことは農村住民のあいだに職業病がひろがり、重い外傷が多くなるということに現われた」(九四ページ)。

＊　ついでながら指摘すれば、この作業——脱穀——は自由な賃金労働者によっておこなわれることがとくに多い。ロシア全体で脱穀作業をするものの数がどれほど多数でなければな

らないかは、これから判断することができる。

衛生調査の結果として、(飢饉の年とコレラのあとで)診療＝食糧補給所を設け、労働者の登録と衛生管理をし、安い食事をあたえる試みが現われた。この組織の規模と成果がどんなにささやかなものであろうと、その存在がどんなに不安定なものであろうと、*それはやはり、農業における資本主義の傾向を明らかにする大きな歴史的事実である。医師たちがあつめた資料にもとづいて、ヘルソン県の県医師大会に次のことが、すなわち、診療＝食糧補給所の重要性を認めること、その衛生施設を改善し、その活動を拡大して、労働賃金とその変動にかんする情報を提供する職業紹介所のようなものにし、かなりの数の働き手をもつ多少とも大きなすべての経営に、「工業企業と同じように」(一五五ページ) 衛生管理をおしおよぼし、農業機械の使用と外傷の記録にかんする強制法規を公布し、労働者保護法や蒸気運輸の改善と低廉化の問題を提起する必要を認めることが、提案された。第五回ロシア医師大会は医療＝衛生管理の組織化という事業におけるヘルソン・ゼムストヴォの活動に、関係ゼムストヴォの注意を向けるよう決議した。

* テジャコフ氏は労働者管理の組織化にかんする郡ゼムストヴォ会議の反響をこうつたえている。——ヘルソン県の六つの郡のゼムストヴォ会議のうち四つはこの制度に反対をとなえた。その地方の地主は、「それは労働者を決定的に怠け者にする」等々といって、県ゼムストヴォ参事会を非難した。

最後に、もう一度ナロードニキ経済学者に立ちかえろう。さきにわれわれは、彼らが雇役にくらべての資本主義の進歩性に目をつぶって、雇役を理想化していることを見た。いまわれわれは、彼らが労働者の「出稼ぎ」にも否定的な態度をとり、その土地での「賃仕事」に共鳴していることを、つけくわえなければならない。たとえば、ニコライーオン氏はこの通例のナロードニキ的見解を、じつに次のように表現している。「農民は……仕事をさがしに出かける……。いったい、それは経済的に見てどれほど有利なのか？　個人的に各農民個々についてではなく、全農民について、全体的に、国家経済的に見て、それはどれほど有利なのか？……われわれが指摘したいと考えているのは、手近なところで十分仕事を見つけることができると思われるのに、毎年、どこともしれず夏中遍歴するのは、純経済的に不利益だということである……」(二三—二四ページ)。

われわれは、ナロードニキの理論とは反対に、次のように主張する。労働者の「遍歴」は労働者自身に「純経済的」利益をあたえるだけでなく、一般に進歩的な現象と認

められるべきである。社会の注意は、出稼ぎをその土地の「手近なところでの仕事」にとりかえることではなく、反対に、出稼ぎへの障害をすべて除去することに、出稼ぎを全面的に容易にすることに、労働者の移動のすべての条件を低廉にし改善することと等々に、向けるべきである。われわれのこの主張の根拠は次のとおりである。

（一）「遍歴」が労働者に「純経済的」利益をもたらすのは、彼らがより高い賃金の地方へ、被雇用者としての彼らの地位がより有利な地方へゆくからである。この比較がどんなに単純であるにしても、より高い、「国家経済的」見地とやらにのぼりたがる人々は、あまりにもしばしばそれを忘れているのである。

（二）「遍歴」は債務奴隷的雇用形態と雇役を破壊する。

たとえば、かつて出稼ぎがあまり発展していなかったころに、南部の地主（およびその他の企業家）が好んで次のような雇用方法をもちいていたことを思いだそう。すなわち、彼らは自分の手代を北部諸県に派遣して、（村役場を通じて）税金滞納者を彼らにとって極度に不利な条件でやとっていた。* したがって、雇い主は自由競争を利用していたが被雇用者はそうでなかったのである。農民が雇役や債務奴隷制からのがれて鉱山にさえゆくことを辞さなかったという実例は、すでにまえにあげておいた。

* シャホフスコイ、前掲書、九八ページ以下。著者は、農民を有利にやとった礼として書記や村長に支払われる「報酬」の公定相場さえあげている。――テジャコフ、前掲書、六五ページ。――トリロゴフ『共同体と租税』、論文『国民経済における債務奴隷制』。

だから、「遍歴」の問題でわが国の大地主がナロードニキと手をたずさえているのは、ふしぎなことではない。たとえばエス・コロレンコ氏をとってみたまえ。彼はその著書で、労働者の「出稼ぎ」にたいする地主の一連の反論をとりあげて、「出稼ぎ」に反対する多数の「論拠」をあげている。すなわち、「出稼ぎ」、「馬鹿さわぎ」、「荒くれ」、「大酒」、「不誠実」、「家庭や両親の監督からのがれるために家庭をはなれようとする欲求」、「気晴らしやもっと楽しい暮しを求める希望」、等々である。しかし、とくにおもしろい論拠はこうである。――「最後に、『石も動かなければ苔がはえる』という諺のとおり、人も動かずにいれば、かならず財産ができてそれを大事にする」（前掲書、八四ページ）。実際、この諺は、ひとところにしばりつけることが人間にどんな影響をあたえるかを、きわめて鮮明にものがたっている。エス・コロレンコ氏をとくに不機嫌にするのは、一部の県から「あまりにも」多くの労働者が出ていって、その不足が他の県からの労働者の流入によって補われている

という、われわれがさきに指摘した現象である。エス・コロレンコ氏は、たとえばヴォロネジ県についてこの事実を指摘し、この現象の原因の一つとして、贈与分与地をもつ農民が多いことをあげている。「明らかに、そのような農民は、相対的に劣悪な物質的状態にあり、自分のあまりにも少ない財産を心にかけることもなく、しばしば、自分に課される義務を果たさず、自分の家にいて十分に賃仕事を見つけることができるときでさえ、一般にひどく軽々しく他県へ出てゆく」。「自分のわずかな分与地にあまり緊縛されていない（原文のまま！）、ときには農具さえもたないこのような農民は、より気軽に自分の家をすて、郷里を遠くはなれて幸福をさがしにゆく。彼らは地元の賃仕事も、ときには自分に課された義務でさえ、気にかけない。なぜなら、彼らから取りたてようにもなにもないからである」（同上）。

「あまり緊縛されていない」！　まさに本当のことばだ。「遍歴」の不利益について、その土地の「手近な仕事」の望ましさについて論議している人は、これについて熟考すべきである！*

＊　ここに、ナロードニキ的偏見による有害な影響のもう一つの例がある。テジャコフ氏のすぐれた労作をわれわれはしばしば引用したが、彼は、ヘルソン県では労働者が非常に不足しているのに、地元の労働者が多数タヴリーダ県に出てゆくという事実を指摘している。彼はこれを「まったく奇妙な現象」とよんでいる。「経営主も損をするが、家の仕事をすて、仕事を見つけられない危険をおかしてタヴリーダにゆく労働者も損をする」（三二ページ）。われわれには、反対に、テジャコフ氏のこういう言明のほうがよほど奇妙に思われる。いったい、労働者は自分の得になることを知らないし、最も有利な雇用条件を自分でさがす権利をもたないのだろうか？（タヴリーダ県では農業労働者の賃金はヘルソン県よりも高い。）いったい、百姓には、自分の籍があって「分与地をあたえられている」場所で暮らし、そこではたらく義務があると、われわれは本当に考えなければならないのだろうか？

（三）「遍歴」は住民に移動性が生ずることを意味する。遍歴は、農民が「苔をはやす」――歴史は農民に十分すぎるほど苔をつけた――ことを妨げる主要な要因の一つである。住民に移動性が生ずることなしには、住民の発展もありえない。そして、南部と北部、農業と工業、首都と僻地でいろいろ異なる関係や制度についての体験が人々にあたえるものを、村の学校なんかがあたえうると考えるとすれば、おめでたいことである。

第四章　商業的農業の成長

農民経営と地主経営の内的経済構造の考察を終わったので、こんどは、農業生産に生じた諸変化の問題に移らなければならない。これらの変化は資本主義と国内市場との発展をあらわすものであろうか？

一　農民改革後のロシアにおける農業生産と商業的農業の種類とにかんする一般的資料

まずはじめに、ヨーロッパ・ロシアの穀物生産にかんする一般的統計資料を一見しよう。収穫高にいちじるしい変動があるので、個々の時期あるいは個々の年にかんする資料はまったく役にたたない。*そこで、種々の期間をとり、一連の年数にわたる資料をとりあげることが必要である。われわれの利用できる資料は次のとおりである。六〇年代の時期については、一八六四—一八六六年の資料（『陸軍統計集』、第四巻、サンクト・ペテルブルグ、一八七一年、県知事報告資料）。七〇年代の時期については全期間の農業省資料（『ロシア産業の歴史的＝統計的概観』、第一巻、サンクト・ペテルブルグ、一八八三年）。最後に、一八八〇年代については、一八八三—一八八七年の五年間の資料（『ロシア帝国統計』、第四巻）。この五年間は八〇年代全体を代表しうる。というのは、一八八〇—一八八九年の一〇年間の平均収穫高は、一八八三—一八八七年の五年間よりもいくらか高いだけだからである（『ロシアの農林業』、シカゴ博覧会のための出版物、一三二ページ、一四二ページを見よ）。さらに、われわれは、九〇年代の進化がどのような方向にすすんだかを判断するために、一八八五—一八九四年の一〇年間の資料をとりあげる（『生産力』、第一巻、四ページ）。最後に、一九〇五年の資料（『ロシア年鑑』、一九〇六年）は現在について判断するのに十分に役だつ。一九〇五年の収穫高は一九〇〇—一九〇四年の五年間の平均よりわずかに低いだけであった。

＊　すでにこの理由だけからしても、一〇年のうちの八年間（一八七一—一八七八年）にかんする資料からきわめて大胆な結論をくだしているニコライ—オン氏のやりかたは、まっ

〔第 63 表〕　ヨーロッパ・ロシアの50県の収穫量（115）

期間	人口（100万人）	全穀類すなわち粒穀＋じゃがいも（100万チェトヴェルチ）		じゃがいも（100万チェトヴェルチ）		人口1人あたり純収量（チェトヴェルチ）		
		作付	純収量	作付	純収量	粒穀	じゃがいも	合計
1864―1866年	61.4	72.2	152.8	6.9	17.0	2.21	0.27	2.48
1870―1879年	69.8	75.6	211.3	8.7	30.4	2.59	0.43	3.02
1883―1887年	81.7	80.3	255.2	10.8	36.2	2.68	0.44	3.12
1885―1894年	86.3	92.6	265.2	16.5	44.3	2.57	0.50	3.07
（1900―1904年）―1905年	107.6	103.5	396.5	24.9	93.9	2.81	0.87	3.68

たくまちがっている。

以上の全資料を対比してみよう。*〔第六三表〕

* 一八八三―一八八七年の時期については、人口は一八八五年度をとった。増加率は一・二%とした。県知事報告資料と農業省資料とのあいだの違いは、周知のように、わずかである。一九〇五年にかんする数字は、プードをチェトヴェルチに換算した。

この表からわかるように、農民改革後一八九〇年代までの時期の特徴は、粒穀とじゃがいもの双方の生産の明確な増加にある。農業労働の生産性は向上している。すなわち、第一に、純収穫高は作付面積よりも急速に増大しており（若干の部分的例外はあるが）、第二に、この時期には、農業生産に従事する人口部分は、農業から商工業への人口流出ならびにヨーロッパ・ロシア外への農民の移住の結果たえず減少していった、ということを考慮に入れなければならない。* とくに注目すべきは、ほかならぬ商業的農業の成長という事実である。人口一人あたりで計算した穀物収穫高（種子を除く）が増加し、また、この人口の内部での社会的分業がますます進行している。商工業人口が増加し、農業人口は農業企業家と農業プロレタリアートに分解し、農業そのものの専門化がすすんでいる。こうして、販売のために生産される穀物の数量は、わが国で生産される穀物の総量よりも比較にならないほど急速に増加している。この過程の資本主義的性格は、農業生産全体のなかでのじゃがいもの役割の増大がはっきりしめしている。** じゃがいもの作付の増大は、一方では、農業技術の向上（根菜類を作付にとりいれること）と農業生産物の工業的加工（酒造とじゃがいも澱粉の生産）の発展とを意味する。それは、他方では、農業企業家階級の見地からすると相対的剰余価値の生産（労働

力の維持費の低廉化、国民の栄養の悪化）である。さらに、一八八五―一八九四年の一〇年間の資料は、一八九一―一八九二年の恐慌が農民層の収奪のおそるべき激化をまねき、粒穀生産をいちじるしく低下させ、穀類全体の収穫率を低下させたことをしめしている。だがじゃがいもが粒穀を駆逐する過程は強力につづいていたので、収穫高の減少にもかかわらず、人口一人あたりの計算ではじゃがいも生産は増加するほどであった。最後に、最近の五年間（一九〇〇―一九〇四年）も、同じように、農業生産の増大、農業労働の生産性の向上、労働者階級の状態の悪化（じゃがいもの役割の拡大）をしめしている。

＊「彼らの数」（農業生産に従事するものの数）「が減少すると予想すべき根拠はなにもなく、まったく逆である」（『概要』、三三ページの注）と主張するニコライ―オン氏の見解は、完全に誤りである。本書、第八章第二節を見よ。

＊＊人口一人あたりで計算したじゃがいもの純収量は、一八六四―一八六六年から一八七〇―一八七九年までは、ヨーロッパ・ロシアの全地区で例外なく増大した。一八七〇―一八七九年から一八八三―一八八七年までは、一一地区のうち七地区で（すなわち、バルト海沿岸地区、西部地区、工業地区、西北地区、北部地区、南部地区、ステップ地区、ヴォルガ下流地区、外ヴォルガ地区で）増大した。

『経営主から入手した資料による農業統計情報』、第七冊、サンクト－ペテルブルグ、一八九七年（農業省発行）を見よ。

ヨーロッパ・ロシアの五〇県でじゃがいもの作付面積は、一八七一年に七九万デシャチーナ、一八八一年に一三七万五〇〇〇デシャチーナ、一八九五年に二一五万四〇〇〇デシャチーナであって、一五年間に五五％増大している。一八四一年のじゃがいもの収量を一〇〇とすれば、最近の数字は次のとおりである。一八六一年――一二〇、一八七一年――一六二、一八八一年――二九七、一八九五年――五三〇。

すでに指摘したように、穀類全体の生産にかんする総合的で概括的な資料は、右の過程をごく一般的にしめすにすぎない（それも、かならずしもいつでもというわけではない）。なぜなら、そういう資料ではさまざまな地区の特有な特性が消えさるからである。ところが、まさに農業のさまざまな地区が特殊化する点にこそ、ロシアにおける農民改革後の農業の最も特徴的な点の一つがあるのである。たとえば、すでに引用した『ロシア産業の歴史的＝統計的概観』（第一巻、サンクト－ペテルブルグ、一八八三年）は、次のような農業地区をあげている。亜麻栽培地区、「畜産が優勢な地方」、とくにまた「酪農がいちじるしく発展している地方」、粒穀の優勢な地方、とくに三圃農法の地区と改良式休耕農法あるいは多圃式牧草農法の地区（「おもに外国向けに予定された、きわめて高価な、いわゆる高級穀物の生産を特徴とする」一部のステップ地帯）、甜菜地区、酒

造用じゃがいも栽培地区。「上記の諸経済地区がヨーロッパ・ロシアの領域に成立したのは比較的近時のことであるが、それらは年々ますます発展し特殊化しつづけている」(前掲書、一五ページ)。*したがって、いまやわれわれの課題は、農業専門化のこの過程を研究することでなければならない。われわれは、さまざまな種類の商業的農業の成長が観察されるかどうか、そのさい、資本主義的農業の形成が生じているかどうか、農業資本主義は、われわれがさきに農民経済と地主経済の一般的資料を分析したときに指摘したと同じ特性をもっているかどうかを、考察しなければならない。いうまでもなく、上記の目的のためには商業的農業の最も主要な地区の特徴づけに限定して十分である。

* さらに『ロシアの農林業』、八四―八八ページを参照。そこではさらに、タバコ地区がつけくわえられている。デ・セミョーノフ、ア・フォルトゥナートフ両氏のつくった図表では、主要農作物別の諸地区がしめされている。たとえば、ライ麦＝燕麦＝亜麻地区はプスコフ県とヤロスラヴリ県、ライ麦＝燕麦＝じゃがいも地区はグロドノ県とモスクワ県、等々である。

しかし、個々の地区にかんする資料に移るまえに、次のことを指摘しておこう。すでに見たように、ナロードニキ経済学者たちは、農民改革後の時代がまさに商業的農業の成長を特徴としているという事実を回避しようと、極力つとめている。当然のことながら、そのさい彼らは、穀物価格の低落が、農業を専門化し農業生産物を交換に引きいれるのに刺激をあたえずにはおかないという事情をも、無視するのである。例をあげよう。『収穫および穀物価格の影響』という有名な本の著者たちはみな、穀物価格は現物経済にとっては意義をもたないという前提から出発して、この「真理」を数えきれないほどなんども繰りかえしている。しかしそのなかの一人のカブルーコフ氏は、商品経済の一般的環境のもとでは、この前提は本質的には誤っていると指摘した。彼はこう書いている。「もちろん、市場に出される穀物が自家経営で栽培されたものより安い生産費で生産されるということは、ありうることである。その場合には、おそらく消費経済にとっても、穀物栽培から他の作物(あるいは別の仕事――とわれわれはつけくわえよう)「に移るほうが有利であろう。したがって、穀物の市場価格は、それが穀物の生産費と一致しない場合には、消費経済にとっても意義をもつ」(第一巻、九八ページの注、傍点は原著者のもの)。「しかし、われわれはこのことを考慮に入れることはできない」と、彼は宣言する。いったいなぜか？それは次の理由からである。(一)他の作物に移ることは、「一定の条件が現存する場合にのみ」可能であるから。この無内容な自明の理(この世のすべてのことは一定の条件

のもとでのみ可能である！）にもとづいて、カブルーコフ氏は、農民改革後の時代がロシアに、農業の専門化と農業からの人口流出をひきおこすようなまさにその条件をつくりだしたし、またいまもつくりだしているという事実を、平然と無視するのである……。（二）「わが国の風土では、食糧として穀物に匹敵するだけの意義をもつ作物を見いだすことは不可能である」から。この論拠はきわめて独創的なもので、問題をあっさり回避するものである。別の生産物の販売と安価な穀物の購買を問題にしているときに、この別の生産物の食糧としての意義がいったいなんの関係があるのか？……（三）「消費型の穀物経営はつねに、存在するだけの合理的根拠をもっている」から。いいかえれば、カブルーコフ氏は「同僚たちとともに」、現物経済を「合理的」と考えているというから、である。ごらんのように、なんとも打ちやぶりようのない論拠ではある……。

二　商業的穀物経営の地区

この地区にふくまれるのは、ヨーロッパ・ロシアの南部と東部の辺区、ノヴォロシアと外ヴォルガのステップ諸県である。この地区では、農業は粗放性と販売のための大量の穀物生産を特徴としている。ヘルソン、ベッサラビア、タヴリーダ、ドン、エカテリノスラフ、サラトフ、サマラ、オレンブルグの八県をとると、一八八三―一八八七年には、この八県の人口一三八七万七〇〇〇人にたいして、粒穀（燕麦を除く）の純収量は四一三〇万チェトヴェルチ、すなわち、ヨーロッパ・ロシア五〇県の全純収量の四分の一以上であった。ここでは主要な輸出穀物である小麦が最も多く作付されている。* ここでは農業は（ロシアの他の地区とくらべて）最も急速に発展しており、これらの県は、かつて首位を占めていた中央黒土地帯諸県を第二位に押しやっている。〔第六四表〕

＊ サラトフ県の小麦作付が一四・三％であるのを除けば、残りの諸県の小麦作付は三七・六―五七・八％を占めている。

このように、穀物生産の主要中心地の移動が起こっている。すなわち、一八六〇年代と一八七〇年代には中央黒土地帯の諸県が首位にあったが、一八八〇年代にはそれらの県はヴォルガ下流の諸県に首位をゆずり、中央黒土地帯の諸県の穀物生産は低下しはじめた。

前記の地区における農業生産の著増というこの興味ある事実は、ステップ地帯の辺境が農民改革後の時代には、以前から住民の多かった中部ヨーロッパ・ロシアの植民地になったことによる。自由な土地が豊富なため、そこには移住者が多数流入し、彼らが急速に作付を拡大したのである。*

〔第 64 表〕 人口1人あたりの粒穀純収量*

地帯区分 ＼ 時期	1864—1866年	1870—1879年	1883—1887年
南部ステップ地帯	2.09	2.14	3.42
ヴォルガ下流地帯および外ヴォルガ地帯	2.12	2.96	3.35
中央黒土地帯	3.32	3.88	3.28

* 出所は前述のとおり．県の地帯区分は『歴史的＝統計的概観』による．「ヴォルガ下流地帯および外ヴォルガ地帯」という構成は妥当でない．というのは，大量の穀物生産をおこなっているステップ地帯の諸県のなかに，アストラハン県（ここでは食糧用の穀物が不足している）および，むしろ中央黒土地帯に入れるべきカザン県，シンビールスク県がふくめられているからである．

市場めあての作付の広範な発展が可能になったのは、これらの植民地が、一方では中央ロシアと、他方では穀物を輸入するヨーロッパ諸国とのあいだに、緊密な経済的結びつきをもったからにほかならない。中央ロシアにおける工業の発展と辺境における商業的農業の発展とは不可分に結びついており、相互に相手の市場をつくりだしている。工業諸県は南部から穀物を入手し、そこに自分の工場の生産物を売り、植民地に働き手、手工業者（小営業者の辺境への移住については、第五章第三節を見よ）、生産手段（木材、建設資材、道具、その他）を供給した。このような社会的分業によってはじめて、ステップ地方の移住民は、もっぱら農業に従事して、国内市場およびとくに外国市場へ大量の穀物を販売することができたのである。国内市場および外国市場との緊密な結びつきによってはじめて、これらの地方の経済発展がこれほども急速にすすみえたのである。そして、これはまさに資本主義的発展であった。なぜなら、商業的農業の成長とならんで、工業への人口流出の過程、都市の成長と新しい大工業中心地の形成の過程もまた、同じように急速にすすんだからである（後出、第七章、第八章を参照**）。

* 辺境における巨大な人口増加と、一八八五年から一八九七年までの国内諸県から辺境への数十万の農民の移住については、ヴェ・ミハイロフスキー氏（『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九七年、六月）を見よ。作付の拡大については、ヴェ・ポストニコフの前記の著書、サマラ県ゼムストヴォ統計集、ヴェ・グリゴリエフ『リャザン県の農民の移住』を見よ。ウーファ県については、レメゾフ『未開バシキール人の生活の点描』――「入植者たち」が造船用材を伐採し、「未開の」

〔第 65 表〕

	経営数		作付面積概算（1000デシャチーナ）	
作付をしない経営	15,228		—	
作付面積5デシャチーナ未満の経営	26,963		74.6	
〃　5—10デシャチーナ　〃	19,194		144	
〃　10—25　〃　〃	10,234		157	
〃　25—100　〃　〃	2,005	2,387	91	215
〃　100—1000　〃　〃	372		110	
〃　1000デシャチーナ以上〃	10		14	
郡の合計	74,006		590.6	

パシキール人を追いはらって「清掃した」耕地を「小麦工場」に変えた情況の、生きいきとした描写――を見よ。これは、どこかアフリカあたりでドイツ人がやったあらゆる偉業に匹敵するような、植民政策のひとこまである。

**マルクス、『資本論』、第三巻第二冊、二八九ページを参照――資本主義的植民地の基本的標識の一つは、移住者の容易に入手しうる自由な土地が豊富なことである（この箇所のロシア語訳、六二三ページは、全然まちがっている）[二六]。また第三巻第二冊、二一〇ページ、ロシア語訳五五三ページを見よ[二七]――農業的植民地における膨大な穀物余剰は、植民地の全住民がはじめは「ほとんどもっぱら農業に、とくに」工業製品と交換される「大量農産物の生産」に従事することにもとづいている。「近代的植民地は、事情が違えば自身でつくらなければならないような生産物を、世界市場を通じて完成品として受けとるのである」。

この地区で商業的農業の発展が農業の技術的進歩および資本主義的関係の形成と結びついているかどうかという問題については、すでに第二章で述べた。われわれは第二章で、これらの地方で農民がどれほど大規模な作付をしているか、そこでは共同体の内部にさえ資本主義的関係がどれほど鋭く現われているかを見た。前章でわれわれは、この地区では機械の使用がとくに急速に発展したこと、辺境の資本主義的農場が数十万、数百万の賃金労働者を吸引し、農業でかつて見られなかった、賃金労働者の広範な協業をともなう大規模経営を展開していること、等々を見た。右の情況を補足するために、あとわずかつけくわえれば良いだろう。

ステップ地帯の辺境では、私有地は、ときには、きわめて

家畜頭数（大家畜に換算）	改良農具	雇用労働者	1戸あたり平均			
			土地面積（デシャチーナ）		作付面積（デシャチーナ）	家畜頭数（大家畜に換算）
			購入地	借入地		
343,260	13,778	8,278	2.5	14.6	15.9	6.7
151,744	10,598	6,055	29	146	82	38
39,520	1,013	1,379	261	1,163	271	181

広大なことを特徴とするだけでなく、非常に大規模な経営をおこなってもいる。われわれはさきに、サマラ県にある八〇〇〇—一万—一万五〇〇〇デシャチーナの作付地について述べた。タヴリーダ県では、ファルツ－フェインは二〇万デシャチーナを、モルドヴィノフは八万デシャチーナを、ある二人は六万デシャチーナずつをもっており、「多数の所有者が一万から二万五〇〇〇デシャチーナをもっている」（シャホフスコイ、四二ページ）。経営の規模については、たとえば、ファルツ－フェインのところでは一八九三年に一、一〇〇台の機械（そのうち一、〇〇〇台は農民の機械）が草刈にはたらいていたという事実から、表象を得ることができる。ヘルソン県では一八九三年に三三〇万デシャチーナの作付地があったが、そのうち一三〇万デシャチーナは私的所有者のものであった。この県の五つの郡（オデッサ郡を除く）では、一、二三七の中経営（二五〇—一、〇〇〇デシャチーナの土地）、四〇五の大経営（一、〇〇〇—二、五〇〇デシャチーナ）と、それぞれ二、五〇〇デシャチーナ以上をもつ二二六の経営がかぞえられた。一八九〇年に五二六経営についてあつめられた情報によると、それらの経営には三五、五一四人の労働者がいた。すなわち、一経営あたり平均六七人であり、そのうち一六人から三〇人は年雇労働者であった。一八九三年には、エリサヴェトグラード郡の多少とも大規模な一〇〇経営に一一、一九七人の労働者（一経営平均一一二人！）がいた。そのうち一七・四%は年雇い、三九・五%は季節雇い、四三・一%は日雇労働者であった。* 次の表は、この郡の全農業経営、すなわち私有地経営と農民経営の双方における、作付の分布にかんする資料である** 〔第六五表〕

* テジャコフ、前掲書。

** 『ヘルソン県土地価格査定資料』、第二巻、ヘルソン、一八八六年。各グループの作付面積は、平均作付面積に経営数を

〔第 66 表〕

サマラ県ノヴォウゼンスク郡	農家戸数	土地面積（デシャチーナ）		作付面積（デシャチーナ）
		購入地	借入地	
郡の総数	51,348	130,422	751,873	816,133
役畜10頭以上をもつ経営	3,958	117,621	580,158	327,527
そのうち役畜20頭以上をもつロシア人フートル農民	218	57,083	253,669	59,137

乗じて算定した。グループの数はへらしてある。

このように、三%強の経営主に（作付しているものだけで計算すれば四%のものの手に）、作付地全体の三分の一以上が集中され、その耕作と取入れには多数の季節雇いと日雇労働者が必要とされている。

最後に、次の表はサマラ県ノヴォウゼンスク郡にかんする資料である。われわれは第二章では、共同体内で経営しているロシア農民だけをとりあげたが、こんどはドイツ人と「フートル農民」（特別の土地で経営している農民）をも加えよう。残念ながら、私有地経営については手もとに情報がない。*〔第六六表〕

* ノヴォウゼンスク郡統計集。——借地はすべて、すなわち、官有地も、私有地も、分与地も、すべてとりあげてある。ロシアのフートル農民のもつ改良農具のリストは次のとおりである。鉄製犂六〇九、蒸気脱穀機一六、馬力脱穀機八九、草刈機一一〇、馬耕用馬鍬六四、簸浄機六一、刈取機六四。雇用労働者数には日雇いはふくまれていない。

おそらく、この資料に注釈は不要であろう。さきにわれわれはある機会に、前記の地区がロシアにおける農業資本主義の最も典型的な——もちろん、農業上の意味ではなく、社会経済上の意味で典型的な——地区であることを、指摘しておいた。このきわめて自由に発展した植民地がわれわれに、もし農民改革前の風習の多数の残存物が資本主義を押しとどめないならば、ロシアの残余の土地でもどのような関係が発展しうるか、また発展せずにはおかないかということを、しめしている。ところで、農業資本主義の形態は、あとで明らかになるように、きわめて多種多様なのである。

三　商業的畜産の地区。酪農業の発展にかんする一般的資料

乳牛1頭あたり平均搾乳量（ヴェドロ）	住民100人あたり 乳牛（頭）	牛乳（ヴェドロ）	バター（プード）	チーズ・凝乳バターの生産（1879年の概算）（1000ルーブリ）	チーズ生産（1890年）（1000ルーブリ）
31	13.6	420	3.6	?	469
35	11.4	406	3.7	3,370.7	563
28	7.5	214	1.7	1,088	295
20	6.3	130	1.0	242.7	23
18	4.6	86	0.7	—	—
27	7.7	213	1.8	4,701.4	1,350

こんどは、ロシアにおける農業資本主義のきわめて重要な他の地区、すなわち、穀物生産物ではなく畜産物が支配的な意義をもつ地方に移ろう。この地方にふくまれるのは、バルト海沿岸と西部の諸県のほか、北部の工業諸県といくつかの中部諸県（リャザン、オリョール、トゥーラ、ニジェゴロド）の一部である。ここでは、用畜の飼育は酪農の方向をとっている。そして農業の性格全体が、この種類のできるだけ高価な市場向け生産物をできるだけ大量に獲得することに、合わせられている。*「われわれの目のまえで、肥料のための畜産から搾乳のための畜産への移行が、はっきりおこなわれている。それは、最近一〇年間にとくに顕著である」（注であげた著書の同ページから引用）。ロシアのさまざまな地方をこの点で統計的に特徴づけることは、きわめて困難である。なぜなら、その場合重要なのは牛の絶対数ではなく、まさに、搾乳用家畜の数とその質だからである。住民一〇〇人あたりの全家畜数をとってみると、ロシアでその数が最も多いのはステップ地帯の辺境であり、最も少ないのは非黒土地帯であること（『農林業』、二七四ページ）、そしてときとともにその数が減少していること（『生産力』、第三巻、六ページ、『歴史的＝統計的概観』、第一巻を参照）がわかる。したがって、ここでは、かつてロッシャーが指摘したのと同じ現象、すなわち、人口一人あたりの家畜数は「粗放的畜産」の地方で最も多いという現象が見うけられる（W・ロッシャー『農業経済学』、第七版、シュトゥットガルト、一八七三年、五六三―五六四ページ）。ところがわれわれ

〔第 67 表〕

県のグループ	男女人口（1873年）（1000人）	乳牛（1000頭）	生産量 牛乳（1000ヴェドロ）	生産量 バター（1000プード）
Ⅰ　バルト海沿岸および西部諸県（9県）	8,127	1,101	34,070	297
Ⅱ　北部諸県（10県）	12,227	1,407	50,000	461
Ⅲ　工業（非黒土地帯）諸県（7県）	8,822	662	18,810	154
Ⅳ　中央（黒土地帯）諸県（8県）	12,387	785	16,140	133
Ⅴ　南部黒土地帯，西南，南および東部ステップ地帯の諸県（16県）	24,087	1,123	20,880	174
ヨーロッパ・ロシアの50県の合計	65,650	5,078	139,900	1,219

の関心は、集約的畜産、とくにほかならぬ酪農にある。だから、この現象の正確な計算をあえてのぞむのではなく、前掲『概観』の著者たちがあたえている近似的計算にとどめなければならない。このような計算でも、酪農業の発展程度の点でのロシアのさまざまな地方の関係を明瞭にしめしてくれる。この計算を in extenso〔そのまま〕とりいれ、それを、『工場』統計の資料からの一八九〇年のチーズ製造にかんする若干の平均数字と情報で補足しよう。〔第六七表〕

＊　ロシアの他の地方では、畜産は別の意義をもっている。たとえば、最南部と東南部では、最も粗放な形態の畜産、すなわち、放牧型の肉用畜産が確立されている。北部の牛は役畜としての意義をもっている。最後に、中央黒土地帯では、牛は「厩肥生産機械」になっている。ヴェ・コヴァレフスキー、イ・レヴィツキー『ヨーロッパ・ロシアの北部および中部地帯における酪農業の統計的概観』（サンクト・ペテルブルグ、一八七九年）。この労作の著者たちは、農業問題専門家の多くがそうであるように、この問題の社会経済的側面にはきわめてわずかな関心と理解しかしめしていない。たとえば、経営の収益性の向上から「国民の福祉と食糧」との保障を直接に結論することは、まったく誤りである（二ページ）。

この表（ひどく古くなった資料によるものではあるが）は、酪農業の専門地区の出現、それらの地区における商業的農業（牛乳の販売とその工業的加工）の発展、乳畜の生産性の向上を、はっきり例証している。

われわれは、酪農業の時代別の発展について判断するのに、バターとチーズの生産にかんする資料しか利用できな

〔第 68 表〕

時期	製造工場数	労働者数（人）	生産額（1000ルーブリ）
1866年	72	226	119
1879年	108	289	225
1890年	265	865	1,350

い。この生産がロシアで起こったのは、一八世紀末（一七九五年）のことである。一九世紀に発展しはじめた地主経営のチーズ製造は、農民経営や商人経営のチーズ製造の時代がはじまった一八六〇年代に、激しい危機にみまわれた。

ヨーロッパ・ロシアの五〇県のチーズ製造工場の数は次のとおりであった。*〔第六八表〕

このように、二五年間に生産は一〇倍以上になった。この不完全きわまる資料から判断できるのは、現象の動態についてだけである。よりくわしい指摘をすこししておこう。ヴォログダ県では酪農業の改良がはじめられたのは、そもそも、ヤロスラヴリ＝ヴォログダ鉄道が開通した一八七二年からのことである。それ以来、「経営主たちはその家畜群の改良をはかり、牧草栽培を導入し、改良農具を入手することをしはじめ……、酪農業を純商業的な基礎のうえにおこうと努力した」（『統計的概観』、二〇ページ）。ヤロスラヴリ県では、七〇年代にいわゆる「アルテリ〔組合〕組織のチーズ製造所」が「基盤をととのえた」。そして、「チーズ製造は『アルテリ』という名称だけを残しながら、私企業精神にもとづいて発展しつづけている」（二五ページ）。

* 『陸軍統計集』とオルロフ氏の『工場案内』（第一版と第三版）の資料。これらの出典については第七章（本書四〇六―四〇八ページ）を見よ。ここでは次のことだけを指摘しておこう。――表にあげた数字は実際の発展速度を過小にあらわしている。なぜなら「工場」という概念は、一八七九年には一八六六年よりも狭く、また一八九〇年には一八七九年よりもさらに狭くもちいられているからである。『工場案内』第三版には、二三〇工場の創業時期にかんする資料がある。それによると、一八七〇年以前に創業したのはわずか二六工場で、七〇年代――六八、八〇年代――一二二、一八九〇年――一四であった。これもまた生産の急速な増加をものがたっている。最新の『工場一覧』（サンクト・ペテルブルグ、一八九七年）についていえば、そこでは完全な混乱が支配している。すなわち、二一三の県についてはチーズ生産が記入されているのに、他の県についてはそれが完全に脱落している。

つけくわえていっておけば、「アルテリ」組織のチーズ製造所は、『工場案内』には、賃金労働者をもつ事業所として登場している。『概観』の著者たちは、チーズとバターの生産を二九万五〇〇〇ルーブリではなく、公式情報によって四一万二〇〇〇ルーブリ（同書に散在している数字の合計）としているが、この数字を訂正すると、クリーム・バターとチーズの生産は一六〇万ルーブリとなり、溶解バターと凝乳を加えると、バルト海沿岸諸県も西部諸県も計算に入れずに、四七〇万一四〇〇ルーブリとなる。

最近の時代については、前出の農業省発行『自由な賃労働……』から、次の一文を引用しておこう。工業諸県一般について次のように書いてある。「この地区の経済状態を一変させたのは酪農業の発展であった」。それは「農耕の改良にも間接に影響をあたえた」。「この地区の酪農業は年年発展している」（二五八ページ）。トヴェーリ県では「土地私有者にも、農民にも、家畜の飼育を改良しようという志向が現われている」。畜産からの収入は一〇〇〇万ルーブリと計算されている（二七四ページ）。ヤロスラヴリ県では「酪農業が年々発展している……。チーズ製造所とバター製造所はいくらか産業的な性格をさえもちはじめた……。牛乳は近所の人から、さらには農民からさえ、買いあつめられている。所有者たちの一団によって経営されているチーズ製造所がある」（二八五ページ）。ヤロスラヴリ県ダニーロフ郡の一通信員は次のように書いている。「当地の地主経営の一般的傾向としては、現在、次のような点が特徴的である。（一）三圃農法から耕地に牧草を播きつける五―七圃農法への移行、（二）休耕地の耕作、（三）酪農業の導入、その結果として――家畜のより厳密な選別と飼養の改良」（二九二ページ）。スモレンスク県についても同じことがいわれている。県知事の報告によると、この県では、チーズとバターの生産額は一八八九年に二四万ルーブリであった（統計によると、一八九〇年には一三万六〇〇〇ルーブリ）。酪農業の発展は、カルーガ、コヴノ、ニジェゴロド、プスコフ、エストランド、ヴォログダの諸県でも認められる。ヴォログダ県のバターとチーズの生産は、一八九〇年の統計によると三万五〇〇〇ルーブリ――県知事報告によると一〇万八〇〇〇ルーブリ――、また三八九工場をかぞえた一八九四年の現地情報によると、五〇万ルーブリと算定されている。「これは統計上のことである。だが実際には、工場ははるかに多い。なぜなら、ヴォログダ・ゼムストヴォ参事会の調査によると、ヴォログダ郡だけで工場数は二二四をかぞえているからである」。しかも、この生産は三つの郡で発展しており、部分的にはすでに第四の郡にも拡大している。* これによって判断できるように、

真実に近づくためにはさきにあげた数字〔第六八表〕を何倍かにしなければならない。「現在、バター製造所とチーズ製造所の数は数千ある」(『ロシアの農林業』二九九ページ)という専門家の大ざっぱな意見のほうが、二六五工場という正確をよそおった数字よりも、事実についてより正しい表象をあたえる。

＊『ネデーリャ』(『週間』)、一八九六年、第一三号。酪農業は非常に有利なので、都市の商人が、商品による支払いというような方法をもちこんだりして、それにとびついたほどである。大きな工場をもっているこの地方のある地主は、農民を買占人の債務奴隷状態から解放し、「新しい市場を獲得する」ために、「牛乳にたいして現金即時払い」をするアルテリを組織している。これは、アルテリと、かの有名な「販路の組織化」との真の意義、すなわち、産業資本の発展による商業資本からの「解放」をしめす特徴的な事例である。

このように、以上の資料から、この独自の種類の商業的農業の巨大な発展ということには、なんの疑いもない。この場合にも、資本主義の発展は千篇一律な技術の改革を伴った。たとえば『農林業』では次のように述べられている。「チーズ製造の分野では最近二五年間に、他のどの国にも見られなかったほど多くのことが、ロシアでおこなわれた」(三〇一ページ)。ブラージン氏も『酪農技術の成果』(『生産力』、第三巻、三八―四五ページ)という論文で、同じことを主張している。主要な改革は、「古来の」クリーム沈澱法から遠心分離機(セパレーター)によるクリーム分離にかわったことにある。＊機械は、クリーム生産を気温に依存しないですむようにし、牛乳からのバターの収量を一〇％増大させ、製品の質を高め、バター加工を安価にし(機械の使用によって、労働が少なくてすみ、建物面積、容器、氷の必要量が少なくなる)、生産の集積をまねいた。農民の大規模なバター製造工場がいくつも出現した。それらの工場は、「一日に約五〇〇プードの牛乳を加工したが、このようなことは沈澱法のもとでは物理的に不可能であった」(前掲論文)。生産用具が改良され(恒温釜、ねじ式圧搾機、改良貯蔵庫)、クリームを発酵させるのに必要な種類の乳酸菌を純粋培養するのに細菌学が生産に応用される。

＊一八八二年以前には、ロシアにはセパレーターはほとんどなかった。それは一八八六年以後きわめて急速に普及して、古い方法を最終的に駆逐した。一八九〇年代にはバター抽出分離機さえ現われた。

このように、上述の二つの商業的農業地区では、市場の要求によってひきおこされた技術的改善は、なによりもまず、最も改革が容易で、市場にとってとくに重要な作業に向けられた。すなわち、商業的穀作経営では穀物の収穫、脱穀、精選、商業的畜産地区では畜産物の工業的加工、が

それである。しかし、家畜の飼養自体は小生産者の世話にまかせるほうがさしあたりは有利であると、資本は見ている。小生産者に、「自分の」家畜を「勤勉に」「熱心に」世話をさせ（その勤勉さはヴェ・ヴェ氏を感動させた。『進歩的潮流』、七三ページを見よ）、牛乳を出す機械を世話するための最も苦しく、最も汚い仕事の大部分をひきうけさせようというのである。資本は、牛乳からクリームを分離するためだけでなく、「クリーム」をこの「勤勉」から分離し、牛乳を貧農の子供たちから分離するための、あらゆる最新の改良と方法を、手にしているのである。

四　つづき。前記の地区における地主経営の経済

地主領地における酪農業が農業の合理化をもたらすという、農学者や農村経営主たちの証言は、さきにとりあげた。ここでは、ラスポーピン氏がおこなったこの問題についてのゼムストヴォ統計資料の分析が、*同じ結論を完全に確認していることを、付言しておこう。詳細な資料についてはラスポーピン氏の論文を参照するよう読者におねがいするとして、ここでは彼の主要な結論だけを引用しておこう。「畜産の状態、酪農業の状態と、放置されている領地の数、経営の集約度とのあいだに、依存関係があることは、議論の余地がない。酪農畜産、酪農経営の最も発展している諸郡（モスクワ県の）では、放置されている領地のパーセントは最も低く、高度に発展した耕種農業をおこなっている領地のパーセントは最も高い。モスクワ県ではどこでも、耕地はその規模を縮小して草地や牧場に変わり、穀物輪作は多圃式牧草輪作に地位をゆずっている。モスクワ県の地主農場だけでなく、モスクワ工業地区全体についても、穀物ではなく牧草と乳用家畜がすでに主導的役割を演じている」（前掲書）。

＊　そしてこの問題は、ラスポーピン氏が（おそらくわが国の文献ではじめて）正しい、理論的に一貫した立場から提起したものである。彼は当初から、「畜産の生産性の向上」——とくに酪農業の発展——は、わが国では資本主義的な道をすすんでおり、またそれは農業への資本の侵入の主要指標の一つとなっていることを、指摘している。

バター生産とチーズ生産の規模が特別の意義をもつのは、まさに、それが、企業家的になって旧習と絶縁してゆく農業の、完全な変革を証明するからにほかならない。資本主義が農業生産物のある一つのものを自己に従属させると、この主要な生産物に農業の他のすべての側面が順応してくる。乳用家畜の飼養は、牧草の播種、三圃農法から多圃農

法への移行、等々をひきおこす。チーズ生産のさいに得られる滓（かす）は、販売に向けられる家畜の肥育にもちいられる。牛乳の加工だけでなく、農業全体が企業化する。* チーズ製造所やクリーム製造所の影響は、それらが設けられている経営内だけにとどまらない。なぜなら、牛乳はしばしば近傍の農民や地主から買いいれられるからである。資本は牛乳の買入れによって小農民をも自己に従属させる。いわゆる「牛乳集荷所」——その普及はすでに七〇年代に確認されていた（コヴァレフスキー、レヴィツキー両氏の『概観』を見よ）——がつくられる場合には、とくにそうである。これは大都市あるいはその近郊に設けられ、鉄道で運ばれてくるきわめて大量の牛乳を加工する施設である。牛乳からすぐにクリームが分離され、これは新鮮なまま販売されるが、脱脂乳のほうは貧しい買い手に安い値段で売られる。これらの施設は、生産物の一定の品質を確保するために、しばしば供給者と契約をむすび、牝牛の飼育にかんして一定の規定を守るように義務づける。このような大規模施設の意義がどれほど大きいかは容易にわかる。すなわち、一方では、それは大衆的市場（貧しい都市住民への脱脂乳の販売）を征服し、他方では、農村企業家のための市場を大規模に拡大する。そして農村企業家たちは、商業的農業の拡大と改良に強力な刺激を受ける。大工業は、一定品質の生産物を要求し、「標準」以下の水準にある小生産者を市場から排除し（あるいは高利貸の手に引きわたし）ながら、農村企業家たちをいわば引きしめるのである。品質による（たとえば脂肪含有量による）牛乳の価格査定も、これと同じ方向に作用せずにはおかない。この制度には技術がきわめて熱心にはたらいて、いろいろの乳濃度計などを発明しており、また専門家もこの制度を熱意をもって支持している（『生産力』、第三巻、九および三八ページを参照）。この点で、資本主義の発展における牛乳集荷所の役割は、商業的穀作農業における穀物倉庫の役割とまったく同様である。穀物倉庫は穀物を品質によって選別し、それを個別的生産物ではなく、[三]同種の生産物（民法学者のいう res fungibilis（代替可能物））にする。すなわち、はじめて穀物を交換に完全に適応させるのである（論集『土地所有と農業』、二八一ページ以下の、アメリカ合衆国における穀物取引にかんするM・ゼーリングの論文を参照）。このように、穀物倉庫は穀物の商品生産に強力な刺激をあたえ、まったく同様な品質による価格査定を導入することによって、その技術的発展を促進する。このような制度は一度に二つの打撃を小生産者にあたえる。第一に、それは基準を導入し、作付の大きな者のより高い品質の穀物を標準とし、そのことによって貧農の劣等な穀物を決定的に低く

評価する。第二に、それは、穀物の選別と貯蔵を資本主義的大工業の型にならって組織することにより、作付の大きな者のためにこの項目の支出をへらし、穀物の販売を容易にし簡単にする。そしてこのことによって、市場で荷車から販売するという家父長制的な、原始的な方法をとる小生産者を、クラークや高利貸の手に決定的に引きわたすのである。したがって、最近の穀物倉庫建設の急速な発展は、資本主義的「牛乳集荷所」の出現および発展と同様な、穀物取引における資本の大きな勝利と小商品生産者の地位低下を意味している。

＊　ジバンコフ博士はその著『スモレンスク県工場衛生調査』(スモレンスク、一八九四年、第一冊、七ページ)で次のように述べている。「チーズ製造に専従する労働者数はごくわずかである……。チーズ製造所と農業経営とに同時に必要とされる補助労働者のほうが、はるかに多い。それは牧夫、搾乳婦、等である。すべての〈チーズ製造〉工場に、これらの労働者が専門のチーズ製造工の二倍、三倍、あるいは四倍もいる」。ついでながらいえば、ジバンコフ博士の記述によれば、そこでの労働条件はきわめて非衛生的で、労働日はいちじるしく長い(一六—一七時間)、等々。このように、商業的農業のこの地区についても、農民の牧歌的労働という伝統的観念がまちがっていることがわかる。

前掲の資料からすでに明らかなように、商業的畜産の発展は、国内市場を、＊すなわち、第一には生産手段――牛乳加工のための装置、建物、畜舎、旧来の三圃農法から多圃式輪作への移行のための改良農具、等々――の国内市場を、第二には労働力の国内市場を、つくりだす。工業的土台のうえに打ちたてられた畜産は、旧来の「肥料のための」畜産とは比較にならないほど多数の労働者を必要とする。実際に、酪農地区――工業諸県と西北部諸県――は大量の農業労働者を吸引している。モスクワ、サンクトーペテルブルグ、ヤロスラヴリ、ウラヂーミルの諸県では、きわめて多数の人が、また、ノヴゴロド、ニジェゴロドその他の非黒土地帯の諸県では、これよりも少ないがやはりかなり多数の人が、農村の仕事に出かけている。農業省通信員の回答によると、モスクワ県その他の諸県では、地主経営は主として外来の労働者をつかっていとなまれてさえいる。この逆説――農業労働をやめて工業労働者として大量に出てゆくもののかわりに、農業労働者が農業諸県から(主として中央黒土地帯の諸県から、一部は北部諸県から)工業諸県へ農業労働をしにやってくること――は、きわめて特徴的な現象である(これについてはエス・ア・コロレンコの前掲書を見よ)。この現象は、どんな計算や議論にもまさって説得的に次のことをしめしている。すなわち、中央黒土地帯の最も資本主義的でない諸県における労働人民の生

活水準と状態は、工業的で最も資本主義的な諸県におけるとくらべてはるかに低くて悪いということ、工業における労働者の状態のほうが農業における労働者の状態よりも良いという（なぜなら、農業では、資本主義の抑圧に、前資本主義的形態の収奪という抑圧が付加されるから）、すべての資本主義国に特徴的な現象が、ロシアにおいてもすでに一般的な事実になったということ、である。だから、農業から工業へ逃避する人はあっても、工業県から農業への流れはない（たとえば工業県からの移民はまったくない）だけでなく、「牧夫」（ヤロスラヴリ県）、「コサック」（ウラヂーミル県）、「農夫」（モスクワ県）とよばれる「賤しい」農村労働者にたいしては、彼らを見下す態度さえみとめられるのである。

* 商業的畜産のための市場は主として工業人口の増加によってつくりだされる。それについてはのちに（第八章第二節）くわしく述べる。外国貿易の問題については、次のことを指摘するだけにしよう。チーズの輸出は、農民改革後の時代の初期には輸入よりもはるかに少なかったが、九〇年代には輸入とほとんど同じになった）一八九一—一八九四年の四年間には年平均輸入が四一、八〇〇プード、輸出が四〇、六〇〇プードであり、一八八六—一八九〇年の五年間には輸出が輸入より多くさえあった）。牛のバターと羊のバターの輸出はつねに輸入よりはるかに多かった。その輸出量は急速にふえている。すなわち、一八六六—一八七〇年には年平均一九万プードが輸出されたが、一八九一—一八九四年には三七万プードであった（『生産力』、第三巻、三七ページ）。

つぎに、家畜の世話には夏よりも冬のほうが多数の労働者を必要とするということを、注意することが重要である。この理由からも、また工芸作物生産が発展した結果としても、上述の地区の労働者にたいする需要は増大しているが、それだけでなく、一年間を通じても、各年別にも、それはより均等に配分されている。この興味ある事実について判断するために最も信頼できる材料を提供するのは、数年間をとってみた賃金の資料である。それらの資料を大ロシアと小ロシアの諸県に限定してかかげよう。西部諸県は生活状態が特殊であり、住民が人為的に集結されている（ユダヤ人居住区）という理由で除外し、バルト海沿岸諸県は、農業における資本主義が最も発展した場合に、どんな関係が形成されるかということを例示するためにだけ、かかげる。*〔第六九表〕

* 第一グループ（資本主義的穀物生産地区）にはいるのは、ベッサラビア、ヘルソン、タヴリーダ、エカテリノスラフ、ドン、サマラ、サラトフ、オレンブルグの八県。第二グループ（資本主義発展の最もおくれた地区）にはいるのは、カザン、シンビールスク、ペンザ、タンボフ、リャザン、トゥーラ、オリョール、クルスク、ヴォロネジ、ハリコフ、ポルタ

〔第 69 表〕

県のグループ	10年間平均（1881—1891年） 賃金額（ルーブリ） A 年雇い	B 夏季雇い	年雇いにたいする夏季雇いの%	8年間平均（1883—1891年） 収穫期の日雇賃金（カペイカ） 最低	最高	両者の差	日雇賃金（カペイカ） 作付期	収穫期	両者の差
Ⅰ　南部および東部の辺境	78	50	*64*	64	181	*117*	45	97	*52*
Ⅱ　中央黒土地帯	54	38	*71*	47	76	*29*	35	58	*23*
Ⅲ　非黒土地帯	70	48	*68*	54	68	*14*	49	60	*11*
バルト海沿岸の諸県	82	53	*65*	61	70	*9*	60	67	*7*

ワ、チェルニーゴフの一二県。第三グループ（資本主義酪農業と工業資本主義の地区）にはいるのは、モスクワ、トヴェーリ、カルーガ、ウラヂーミル、ヤロスラヴリ、コストロマ、ニジェゴロド、サンクトーペテルブルグ、ノヴゴロド、プスコフの一〇県。賃金額の基礎とした数字は、県別の数字の平均である。出典は農業省刊の『自由な賃労働……』である。

この表を検討しよう。重要な三つの欄はイタリックで組んである。第一の欄は、年賃金にたいする夏季賃金の比率をしめしている。この比率が低ければ低いほど、また、夏季賃金が半年分の賃金に近ければ近いほど、一年を通じての労働にたいする需要はそれだけ均等に配分され、冬季の失業はそれだけ少ないわけである。この点で最も不利な立場にあるのは中央黒土地帯*——雇役があって資本主義発展の微弱な地区——である。工業諸県、酪農地区では、労働にたいする需要はより高く、冬季の失業はより少ない。また各年別でも、ここでは、収穫期の最低賃金と最高賃金の差をしめす第二の欄からわかるように、賃金は最も安定している。最後に、作付期の賃金と収穫期の賃金との差も、やはり非黒土地帯で最も小さい。すなわち、労働にたいする需要が春と夏により均等に配分されている。上述のすべての点で、バルト海沿岸諸県は非黒土地帯諸県よりもさらに上位にあるのにたいして、外来の労働者をつかい、収穫率の変動の最も大きいステップ地帯の諸県は、賃金が最も安定していないことを特徴としている。このように、賃金にかんする資料は、前記の地区では農業資本主義が賃労働に

たいする需要をつくりだしているだけでなく、この需要を年間を通じてより均等に配分していることを立証している。

＊ ルドネフ氏も同じような結論をくだしている。「年雇労働者の労働が比較的高く評価されている地方では、夏季労働者に支払われる賃金は半年分の賃金により近づいている。したがって、反対に、西部諸県と人口稠密な中央黒土地帯のほとんどすべての県では、夏季における労働者の労働はきわめて低く評価されている」（前掲書、四五五ページ）。

なお最後に、前記の地区における小農耕者の大経営主への従属の一形態を指摘しておく必要がある。それは、農民から家畜を購入して地主の家畜群を補充することである。地主は自分で家畜を育てるよりも、貧窮のため「損をして」でも家畜を売る農民から買いいれるほうが有利だ、と考えている。それは、いわゆるクスターリ工業においてわが買占商人が、自分の作業場で製品をつくるよりも、完成品をクスターリから破滅的な安値で買いいれるのをえらぶことが多いのとまったく同じである。小生産者の極度の零落を立証するこの事実、現代社会では小生産者は、欲望を無限に押しさげることによってかろうじてもちこたえうるにすぎないということを立証するこの事実が、ヴェ・ヴェ氏によって、小規模の「人民的」生産を擁護する論拠に転化されるのである！……「われわれは正当に次のように結論することができる。わが国の大経営主は……十分な程度の自立性をしめしていない……。ところが農民は……経営を実際に改善するよりいっそうの能力をあらわしている」（『進歩的潮流』、七七ページ）。このような自立性の不足は、「わが酪農経営主が……農民の（牝牛）を買いとる価格が、その飼育費の半分に達することは珍しく、普通はその費用の三分の一以上でもなく、ときには四分の一のことさえある」（前掲書、七一ページ）という点に、現われている。牧畜経営主の商業資本は小農民を完全に従属させ、彼らを商業資本のために二束三文で家畜を飼育する家畜番に変え、彼らの妻を搾乳婦に変えた。＊このことから、商業資本の産業資本への移行を阻止することは無意味であり、生産者の生活水準を雇農の生活水準以下に引きさげるような小生産を維持することは無意味であるという結論が出てくると、だれもがおもうであろう。ところがヴェ・ヴェ氏はこれとちがう判断をくだすのである。彼は、農民が家畜の世話をするときの「熱心さ」に感嘆し、「牝牛や牝羊といっしょに生涯を送る」農婦の「畜産の成果のすばらしさ」に感嘆する（八〇ページ）。考えてもみたまえ、ありがたいことではないか！「牝牛といっしょの生涯」（その牝牛の乳は改良されたクリーム分離器に送られる）。そしてその一生の報酬として、この牝牛の世話に支出した「費用の四分の

一」が支払われる！　さて、まったくの話、どうして「人民的小生産」に賛成しないでおられよう！

＊　ここに、ロシア農民一般の生活水準と生活条件にかんする二つの論評をあげよう。エム・イェ・サルティコフは『身辺雑記』のなかで、「経営心のある百姓」について書いている……。「百姓にはあらゆるものが必要だ。しかしなににもまして必要なのは……疲れきるまではたらき、骨惜しみしないという能力である……。経営心のある百姓は、あっけなく、そのために」（仕事のために）「死んでゆく」。「妻も年頃の子供たちもみんな、徒刑よりもっと苦しんでいる」。

ヴェ・ヴェレサエフは論文『リザル』（『セーヴェルヌィ・クリエール』、一八九九年、第一号）で、「人間をへらす」ために水薬その他をつかうように説教しているプスコフ県の百姓リザルについて、かたっている。著者はこう述べている。「その後私は再三、多くの村医者やとくに産婆から、彼らがしばしば村の百姓夫婦のこの種の頼みを受けているということを聞いた」。「ある方向にすすんでいる生活は、あらゆる方法を利用しながら、結局は袋小路にはいりこむ。この袋小路からの出口はない。そこで当然、問題の新しい解決がもくろまれて、ますます熟してくる」と。

実際、資本主義社会における農民の状態には活路がない。そこでそれは、「自然に」、共同体のロシアでも、分割地のフランスにおけると同様に、不自然な……「問題の解決」ではもちろんなく、小経営の破滅を先へのばそうとする不自然な手段へと、みちびいてゆくのである。（第二版の注）。

五　つづき。酪農地区における農民層の分解

農民の状態にたいする酪農業の影響という問題について論評している文献を見ると、われわれはたえず次のような矛盾にぶつかる。すなわち、一方では、経営の進歩、収入の増大、農業技術の向上、すぐれた用具の装備が指摘されているのに、他方では、栄養の悪化、新しい形の債務奴隷制の形成、農民の窮乏化が指摘されている。しかし、第二章の説明のあとでは、われわれはこのような矛盾にも驚くことはない。われわれは、この対立した論評が相対立する農民グループにかんするものであることを知っている。この問題についてより正確な判断をするために、各農家のもつ牝牛の頭数によって農家を分類した資料をとりあげよう。＊

〔第七〇表〕

＊　ブラゴヴェシチェンスキー氏の『集成統計集』によるゼムストヴォ統計の資料。これら一八郡の農家のうち約一四、〇〇〇戸は、牝牛数によって分類されていない。これを加えた総数は、二八九、〇七九戸ではなく、三〇三、二六二戸である。また、ブラゴヴェシチェンスキー氏は黒土地帯の諸県の二つの郡についても同じような情報をあげているが、しかしこれらの郡は明らかに典型的なものではない。トヴェーリ県の一

〔第 70 表〕

農家グループ	サンクト－ペテルブルグ，モスクワ，トヴェーリ，スモレンスクの諸県の18郡					サンクト－ペテルブルグ県の6郡				
	農家		牝牛			農家		牝牛		
	戸数	%	頭数	%	1戸当り頭数	戸数	%	頭数	%	1戸当り頭数
牝牛をもたない農家	59,336	20.5	—	—	—	15,196	21.2	—	—	—
牝牛1頭をもつ 〃	91,737	31.7	91,737	19.8	1	17,579	24.6	17,579	13.5	1
牝牛2頭 〃 〃	81,937	28.4	163,874	35.3	2	20,050	28.0	40,100	31.0	2
牝牛3頭以上〃 〃	56,069	19.4	208,735	44.9	3.7	18,676	26.2	71,474	55.5	3.8
計	289,079	100	464,346	100	1.6	71,501	100	129,153	100	1.8

一郡（『統計報告集』、第一三巻、二ページ）については、分与地をもつ農家のうち、牝牛をもたないもののパーセントは高くない（九・八％）。しかし、三頭以上の牝牛をもつ二一・九％の農家の手には、牝牛総頭数の四八・四％が集中されている。馬をもたない農家のパーセントは一二・二％、他方、三頭以上の馬をもつ農家はわずか五・一％で、彼らの手には馬の総頭数の一三・九％があるにすぎない。ついでに指摘しておけば、馬の集中度が（牝牛の集中度にくらべて）低いことは、その他の非黒土地帯県でも見うけられる。

このように、非黒土地帯の農民のあいだでの牝牛の分布は、黒土地帯の諸県の農民のあいだでの役畜の分布に非常に似ていることがわかる（第二章を見よ）。この場合、前記の地区における乳用家畜の集中は役畜の集中よりもいっそうはげしい。このことは、農民層の分解がまさに商業的農業の地方的形態と緊密に結びついていることを、はっきりしめしている。次の資料も（残念ながら、十分に完全なものではないが）、おそらくは、この結びつきをしめしている。ゼムストヴォ統計の総合的資料（ブラゴヴェシチェンスキー、二一県の一二二郡について）をとってみると、一戸あたり平均で牝牛一・二頭になる。したがって、非黒土地帯の農民は、明らかに、黒土地帯よりも多数の牝牛をもっており、ペテルブルグ県の農民は非黒土地帯全般の農民よりもさらに多くの牝牛をもっているわけである。その反面、二二県の一二三郡では家畜をもたない農家のパーセントが一三％であるのに、われわれがとりあげた一八郡では一七％、ペテルブルグ県の六郡では一八・八％である。つまり、農民層の分解（いま検討している点での）は、ペテルブルグ県で最もはげしく、非黒土地帯全般がそれにつづいている。このことは、まさに商業的農業こそが農民層の分解の主要な要因であることを立証している。

前掲の資料から明らかなように、農家の約半数（牝牛を

〔第 71 表〕

サンクト－ペテルブルグ郡の2郷	家族数	それらのもつ牝牛の数	1戸あたり頭数	それらの家族の「稼ぎ高」(ルーブリ)	稼ぎ高 (ルーブリ) 1戸あたり	牝牛1頭あたり
買占人に牛乳を売る家族	441	1,129	2.5	14,884	33.7	13.2
サンクト－ペテルブルグで牛乳を売る家族	119	649	5.4	29,187	245.2	44.9
計	560	1,778	3.2	44,071	78.8	24.7

もたないものと牝牛一頭をもつもの）は、酪農業の恩恵にマイナスにあずかっているだけである。牝牛一頭をもつ農民は、ただ困窮のゆえに、自分の子供の栄養を悪くしてまで牛乳を売るようになる。その反対に、農家の約五分の一（牝牛三頭以上をもつもの）は、おそらくは、酪農業全体の半分以上をその手に集中している。というのは、これらの農家では家畜の質と経営の収益性が、「平均的」農民層におけるよりも高いにちがいないからである。*　この結論の興味深い例証をなすのは、酪農と資本主義一般が高度に発展している一地方の資料である。それはペテルブルグ郡のことである。** 酪農業は、この郡の主としてロシア人の住んでいる別荘地帯で、とくに広く発展している。ここで最も発展しているのは、牧草栽培（郡全体では分与耕地の一三・七％であるのにたいして、この地帯では二三・五％）と、燕麦（耕地の五二・三％）およびじゃがいも（一〇・一％）の作付である。農業は、燕麦、じゃがいも、乾草、牛乳および馬の労力を必要とする、サンクト－ペテルブルグ市場の直接の影響下にある（前掲書、一六八ページ）。定住人口の家族の四六・三％が「酪乳営業」に従事している。牝牛総頭数の九一％からとれる牛乳が、販売される。この営業からの収入は七一三、四七〇ルーブリ（一家族あたり二〇三ルーブリ、牝牛一頭あたり七七ルーブリ）である。家畜の質とその世話はサンクト－ペテルブルグに近い土地ほどすぐれている。牛乳は二通りの方法で販売されている。（一）その土地の買占人に売るのと、（二）サンクト－ペテルブルグで「酪農場」等々に売るのとである。第二の販売方法が比較にならないほど有利であるが、「牝牛を一頭か二頭しかもたない経営の大多数は、ときにはそれ以上もつものも、自分の生産物を直接サンクト－ペテルブルグに送ることができない状態にある」（二四〇ペ

ージ)。それは、馬がないこと、少量ずつの輸送が不利なこと等々のためである。ところで買占人のうちには、専業の商人だけでなく、自分自身の酪農経営をもつものもふくまれている。次の資料はこの郡の二つの郷にかんするものである。〔第七一表〕

＊ たとえば次のような根拠のない議論にぶつかった場合には、対極的な農民グループにかんする前掲の資料を考慮に入れることが必要である。「年間一戸あたり二〇ないし二〇〇ルーブリという酪乳畜産からの収入は、北部諸県の広大な地域では、畜産の拡大と改良にとってきわめて重要なてこであるだけでなく、耕種農業の改良にも影響をおよぼし、さらに、住民に家での仕事──家畜の世話とか、いままで放棄されていた土地を耕作できる状態にするとか──をあたえて、賃仕事のための離村をへらすうえに影響をおよぼした」(『生産力』、第三巻、一八ページ)。全体としては、離村はへるどころかふえている。しかし個々の地方では、あるいは富農のパーセントの増加によって、あるいは「家での仕事」、じつはその土地の農村企業家にやとわれてする仕事の発展によって、離村がへることもありうる。

＊＊『サンクト・ペテルブルグ県国民経済統計資料』、第五冊、第二部、サンクト・ペテルブルグ、一八八七年。

これによって、酪農業の恩恵が非黒土地帯の全農民にどのように配分されているかがわかる。すでに見たように、彼らのあいだでは乳用家畜の集積はこれらの五六〇農家の場合よりもさらに大きい。最後につけくわえると、サンクト・ペテルブルグ郡の農家の二三・一%は労働者の雇用にたよっている(農業ではどこでもそうだが、ここでも日雇労働者が主である)。「農業労働者をやとうのは、完全な農業経営をもつ農家にほとんどもっぱら限られる」(そしてこのような農家は郡の農家全体の四〇・四%にすぎない)「ということを考慮に入れると、このような経営の半数以上は賃労働なしにはやってゆけないと結論しなければならない」(一五八ページ)。

このように、ロシアの相対立する両極においても、きわめて異なる諸地方でも、ペテルブルグ県とたとえばタヴリーダ県とでも、「共同体」内部の社会経済関係は完全に同様であることがわかる。「耕作百姓」(ニコライ─オン氏の表現)は、そこでもここでも、少数の農村企業家と大量の農村プロレタリアートを析出している。農業の特殊性は、ある地区では農業のある側面が、他の地区では他の側面が、資本主義に従属させられることにある。だからまた、同種の経済関係がきわめて異なる農業上および日常生活上の形態のうちに現われるのである。

上記の地区でも、農民層は相対立する諸階級に分解しているという事実を確かめたので、われわれはもはや、酪農業の役割について普通おこなわれている矛盾した議論を解

明するのは、容易である。富農層が農業の発展と改善への刺激を受け、その結果、牧草栽培がひろまり、これが商業的畜産の必要構成部分となることは、まったく当然である。たとえば、トヴェーリ県では牧草栽培の発展が確認されており、最も先進的なカシン郡ではすでに農家の六分の一がクローヴァーを作付している（『統計集』、第一三巻第二冊、一七一ページ）。この場合、購入地では分与地におけるよりも多くの耕地が牧草の作付にあてられていることを指摘するのは、興味深い。すなわち、農民ブルジョアジーは、当然、共同体的土地所有よりも私的土地所有を好むのである。*『ヤロスラヴリ県概観』（第二冊、一八九六年）のなかにも、牧草栽培の増加について、しかもまたもや主として購入地と借地における増加について、多くの指摘を見うける。**この出版物には、改良農具、すなわち、プラウ、脱穀機、ローラーその他の普及についての指摘も、見うけられる。バター製造やチーズ製造、等々が大いに発展しつつある。ノヴゴロド県では、農民の畜産の全般的な悪化および縮小とならんで、一部の地方――牛乳の販売に有利であったり、あるいは仔牛を乳で飼育する営業が早くから確立していたような地方――での畜産の改良が、すでに八〇年代の初めに指摘されている（ブィチコフ『ノヴゴロド郡の三郷における農民の経済状態と経営との戸別調査の試み』、ノヴゴロド、一八八二年）。乳による仔牛の飼育――これまた商業的畜産の一種であるが――は、ノヴゴロド県、トヴェーリ県および一般に首都から遠くない地方では、かなり一般的に普及している営業である（『自由な賃労働……』、農業省刊行、を見よ）。ブィチコフ氏はこう言っている。「この営業は、その本質からして、ただでさえすでに富裕な、かなりの数の牝牛をもつ農民の収入になる。なぜなら、牝牛一頭の場合には、またときには二頭の場合でさえ、その乳量が少なければ、仔牛を乳で育てることはとてもできないからである」***（前掲書、一〇一ページ）。

* 牛の飼養に本質的な改良が認められるのは、販売用牛乳の販路が発展したところだけである（二一九、二二四ページ）。

** 三九、六五、一三六、一五〇、一五四、一六七、一七〇、一七七ページ、その他。わが国の農民改革前の租税制度が、ここでも農業の発展を妨げている。ある通信員は次のように書いている。「牧草栽培は、農家が密集しているおかげで、郡内いたるところでおこなわれている。しかし、クローヴァーは税の滞納を支払うために売られる」（九一ページ）。この県では租税はときには非常に高く、土地の貸し主が分与地の新しい保有者に一定の金額を払いたしてやらなければならないほどである。

*** ついでに指摘しておけば、この地方の農民の「営業」が多様なので、ブィチコフ氏は営業者を稼ぎ高によって二つの型に分類する気になった。三、二五一人（住民の二七・四%）

が一〇〇ルーブリ未満しか得ておらず、その稼ぎ高は一〇万二〇〇〇ルーブリ、一人あたり三一ルーブリである。一〇〇ルーブリ以上を得ているのは四五四人（住民の三・八％）で、その稼ぎ高は一〇万七〇〇〇ルーブリ、一人あたり二三六ルーブリである。第一グループにはいったのは主としてあらゆる賃労働者であり、第二グループにはいったのは商人、乾草業者、木材業者その他である。

しかし、上記の地区の農民ブルジョアジーの経済的成功の最も顕著な標識は、農民による労働者の雇用という事実である。この地方の地主は自分の競争者が生まれつつあることを感じとっており、農業省への報告のなかで、ときどき労働者が不足するのは富農が労働者を横取りするためだとさえいっている（『自由な賃労働』、四九〇ページ）。農民による労働者の雇用は、ヤロスラヴリ、ウラヂーミル、サンクトーペテルブルグ、ノヴゴロドの諸県で認められる（前掲書、随所）。このような指摘は多数、『ヤロスラヴリ県概観』のなかに散在する。

しかし、少数の富農のこれらの進歩はすべて、貧農大衆に重くのしかかっている。たとえば、ヤロスラヴリ県ルィビンスク郡コプリノ郷では、チーズ製造所――「アルテリ組織チーズ製造所の有名な創立者、ヴェ・イ・ブランドフ*」の提唱によって――が普及している。（チーズ製造所に）「牛乳を運びこむ、牝牛を一頭しかもたない農民は、もちろん、自分の栄養をそこなっている」。ところが資力あるものは自分の家畜を改良している（三二一―三三ページ）。賃仕事の種類のなかにはチーズ製造工の出稼ぎがあげられている。若い農民のなかからチーズ製造工の一隊がつくられる。ポシェホニエ郡では、「チーズ製造所とバター製造所の数は毎年ますます増加している」が、しかし「わがチーズ製造所とバター製造所が農民経済にもたらす利益も、それらが農民生活にもたらす不利益を償うことはとてもできない」。農民自身の意識では彼らはしばしば飢えをよぎなくされている。なぜなら、ある地方にチーズ製造所が開設されると、牛乳はこれらのチーズ製造所やバター製造所に送られて、農民はふつう水でうすめた牛乳を飲むからである。商品による支払いが発展している（四三、五四、五九ページ、その他）。だから、「資本主義的」工場内で商品による支払いを禁止している法律が、わが「人民的」小生産にまでおよばないのを、遺憾とせざるをえない。**

* コプリノ郷の「アルテリ組織チーズ製造所」は『工場案内』にのっているが、ブランドフ会社がチーズ製造では最大である。同会社は一八九〇年に六県下で二五工場をもっていた。

** ここで、スタールィ・マスロデール〔古くからのバター作

り」氏の特徴ある議論をあげよう。「現代の農村を見て知っている人が四〇—五〇年まえの農村を思いだしたなら、その相違におどろくであろう。昔の農村では、すべての農家が外見も内部のつくりも一様であったが、いまでは、あばら家のとなりに色あざやかな大邸宅が建っており、乞食のとなりに金持が住んでおり、いやしめられ、はずかしめられた者のとなりに、酒宴をはり、歓喜する者が住んでいる。かつては、一人の水呑百姓もいない村を見かけることがよくあったが、いまでは、どの村にも少なくとも五人の、いや一〇人もの水呑百姓がいる。実をいうと、村がこんなに変わったのにはバター製造に大きな責任がある。三〇年間に、バター製造は多くの人を富ませ、彼らの家を塗りたて、多くの農民——牛乳供給者——がバター製造の発展期に財産をふやし、より多くの家畜を手に入れ、仲間をつくって、また個人で、土地を買いあつめた。しかし、もっと多数の農民は貧乏になり、村には水呑百姓や乞食が現われた」(『ジーズニ』〔『生活』〕、一八九九年、第八号。『セーヴェルヌィ・クラーイ』〔『北辺地方』〕、一八九九年、第二二三号から引用)。(第二版の注)

このように、事情を直接知っている人の意見は、大多数の農民がその地方の農業の進歩からまったく否定的なものしか得ないというわれわれの結論を、確認している。商業的農業の進歩は下級の農民グループの状態を悪化させ、終局的には彼らを農耕者の隊列から排除する。注意しておくが、略農業の進歩と農民の栄養の悪化とのあいだのこの矛盾はナロードニキの文献でも指摘されていた(はじめ、たしかエンゲリガルトによって)。しかし、ほかならぬこの例によって、農民層と農業に生じている現象にたいするナロードニキの評価の狭さを知ることができる。彼らはある形態の、ある地方における矛盾は認めるが、それが全社会経済構造に固有のものであって、いたるところでさまざまな形態で現われてくるということは、理解できないのである。ある「有利な営業」の矛盾した意義は認めるが、そのほかのあらゆる「地方的営業」を農民のあいだに「植えつけること」を、極力勧めるのである。農業進歩のうちのある一つのものの矛盾した意義は認めるが、たとえば、機械が農業においても工業におけるとまったく同じ経済学的意義をもつということは、理解できないのである。

六　亜麻栽培地区

資本主義的農業のはじめの二つの地区についての記述にはかなり詳細に立ち入ったが、それは、それらの地区が広大であり、またそこで見られる諸関係が典型的であるからであった。これからさきの叙述では、もはやいくつかのきわめて重要な地区についてより簡単な指摘をするだけにし

よう。

亜麻はいわゆる「営業的作物」の最も重要なものである。すでにこの用語からして、ここでとりあげるのがほかならぬ商業的農業であることがわかる。たとえば、「亜麻」のプスコフ県では、亜麻はすでに古くから、その地方の言い方によると、農民にとって「第一の貨幣」である（『陸軍統計集』、二六〇ページ）。亜麻の生産は、貨幣を手に入れる手段の一つにすぎない。農民改革後の時代は、全体として、商業的亜麻栽培の疑いない成長を特徴としている。たとえば、六〇年代の末にはロシアにおける亜麻生産高は繊維約一二〇〇万プード（同書、二六〇ページ）、八〇年代の初めには繊維二〇〇〇万プードと算定されたが（『ロシア産業の歴史的＝統計的概観』、第一巻、サンクトーペテルブルグ、一八八三年、七四ページ）、現在では、ヨーロッパ・ロシアの五〇県で二六〇〇万プード以上の亜麻繊維が集荷されている。*本来の亜麻栽培地区（非黒土地帯の一九県）では、亜麻作付面積は近時次のように変化している。一八九三年——七五六、六〇〇デシャチーナ、一八九四年——八一六、五〇〇デシャチーナ、一八九五年——九〇一、八〇〇デシャチーナ、一八九六年——九五二、一〇〇デシャチーナ、一八九七年——九六七、五〇〇デシャチーナ。一方ヨーロッパ・ロシア全体（五〇県）では、亜麻の作付面積は一八九〇年代の初めに一、三九九、〇〇〇デシャチーナ（『生産力』、第一巻、三六ページ）であったのにたいして、一八九六年には一、六一七、〇〇〇デシャチーナ、一八九七年には一、六六九、〇〇〇デシャチーナ（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、前掲号および一八九八年第七号）であった。諸文献における一般的意見も、まったく同様に商業的亜麻栽培の成長を証言している。たとえば、『歴史的＝統計的概観』は農民改革後の最初の二〇年について、『営業の目的で亜麻を栽培する地方が数県ふえた」（同書、七一ページ）ことを確認しているが、そのことにとくに影響をあたえたのは鉄道網の拡張である。ヴェ・プルガーヴィン氏は八〇年代の初めに、ウラヂーミル県ユリエフ郡について次のように書いた。「ここでは亜麻の作付が、最近一〇—一五年間にきわめて広く普及した」。「一部の大家族の世帯主は、毎年三〇〇—五〇〇ルーブリ以上の亜麻を売り……ロストフ市で」（亜麻の種子を）「買いいれている。……ここの農民は種子の選択にきわめて注意深い態度でのぞんでいる」（『ウラヂーミル県ユリエフ郡の農村共同体、クスターリ営業、農業経営』、モスクワ、一八八四年、八六—八九ページ）。トヴェーリ県ゼムストヴォ統計集（第一三巻第二冊）では、「春播耕地の主要穀物である大麦と燕麦は、じゃがいもと亜麻に地位をゆずりつつある」（一

五一ページ）と記されている。いくつかの郡では、亜麻は春播耕地の三分の一から四分の三を占め、たとえばズブツォフ郡、カシン郡その他では、「亜麻栽培ははっきり投機的性格の営業になり」（一四五ページ）、借りいれた処女地や休耕地でとくに発展している。この場合、次のことが観察される。すなわち、まだ自由な土地（処女地、荒地、森林を切りはらった土地）がある一部の県では、亜麻栽培はとくにひろまっているが、古くから亜麻栽培をしていたいくつかの県では、「亜麻栽培は、あるいは従来の規模にとどまっているか、あるいは新たに取り入れられた作物、たとえば根菜類、野菜、等々に地位をゆずりさえしている」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年第六号、三七六ページおよび一八九七年第二九号）。すなわち、別の種類の商業的農業に地位をゆずっているのである。

亜麻の輸出についていえば、それは農民改革後のはじめの二〇年間にきわめて急速に増加した。すなわち、一八五七—一八六一年の平均四六〇万プードから一八六七—一八七一年の八五〇万プード、一八七七—一八八一年の一二四〇万プードへと増加した。しかしその後は、輸出は従来の量にとどまっていたようであり、一八九四—一八九七年の平均は一三三〇万プードであった。* もちろん、商業的亜麻栽培の発展は、農業と工業とのあいだの交換（亜麻の販売と工業製品の購買）だけでなく、各種の商業的農業のあいだの交換（亜麻の販売と穀物の購買）をもたらした。次の資料はこの興味ある現象にかんするものであるが、それは、資本主義のための国内市場が、農業から工業への人口流出

＊　一八九三—一八九七年の平均は、中央統計委員会の資料によれば二六、二九一、〇〇〇プードである。『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第九号、一八九八年第六号を見よ。それ以前の時代については、亜麻生産にかんする統計資料はまったく不正確であった。そのためわれわれは、専門家が種々さまざまな典拠を対照しておこなった概算を採用することにした。個々の年について見ると、亜麻の生産高はいちじるしく変動している。したがって、たとえば、たかだか六年間の資料から、亜麻生産の「減少」および「亜麻作付の縮小」という大胆きわまる結論（『概要』、二三六ページ以下）をくだしたニコライ—オン氏は、奇妙きわまる誤りにおちいったのである（『批判的覚え書』、二三三ページ以下の、ペ・ベ・ストルーヴェによるこの誤りの分析を見よ）。本文で述べたことにつけくわえると、ニコライ—オン氏の引用している資料によれば、一八八〇年代における最高の亜麻作付面積は一、三七二、〇〇〇デシャチーナで、亜麻繊維の収量は一九、二四五、〇〇〇プードであった。ところが、一八九六年と一八九七年には、作付面積は一、六一七、〇〇〇と一、六六九、〇〇〇デシャチーナ、繊維の収量は三一、七一三、〇〇〇と三〇、一三九、〇〇〇プードに達した。

〔第 72 表〕 プスコフ（亜麻）県における鉄道貨物の動き

（年平均，単位1000プード）

期　　間	亜麻の移出	粒穀と穀粉の移入
1860—1861年	255.9	43.4
1863—1864年	551.1	464.7
1865—1866年	793.0	842.6
1867—1868年	1,053.2	1,157.9
1869—1870年	1,406.9	1,809.3

によってだけでなく、商業的農業の専門化によっても形成されることを、明瞭にしめしている。** 〔第七二表〕

* 亜麻、亜麻屑の輸出にかんする資料。『歴史的=統計的概観』。ペ・ストルーヴェ『批判的覚え書』、『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二六号および一八九八年第三六号を見よ。

** エヌ・ストローキン『プスコフ県の亜麻栽培』、サンクト-ペテルブルグ、一八八二年を見よ。著者はこの資料を租税委員会の『調査報告書』から借りている。

ところで、商業的亜麻栽培のこのような発展は、周知のように亜麻の主要な生産者である農民に、どんな影響をあたえているだろうか？* 「プスコフ県を旅行してその経済的日常生活を観察すると、めったにない大きい豊かな単位、村、部落とならんで、極度に貧しい単位があるのに気づかずにはいられない。この両極端が亜麻地区の経済生活の特徴になっている」。「亜麻の作付は賭けのような傾向をとった」。そして亜麻からの収入の「大部分」は、「買占人と、亜麻の栽培に土地を貸しだす人々の手にはいる」（ストローキン、二二—二三ページ）。破滅的な借地料は本当の「貨幣地代」（前述を見よ）であり、農民大衆は、買占人に「完全に、絶望的に従属」（ストローキン、同所）している。この地方では商業資本の支配が早くから形成されており、** 農民改革後の時代の特徴は、この資本の集積が巨大になったこと、従来の小さな買占人たちの独占的性格が打ちこわされたこと、「亜麻営業所」がつくられてこれが亜麻取引全体を手中に収めたことにある。ストローキン氏はプスコフ県について次のように言っている。「亜麻栽培の意義は、少数者の手への資本の集中に……あらわされている」（三一ページ）。亜麻栽培を賭け事に変えてしまうことによっ

て、資本は小農耕者の大衆を零落させ、土地を疲弊させ、分与地を明けわたすまでにさせた。そして彼らは亜麻の品質を低下させ、「出稼ぎ」労働者の数を増大させた。ところが、究極において技術上の改良をとりいれることができたし、またそうすることが競争によって必然となった。とるにたりない少数の富裕な農民と商人は、手動式（価格二五ルーブリ以下）のも馬力式（三倍も高価）のも、ともに普及しはじめた。一八六九年には、クーテ式亜麻打ち機が、プスコフ県にこれらの機械はわずか五五七台しかなかったが、一八八一年には五、七一〇台（四、五二一台が手動式、一、一八九台が馬力式）をかぞえた。＊＊＊『歴史的＝統計的概観』には次のように書かれている。「現在では、亜麻栽培に従事している堅実な農家はどの家族もクーテ式手動亜麻打ち機をもっており、それには『プスコフ式亜麻打ち機』という名前までつけられている」（前掲書、八二―八三ページ）。機械も備えているこの少数の「堅実な」経営主がその他の農民層とどんな関係にあるかは、すでに第二章で見たところである。プスコフ・ゼムストヴォは、種子の選別がひどく悪い原始的なガラガラ（トレシチョートカ）のかわりに、改良式穀粒選別機（トリエール）を採用しはじめた。そして「富裕な農民営業者」はすでに、これらの機械を自分で買いいれてそれを亜麻栽培者に賃貸するのが有利だと考えている（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二九号、八五ページ）。もっと大きな亜麻買占人は乾燥機、圧搾機を設備し、亜麻の選別と麻打ちのために労働者をやとっている（ヴェ・プルガーヴィン氏、前掲書、一一五ページの例を見よ）。最後に、亜麻繊維の加工にはとくに多数の働き手が必要だということを、つけくわえておかなければならない。すなわち、亜麻一デシャチーナの栽培には本来の農作業二六労働日と、亜麻業から繊維をとるための七七労働日が必要だと、計算されている（『歴史的＝統計的概観』、七二ページ）。だから、亜麻栽培の発展は、一方では、農耕者の冬季の就業率を高め、他方では、亜麻の作付に従事している地主や富農の賃労働にたいする需要をつくりだすようになる（第三章第六節におけるその一例を見よ）。

＊　一、三九九、〇〇〇デシャチーナの亜麻作付面積のうち、七四五、四〇〇デシャチーナは非黒土地帯にあるが、そこではわずか一三％が地主のものである。黒土地帯では、六〇九、六〇〇デシャチーナの作付面積のうち四四・四％が地主のものである（『生産力』、第一巻、三六ページ）。

＊＊　すでに『陸軍統計集』も、「農民が播いた亜麻は実際にはブルィニ」（小さな買占人の地方的呼び名）「の所有物であることがきわめて多く、農民は自分の耕地ではたらく労働者にすぎない」（五九五ページ）ことを、指摘している。『歴史的＝統計的概観』、八八ページを参照。

*** ストローキン、一二ページ。

このように、亜麻栽培地区においても、商業的農業の発展は資本の支配と農民層の分解をもたらしている。この後者の過程にとってのきわめて大きな障害は、疑いもなく、破滅的に高い借地料、*（二二）商業資本の圧迫、分与地への農民の緊縛、高い分与地買取金である。だから、農民の土地購入**と営業のための離村、***改良された農具と耕作方法の普及が広範に発展すればするほど、商業資本はより急速に産業資本によって駆逐されてゆくし、また農民層からの農村ブルジョアジーの形成および資本主義制度による地主経営での雇役制度の駆逐もより急速にすすむであろう。

* 現在は、亜麻価格の下落のため亜麻栽培用地の借地料も下落している。しかし亜麻作付面積は、たとえばプスコフ県の亜麻栽培地区では、一八九六年にも減少しなかった（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二九号）。

** プスコフ県は、農民の土地購入の発展という点でロシアで第一級の県の一つである。『農村住民の経済状態にかんする統計資料集成』（内閣官房刊行）の資料によると、ここでは農民の購入地は分与耕地の面積の二三％にあたり、これは五〇県全体のうちで最高である。一八九二年一月一日現在の男子農民人口一人あたりでは〇・七デシャチーナの購入地になる。この点では、プスコフ県より上位にあるのはノヴゴロド県とタヴリーダ県だけである。

*** プスコフ県における男子の離村は、統計資料によると、一八六五—一八七五年から一八九六年までのあいだにほとんど四倍にふえた（『プスコフ県農民人口の営業』、プスコフ、一八九八年、三ページ）。

七　農産物の工業的加工

われわれはさきに、農業経済の著述家たちが農業経営方式を主要な市場向け生産物別に分類し、工場的もしくは加工的経営方式を特殊な型に入れていることを、指摘した（第一章第一節）。この方式の本質は、農産物が（個人的あるいは生産的）消費にあてられるまえに工業的加工を受ける点にある。この加工をおこなう施設は、原料生産物を採取する経営自体の一部を成していることもあれば、農業経営主から生産物を買いいれる特殊な営業者のものであることもある。経済学的には、この二つの型の相違は本質的なものではない。農産物加工生産の成長は、資本主義の発展という問題できわめて重要な意義をもっている。第一に、この成長は商業的農業の発展形態の一つであり、しかもまさに、農業が資本主義社会の一産業部門に転化することをとくに鮮やかにしめす形態なのである。第二に、農産物の工業的加工の発展は、普通、農業の技術的進歩と不可分に結びついている。すなわち、一方では、すでに加工用原料

〔第 73 表〕　1896／97年における火酒製造工場

	工場数		酒精製造高（1000ヴェドロ）	
農業的	1,474	1,878	13,521	24,331
混合的	404		10,810	
工業的	159		5,457	
計	2,037		29,788	

の生産自体が、農耕の改良（たとえば根菜類の作付）を要求することもまれでないし、他方では、加工のさいに得られる廃物が農業に利用されることもまれではなく、これが農業の成果を高め、農業と工業とのあいだの均衡、相互依存性――それらが破壊されるという点に資本主義の最も深刻な矛盾の一つがあるのだが――を、たとえ部分的にでも回復するのである。

したがって、われわれはつぎに、農民改革後のロシアにおける加工的農業生産の発展の特徴を明らかにしなければならない。

（一）　火酒製造

ここでは、農業の観点からのみ火酒製造を考察する。だから、大工場での火酒製造の集積（それは一部は内国消費税制度の要求による）がどんなに急速に進んだか、工場の技術がどんなに急速に進歩して生産費を低下させたか、内国消費税の増加が生産費の低下をどれほど上まわり、その法外な大きさのため消費と生産の増加をどれほど妨げられたかということについては、ここでは述べる必要がない。

つぎに、ロシア帝国全体における、「農業的」火酒製造にかんする資料をかかげよう。＊〔第七三表〕

＊　一八九〇年六月四日付の法律は、農業的火酒製造について次のような指標を定めた。（一）火酒製造期間は九月一日から六月一日までの畑仕事のないときとし、（二）製造する酒精の量と所有地の耕地面積とがつりあっていること。一部で農業的火酒製造を、一部で工業的火酒製造をおこなう工場は、混合的工場とよばれる（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九六年第二五号および一八九八年第一〇号を参照）。

このように、火酒製造工場総数の一〇分の九以上（総生産高の五分の四以上を生産する）は、農業と直接に結びついている。これらの工場は資本主義的大企業であって、それが設置されているすべての地主経営にも、同じ性格を付

〔第 74 表〕　火酒製造用原料の消費　（単位1000プード）

期　間	穀類全体	そのうちじゃがいも	じゃがいもの％
1867年	76,925	6,950	9.1
1873／74―1882／83年（10年間の平均）	123,066	65,508	53
1882／83―1891／92年（10年間の平均）	128,706	79,803	62
1893／94年	150,857	115,850	76
1896／97年	144,038	101,993	70.8

与する（火酒製造工場はほとんど例外なく地主の、しかも主として貴族のものである）。ここで考察している種類の商業的農業は、とくに中央黒土地帯の諸県で発展しているが、そこにはロシア帝国の火酒製造工場総数の一〇分の一以上が集中し（一八九六／九七年度には二三九工場で、そのうち二二五は農業的工場と混合的工場）、酒精総量の四分の一以上を生産している（一八九六／九七年度には七、七八五、〇〇〇ヴェドロで、そのうち六、八二八、〇〇〇ヴェドロは農業的工場と混合的工場で生産）。このように、雇役が優勢な地区では、農業の商業的性格は（その他の土地とくらべて）、穀物とじゃがいもからの火酒製造に最も多く現われる。じゃがいもからの火酒製造は、ロシア帝国全体にかんする次の資料からもわかるように、農民改革後の時代にとくに急速に発展した。*〔第七四表〕

* 出所は『陸軍統計集』、四二七ページ、『生産力』、第九巻、四九ページ、『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年第一四号。

このように、火酒製造用の穀類の量が全体として二倍に増大したのにたいして、製造用のじゃがいもの量は一五倍にふえている。この事実は、じゃがいもの作付と収量の巨大な増加が、農業技術の向上、三圃農法から多圃輪作農法への移行、等々とならんで、まさに商業的および資本主義的農業の成長を意味するものであるという、さきに確認した（本章第一節）命題をはっきり確証している。*火酒製造の最も発展している地区は、人口一人あたりで計算したじゃがいもの純収量が（ロシア諸県で、すなわちバルト海沿岸と西部の諸県を入れないと）最も多いということでも、きわだっている。たとえば、北部黒土地帯の諸県では、この量は一八六四―一八六六年、一八七〇―一八七九年、一

八八三―一八八七年の各時期に、それぞれ、〇・四四、〇・六二、〇・六〇チェトヴェルチであったのにたいして、(三〇)ヨーロッパ・ロシア全体（五〇県）では、対応する数字は、〇・二七、〇・四三、〇・四四チェトヴェルチであった。すでに八〇年代の初めに、『歴史的＝統計的概観』が指摘したことであるが、「じゃがいも栽培の最も広範な普及が認められる地方にふくまれるのは、黒土地帯の中央部と北部のすべての県、ヴォルガ流域と外ヴォルガと中央非黒土地帯の諸県である」（前掲書、四四ページ）。**

* ラスポーピン、前掲書。『歴史的＝統計的概観』、前掲一四ページを参照。火酒生産のさいの廃物（酒粕）は、（農業的工場だけでなく商業的工場によってさえ）商業的肉用畜産をおこなうために利用されることがまれでない。『農業統計報告』、第七冊、一二二ページほか随所を参照。

** 火酒製造用のじゃがいもの使用量が、まさに中部農業諸県でどれほど激しい速度で増加したかは、次の資料から明らかである。クルスク、オリョール、トゥーラ、リャザン、タンボフ、ヴォロネジの六県で、一八六四／六五―一八七三／七四年に、火酒製造にもちいられたじゃがいもの量は、年平均四〇七、〇〇〇プードであったが、一八七四／七五―一八八三／八四年には七、四八二、〇〇〇プード、一八八四／八五―一八九三／九四年には二〇、〇七七、〇〇〇プードであった。ヨーロッパ・ロシア全体では、これに対応する数字は、一〇、六三三、〇〇〇プード、三〇、五九九、〇〇〇プード、六九、六二〇、〇〇〇プードである。火酒製造のためにじゃがいもを使用した工場の数は、前記の諸県で、一八六七／六八―一八七五／七六年には年平均二九、一八七六／七七―一八八四／八五年には一三〇、一八八五／八六―一八九三／九四年には一六三であった。ヨーロッパ・ロシア全体については、これに対応する数字は、七三九―九七九―一、一九五であった（『農業統計報告』、第七冊を見よ）。

地主と富農によるじゃがいも栽培の拡大は賃労働にたいする需要の増大を意味する。じゃがいも一デシャチーナの栽培は、粒穀一デシャチーナの栽培よりもはるかに多量の労働を吸収する。* ところで機械の使用は、たとえば中央黒土地帯では、まだきわめてわずかしか発展していない。したがって、火酒製造を専業とする労働者の数が減少したとしても、** 他方では、根菜類の栽培をする資本主義的経営方式による雇役の駆逐は、農村日雇労働者にたいする需要を高めたのである。

* たとえば、ニジェゴロド県バラフナ郡のゼムストヴォ統計集では、じゃがいも一デシャチーナの栽培には七七・二労働日――そのうち五九・二労働日は、植付け、土寄せ、除草、掘出しのための農婦のもの――を必要とする、と計算されている。したがって、地元の農婦の日雇労働にたいする需要が最も大きくなる。

** 一八六七年には、ヨーロッパ・ロシアにおける火酒製造工場ではたらく労働者は五二、六六〇人をかぞえた（『陸軍統計

集』。われわれは第七章で、この出典が一般に工場労働者の数をはなはだしく誇張していることをしめすであろう）が、一八九〇年には二六、一〇二人であった（オルロフ『工場案内』による）。火酒生産を専業とする労働者は多くなく、しかも彼らは農村労働者とほとんど違いがない。たとえば、ジバンコフ博士は次のように言っている。「農村工場の労働者はみな、そのうえ、たえずそこではたらいているわけではない。なぜなら、労働者は夏には畑仕事に出かけるのであって、常雇の工場労働者とはきっぱりちがっているからである。彼らは野良着を着てゆくし、農村の風習を維持していて、工場労働者特有の磨きがかかっていない」（前掲書、第二巻、一二一ページ）。

（二）甜菜糖の生産

甜菜から砂糖への加工は、火酒製造よりもいっそう強く資本主義的大企業に集積されており、そしてまったく同様に地主（しかも主として貴族）の領地の付属物になっている。この生産の主要な地区は西部の諸県であり、ついで南部黒土地帯と中央黒土地帯の諸県である。甜菜の作付面積は六〇年代には約一〇万デシャチーナ、*七〇年代には約一六万デシャチーナであった**が、一八八六―一八九五年には二三万九〇〇〇デシャチーナ、***一八九六―一八九八年には約三六万九〇〇〇デシャチーナ、****一九〇〇年には四七八、七七八デシャチーナ、一九〇一年には五二八、〇七六デシャチーナ（『トルゴヴォープロムィシレンナヤ・ガゼータ』〔『商工業新聞』〕、一九〇一年第一二三号）、一九〇五／〇六年には四八三、二七二デシャチーナ（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一九〇六年第一二号）であった。したがって、農民改革後の時期に、作付面積は五倍以上に増加したわけである。収穫されて加工される甜菜の量は、比較にならないほどいっそう急速に増加した。すなわち、帝国内で加工された甜菜は、一八六〇―一八六四年には平均四一〇万ベルコヴェッツ[三]で、一八七〇―一八七四年には九三〇万、一八七五―一八七九年には一二八〇万、一八九〇―一八九四年には二九三〇万、一八九五／九六―一八九七／九八年には三五〇〇〇万ベルコヴェッツであった。†加工される甜菜の量は六〇年代以後八倍以上に増加した。したがって、甜菜の収穫率、すなわち、資本主義的に組織された大領地における労働生産性は、いちじるしく向上したわけである。†*甜菜のような根菜類を輪作にとりいれることは、より完成された農耕方式への移行、土地耕作および家畜飼育の改善、等々と、不可分に結びついている。『歴史的＝統計的概観』（第一巻）には次のように書かれている。「甜菜畑の耕作は、一般になかなか複雑でむつかしいものであるが、わが国の多くの甜菜経営は高い完成の域に達している。とくに、西

南部とヴィスラ河沿岸の諸県でそうである。耕作のために、いろいろな地方で、種々の、多少とも完成された農具や犂がもちいられており、ある場合には蒸気力による耕作さえおこなわれている」（一〇九ページ）。

＊『大蔵省年報』、第一冊。『陸軍統計集』。『歴史的＝統計的概観』、第二巻。

＊＊『歴史的＝統計的概観』、第一巻。

＊＊＊『生産力』、第一巻、四一ページ。

＊＊＊＊『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二七号、一八九八年第三六号。ロシア領ポーランドを除くヨーロッパ・ロシアでは、一八九六—一八九八年の甜菜作付面積は三二万七〇〇〇デシャチーナであった。

† 前掲の出典以外に、『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年第三二号を見よ。

†＊ 一八九〇—一八九四年の平均では、帝国内の甜菜作付二八万五〇〇〇デシャチーナのうち、工場によるものが一一万八〇〇〇デシャチーナで、栽植農場主によるものが一六万七〇〇〇デシャチーナであった（『生産力』、第九巻、四四ページ）。

資本主義的大規模農業のこのような進歩は、農業賃金労働者、雇農およびとくに日雇いにたいする需要のきわめていちじるしい増加と結びついており、しかも婦人労働と児童労働がとくに広くもちいられている（『歴史的＝統計的概観』、第二巻、三二ページを参照）。近隣諸県の農民のあいだに、特別の種類の出稼ぎ——「砂糖」出稼ぎ——が現われた（前掲書、四二ページ）。甜菜一モルグ（三分の二デシャチーナ）の完全な耕作には四〇労働日が必要である、と計算されている（『自由な賃労働』、七二ページ）。『農村住民の状態にかんする資料集成』（内閣委員会刊行）は、甜菜一デシャチーナの栽培には、婦人と未成年者を計算に入れないで、機械耕作の場合には一二男子労働日、手作業の場合には二五男子労働日が必要である（序文一〇—一一ページ）、と計算している。だから、ロシアにおける甜菜の全作付地の耕作には、おそらく、三〇万人を下らない農村の男女日雇いが使用されているにちがいない。しかし、甜菜栽培面積の増大からでは、まだ、賃労働にたいする需要についての完全な表象をつくりあげることはできない。というのは、一部の仕事は、甜菜一ベルコヴェッにつきいくらというふうに支払われているからである。たとえば、『ロシアにおけるクスターリ工業にかんする報告と研究』（国有財産省刊行、第二巻、サンクト・ペテルブルグ、一八九四年、八二ページ）には、次のように書かれている。

「市でも、郡でも」（ここでいっているのはチェルニーゴフ県のクロレヴェッ市のことである）「女子住民は甜菜畑での仕事を大事にしている。秋には甜菜の洗浄に一ベルコヴェッあたり一〇カペイカ支払われるが、女二人で一日に

六から一〇ベルコヴェッツを洗う。しかしある者は、成育期の手入れ作業、すなわち除草や土寄せについても契約しており、その場合には、掘上げと洗浄をふくむ手入れ作業全体にたいして、洗った甜菜一ベルコヴェッツにつき二五カペイカずつ受けとる」。甜菜農場の労働者の状態はきわめて苦しい。たとえば、『ハリコフ県医療日誌』（一八九九年、九月、『ルースキエ・ヴェードモスチ』、一八九九年第二五四号から引用）には、「甜菜農場における労働者の状態について、悲惨というよりもっとひどい多数の事実」があげられている。たとえば、アフトィルカ郡コテリヴァ自由村出身のゼムストヴォ医師ポドリスキーは、次のように書いている。「秋のチフス流行の始まりは、普通、富農の甜菜農場ではたらく青年たちのあいだで認められる。労働者の休息や宿泊にあてられる納屋は、このような農場主のところではきわめて不潔であり、そこの寝藁はまったくとりかえられないため、仕事の終わるころには、文字通り堆肥と化してしまう。ここに伝染病の発生源が成熟するのである。同じ農場から連れてこられた四—五人の患者は、すぐにチフスと診断されなければならなかった」。この同じ医師の意見では、「梅毒患者の多くは甜菜農場から出ている」。フェインベルグ氏が次のように指摘しているのは、まったく根拠のあることである。「労働者自身にも付近の住民にも有害な影響をおよぼすという点では、農場での労働は工場での労働にひけをとらないが、それがとくに破滅的なのは、多数の婦人や未成年者がこの労働に従事している点、および労働者がここでは社会と国家の最も初歩的な保護さえ奪われている点にある」。この著者は、上述のことにもとづいて、ロマネンコ医師がハリコフ県の第七回医師大会で述べた次の意見に全面的に同意している。「強制命令を公布する場合には、甜菜農場の労働者の状態についても配慮すべきである。これらの労働者は最も必要なものさえ奪われており、何ヵ月も野天で生活し、共同炊事でまかなわれている」。

　このように、甜菜生産の成長は、農村労働者にたいする需要を巨大な規模で高め、近隣の農民層を農村プロレタリアートに変えた。農村労働者数の増大は、甜菜糖生産を専業とする労働者数のわずかばかりの減少によって、ほんの少し弱められたにすぎない。*

* ヨーロッパ・ロシアでは一八六七年に八〇、九一九人の労働者が甜菜糖工場と精糖工場ではたらいていた（『大蔵省年報』、第一巻。『陸軍統計集』はこの場合にも、おそらく同じ労働者を重複計算することによって、この数を誇張して九二、〇〇〇人とした）。一八九〇年にはその数は七七、八七五人であった（オルロフ『工場案内』）。

（三）じゃがいも澱粉の生産

加工生産のうちでもっぱら地主経営がおこなっている部門から、多少とも農民が近づきやすい部門へ移ろう。まず第一にこれにはいるのは、じゃがいも（部分的には小麦その他の穀物）の、澱粉や糖蜜への加工である。澱粉生産は、澱粉を需要する繊維工業が巨大な発展をとげたため、農民改革後の時代にとくに急速に増加した。この生産が普及している地区は、主としては非黒土地帯の工業諸県であり、部分的には北部黒土地帯の諸県である。『歴史的＝統計的概観』（第二巻）の計算では、六〇年代のなかごろには、約二七万ルーブリの生産額をもつ約六〇の工場があったが、一八八〇年には二二四工場が一三一万七〇〇〇ルーブリの生産額をあげていた。一八九〇年には、『工場案内』の計算によると一九二工場、労働者数三、四一八人、生産額一七六万ルーブリであった。* 『歴史的＝統計的概観』では次のように述べられている。「澱粉生産は最近二五年間に、工場数で四・五倍に、また製品額では一〇・七五倍に増大した。それにもかかわらず、この生産高では澱粉需要をみたすにはほど遠い」（一一六ページ）。そのことは、外国からの澱粉輸入の増加が証明している。『歴史的＝統計的概観』は県別の資料を分析して、わが国ではじゃがいも澱粉の生産は（小麦澱粉の生産とは反対に）、農民と地主の手に集中されていて、農業的性格をもっているという結論に達している。「それは」将来における「広範な発展を約束しており、現在でもわが国の農村住民に大きな利益をもたらしている」（一二六ページ）。

* 最も同質で比較可能なものとして、われわれは『歴史的＝統計的概観』の資料をとる。『大蔵省報告・資料集』（一八六六年、第四号、四月）は、商工局の公式資料によって、一八六四年にはロシアに、二三万一〇〇〇ルーブリの生産額をもつ五五の澱粉工場があったと計算している。『陸軍統計集』は一八六六年の工場数一九八、生産額五六万三〇〇〇ルーブリと計算しているが、そのなかには、疑いもなく、現在では工場には入れられないような小さなものまではいっていた。一般に澱粉生産の統計は非常に不備である。小さな工場がときには計上されているかとおもえば、ときには（このほうがはるかに多いが）おとされている。たとえば、ヤロスラヴリ県について、オルロフの『工場案内』は一八九〇年の工場数を二五（一八九四／九五年度の『工場一覧表』では二〇）としたが、『ヤロスラヴリ県概観』（第二冊、一八九六年）によると、ロストフ郡だけで八一〇のじゃがいも糖蜜工場があった。だから、本文にかかげた数字が明らかにできるのは現象の動態だけであって、けっして生産の実際の発展ではない。

こんどは、だれがこの利益を得ているかを見よう。だがはじめに指摘しておけば、澱粉生産の発展では二つの過程

〔第 75 表〕

事業所の類別*	事業所数	労働者数			1事業所あたり労働者数			平均労働週	生産額（ルーブリ）		
		家族労働者	賃金労働者	計	家族労働者	賃金労働者	計		総額	1経営あたり	1労働者あたり(4週間の)
小経営	15	30	45	75	2	3	5	5.3	12,636	842	126
中経営	42	96	165	261	2.2	4	6.2	5.5	55,890	1,331	156
大経営	11	26	67	93	2.4	6	8.4	6.4	61,282	5,571	416
計	68	152	277	429	2.2	4.1	6.3	5.5	129,808	1,908	341

* 第5章の付録〔巻末の付録Ⅰ〕，営業第24号を見よ．

を区別する必要がある。すなわち、一方では新しい小工場の出現と農民的生産の成長であり、他方では大規模な蒸気力工場における生産の集積である。たとえば一八九〇年には、七七の蒸気力工場が労働者総数の五二％と生産額の六〇％を集中していた。これらの工場のうち一一だけが一八七〇年以前に設立されたもので、一七は七〇年代に、四五は八〇年代に、二つは一八九〇年に設立されたものである（オルロフ氏『工場案内』）。

農民的澱粉生産の経済をよく知るために、地方の調査に目を向けよう。モスクワ県では、一八八〇／八一年度に澱粉製造は四郡の四三ヵ村でおこなわれていた。* 経営数は一三〇で、労働者七八〇人、生産額一三万七〇〇〇ルーブリあまりと算定された。この営業は主として農民改革後に普及したのであって、しかもその技術はしだいに進歩して、より大きな固定資本を必要とし高度の労働生産性を特徴とする、より大きな経営が形成されてきた。手卸し器は改良卸し器にとりかえられ、つぎに馬力伝導装置が現われ、最後にバラバン〔ドラム〕という、生産をいちじるしく改良し安価にする装置が採用された。次の表は、農家戸別調査を「クスターリ」の経営規模別にわれわれが加工した資料である。〔第七五表〕

* 『モスクワ県統計報告集』、第七巻第一冊、モスクワ、一八八二年。

このように、ここにあるのは資本主義的小経営であり、そこでは生産の拡大につれて、賃労働の使用が増加し労働生産性が上昇している。これらの経営は、農業技術をも向上させて、農民ブルジョアジーに大きな利潤をあたえている。しかし、これらの小工場における労働者の状態は、作業条件が極度に不衛生で労働日が長いため、きわめて不満足なものである。*

* 前掲書、三二ページ。農民的小工場における労働日は一三

ー一四時間であるが、同じ産業部門でも大工場では（デメンチエフによれば）一二時間労働日が支配的である。

「卸し」場をもつ農民の農業は、非常に有利な条件におかれている。じゃがいもの作付（分与地での、また主として借入地での）は、ライ麦や燕麦の作付よりもいちじるしく多くの収入をもたらす。経営を拡張するために、工場主たちは貧農の分与地を借りいれようとつとめる。たとえば、ツィビノ村（ブロンニツィ郡）では、一八人の澱粉工場主（この村に住んでいる一〇五人の経営主のうち）が、賃仕事に出かけた農民や馬をもたない農民から分与地を借りいれ、こうして六一の自分の分与地にさらに一三三の借りいれた分与地をつけくわえている。彼らの手には合計一九四の分与地、すなわちこの村の分与地全体の四四・五％が集中されている。統計集には次のように書かれている。「多少とも澱粉製造業が発展している他の村でも、まったく同じ現象が見うけられる」（前掲書、四二ページ）。* 澱粉工場主はその他の農民の倍以上も家畜をもっている。すなわち、この地方の農民が一般に一戸あたり平均馬一・五頭と牝牛一・七頭をもっているのにたいして、彼らは平均馬三・五頭と牝牛三・四頭をもっている。（戸別調査の対象となった）六八人の工場主のうち、一〇人は購入地をもち、二二人は分与地外の土地を借りいれ、二三人は分与地を借りいれている。ひとことでいえば、これは農民ブルジョアジーの典型的な代表人物である。

＊　これと、モスクワ県全体にかんするヴェ・オルロフの一般的な意見（統計集、第四巻第一冊、一四ページ）とを比較せよ。富農はしばしば貧農の分与地を借りいれ、ときには五ー一〇ずつの借入分与地をその手に集中している。

ウラヂーミル県ユリエフ郡の澱粉製造業も、まったく同じような関係をしめしている（ヴェ・プルガーヴィン、前掲書、一〇四ページ以下）。ここでも工場主たちは、主として賃労働を利用して生産をおこなっている（三〇工場の一二八人の労働者のうち、賃金労働者は八六人）。そのうえ彼らはじゃがいものかすを家畜の飼料に利用している。農民のなかから、本当の農業企業家さえ現われている。プルガーヴィン氏は、一二人の賃金労働者を使用する澱粉工場（価格にして約一、五〇〇ルーブリ）をもつ、ある農民の経営のことを記述している。この人は、借地によって拡大した自分の経営でじゃがいもを生産している。彼は、クローヴァーを播いて七圃式輪作をしている。農耕には、七ー八人の働き手が春から秋までやとわれる（「終りまでの労働者」）。かすは家畜の飼料にされるが、経営主はその洗い水を畑にかけようとくわだてる。

ヴェ・プルガーヴィン氏は、この工場は「まったく例外

的な条件下に」あると断定している。もちろん、どんな資本主義社会においても、農村ブルジョアジーはつねに農村住民のうちのとるにたりない少数であろうし、その意味では、おのぞみなら「例外」といっていいだろう。しかしだからといって、ロシアにおける澱粉生産地区やその他のすべての商業的農業地区で、資本主義的農業を組織する農村企業家たちの階級の形成がすすんでいるという事実は、なくなりはしない。*

* 奇妙なこととして指摘しておけば、ブルガーヴィン氏(前掲書、一七〇ページ)も、モスクワの営業について書いた著者(前掲書、四五ページ)も、ヴェ・ヴェ氏(『クスターリ工業概説』、一二七ページ)も、いくつかの卸し場が数人の経営者に属しているということのうちに、「アルテリ原則」(あるいは「原理」)を見いだしている。わが懸眼なナロードニキたちは、農村企業家の組合のなかに独特の「原則」を見てとることはできたが、農村企業家の階級の存在と発展そのもののなかには、なんらの新しい社会経済的「原則」も見つけなかったのである。

(四) 植物油生産

亜麻、大麻、ひまわり、その他からの油の製造もまた、農産物加工業であることが、まれでない。農民改革後の時代における植物油生産の発展については、次のことから判断することができる。すなわち、一八六四年の植物油生産額は一六一万九〇〇〇ルーブリ、一八七九年には六四八万六〇〇〇ルーブリ、一八九〇年には一二二三万二〇〇〇ルーブリと算定されている。* この生産部門でも二とおりの発展過程が見られる。一方では、販売のための生産物を生産する農民の(ときには地主の)小規模な搾油所が、農村に発生する。他方では、大規模な蒸気力工場が発展し、これが生産を集積して小さな事業所を駆逐する。** ここで、われわれがあつかうのは、油性植物の農業的加工だけである。『歴史的＝統計的概観』(第二巻)には次のように書かれている。「大麻搾油所の持ち主は『農民層』の富裕な人々である。彼らは、家畜のためのりっぱな飼料(搾りかす)がとれるので、植物油生産をとくに尊重している」。ブルガーヴィン氏(前掲書)は、ウラヂーミル県ユリエフ郡で「亜麻の種子からの油の生産が広く発展している」ことを指摘して、農民がそれから「少なからぬ利益」を得ていること(六五—六六ページ)、搾油工場をもつ農民の農業と畜産は農民大衆のそれよりもずっと優位にあること、しかも一部の搾油業者は農村労働者の雇用にもたよっていること(前掲書、表、二六—二七ページ、一四六—一四七ページ)を、確認している。一八九四/九五年度のペルミのクスターリ調査も、まったく同じように、搾油クスターリの農業

が、農民大衆のものとくらべてはるかに優位にあること(より大規模な作付、ずっと多くの家畜、よりよい収穫、その他)、農耕のこのような改良が農業労働者の雇用をともなっていることを、しめした。*** ヴォロネジ県では、農民改革後の時代になって、地方の搾油所で油に加工されるひまわりの商業的作付がとくに普及した。七〇年代には、ロシアにおけるひまわりの作付は約八万デシャチーナであったが(『歴史的＝統計的概観』、第一巻)、八〇年代には約一三万六〇〇〇デシャチーナになり、その三分の二は農民のものであった。「しかし、いくつかの資料から判断すると、それ以来、この作物の作付面積はいちじるしく増大し、ところによっては一〇〇%あるいはそれ以上も増大した」(『生産力』、第一巻、三七ページ)。『歴史的＝統計的概観』の第二部にはこう書かれている。「アレクセーエフカ自由村」(ヴォロネジ県ビリューチ郡)「だけで、四〇以上の搾油所がかぞえられるが、まさにそのアレクセーエフカ村はひまわりのおかげだけで豊かになり、あわれな寒村から、鉄板で屋根を葺いた家々のある豊かな村に変わった」(四一ページ)。農民ブルジョアジーのこのような豊かさが農民大衆にどのような影響をあたえたかは、一八九〇年にアレクセーエフカ自由村の二二七三の登録家族(その男女人口は一三、三八六人)のうち一、七六一家族が役畜をもたず、一、六九九家族が農具をもたず、一、四八〇家族が土地を耕作せず、そして営業に従事していないのは三三家族だけであった、ということから明らかである。****

* 『大蔵省報告・資料集』、一八六六年、第四号。オルロフ『工場案内』、第一版と第三版。われわれは工場数にかんする資料はあげない。なぜなら、わが国の工場統計は小規模の農業的搾油所と大規模の工業的製油所とをまぜこぜにしており、前者は、県により時期によって、数に入れられたり入れられなかったりしているからである。たとえば、一八六〇年代には「工場」のうちには多数の小さな搾油所がはいっていた。

** たとえば、一八九〇年には、三八三工場のうちの一一工場が、一二二三万二〇〇〇ルーブリのうちの七一七万ルーブリの生産額をあげていた。農村企業家にたいする工業企業家のこのような勝利は、わが大地主(たとえばエス・コロレンコ氏、前掲書)や、わがナロードニキ(たとえばニコライ—オン氏『概要』、二四一—二四二ページ)の深刻な不満をひきおこしている。われわれは彼らと意見を同じくしない。大工場は労働生産性を高め、生産を社会化する。これが一面である。そして他面では、大工場の労働者の状態は、おそらく、小規模の農業的搾油所にくらべて、たんに物質的な点だけでなく、すぐれているであろう。

*** ヴェ・イリイン『経済学試論と論文』(三三)、サンクト・ペテルブルグ、一八九九年、一三九—一四〇ページ。

**** 『ヴォロネジ県ビリューチ郡統計報告集』。この自由村の工業施設の数は一五三である。オルロフ氏『工場案内』に

よると、一八九〇年にはこの自由村に六つの搾油工場があり、その労働者数は三四人、生産額は一万七〇〇〇ルーブリであったが、『工場一覧表』によると、一八九四／九五年度には、八工場で、労働者数は六〇人、生産額は、一五万一〇〇〇ルーブリであった。

農民の搾油所は、ゼムストヴォ戸別調査の場合、ふつう「商工業施設」のなかにかぞえられていることを、一般に指摘しておくべきであろう。これらの分布と役割については、われわれはすでに第二章で述べた。

（五）　タバコ栽培

最後に、タバコ栽培の発展について簡単に指摘しよう。ロシアでは、一八六三―一八六七年に、平均三二、一六一デシャチーナから一九二万三〇〇〇プードの収穫があったが、一八七二―一八七八年には四六、四二五デシャチーナから二七八万三〇〇〇プード、八〇年代には五万デシャチーナから四〇〇万プードの収穫があった。* 農場の数は右の期間に七万五〇〇〇―九万五〇〇〇―六五万と算定されているが、これはおそらく、この種類の商業的農業に引きいれられた小農耕者の数がいちじるしく増加したことをしめすものであろう。タバコの栽培にはかなりの数の労働者が必要である。だから、各種の農業出稼ぎのなかでタバコ農場への出稼ぎが注目されている（とくに、タバコの栽培が近年急速にひろまった南部辺境の諸県で）。タバコ農場の労働者の状態がきわめてひどいものであることは、諸文献ですでに指摘されたところである。**

* 『大蔵省年報』、第一巻。『歴史的＝統計的概観』、第一巻。『生産力』、第九巻、六二ページ。タバコの作付面積は年によって激しく変動している。たとえば、一八八九―一八九四年の平均では四七、八一三デシャチーナ（収穫は四一八万プード）であったが、一八九二―一八九四年には五二、五一六デシャチーナで収穫は四八七万八〇〇〇プードであった。『ロシアにかんする情報集』、一八九六年、二〇八―二〇九ページ。

** ベロボロドフ『セーヴェルヌィ・ヴェーストニク』、一八九六年第二号所載の前掲論文。『ルースキエ・ヴェードモスチ』、一八九七年第一二七号（五月一〇日付）によると、クリミアのタバコ農場の一経営主を二〇人の女子労働者が告訴した訴訟事件の審理から、「農場ではたらいている労働者の言語に絶するひどい状態をしめす多数の事実が、法廷で明らかにされた」。

商業的農業の一部門としてのタバコ栽培の問題については、『ロシアにおけるタバコ栽培の概観』（第二および第三冊、サンクトペテルブルグ、一八九四年、農業省の指示によって印刷）に、とくに詳しくて興味ある資料がある。ヴェ・エス・シチェルバチェフ氏は小ロシアのタバコ栽培について記述して、ポルタワ県の三郡（プリルーキ、ロフ

〔第 76 表〕　ポルタワ県の3郡のタバコ栽培（1888年）

穀物の作付規模別の経営グループ	経営数	作付面積（デシャチーナ）	
		タバコ	穀物
1デシャチーナ未満	2,231	374	448
1—3デシャチーナ	7,668	895	13,974
3—6　〃	8,856	1,482	34,967
6—9　〃	3,319	854	22,820
9デシャチーナ以上	3,015	3,239	74,565
計	25,089	6,844	146,774

ヴィーツァ、ロームヌィ）についてきわめて正確な情報をあげている。この著者があつめてポルタワ県ゼムストヴォ参事会の統計課が整理したこれらの情報は、上記三郡全体にわたるタバコ栽培の農民経営二五、〇八九を包括しており、そのタバコ作付面積は六、八四四四デシャチーナ、穀物作付面積は一四六、七七四デシャチーナである。これらの経営を分類すると次のようになる。〔第七六表〕

これによって、タバコも穀物も作付が資本主義的経営の手にきわめて大きく集積されていることがわかる。経営総数の八分の一以下（二万五〇〇〇のうちの三〇〇〇）が一経営あたり平均約二五デシャチーナをもち、穀物作付面積の半分以上（一四万七〇〇〇デシャチーナのうちの七万四〇〇〇デシャチーナ）を集中している。またタバコ作付面積のうちほとんど半分（六、八〇〇デシャチーナのうちの三、二〇〇デシャチーナ）がこれらの経営の手中にあって、一経営あたり一デシャチーナ以上になるが、これにたいして残りの全グループのタバコ作付面積は、一戸あたり一〇分の一ないし一〇分の二デシャチーナを超えない。

シチェルバチェフ氏は、そのほかに、これらの経営をタバコの作付規模別に分類した資料をあたえている。〔第七七表〕

この表から明らかなように、タバコ作付の集積は穀物作付の集積よりもいちじるしくはげしい。この地方の専門的な商業的農業部門は、農業一般よりもいっそう資本家の手に集中されている。二五、〇〇〇経営のうちの二、七七三経営の手に、タバコの作付六、八四四デシャチーナのうちの四、一四五デシャチーナが、すなわち五分の三以上が集中

〔第 77 表〕

タバコ農場のグループ	農場数		タバコ作付（デシャチーナ）	
0.01デシャチーナ未満	2,919		30	
0.01—0.10デシャチーナ	9,078		492	
0.10—0.25 〃	5,989		931	
0.25—0.50 〃	4,330		1,246	
0.50—1.00 〃	1,834	2,773	1,065	4,145
1.00—2.00 〃	615		720	
2.00デシャチーナ以上	324		2,360	
計	25,089		6,844	

されている。最大級のタバコ栽培者三二四人（タバコ栽培者総数の一〇分の一をすこし超えた数）が、二、三六〇デシャチーナ、すなわち全体の三分の一以上のタバコ作付をしている。これは、平均すると一経営あたり七デシャチーナ以上のタバコ作付になる。このような経営がどんな型のものにならずにおかないかについて判断するために、タバコ栽培が非常に数多くの人手を必要とするということを思いおこそう。右の著者の計算では、タバコの種類にもよるが、夏季の四ヵ月から八ヵ月の期間に一デシャチーナあたり少なくとも二人の労働者が必要である。

したがって、七デシャチーナのタバコ作付をするものは、一四人を下らない労働者をもたなければならず、すなわち、疑いもなく、経営を賃労働のうえに打ちたてなければならない。ある種のタバコは、一デシャチーナあたり二人ではなく三人の季節雇労働者と、そのほかに日雇いの追加労働を必要とする。ひとことでいえば、農業が商業的になればなるほど、その資本主義的組織化がますます発展するということが、いとも鮮明にわかるのである。

タバコ栽培者の数のうえでは、小経営と零細経営が優勢である（二五、〇八九経営のうち二一、九九七経営は一〇分の一デシャチーナ未満の作付をしている）が、それは、この商業的農業部門が資本主義的に組織されていることをいささかもくつがえすものではない。というのは、これらの多数の零細経営の手には生産のとるにたりない部分しかないからである（二一、九九七経営、すなわちほぼ半数の経

営が、六、八四四デシャチーナのうちのわずか五二二デシャチーナを、すなわち一〇分の一以下をもっているにすぎない)。同様に、人があまりにもしばしばそれにこだわる「平均」数字もまた、実情にかんする表象をあたえはしない(平均では、一経営あたりのタバコ作付は四分の一デシャチーナあまりにしかならない)。

個々の郡では、資本主義的農業の発展と生産の集積はいっそうはげしい。たとえば、ロフヴィーツァ郡では、五、九五七経営のうちの二二九経営がそれぞれ二〇デシャチーナ以上の穀物作付をしている。これらの経営は、穀物の総作付面積四四、七五一デシャチーナのうちの二二、七九九デシャチーナを、すなわち半分以上をもっている。どの経営主もほとんど一〇〇デシャチーナずつ作付している。彼らは、タバコ作付二、〇〇三デシャチーナのうちの一、一二六デシャチーナをもっている。いまタバコ作付規模別の分類をとってみると、この郡では、五、九五七人のうちの一三二人の経営主が二デシャチーナ以上のタバコ作付をしている。これら一三二人の経営主は、タバコ作付二、〇〇三デシャチーナのうちの一、四四一デシャチーナを、すなわち七二%をもち、一経営あたりでは一〇デシャチーナ以上のタバコ作付をしている。同じロフヴィーツァ郡のなかでも、他方の極には、タバコ作付一〇分の一デシャチーナ未満という経営が四、三六〇経営(五、九五七経営のうち)あるのだが、これらは二、〇〇三デシャチーナのうちのわずかに一三三デシャチーナを、すなわち六%をもっているにすぎない。

資本主義的生産組織が、この場合、商業資本と生産分野外でのあらゆる搾取との強力な発展をともなっていることは、いうまでもない。小さなタバコ栽培者はタバコの乾燥小屋をもたないので、生産物を発酵させてそれを(三—六週間後に)仕上がった形で販売することができない。彼らは、それを仕上げないまま買占人に半値で売りわたすが、この買占人自身が借入地でタバコの作付をすることもまれではない。買占人は「小農場主をあらゆる方法で圧迫している」(前掲書、三一ページ)。商業的農業は商業的な資本主義的生産である——この相互関係は、農業のこの部門においても(正しい方法をえらぶ能力がありさえすれば)はっきりあとづけることができる。

八　営業的野菜栽培と園芸。近郊農業

かなり高度に発展していた「地主の園芸」は、農奴制度の崩壊とともに「ほとんどロシア全土にわたって、一挙に、また急速に衰微した*」。鉄道の敷設は事態を変化させ、新

しい商業的園芸の発展に「巨大な刺激」をあたえ、商業的農業のこの部門で「改良への完全な転回」をひきおこした。** 一方では、南部からの安い果物の移入は、従来の園芸普及中心地の園芸を壊滅させ、*** 他方では、たとえばコヴノ、ヴィリノ、ミンスク、グロドノ、モギレフ、ニジェゴロドの諸県では、販売市場の拡大とともに営業的園芸が発展した。**** ヴェ・パシケーヴィチ氏が指摘しているところによると、一八九三/九四年度の果樹栽培の情況調査は、最近一〇年間に果樹栽培が営業部門としていちじるしく発展し、園芸師と園芸労働者とにたいする需要が増加した等々のことを、しめした。† 統計資料はこの意見を立証している。すなわち、ロシアの鉄道による果物の輸送が増加し、†* 農民改革後の初めの一〇年間に増加した国外からの果物輸入は、減少しつつある。†**

* 『歴史的=統計的概観』、第一巻、二ページ。
** 同所。
*** たとえばモスクワ県で。エス・コロレンコ『自由な賃労働……』、二六二ページを見よ。
**** 前掲書、三三五、三四四ページ、その他。
† 『生産力』、第四巻、一三ページ。
†* 前掲書、三一ページ、および『歴史的=統計的概観』、三一ページ以下。
†** 六〇年代の輸入は約一〇万プードで、一八七八ー一八八〇年には三八〇万プード、一八八六ー一八九〇年には二六〇万プード、一八八九ー一八九三年には二〇〇万プードであった。

園芸とは比較にならないほど多数の住民大衆のために消費資料を提供する商業的野菜栽培が、さらにいっそう急速にまた広範に発展したことは、いうまでもない。営業的菜園がいちじるしい普及を見せているのは、第一に都市の近郊、* 第二に工場町や商工業町の近郊** および鉄道沿線、第三にロシア全土に散在して野菜生産で有名になった個々の村である。*** この種の生産物にたいする需要は、工業人口からだけでなく農業人口からもあるということを、指摘する必要がある。ヴォロネジ県の農民の家計によれば、野菜のための支出は住民一人あたり四七カペイカで、しかもこの支出の半分以上は購入生産物にあてられているということを、思いおこそう。

* 先まわりしてここで指摘しておくと、一八六三年にはヨーロッパ・ロシアに人口五万人以上の都市が一三あり、一八九七年には四四あった(第八章第二節を見よ)。
** 第六章と第七章におけるこの型の町の例を見よ。
*** ヴャトカ、コストロマ、ウラヂーミル、トヴェーリ、モスクワ、カルーガ、ペンザ、ニジェゴロド、その他多くの県——ヤロスラヴリ県についてはいうまでもなく——におけるこのような村については、『歴史的=統計的概観』、第一巻、

一三ページ以下、『生産力』、第四巻、三八ページ以下に指摘されているのを見よ。また、ニジェゴロド県のセミョーノフ郡、ニジェゴロド郡、バラフナ郡にかんするゼムストヴォ統計集をも参照。

この種の商業的農業において形成される社会経済関係について知るためには、野菜栽培がとくに発展している地区にかんする地方的調査の資料にたよる必要がある。たとえば、ペテルブルグ近郊では、ロストフから移住してきた野菜栽培者がはじめた、温床や温室による野菜栽培が広く発展している。温床フレームの数は、大きな野菜栽培者では数千、中位の野菜栽培者でも数百をかぞえる。「若干の大きな野菜栽培者は、酢漬キャベツをつくって数万プードも軍隊に納めている」*。ゼムストヴォ統計の資料によると、ペテルブルグ郡ではその地方の住民のうち四七四戸が野菜栽培に従事し（一戸あたりの収入は約四〇〇ルーブリ）、二三〇戸が園芸に従事している。資本主義的関係が、商業資本の形態でも（「営業は仲買人のきわめて苛酷な搾取を受けている」）、労働者の雇用による形態でも、非常に広く発展している。たとえば、外来の住民のなかには、一一五人の菜園経営主（一経営主あたり三、〇〇〇ルーブリ以上の収入）と七一一人の菜園労働者（平均一一六ルーブリの収入）がかぞえられた**。

* 『生産力』、第四巻、四二ページ。

** 『サンクト・ペテルブルグ県国民経済統計資料』、第五冊。実際には、野菜栽培者は本文で指摘されているよりもはるかに多い。というのは、野菜栽培者の大多数は私有地経営の部類に入れているのに、上掲の資料は農民経営だけにかんするものだからである。

モスクワ近郊の野菜栽培農民もまた、農村ブルジョアジーの同じような典型的人物である。「概算で、毎年四〇〇万プード以上の野菜と青物がモスクワ市場に出まわっている。いくつかの村は、酢漬野菜の大きな取引をしている。すなわち、ノガチノ郷は、約一〇〇万ヴェドロの酢漬キャベツを工場や兵営に売っており、クロンシュタットにさえ送っている。……商業的菜園は、モスクワ県のすべての郡に、とくに都市や工場の付近に普及している」*。「キャベツ切りは、ヴォロコラムスク郡からくる賃金労働者がやっている」（『歴史的＝統計的概観』、第一巻、一九ページ）。

* 『生産力』、第四巻、四九ページ以下。それぞれの村が個々の種類の野菜の生産に専門化しているのは、興味深いことである。

ポレチエやウゴーヂチその他五五の野菜村を包含するヤロスラヴリ県ロストフ郡の有名な野菜栽培地区でも、関係はまったく同じである。ここでは、放牧地や採草地以外のすべての土地が、ずっと以前から菜園になっている。野菜

の工業的加工――かんづめ生産――が大いに発展している。* 土地の生産物とならんで、土地そのものも、また労働力も、商品になっている。「共同体」があるにもかかわらず、土地利用の不均等は、たとえばポレチエ村ではきわめて大きい。すなわち、ある場合には三人で七つの「菜園」をもっているが、他の場合には四人で一七の「菜園」をもっている。それは、ここでは根本的な土地再分割がおこなわれていないからである。おこなわれたのは部分的再分割だけで、しかも農民は自分の「菜園」や「細分地」を「自由に交換している」(『ヤロスラヴリ県概観』、九七―九八ページ)。** 「畑仕事の大部分は……夏の農繁期に近隣の村や近隣の県から多数ポレチエにやってくる男女の日雇いによって、おこなわれる」(前掲書、九九ページ)。ヤロスラヴリ県全体では、「農業および菜園の」出稼営業にやってきた人は一〇、三二二人(そのうち七、六八九人はロストフ県人)をかぞえる。――すなわち、これは多くの場合この職業の賃金労働者なのである。*** 首都のある両県[三]やヤロスラヴリ県等々への農村労働者の流入にかんする前掲の資料は、たんに酪農業の発展とだけでなく、商業的野菜栽培の発展とも、関連させられなければならない。

* 『歴史的＝統計的概観』、第一巻。オルロフ氏『工場案内』。『クスターリ工業調査委員会報告』、第一四冊、ストルピャンスキー氏の論文。『生産力』、第四巻、四六ページ以下、『ヤロスラヴリ県概観』、第二冊、ヤロスラヴリ、一八九六年。ストルピャンスキー氏の資料(一八八五年)と『工場案内』の資料(一八九〇年)とを比較すると、この地区でのかんづめの工場生産のいちじるしい増加がわかる。

** このように、この出版物は、「菜園になっている土地はしばしば再分割された」ようだというヴォルギン氏の述べた「疑惑」を、完全に立証した(前掲書、一七二ページ、注)。

*** ここでもまた、農業の特徴ある専門化が見うけられる。「菜園業が一部の住民の専門的職業となった地方では、農民の他の部分はほとんどまったく野菜を栽培せず、市場や定期市でそれを買っているのは、注目すべきことである」(エス・コロレンコ、前掲書、二八五ページ)。

野菜の温室栽培――モスクワ県やトヴェーリ県の富農のあいだで急速に発展しつつある営業――もまた野菜栽培のうちにはいる。* モスクワ県では、一八八〇/八一年度の調査によると、三、〇一一のフレームをもつ八八の経営がかぞえられ、労働者は二一三人で、そのうち賃金労働者は四七人(二二・六%)、生産額は五四、四〇〇ルーブリであった。中位の温室栽培業者は、少なくとも三〇〇ルーブリを「事業」に投資しなければならなかった。戸別調査がおこなわれた七四人の経営主のうち、四一人は購入地をもち、ほぼ同数の人が借地をしている。一経営主あたり二・二頭

の馬がいる。このことから明らかなように、温室業は農民ブルジョアジーに属する人々だけがやれるものなのである。**

* 『生産力』、第四巻、五〇―五一ページ。エス・コロレンコ、前掲書、二七三ページ。『モスクワ県統計報告集』、第七巻第一冊。『トヴェーリ県統計報告集』、第八巻第一冊、トヴェーリ郡。ここでは、一八八六―一八九〇年の調査によると、一七四人の農民と七人の私的所有者が四、四二六以上のフレームをもっている――すなわち、一経営主あたり平均約二五フレーム――と、算定された。「農民経営では、それ（この営業）は大いに助けになるが、ただし富農にとってだけである。……温室が二〇フレーム以上になると、労働者がやとわれる」（一六七ページ）。

** 第五章の付録（巻末の付録I）、営業第九号におけるこの営業にかんする資料を見よ。

ロシアの南部では、営業的な瓜栽培もまた前述の種類の商業的農業のうちにはいる。『ヴェーストニク・フィナンソフ』（一八九七年、第一六号）所収の「西瓜の営業的生産」にかんする興味ある論文のなかで記述されている、ある地区でのこの生産の発展についての簡単な指摘を、引用しよう。この生産は、六〇年代の終りから七〇年代の初めにブィコヴォ村（アストラハン県ツァーレフ郡）におこった。その生産物は、はじめはヴォルガ沿岸地方にだけ送られていたが、鉄道の敷設とともに両首都に送られるようになった。八〇年代には、この事業の創始者が得た巨大な利益（一デシャチーナあたり一五〇―二〇〇ルーブリ）のおかげで、生産は「少なくとも一〇倍に増大した」。彼らは、正真正銘の小ブルジョアとして、新しい儲けの多い仕事の「秘密」を細心の注意を払って隣人から守りながら、生産者の数がふえるのを妨げようと、あらゆる努力をした。もちろん、「宿命的な競争」*を阻止しようとする「耕作百姓」**のこの英雄的努力はすべて徒労に終わり、生産は遠くサラトフ県にもドン地方にもひろまった。九〇年代の穀物価格の下落はこの生産に特別の刺激をあたえ、「この地方の農耕者は、苦境からの活路を輪作農法に求めることをよぎなくされた」***。生産の拡大は賃労働にたいする需要をいちじるしく高め（瓜畑の耕作には非常に多量の労働が必要で、一デシャチーナを耕すのに三〇―五〇ルーブリかかるほどである）、企業家の利潤と地代をさらにいっそう高めた。「ログ」駅（グリャージ＝ツァリーツィン鉄道）の周辺では、西瓜畑が一八八四年には二〇デシャチーナであったが、一八九〇年には五〇〇―六〇〇デシャチーナ、一八九六年には一、四〇〇―一、五〇〇デシャチーナになり、一デシャチーナあたりの地代は、上記の諸年に、三〇カペイカから一ルーブリ五〇カペイカ―二ルーブリに、さらに四―一四ルーブリにまで上昇した。作付の熱狂的拡大はついに一八

九六年には過剰生産と恐慌をもたらし、それらによって商業的農業のこの部門の資本主義的性格が最終的に確認された。西瓜の価格は、鉄道輸送費をつぐなわないほどにまで低落した。西瓜は収穫されずに畑にすてておかれた。巨額の利潤を味わった企業家たちは、今度は欠損をも知らされた。だがなによりも興味深いのは、彼らが恐慌とたたかうためにえらんだ手段である。その手段とは、新しい市場の獲得であり、この生産物が「ぜいたく品から住民の消費資料に」（また、その生産地では家畜の飼料にも）なるほどまで、生産物価格と鉄道運賃を安くすることであった。企業家たちは次のように断言している。「営業的瓜栽培はいっそうの発展途上にある。それがいっそう成長するのに、運賃以外に障害はない。それどころか、現在建設中のツァリーツィン＝チホレツカヤ鉄道は、営業的瓜栽培にとって新しい重要な地区を切りひらくであろう」。この「営業」のその後の運命がどのようなものであろうと、いずれにせよ、「西瓜恐慌」の歴史はきわめて教訓的であり、農業の資本主義的進化の、ささやかであるとはいえ、そのかわりきわめて鮮やかな光景をしめしている。

* ヴェ・ブルガーヴィン氏の表現。

** ロシアの農民にたいするニコライ―オン氏の表現。

*** 西瓜の作付には土壌をよく耕すことが必要であるが、それはあとで穀物を作付するさいに、土壌をより生産的にする。

近郊農業についてなおもう数言述べておこう。前述の種類の商業的農業と近郊農業との相違は次の点にある。すなわち、前者では経営全体がなにかある一つの主要な市場向け生産物に適応していた。ところが近郊農業の場合には、小農耕者があらゆるものを少しずつあきなっている。すなわち、自分の家も――それを夏季の居住者や常時の間借人に貸して――、自分の庭も、自分の馬も、自分の農業経営や屋敷内経営のあらゆる生産物も――穀物、家畜の飼料、牛乳、肉、野菜、いちご類、魚、木材、その他も――あきない、自分の妻の乳をもあきない（首都近郊の乳母）、また、やってくる都会人*に種々さまざまな（かならずしも言及することが適当ではないような）サーヴィスをすることで貨幣を手に入れる、その他等々。** 古い型の家父長制的農耕者の資本主義による完全な改造、「貨幣の権力」への彼らの完全な従属はこの場合まったく明白なので、ナロードニキはふつう近郊農民を、「もはや農民ではない」といって区別しているほどである。しかし、この型と既述のすべての型との相違は現象形態だけのことである。資本主義があらゆる方面で小農耕者にたいしておこなっている改造の政治的・経済的本質は、いつどこでもまったく同じである。都市の数、工場町や商工業町の数、鉄道の駅の数が急速に

ふえればふえるほど、わが「共同体員」のこの型の農民への転化も、それだけひろがってゆく。アダム・スミスがすでに言ったこと、すなわち、改良された交通路はあらゆる農村を近郊農村に変えようとするということを、忘れてはならない。*** 熊の出るような片田舎や辺地はいまではもう例外であって、日ごとにますます骨董的珍品になっており、そして農耕者は、商品生産の一般的法則に従属する営業者へと、ますます急速に転化しつつある。

* ウスペンスキー『農村日記』を参照。

** 例として、さきに引用したペテルブルグ郡の農民経済にかんする『資料』を引合いに出そう。多種多様な小商売がここでは種々の「営業」の形をとっている。すなわち、貸別荘、貸間、牛乳売り、野菜作り、いちご作り、「馬方」、乳母、えびとり、魚とり、等々。トゥーラ郡の近郊農民の営業もまったく同様である。『クスターリ工業調査委員会報告書』の第九冊所載のボリソフ氏の論文を見よ。

*** "Good roads, canals and navigable rivers, by diminishing the expense of carriage, put the remote parts of the country more nearly upon a level with those in the neighbourhood of the town". 〔「よい道路、運河および航行可能な河川は、運送費をへらすことによって、国の僻遠の地方を都市近辺の地方と同じ水準にする」〕(三)。前掲書、第一巻、二二八―二二九ページ。

これで商業的農業の発達にかんする資料の概観を終えるにあたって、ここで、われわれの課題は商業的農業の主要な(けっしてすべてのではなく)形態の研究にあったということを、くりかえして言っておくことはよけいなことではないと考える。

九　ロシアの農業における資本主義の意義にかんする結論

第二―第四章では、ロシアの農業における資本主義の問題が二つの側面から考察された。はじめわれわれは、農民経営と地主経営における社会経済関係の所与の構造――農民改革後の時代に形成された構造――を考察した。農民層が、農村プロレタリアートと、数は少ないが経済的地位の点では強力な農村ブルジョアジーとに、非常な速さで分解しつつあることがわかった。この「脱農民化」の過程と不可分に結びついて、地主が雇役経済制度から資本主義経済制度へ移行している。つぎにわれわれは、この同じ過程を別の側面からながめた。われわれは農業の商品生産への転化の形態を出発点としてとり、商業的農業の最も主要な各形態を特徴づける社会経済関係を考察した。農業の条件はきわめて多様であるにもかかわらず、この同一の過程が赤

い糸として農民経営と私有地経営を貫いていることがわかった。

さて、上述のすべての資料から得られる結論を考察しよう。

（一）農民改革後の農業進化の基本的特徴は、農業がますます商業的、企業家的性格を帯びてきているということにある。私有地経営については、この事実は特別の説明を必要としないほど明白である。ところが農民的農業については、この現象はそれほど容易には確認されない。なぜなら、第一に、賃労働の使用は農村小ブルジョアジーの無条件に必要な指標ではないからである。すでにさきに指摘したように、このカテゴリーにはいるのは、自分の支出を自立的経営で補塡するあらゆる小商品生産者で、しかも経営の一般的構造が第二章で考察された資本主義的諸矛盾を基礎としているという条件下にあるものである。第二に、農村小ブルジョアは（ロシアでも、他の資本主義諸国におけると同様に）、分割地「農民」や一片の土地を分与された農村プロレタリアートと、一連の過渡的諸段階をもって結びついている。この事情が、「農民層」のなかに農村ブルジョアジーと農民プロレタリアートとを区別しない理論がいまなお生きのびていることの理由の一つなのである。*

* なかでも、「ロシアの農民経済はたいていの場合、純現物経済である」というナロードニキ経済学者の好みの命題は、上述の事情の無視のうえに打ちたてられたものである（『収穫と穀物価格の影響』、第一巻、五二ページ）。農村ブルジョアジーと農村プロレタリアートとを混ぜあわせた「平均」数字をとりさえすればよい。そうすれば、この種の命題は証明されたようになるであろう！

（二）農業の本性そのものからして、それの商品生産への転化は、工業における同じ過程とはちがう独特の道をすすむ。製造工業は、もっぱら一つの生産物または生産物の一部分の生産にあたる、個々の完全に自立した部門に分裂する。ところが農産業は、完全に個々の部門には分裂しないで、ある場合にはある市場向け生産物に、他の場合には他の市場向け生産物の生産に専門化されるにすぎない。しかも農業のそれ以外の側面は、この主要な（すなわち、市場向け）生産物に順応させられるのである。だから、商業的農業の形態はきわめて多様であることを特徴とするのであって、異なる地区ごとだけでなく、異なる経営ごとにも、様相がちがっている。だから、商業的農業の成長という問題を考察するさいには、けっして農業生産全体にかんする概括的資料にとどまってはならない。*

* たとえば、まえの注にあげた書物の著者たちが「農民層」についてかたる場合に、彼らはまさにこのような資料にとどまっている。彼らの仮定では、各農民は自分の消費するほか

ならぬその穀物を作付し、自分の消費するすべての種類の穀物を作付し、それらの作付を、消費にあてられるほかならぬその比率でおこなうとされる。このような「仮定」（事実に反し、かつ農民改革後の時代の基本的特徴を無視するもの）から現物経済の優勢という「結論」をくだすためには、もはや特別の努力を要しない。

またナロードニキの文献では、次のような機知に富んだ議論の仕方に出あうことがある。——それぞれの個々の商業的農業は、総体としての農業全体にくらべれば、「例外」である。だから商業的農業全体も一般に例外とみなすべきであり、現物経済を一般的原則と認めるべきである！　中学の論理学教科書のなかの詭弁にかんする篇のなかに、このような議論に似たものを多数見いだすことができる。

（三）商業的農業の成長は資本主義のための国内市場をつくりだす。第一に、農業の専門化は種々の農業地区のあいだの、種々の農業経営のあいだの、種々の農業生産物のあいだの交換をひきおこす。第二に、農業が商品流通に引きこまれれば引きこまれるほど、個人的消費に役だつ製造工業の生産物にたいする農村住民の需要が、ますます急速に増大するし、——第三に、生産手段にたいする需要もますます急速に増大する。というのは、旧来の「農民的」用具、建物、その他等々をつかうのでは、農村の小企業家も大企業家も、新しい商業的農業をいとなむことができないからである。最後、第四に、労働力にたいする需要がつくりだされる。なぜなら、農村の小ブルジョアジーの形成、資本主義経営への地主の移行は、農業における雇農と日雇いの一隊が形成されることを前提とするからである。農民改革後の時代が、資本主義のための国内市場の拡大（資本主義的農業の発展、工場工業一般の発展、とくに農業機械製作業の発展、いわゆる農民の「農業的営業」すなわち賃仕事の発展、等々）を特徴とするという事情は、商業的農業の成長という事実によってはじめて説明することができる。

（四）資本主義は、農耕住民のあいだで、それなしには資本主義的生産様式が一般に存在しえないような諸矛盾を大いに拡大し、激化させる。しかしそれにもかかわらず、ロシアにおける農業資本主義は、その歴史的意義からすれば大きな進歩的力である。第一に、資本主義は、一方では「世襲領主的支配者」出身の農耕者を、他方では家父長制的な隷属農民を、現代社会における他のあらゆる経営主と同じような営業者に変えた。資本主義以前には、農業はロシアでは、ある者にとっては領主の仕事、殿様の遊びごとであり、他の者にとっては義務、貢納であった。だから、農業は長年の旧習によっていとなまれるほかはなく、必然的に農耕者を、その村の境界外の世界で起きるあらゆることとから完全に切りはなしていた。雇役制度——現代経済におけ

る旧時代のこの生きた遺物――は、右のような特徴づけを明白に確証している。資本主義は土地を商品に転化することによって、はじめて土地所有の身分的性格を断ちきった。農耕者の生産物は販売されるようになり、まず地方的市場で、つぎに全国的市場で、最後に国際市場で、社会的評価を受けるようになった。こうして、粗野な農耕者と自余の全世界との従来の断絶関係は最終的に打破された。農耕者は、好むと好まざるとにかかわらず、破滅しないためには、全世界市場によって結ばれている、自国および他の国々における社会関係の総体を、考慮に入れなければならなくなった。雇役制度――かつてはオブローモフに、自分ではなんの危険もおかさず、なんの資本支出もなさず、生産の古来の旧習をなんら変えることなしに、確実な収入を保障していた制度――でさえ、いまや、アメリカの農場経営者との競争から農耕者を救うことはできなくなった。まさにそうであればこそ、半世紀まえに西ヨーロッパについて述べられたこと、すなわち、農業資本主義は「牧歌的生活を歴史の運動のなかに投げこんだ原動力となった*」ということが、農民改革後のロシアにも完全にあてはまるのである。

* 『哲学の貧困』(パリ、一八九六年)、二二三ページ(三三)。著者は、楽しかった家父長制的生活、素朴な風習、等々の復活を心からねがい、「土地が他のすべての産業をも支配する諸法則に従属していること」を非難する人々の渇望を、軽蔑的に反動的な哀歌とよんでいる。

本文に述べた論証全体が、ナロードニキには、なにか信じられないものに、さらにはまったく理解できないものに見えるかもしれないことを、われわれは十分承知している。しかし、たとえば、土地の動産化は「異常な」現象である(穀物価格にかんする討論でのチュプロフ氏の発言、速記録、三九ページ)とか、農民分与地の譲渡禁止は擁護すべき制度であるとか、雇役経済制度は資本主義経済制度よりも良い、あるいは少なくともより悪くはないとか、等々の意見を詳細に検討することは、あまりにもありがたくない課題であろう。これまで述べたことはすべて、ナロードニキが右のような意見を正当化するのにもちいた経済学上の論拠にたいする論駁をふくんでいる。

第二に、農業資本主義は、わが国農業の長年の停滞をはじめて打ちやぶり、農業技術の改造、社会的労働の生産力の発展に巨大な刺激をあたえた。資本主義的「破壊」の数十年は、この点では、それ以前の歴史の数世紀よりも多くのことをなしとげた。旧慣保守的な現物経済の単調さに商業的農業の形態の多様さがとってかわった。原始的な農具は改良農具や機械に席をゆずりはじめた。旧来の農耕方式の不変性は新しい耕作方法によってくつがえされた。これらすべての変化の過程は、さきに述べた農業の専門化という現象と不可分に結びついている。農業における資本主義

は（工業におけると同じように）、その本性そのものからして、均等に発展することはできない。それは、あるところでは（ある国、ある地方、ある経営では）農業のある側面を前進させ、他のところでは他の側面を前進させる、等等。それは、ある場合にはある農作業の技術を、他の場合には他の農作業の技術を、家父長制的農民経済から、あるいは家父長制的雇役から切りはなすことによって、改造する。この全過程は、かならずしも生産者にさえわかっていない、気まぐれな、市場の要求にみちびかれて進行するのだから、資本主義的農業は、それぞれ個々の場合に（しばしば、それぞれ個々の地方で、ときにはそれぞれ個々の国においてさえ）、以前とくらべていっそう一面的なかたよったものになるが、しかしそのかわり、全体としては、それは家父長制的農業とはくらべものにならないほど多面的で合理的なものになる。商業的農業の特別の諸種類の形成は、農業における資本主義的恐慌と資本主義的過剰生産を、可能にし不可避にする。しかしこのような恐慌は（一般にすべての資本主義的恐慌と同じように）、世界的生産と労働の社会化との発展に、さらにいっそう強い刺激をあたえる。*

* 西欧のロマン主義者とロシアのナロードニキたちは、この過程のなかで資本主義的農業の一面性を、資本主義によってつくりだされる不安定と恐慌を、熱心に強調する。そしてそのことを基礎に、資本主義以前の停滞とくらべての資本主義的前進運動の進歩性を否定するのである。

第三に、資本主義はロシアに、機械の使用と労働者の広範な協業とにもとづく大規模農業生産を、はじめてつくりだした。資本主義以前には、農産物の生産は、農民が自分のためにはたらく場合でも、地主のためにはたらく場合でも、つねに、変化のない、みじめなほど小規模な形態でおこなわれていた。そして、土地所有のどんな「共同性」も、生産のこのはなはだしい細分状態を打ちくだくことはできなかった。このような生産の細分状態と不可分に結びついて、農耕者自身の細分状態があった。* 彼らは、自分の分与地に、自分の微小な「共同体」に縛りつけられていて、彼らが所属した部類の相違（以前の地主領農民、以前の国有地農民、等々）、彼らの土地所有の大きさの相違、彼らの解放がおこなわれた条件の相違（もっとも、これらの条件は、ときには、たんに地主の個人的性質や彼らの気まぐれによってきめられたこともあったのだが）によって、隣の共同体の農民とさえきびしく区分されていた。資本主義はこれらの純粋に中世的な障壁をはじめて粉砕した、――しかもその粉砕をみごとにやってのけた。すでに今日では、農民の諸部類間の相違、分与地所有別の農民の諸カテゴリ

ー間の相違は、各部類、各カテゴリー、各共同体の内部の経済的相違よりも、くらべものにならないほど重要でないものになっている。資本主義は地方的な閉鎖性と限界性を破壊し、そして農耕者の小さな中世的区分にかえて、資本主義経済の全体系のなかで異なる地位を占める諸階級への彼らの区別という、国民全体を包括する大きな区別をおく。** かつては生産の条件そのものが農耕者大衆を彼らの居住地に縛りつけていたが、いまや商業的および資本主義的農業の種々の形態と種々の地方の形成は、膨大な住民大衆の全国にわたる流動をつくりださずにはおかなかった。ところで住民の移動なしには（すでに指摘したように）、その自覚と自主性の発展はありえないのである。

* だから、マルクスがフランスの小農について述べたことは、土地所有形態の相違にもかかわらず、ロシアの農民にも完全にあてはまる。「小〈分割地〉農民はおびただしい大衆をなし、その成員は同じような事情のもとで生活していながら、たがいに多面的な関係を結ぶことがない。彼らの生産様式は、彼らをたがいに連絡させないで、たがいに孤立させる。この孤立は、フランスの交通手段が貧弱で農民が貧乏なため、いっそう助長される。彼らの生産の場（Produktionsfeld）である分割地は、その耕作に分業を適用したり科学を応用したりする余地をあたえず、したがって、多様な発展も、さまざまな才能も、ゆたかな社会関係も、生まれてくる余地がない。どの農民家族も、ほとんどみな自給自足していて、彼らの消費する品物の大部分を直接自分で生産しており、こうして彼らの生活資料を社会との交易によるよりも、むしろ自然との交換から得ている。ある分割地と農民とその家族があり、その横に別の分割地と農民とその家族がある。こういうものが五〇―六〇あると村になり、村が五〇―六〇あると県になる。こうして、フランス国民の大多数者ができあがる。ちょうど、一袋分のじゃがいもを合わせるとじゃがいも一袋となるようなものである」（『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』(二六)、ハンブルグ、一八八五年、九八―九九ページ）。

**「結合への、団結への欲求は、資本主義社会では、弱まるどころか、かえって測りしれないほど増大した。しかし、新しい社会のこの欲求をみたすために古い物差しをもちだすことは、まったくばかげている。この新しい社会はすでに、第一に、結合が地方的、身分的、位階的でないことを、第二に、結合の出発点が、資本主義と農民層の分解とによってつくりだされた、立場と利害の相違であることを、要求している」（ヴェ・イリイン、前掲書、九一―九二ページ、注(二七)）。

最後に、第四に、農業資本主義はロシアで、雇役と農耕者の人格的隷属をはじめて根こそぎにした。雇役経済制度は、『ルースカヤ・プラウダ』の時代から農民が自分の農具で私有の耕地を耕す現代にいたるまで、わが国の農業を完全に支配してきた。この制度の必然的な随伴物は農耕者

のしいたげられた粗野な状態であり、彼はこの労働の、農奴的性格でないとしても、「なかば自由」でしかない性格のため、いやしめられてきたのである。農耕者の市民権の一定の制限（たとえば、下層身分への所属、体罰、公共労役への奉仕、分与地への緊縛、等々）なしには、雇役制度はありえないであろう。だから、雇役を自由な賃労働でおきかえたことは、ロシアにおける農業資本主義の大きな歴史的功績である。* ロシアの農業資本主義の進歩的な歴史的意義について以上に述べたことを要約すれば、農業資本主義は農業生産を社会化しつつある、ということができる。実際に、農業が上層身分の特権あるいは下層身分の労役から普通の商工業的生業に転化したという事情も、農耕者の労働生産物が市場で社会的評価を受けるようになったという事情も、千篇一律の単調な農業が、技術的に改造された多様な形態の商業的農業に転化しつつあるという事情も、小農耕者の地方的閉鎖性と細分状態が打ちやぶられつつあるという事情も、また多様な形態の債務奴隷制と人格的隷属が、労働力の売買による非人格的な取引によって駆逐されつつあるという事情も――これはみな同じ一つの過程の環であり、この過程は、農業労働を社会化して、市場の変動の無政府性のなかの矛盾、個々の農業企業の個人的性格と資本主義的大農業の集団的性格とのあいだの矛盾を、ますます激化させているのである。

* わが国で生じている資本主義による破壊についての二コライーオン氏の数かぎりない愚痴と嘆息のうち、一つだけはとくに注目に値する。「……王侯貴族の乱脈もタタール人の支配も、わが国の経済生活の諸形態には手をふれなかった」（『概要』、二八四ページ）のに、資本主義だけが「自分自身の歴史的過去を蔑視する態度」（二八三ページ）をしめした。おかすべからざる真理である！「王侯貴族の乱脈」や「タタール人の支配」をもふくむどんな政治的激動も実際に打ちこわしえなかった雇役と債務奴隷制という、「古来の」、「長い歳月によって神聖化された」形態にたいして、「蔑視する態度」をしめしたというまさにそのことのゆえに、ロシアの農業における資本主義は進歩的なのである。

このように（もう一度繰りかえすが）、われわれは、ロシア農業における資本主義の進歩的な歴史的意義を強調しながらも、この経済体制の歴史的に過渡的な性格をも、それに固有の深刻な社会的矛盾をも、けっして忘れてはいない。それどころか、すでにしめしたように、資本主義によるこれらの矛盾をきわめて皮相的に評価して、農民層の分解を塗りかくし、わが国の農業における機械使用の資本主義的性格を無視し、「農業的営業」または「賃仕事」というような表現によって、農業の賃金労働者階級の形成をおおい

かくしているのである。

一〇　農業における資本主義にかんするナロードニキの理論。「冬期の解放」

資本主義の意義について以上に述べた積極的な結論を、この問題についてわが国の文献のなかでひろまっているいくつかの特殊な「理論」の検討によって、補足する必要がある。わがナロードニキたちは、たいていの場合、農業資本主義にかんするマルクスの基本的見解を消化することが全然できなかった。彼らのうちのより率直な人々はあっさりと、マルクスの理論は農業をとらえていないと言明した（ヴェ・ヴェ氏『われわれの方向』）。これにたいして、他の人々（ニコライ—オン氏のたぐい）は、マルクスの理論と自分の「構想」との関係という問題をずるかしこく避けることをえらんだ。ナロードニキ経済学者のあいだに最もよくひろまっているこのような構想の一つに、「冬期の解放」という理論がある。この理論の核心は次の点にある。*

資本主義制度のもとでは、農業は他の部門とは関連のない単独の産業部門になる。ところが、農業はまる一年ではなく、五—六ヵ月だけのものにすぎない。だから、農業の資本主義化は「冬期の解放」をもたらし、「農耕階級の労働時間は一労働年の一部分に局限」されることになる。そしてこれこそが、「農耕階級の経済状態の悪化」（ニコライ—オン氏、二二九ページ）、「国内市場の縮小」、社会の「生産力の浪費」（ヴェ・ヴェ氏）の「根本原因」である。

まさにこれが、きわめて広範な歴史＝哲学的結論を、農業では労働が一年全体に極度に不均等に配分されているというあの偉大な真理だけのうえに基礎づけている、かの名高い理論のすべてなのだ！　このような一つの特徴だけをとりあげ——抽象的な仮定によってそれをばかげた極限にまでもってゆき——、家父長制的農業を資本主義的農業に転化させる複雑な過程の他のすべての特殊性を捨象すること——これが、前資本主義的な「人民的生産」にかんするロマン主義学説を再建しようとするこの最新の試みの、素朴なやりかたなのである。

この抽象的な構想がどれほどひどく狭いものであるかをしめすために、現実の過程のうち、わがナロードニキたちがまったく見逃しているか、あるいは不十分にしか評価し

* ヴェ・ヴェ『理論経済学概論』、一〇八ページ以下。ニコライ—オン『概要』、二一四ページ以下。カブルーコフ氏にも同じような考えが見られる。『農業経済学講義』、モスクワ、一八九七年、五五ページ以下。

ていない側面を、簡単に指摘しよう。第一に、農業の専門化がすすめばすすむほど、農業人口はますます減少して、全人口のますます小さな割合を占めるようになる。ナロードニキたちはこのことを忘れている。ところが農業の専門化を、彼らは自分たちの抽象のなかでは、実際には農業がほとんどどこでも到達していない程度にまで、もってゆくのである。彼らは、穀物の作付や収穫という一つひとつの作業が、それだけで単独の産業部門になったと仮定している。土壌の耕作や施肥、生産物の加工や輸送、畜産、植林、建物や農具の修理、等々、これらがすべて単独の資本主義的産業部門に転化したとするのである。今日の現実にこのような抽象を適用しても、現実の解明にはほとんど役にたたない。第二に、農業のこのような完全な専門化という仮定は、農業の純粋に資本主義的な組織化、資本家的農場経営者と賃金労働者との完全な分離を条件とする。このような条件のもとで「農民」について論ずること（ニコライ―オン氏がやっているように、二一五ページ）は、不条理の極致である。農業の純資本主義的な組織化は、それはそれで、一年にわたって労働をより均等に配分すること（輪作、合理的畜産などの結果として）、多くの場合に農業と生産物の工業的加工とを結合すること、土地の予備的耕作のためにより大量の労働を充用すること、等々を前提する。*第三に、資本主義は農業企業と工業企業の完全な分離を前提する。しかしどうして、この分離が農業の賃労働と工業の賃労働との結合を許さないということになるであろうか？われわれはすべての発達した資本主義社会でその結合を見ている。資本主義は熟練労働者と単純労働者、不熟練労働者とを分離するが、この後者は、ある職業から他の職業へと移ったり、また、ある大企業に吸収されるかとおもうと失業者の隊列へ追いやられたりする。** 資本主義と大工業が強力に発展すればするほど、農業だけでなく工業でも、労働者にたいする需要の変動は一般にますます激しくなる。*** だから、資本主義の最大限の発展を仮定するのなら、われわれは、農業的職業から非農業的職業への労働者の移行がきわめて容易であると仮定すべきであり、また、あらゆる企業家が労働力を汲みだす一般的予備軍が形成されていると仮定すべきである。第四に、もしわれわれが現代の農業企業家をとりあげるなら、もちろん、彼らが経営に労働力を調達するうえでときには困難を経験することもあることは、否定できない。しかし、彼らには、労働者を自分の経営に縛りつける手段、すなわち、彼らに一片の土地その他を分与するという手段があることを、忘れてもならない。分与地をもつ雇農あるいは日雇いは、すべての資本主義国に普通に見られる型である。ナロードニキたちのおもな誤

りの一つは、彼らがロシアでも同様な型が形成されていることを無視している点にある。第五に、農耕者の冬期の解放という問題を、資本主義的過剰人口という一般的問題と切りはなして提起することは、まったくまちがっている。失業者の予備軍の形成は資本主義一般に固有のことであり、農業の諸特性はただこの現象の特殊な形態の条件であるにすぎない。だから、たとえば、『資本論』の著者は、「相対的過剰人口」****の問題に関連して、また「労働期間」と「生産時間」の区別にかんする特別の章（『資本論』、第二巻、第一三章）で、農業における労働の配分という問題に触れているのである。労働期間とよばれるのは、生産物が労働の作用を受けるあいだの時間のことである。そして生産時間とは生産物が生産過程にあるあいだの時間のことであって、これには生産物が労働の作用を受けていない期間もふくまれる。非常に多くの産業部門で労働期間は生産時間と一致しないが、そのなかにあって農業は最も典型的なものであるにすぎず、けっして唯一のものではない。†他のヨーロッパ諸国とくらべて、ロシアでは農業における労働期間と生産時間との差がとくに大きい。「資本主義的生産が〔……〕加工業と農業との分離を完成するようになると、農村労働者は偶然的でしかない副業にますますたよることとなり、こうして彼らの状態は悪くなる。資本にとっては……、回転におけるすべての相違が平均される。だが労働者にとってはそうではない」（前掲書、二二三―二二四ページ）。こうして、いま考察している点での農業の諸特性から出てくる唯一の結論は、農業労働者の状態は工業労働者の状態よりもいっそう悪いにちがいないということである。これと、冬期の解放が「農耕階級」(?!)の状態の悪化の「根本原因」であるというニコライ―オン氏の「理論」とは、いちじるしくかけはなれている。たとえわが国の農業の労働期間が一二ヵ月であっても、資本主義の発展過程は現在とまったく同じようにすすむであろう。相違点は、農業労働者の状態が工業労働者の状態にいくらか近づくということだけであろう。†*

* 根拠がないと言われないように、わが国の私有地経営で純粋に資本主義的な型に最も近い組織をもっている例をあげよう。オリョール県をとろう（『クローム郡ゼムストヴォ統計集』、第四巻第二冊、オリョール、一八九二年）。貴族フリュースチンの領地は、一一二九デシャチーナで、五六二デシャチーナが耕作されており、建物八棟とさまざまな改良農具がある。人工的牧草栽培。種馬場。家畜の繁殖。溝を掘り排水をして、沼地を干拓（「干拓は、大部分、農閑期におこなわれる」、一四六ページ）。労働者数は、夏は一日五〇―八〇人、冬は三〇人以下。一八八八年には八一人の労働者がいたが、そのうち二五人は夏だけの労働者であった。一八八九年

には一九人の大工がはたらいていた。――リボピエール伯爵の領地は三、〇〇〇デシャチーナで、一、二九三デシャチーナが耕作され、八九八デシャチーナは農民に貸してある。一二圃式輪作。肥料用泥炭の採掘、燐灰石の採取。一八八九年以来、三〇デシャチーナの実験圃場がつくられている。肥料の運搬は冬と春におこなわれる。牧草の栽培。森林の本格的な開発（一〇月から三月まで二〇〇―三〇〇人の木こりをやとっている）。牛の繁殖がおこなわれている。酪農業がいとなまれている。一八八八年には勤務者は九〇人で、そのうち三四人は夏だけの勤務者であった。――モスクワ県のメンシチコフの領地（『統計集』、第五巻、第二冊）は二三、〇〇〇デシャチーナである。労働力は、切取地との引換えおよび自由雇用による。林業経営。「夏は馬と常雇労働者はおおむね圃場ではたらくが、晩秋と部分的には冬には、彼らはじゃがいもと澱粉を乾燥場や澱粉工場に運び、森から薪を運びだして駅にもってゆく。これらのことのおかげで、労働は一年を通じてかなり均等に配分されている」（一四五ページ）。このことは、ひとつには、月別の作業日数の報告から明らかである。すなわち、馬の作業日数は月平均二九三で、変動は二二三（四月）から三六二（六月）までである。男子の作業日数は平均二一六で、変動は一二六（二月）から二七九（一一月）までである。女子の作業日数は平均二三で、変動は一三（一月）から二七（三月）までである。この現実は、ナロードニキがなでまわしているあの抽象と、似ているだろうか？

** 資本主義的大工業は渡り歩く労働者階級をつくりだす。それは農村人口から形成されるが、しかし主として工業労働に従事する。「これは資本の軽歩兵であって、資本の必要に応じてあるときはこの点に、あるときはあの点に投げこまれる。……移動労働はいろいろな建築工事、排水工事、レンガ製造、石灰焼、鉄道建設、等々に利用される」（『資本論』、第一巻、第二版、六九二ページ）[29]。「総じて鉄道のような大規模な企業は、労働市場から一定量の労働力を引きあげるが、それは……農業のような特定の部門からのみやってきうるのである」（前掲書、第二巻、三〇三ページ）[30]。

*** たとえば、モスクワ県の衛生統計では、同県の工場労働者は一一四、三八一人をかぞえた。これは現在数であって、最高は一四六、三三八人、最低は九四、二一四人であった（『一般的総括』……、第四巻、第一部、九八ページ）。パーセントでは、一二八％―一〇〇％―八二％である。資本主義は、全般的に労働者数の変動を大きくしながら、この点でも工業と農業との相違を均らすのである。

**** たとえば、イギリスの農業関係について、マルクスは次のように言っている。「農村労働者は、農業の中位の要求にたいしてはいつでも多すぎるし、例外的または一時的な要求にたいしてはいつでも少なすぎる」（『資本論』、第一巻、第二版、七二五ページ）[31]。こうして、恒常的な「相対的過剰人口」があるにもかかわらず、農村は人口が不足している。資本主義的生産が農業をとらえてゆくにつれて農村過剰人口が形成される、とマルクスは別の箇所で述べている。「農村人口の一部分はたえず都市人口またはマニュファクチュア人口への変態の過渡の状態にある」（前掲書、六六八ページ）[32]。人口のこの部分はたえず失業に苦しんでいる。彼らの就業は極

度に不規則であり、賃金はきわめて低い（たとえば、商店向けの家内労働など）。

† このさいマルクスの次の意見を指摘しておくことは、とくに有益であろう。農業でも、労働にたいする需要を「一年を通じて均等に配分する」方法がある。すなわち、より多様な生産物の生産、三圃式農法から輪作式農法への移行、根菜類の作付、牧草栽培、等々である。しかしこれらの方法はすべて、「生産に前貸しされる、すなわち賃金、肥料、種子、等等に投じられる、流動資本の増加を必要とする」（前掲書、二二五―二二六ページ）。[三三]

†* 「いくらか」といったのは、農業労働者の状態の悪化は、けっして労働の不規則性だけによるものではないからである。

このように、ヴェ・ヴェ氏やニコライ―オン氏の「理論」は、農業資本主義一般の発展という一般的問題についてさえ、まったくなんのたしにもならない。しかも、その理論は、ロシアの特殊性を解明しないどころか、かえってそれをあいまいにするものである。わが国の農民の冬期の失業は、資本主義のためであるというよりは、むしろ資本主義の発展が不十分なためである。われわれがすでに（この章の第四節で）賃金にかんする資料によってしめしたように、大ロシアの諸県のうちで、冬期の失業が最も激しいという点できわだっているのは、資本主義の発展が最も弱く雇役の優勢な諸県である。これもまったく当然である。雇役は労働生産性の発展をはばみ、工業と農業の発展をはばみ、その結果として労働力にたいする需要の増大をもはばんでいる。それと同時に、それは農民を分与地にしばりつけておいて、冬期の仕事をも、また自分のみじめな農業によって生きてゆく可能性をも、農民に保障しないのである。

二　つづき。――共同体。――小規模農業にたいするマルクスの見解。――現代の農業恐慌にかんするエンゲルスの意見

「共同体原理は資本が農業生産をとらえるのを妨げる」――ニコライ―オン氏は（七二ページ）、前述の理論とまったく同様に抽象的に構成されたもう一つの広く流布しているナロードニキ理論を、このように表現した。われわれは第二章で、この陳腐な前提のまちがいをしめす一連の事実を指摘しておいた。ここでは次のことをつけくわえよう。農業資本主義の発生自体にとっては一定の特殊な土地所有形態が必要だと考えることは、一般に誤りである。「これからはじまろうとする資本主義的生産様式がそこに見いだ

す土地所有の形態は、この生産様式に相応していない。それに相応する形態は、農業が資本のもとに従属することによってはじめて、資本主義的生産様式そのものによってつくりだされるのである。こうして、封建的土地所有も、氏族的所有も、あるいはまたマルク共同体*（Markgemeinschaft）をともなう小さな農民的所有も、たとえその法律上の形態がどんなに違っていようとも、この生産様式に相応する経済的形態に転化される」（『資本論』、第三巻第二冊、一五六ページ）[三三]。このように、問題の本質そのものからして、土地所有のどんな特殊性も、農業上、法律上、日常生活上のいろいろな条件に応じていろいろな形態をとる資本主義にとっては、克服できない障害とはなりえないのである。このことから、「共同体か、それとも資本主義か？」というテーマで一連の文献を創作したわがナロードニキの問題提起そのものが、どんなにまちがっているかを、知ることができる。あるイギリスびいきの貴族が農場経営をロシアに導入することについてのすぐれた著作に賞金を出すとか、ある学会が農民をフートル農民として散在させる企画を提案するとか、あるひまな官吏が六〇デシャチーナに耕地を区分する企画をつくるとかいうことがあったが、そのときナロードニキはすぐに手袋を投げて、挑戦して「資本主義を導入し」たり、「人民的生産」の守護神である共同体を破壊したりする、これらの「ブルジョア的企画」に反対するたたかいに突進するのである。ありとあらゆる企画がつくられては反論されているあいだに、資本主義は自分の道をすすみ、共同体的農村は小土地所有者の農村へと変わってゆくし、また変わってしまうことに、善良なナロードニキたちは思いもおよばなかったのである。**

* ほかの箇所でマルクスは、「共有地（Gemeineigentum）は〔……〕どこにおいても分割地〈小〉経営の〔……〕補足をなす」ことを指摘している（『資本論』、第三巻第二冊、三四一ページ）[三四]。

** われわれがこのような主張をするのは先走っていると言う人があるなら、それにたいしてわれわれは次のようにこたえよう。なにか生きている現象をその発展のうちに描きたいと望むものにとっては、先走るか、立ちおくれるか、というディレンマにおちいることは、不可避であり必然的である。そこには中間はない。ところで、社会的進化の性格がまさに上述のようなものであること、その進化がすでにはるかに進行していること（第二章を見よ）を、あらゆる資料がしめしているならば、またその場合、この進化を妨げている事情や制度（法外に高い貢税、農民の身分的閉鎖性、土地の動産化および移動と移住の完全な自由の欠如）が正確に指摘されるならば、その場合にはこのような先走りにはなんの誤りもない。

だからこそわれわれは、そもそも農民的土地所有の形態にかんする問題をきわめて冷淡にとりあつかうのである。

この土地所有形態がどうであろうと、そのことによっては、農民ブルジョアジーの農村プロレタリアートにたいする関係は、本質的にはすこしも変わらない。実際に重要な問題は、けっして土地所有形態に関係するのではなく、農民のうえにあいかわらず重くのしかかっている純中世的な旧習の遺物に関係するのである。すなわち、農民社会の身分的閉鎖性、連帯責任、私有地への課税とは比較を絶するほど法外に高い農民所有地への課税、農民所有地の動産化および農民の移動と移住の完全な自由の欠如が、それである。* これらすべての古びた制度は、農民層をなんら分解からまもることがなく、ただいろいろな形態の雇役と債務奴隷制をふやし、社会の発展全体を大きく阻止するだけである。

* ナロードニキがこれらの制度のいくつかを擁護していることのうちに、彼らをますます地主党に近づけるその見解の反動的性格が、とくに明瞭に現われている。

最後にわれわれはなおナロードニキの独創的な試みについて論じなければならない。彼らは、『資本論』第三巻におけるマルクスとエンゲルスのいくつかの言明を、大農業よりも小農業がすぐれているとか、農業資本主義は進歩的な歴史的役割を演じないとかいう自分たちの見解につごうよく解釈しようとしている。このようなもくろみのためにとくにしばしば引用されるのは、『資本論』第三巻の次の部分である。

「歴史の教訓は、農業をこれとは別なふうに考察することによって得られるのであるが、それは、資本主義体制は合理的な農業にさからうということ、あるいは、合理的な農業は資本主義体制と両立せず（後者は前者の技術的発展を促進するとはいえ）、それは自分で労働する（selbst arbeitenden）小農民の手か、または結合した生産者たちの統制かを必要とする、ということである」（第三巻第一冊、九八ページ。ロシア語訳、八三ページ[二六]）。

ところで、この主張（ついでに一言しておけば、これは、農業をとくに論じている第六篇にではなく、原料の価格変動がどのように利潤に影響するかを論じた章にたまたまあった、まったく独立の一断片である）からどんな結論が生ずるであろうか？ 資本主義が農業（ならびに工業）の合理的な組織と両立しないということ――これは早くから知られていることで、ナロードニキと論争が起こっているのはこの点についてではない。マルクスはここでは、農業における資本主義の進歩的な歴史的役割をとくに強調しているのである。残るところは、「自分で労働する小農民」にたいするマルクスの指摘である。この指摘を引合いに出したナロードニキのだれ一人として、この指摘をどんな意味に解釈するかを説明しようとしたものはないし、またこの

指摘を、一方では前後のつながりと関連させて、他方では小農業についてのマルクスの一般的学説と関連させて、提起しようとしたものはない。『資本論』からの右の引用箇所で問題になっていたのは、原料価格がどんなに激しく変動するか、この変動が生産の均衡性と規則性をどのように破壊し、農業と工業との対応をどのように破壊するかということである。マルクスはこの点でのみ──生産の均衡性、規則性、計画性という点でのみ──、小農民経営を「結合した生産者たち」の経営になぞらえているのである。この点では、中世的な小工業（手工業）もまた、「結合した生産者たち」[一三七]の経営と類似している（『哲学の貧困』、前掲版、九〇ページを見よ）が、しかし資本主義は、生産の無政府性という点で、これら二つの社会経済制度と相違している。いったいどのような論理によって、このことから、マルクスは小農業の生命力を認めていたとか、*彼は農業における資本主義の進歩的な歴史的役割を認めなかったとかいう結論を、引きだすことができるのだろうか？　マルクスはこの問題について、農業にかんする特別の章のなかの小農民経営の特別の節（第四七章第五節）で、まさに次のように述べている。

＊　エンゲルスは死の少しまえに、農業恐慌が価格の低落と結びついてはっきり現われたとき、小農業の生命力という教義にたいしていくらか譲歩したフランスの「弟子たち」に、断固として反対する必要があると考えたということを、思いおこそう。[一三八]

「分割地所有は、その性質上、労働の社会的生産力の発展、労働の社会的諸形態、資本の社会的集積、大規模な牧畜、科学の累進的応用を排除する。

高利貸付と租税制度とはどこでも分割地所有を貧困化せざるをえない。資本を土地価格に投ずることは、この資本を耕作から引きあげることになる。生産手段の無限の分散と、生産者そのものの無限の個別化。人間力の膨大な浪費。生産条件の累進的悪化と生産手段の高騰は、分割地所有の必然的な法則である。この生産様式にとっては豊作も不幸である」（第三巻第二冊、三四一──三四二ページ、ロシア語訳、六六七ページ）[一三九]。

「小土地所有が前提するのは、人口の圧倒的多数が農村人口であって、社会的労働ではなく孤立的労働が優勢だということであり、したがって、富も再生産の発展も、その物質的条件の発展も精神的条件の発展も、このような事情のもとでは排除されており、したがってまた合理的な耕作の条件も排除されているということである」[一四〇]（第三巻第二冊、三四七ページ、ロシア語訳、六七二ページ）。

これらの文章の筆者は、資本主義的大農業に固有の矛盾

に目をふさがなかったばかりでなく、逆に、仮借なくそれを暴露した。だがそのことは、彼が資本主義の歴史的役割を評価するのを妨げなかった。

「……資本主義的生産様式の大きな成果の一つは、それが、一方では農業を社会の最も未発展な部分のたんに経験的な、そして機械的に伝承されたやり方から農学の意識的科学的応用に、およそ私的所有とともにあたえられている諸関係のなかで可能なかぎりで、転化させるということであり、またそれが、土地所有を一方では支配-隷属関係から完全に解放し、他方では労働条件としての土地を土地所有からも土地所有者からもまったく分離する……ということである。……一方では農業の合理化がはじめて農業の社会的経営を可能にしたこと、他方では土地所有の不合理をしめしたこと、これは資本主義的生産様式の大きな功績である。この生産様式は、それがもたらした他のすべての歴史的進歩と同じように、この進歩をもさしあたりは直接生産者の完全な窮乏化によってあがなった」(第三巻第二冊、一五六一—一五七ページ、ロシア語訳、五〇九—五一〇ページ)(三二)。

マルクスの言明がこのように断固としている以上、農業資本主義の進歩的な歴史的役割という問題を彼がどう考えていたかということについて、二つの意見はありえないとおもわれるであろう。ところがニコライ—オン氏はもう一つ口実を見つけた。彼は、農業における資本主義の進歩的役割という命題をくつがえすに相違ないと彼にはおもわれた、現代の農業恐慌にかんするエンゲルスの見解を引用したのである。*

* 『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九六年第五号、二月、編集部あてのニコライ—オン氏の手紙、二五六—二六一ページ。そこには「歴史の教訓」についての「引用文」もある。ニコライ—オン氏も、また、現代の農業恐慌を拠りどころにして、農業における資本主義の進歩的な歴史的役割にかんする理論をくつがえそうと試みた数多くのナロードニキ経済学者のうちのだれ一人も、明確な経済理論にもとづいて率直に問題を提起したことは一度もなかったし、マルクスに農業資本主義の歴史的役割の進歩性を認めさせたその根拠を説明したことも、また、これらの根拠のうちのまさにどれを、まさにいかなる理由によって否定するかということを明確にしめしたことも、なかった。この場合にも、他の場合と同様に、ナロードニキ経済学者たちは、マルクスの理論にまっこうから反対しようとはしないで、「ロシアの弟子たち」にそれとなく罪をかぶせようとするにとどめている。われわれは、本書ではロシアの経済だけに限定しているが、この問題についてのわれわれの判断の諸契機はさきにあげておいた。

そもそもエンゲルスはどう言っているかを見よう。エンゲルスは差額地代にかんするマルクスの理論の主要な命題

を総括して、次のような法則を明らかにした。「土地に投じられる資本が多ければ多いほど、一国の農耕と文明一般との発展が高ければ高いほど、それだけ一エーカーあたりの地代も地代の総額もますます大きくなり、社会が超過利潤の形で大土地所有者に支払う貢ぎ物はますます大きくなる」(『資本論』、第三巻第二冊、二五八ページ。ロシア語訳、五九七ページ)。[34] さらにエンゲルスは言っている。「この法則は大土地所有者の階級の驚くべき生命の強靭さを説明する」。彼らは負債を重ねてゆくが、しかもなおどんな恐慌の場合にも「立ち直る」。たとえば、イギリスで穀物法が廃止され、穀物価格が低下したときに、地主は破滅しなかったばかりか、逆に非常に富裕になったのである。

だとすると、資本主義は土地所有という独占の力を弱めることができないようにおもわれるかもしれない。

「しかしすべては無常である」――とエンゲルスはつづける。――大洋を横断する汽船や南北アメリカやインドの鉄道は新しい競争者を出現させた。北アメリカのプレーリー、アルゼンチンのパンパスその他が安い穀物で世界市場をみたした。「そしてこの競争にたいしては――処女地の大草原地の競争にたいしても、租税の締め木で締めつけられているロシアやインドの農民の競争にたいしても――ヨーロッパの借地農業者と農民は昔からの地代ではやってゆけなかった。ヨーロッパでは土地の一部分は穀作では決定的に競争圏外に去り、地代はいたるところでさがり、われわれの第二例の変例II、すなわち価格がさがり追加投資の生産性が下がるというのが、ヨーロッパにとって常則となり、これがもとで、スコットランドからイタリアにいたる、また南フランスから東プロイセンにいたる、地主の苦難となったのである。さいわいにもまだすべての草原地帯が耕作されるまでにはなっていない。それはまだ、ヨーロッパの大土地所有の全部を破滅させなおそのうえに小土地所有をも破滅させるのに十分なだけ、残されている」(前掲書、二六〇ページ、ロシア語訳、五九八ページ、[34] ただし、「さいわいにも」ということばが落ちている)。

この箇所を読者が注意深く読めば、エンゲルスはニコライ―オン氏が彼に押しつけようとしているのとはまさに逆のことをかたっているということが、読者に明らかになるにちがいない。エンゲルスの意見によれば、現代の農業恐慌は地代を引きさげ、さらに、それをまったく廃絶しようとする傾きさえもっている。すなわち、農業資本主義は、土地所有の独占を廃絶しようとする、資本主義固有の傾向を実現しつつある。いや、わがニコライ―オン氏は、その「引用文」についてはまったく運が悪い。農業資本主義はさらに新しい巨大な前進をとげつつある。それは、一連の

新しい国々を世界の舞台に引きこみながら、農業生産物の商業的生産を限りなく拡大している。それは、家父長制農業をインドやロシアのような最後の隠れ家から駆逐している。それは、きわめて改良された機械を装備した労働者大衆の協業にもとづく純粋に工場的な穀物生産という、農業ではかつて見られなかったものをつくりだしている。それは、古いヨーロッパ諸国の状態を極度に悪化させ、地代を引きさげ、こうして、きわめて強固におもわれた独占をくつがえし、土地所有を、理論上だけでなく実践上でも、「不合理なものに」している。それは、農業生産の社会化の必然性という問題をまったく鮮明に提起したので、西欧では有産階級の人々さえこの必然性を感じはじめたほどである。* そしてエンゲルスは、彼独特の達者な皮肉さで世界資本主義の最近の歩みを歓迎している。彼は言う――事態が今後も同じようにすすむのに十分なだけの未開墾の草原が、さいわいにもまだ残っている、と。ところが、善良なニコライ―オン氏は、à propos de bottes〔見当違いにも〕昔ながらの「耕作百姓」にあこがれ、わが国の農業とあらゆる形態の農業債務奴隷制との「長い歳月によって神聖化された」停滞にあこがれている。そしてこれらの形態は、「王侯貴族の乱脈もタタール人の支配も」ゆるがすことができなかったのに、いまや――おお、恐るべし！――この怪物資本主義が決定的にゆるがしはじめた、というのである。O, sancta simplicitas！〔おお、聖者のような単純さよ！〕

＊ 実際、ドイツ国会における有名な Antrag Kanitz〔カニッツ提案〕[一四四] や、あるいはすべての穀物倉庫を国有にしようとするアメリカの農場経営者の計画のような「時代の象徴」は、なんと特徴的ではないか？

第五章　工業における資本主義の最初の諸段階

さて、農業から工業へ移ろう。われわれの課題は、ここでもまた、農業についてと同じように定式化される。われわれは農民改革後のロシアにおける工業の諸形態を分析しなければならない。すなわち、加工工業における社会経済関係の現在の構造とこの構造の進化の性格を研究しなければならない。工業の最も単純で原初的な諸形態から始めて、それらの発展をあとづけてゆこう。

一　家内工業と手工業

われわれは、原材料を採取するその同じ経営（農民家族）のなかでそれを加工するものを、家内工業と名づける。家内工業は、現物経済の不可欠の付属物であり、その遺物は小農民が存在するところにはほとんどつねに維持されている。だから、ロシアの経済文献のなかで、この種の工業（自家消費のための、亜麻、大麻、木材その他からの製品の家内製造）にたいする言及をしばしば見うけるのも、当然である。しかし、家内工業がいくらかでも広範にひろがってゆくのを確認しうるのは、現在では、まれな最も辺鄙な地方においてだけである。そのなかにはいるのは、たとえば、ごく最近までのシベリアである。この形態では、職業としての工業はまだ存在しない。工業はここでは農業と一体をなして不可分に結びついている。

家父長制的農業から分離する工業の最初の形態は、手工業、すなわち消費者の注文に応じての製品の生産である。*この場合、材料は注文者である消費者のものであることもありうるし、手工業者のものであることもありうるのであって、そして手工業者の労働にたいする支払いは、貨幣または現物（手工業者の衣食住の給与、生産物の一部分たとえば麦粉などによる報酬）でおこなわれる。手工業は、都市の生活の不可欠の構成部分であるが、農村でもかなり普及して、農民経済の補充物として役だっている。農村人口のいくらかのパーセントは、皮革、履物、衣服の製造、鍛冶仕事、家庭用織物の染色、農民用ラシャの仕上げ、穀物の製粉、等々に従事する（ときには専業として、ときには

農業との兼業として)、専門の手工業者から成っている。わが国の経済統計がきわめて不満足な状態にあるため、ロシアにおける手工業の普及の程度にかんする正確な資料はなにもない。しかし、工業のこの形態についての個々の指摘は、農民経済のほとんどすべての記述のなかに、いわゆる「クスターリ」工業の調査**のなかに散在しており、さらには官庁工場統計***のなかにさえ見られる。ゼムストヴォ統計集は、農民の営業を記録する場合に、ときには「手工業者」という特別のグループを区別しているが(ルドネフ、前掲書を参照)、そのなかには(ふつうの用語法にしたがって)あらゆる建築労働者が入れられている。経済学の観点からすれば、このような混同はまったく誤りである。なぜなら、建築労働者の大多数は、消費者の注文に応じて仕事をする独立の工業者にはいるのではなくて、請負業者に雇用される賃金労働者にはいるからである。もちろん、農村手工業者を、小商品生産者あるいは賃金労働者から区別することは、つねに容易であるとはかぎらない。そのためには、それぞれの小工業者にかんする資料を経済学的に検討することが必要である。手工業を小工業のその他の形態から厳密に区別しようとした注目すべき試みは、一八九四/九五年のペルミ県のクスターリ調査資料の整理である。****この地方の農村手工業者の数は農民人口の約一%と算定され、そのさい(予期されたように)手工業者のパーセントが最も高かったのは、工業の発展が最も弱いことを特徴とする諸郡においてであった。小商品生産者と比較して、手工業者は土地との結びつきがきわめて強いという特徴があり、一〇〇人の手工業者のうち八〇・六人が農耕者である(他の「クスターリ」にあっては、このパーセントはもっと低い)。賃労働の使用は手工業者のもとでも見うけられるが、この種の営業者のもとではその他のものにくらべてその発展が弱い。事業所の規模(労働者数による)も、手工業者にあっては同様に最も小さい。農耕をする手工業者の平均稼ぎ高は一年に四三・九ルーブリであり、農耕をしない手工業者のそれは一〇二・九ルーブリである。

* Kundenproduktion(顧客生産)。カール・ビュッヒャー『国民経済の成立』、テュービンゲン、一八九三年、を参照。

** 上述のことを確証する引用をここですることは、不可能であろう。というのは、手工業者は――最もひろく受けいれられている意見によれば――クスターリにははいらないにもかかわらず、あらゆるクスターリ工業の調査のなかに手工業にかんする多くの指摘があちこちにあるからである。この「クスターリ=チェストヴォ」「クスターリ経営」という術語が、どれほどひどくあいまいなものであるかは、これからさきたびたび見ることであろう。

*** この統計の支離滅裂な状態をとくに明瞭にしめすものは、

それが、手工業施設と工場施設とを区別する方法をいまにいたるまでつくりあげていない、という事実である。たとえば、六〇年代には、純粋に手工業的な型の農村染物業が後者に入れられていたし（『大蔵省年報』、第一巻、一七二―一七六ページ）、一八九〇年には、農民のラシャ晒し場がラシャ工場とまぜこぜにされていた（オルロフ『工場案内』第三版、二一ページ）、等々。このような混乱から、最新の『工場一覧表』（サンクト・ペテルブルグ、一八九七年）もまたまぬかれていない。私の『試論』、二七〇―二七一ページの例を参照。(三三)

*** われわれはこの調査の研究に、(三六)『試論』一一三―一九九ページ所収の特別の論文をあてた。本文で引用したペルミ県の「クスターリ」にかんする事実はすべて、この論文からとったものである。

われわれはこれらの簡単な指摘だけにとどめておこう。なぜなら、手工業の詳細な考察はわれわれの課題にははいっていないからである。工業のこの形態では、商品生産はまだ存在しない。ここでは、手工業者が貨幣で支払いを受けるか、あるいは、仕事の報酬として受けとった生産物の一部分を売り、原材料と生産用具を買う場合にのみ、商品流通が現われる。手工業者の労働生産物は、市場には現われず、農民の現物経済の領域外に出ることはほとんどない。* このため、当然、手工業は、小さな家父長制的農業と同じように、旧慣墨守と細分状態と狭隘さを特徴とする。工業のこの形態に固有な唯一の発展要素は、手工業者が他の地方へ出稼ぎにゆくことである。このような出稼ぎは、とくに以前にはわが国の農村でかなりひろく発展していた。ふつう、それは、出稼ぎにいった地方に独立の手工業事業所がつくりだされる、という結果をもたらした。

* 手工業が農民の現物経済に近い関係にあるので、しばしば、農民が村落全体のために手工業労働を組織しようと試みるようにもなる。すなわち、農民が手工業者に衣食住を供与し、かわりに彼らにその村落の全住人のために仕事をする義務を負わせるのである。いまでは、工業のこのような構造は例外的にしか、あるいは最も辺鄙な辺境にしか、見られない（たとえば、ザカフカーズのいくつかの農村では、鍛冶職人がこのようなしかたで組織されている。『ロシアにおけるクスターリ工業にかんする報告と調査』、第二巻、三二一ページを見よ）。

二　工業における小商品生産者。小営業におけるギルド的気風

われわれはすでに、手工業者が、自分の生産する生産物をもってではないが、市場に現われるということを指摘した。ひとたび市場と接触をもつようになると、当然、手工業者は時とともに市場むけの生産にも移ってゆき、すなわち商品生産者になる。この移行は漸次的におこなわれる。

はじめは試みとして、すなわち、偶然手もとに残った生産物か、あるいはひまなときにつくった生産物が売られる。製品の販売市場が当初はきわめて狭いため、この移行はそれだけいっそう漸次的である。だから、生産者と消費者のあいだの距離はほんのすこし増大するだけで、生産物は従来のように生産者の手から直接消費者の手に移るのであって、しかもそのさい、生産物の販売よりまえに生産物と農産物との交換がおこることもしばしばある。* 商品経済のいっそうの発展は、商業の拡大、買占商人という専門家の出現となって現われる。すなわち、製品の販売市場となるのは、農村の小さな市(いち)や定期市**ではなくて、州全体、のちには国全体であり、ときには他国であることさえある。商品としての工業生産物の生産は、工業の農業からの分離とそれらのあいだの相互交換に最初の礎石をおく。ニコライーオン氏は、彼特有の理解の紋切型と抽象性から、「工業の農業からの分離」を「資本主義」一般の特質として説明するだけで、この分離の種々異なる形態をも、資本主義の種種異なる段階をも、あえて分析しようとはしない。だから、この発展段階における営業者は多くのばあい農耕者からまだ分離していないとはいえ、農民的営業における最も小さな商品生産でさえすでに工業を農業から分離させはじめる、ということを指摘することは重要である。これからさきの叙述のなかでわれわれは、資本主義のより発展した段階が、どのようにして工業企業の農業企業からの分離を、工業労働者の農耕者からの分離をもたらすか、ということをしめすであろう。

* たとえば、陶器と穀物との交換など。安い穀物の場合には、その壺にはいるだけの穀物がその壺の等価とみなされた。――『報告と調査』、第一巻、三四〇ページ。――『ウラヂーミル県の営業』、第五巻、一四〇ページ。――『クスターリ委員会報告書』、第一巻、六一ページ、を参照。

** このような農村定期市の一つにかんする調査がしめしたところによると、定期市の総取引額の三一%(五万ルーブリのうち約一万五〇〇〇ルーブリ)がほかならぬ「クスターリ」生産物であった。『クスターリ委員会報告書』、第一巻、三八ページを見よ。小生産者にあっては販売市場がはじめどれほど狭いものであるかは、たとえば、ポルタワ県の靴工が自分の村落の周辺わずか六〇ヴェルスタばかりのところでしか製品を販売していないことからも、明らかである。『報告と調査』、第一巻、二八七ページ。

商品生産の萌芽形態のもとでは、「クスターリ」のあいだの競争はまだ非常に弱い。しかし市場が拡大し、広範な地域を包括してゆくにつれて、この競争はますます激しくなり、事実上の独占的な地位のうえに築かれていた小工業の家父長制的な安寧はみだされる。小商品生産者は、彼の利益が、残りの社会の利益とは対立して、この独占的な地

位の維持を要求することを感じとっている。だから彼は競争をおしとどめ、競争者を自分の領域に「はいらせない」ようにし、一定範囲の顧客をもつ小経営主の保証された地位を強固にしようとして、個人的にも、また集団的にも、あらゆる努力をはらう。競争にたいするこの恐怖は、小商品生産者の真の社会的本性を浮彫りにして明らかにしているので、われわれはこれにかんする事実にもうすこし詳しく立ちどまることを必要と考える。はじめに、手工業にかんする一例をあげよう。カルーガ県の羊皮鞣職人は、羊の皮をつくるために他の県に出かける。この営業は農奴制度の廃止後は衰微してきている。地主たちは、高い年貢をとって「羊の皮」に許可をあたえ、羊皮鞣職人が自分の「きめられた場所」をわきまえ、他の羊皮鞣職人が他人の領域にはいりこまないように、するどく監視した。このように組織された営業は非常に有利であったので、「仕事台」が五〇〇ルーブリとか一、〇〇〇ルーブリで譲渡され、また他人の領域へ手工業者がはいりこむと、しばしば流血の衝突が起きたほどであった。農奴制度の廃止は、この中世的な安寧を打ちこわした。「鉄道による移動の便宜もまたこのばあい競争を助長する」*。多くの営業にとって確認され、一般的原則としての性格を積極的にもつ、小営業者の志向、すなわち、「破滅的な競争」を許さないために技術上の発明や改良を秘密にし、有利な職業を他人にかくそうとする志向も、同種の現象のうちにはいる。新しい営業の創始者とか、あるいは古い営業になんらかの改善をとりいれたものは、全力をつくして有利な職業を同村人からかくそうとし、そのためにさまざまな奇策を弄し（たとえば、人の目をそらすために事業所のなかに古い設備を残しておく）、自分の作業場にはだれも入れず、屋根裏部屋ではたらき、生産については実の子にすらなにも知らせない**。モスクワ県におけるブラッシ製造業の緩慢な発展は、「ふつう、現在いる生産者が新しい競争者をもつことをのぞまないことによって説明されている。彼らはできるだけ自分の作業を局外者には見せないようにつとめ、外部の徒弟をやとっている生産者はたった一人しかいない」、といわれるほどである***。金属工業で有名なニジェゴロド県ベズヴォードノエ村については、次のように書かれている。「注目すべきことには、ベズヴォードノエ村の住民は今日まで」（すなわち、八〇年代の初めまで——この営業は五〇年代の初めから存在している）「自分の技術を近隣の農民から注意深くかくしている。彼等は、技術を他の村につたえたものに刑罰を課すように郷役場で宣告しようと、一度ならず試みた。しかしこの形式をうまくととのえることはできなかったが、しかしこの宣告は彼らの一人ひとりをあたか

も精神的に圧迫しており、そのため彼等は自分の娘を近隣の村の求婚者にはやらず、またできることならよそからは嫁をもらわないことにしている」。****

* 『クスターリ委員会報告書』、第二巻、三五―三六ページ。

** 以下を参照。『クスターリ委員会報告書』、第二巻、八一ページ、第五巻、四六〇ページ、第九巻、二五二二六ページ。――『モスクワ県の営業』、第六巻第一冊、六―七ページ、二五三ページ。第六巻第二冊、一四二ページ、第七巻第一冊、第二部「印刷業」の創始者について。――『ウラヂーミル県の営業』、第一巻、一四五、一四九ページ。――『報告と調査』、第一巻、八九ページ。――グリゴリエフ『パヴロヴォ地区の錠前＝小刀のクスターリ生産』（出版物『ヴォルガ』の付録、モスクワ、一八八一年）、三九ページ。――ヴェ・ヴェ氏は、彼の『クスターリ工業概説』（サンクト・ペテルブルグ、一八八六年）一九二ページ以下で、これらの事実のいくつかをあげている。彼はここから、クスターリも革新を避けないということだけ結論している。彼には、これらの事実が現代社会における小商品生産者の階級的立場と階級的利益とを特徴づけるものであることが、考えおよばないのである。

*** 『モスクワ県の営業』、第六巻、二および一九三ページ。

**** 『クスターリ委員会報告書』、第九巻、二四〇四ページ。

ナロードニキ経済学者たちは、多くの小農民的営業者が商品生産者に属しているという事実をあいまいにしておこうと努力しただけでなく、小農民的営業と大工業の経済組織のあいだにはあたかも深刻な対立があるかのようにいうまったくの伝説までつくりあげた。ともあれ、このような見解が成りたたないことは、さきにあげた資料からも明らかである。大きな工業家はその独占をまもるためにどのような手段をとることも辞さないが、「クスターリ」農民もこの点では大きな工業者の血を分けた兄弟である。ただ、大工場主が、保護関税制度、奨励金、特権、その他を渇望して擁護しようとしている、その本質的には同じ階級的利益を、小ブルジョアは、ちっぽけな手段で固守しようとしているだけである。*

* 小ブルジョアは競争が彼を破滅させることを感じて、それを妨げようとつとめる。それとまったく同じように、そのイデオローグとしてのナロードニキは、資本主義が彼の心から愛する「基盤」を打ちこわすのを感じている。そこで彼らは、「予防」したり、認めなかったり、阻止したり、その他等々つとめるのである。

三　農奴解放後の小営業の成長。この過程の二つの形態とその意義

以上に述べたことからさらに、次のような注目に値する

小生産の特質が出てくる。新しい営業の出現は、すでに指摘したように、社会的分業の成長の過程を意味する。だから、このような過程は、農民層と半現物経済的農業がまだなんらかの程度で維持されているかぎり、また、昔のさまざまな制度や伝統（悪い交通路その他と結びついた）のため、機械制大工業が直接に家内工業にとってかわるのが妨げられているかぎり、必然的にどの資本主義社会にも存在せざるをえない。商品経済の発展におけるどのような一歩も、不可避的に、農民層が自分自身のなかからつぎつぎに新しい工業者を生みだしてゆくことになるであろう。この過程は、いわば新しい土地を掘りおこし、国の最もおくれた部分あるいは最もおくれた産業部門のなかに、やがて資本主義がつぎつぎにとらえてゆく新しい分野を準備する。資本主義のこの同じ成長は、国の他の部分あるいは他の産業部門では、まったくちがう形で現われる。それは、作業場や家内労働者の数の増大としてではなく、減少として現われ、これらの作業場や家内労働者は工場によって呑みこまれてゆく。ある国の工業における資本主義の発展を研究するためには、これらの過程をきわめて厳密に区別しなければならないのは、いうまでもない。それらの混同は概念の完全な混乱にみちびかないではおかない。*

＊　同じ県で、同じ時期に、同じ営業で、これら二つの異なる過程が同時に起こっている興味ある例がある。紡ぎ車製造業（ヴャトカ県の）は、織物の家内生産の補足物である。この営業の発展は、織物の生産用具の一つの製造をとらえる商品生産の発生を意味する。そして、われわれが見るように、県の僻地、県の北部では、紡ぎ車はほとんど知られておらず（『ヴャトカ県の営業の記述にかんする材料』、第二巻、二七ページ）、そこでは、「この営業があらたに発生するかもしれない」、すなわち、農民の家父長制的な現物経済に最初のひびを入らせるかもしれないのである。ところが、県の他の部分では、この営業がすでに衰退しつつあり、そしてその原因はおそらく、「農民層のあいだにますます普及している工場製綿織物の使用」にあると、調査者は考えている。したがって、ここでは、商品生産と資本主義との成長が、すでに工場による小営業の駆逐となって現われているのである。

農民改革後のロシアで、資本主義の発展の最初の一歩をあらわす小営業の成長は、二とおりのしかたで現われたし、いまも現われている。第一には、小営業者と手工業者が、中央の、以前から人が多く住んでいて、経済の点で最も発展した諸県から、辺境に移住するというようにして、第二には、地方住民のなかで、新しい小営業が形成されたり、また、以前からあった営業が拡充されたりするというようにして、である。

これらの過程の第一をなすのが、さきにすでにしめした（第四章第二節）あの辺境の植民の現れの一つである。二

ジェゴロド、ウラヂーミル、トヴェーリ、カルーガ等々の諸県の農民営業者は、人口の増加にともなう競争の激化と、小生産をおびやかす資本主義的マニュファクチュアや工場の成長を感じとって、「職人」がまだ少なく、稼ぎが高くて暮しが安い南部へ出かけてゆく。新しい場所に小さな事業所が創設され、国が新しい農民的営業に端緒をあたえ、この後者がついでこの村落とその周辺へひろまっていった。長年の工業文化をもつ国の中心部は、このようにして、国内の、人が住みはじめた新しい部分におけるその同じ文化の発展を促進した。資本主義的関係（以下に見るように、農民的小営業にも固有な）は、このようにして全国におしおよぼされていった。*

* たとえば、労働者の一部がすでに定住している辺境への工業労働者の移動についての、エス・ア・コロレンコの前掲書を見よ。『クスターリ委員会報告書』、第一冊（中央諸県からスタヴローポリ県に来た営業者の優勢について）、第三冊三四ページ（ニジェゴロド県の長靴製造業者のヴォルガ下流の諸都市への移住）、第九冊（同県ボゴローツコエ村の皮革業者はロシア全土に工場をつくった）。『ウラヂーミル県の営業』、第四冊、一三六ページ（ウラヂーミルの製陶業者は自分の生産をアストラハン県に移した）。『報告と調査』、第一巻、一二五、二一〇ページ、第二巻、一六〇—一六五、一六八、二二二ページ、を参照。大ロシアの諸県から「南部全体へ」来た営業者の優勢についての一般的な指摘。

上述の過程の第二のものをあらわす事実に移ろう。小さな農民事業所や小営業の成長を確認するにさいして、われわれはさしあたってはそれらの経済組織の問題にはふれないことを、あらかじめ断っておこう。あとで、これらの営業が、資本主義的単純協業と商業資本の形成にむかうか、そうでなければ資本主義的マニュファクチュアの構成部分となることが、明らかになるであろう。

ニジェゴロド県アルザマス郡の毛皮精製業は、アルザマス市でおこり、それからしだいに都市周辺の村落に移り、ますます大きな地域をとらえていった。はじめは村に少数の毛皮匠しかいなかった。彼らのもとには賃金労働者が大勢いた。働き手は安かった。というのは、見習いのためにやとわれたのだからである。見習いが終わると、彼らは分かれ分かれになって自分の小事業所をひらいた。このようにして彼らは、現在では営業者の大部分を従属させている資本の支配のために、より広範な基盤を準備したのである。*

一般的に指摘しておけば、発生しつつある営業の最初の事業所に賃金労働者がこのようにたくさんいること、ついで彼らが小経営者に転化してゆくことは、一般的原則の性格をもつきわめて広く普及した現象である。** 「さまざまな歴史的考量にもかかわらず、大企業が小企業を併呑するので

〔第 78 表〕

事業所総数	設立された事業所の数								
	年代不明	ずっと以前	19世紀						
			10年代	20年代	30年代	40年代	50年代	60年代	70年代
523	13	46	3	6	11	11	37	121	275

はなく、小企業が大企業から成長してくる」***という結論をここから引きだすことは、明らかに大きな誤りであろう。初期の事業所が大きな規模のものであることは、けっして営業のどのような集積をもあらわすものではない。それは、これらの事業所がまれにしかないものであり、また周辺の農民がこれらの作業場で有利な営業を見習いたいと熱望することによるものである。農民的営業がその古い中心地から周辺の農村に普及してゆく過程についていえば、この過程は非常に多くの場合に見うけられる。たとえば、農民改革後の時代に、その意義において傑出した（営業が普及した村落の数でも、工業者の数でも、生産額でも）次のような営業が発展した。すなわち、パヴロヴォの鉄鍛冶業、キムルィ村の皮革＝製靴業、アルザマス市およびその周辺の靴編み業、ブルマキノ村の金物製造業、モルヴィチノ村とモルヴィチノ地区の帽子製造業、モスクワ県のガラス、帽子およびレース製造業、クラースノエ・セロ地区の宝石細工業、等々である。****トゥーラ郡の七つの郷におけるクスターリ営業について書いた論文の筆者は、「農民改革後の手工業者の数の増大」、「農民改革以前の時期にはそれらがなかったような地方におけるクスターリと手工業者の出現」を、一般的な現象として確認している。†モスクワ県の統計もまたこれと同じような意見を述べている。†*われわれは、モスクワ県の一〇の営業における五二三のクスターリ事業所の発生の時期にかんする統計資料によって、この意見を裏書きすることができる。†**〔第七八表〕

* 『クスターリ委員会報告書』、第三巻。

** たとえば、同じ現象は、モスクワ県の染色業（『モスクワ県の営業』、第六巻第一冊、七三―九九ページ）、帽子製造業（同、第六巻第一冊）、毛皮製造業（同、第七巻第一冊、第二部）、パヴロヴォの鉄鍛冶業（グリゴリエフ、前掲書、三七―三八ページ）、その他のなかで確認されている。

*** ヴェ・ヴェ氏は『資本主義の運命』七八―七九ページで、上記の性格の事実の一つについて、すぐさまこのような結論をくだした。

**** ア・スミルノフ『パヴロヴォとヴォルスマ』、モスクワ、

一八六四年。——エヌ・ラプジン『ナイフ工業の調査……』、サンクト・ペテルブルグ、一八七〇年。——グリゴリエフ、前掲書。——エヌ・アンネンスキー『報告と……』、『ニジェゴロド航運・工業時報』、一八九一年第一号所載。——ゴルバートフ郡にかんするゼムストヴォ統計の『材料』、ニジニー・ノヴゴロド、一八九二年。——ア・エヌ・ポトレソフ、一八九五年貸付貯蓄組合委員会サンクト・ペテルブルグ支部における報告。——『ロシア帝国統計時報』、第二巻第三冊、サンクト・ペテルブルグ、一八七二年。——『クスターリ委員会報告書』、第八巻。——『報告と調査』、第一巻、第三巻。——『クスターリ委員会報告書』、第六巻、第一三巻、——『モスクワ県の営業』、第六巻第一冊、一一一ページ、同、一七七ページ。第七巻第二冊、八ページ。——『ロシアにおける工業の歴史的＝統計的概観』、第二巻、第六章、1。——『ヴェーストニク・フィナンソフ』一八九八年第四二号。また、『ウラヂーミル県の営業』、第三巻、一八—一一九ページ、その他を参照。

†『クスターリ委員会報告書』、第九巻、二三〇三—二三〇四ページ。

†*『モスクワ県の営業』、第七巻第一冊、第二部、一九六ページ。

†** ブラッシ製造業、ピン製造業、ホック製造業、帽子製造業、澱粉製造業、靴製造業、眼鏡製造業、鋼製馬具製造業、ふさ製造業および家具製造業にかんする資料は、『モスクワ県の営業』および同じ題名のイサーエフ氏の著書に引用されているクスターリ戸別調査からえらびだしたもの。

まったく同様に、ペルミ県のクスターリ調査は（八、八八四の小規模の手工業事業所とクスターリ事業所の発生の時期にかんする資料について）、農民改革後の時代が小営業のとくに急速な増大を特徴とする、ということを明らかにした。新しい営業のこの発生過程をもっと詳細に見るのは、興味あることである。ウラヂーミル県における羊毛および半絹の布地の生産業は、つい最近、一八六一年におこった。はじめ、この生産業は出稼ぎ営業であったが、のちに、農村にも紡糸をくばってあるく「親方」が現われてくる。初期の「工場主」の一人は、あるときは、タンボフやサラトフの「ステップ」でひきわりを買いしめ、それをあきなっていた。鉄道が敷設されるとともに、穀物価格が平準化し、穀物取引は百万長者の手に集中された。そこで、わが商人は自分の資本を織物工業企業のために利用しようと決心した。彼は工場にはいり、事業に習熟し、「親方」に転身した。* このように、この地方における新しい「営業」が形成されるようになったのは、国の全般的な経済的発展が資本を商業から駆逐して工業のほうに向かわせたためである。** いま例としてあげた営業を調査した人は、彼が記述した事例がけっしてまれなものではないと、指摘している。すなわち、出稼ぎ営業で生計を立てていた農民は、「ありとあらゆる営業の先駆者であり、自分たちの技術的

知識を生まれ故郷の農村にもちこみ、出稼ぎに来る新しい労働力をつれこみ、営業が機小屋の持ち主や親方にもたらすお伽話のような利益のことを話してきかせて、金持の百姓をあおりたてた。金を金櫃にためこんだり穀物取引に従事したりしていた金持の百姓は、この話に注目し、工業企業にのりだした」（前掲書）。ウラヂーミル県アレクサンドロフ郡の靴製造業とフェルト製造業は、いくつかの地方では次のようにしておこった。すなわち、キャラコの機小屋や小さな集散所の経営者たちは、手織機業の衰微を見て、べつの生産業の作業場をつくり、事業に習熟してそれを子供に習得させるために、ときには職人をやとったりした。***大工業が小資本を一つの生産業から追いだすにつれて、この資本はべつの生産業にむけられて、その生産業に同じ方向での発展の刺激をあたえるのである。

* 『ウラヂーミル県の営業』、第三巻、二四二—二四三ページ。

** エム・イ・トゥガン－バラノフスキーは、ロシアの工場の歴史的運命にかんする研究のなかで、商業資本は大工業の形成にとって不可欠な歴史的条件であることをしめした。彼の著書『工場と……』、サンクト－ペテルブルグ、一八九八年を見よ。

*** 『ウラヂーミル県の営業』、第二巻、二五および二七〇ページ。

農村で小営業の発展をひきおこした農民改革後の時代の一般的条件は、モスクワ県の営業の調査者によってきわめてくっきりと特徴づけられている。「一方では、この時期に、農民生活の条件はいちじるしく悪化したが、他方では、住民の——より恵まれた条件のもとにある部分の——欲望はいちじるしく増大した＊」と、レース製造業の記述のなかに書かれている。そしてこの筆者は、彼がとりあげた分野にかんする資料によって、多くの馬をもつ農民の数の増加および農民のもつ家畜総頭数の増加とならんで、馬をもたないものおよび穀物耕作に従事しないものの数が増大していることを、確認している。このように、一方では、「よそでの賃仕事」を必要とし、営業的な仕事をさがす人々の数が増大し、他方では、少数の富裕な家族が富み、「貯え」をつくり、「労働者を一人また一人とやとったり、あるいは貧農に家内仕事を下請けさせたりする可能性」を得た。そして筆者はこう説明している。「ここではわれわれは、もちろん、このような家族のあいだからクラーク〔富農〕、ミロエード〔寄生者〕という呼び名で知られる人物が発展してくるような事例にはふれないで、ただ、農村住民のあいだにある最もありふれた現象だけを考察しているのである」。

* 『モスクワ県の営業』、第六巻第二冊、八ページ以下。

このように、地方の調査者たちは、農民層の分解と農民的小営業の増大とのあいだの関連を指摘している。そしてこのことはまったく当然である。第二章で述べた資料から、農耕農民層の分解は農民的小営業の成長によって補われなければならなかった、という結論が出てくる。現物経済の衰退につれて、いろいろな原料加工はつぎつぎに工業の個別部門に転化していった。農民ブルジョアジーと農業プロレタリアートの形成は、農民的小営業の生産物にたいする需要を増大させ、それと同時に、これらの営業にとっての自由な働き手と自由な資金を提供したのである。*

* 「営業の資本主義化」にかんする議論におけるニコライ―オン氏の基本的な理論上の誤りは、彼が継起的諸段階における商品生産と資本主義との最初の歩みを無視していることにある。ニコライ―オン氏は、「人民的生産」から「資本主義」へ直接に飛躍している。そうしておいて、彼のとらえる資本主義は基盤のないもの、人為的なもの、等々として、笑うべき素朴さで驚くのである。

四　小商品生産者の分解。モスクワ県におけるクスターリ戸別調査の資料

こんどは、工業における小商品生産者のあいだでつくりあげられる社会経済関係がどのようなものであるかを見よう。この関係の性格を規定する課題は、さきに第二章で小農耕者にかんして提起された課題と同種である。農業経営の規模のかわりに、われわれはこんどは、営業的経営の規模を基礎としてとらなければならない。すなわち、小工業者をその生産の規模によって分類し、各グループにおける賃労働の役割、技術の状態、等々を考察しなければならない。* このような分析に必要なクスターリ戸別調査を、われわれはモスクワ県についてもっている。** 一連の営業について、調査者は、各個のクスターリの生産にかんする、ときにはさらに農業にかんする正確な統計資料(経営創立の時期、家族労働者と賃金労働者の数、年生産額、クスターリのもつ馬の頭数、土地の耕作方法、等々)をあげている。そのさい調査者はどのようなグループ別の表をもあたえていないので、われわれは自分でそういう表をつくらなければならなかった。各営業のクスターリを、一経営あたりの労働者数(家族労働者と賃金労働者の)によって、ときには生産の規模や技術装置等々によって、等級(I――下級、II――中級、III――上級)に分けた。一般に、クスターリを等級に分けるための根拠は、営業についての記述に引用されたすべての資料にしたがってきめられた。そのさい、営業が異なればクスターリを等級に分けるのに異なる根拠

を採用しなければならなかった。たとえば、非常に小さな営業では、下級には労働者一人をもつ経営を、中級には二人をもつものを、上級には三人以上をもつものを入れたが、より大きな営業では、下級には労働者一―五人をもつものを、中級には六―一〇人をもつものを入れた、等々である。異なる分類方法をとることなしには、われわれは異なる大きさの経営にかんする資料を各営業ごとにしめすことはできなかったであろう。このようにして作成された表は、付録におさめてある（付録Iを見よ）。その表では、どのような標識によって各営業のクスターリが等級に分けられたかがしめされている。また、各営業における各等級について、事業所、労働者（家族労働者と賃金労働者をあわせて）、生産額、賃金労働者のいる経営、賃金労働者の絶対数があげられている。また、クスターリの農業を特徴づけるために、各等級における一経営主あたりの馬の平均頭数と、「働き手」によって土地を耕作する（すなわち、農業労働者の雇用にたよる）クスターリのパーセントが算出されている。この表は、二、二七八の事業所、一一、八三三人の労働者、および五〇〇万ルーブリ以上の生産額をもつ全部で三七種***の営業を包括しているが、資料が不完全であったり例外的な性格のものであるために一般的総括から除かれている四つの営業を差しひくと、全部で三三の営業、二、〇八五の事業所、九、四二七人の労働者、三四六万六〇〇〇ルーブリの生産額、修正（二つの営業について）すると約三七五万ルーブリの生産額、となる。

* ヴァルゼル氏は、チェルニーゴフ県の「クスターリ」工業を記述したさいに、「経済単位の多様性」（一方における、五〇〇―八〇〇ルーブリの収入の家族、他方における、「乞食同然のもの」）を確認して、次のような指摘をしている。「このような条件のもとでは、経営の戸別調査と、それらの経営をあらゆる経済状態をもついくつかの数の平均的な経営タイプに分類することとが、クスターリの経済生活の姿を完全にえがく唯一の方法である。他のあらゆる方法は、あるいは偶然的印象の幻想であるか、あるいは異なる種類の平均的基準にもとづく算術的計算という書斎仕事である……」（『クスターリ委員会報告書』、第五巻、三五四ページ）。

** 『モスクワ県統計資料集』、第六および第七巻、『モスクワ県の営業』、およびア・イサーエフ『モスクワ県の営業』、モスクワ、一八七六―一八七七年、全二巻。少数の営業については、同じような報告が『ウラヂーミル県の営業』のなかにものっている。いうまでもなく、われわれはこの章では、――少なくとも非常に多くの場合――小商品生産者が買占人のためにではなく市場のために仕事をしているような営業だけを、考察するにとどめている。買占人のための仕事はより複雑な現象であって、それについてはわれわれはあとで特別に考察する。買占人のために仕事をするクスターリの戸別調査は、小商品生産者たちのあいだの関係について判断するに

a）賃金労働者をもつ事業所の％ b）賃金労働者の％				平均生産額（ルーブリ） a）1事業所あたり b）1労働者あたり				1事業所あたりの平均労働者数 a）家族労働者 b）賃金労働者 c）合　計			
全体	等級別			全体	等級別			全体	等級別		
	I	II	III		I	II	III		I	II	III
								1.9	1.28	2.4	3.3
12	2	19	40	430	243	527	1,010	0.2	0.02	0.2	1.2
11	1	9	27	202	182	202	224	2.1	1.3	2.6	4.5
								2.5	1.9	2.9	3.7
41	25	43	76	1,484	791	1,477	3,291	1.0	0.3	0.8	3.0
26	13	21	45	415	350	399	489	3.5	2.2	3.7	6.7
								2.4	2.0	2.7	2.3
64	35	95	100	2,503	931	2,737	8,063	3.7	0.8	3.9	14.9
61	25	59	86	411	324	411	468	6.1	2.8	6.6	17.2
								2.1	2.2	2.1	2.1
84	61	97	100	5,666	1,919	3,952	12,714	12.7	3.5	8.7	29.6
85	60	81	93	381	331	363	401	14.8	5.7	10.8	31.7
								2.2	1.8	2.6	2.9
40	21	57	74	1,664	651	1,756	5,029	2.3	0.4	2.2	9.0
51	20	46	75	367	292	362	421	4.5	2.2	4.8	11.9

列されていることを意味する．

数にたいするパーセントである．

の価額についての情報があたえられている．そのため，生産額は約30万ルーブリだ

は役だたない。

*** この理由から、二〇の事業所に一、八一七人の賃金労働者がいる磁器製造「営業」を総括から除いた。モスクワ県の統計家たちがこの営業をも「クスターリ」営業のなかにふくめたことは、わが国で支配的な概念の混乱をあらわす特徴的なことである（前掲書、第七巻第三冊における総括表を参照）。

三三種の営業のすべてにかんする資料を考察する必要はすこしもないし、またそれはあまりにもわずらわしいから、われわれはこれらの営業を四つのカテゴリーに区分した。（一）一事業所あたり平均労働者数（家族労働者数と賃金労働者をあわせて）が一・六人から二・五人の九営業、（二）二・七人から四・四人の平均労働者数の九営業、（三）五・一人から八・四人の

〔第 79 表〕

営業のカテゴリー	絶対数* a）事業所 b）労働者 c）生産額（ループリ）	百分比** a）事業所 b）労働者 c）生産額 全体	等級別 I	II	III
第1（9営業）	831 1,776 357,890	100 100 100	57 35 32	30 37 37	13 28 31
第2（9営業）	348 1,242 516,268	100 100 100	47 30 25	34 35 34	19 35 41
第3（10営業）	804 4,893 2,013,918	100 100 100	53 25 20	33 37 37	14 38 43
第4（5営業）	102 1,516 577,930	100 100 100	38 15 13	33 24 23	29 61 64
全カテゴリーの総計（33営業）	2,085 9,427 3,466,006	100 100 100	53 26 21	32 35 34	15 39 45

*　文字 a）b）c）は，見出しでしめしてある意味をもつ数字が，欄内で順次に配

**　これは，ある営業カテゴリーまたはある等級における事業所および労働者の総

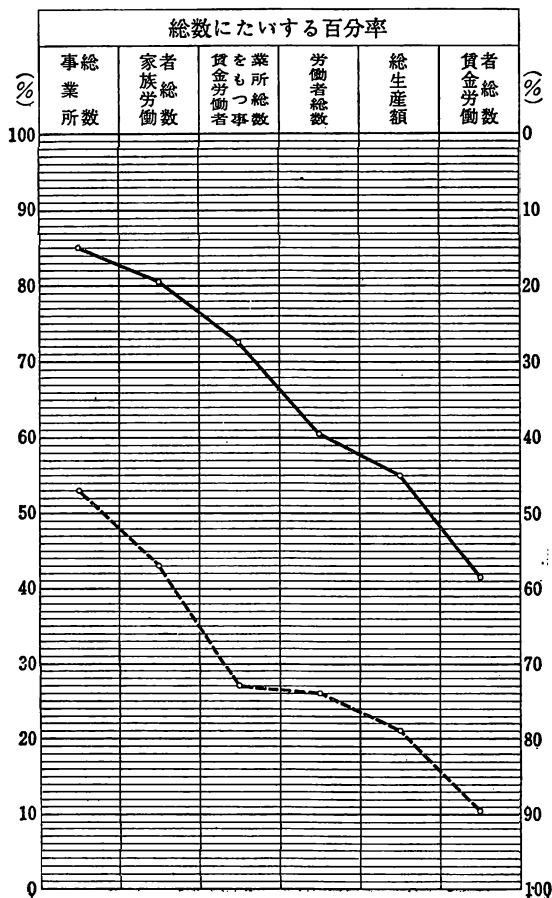
***　2つの営業については，生産物価額（＝生産額）のかわりに，加工された原料け少なくなっている．

平均労働者数の一〇営業、（四）一一・五人から一七・八人の平均労働者数の五営業である。各カテゴリーには、このように、一経営あたりの労働者数の点で相互に近似する営業がいっしょにしてある。そしてこれからの叙述では、営業のこの四つのカテゴリーにかんする資料に限定することにしよう。この資料を in extenso〔そっくりそのまま〕あげよう。〔第七九表〕

この表は、上級と下級の等級のクスターリの関係についてのの最も重要な資料をまとめたものであって、あとであたえる結論のために役だつであろう。四つのカテゴリーのすべてにかんする総括的資料を、第二章で農耕農民層の分解を図解したときの図表とまったく同じようにしてつくった図表によって、あらわ

前表の総括資料の図表

———— 実線は，33の営業について，事業所，労働者，等々の総数のうち，上級の第3等級のクスターリが占める割合をパーセントで（上からかぞえて）しめす．

………… 点線は，33の営業について，事業所，労働者，等々の総数のうち，下級の第1等級のクスターリが占める割合をパーセントで（下からかぞえて）しめす．

すことができる。すなわち、各等級について、事業所の総数、家族労働者の総数、賃金労働者をもつ事業所の総数、労働者（家族労働者と賃金労働者の合計）の総数、総生産額、および賃金労働者の総数の、それぞれのパーセントを算定して、それを（第二章で記述した仕方で）図表に書きこむことにしよう。〔三〇八ページを参照〕

さて、これらの資料からの結論を考察しよう。

賃労働の役割から始めよう。三三の営業について、賃労働は家族労働よりも優勢である。すなわち、労働者総数の五一％は被雇用者である。モスクワ県の「クスターリ」にとっては、このパーセントは実際よりもまだ低くすらある。賃金労働者の正確な数があたえられているモスクワ県の五四の営業の資料をわれわれは計算したが、それによると、二九、四四六人の労働者のうち被雇用者は一七、五六六人、すなわち五九・六五％であった。ペルミ県については、すべてのクスターリと手工業者をあわせたなかでの賃金労働者のパーセントは二四・五％であるが、小商品生産者だけのなかでは二九・四—三一・二％と算定された。しかし、この大ざっぱな数字は、あとで見るように、小商品生産者だけでなく資本主義的マニュファクチュアをもふくんでいる。だから、賃労働の役割は事業所の規模の拡大と並行して高まるという結論は、はるかに興味深いものである。これは、一つのカテゴリーを他のカテゴリーと比較するさいにも、また同一カテゴリーのなかの異なる等級を比較するさいにも、見うけられる。事業所の規模が大きければ大きいほど、賃金労働者をもつ事業所のパーセントはますます高く、賃金労働者のパーセントもますます高い。ナロードニキ経済学者たちは、「クスターリ」のあいだではもっぱら家族労働者だけをもつ小さな事業所が優勢である、という言明だけにとどまるのが普通であり、そのさいその確証としてしばしば「平均」数字をあげている。だがここにあげた資料から明らかなように、このような「平均」は一定の関係における現象を特徴づけるのには役にたたない。そして、家族労働者をもつ小さな事業所の数的優勢は、小商品生産が、ますます多くの賃労働の使用と資本主義的作業場の形成への傾向をもつ、という基本的事実をいささかも排除するものではない。それればかりでなく、ここにあげた資料は、同様に、「クスターリ」生産における賃労働はもともと家族労働の「補充」として役だつのであって、それにたよるのは儲けを目的としてではない、等々という、ナロードニキたちのもう一つのかなり普及している主張をもくつがえすものである。[*] 実際には、小営業者のあいだでも——小農耕者のあいだでとまったく同様に——、賃労働の使用の増加は家族労働者数の増大と並行していることがわ

かる。大多数の営業で、下級から上級の等級へ移るにつれて、一事業所あたりの家族労働者の数も増大しているにもかかわらず、賃労働の使用が増大しているのが見られる。賃労働の使用は、「クスターリ」の家族構成における差異を平準化するどころか、その差異を強めさえするのである。図表は小営業のこの一般的特徴を一目瞭然としめしている。すなわち、上級の等級は、家族労働者を最もよく確保しているにもかかわらず、多数の賃金労働者を集積している。このように、「家族的協業」は資本主義的協業の基礎である。** もちろん、この「法則」が最も小さな商品生産者にだけ、資本主義の萌芽にだけ関係するものであることは、おのずから明らかである。この法則は、農民層の傾向が小ブルジョアへの転化にあることを証明している。かなり多数の賃金労働者をもつ作業場がひとたび形成されると、「家族的協業」の意義は不可避的に低下してゆかざるをえない。そしてわれわれは、実際に、上記の法則が上級のカテゴリーの最大級の等級には適用されないことを、われわれの資料から知るのである。「クスターリ」が一五人から三〇人の賃金労働者をやとう本当の資本家に転化すると、この作業場における家族労働の役割は低下し、まったくとるにたりない大きさになる（たとえば、上級のカテゴリーの上級の等級では、家族労働者は労働者総数の七％をなすにすぎない）。いいかえれば、「クスターリ」営業が、「家族的協業」が優勢な役割を果たすような小さな規模をもつものであるかぎりで、この家族的協業は資本主義的協業の発展の最も確かな保障なのである。したがって、ここでは、「自分の手の労働による生活」を、他人の労働の搾取にもとづく生活に転化させる商品生産の弁証法が、このうえなくはっきり現われているのである。

* たとえば、『モスクワ県統計資料集』、第六巻第一冊、二二ページを見よ。

** 同じ結論は、ペルミ県の「クスターリ」にかんする資料からも出てくる。私の『試論』、一二六―一二八ページを見よ。(二一七)

労働生産性にかんする資料に移ろう。それぞれの等級における労働者一人あたりの生産額にかんする資料は、事業所の規模が大きくなるにつれて労働生産性が高まることをしめしている。このことは、大部分の営業で、また営業のカテゴリーの例外なくすべてで見られる。図表は、上級のカテゴリーにあっては生産総額に占める割合のほうが労働者総数に占める割合よりも大きく、下級の等級ではこの関係が逆であることをしめして、この法則をはっきり例証している。上級の等級の事業所における労働者一人あたりの生産額は、下級の等級の事業所におけるそれよりも二〇―四〇％がた高くなっている。なるほど、大きな事業所はふつう、小さ

な事業所にくらべて労働期間がより長く、またときにはより高価な材料を加工している。だがこの二つの事情も、大きな作業場における労働生産性が小さな作業場におけるよりもずっと高いという事実を、排除することはできない。* 大きな事業所は、小さなものより三—五倍も多い労働者（家族労働者と賃金労働者をあわせて）をもっており、そしてより広範な規模での協業の適用は労働生産性の向上に影響をあたえないわけにはいかない。大きな作業場は、つねに技術の点でよりよく装備されており、よりよい器具、用具、装置、機械、等々をそなえている。たとえば、ブラッシ製造業では「正しく組織された作業場」には一五人ほどの労働者がいなければならないし、ホック製造業では九—一〇人の労働者がいなければならない。玩具製造業では、クスターリの多くは商品を乾燥するのに普通の暖炉ですましているのに、より大きな経営主は特別の乾燥炉をもち、最大級の経営主は特別の建物、乾燥室をもっている。金属玩具の生産では、一六人中八人の経営主が特別の作業場をもっているが、等級別に見ると、（Ⅰ）六人で〇、（Ⅱ）五人で三、（Ⅲ）五人で五である。また一四二人の鏡製造業者と額縁製造業者が一八の特別の作業場をもっているが、等級別に見ると、（Ⅰ）九九人で三、（Ⅱ）二七人で四、（Ⅲ）一六人で一一である。篩製造業では、篩編みが手でおこなわれているか（ⅡおよびⅢ等級）、機械で織られているか（Ⅰ等級）である。仕立業では、経営主一人あたりのミシンを等級別に見ると、（Ⅰ）一・三台、（Ⅱ）二・一台、（Ⅲ）三・四台である。その他、等々。家具製造業の調査のなかで、イサーエフ氏は、一人で仕事をすることには次のような不利益がともなうことを確認している。（一）単独営業者は完全にそろった用具をもたない。（二）つくられる商品の範囲が狭い。なぜなら、百姓家にはかさばる生産物をおく場所がないから。（三）小買いでは材料がはるかに高くつく（三〇—三五％がた高い）。（四）いくらかは、小「クスターリ」にたいする信用がないために、またいくらかは、金をはやくほしいために、商品を安く売らなければならない。** 周知のように、まったく類似の現象が、ひとり家具製造業だけでなく、大多数の農民的小営業でも見られる。最後に、一人の労働者が生産する製品の価値額の増大が、多くの営業で、下級から上級の等級にむかって見られるだけでなく、小さな営業から大きな営業にむかっても同様に見られる、ということをつけくわえておかなければならない。営業の第一カテゴリーでは、一人の労働者は平均二〇二ルーブリを生産し、第二と第三カテゴリーでは四〇〇ルーブリを、第四カテゴリーでは五〇〇ルーブリ以上を

生産している（三八一ルーブリという数字は、さきに述べた理由から、一倍半にふやさなければならない）。このような事情は、原料の値上りと大きな事業所による小さな事業所の駆逐の過程とのあいだの関連をしめしている。資本主義社会の発展の一歩一歩は不可避的に木材その他のような生産物の値上りをともない、こうして小さな事業所の滅亡をはやめるのである。

* われわれの表にあげられた澱粉製造業について、いろいろな規模の事業所における労働期間の長さにかんする資料がある。期間が同じでも、一人の労働者が、大きな事業所では小さな事業所におけるよりも多量の生産物を提供する、ということが（さきに見たように）わかる。

** 小生産者は、労働日を延ばし、労働の緊張度を強めて、これらの不利な条件とたたかう（前掲書、三八ページ）。商品経済のもとでは、小生産者は、農業においても工業においても、欲望を引きさげることによってのみもちこたえていく。

以上に述べたことから、農民的小営業においても比較的大きな資本主義的事業所が巨大な役割を演じる、という結論が出てくる。それらは、事業所総数のなかではごく少数をなすにすぎないが、労働者総数の非常に大きな割合と生産総額のさらに大きな割合を集中している。こうして、モスクワ県の三三の営業では、一五％の上級の等級の事業所が生産総額の四五％を集中しており、五三％の下級の等級の事業所の占める割合は生産総額のわずか二一％にすぎない。営業からの純収入の配分がさらに比較にならないほど不均等であるにちがいないことは、いうまでもない。一八九四／九五年のペルミ県クスターリ調査の資料は、このことをはっきり例証している。七つの営業について最大級の事業所をとりだすと、小さな事業所と大きな事業所との相互関係の次のような表が得られる。*〔第八〇表〕

* 私の『試論』、一五三ページ以下[一四八]を見よ。そこでは、個々の営業ごとに資料をあげてある。すべてこれらの資料は市場めあてに仕事をするクスターリ農民にかんするものであることを、一言しておこう。

ごくわずかな数の大きな事業所（事業所総数の一〇分の一以下）が、労働者総数の約五分の一をもっていて、全生産高のほとんど半分と全収入の約五分の二（労働者の賃金と経営主の収入を合算して）を集中している。小経営主が手に入れる純収入は大きな事業所における賃金労働者の賃金よりもはるかに少ない。他の箇所でくわしくしめしたように、このような現象は農民的小営業にとっては例外ではなく、一般的な原則である。*

* 本文にあげた資料から、農民的小営業では、生産額一、〇〇〇ルーブリ以上の事業所が絶大な、さらには圧倒的な役割さえ演じていることが、明らかである。こういう事業所が、わ

〔第 80 表〕

事業所	事業所	労働者数 家族労働者	労働者数 賃金労働者	労働者数 総数	総収入（ルーブリ） 総額	総収入（ルーブリ） 労働者一人あたり	賃金（ルーブリ） 総額	賃金（ルーブリ） 賃金労働者一人あたり	純収入（ルーブリ） 総額	純収入（ルーブリ） 家族労働者一人あたり
全事業所	735	1,587	837	2,424	239,837	98.9	28,985	34.5	69,027	43
大事業所	53	65	336	401	117,870	293	16,215	48.2	22,529	346
その他の事業所	682	1,522	501	2,023	121,967	60.2	12,770	25.4	46,498	30.5

が国の官庁統計によって、つねに「工場」のうちに入れられてきたし、またいまでもひきつづき入れられていることを、思いおこそう（『試論』、二六七、二七〇ページ[三五]および本書、第七章第二節を見よ）。このように、わがナロードニキたちがそれ以上一歩も出なかったありきたりの伝統的用語法をつかうことが経済学者にゆるされるとすれば、われわれは次のような「法則」を打ちたてることができるであろう。――農民的、「クスターリ的」事業所のあいだでは、官庁統計の不十分さのために官庁統計にあがってこない「工場」が、優勢な役割を演じる、と。

われわれが検討した資料から出てくる結論を要約すると、農民的小営業の経済構造は典型的な小ブルジョア的構造であり、われわれがさきに小農耕者のあいだで確認したのと同じものである、と言わなければならない。農民的小営業の拡大、発展、改善は、所与の社会経済的環境においては、一方では、少数の小さな資本家を分離し、他方では、多数の賃金労働者、あるいは賃金労働者よりもっと苦しくて悪い生活をしている「自立的クスターリ」を分離するようなしかたでしか、起こりえない。したがってわれわれは、最も小さな農民的営業のなかに資本主義の――さまざまなマニーロフ[三六]的経済学者が「人民的生産」から切りはなされたなにものかとしてえがいてみせたあの資本主義の――最も鮮明な萌芽を見るのである。そして国内市場の理論の見地からすれば、検討をくわえた諸事実の意義は少なからず重要である。農民的小営業の発展は、より資力のある営業者が、生産手段と、農業プロレタリアートの隊列から汲みとられる労働力とにたいする需要を拡大するという事態にみちびく。農村手工業者と小営業者のもとにある賃金労働者の数は、たとえばペルミ県だけで約六、五〇〇人いると計

算されるのだから、ロシア全体ではかなり大きなものであるにちがいない。*

* 一言つけくわえておくと、モスクワ県とペルミ県以外の他の諸県でも、小商品生産者のあいだにまったく同様の関係があることを、典拠は確認している。たとえば、次のものを見よ。『ウラヂーミル県の営業』、第二冊、靴製造業者およびフエルト製造業者の戸別調査。『クスターリ委員会報告書』、第二冊、メドィニ郡の車輪製造業者について。第二冊、同郡の羊皮鞣職人について。第三冊、アルザマス郡の毛皮製造業者について。第六冊、セミョーノフ郡のフェルト製造業者およびヴァシーリスク郡の皮革業者について、等々。なお、『ニジェゴロド県統計集』、第四巻、一三七ページを見よ――小営業にかんするア・エス・ガツィスキーの一般的意見は、大きな作業場の分離を確認している。また、パヴロヴォのクスターリ（前出）や、一週間の稼ぎ高による家族のグループ、その他等々についてのアンネンスキーの報告を参照。ここにしめしたすべてのものは、われわれが検討した戸別調査の資料にくらべると、きわだってまったく不完全で貧弱である。しかし、事の本質はどこでも同じである。

五　資本主義的単純協業

小商品生産者による比較的大きな作業場の形成は、工業のより高い形態への移行をあらわす。細分された小生産から資本主義的単純協業が成長してくる。「資本主義的生産は、……同じ個別的資本がかなり多数の労働者を同時にはたらかせるようになり、したがってその労働過程がその規模を拡張して生産物を量的にかなり大きな規模で提供するようになったときに、実際にはじめてはじまる。かなり多数の労働者が、同じときに、同じ空間で（またはそう言いたければ、同じ労働場所で）、同じ種類の商品の生産のために、同じ資本家の指揮のもとではたらくということは、歴史的および概念的に資本主義的生産の出発点をなす。生産様式そのものにかんしては、たとえば初期のマニュファクチュアは、同時に同じ資本によってはたらかされる労働者の数がより多いということ以外には、同職組合的手工業とほとんど違いがない。同職組合親方の仕事場がひろがった[三]だけである」（『資本論』、第一巻、第二版、三二九ページ）。

したがって、資本主義のほかならぬこの出発点こそが、わが農民的（「クスターリ的」）小営業でも見られるのである。歴史的環境の相違（同職組合的手工業が存在しないとかその発展が弱いとかいう）は、同じ資本主義的関係の発現形態を変えるにすぎない。資本主義的作業場と小工業者の作業場との違いは、はじめはただ同時に就業する労働者の数にあるにすぎない。だから、初期の資本主義的事業所は、数も少ないので、小さな事業所の大群のなかで姿を消

してしまうかのようである。しかし多数の労働者の使用は、不可避的に、生産そのものにおいてもつぎつぎに変化をひきおこし、生産をしだいに改造させるようになる。原始的な手労働技術のもとでは、個々の労働者のあいだの差異（力、技巧、熟練などの点での）はつねに非常に大きい。すでにこの原因だけからしても、小工業者の状態は極度に不安定であり、市場の変動にたいするその依存はきわめて重圧的な形をとる。事業所内に数人の労働者がいるとなると、彼らのあいだの個人的差異はすでに作業場そのもののなかで均らされる。「同時にはたらかされる比較的多数の労働者の総労働日が、それ自体、社会的平均労働の一日分である」[三]。このため、資本主義的作業場による生産物の生産と販売は比較にならないほど大きな規則性と安定性をもつようになる。建物、倉庫、器具および労働用具その他をより完全に利用する可能性が現われる。このことはより大きな作業場における生産費を低廉にする。* より広範な規模で生産をおこない多数の労働者を同時に就業させるためには、かなり多額の資本の蓄えが必要であるが、この資本はしばしば生産の部面ではなく、商業その他の部面で形成される。この資本の大きさによって、経営主が企業に個人として参加する形態がきまる。すなわち、彼の資本がまだ非常に小さい場合には、彼自身も労働者である。そうでない場合には、みずからは労働をやめ、商業的＝企業家的機能に専門化する。「作業場の経営主の状態をその労働者数と関連させることができる」。——たとえば、家具製造業の記述のなかにこう書かれている。「二—三人の働き手は、経営主にごくわずかの剰余しかあたえないので、経営主は労働者といっしょにはたらく。……五人の労働者はもはや、経営主に、すでにある程度まで手労働から解放され、いくらか怠け、そして主として経営主の二つの最後の役割（すなわち、材料の購入と商品の販売）を遂行するだけのものをあたえる」。「賃金労働者の数が一〇人に達するか、あるいはそれを上まわるようになると、経営主はたんに手労働をやめるだけでなく、労働者にたいする監督さえほとんどやめる。彼は、労働者を監視する職長をつれてくる。……ここで彼はもはや小資本家に、『生粋の経営者』になる」（イサーエフ『モスクワ県の営業』、第一巻、五二—五三ページ）。われわれが引用した統計資料は、賃金労働者の数がかなり多く現われると家族労働者の数が減少することをしめしており、右の特徴づけをはっきり確証している。

＊　たとえば、ウラヂーミル県の金箔工について、こう書かれている。「労働者数が多いと、支出の面でいちじるしい切下げをすることが可能である。そういう支出にはいるのは、照明、仕事台、金敷、包装の費用である」（『ウラヂーミル県の

営業』第三巻、一八八ページ)。ペルミ県の銅製品では、単独営業者にとっても、完全な一揃えの道具類(二六種)が必要であるが、二人の労働者にとっては、「ごくわずかな追加」が必要なだけである。「六―八人の作業場にとっては、道具類は三倍ないし四倍多くそろえなければならない。だが八人の作業場にとっても、旋盤はつねに一台である」(『クスターリ委員会報告書』、第一〇巻、二九三九ページ)。固定資本は、大きな作業場では四六六ルーブリ、中位の作業場では二九四ルーブリ、小さな作業場では八〇ルーブリであるが、生産額はそれぞれ六、二〇〇ルーブリ―三、六五五ルーブリ―八七一ルーブリである。つまり、小さな事業所では生産額は固定資本総額の一一倍であるが、中位の事業所では一二倍、大きな事業所では一四倍である。

工業の資本主義的形態の発展における資本主義的単純協業の一般的意義を、『資本論』の著者は次のように特徴づけている。

「とはいえ、歴史的には、協業の資本主義的形態は、農民経営および独立手工業経営――それが同職組合的形態をもつかどうかにかかわりなく――に対立して発展する。……協業によって現われるように、協業そのものも、個々別々の独立の労働者あるいは小親方の生産過程に対立して、資本主義的生産過程の独自の形態として現われる。それは、現実の労働過程が資本への包摂によってこうむる最初の変化である。……その前提、同じ労働過程で比較的多数の賃金労働者を同時にはたらかせることは、資本主義的生産の出発点をなす。……だから、一方では、資本主義的生産様式は、労働過程が一つの社会的過程に転化するための歴史的必然性として現われるとすれば、他方では、労働過程のこの社会的形態は、労働過程をその生産力の増大によっていっそう有利に搾取するために資本が利用する一方法として現われる。

これまで考察してきたその単純な姿では、協業は比較的大規模な生産と一致するが、しかしそれは、資本主義的生産様式のある特殊な発展期の固定的な特徴的形態をなすものではない。それがほぼそのようなものとして現われるのは、せいぜい、まだ手工業的なマニュファクチュア初期においてである」(『資本論』、第一巻、第二版、三四四―三四五ページ)[三]。

これからさきの叙述でわれわれは、ロシアにおいて賃金労働者をもつ小「クスターリ」事業所が、資本主義の比較にならないほどさらに発展し広範に普及している諸形態とどのように緊密に結びついているかということを、見るであろう。農民的小営業におけるこれらの事業所の役割についていえば、さきにすでに統計的にしめしたように、これらの事業所は従来の生産の細分状態のかわりにかなり広範

な資本主義的協業をつくりだし、いちじるしく労働生産性を向上させるのである。

　農民的小営業における資本主義的協業の巨大な役割とその進歩的な意義にかんするわれわれの結論は、農民的小営業では「アルテリの原理」[143]のあらゆる現れが優勢であるという、ひろくひろまっているナロードニキの学説ときわめてするどく対立するものである。実際にはまさに逆であって、小工業（および手工業）は生産者の最大の細分状態を特徴としている。反対の見解を論証するのに、ナロードニキの文献は、個々の実例をとりだすほかにはなにもなしえず、しかもその実例の大部分は、けっして協業にかんするものではなく、原料の共同購入や共同の作業場の建設などのための経営主や小経営主の一時的な微小な連合にかんするものである。このようなアルテリは、資本主義的協業の卓越した意義をすこしもそこなうものでない。* 「アルテリの原理」が実際にどのように広範に適用されているかについて正確な観念をつくりあげるためには、そこここで手当りしだいにとりだした実例を引合いに出すのでは不十分である。このためには、全面的に調査されたある地方にかんする資料をとりあげ、協業のあれこれの形態の相対的な普及度と意義を考察しなければならない。たとえば、一八九四／九五年のペルミ県の「クスターリ」調査の資料がそれである。そしてわれわれ[144]はすでに他の場所で（『試論』、一八二—一八七ページ）、この調査が小工業者のどのような驚くべき細分状態を確認したかということを、また、ごく少数の巨大な事業所の意義がどのように大きなものであるかということを、しめしておいた。資本主義的協業の役割についてさきにくだした結論は、個々の実例にもとづくものではなく、さまざまな地方における数十の多種多様な営業を包括する戸別調査の正確な資料にもとづくものなのである。

＊　われわれは、本文で述べたことを実例によって確認することはよけいなことと考える。そのような実例は、ヴェ・ヴェ氏の著書『クスターリ営業におけるアルテリ』（サンクト－ペテルブルグ、一八九五年）のなかにも数多く指摘することができよう。ヴォルギン氏はすでに、ヴェ・ヴェ氏があげている実例の真の意義を検討して（前掲書、一八二ページ以下）、わが国の「クスターリ」工業における「アルテリの原理」がまったく哀れなものであることをしめした。ただヴェ・ヴェ氏の次のような確言だけ指摘しておこう。「幾人かの独立したクスターリを一つの生産単位に結合させることは……競争の条件によって切実に呼びおこされるのではない。このことは、多くの営業では賃金労働者をもつ多少とも大きな作業場が存在しない、ということによって証明される」（九三ページ）。なんの根拠もなくこのような概括的な命題をたてることは、この問題について現にある戸別調査の資料を分

析することよりも、もちろん、ずっと容易なことである。

六　小営業における商業資本

周知のように、農民的小営業は、多くの場合、生産物の販売と原料の購買の商業的操作に専門的に従事して、ふつうあれこれの形態で小営業者を従属させる、特別の買占人を生みだす。この現象が、農民的小営業の一般的構造とどう関連するか、またその意義はどのようなものかを、見よう。

買占人の基本的な経済的業務は、商品（生産物または原料）を、転売するために購買することにある。いいかえれば、買占人は商業資本の代理人である。あらゆる資本――産業資本でも商業資本でも――の出発点は、個々人の手に自由な貨幣が形成されることである（自由なというのは、個人的消費その他のためにつかう必要のないような貨幣という意味である）。わが国の農村でこの財産上の分化がどのように起こっているかは、さきに農耕農民層および営業農民層の分解にかんする資料によってくわしくしめしておいた。これらの資料によって、買占人の出現をひきおこす諸条件の一つが明らかにされている。すなわち、小生産者たちの細分状態、孤立性であり、彼らのあいだでの経済的反目と闘争の存在である。もう一つの条件は、商業資本が果たす機能の性格に、すなわち、製品の販売および原材料の購買に関係する。商品生産がわずかしか発展していないときには、小生産者たちは製品の販売を小さな地方市場に限定される。ときには、直接に消費者の手に販売するだけである。これは、まだやっと手工業から分離したばかりの、低い発展段階の商品生産である。市場の拡大につれて、このような小さな細分された販売（小さな細分された生産に完全に照応した）は不可能となる。大きな市場では販売は大規模で、大量的でなければならない。こうして、生産の小規模な性格は、大規模な、一括販売の必然性と和解しえない矛盾におちいる。所与の社会経済条件のもとでは、すなわち、小生産者が孤立しており、また彼らが分解しつつある場合には、この矛盾は、富裕な少数者たちが販売を自分の手にかきあつめ、それを集中するということによるほかには解決されなかった。大規模に製品（あるいは原料）を買いしめ、そうすることによって買占人は販売費を安くし、販売を小規模で偶然的で不規則なものから大規模で規則的なものに変えた。そして、大規模な販売のこの純粋に経済的な優越性は、不可避的に、小生産者が市場から切りはなされ、商業資本の権力のまえに無防備でおかれる、という事態にみちびいた。こうして、商品経済の環境のもと

では、小生産者は不可避的に、分散した小規模販売にたいする大規模な大量販売の純粋に経済的な卓越のため、商業資本に依存することになる。* いうまでもなく、実際には、買占人の利潤は大量販売の費用と小規模販売の費用との差額にはけっしてとどまらない場合が多い。それはちょうど、産業資本家の利潤がしばしば正常な賃金からの控除からなることがあるのと同様である。それにもかかわらず、産業資本家の利潤を説明するためには、われわれは、労働力はその実際の価値によって販売されるとしなければならない。同じように、買占人の役割を説明するためには、生産物の売買は商品交換の一般的法則にしたがっておこなわれるとしなければならない。商業資本の支配のこの経済的原因だけが、それが実際にとる多様な形態――そのなかにはきわめて月並な詐欺もつねに見うけられるのだが（このことはすこしも疑う余地がない）――を理解する鍵をあたえることができる。ふつうナロードニキがしているように、この逆に出ること、すなわち、「クラーク」のいろいろな策略を指摘するだけで、このことを基礎に現象の経済的本性の問題をまったく回避することは、俗流経済学の見地に立つことを意味する。

* 資本主義一般の発展における商業資本、商人資本の意義の問題については、『資本論』第三巻を参照していただきたい。とくに、商品取扱資本の本質については、第三巻第一冊、二五三―二五四ページ（ロシア語訳、二一二ページ）、商業資本による販売の低廉化については、二五九ページ（ロシア語訳、二一七ページ）、「商人企業における集積は工業作業場におけるよりも早くから現われる」という現象の経済的必然性については、二七八―二七九ページ（ロシア語訳、二三三―二三四ページ）、「資本主義的生産様式の発展の」必然的な「条件」としての商業資本の歴史的役割については、三〇八（ロシア語訳、二五九）および三一〇―三一一ページ（ロシア語訳、二六〇―二六一ページ）[一五六]を参照。

ナロードニキたちの先入主的見地――彼らは、「クスターリ」営業を理想化し、商業資本を、市場めあての小規模生産の必然的な付属物としてではなく、なにか悲しむべき偏倚として描きだした――は、残念ながら、統計調査にもまた反映した。こうして、いまある一連のクスターリ戸別調査（モスクワ県、ウラヂーミル県、ペルミ県についての）は、各小営業者の経済を綿密に調査してはいるが、買占人の経済の問題、すなわち、彼の資本はどのようにしてつくられるか、この資本の大きさはなにによって規定されるか、買占人にとっての販売と購買の費用はどのようなものか、等々の問題はおとしてしまったのである。われわれの『試論』、一六九ページ[一五七]を参照。

市場めあての小規模生産と商業資本の支配とのあいだの必然的な因果関係にかんするわれわれの命題を確認するために、買占人がどのようにして現われ、どのような役割を

演じるかということについての、すぐれた記述の一つにもっとくわしく論及しよう。私がいうのは、モスクワ県のレース製造業の調査である(『モスクワ県の営業』、第六巻第二冊)。「女商人」の発生過程は次のとおりである。一八二〇年代すなわちこの営業が発生した時期、およびその後のレース編女工がまだ少なかった時期には、おもな購買者は地主、「旦那」であった。消費者は生産者の近くにいた。営業が普及するにつれて、農民たちは、「なんらかの機会をとらえて」、たとえば櫛商人を通じて、レースをモスクワにおくるようになった。このような原始的な販売の不便はごくまもなく現われた。「この仕事に従事しない百姓は、どこで行商したらよいのか?」というわけである。販売はレース編女工の一人に委託され、そのために失われる時間にたいしては報酬が出されることになった。「彼女もまたレース編の材料をはこんできた」。このようにして、ばらばらな販売が不利なことから、多くの女職人から製品をあつめる一人の人間によって遂行される特別の機能として、商業が分離してくる。これらの女職人たちの相互の家父長制的な親近性(親戚、隣人、同村人、その他)は、はじめ、販売の組合的組織化の試み、販売を女職人の一人に委託する試みを呼びおこす。だが貨幣経済は、まもなく古くからの家父長制的関係に裂け目を打ちこみ、まもなく、われわれが農民層の分解にかんする大量的資料についてさきに確認した現象にみちびく。販売のための生産は、時間を貨幣で評価する習慣をつける。失われた時間と労働にたいして仲介者に報酬をあたえることが必要となる。仲介者は、自分の仕事に慣れて、それを職業に変えはじめる。「このような旅行が数回くりかえされるうちに、女商人の型ができあがった」(前掲書、三〇ページ)。数回モスクワにいった人は、規則正しい販売にきわめて必要な恒常的な関係をその地でつくりだす。「仲買の稼ぎで生計をたてる必要と習慣ができあがる」。女商人は、手数料のほかに、「材料、紡糸、撚糸の値段をつりあげようとねらい」、指定された価格以上でレースを売ってえた儲けを自分の懐にとりいれる。女商人は、指定された価格以下しか受けとらなかったと申したてて、「品物を出してくれようとくれまいと、ご随意に」という。「女商人は都市から商品を供給しはじめ、そこで多額の利潤を得る」。したがって、仲買女は自立したはじめ、女職人を完全に従属させるためにその独占を利用しはじめる。商業業務とならんで、高利貸付業務や、女職人への金銭貸与、女職人からの低価格での商品の仕入れ、等々が現われる。「娘たちは、売りさばきにたいして一ルーブリにつき一〇カペイカを支払うが、そのさい、女商人

がそのほかにもレースをもっと高い価格で売って彼女たちから巻きあげていることをよく知っている。だが彼女たちは、そうするほかにどうしたらいいのか、まったくわからない。彼女たちが順番にモスクワにいってはどうかと私がいうと、彼女たちは答えた、――もっとまずいことになるだろう、自分たちはだれに売ったらいいのかわからないが、女商人はすでにどんなところでもよく知っている、と。女商人は彼女たちの完成品を売り、注文や材料や図案（デザイン）その他をもってかえる。女商人は彼女たちにいつも金を前払いしてやったり貸してやったりする。また必要が生じたときには女商人にレースを即金で売ることさえできる。一方では、女商人は最も必要で不可欠な人間であるが、他方では、この女商人から、他人の労働をひどく搾取する人間、女クラークがしだいに形成されてくる」（三二ページ）。このような型は同じ最も小さな生産者のなかから形成されてくる、ということをこれにつけくわえておかなければならない。すなわち、「だれに質問してみても、女商人はみな以前は自分自身でレースを編んでおり、したがって、生産そのものを知っている人々であったことが、わかった。彼女たちはこのようなレース編女職人のなかから出てきた。彼女たちははじめのうちはなんの資本ももっておらず、仲買をやってもうけるにつれて、やっとすこしずつ更紗やその他の商品をあきないはじめたのである」（三一ページ）*。このように、商品経済の環境のなかでは、小生産者は不可避的に自分たちのなかから一般により富裕な営業者を生みだすだけでなく、とくに商業資本の代理者を生みだしもすることは、疑いをいれない**。ところで、ひとたびこの商業資本の代理者が形成されると、小規模な分散した販売が大規模な大量販売によって駆逐されることが不可避となる***。ここで、同時に買占人でもある「クスターリ」のなかのより大きな経営者が、実際に販売をどのように組織しているか、ということのいくつかの実例をあげよう。モスクワ県のクスターリたちによる算盤（そろばん）の販売（われわれの表、付録Iにおける彼らにかんする統計資料を見よ）は、おもにロシア全土の定期市でおこなわれている。自分で定期市であきなうためには、第一に、かなりの資本をもっていなければならない。なぜなら、定期市での商業は卸売りしかおこなわれないからである。第二に、製品を地方で買いあつめて商人におくってくる使用人をもたなければならない。こういう条件をみたすものは「ただ一人の農民商人」である。彼はまた「クスターリ」でもあって、かなりの資本をもち、算盤の組立て（すなわち枠と珠をつかっての製造）と取引に従事している。彼の六人の息子は「もっぱら商業に従事している」ので、分与地を耕作するために

は二人の労働者をやとわなければならない。一調査者はこう指摘している。「なにも不思議なことではないが、彼は自分の商品をどんな定期市にでも出す可能性をもっているが、比較的小さな商人はふつう自分の商品を近くで販売する」。(『モスクワ県の営業』、第七巻第一冊、第二部、一四一ページ)。この場合、商業資本の代理者は「耕作百姓」一般からまだそれほど分化していないので、自分の分与地経営や家父長制的大家族を保持してすらいた。モスクワ県の眼鏡製造業者は、自分の製品(眼鏡のふち)を販売する業者に完全に従属している。これらの買占人は、同時にまた、自分の作業場をもつ「クスターリ」でもあり、製品を「経営主」に納入する等々という条件で原料を貧乏人に貸しつける。小営業者は、自分で生産物をモスクワで販売しようと試みたことがあったが、失敗に終わった。一〇—一五ループリばかりの小額ずつ販売することは、あまりにもひきあわないことがわかったのである(前掲書、二六三ページ)。リャザン県のレース製造業では、女商人は女工の稼ぎにたいして一二—五〇%の儲けを手に入れている。「手堅い」女商人は販売の中心地と規則正しい関係を打ちたてて商品を郵便で発送し、これによって旅費を節約する。大量販売がどれほど必要であるかは、女商人たちが一五〇—二〇〇ルーブリを販売してさえ販売費をつぐなえないと考えていることから、明らかである(『クスターリ委員会報告書』、第七冊、一一八四ページ)。ベレーヴ市には三つの部類の女商人がいる。(一)小さな注文をくばってあるき、自分で女職人のところをまわり、商品を大商人に引きわたす「卸商人」。(二)発注者の女商人は、自分で注文を出すか、または、商品を卸商人から買いあつめ、それを両首都その他にはこぶ。(三)大きな女商人(二—三の「商会」)は、すでに仲買人と取引をおこない、彼らに商品をおくり、大きな注文をひきうける。地方の女商人には、自分の商品を大きな商店にもちこむことは「ほとんどできない」。「商店は、きわめて種々さまざまな編み方のレースをまとめて提供する卸しの買占人と取引をもつほうを好む」。女商人はこれらの「納入業者」に販売しなければならない。この「納入業者たちから取引のすべての情況を知るのである。彼らが価格を指定する。一言でいえば、彼らがいなければどうにもならない」(『クスターリ委員会報告書』、第一〇冊、二八二三—二八二四ページ)。この種の実例はいくらでも好きなだけあげることができる。だが、ここにあげたものだけでも、大きな市場めあての生産のもとでは小規模な細分された販売がどれほど絶対に不可能であるかを知るのに、まったく十分であろう。小生産者たちが細分されて

いて完全に分解しているもとでは、****大規模な販売は大きな資本によってのみ組織されうる。そしてこの資本は、このために、クスターリを完全な無援と従属の状態におくのである。「販売の組織化」によって「クスターリ」をたすけることを勧告するありきたりのナロードニキ理論の馬鹿らしさは、これによって判断することができる。純理論的な側面からすれば、このような理論は、商品生産と資本主義的販売とのあいだの不可分の関連を理解しないことにもとづく町人的ユートピアに属する。†ロシアの現実の諸資料についていえば、それらはこの種の理論の創作者たちによってあっさり無視されている。小商品生産者たちの細分状態と彼らの完全な分解が無視されている。まさに彼らのなかから「買占人」が出てきたのだし、いまもひきつづき出ているという事実、資本主義社会では販売は大きな資本によってのみ組織されうるという事実が、無視されている。もちろん、すべてこれらの不快ではあるが疑いのない現実の特徴を考慮しないでおけば、in's Blaue hinein〔でまかせに〕幻想をえがくのもむつかしいことではない。†*

* きわめて小さな生産者のなかからこのように買占人が形成されてくることは、調査者がこの問題にふれさえすればほとんどいつでも確認できる一般的な現象である。たとえば、キッド皮手袋の裁縫業の「女発注者」(『モスクワ県の営業』第七巻第二冊、一七五—一七六ページ)、パヴロヴォの営業の買占人(グリゴリエフ、前掲書、九二ページ)、その他多くのものにかんする同じ指摘を見よ。

** すでに、コルサック(『工業の諸形態について』)は、小規模な販売(ならびに原料の小規模な購買)が損なことと「細分された小規模生産の一般的性格」とのあいだの関連を、まったく正当に指摘している(二三ページおよび二三九ページ)。

*** われわれがさきにくわしく述べた、クスターリのなかの大経営主は、きわめてしばしば一面では買占人でもある。たとえば、大きな営業者が小さな営業者から製品を買いいれることは、非常にひろまっている現象である。

**** ヴェ・ヴェ氏は、商業資本に従属しているクスターリが、「事の本質上まったくよけいな損をしている」と、主張している(『クスターリ工業概説』、一五〇ページ)。ヴェ・ヴェ氏は、小生産者たちの分解が、「事の本質上」、すなわち、この小生産者が生活している環境である商品経済の本質からして、「まったくよけいな」現象である、と考えているのではなかろうか?

† 「問題はクラークにあるのではなく、クスターリのあいだに資本が不足していることにある」——ペルミ県のナロードニキたちはこう言明している(『ペルミ県におけるクスターリ工業の状態の概要』、八ページ)。ところでクラークとは、資本をもつクスターリ以外のなんであろうか? ナロードニキたちが、企業家や「クラーク」を小生産者から分出する、小生産者のあの分解過程を研究しようとしないことにこそ、

不幸があるのだ。

†＊「自立したクスターリ」に必要な「固定」および「流動」資本はあまり大きなものではないという議論は、ナロードニキ理論のえせ経済学的論拠に属する。きわめてひろまっているこういう議論の行程は次のようなものである。クスターリ営業は農民に多くの利益をもたらすから、それを普及させることがのぞましい。（零落しつつある農民大衆を、そのうちのいくらかのものを小商品生産者に転化させることによって救うことができるかのようにいう、この笑うべき考えに、われわれは論及すまい）ところで、営業を扶植するためには、クスターリにとって事業をおこなうのに必要な「資本」額の大きさを知らなければならない。この種の数多くの計算のなかから一つをあげよう。グリゴリエフ氏は、われわれに次のようにおしえてくれる。——パヴロヴォのクスターリにとっては、労働用具の価値を計算すると、三—五ループリ、一〇—一三—一五ループリ、等々の固定「資本」が必要であり、食糧と原料にたいする週間支出を計算すると、六—八ループリの流動「資本」が必要である。「このように、パヴロヴォ地区における固定資本と流動資本（原文のまま！）の規模はあまり大きくはないから、自立した（原文のまま！）生産にとって必要な器具や原料をそなえつけることは、非常に容易である」（前掲書、七五ページ）。実際、このような議論よりも「容易な」ことがあるだろうか？　たった一筆で、パヴロヴォのプロレタリアは「資本家」に変えられてしまう。彼の一週間の食物と安物の器具を「資本」とよびさえすればよい。大きな買占人のあの実際の資本——販売を独占し、彼らだけが de facto〔実際に〕「自立的」であることができ、数千金の資本を回転させているのだが——、この現実の資本を、執筆者は簡単に捨象してしまった！　これらの富裕なパヴロヴォ人たちはじつに奇妙な人々である。「自立的」であるためには数十ループリの「資本」で十分であることが、最新の発見によって明らかなのに、数世代のあいだ、彼らはあらゆる不正によって数千金の資本を蓄えてきたし、またいまも蓄えつづけているのである！

われわれはここで、商業資本がわが国の「クスターリ」営業のなかにいったいどのように現われているか、また商業資本が小営業をどのように無力でみじめな状態においているかということについて、詳細な記述にふけることはできない。そのうえ、われわれは次の章で、商業資本（マニュファクチュアの付属物としての）が資本主義的家内労働を大規模に組織するという、最高の発展段階における商業資本の支配を特徴づけなければならない。それでここでは、小営業で商業資本がとる基本的な形態を指摘するだけにとどめる。最初の最も簡単な形態は、商人（または大きな作業場の経営主）が小商品生産者から製品を買いつけることである。買占めの発展が弱い場合、あるいは競争する買占人が多い場合には、商人への商品の販売は他のあらゆる販売と異なるところがない。だが多くの場合、地方の買占人は、農民がたえず製品を販売することができる唯一の人物

であり、その場合、買占人は生産者に支払う価格を際限なく引きさげるために自分の独占的地位を利用する。商業資本の第二の形態は、それと高利貸付業との結合であり、たえず金に困っている農民たちが買占人から金を借り、あとで自分の商品を引きわたして負債をかえす。この場合（といっても、非常に広範に普及しているのだが）、商品の販売はつねに人為的に引きさげられた価格でおこなわれ、クスターリの手には賃金労働者が受けとるほども残らないことがしばしばある。そのうえ、債務者にたいする債権者の関係は、不可避的に、債務者の人格的従属、債務奴隷制をもたらし、また、債権者が債務者の窮乏という特別の機会を利用する等々の事態をもたらす。商業資本の第三の形態は製品にたいする商品での支払いであるが、これは農村の買占人のふつうのやりかたの一つである。この形態の特徴は、それがひとり小営業だけでなく、一般に商品経済と資本主義のあらゆる未発展な段階に固有のものであることにある。労働を社会化し、あらゆる家父長制的なものと抜本的に断絶する機械制大工業だけが、債務奴隷のこの形態を駆逐し、大工業経営にかんしてはそれを法律上禁止するまでにいたったのである。商業資本の第四の形態は、「クスターリ」にとって生産のために必要な種類の商品（原料や補助材料など）で商人が支払うことである。小工業者に生産の材料を売ることは、製品の買占業務とまったく同種の、商業資本の自立的な業務を構成することがある。製品の買占人が「クスターリ」に必要な原材料によって支払いをはめるようになると、それは資本主義的関係の発展における非常に大きな一歩を意味する。買占人は小工業者を完成品の市場から切りはなしたが、こんどは原料の市場からも切りはなし、このことによってクスターリを最終的に従属させる。この形態から、買占人が一定の支払いを代償として「クスターリ」に材料を直接にくばって加工させるという、商業資本の最高形態まで、もうあとわずか一歩である。クスターリは、資本家のために自分の家で仕事をする de facto（事実上の）賃金労働者となる。買占人の商業資本はここで産業資本に移行する。* 資本主義的家内労働が生じる。小営業でもそれは多少とも散発的に見られる。だがそれが大量にもちいられるのは、資本主義的発展の次のより高い段階でのことである。

* 商業資本の純粋な形態は、同じ商品を、儲けをもって販売するために商品を購買することである。産業資本の純粋な形態は、加工した形で商品を販売するために商品を購買することであり、したがって、原材料その他の購買およびその原料を加工する労働力の購買である。

七 「営業と農業」

これは、農民的営業にかんする記述における特別の篇の普通の標題である。いま考察している資本主義の原初的段階では、営業者はまだ農民からほとんど分化していないから、土地との営業者の結びつきは、特別の考察を必要とする実際にきわめて特徴的な現象である。

われわれの表の資料からはじめよう(付録Iを見よ)。「クスターリ」の農業を特徴づけるために、ここには、第一に、各等級の営業者のもつ馬の平均頭数にかんする資料があげてある。この種の資料のある一九の営業を総括すると、一営業者(経営主または小経営主)あたりの総平均で馬一・四頭、等級別では、(I)一・一頭、(II)一・五頭、(III)二・〇頭となる。このように、経営主がその営業的経営の規模の点で上位にあればあるほど、彼は農耕者としても上位にある。最大級の営業者は、役畜の頭数では小さな営業者のほとんど二倍もまさっている。だが最小の営業者(等級I)ですら、その農業の状態の点で平均的な農民よりも上位にある。というのは、モスクワ県全体では一八七七年に農家一戸あたりの馬の頭数は〇・八七頭であったからである。* したがって、営業者たる経営主および小経営主にはいるのは、比較的富裕な農民だけである。貧農はもっぱら、経営主＝営業者ではなくて労働者＝営業者(「クスターリ」のもとにいる賃金労働者、出稼労働者、その他)を供給している。(一三〇) 残念なことに、モスクワ県の営業の大多数については、小営業に従事する賃金労働者の農業にかんする報告がない。例外は帽子製造業である(付録Iを見よ)。われわれの表のなかのそれにかんする一般的資料をあげよう [第八一表]。つぎに、帽子製造経営主と帽子製造労働者にかんするきわめて教訓的な資料をあげよう

* 『農村住民の経済状態にかんする統計資料集成』、内閣委員会刊行、付録I、ゼムストヴォ戸別調査資料、三七二―三七三ページ。

このように、経営主＝営業者はきわめて「きちんとした」農耕者、すなわち、農民ブルジョアジーに属する人々であるのにたいして、賃金労働者は零落した農民大衆のなかから募られる。* いま記述している諸関係を特徴づけるうえでよりいっそう重要なのは、経営主＝営業者による土地の耕作方法にかんする資料である。モスクワ県の調査者は土地耕作の三つの方法を区別した。(一) 世帯主の個人労働によるもの、(二)「雇用によるもの」――すなわち、「おちぶれた」経営主の土地を自分の農具で耕作する隣人のだれかを雇用することによるもの。この耕作方法は資力

〔第 81 表〕

帽子製造者の地位	戸数	1戸あたり家畜頭数			分与地の筆数	そのうち		戸数				賦払金滞納額(一九)(ループリ)
		馬	牝牛	羊		耕作されているもの	放置されているもの	分与地を耕作するもの		穀物耕作をしないもの	馬をもたないものの数	
								自分で	賃労働によって			
経営主	18	1.5	1.8	2.5	52	46	6	17	—	1	—	54
労働者	165	0.6	0.9	0.8	389	249	140	84	18	63	17	2,402

の少ない、零落しつつある経営主の特徴である。反対の意義をもつものは第三の方法である。「働き手」による耕作、すなわち、経営主による農業（「土仕事」）の働き手の雇用である。これらの労働者はふつう夏中やとわれ、そしてとくに忙しいときには、経営主はふつう彼らの手助けに作業場の労働者を送りこむ。「こうして、『土仕事』の働き手をつかっての土地耕作方法は、かなり有利な事業である」（『モスクワ県の営業』、第六巻第一冊、四八ページ）。われわれの表には、一六の営業についてこの土地耕作方法にかんする情報をのせてあるが、そのうちの七つには「土仕事の働き手」をやとう経営主がまったくいない。これら一六の営業全体については、農業労働者をやとう経営主＝営業者のパーセントは一二％であるが、等級別では、（I）四・五％、（II）一六・七％、（III）二七・三％である。営業者が資力があればあるほど、彼らのなかにはそれだけ多く農業企業家が見うけられる。したがって、営業的農民にかんする資料の分析は、われわれが第二章で農耕農民層にかんする資料にもとづいて見たのと同じ、工業と農業の双方における並行的な分解の様相をしめしている。

＊　帽子製造業を記述した執筆者が、ここでもまた、農業と工業の双方における農民の分解に「気づかなかった」ことは、特徴的である。すべてのナロードニキと同様に、彼は、その結論ではまったく無内容な月並みにとどまっている。「営業は農業に従事するのを妨げない」（『モスクワ県の営業』、第六巻第一冊、二三一ページ）。こうして、営業の構造においても農業の構造においても、社会経済的矛盾は無事に回避されている。

「クスターリ」＝経営主による「土仕事の働き手」の雇用は、一般に、すべての工業県に非常に普及している現象である。たとえば、われわれは、ニジェゴロド県の富裕な莚（むしろ）製造業者による雇農の雇用にたいする指摘を見うける。

収入（ルーブリ）					支出（ルーブリ）			差引	貨幣支出のパーセント
現物	貨幣	うち			現物	貨幣	合計		
		農業から	毛皮製造業から	合計					
212.8	697	409.8	500	909.8	212.8	503	715.8	＋194	70
88*	120	138	70	208	88	124	212	－ 4	58
15*	75	50	40	90	15	111	126	－ 36	88

分の穀物でどれだけの期間たりるか，ということについての執筆者の資料によって，

同じ県の毛皮製造業者は、ふつう純農業的な周辺の農村から出てくる農業労働者をやとっている。靴製造業に従事している「キムルィ郷の共同体農民は、自分の畑を耕作するために、トヴェーリ郡とその近隣の地方から大挙してキムルィへやってくる雇農や女子労働者を雇用するのが有利だと見ている」。コストロマ県の食器着色業者は、営業の仕事がひまなときには、自分の賃金労働者を畑仕事にやる。* 「自立した経営主たち」（ウラヂーミル県の金属箔製造業者）「は特別の畑仕事の働き手をもっている」。そのため、彼ら自身は「耕すことも刈りとることもまったく全然できない」のに、彼らの畑はよく耕されている。** モスクワ県では、われわれの表でその資料をあげたもののほかに、多くの営業者が「土仕事の働き手」の雇用にたよっている。たとえば、ピン製造業者、フェルト製造業者、玩具製造業者は、自分の労働者を畑仕事にもおくっている。装身具製造業者、金属箔製造業者、ボタン製造業者、縁なし帽製造業者、銅製馬具製造業者は雇農をもっている、*** 等々。この事実——農民＝営業者による農業労働者の雇用——の意義は、非常に大きい。この事実は、農民的小営業においてさえ、すべての資本主義国に固有の現象、資本主義の進歩的な歴史的役割を確認するのに役だつ現象、すなわち住民の生活水準の向上とその欲望の向上が、現われはじめていることをしめしている。営業者は、家父長制的な野性をもつ「粗野な」農耕者を見下しはじめ、そして最も苦しくて割の悪い農業労働をまぬかれようとつとめる。資本主義のきわめて微弱な発展を特徴と

〔第 82 表〕

資産状態別の家族の型	男女人員数	男女働き手	賃金労働者	土地(デシャチーナ)	土地	
					借入れ	貸出し
富裕	14	3	2 雇用する	19	5	—
中位	10	2	—	16	—	—
貧困	7	2	自分がやとわれる	6	—	6

* 『クスターリ委員会報告書』第3巻，381ページ以下．* 印をつけた数字は，自近似的に計算したもの．

する小営業では、この現象はまだきわめて弱くしか現われない。工業労働者はまだ農業労働者からやっと分化しはじめたばかりである。あとで見るように、資本主義工業のその後の発展諸段階では、この現象は大量に観察される。

* 『クスターリ委員会報告書』、第三巻、五七、一一二ページ。第八巻、一三五四ページ。第九巻、一九三一、二〇九三、二一八五ページ。

** 『ウラヂーミル県の営業』、第三巻、一八七、一九〇ページ。

*** 『モスクワ県の営業』、前掲同所。

「農業と営業との結びつき」の問題は重要なので、われわれは、モスクワ県以外の他の諸県にかんする資料をもっとくわしく検討しなければならない。

ニジェゴロド県。多くの筵製造業者のところで農業が衰退し、彼らは土地を放棄しつつある。秋播畑の約三分の一と春播畑の約二分の一は「荒地」である。だが、「富裕な百姓」にとっては、「土地はすでにいじわるな継母ではなく、一家を養う母である」。家畜は十分にいるし、肥料はあり、土地を借り、自分の持ち分の土地を割替から除こうとつとめ、それらをよく手入れしている。「いまや、わが兄弟たる富んだ百姓は地主になったが、他の百姓——貧農——は地主にたいして農奴のように従属している」(『クスターリ委員会報告書』、第三巻、六五ページ)。毛皮製造業者は「まずい耕作者」であるが、ここでも、「貧しい同村人から土地を借りる」等々しているより大きな経営主を区別

しなければならない。つぎにあげるのは、さまざまなグループの毛皮製造業者の典型的な家計の総括である。〔第八二表〕

農耕者の分解と営業者の分解とが並行してすすむことが、ここではまったくはっきり現われている。鍛冶職人について、調査者は、一方では金持の経営主にとって、他方では「水呑百姓」の労働者にとって、「この営業は農業よりも重要である」と述べている（前掲書、第四巻、一六八ページ）。

『ウラヂーミル県の営業』では、営業と農業との相立関係の問題が、他のどの調査よりも比較にならないほど詳細に研究されている。多くの営業について、たんに「クスターリ」一般の農業にかんしてだけでなく（このような「平均」数字は、上述のすべてのことから明らかなように、まったくの虚構である）。大経営主と小経営主と賃金労働者、機小屋の持ち主と織工、営業者＝経営主とその他の農民、地元の営業に従事している農家と出稼営業に従事している農家、等々という「クスターリ」の種々の部類やグループの農業にかんする、正確な資料があたえられている。この資料からハリゾメノフ氏がくだした一般的結論は、次のようにいっている。――「クスターリ」を、（一）大きな営業者、（二）中小の営業者、（三）賃金労働者という三つのカテゴリーに分けると、第一のカテゴリーから第三のカテゴリーへゆくにつれて、農業の劣悪化、土地と家畜の量の減少、「没落した」経営のパーセントの増大、等々が見うけられる、と。[*] 残念ながら、ハリゾメノフ氏は、これらの資料をあまりにせまく一面的にしか見なかったので、これと並行する、また独自に起こる、農耕農民の分解の過程を考慮に入れなかった。そのため彼は、これらの資料から不可避的に出てくる結論、すなわち、農民層は農業においても工業においても小ブルジョアジーと農村プロレタリアートに分解してゆくという結論を、くださなかった。[**] またそのため彼は、個々の営業の記述において、「営業」一般の「農業」一般にたいする影響にかんする伝統的なナロードニキ的議論（たとえば、『ウラヂーミル県の営業』、第二巻、二八八ページ、第三巻、九一ページを見よ）にまで、すなわち、彼自身が確認すべきはずであった、営業と農業の双方の構造そのもののなかにおける深刻な矛盾を無視するところにまで、しばしばおちこんでいる。ウラヂーミル県の営業のもう一人の調査者ヴェ・プルガーヴィン氏は、この問題にかんするナロードニキ的見解の典型的な代表者である。彼の議論の見本は次のようなぐあいである。ポクロフ郡における綿織物業は、「織工たちの農業生活のなかの有害な原理（原文のまま!!）と認めることは一般にできない」（第四巻、五三ページ）。資料は、多数の織工の農業が

劣悪であること、機小屋の持ち主にあっては農業が一般的水準よりもずっと高いことを、証明している（同所を見よ）。表から明らかなように、若干の機小屋の持ち主は農業労働者をもやとっている。結論——「営業と農業とは、相互に発展と繁栄を条件づけながら、手に手をとってすすむ」（六〇ページ）。これは、農民ブルジョアジーの発展と繁栄が営業においても農業においても手に手をとってすすむ、という事実をぼかす空文句の一つの見本である。***

* 『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』〔『法律通報』〕、一八八三年、第一四巻、一一号および一二号を見よ。

** ハリゾメノフ氏がこのような結論にどんなに近いかは、彼が絹業の記述のなかであたえた、農民改革後の経済発展の次のような特徴づけから明らかである。「農奴制度は農民の経済的水準を均等化していた。それは、富裕な農民の手をしばり、貧農をささえ、分家を妨げていた。現物経済は商工業活動にとっての舞台をあまりにも狭めていた。地方市場は、企業精神にとって十分に広い活動の場をあたえなかった。商人あるいは農民営業者は、たしかに、危険をおかさずに貨幣をためこみはしたが、そのかわりきわめてゆっくり、のろのろと——金櫃のなかにためこんだのである。六〇年代からは条件が変わりつつある。農奴制度は廃止され、信用や鉄道は、広大な遠隔地の市場をつくりだし、企業心に富む農民＝商人や営業者に活動の余地をあたえている。平均的経済水準よりも上位にあったすべての人は、急速に立ちあがり、商業や工業を発展させ、自分の開発活動を量的に質的にひろげている。この水準よりも下位にあったすべての人は、没落し、おちぶれ、土地をもたないもの、経営をもたないもの、馬をもたないものの隊列にはいってゆく。農民は、クラーク、中位の富裕者、および経営をもたないプロレタリアートのグループに分解しつつある。農民層のクラーク分子は、文化的社会のすべての習慣を急速にとりいれている。彼らは旦那のような生活をし、そのなかから、ロシア社会の、数的に膨大ななかば文化的な諸階層からなる、一階級が形成されつつある」（第三巻、二〇—二一ページ）。

*** ヴェ・ヴェ氏も、彼の『クスターリ工業概論』の第八章で、この問題について同じような空文句をいうにとどまっている。「穀物耕作は営業をささえる」（二〇五ページ）。「クスターリ営業は、工業県における農業の最もたよりになるとりでの一つをなしている」（二一九ページ）。証拠は？　いくらでもおのぞみしだい。たとえば、経営主——皮革業者、澱粉製造業者、搾油業者（前掲書、二二四ページ）等々——をとってみたまえ。そうすると、彼らにあっては農業が大衆におけるよりも上位にあることがおわかりだろう！

一八九四／九五年のペルミ県クスターリ調査の資料も、まったく同じ現象をしめした。すなわち、小商品生産者（経営主と小経営主）にあっては、農業は最も高度であり、農業労働者が見うけられる。手工業者にあっては、農業はこれより低く、さらに、買占人のために仕事をするクスタ

ーリにあっては、農業の状態は最も悪い（賃金労働者や経営主のさまざまなグループの農業については、残念ながら、資料があつめられていない）。調査はまた、耕作をしない「クスターリ」は耕作をするものと比較して、次の点でちがっていることを明らかにした。（一）労働生産性がより高い、（二）営業からの純収入の額が比較にならないほど高い、（三）文化水準と読み書き能力がより高い。これらのことはすべて、資本主義の最初の段階においてさえ、住民の生活水準を高めるという産業の傾向が見うけられるという、さきにくだした結論[一〇〇]を確証する現象である（『試論』、一三八ページ以下を参照）。

最後に、農業にたいする営業の関係の問題に関連して、次のような事情が存在する。より大きな事業所ではふつう労働期間がより長い。たとえば、モスクワ県の家具製造業では、白木指物の区域では労働期間は八ヵ月（作業場の平均的構成はここでは労働者一・九人）、曲物の区域では一〇ヵ月（一事業所あたりの労働者二・九人）、大型家具の区域では一一ヵ月（一事業所あたりの労働者四・二人）である。ウラヂーミル県の靴製造業では、一四の小さな作業場の労働期間は四〇週であるが、八つの大きな作業場（小さな作業場の一事業所あたりの労働者二・四人にたいして、九・五人）では四八週である、等々。* 明らかに、この現象は、大きな事業所では労働者（営業の家族労働者と賃金労働者、および農業の賃金労働者）の数が多いことと関連があり、またそれは、大きな事業所の大きな安定性と、それらが営業活動に専門化する傾向とを、説明している。

* 典拠はさきにかかげたとおり。同じ現象を、モスクワ県の篩製造業者、ギター製造業者、澱粉製造業者の戸別調査が明らかにしている。ペルミ県のクスターリ調査もまた、大きな作業場の労働期間がより長いことを指摘した（『ペルミ県のクスターリ営業の概観』、七八ページを見よ。残念ながら、このことにかんする正確な資料はあがっていない）。

さて、「営業と農業」にかんする上述の資料について総括しよう。われわれが考察している資本主義のより低い段階では、営業者はふつうまだほとんど農民から分化していなかった。営業と農業との結合は、農民層の分解が激化し深化する過程できわめて重要な役割を演じる。富裕で資力のある経営主は作業場を開設し、農村プロレタリアートのなかから労働者をやといいれ、商業取引や高利貸業務のための資金をたくわえる。これとは反対に、貧農層に属する人々は、賃金労働者、買占人のために仕事をするクスターリ、および、クスターリ小経営主の下層集団を供給する。このように、営業と農業との結合は、資本主義的関係を、工業から農業

へ、またその逆へとひろめながら、強固にし発展させてゆく。* 資本主義社会に固有の工業の農業からの分離は、この段階ではまだ最も萌芽的な形態で現われているにすぎない。だがそれはすでに現われており、しかも——これがとくに重要なのだが——ナロードニキが考えているのとはまったく違った仕方で現われている。営業は農業に「害」をあたえないというとき、ナロードニキはこの害を有利な営業のために農業が放棄されることにあると見ている。だが事態のこのような表象は作りごとであり（事実からの結論ではなく）、しかも劣悪な作りごとである。なぜなら、それは、農民層の全経済構造を貫く矛盾を無視しているからである。工業の農業からの分離は、農民層の分解と関連してすすみ、農村の両極でそれぞれ異なる道をすすむ。富裕な少数者は工業事業所を開設し、それを拡大し、農業を改善し、農耕のために雇農をやといいれ、一年のますます多くの部分を営業にあてる。そして——営業のある発展段階では——工業企業を農業企業から分離させること、すなわち、農業を家族の他の成員にゆずったり、建物、家畜その他を売ったりして、町人、商人になることを、より有利と考える。** この場合、工業の農業からの分離にさきだって、農業で企業家的関係が形成される。農村の他の極では、工業の農業からの分離は、貧農層が零落して賃金労働者（営業および農業の）に転化することにある。農村のこの極では、営業の有利さがではなく、困窮と零落が、土地を、しかも土地だけでなく自立的な営業労働をも、放棄させることをよぎなくさせる。工業の農業からの分離過程は、ここでは小生産者の収奪過程なのである。

* たとえば、ウラヂーミル県の羊毛業では、大「工場主」や小親方は、農業が最も高い水準にあるという特徴をもっている。「生産の停滞期には、小親方は土地を買って経営に従事しようとつとめ、営業はまったく見捨ててしまおうとする」（『ウラヂーミル県の営業』、第二巻、一三一ページ）。この例は注目に値する。というのは、このような事実は、「農民はふたたび農業にかえってゆく」とか、「土地を追われたものは土地にかえされなければならない」とか結論する口実を、しばしばナロードニキにあたえるからである（ヴェ・ヴェ氏、『ヴェーストニク・エヴローピィ』、一八八四年、第七号）。

** 「最近、若干の富裕な工業経営主が営業のためにモスクワに移住したことを、農民たちは説明した」（『一八九五年の調査にかんするブラッシ製造業』、五ページ）。

八　「営業と農業との結合」

これは、ヴェ・ヴェ氏やニコライ—オン氏とその一派が、ロシアにおける資本主義の問題を解決しようとおもうとき

につかう、お好みのナロードニキ的公式である。「資本主義」は工業を農業から分離させる。「人民的生産」は、典型的で正常な農民経営のうちにそれらを結合する。――この巧まざる対置のなかに彼らの理論の良い部分がある。いまやわれわれは、実際にわが国の農民層がどのように「営業と農業とを結合している」かという問題について、総括をすることができる。なぜなら、さきに農耕農民層および営業農民層における典型的な諸関係が詳細に考察されたからである。ロシアの農民経営の経済のなかに見うけられる「営業と農業との結合」のさまざまな形態を列挙しよう。

（一）家父長制的（現物経済的）農業が、家内工業（すなわち、自家消費のための原料の加工）および土地所有者のための賦役労働と結合している。

農民的「営業」と農業とのこの種の結合は、中世の経済制度にとって最も典型的なものであり、この制度の不可欠な構成部分である。* 農民改革後のロシアでは、このような家父長制的経済――そのなかには、資本主義も、商品生産も、商品流通も、まだまったく存在しない――から、その破片だけが、すなわち、農民の家内工業と雇役が残った。

＊ コルサックは、前掲書の第四章で、たとえば、「修道院長は村中に亜麻をくばって紡がせた」とか、農民は土地の所有者に「農繁期の労働や一定の給付」の義務を負っていたというような、歴史的証拠をあげている。

（二）家父長制的農業が、手工業の形での営業と結合している。

結合のこの形態は、前者とまだ非常に近い。ちがうところはただ、ここでは商品流通が出現する――手工業が貨幣で支払いを受け、用具や原料その他を買うために市場に現われるという場合に――ということだけである。

（三）家父長制的農業が、市場めあての工業生産物の小規模生産と、すなわち工業における商品生産と、結合している。家父長制的農民は小商品生産者に転化し、彼らは、さきにしめしたように、賃労働の使用に、すなわち資本主義的生産にひかれてゆく。この転化の条件は、農民層の分解がすでにある程度まですすんでいることである。さきに見たように、工業における小さな経営主たちは、多くの場合、農民の富裕なまたは資力ある集団に属している。そして工業における小商品生産の発展は、こんどは農耕農民の分解にいっそうの刺激をあたえる。

（四）家父長制的農業が、工業における（また農業においても）賃労働と結合している。*

＊ さきにしめしたように、わが国の経済文献や経済統計のなかには、農民の「営業」のなかに、家内工業も、雇役も、手工業も、小商品生産も、商業も、工業における賃労働も、農

業における賃労働、その他も入れるという、用語の混乱が支配している。ナロードニキたちがこの混乱をどのように利用しているかという例をあげよう。ヴェ・ヴェ氏は、「農業と営業との結合」を賛美して、この例証のために「木材業」と「雑役」とをあげる。「彼（農民）は力が強く、苦しい労働になれているので、あらゆる種類の雑役をすることができる」（『クスターリ工業概説』、二六ページ）。そしてこのような事実が、山ほどある他の事実のなかで、次のような結論を確証するのにもちだされるのである。すなわち、「われわれは職業の特殊化にたいする抗議を見る」、「すでに現物経済の優勢な時期につくりあげられた生産組織の堅固さ」（四一ページ）を見る、と。このように、農民の木材労働者や雑役労働者への転化でさえ、ことのついでに現物経済の堅固さの証拠とさされてしまうのである！

この形態は、前者の必然的な補足物をなす。さきには商品となるのは生産物であるが、ここでは労働力がそうなる。さきに見たように、工業における小商品生産は、賃金労働者と、買占人のために仕事をするクスターリとの出現を不可避的にともなう。「農業と営業との結合」のこの形態は、すべての資本主義国に固有なものであって、農民改革後のロシア史の最もきわだった特性の一つは、この形態のきわめて急速できわめて広範な普及にある。

（五）小ブルジョア的（商業的）農業が、小ブルジョア的営業（工業における小商品生産、小商業、その他）と結合している。

この形態と第三形態との違いは、小ブルジョア的関係がここでは工業だけでなく農業をもとらえている点にある。この形態は、農村小ブルジョアジーの経済における営業と農業との結合の最も典型的な形態であり、だからすべての資本主義国に固有のものである。小ブルジョアジーのいない資本主義を発見した栄誉は、ロシアのナロードニキ経済学者だけのものである。

（六）農業における賃労働が工業における賃労働と結合している。営業と農業とのこのような結合がどのように現われているか、またこの結合がどのような意義をもつかについては、すでにさきに述べておいた。

このように、わが国の農民層における「農業と営業との結合」の形態は、きわめて多種多様であることを特徴とする。現物経済の支配する最も原始的な経済構造をあらわすようなものもあれば、資本主義の高度の発展をあらわすようなものもある。前者と後者とのあいだには一連の過渡的な段階がある。一般的定式（「営業と農業との結合」とか、「工業の農業からの分離」とかというような）にとどまっているかぎり、資本主義の実際の発展過程を解明する仕事で一歩も踏みだすことはできない。

九　わが国の農村の前資本主義的経済にかんする若干の所見

わが国ではしばしば「ロシアにおける資本主義の運命」の問題の本質は、どのように急速に？（すなわち、どのように急速に資本主義が発展しつつあるか？）という問題が主要な意義をもつかのように、えがかれている。だが実際には、まさにどのようにして？という問題と、どこから？（すなわち、ロシアにおける前資本主義的構造はどのようなものであったか？）という問題が、比較にならないほど重要な意義をもっている。ナロードニキ経済学の最も主要な誤りは、まさにこれら二つの問題にたいするまちがった解答にある。すなわち、ロシアで資本主義がまさにどのように発展しつつあるかについての正しくない描写と、前資本主義的制度の誤った理想化にある。第二章（部分的には第三章）と本章で、われわれは小規模農業と農民的小営業における資本主義の最も初発的な諸段階を考察した。その考察にさいして、不可避的に前資本主義制度の特徴なんども指摘しなければならなかった。いまこれらの特徴を総括してみると、次のような結論が得られる。すなわち、前資本主義的な農村は、（経済的側面からすれば）小生産者たちのごく小さな集団を結びつける地方的小市場の網をなしており、そしてそれら小生産者たちは、その孤立した経営によって、それらのあいだの数多くの中世的な障壁によって、また中世的な隷属の遺物によって、細分されていたのである。

小生産者たちの細分状態についていえば、それは、農業においても工業においてもさきに確認された彼らの分解のなかに、なによりもはっきり現われている。だが細分状態はけっしてこれだけにかぎられない。農民は、共同体によってごく小さな行政的・納税的および土地所有者的な団体に統合されていながら、しかし分与地の大きさ、賦払金の額、その他によってもろもろの部類やカテゴリーに種々さまざまに区分されることによって、細分されている。ひとつ、サラトフ県のゼムストヴォ統計集でもとってみよう。農民層はここでは次のような部類に分けられている。すなわち、贈与地農民、土地所有農民、完全土地所有農民、国有地農民、共同体的保有をもつ国有地農民、四分の一地保有の国有地農民、もと地主に属していた国有地農民、皇室領農民、官有地の借地農、土地をもたない農民、旧地主地の所有農民、買いとった屋敷に住む土地所有農民、旧皇室領地の所有農民、開拓地所有農民、移住農民、もと地主に属していた贈与地農民、もと国家地農民であった土地所有

農民、解放農民、無年貢農民、自由耕作農民、一時義務負担農民、旧農奴工場の農民、等々、そしてさらに、登録農民、外来の農民、その他である。これらすべての部類は、農地関係の歴史、分与地と賦払金の大きさ、その他等々によって区別されている。そしてこの部類の内部にも、同じような区別がたくさんある。たとえば、同じ村の農民でさえ、ときには二つのまったくちがったカテゴリーに、すなわち「領主某に属していた農民」と「女領主某に属していた農民」に、分けられていたりする。すべてこれらの多様性は、中世には、遠い過去の時代には、自然で必然的なことであった。ところが現在では、農民社会の身分的閉鎖性を維持することは驚くべき時代錯誤であって、勤労者大衆の状態を極度に悪化させ、しかも同時に、新しい資本主義時代の諸条件の重荷からすこしも彼らを防衛しないのである。ナロードニキはこの細分状態に目をつぶるのをつねとする。そして、マルクス主義者が農民層の分解の進歩性について意見を述べると、ナロードニキは「土地収奪の支持者」に反対して紋切型の叫びをあげるだけであり、その叫びによって前資本主義的農村にかんする自分の考えの完全な誤りをおおいかくすのである。資本主義の進歩性を確信するためには、家父長制的農業の不可避的な帰結であった小生産者のあの驚くべき細分状態を思いうかべるだけでよい。資本主義は、数世紀にわたる不動と旧慣墨守をともなった経済と生活の古い形態を根底から破壊し、中世的な障壁のうちに硬化した農民の定着性を破壊し、新しい社会諸階級をつくりだすのであるが、これらの階級は必然的に結合へ、統合へ、国家と全世界のあらゆる経済生活（たんに経済生活だけではないが）にたいする積極的な参加へと、努力するのである。

手工業者または小営業者としての農民をとってみても、諸君はまったく同じことを見るであろう。彼らの関心は、周辺の村落の小さな範囲の境界をこえてそとには出ない。地方市場の微々たる大きさのため、彼らは他の地区の営業者と接触することがない。彼らは「競争」を火のようにおそれる。競争は、だれによってもなにによってもその旧慣墨守の無為な生活をみだされることのない、小さな手工業者や営業者の家父長制的な楽園を容赦なく破壊するからである。これらの小営業者にかんしては、競争と資本主義は有益な歴史的働きをするのであって、彼らをその僻地から追いだし、より発展した住民層のまえにすでに提起されているすべての問題を彼らのまえにもちだすのである。

小さな地方的市場の不可欠な付属物は、手工業の原始的な形態のほか、商業資本および高利貸資本のこれまた原始的な形態である。農村が辺鄙であればあるほど、それが新

しい資本主義的制度、鉄道、大工場　資本主義的大農業の影響から遠くはなれていればいるほど、地方の商人と高利貸の独占はそれだけ強く、周辺の農民の彼らにたいする従属はそれだけ強く、この従属はそれだけ粗野な形態をとる。これらの小吸血鬼の数はおびただしく（農民のもとにある生産物のわずかな量にくらべて）、彼らを標示するのにたくさんのいろいろな地方的名称が存在する。プラーソル〔魚や肉の買占人〕、シバイ、シチェチンニク〔剛毛の買占人〕、マヤーク〔嘘つき商人〕、イヴァシ、ブルィニヤ〔家畜、麻などの買占人〕、その他等々を思いだしてみたまえ。現物経済が優勢であるため、農村では貨幣が少なくその価値が高いので、すべてこれらの「クラーク」の意義は、その資本の大きさとくらべて測りしれないほど大きなものとなる。貨幣の所有者にたいする農民の従属は、不可避的に債務奴隷の形態をとる。大きな商品取扱資本や貨幣取扱資本のない発展した資本主義を考えることができないのとまったく同じように、小さな地方的市場の「主人」である小さな商人や買占人のいない前資本主義的農村を考えることはできない。資本主義は、これらの市場を結合し、それらを大きな国民的市場に、ついでは全世界的市場に統合し、債務奴隷と人格的従属の原始的な形態を破壊し、共同体農民のなかにも萌芽的な形態で見られる諸矛盾を深くまた広く発展させ——こうして、それらの矛盾の解決を準備するのである。

第六章　資本主義的マニュファクチュアと資本主義的家内労働

一　マニュファクチュアの形成とその基本的諸特徴

周知のように、マニュファクチュアとは分業にもとづく協業のことである。マニュファクチュアは、その発生においては、さきに述べた「工業における資本主義の最初の諸段階」に直接つづくものである。一方では、かなりの数の労働者をもつ作業場がしだいに分業をとりいれ、こうして資本主義的単純協業が資本主義的マニュファクチュアに成長転化する。前章であげたモスクワ県の営業にかんする統計資料は、マニュファクチュアがそのようにして発生する過程をはっきりしめしている。すなわち、第四カテゴリーのいくつかの営業の、第三カテゴリーのいくつかの営業の、および第二カテゴリーの一―二の営業の、比較的大きな作業場は、系統的に分業を大規模に適用しており、だからそれらは資本主義的マニュファクチュアの見本とされなければならない。あとで、これらの営業のうちのいくつかについて、その技術と経済にかんするより詳しい資料をあげることにする。

他方では、われわれは、小営業における商業資本が最高の発展段階に達すると、それは生産者を出来高払いで他人の原料を加工する賃金労働者の地位におとしいれることを見た。さらに発展がすすんで、系統的な分業が生産に導入され、これが小生産者の技術を改革するようなれば、また、「買占人」たちが若干の部分作業を取りだし、それを自分の作業場で賃金労働者によっておこなうようになれば、さらに、家々へ仕事を下請に出すのとならんで、それと不可分に関連して分業制の大作業場（しばしば同じ買占人に属している）が現われるようになれば、そこに見られるのは資本主義的マニュファクチュアの別の種類の発生過程である。*

＊　資本主義的マニュファクチュアのこのような発生過程については、マルクス『資本論』、第三巻、三一八―三二〇ページ、ロシア語訳二六七―二七〇ページを見よ。(三)

「マニュファクチュアは旧来の同職組合の胎内で生まれたのではない。近代的工場の支配人となったのは商人であって、同職組合の旧来の親方ではなかった」（『哲学の貧困』、一九〇ページ）[163]。マルクスによるマニュファクチュア概念の基本的標識については、われわれは別の箇所で列挙したことがある（『試論』、一七九ページ）[164]。

工業の資本主義的形態の発展において、マニュファクチュアは、手工業や資本の原始的な諸形態をともなう小商品生産と機械制大工業（工場）のあいだの中間の環として重要な意味をもっている。マニュファクチュアの基盤が依然として手労働技術であり、そのため大きな事業所も小さなものを根本から駆逐することはできず、工業従事者を農業から完全に切りはなしえないという事情は、マニュファクチュアを小営業に近いものにしている。「マニュファクチュアは、社会的生産をその全範囲にわたってとらえることも、その根底から（in ihrer Tiefe）変革することもできなかった。それは、都市手工業と農村家内工業との広範な基礎のうえに、経済的作品としてそびえたっていた」*。だが大規模な市場や、賃金労働者のいる大きな事業所や、無産の労働者大衆を完全に従属させる大資本が形成されることは、マニュファクチュアを工場に近いものにしている。

* 『資本論』、第一巻、第二版、三八三ページ[165]。

ロシアの文献では、いわゆる「工場制」生産と「クスターリ」生産とのあいだには断絶があるとか、前者は「人為的」で、後者は「人民的」性格をもつとかいう偏見が非常にひろまっている。それでわれわれは、加工工業のすべての重要な部門にかんする資料を再検討し、それらの部門が農民的小営業の段階から成長してから機械制大工業に改造されるまでのあいだに、それらの経済組織はどのようなものであったかをしめすことが、とりわけ重要だと考える。

二 ロシアの工業における資本主義的マニュファクチュア

繊維製品を加工する工業からはじめよう。

（一） 織物業

亜麻織物、毛織物、綿織物、絹織物、組紐その他の織布業は、わが国では（機械制大工業が現われるまでは）どこでも次のように組織されていた。営業の頂点には、数十人とか数百人の賃金労働者をもつ大規模な資本主義的作業場があった。これらの作業場の経営主は大きな資本をもっていて、大規模に原料を買いいれ、その一部を自分の事業所で加工し、一部は紡糸や経糸を小生産者たち（機小屋の持

ち主、下請人(一六〇)、小親方、「クスターリ」農民、その他)にくばり、そしてこの人たちが各自の家または小さな仕事場で出来高払いで布を織っていた。生産そのものの基礎をなしていたのは手労働であったが、そのさい個々の労働者のあいだに次のような個々の作業が割りあてられていた。(一)紡糸の染色、(二)紡糸の巻取り(この作業には婦人と子供が専門に従事していることが多かった)、(三)紡糸の機掛け(「機掛」労働者)、(四)織布、(五)織布工のための緯糸巻き(糸巻工の仕事、大部分は子供)。そのほかに、大きな作業場に特殊な労働者として糸通し工(機台の綜絖や筬の孔に経糸を通す)がいる場合もある。* 分業は、通常、作業別だけでなく、商品別にもおこなわれており、織物工たちは別個の種類の織物の生産に専門化されている。生産の若干の作業が家内労働むけに別にされていても、もちろん、この種の型の工業の経済構造にはなんの変化もない。織物工が仕事をする機小屋や自宅は、マニュファクチュアの外業部にすぎない。このような工業の技術的基盤は、広範で系統的な分業をともなう手労働生産である。経済的な側面では、そこに見られるのは、きわめて広範囲な(全国的な)市場での原料の購入や製品の販売をとりしきり、多数のプロレタリア織物工を完全に従属させている、巨大な資本の形成である。小数の大きな事業所(狭義のマニュファクチュア)が多数の小さな事業所を支配している。分業は農民層のなかから職人を分離させる。そして、たとえば、ヴラヂーミル県のイヴァノヴォ村(一八七一年以降はイヴァノヴォ－ヴォズネセンスク市、現在では機械制大工業の中心地)や、ヤロスラヴリ県のヴェリーコエ村、またモスクワ、コストロマ、ヴラヂーミル、ヤロスラヴリの諸県の、いまではもう工場町になってしまった多くの村々** のような、非農業的なマニュファクチュア中心地が形成されてくる。

このようにして組織された工業は、わが国の経済文献や統計のなかではふつう二つの部分に分断されている。すなわち、各自の家で、あるいはあまり大きくない機小屋や作業場などではたらいている農民は「クスターリ」工業に入れられ、より大きな機小屋や作業場は「工場」のなかにはいっている(しかも、まったく偶然にはいっている。というのは、小さな事業所と大きな事業所、機小屋とマニュファクチュア、自分の家で仕事する労働者と資本家の作業場で仕事する労働者のあいだの区別にかんする、正確に定められ一様に適用される原則がなにもないからである)。*** 一方の側に若干の賃金労働者を入れ、他の側にほかならぬこれらの賃金労働者を(仕事場の労働者以外に)やとっている若干の経営主たちを入れているこのような分類が、科学的見地からすれば non-sens〔ナンセンス〕であることは、

明らかである。

* 『モスクワ県統計報告集』、第七巻、第三冊（モスクワ、一八八三年）、六三―六四ページを参照。

** 次の章でこの型の主要な町を列挙するのを見よ。

*** このような混乱の例は次の章であげる。

右に述べたことを「クスターリ織物」業の一つ、すなわちヴラヂーミル県の絹織物業にかんする詳しい資料によって例解しよう。* 「絹織物業」は典型的な資本主義的マニュファクチュアである。手労働生産が優勢である。事業所総数中の大多数は小さな事業所である（三一三のうちの一七九、すなわち総数の五七%が、一―一五人の労働者をもつものである）が、それらの大部分は自立的でなく、工業全体のなかでもつ意義の点では大きな事業所にはるかにおよばない。二〇―一五〇人の労働者をもつ事業所は総数の八%（二五）であるが、それらには労働者総数の四一・五%が集中されており、それらは生産総額の五一%を産出している。この営業における労働者総数（二、八二三人）のうち、賃金労働者は二、〇九二人、すなわち七四・一%である。「生産においては商品別分業も作業別分業も見うけられる」。織物工が「ビロード」と「繻子刺繍」（この生産部門における二つの主要な商品種類）の両方をつくる技能をあわせもつことはまれである。「作業場内部での作業別分業は、賃金労働者をもつ大工場」（すなわちマニュファクチュア）「でのみ最も厳格におこなわれている」。完全に自立的な経営主は一二三人にすぎず、彼らだけが自分自身で材料を買いいれて生産物を販売している。彼らは二四二人の家族労働者をもっており、さらに「大部分が出来高で支払いを受ける二、四九八人の賃金労働者が彼らのためにはたらいている。」――したがって、全体で二、七四〇人の労働者が、つまり労働者総数の九七%がそこではたらいているわけである。このように、これらのマニュファクチュア経営主が「下請人」（機小屋の持ち主）をとおして仕事を家内作業へ出すことが、けっして工業の特殊な形態をなすものでなく、マニュファクチュアにおける資本の業務の一つにすぎないことは、明らかである。ハリゾメノフ氏が次のように述べているのは当を得ている。「大きな事業所の数がきわめて少なくて小さな事業所が多数存在し、平均した場合の事業所あたりで計算した労働者数がとるにたりない（七・五人）ことは、生産の真の性格を隠蔽する」（前掲書、三九ページ）。マニュファクチュアに固有の職業の専門化は、ここでは、工業従事者の農業からの分離（一方では窮乏化した織物工が、他方ではマニュファクチュア経営主が、土地をすてる）や、農耕者とは比較にならないほど「きれいな」暮しをし、百姓を見くだす特殊な型の工業人口の形成に、

はっきり現われている（前掲書、一〇六ページ）。わが国の工場統計はいつも、この営業のうちのたまたまとりだされた小部分だけを記録してきたのである。**

* 『ウラヂーミル県の営業』、第三冊を見よ。わが国のクスターリ工業の文献で記述されているすべての織物業についての詳しい資料をあげることは、不可能でもあり、よけいなことでもあろう。しかも現在では、これらの営業の大部分で、すでに工場が支配的である。「クスターリ織物業」については、さらに、『モスクワ県統計報告書』、第六および第七巻、――『クスターリ委員会報告書』、――『手労働の統計にかんする材料』、――『報告と調査』、――コルサック、前掲書を見よ。

** 『陸軍統計集』は、一八六六年のウラヂーミル県について、九八人の労働者をもつ生産額四、〇〇〇ルーブリ（！）の九八の絹織物工場（！）を、かぞえあげることをあえてした。一八九〇年度の『工場案内』によると、三五工場――労働者二、一一二人――九三万六〇〇〇ルーブリとなっている。一八九四／九五年度の『工場一覧表』によると、九八工場――労働者二、二八一人――一九一万八〇〇〇ルーブリ、そのほかに、「事務所外に、外部に」労働者二、四七七人となっている。さあどうぞ、「クスターリ」と「工場労働者」とを区別してみられたい！

モスクワ県の「組紐製造業」は、まったく同様な組織をもつ資本主義的マニュファクチュアである。* サラトフ県カムィシン郡の縞木綿製造業も、まったく同様である。一八九〇年度の『工業案内』によれば、そこには、四、二五〇人の労働者をもつ生産額二六万五〇〇〇ルーブリの三一「工場」があったが、『工場一覧表』によれば、事業所内労働者三三人、生産額四万七〇〇〇ルーブリの「前貸問屋」が一つとなっている（つまり、一八九〇年には事業所内の労働者と外部の労働者がいっしょくたにされていたのだ！）。現地での調査によれば、一八八八年当時、縞木綿の生産には約七、〇〇〇台**の機台が従事して二〇〇万ルーブリの生産額をあげていた。そして、「全事業の采配をふるのは数人の工場主」であって、一日七―八カペイカの支払いを受ける六―七歳の子供たちをふくむ「クスターリ」たちが、これらの工場主のところではたらいていた（『報告と調査』第一巻）。*** その他等々。

* 一八九〇年度の『工場案内』によれば、モスクワのそとに、三〇三人の労働者をもつ生産額五万八〇〇〇ルーブリの一〇の組紐工場がある。一方、『モスクワ県統計報告集』（第六巻第二冊）によれば、二、六一九人の労働者（うち七二・八％が賃金労働者）をもつ生産額九六万三〇〇〇ルーブリの四〇〇事業所となっている。

** 『一九〇三年度工場監督官報告集成』（サンクト・ペテルブルグ、一九〇六年）は、サラトフ県全体で、一万人の労働者をもつ三三の前貸問屋をかぞえあげている（第二版の注）。

*** この営業の中心地はソスノフスカ郷であるが、ゼムスト

ヴォ調査は、一八八六年にはそこに、三万八〇〇〇人の男女人口をもつ四、六二六世帯と、二九一の工業事業所があったとしている。郷全体では、一〇%の世帯が家屋をもたず（郡の六・二%にたいして）、四四・五%の世帯が作付地をもたなかった（郡全体の二二・八%にたいして）。『サラトフ県統計報告集』、第一一巻を見よ。——したがって、ここでも資本主義的マニュファクチュアは、労働者を土地から引きはなす工業中心地をつくりだしたのである。

（二）その他の繊維工業部門。フェルト製造業

公式の工場統計によって判断すると、フェルト生産は「資本主義」のきわめて微弱な発展をしめしている。すなわち、ヨーロッパ・ロシア全体で、一、二二二人の労働者をもつ生産額四五万四〇〇〇ルーブリの五五工場があるだけである（一八九〇年度『工場案内』）。しかしこれらの数字は、広範に発展した資本主義工業のうちからたまたまもぎとられたひとかけらしかしめしていない。ニジェゴロド県は「工場制」フェルト生産の発展の点で首位を占めているが、この県内でのこの工業の主要な中心地はアルザマス市と近郊のヴィエズドナヤ自由村である（そこには二七八人の労働者をもつ生産額一二万ルーブリの八「工場」がある。住民は一八九七年に三、二二一人であるが、クラースノエ村には二、八三五人いた）。ほかならぬこれらの中心地の周辺で、「クスターリ」のフェルト生産が発展しており、九三五人の労働者をもつ生産額一〇三、八四七ルーブリの約二四三の事業所がそれに従事している（『クスターリ委員会報告書』、第五冊）。この地域におけるフェルト生産の経済組織をひとめでわかりやすくしめすために、営業の全般的構造のなかで特別の位置を占める生産者を特別の符号で標示して、図解してみよう。〔三四五ページの図表を見よ〕

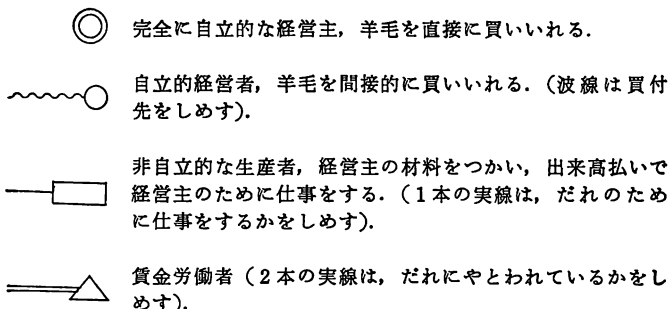
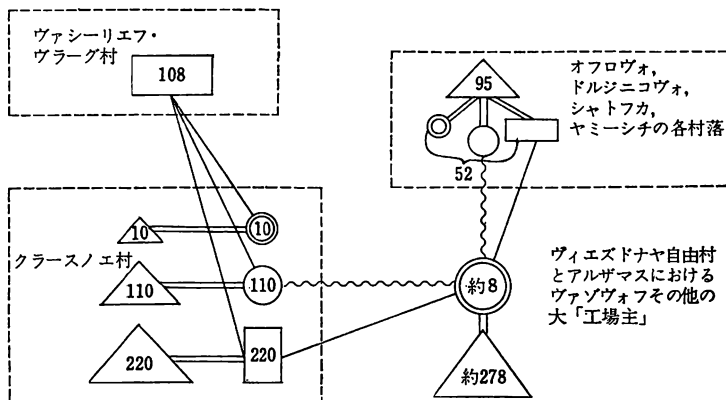
このように、「工場」工業と「クスターリ」工業との区別が純粋に人為的なものであること、われわれのまえにあるのが、資本主義的マニュファクチュアの概念に完全にあてはまる、単一で統一的な営業構造であることは、明らかである。[*] 技術的側面からすれば、これは手労働生産である。作業の組織は分業にもとづく協業であるが、その分業はここでは二重の形で見られる。すなわち、商品別分業（ある村落はフェルト布地をつくり、他の村落は長靴、帽子、靴底敷をつくる、等々）と、作業別分業（たとえば、ヴァシーリエフ・ヴラーグ村全体がクラースノエ村のために帽子や靴底敷のつやだしをおこない、クラースノエ村が半製品を最終的に仕あげる、等々）である。この協業は、資本主義的なものである。なぜなら、その頂点に立っているのは、大マニュファクチュアをつくりだし、多数の小事業所を自

フェルト製造業の組織の図解

◎　完全に自立的な経営主，羊毛を直接に買いいれる．

〜〜〇　自立的経営者，羊毛を間接的に買いいれる．(波線は買付先をしめす)．

―□　非自立的な生産者，経営主の材料をつかい，出来高払いで経営主のために仕事をする．(1本の実線は，だれのために仕事をするかをしめす)．

＝△　賃金労働者（2本の実線は，だれにやとわれているかをしめす)．

数字は労働者数（おおよその）をしめす．*
点線で囲んだ四角形の内側に記された資料は，いわゆる「クスターリ」工業にかんするものであり，それ以外はいわゆる「工場」工業にかんするものである．

*　典拠は本文中にあげたとおり．事業所の数は自立的労働者の数のほぼ半分である（ヴァシーリエフ・ヴラーグ村で52事業所，クラースノエ村で 5+55+110 事業所，4つの小さな村では21事業所)．これに反して，アルザマス市と近郊のヴィエズドナヤ自由村の場合の8という数字は，労働者数ではなく，「工場」数をしめす．

己に従属させた（経済的関係の複雑な網の目によって）大資本だからである。生産者の圧倒的多数はすでに、きわめて非衛生的な条件のもとで企業主のためにはたらく部分労働者に転化している。** この営業の歴史が古いことや、資本主義的関係が完全に形成されていることのため、業者は農業から分離している。クラースノエ村では農業は完全に衰退しており、住民の生活様式も農耕者のそれとはちがっている。***

* ここにかかげた図解が、資本主義的マニュファクチュアの型に組織されたロシアのすべての営業一般にとって典型的なものであることを、注意しておこう。どこでも、営業の頂点に大きな事業所（ときには「工場」に入れられるような）があり、多数の小さな事業所が、それに完全に従属しているのが見られる。一言でいえば、それは分業と手労働生産にもとづく資本主義的協業である。ここだけでなく、他の大多数の営業においても、マニュファクチュアはまったく同様に非農業的中心地をつくりだしている。

** 人々は、列氏二二—二四度の温度のなかで、裸ではたらいている。空気中には大小のほこり、羊毛とあらゆる毛屑が充満している。「工場」の床は土間（ほかならぬ洗毛所で）である、等々。

*** ここで、クラースノエ村民の特殊な隠語について記しておくことも、興味なくはない。これは、マニュファクチュアに固有な地域的閉鎖性の特徴である。「クラースノエ村では、工場のことを、マトロイスク語で、ポヴァールニャ（調理場）とよんでいる。……マトロイスク語は、主としてウラヂーミル県でもちいられているオーフェニ語、コストロマ県でもちいられているガリヴォン語、およびニジェゴロド県とウラヂーミル県でもちいられているマトロイスク語の三つを主要なものとする、オーフェニ語の数多くの分枝の一つである」（『クスターリ委員会報告書』、第五冊、四六五ページ）。機械制大工業だけが、社会的関連の郷土的性格を完全に打ちくだき、そのあとに全国的（および国際的な）関連を打ちたてるのである。

フェルト製造業は、他の多くの地域でもまったく同じように組織されている。同じ県のセミョーノフ郡では一八八九年に三六三の共同体で、四、〇三八人の働き手をもつ三、一八〇世帯がこの営業に従事していた。三、九四六人の労働者のうち、販売めあてに仕事をしていたのは七五二人だけで、五七六人は賃金労働者であり、二、六一八人は、おもに経営主の材料をつかって経営主のために仕事をしていた。一八九戸が一、八〇五戸に仕事を下請に出していた。大経営主たちは二五人もの賃金労働者のいる作業場をもっており、年に約一万ルーブリもの羊毛を買いいれている。* 大経営主たちは、トィシャチニク〔金満家〕とよばれている。彼らの取引高は五、〇〇〇—一〇万ルーブリに達する。** 彼らは自分の羊毛倉庫や自分の製品販売店をもっている。

『工場一覧表』は、カザン県に、一二二人の労働者をもち、四八、〇〇〇ルーブリの生産額をあげ、六〇人の外部労働者をもつ、五つのフェルト「工場」をかぞえている。この外部労働者が「クスターリ」のうちにもかぞえられていることは、明白である。そしてその「クスターリ」については、彼らがしばしば「買占人」のために仕事をしていること、また六〇人もの労働者をもつ事業場があることが、記されている。[**] コストロマ県の二九のフェルト「工場」のうち、二八はキネシマ郡に集中していて、それらは五九三人の事業所内労働者と四五八人の外部労働者をもっている(『工場一覧表』、六八—七〇ページ。二つの企業には外部労働者しかいない。すでに蒸気発動機も出現している)。われわれは『委員会報告書』(第一五冊)から、この県の三、九〇八人の打毛工とフェルト工のうち、二、〇〇八人がほかならぬキネシマ郡に集中しているのを知る。コストロマ県のフェルト工は、大部分が非自立的であるか賃金労働者であって、きわめて非衛生的な作業場ではたらいている。[***] トヴェーリ県のカリャージン郡では、一方では「工場主」のための家内労働が見られるが(『工場一覧表』、一一三ページ)、他方では、まさにこの郡こそはフェルト製造「クスターリ」の巣である。この県から三、〇〇〇人もの彼らが「ジムニャク」荒地(六〇年代には、ここにアレクセーエフのラシャ工場があった)をとおって出かけてゆき、「打毛工やフェルト工の巨大な労働市場」を形成している。[†] ヤロスラヴリ県にも、やはり「工場」のための事業所外での仕事があり(『工場一覧表』、一一五ページ)、やはり商人＝経営主のために彼らの羊毛をつかってはたらく「クスターリ」がいる、等々。

* 『ニジェゴロド県土地価格査定資料』、第一一巻、ニジニー・ノヴゴロド、一八九三年、二一一—二一四ページ。
** 『クスターリ委員会報告書』、第六冊。
*** 『報告と調査』、第三巻。
**** 『ウラヂーミル県の営業』、第二冊。
† 『ウラヂーミル県の営業』、第二冊、二七一ページ。

(三)　帽子と縁なし帽の生産、麻製品と縄の生産

モスクワの帽子製造業にかんする統計資料は、さきにあげておいた。[*] それらの資料から、生産総額と労働者総数の三分の二が、平均一五・六人の賃金労働者をもつ一八の事業所に集中していることがわかる。[**] 帽子製造「クスターリ」は、帽子生産作業の一部分をおこなうにすぎない。すなわち、彼らは、自分の「仕上工場」をもつモスクワの商人たちに販売する帽子型をつくる。そしてその帽子製造「クスターリ」のためには、「剪毛女工」(毛を刈りこむ女

工）が自分たちの家ではたらくのである。このように、全体として、ここに見られるのは、分業に基礎をおき、さまざまな形態の経済的依存関係の総体的な網の目でおおわれた、資本主義的協業である。営業の中心地（ポドリスク郡クレノヴォ村）では、工業者（主として賃金労働者）の農業からの分離***と、住民の欲望水準の向上とがはっきり現われている。彼らは、「ずっときれいな」暮しをしており、サラサやラシャさえ着ていて、サモワールを備え、古いしきたりを捨て等々して、そのため旧習を尊重する地元の人人の痛嘆をまねいている。**** 新しい時代は、出稼ぎの帽子製造職人の出現さえひきおこした。

* 第五章の付録I、営業第二七号を見よ。

** これらの事業所のうちのいくつかは、ときには「工場」のうちにかぞえられている。たとえば、一八七九年度『工場案内』一二六ページを見よ。

*** 前出、第五章、第七節を参照。

**** 『モスクワ県統計報告集』、第六巻第一冊、二八二―二八七ページ。

典型的な資本主義的マニュファクチュアは、コストロマ県ブイ郡モルヴィチノ村の縁なし帽製造業である。*「モルヴィチノ村と三六の部落のおもな仕事は、縁なし帽製造業である」。人々は農業を放棄しつつある。一八六一年以降、この営業は大きく発展した。ミシンが広くもちいられるようになった。モルヴィチノでは、一〇の作業場が、五―二五人の職工と一―五人の女工をおいて、一年中作業している。「最良の作業場は、年間およそ一〇万ルーブリの取引をする」。** 仕事を家内労働へ出すこともおこなわれている（たとえば、帽子裏の材料は、婦人がそれぞれの家でつくる）。分業は労働者を不具にする。彼らはきわめて悪い衛生条件のもとではたらき、ふつう肺病にかかっている。この営業は、長年のあいだ（二〇〇年以上）存続したことにより、きわめて熟達した職人を生みだした。モルヴィチノの職人の名は、首都でも遠い辺境地方でも有名である。

* 『クスターリ委員会報告書』、第九冊、『報告と調査』、第三巻を見よ。

** なんらかの偶然によって、このような作業場は、いまにいたるまで「工場」のうちにかぞえられていない。

カルーガ県メドィニ郡の麻加工業の中心地は、ポロトニャーヌィ・ザヴォード村（亜麻工場村）である。これは、土地をもたないきわめて工業的な住民（一、〇〇〇人以上の「クスターリ」）のいる大きな村（一八九七年の調査では、住民は三、六八五人）である。これは、メドィニ郡の「クスターリ」営業の中心地である。* 麻加工業は次のように組織されている。すなわち、大経営主たち（彼らは三人おり、最大なのはエローヒン）は賃金労働者のいる作業場

と、原料購入のための多少とも大きな額の流動資本をもっている。麻は「工場」で梳かれ、紡ぎ女の家で紡がれ、工場と家で撚られる。人々は、経糸作りは工場で機織りは工場と家でやっている。一八七八年には麻加工業に八四一人の「クスターリ」がいたとされている。エローヒンは「クスターリ」にも「工場主」にも入れられているが、彼は一八九〇年と一八九四―九五年に、九四―六四人の労働者をつかっていた。『報告と調査』（第二巻、一八七ページ）によれば、「数百人の農民」が彼のために仕事をしていた。

＊『クスターリ委員会報告書』、第二冊。

ニジェゴロド県では、縄製造業の中心地は、ゴルバートフ郡のやはり非農業的で工業的な村ニジニー・イズブィレツとヴェルフニー・イズブィレツである。＊カルポフ氏の資料（『委員会報告書』、第八冊）によると、これは一つのゴルバートフ―イズブィレツ縄・網生産地域となっている。ゴルバートフ市の一部の町民もこの営業に従事しており、それに、ヴェルフニーとニジニーの両イズブィレツ村も、「ほとんどゴルバートフ市の一部をなしている」。住民は町人風の暮しをしていて、毎日茶を飲み、買った衣服を着、白パンを食べている。全部で三二ある村落の人口の三分の二ほどが、すなわち四、七〇一人もの働き手（男子二、〇九六人、女子二、六〇五人）がこの営業に従事し、約一五〇万ルーブリの生産をあげている。この営業はほぼ二〇〇年つづいているが、いまでは衰えつつある。その組織は次のとおりである。すなわち、全員が二九人の経営主のために経営主の材料をつかってはたらき、出来高による支払いを受けている。彼らは「経営主に完全に依存」しており、一昼夜に一四―一五時間はたらく。ゼムストヴォ統計（一八八九年）の資料によれば、一、六九九人の男子労働者（プラス五五八人の女子と労働年齢に達しない男子）がこの営業に従事している。一、六四八人の働き手のうち、販売めあてにはたらいているのは一九七人にすぎず、一、三四〇人は経営主のためにはたらいており、＊＊一一一人は五八人の経営主の作業場の賃金労働者である。分与地をもつ一、二八八戸のうち、自分で全耕地を耕しているのは七二七戸、すなわち二分の一強にすぎない。分与地をもつ働き手一、五七三人のうち、三〇六人すなわち一九・四%は、まったく農業に従事していない。これらの「経営主」はどういう人かということを問題にするならば、われわれはもはや、「クスターリ」工業の領域から「工場」工業の領域へと移らなければならない。一八九四/九五年度の『工場一覧表』によれば、ここには、事業所内労働者二三一人と外部労働者一、一五五人をもち、四二万三〇〇〇ルーブリの生産額をあげる、二つの縄製造工場があった。どちらの事業

所もすでに動力機を備えており（それは一八七九年にも一八九〇年にもなかった）、したがって、われわれはここに、資本主義的マニュファクチュアの資本主義的機械制工業への移行、「クスターリ」的前貸問屋や買占人の本物の工場主への転化を、はっきり見るのである。

＊ ゼムストヴォ統計（『材料』、第七冊、ニジニ－ノヴゴロド、一八九二年）によれば、一八八九年には、これらの村の戸数は三四一戸と二一九戸、男女人口は一、二七七人と五四〇人であった。分与地をもつものの戸数は二五三戸と一〇三戸であった。営業にたずさわるものの戸数は二八四戸と九一戸で、このうち農業に従事しないものは二五七戸と三二戸であった。馬をもたないものは二一八戸と五一戸で、分与地を貸しだしているものは二三七戸と五三戸であった。

＊＊『ニジェゴロド県集』、第四巻、ロスラヴレフ師の論文を見よ。

ペルミ県では、一八九四年／九五年のクスターリ調査が、三四三人の労働者（うち一四三人は賃金労働者）をもつ、生産額一一万五〇〇〇ルーブリの六人の綱・縄製造農民事業所を県内で記録している。＊ これらの小さな事業所の頂点には、それらといっしょにかぞえられた大規模なマニュファクチュアが立っている。すなわち、六人の経営主のもとで、一〇一人の労働者（九一人は賃金労働者）がはたらき、八万一〇〇〇ルーブリの生産額をあげている。＊＊ これらの大きな事業所における生産の構造は、「有機的マニュファクチュア」（マルクスによる）(一六七)の、すなわち、さまざまな労働者が原料の逐次的加工のさまざまな作業をおこなうようなマニュファクチュアの、最もはっきりした見本たりうる。㈠麻の打捌き、㈡梳浄、㈢糸紡ぎ、㈣「糸枠」への巻取り、㈤樹脂ぬり、㈥ドラムへの巻戻し、㈦機台から孔あき板への糸通し、㈧鉄製ブッシュへの糸通し、㈨撚り紐綯い、綱の綯いあげと巻きこみ、がそれである。＊＊＊

＊『ペルミ県におけるクスターリ工業の状態の概要』、一五八ページ。表中の総計には、まちがいまたは誤植がある。

＊＊ 前掲書、四〇ページと表一八八。これらと同じ事業所が、『工場一覧表』一五二ページにも出ているようである。大きな事業所と小さなのとを比較するために、われわれは、農耕者である商品生産者を別にした。『試論』、一五六ページ(一六八)を見よ。

＊＊＊『シベリア・ウラル博覧会におけるペルミ県のクスターリ工業』第三冊、四七ページ以下。

麻加工工業の組織は、オリョール県でも明らかに同様である。数多くの小さな農民事業所のうちから、とりわけ都市で大きなマニュファクチュアが生まれてきて、これが「工場」にかぞえられるようになる（一八九〇年度『工場案内』によれば、オリョール県には、一、六七一人の労働者をもつ生産額七九万五〇〇〇ルーブリの一〇〇の麻梳工

場があった)。麻加工業で農民たちは、「商人のために(おそらくは、同じマニュファクチュア経営主のために)、彼の材料をつかって出来高払いで仕事をする。そのさい、仕事はいくつかの特別な作業に分かたれる。すなわち、「打捌き工」が麻を打ちさばき、「紡ぎ工」が紡ぎ、「麻梳工」が梳く。「輪廻し工」は輪をまわす。作業は非常に骨がおれる。多くの者が肺病や「ヘルニア」を病んでいる。ほこりがひどく、「なれない者は一五分とその場にいられない」。五月から九月までのあいだ、人々は粗末な小屋のなかで夜明けから日暮まではたらく。*

* オリョール県のトルブチェフスク郡、カラチェフ郡、オリョール郡のゼムストヴォ統計集を見よ。大きなマニュファクチュアと小さな農民事業所との結びつきはまた、後者においても賃労働の使用が発展しつつあることから明らかである。たとえば、オリョール郡では、一六人の農民——紡績場の経営主——のもとに七七人の労働者がいる。

(四)　木材加工生産

この分野での資本主義的マニュファクチュアの最も典型的な見本は、箱製造業である。たとえば、ペルミの調査者たちの資料によれば、「その組織は次のようである。すなわち、賃金労働者のいる作業場をもつ何人かの大経営主が、材料を買いいれ、一部分は自分のところで製品をつくりあげるが、主としては部分作業をする小さな作業場に材料をくばる。そして、自分の作業場で箱の部品を組み立て、最後の仕上げをしたうえで商品を市場へ送りだす。分業は……生産で広範にもちいられている。箱全体の製造は、一〇—一二の作業に分かれていて、その一つひとつが部品製造クスターリによって別々におこなわれている。営業の組織は、資本の指揮のもとでの部分労働者(Teilarbeiter,『資本論』のなかで彼らはこうよばれている)(一六九)の統合である」。* これは、異種的マニュファクチュア(マルクスによると heterogene Manufaktur)(一七〇)であり、そこでは、種々の労働者が、原料を加工して製品にする逐次的な作業をおこなうのではなく、あとでいっしょに組みたてられる製品の個々の部分を製造するのである。資本家たちが「クスターリ」の家内労働のほうをえらぶのは、一部はこのマニュファクチュアの右のような性格のためであり、一部は(そしておもに)、家内労働者の労賃がより安いためである。** この営業の比較的大きな作業場が、ときどき「工場」としてもかぞえられていることを注意しておこう。***

* ヴェ・イリイン『試論』、一七六ページ。(一七一)

** この点については、同書一七七ページにある、ペルミ県のクスターリ調査の正確な資料を見よ。

** 「クスターリ営業」の中心地である同じペルミ県の同じネヴィヤンスキー・ザヴォード村（非農業的な村）について、『工場案内』と『工場一覧表』を見よ。

ウラヂーミル県ムロム郡の箱製造業も、同じように組織されているようである。『工場一覧表』はそこに、八九人の事業所内労働者と一、一四人の外部労働者をもつ、生産額六九、八一〇ルーブリの九つの「工場」（すべて手労働）があると指摘している。

馬車製造業の組織も、たとえばペルミ県の場合、同様である。多数の小さな事業所のなかから、賃金労働者をやとう組立作業場が出てくる。小さなクスターリは、自分の材料ならびに「買占人」（すなわち組立作業場の持ち主）の材料をつかって馬車の一部分をつくる部分労働者となっている。* ポルタワの馬車製造「クスターリ」については、アルドニ郊外に、賃金労働者をやとい、また仕事を家内労働に出しもする作業場（比較的大きな経営主のところには、部外労働者が二〇人ばかりいる）がある、と書かれている。** カザン県には、市街馬車の生産で商品別分業がみとめられる。すなわち、ある村は橇だけを、他の村は荷車だけを生産する、等々。「農村で完全に組みたてられた（だが金具、車輪、長柄はない）市街馬車は、発注者であるカザンの商人に送られ、さらに後者から金具の取付けのために鍛冶クスターリに送られる。そのあと、これらの製品はふたたび都市の店や作業場に送りかえされ、そこで最終的に仕上げられる、すなわち、上張りされ、塗装される……。かつて市街馬車の金具つけをしていたカザンは、都市の職人より安い工賃ではたらくクスターリに、この仕事をすこしずつゆずっていった……」。*** したがって、資本は、仕事を家内労働に出すことをえらぶ。そのほうが労働力が安くつくからである。馬車製造業の組織は、前出の資料からわかるように、たいていの場合、資本に従属するクスターリ部分労働者の制度である。

* 著者の『試論』、一七七―八ページ[(一三)]を見よ。

** 『報告と調査』、第一巻。

*** 同右、第三巻。

ヴォロネジ県パヴロフスク郡の巨大な工業村ヴォロンツォフカ（一八九七年に住民数九、五四一人）は、あたかも一つの木工品製造マニュファクチュアである（『クスターリ委員会報告書』、第九冊、府主教ポポフ師の論文）。この営業には八〇〇戸以上が（そのうえになお、五、〇〇〇人以上の住民をもつアレクサンドロフカ自由村の若干の世帯が）従事している。総額二六万七〇〇〇ルーブリにおよぶ荷馬車、旅行馬車、車輪、箱等々が生産されている。自立した経営主は三分の一以下で、経営主の作業場ではたらく

賃金労働者はまれである。[*] 大部分は、その土地の農民である商人の注文により、出来高払いではたらいている。労働者たちは経営主に借金があり、苦しい労働に疲れはてている。民衆はしだいに虚弱になってきている。この自由村の住民は、工業的であって農村型ではなく、ごくわずかな分与地をもっていても、農業には（野菜作りを除けば）ほとんど従事していない。営業は古くからあって、住民を農業から引きはなしており、金持と貧乏人との分裂をますます大きくしている。住民の食事は粗末であり、着るものは「以前より派手に」なっているが「資力不相応」で、すべて買ったものをもちいている。「工業と商業の魂が住民をとらえてしまった」。「手工業を知らないものは、ほとんどがなにかの商売をしている……。商工業の影響下に、農民は一般により解放的になり、そのことが彼らをいっそう発展させ、如才なくさせた[**]」。

* 大きな木材商が一四人いる。彼らは蒸気装置（値段は約三〇〇ルーブリ）をもっている。それは村に全部で二四あり、一台ごとに六人の労働者がついている。同じこれらの商人が労働者に材料もくばり、金を前渡しすることによって彼らを債務奴隷化している。

** ここで、木材業で資本主義の発展がたどる過程について一般的に述べておくのが、適当であろう。木材業者は、木材を原木のままで売るのではなく、労働者をやとい、木材を加工させ、さまざまな木工製品を製造し、そしてそれらの生産物を販売するのである。『クスターリ委員会報告書』、第八冊、一二六八、一三一四ページ、および、『オリョール県トルブチェフスク郡統計報告集』を見よ。

ニジェゴロド県セミョーノフ郡の有名な匙製造業は、その組織の点で資本主義的マニュファクチュアに近いものになっている。たしかに、ここには、多数の小さな作業場から分かれでてそれらを支配する大きな作業場はない。だがそのかわり、ここには、深く根をはった分業と、多数の部分労働者の資本への完全な従属がある。匙は仕あがるまでに少なくとも一〇人の手を経る。そのさい買占人は、いくつかの作業を特別の賃金労働者にやらせるか、またはそれを（たとえば彩色を）専門の労働者へ下請仕事に出すかする。いくつかの村落は、個々の部分作業を専門的におこなっている（たとえば、ヂヤコヴォ村は買占人の注文に応じて出来高払いで匙磨きを、フヴォスチコヴォ、ヂアノヴォ、ジュジェルキの村々は匙の彩色を、というふうに）。買占人は、サマラその他の諸県へ賃金労働者の組合（アルテリ）を派遣して、木材を卸で買いいれ、原料や製品の倉庫をもち、最も高価な種類の材料その他をクスターリにわたして加工させる。多数の部分労働者が、資本に完全に従属させられた一つの複雑な生産組織体をなしている。「匙製造工にとっては、

経営主にやとわれて、食事つきで彼のところではたらこうが、自分の小屋でごそごそはたらこうが、どちらでも同じである。なぜなら、この営業では、他の営業におけると同様に、すでにすべてが秤量され、測定され、計算に入れられているからである。匙製造工は、それなしでは生活できない最低限必要なもの以上は、かせげない」*。そういう条件のもとでは、生産全体を支配している資本家たちが、作業場をつくることを急がず、手工的技巧と伝統的な分業にもとづく営業が打ちすてられて停滞をつづけるのも、当然である。土地に緊縛された「クスターリ」は、自己の旧套墨守のうちにまさしく硬直してしまった。一八七九年と同様に、一八八九年にも、彼らはあいかわらず銀ルーブリでではなく、紙幣ルーブリで金勘定をしている。

* 『クスターリ委員会報告書』、一八七九年、――また、セミョーノフ郡にかんするゼムストヴォ統計『材料』、第一一冊、一八九三年を見よ。

モスクワ県の玩具製造業の頂点にも、まったく同様に資本主義的マニュファクチュア型の事業所がある。* 四八一の作業場のうち、二〇が一〇人以上の労働者をもっている。生産では、商品別分業も作業別分業もきわめて広く適用されていて、労働生産性を（労働者の不具化という犠牲をはらって）いちじるしく高めている。たとえば、小さな作業場の収益性は販売価格の二六％であるが、大きな作業場のそれは五八％と算定されている。** もとより、大経営主にあっては固定資本もずっと大きい。また技術的設備（たとえば乾燥室）も見うけられる。営業の中心地は非農業的な居住地域であるセルギエフスキー村である（そこには一、三九八人の労働者のうちの一、〇五五人と、四〇万五〇〇〇ルーブリの生産額のうちの三一万一〇〇〇ルーブリがある。一八九七年の調査によれば、住民は一五、一五五人である）。この営業にかんする概説の著者は、小さな作業場が支配的であること等々を指摘し、営業がマニュファクチュアへ移行することは、工場へ移行することよりはありうるが、それでもやはり移行の公算は少ない、と考えている。彼はこういっている。「将来においても、小生産者たちは、大規模生産と多少とも首尾よく競争する可能性をつねにもちつづけるであろう」（前掲書九三ページ）。この著者は次のことを忘れている。すなわち、マニュファクチュアでは、技術的基盤はつねに小営業におけると同様に手労働生産のままであること、分業はけっして、小生産者を完全に一掃するほどの決定的な利点となることはできず、とくに、小生産者が労働日の延長等々の手段にたよる場合にそうであること、マニュファクチュアは多数の小さな事業所のうえに立つ上層建築であるにとどまり、けっして生産全体をとら

えつくすことはできないということを忘れているのである。

* われわれがしめした統計資料（第五章の付録Iの営業第二、第七、第二六号）は、全玩具生産者のごく一部分をとらえているにすぎない。だがこれらの資料は、一一一八人の労働者をもつ作業場が出現したことをしめしている。

**『モスクワ県統計報告集』、第六巻第二冊、四七ページ。

（五）動物性生産物の加工生産。皮革および毛皮生産業

皮革工業がおこなわれている最も広大な地域は、「クスターリ」工業と工場工業の完全な融合のとくにきわだった実例をなしており、きわめて発達した（深さにおいても、広がりにおいても）資本主義的マニュファクチュアの実例をなしている。「工場制」皮革工業の規模できわだっている諸県（ヴャトカ、ニジェゴロド、ペルミ、トヴェーリの諸県）ではこの部門の「クスターリ」営業がとくに発展していることが、すでに特徴的である。

ニジェゴロド県ゴルバートフ郡ボゴローツコエ村には、一八九〇年度『工場案内』によれば、三九二人の労働者をもつ生産額五四万七〇〇〇ルーブリの五八の「工場」があったが、一八九四／九五年度の『工場一覧表』によれば、事業所内労働者一、四九九人、外部労働者二〇五人をもち、九三万四〇〇〇ルーブリの生産額（この最後の数字は、この地方の主要工業部門である動物性生産物の加工だけのものである）をあげている一一九の「工場」があった。しかし、これらの資料は、資本主義的マニュファクチュアの上層部をえがいているにすぎない。カルポフ氏は、この村とその地域に、一八七九年に、皮革製造業、削皮の貼合せによる靴の踵作り、篭（商品包装用の）編み、馬具製造業、首輪製造業、手袋製造業、および独自に存在する製陶業において、五、六六九人の労働者（そのうち非常に多くのものが、家で資本家のために仕事をしている）をもつ生産額約一四九万ルーブリの二九六以上の事業所をかぞえあげている。* 一八八九年のゼムストヴォ調査は、この地域の工業従事者を四、四〇一人と算定したが、そのさい、詳細な情報のある一、八四二人の労働者のうち、一、一一九人は他人の作業場にやとわれており、四〇五人は家で経営主のために仕事をしている。** 「八、〇〇〇人の人口をもつボゴローツコエ村は、不断に活動しつづける一大皮革工場である」。*** よリ正確にいえば、それは、原料を買いいれ、皮を加工し、それからさまざまな製品を生産し、生産のために数千人のまったく無産の労働者をやとい、小さな事業所のうえに君臨する少数の大資本家に従属した、「有機的マニュファクチュア」である。**** この営業は、はるか昔、一七世紀から存在

している。この営業の歴史のなかでは、その発展を大きく推しすすめ、ついでながらいえば、この地でずっと以前に形成されたプロレタリアートを土地の金持から守ってきた、地主のシェレメテフ一家（一九世紀はじめ）のことが、とくに記憶されるべきである。一八六一年以後この営業は大きく発展し、とくに大きな事業所が小さなのを犠牲にしながら成長した。この営業が活動してきた幾世紀もの年月は、住民のなかからきわめて技巧のすぐれた職人をつくりだし、彼らがこの生産業をロシア中に広めたのである。強固になった資本主義的関係は、工業の農業からの分離をもたらした。ボゴローツコエ村は、それ自身ほとんど農業に従事していないだけでなく、この「都市」に移住してくる周辺の農民たちをも土地から引きはなしている†。カルポフ氏は、この村では「住民のなかに農民的なところが全然なく」、「都市にではなく村にいるのだとはとうてい思えない」ことを確認している。この村は、ゴルバートフをも、さらには、おそらくはアルザマスを除いたニジェゴロド県の他のすべての郡役所所在都市をも、はるか後方に引きはなした。それは「県の主要な商工業中心地の一つであり、何百万ルーブリもの額を生産し取引している」。「ボゴローツコエの商工業の影響を受けている地域はきわめて広いが、ボゴローツコエの工業と最も密接に結びついているのは、その周囲一〇—一二ヴェルスタの近傍の工業である。この工業的近傍地域は、あたかもボゴローツコエそのものの延長のようである」。「ボゴローツコエの村民たちは、普通の粗野な百姓とは似ても似つかない。彼らは町人的手工業者であり、賢明で、世故にたけていて、農民を軽蔑するような人々である。ボゴローツコエの住民の生活環境と道徳観念の構造は、完全に町人的である」。さらに、ゴルバートフ郡の工業的な村の特徴として、読み書き能力のある住民の比率が比較的高いことをつけくわえておこう。すなわち、読み書き能力のあるものおよび就学中の男女のパーセントは、パヴロヴォ、ボゴローツコエ、ヴォルスマの三村では三七・八％と二〇・〇％であるが、同郡の他の部分では二一・五％と四・四％である（ゼムストヴォ統計『材料』を見よ）。

* 『クスターリ委員会報告書』、第九冊。

** ゴルバートフ郡にかんする『土地価格査定材料』。

*** 『クスターリ委員会報告書』、第九冊。

**** たとえば、首輪製造業の頂点には、一〇—三〇人の賃金労働者と五—一〇人の外部労働者をもつ一三の大経営主がいる。大きな手袋製造業者（二—三人の賃金労働者をもつ）は、自分の作業場で手袋を裁ち、それを一〇—二〇人の外部の女たちのところへ出して縫わせる。彼女たちは指縫女工と縫合女工に分かれている。前者は経営主から仕事を受けとり、それを後者へ下請仕事に出すのだが、そのさい後者を搾取する

（一八七九年の報告）。

† 一八八九年には、一、八一二戸（住民は九、二四一人）のうち、一、四六九戸が作付をしていなかった（一八九七年には住民は一二、三四二人）。パヴロヴォ村とボゴローツコエ村は、住民の離村がとくに少ないという特徴をもつ点で、ゴルバートフ郡の他の村落と異なる。反対に、ゴルバートフ郡の農民で村をあけるものの全数のうち、一四・九％がパヴロヴォ村に、四・九％がボゴローツコエ村に住んでいる。一八五八年から一八八九年までの人口増加は、郡全体で二二・一％、ボゴローツコエ村では四二％であった（ゼムストヴォ統計の『材料』を見よ）。

これとまったく同様な関係を（ただ、より小さな規模で）しめしているのは、バラフナ郡のカトゥンキとゴロデーツ、クニャギニノ郡のボリショーエ・ムラシキノ、ヴァシーリスク郡のユリノ、同じ郡のトゥバナエフカ、スパッスコエ、ヴァトラスおよびラトィシハの村々での皮革加工業である。そこには、同じように周辺の農業的居住地に「とり囲まれた」非農業的中心地があり、ときどき「工場」のうちにかぞえられることもある資本主義的作業場を所有する大企業家に、同じように多様な営業と多数の小さな事業所（ならびに家内労働者）が従属している。[*] すでに述べたこととくらべて新しいものをなにもふくまない統計上の詳細に立ちいることはやめ、カトゥンキ村の次のようなきわめて興味深い特徴だけをあげておこう。[**]

「経営主と労働者のあいだの関係の、ある種の家父長制的素朴さは、一見したところでは目につかず、それに、残念ながら（？）、年ごとにますます消えさりつつあるが、それでもそれは営業のクスターリ的性格を証明するものである（？）。営業ならびに住民の工場的な性格は、とりわけ、汽船の就航によって連絡が容易になった都市の影響のもとに、近年になってようやく明らかになりはじめている。現在では、村はすでに完全に工業地の様相を呈している。すなわち、農業のあらゆる徴候の完全な欠如、都会のそれに似た建てこんだ家並み、金持の石造りの邸宅とその脇にならぶ貧民のみじめなあばら家、村の中央にあつめられた長蛇の木造・石造の工場建物——これらのすべてが、カトゥンキを近隣の村々からはっきり区別しており、この地方の住民の工業的性格を、明白にしめしている。住民自身も、性格上のいくつかの特徴の点で、すでにルーシに形成された「工場」型の住民にそっくりである。すなわち、家具調度や衣服や素振りがいくらか派手で、多くのばあい暮しぶりが放慢であり、明日のことはあまり気にせず、威勢のいい、ときには修辞たっぷりのことばを口にし、農村の百姓にたいしてなにか傲慢なところがある——彼らのこれらすべての特徴

は、ロシアのすべての工場人と共通している」。***

* これらの郡についてのゼムストヴォ統計の『材料』、『クスターリ委員会報告書』、第九および第六冊、『工場案内』と『工場一覧表』、『報告と調査』、第二巻を見よ。

** 一八八九年に、そこには、一三〇五人の住民をもつ三八〇戸（すべて作付をしていない）があった。カトゥンキ郷全体で、総戸数の九〇・六％が営業に従事しており、働き手の七〇・一％は営業だけに従事している（つまり、農業に従事していない）。読み書き能力では、この郷は、やはり非農業的で非常に発展した造船業をもつチェルノレツ郷に劣るだけで、郡の平均よりはるかに高い。ボリショーエ・ムラシキノ村では、一八八七年に、男女あわせて三、四七三人をもつ八五六戸（そのうち八五三戸は作付していない）があった。一八九七年の調査によると、人口はゴロデーツ―六、三三〇人、ボリショーエ・ムラシキノ―五、三四一人、ユリノ―二、一八九人、スパッスコエ―四、四九四人、ヴァトラス―三、〇一二人である。

*** 『クスターリ委員会報告書』、第九冊、二五六七ページ。一八八〇年の報告。

ニジェゴロド県アルザマス市に、『工場』統計は、一八九〇年に六四人の労働者をもつ合計六つの皮革工場をかぞえあげている（『工場案内』）。そしてそれは、毛皮製造業、靴製造業、その他の営業を包括する資本主義的マニュファクチュアの一小部分にすぎない。これらの工場主は家内労働者を、アルザマス市においても（一八七八年には四〇〇人ばかり）、近郊の五つの村落においてもつかっている。これらの村落では、三六〇世帯の毛皮職人のうち、三三〇世帯がアルザマスの商人のために彼らの材料をつかって仕事をしており、一昼夜に一四時間はたらいて月に六―九ルーブリをもらっている。* そのために、毛皮職人は血色が悪く、弱々しく、からだが退化しつつある。近郊のヴィエズドナヤ自由村では、六〇〇世帯の製靴職人のうち、五〇〇世帯が、裁断された長靴材料を受けとって経営主のために仕事をしている。この営業は古くからあり、約二〇〇年もつづいており、ますます成長し発展している。住民は農業にはほとんど従事せず、その暮しのようす全体が純都会風で、「ぜいたくに」暮らしている。同じことは、さきに述べた毛皮製造業の村落にもあてはまる。そこの住民たちは、「農耕農民を『田舎のおばちゃん』とよんでさげすんでいる」。**

* アルザマスの工場の労働者の状態は、農村労働者の状態とくらべると良好である（『クスターリ委員会報告書』、第三冊、一三三ページ）。

** 前掲書、七六ページ。

まったく同じことがヴャトカ県でも見られる。ヴャトカ郡とスロボーツコエ郡は、「工場制」および「クスターリ的」皮革生産業と毛皮生産業の中心地である。ヴャトカ郡

では、クスターリ皮革工場は都市の周辺に集中していて、たとえば大工場主のために仕事をして、大規模工場の工業活動を「補足」している。* 馬具作りや膠作りのクスターリも、たいていの場合これら大工場主のために仕事をしている。毛皮製造工場主のもとには、羊の毛皮を縫うなどの仕事を家でしている数百人の労働者がいる。これは、羊皮鞣し＝羊皮外套作り、皮革製造＝馬具作り、等々の部分に分かれた一つの資本主義的マニュファクチュアである。スロボーツコエ郡（営業の中心地は、近郊のデミャンカ自由村）での関係は、いっそうくっきり形成されている。そこでは、皮革職人（八七〇人）、靴職人と手袋職人（八五五人）、羊皮職人（九四〇人）、仕立職人（三〇九人が資本家の注文で半外套を縫っている）たちのクスターリの頂点に、少数の大工場主が立っているのが見られる。** 一般に、皮革製品生産の同様の組織は、非常に広く普及しているようである。たとえば、『工場一覧表』はヴャトカ県のサラプル市に六つの皮革工場をかぞえているが、これらは二一四人の事業所内労働者のほかに外部労働者一、〇八〇人をつかって靴の生産もしている（四九五ページ）。もしロシアのすべての商人と工場主が、彼らのつかっている外部労働者の数を同様に詳しくまた正確に計算したならば、わが国の「クスターリ」、すなわち、ありとあらゆるマニーロフ的人物によって粉飾されたこれらの「人民的」工業の代表者たちは、どこへ行ってしまうことだろう！***

* 『クスターリ委員会報告書』、第一一冊、三〇八四ページ（一八九〇年度『工場案内』を見よ）。六〇人の労働者のいる工場をもつ農耕農民ドルグーシンも、クスターリのなかに入れられている。そのようなクスターリが数人いる。

** 一八九〇年度『工場案内』によれば、七〇〇人以上の労働者をもつ二七人ほどの経営主がいる。

*** さらに、有名な「クスターリ」村、ウラヂーミル県シューヤ郡のドゥニロヴォ村について、『工場一覧表』四八九ページを見よ。一八九〇年度『工場案内』は、そこに一五一人の労働者をもつ六つの毛皮工場をかぞえた。また『クスターリ委員会報告書』（第一〇冊）の資料によると、この地域で、約二、二〇〇人の毛皮職人と、二、三〇〇人の毛皮外套職人がはたらいている。一八七七年には、五、五〇〇人ほどの「クスターリ」がいた。約四〇の村の四、〇〇〇人ほどのいわゆる「マルダス人」（地域全体の呼び名）が従事している同じ郡の毛製飾の製造業も、おそらく同じ形で組織されている。ペルミ県における皮革業と製靴業の同様な組織のことは、『試論』の一七一ページ(二三)以下で記述しておいた。

ここで、タンボフ県タンボフ郡の工業村ラスカゾヴォ（一八九七年に住民八、二八三人）について述べなければならない。それは、「工場」工業（ラシャ、石けん、皮革、火酒製造の諸工場）の中心地でもあり、「クスターリ」工

業の中心地でもあって、しかも後者は前者と密接に結びついている。営業は、皮革業、フェルト製造業（経営主は七〇人ほどで、二〇—三〇人の労働者をもつ事業所がある）、膠製造業、製靴業、靴下製造業（どの家でも、「買占人」から目方でわたされる羊毛をつかって靴下を編んでいる）等々である。この村の近くに、この種の営業で有名なベーラヤ・ポリャーナ自由村（三〇〇戸）がある。モルシャンスク郡では、クスターリ営業の中心地はポクロフスコエ－ヴァシーリエフスコエ村であるが、それは同時に工場工業の中心地でもある（『工場案内』と『報告と調査』第三巻を見よ）。クルスク県では、以下の自由村、すなわちヴェリコーミハイロフカ（ノーヴィ・オスコル郡、一八九七年に住民一一、八五三人）、ボリソフカ（グライヴォロン郡、住民一八、〇七一人）、トマロフカ（ベルゴロド郡、住民八、七一六人）、ミロポーリエ（スジャ郡、住民一万人以上。『報告と調査』第一巻、一八八八—八九年の情報を見よ）が、工業村落として、また、「クスターリ」営業の中心地として目だっている。これらの村落には、皮革「工場」も見うけられる（一八九〇年度『工場案内』を見よ）。おもな「クスターリ」営業は皮革＝製靴業である。それは、はやくも一八世紀の前半におこり、一九世紀の六〇年代ごろに最高の発展をとげ、「純粋に商業的な性格の確固とした組織」になった。全事業は、皮を買いいれてそれをクスターリへ下請仕事に出す請負人が独占していた。鉄道が資本のこの独占的性格をなくしてしまい、そこで資本家的請負人は自分の資本をより有利な企業へ移した。現在では、組織は次のようになっている。まず、大きな企業主が約一二〇人いる。彼らは賃金労働者のいる作業場をもち、また仕事を家内労働に出している。小さな自立した企業主（しかし皮は大きな企業主から買いいれる）は三、〇〇〇人ほどいる。家で（大経営主のための）仕事をしている者は四〇〇人で、賃金労働者も同数である。そのほかになお徒弟がいる。製靴業者は全部で四、〇〇〇人以上いる。そのほか、ここには、陶工、聖像匣師、聖像画師、テーブル掛織物工、等々のクスターリがいる。

最高度に特徴的で典型的な資本主義的マニュファクチュアは、オロネツ県カルゴポリ郡の栗鼠（りす）毛皮業である。これについては、職人でもある一教師が『クスターリ委員会報告書』（第四冊）のなかで、営業している住民の食生活を、精通した知識でもって正しくありのままに再現しながら記述している。彼の記述（一八七八年）によると、この営業は一九世紀の初めから存在している。八人の経営主のもとに一七五人の労働者がおり、そのほかに、一、〇〇〇人ほどの家ではたらく裁縫女と約三五家族の毛皮職人が（ちが

う村々で）同じ経営主のために仕事をしている。総計一、三〇〇—一、五〇〇人で、生産額は三三万六〇〇〇ルーブリである。奇妙なこととして指摘しなければならないが、この生産がさかんであったころに、それは「工場」統計に入れられていなかった。一八七九年度の『工場案内』には、それについての指摘がない。そして、それが衰えはじめたころに、統計に入れられるようになった。一八九〇年度の『工場案内』は、カルゴポリ市とカルゴポリ郡に、一二一人の労働者をもつ生産額五万ルーブリの七つの工場をかぞえ、『工場一覧表』は、七九人の労働者（および外ではたらくもの五七人）をもつ生産額四万九〇〇〇ルーブリの五つの工場をかぞえている。* この資本主義的マニュファクチュアにおける習慣は、無数にあるロシアの僻地の一つに放っておかれた、わが国の古くからの純粋に独特な「クスターリ営業」でどういうことがおこなわれているかの見本として、はなはだ教訓的である。職人たちはきわめて不健康な空気のなかで一昼夜に一五時間はたらいて、月に八ルーブリ、年に六〇—七〇ルーブリたらずを稼ぐのである。経営主の収入は年に約五、〇〇〇ルーブリである。経営主の労働者にたいする態度は「家父長的」である。古くからの習慣によって、経営主は、労働者が経営主の料理女にねだると、クワスと塩をただであたえる。経営主にたいする感謝（仕事を「あたえてくれる」ことへの）のしるしに、労働者は、無償で、栗鼠の尾をむしるためにやってきたり、仕事がすんでから毛皮をきれいにしたりする。職人たちはまる一週間作業場で生活する。そして経営主は、面白半分に彼らをぶち（前掲書、二一八ページ）、干草をかきまわすとか、雪を掻くとか、水汲みにゆくとか、下着をあらうとか、その他、ありとあらゆる仕事をさせる。労働力の安さはカルゴポリにおいてさえ驚くほどだが、周辺の農民となると、「ほとんど無料ではたらくことさえ辞さない」。生産は、系統的な分業と、長期（八—一二年）にわたる徒弟奉公をともなう手労働生産である。徒弟の運命は容易に想像できる。

＊　一八九四年当時の「クスターリ」についての情報をあげよう。「仕上げられた栗鼠の毛皮を縫う仕事には、カルゴポリ市の貧しい町人女と、パヴロフスク郷の農婦が従事している。彼女たちには最も安い値段が支払われている」。こうして裁縫女は、生活費として月に二ルーブリ四〇カペイカ—三ルーブリを稼ぐにすぎず、しかも、それだけの稼ぎ（出来高払いである）のために、一昼夜に一二時間、腰ものばさず坐りつづけなければならない。「仕事は、極度の緊張と根気とで、非常に力を消耗させる」。裁縫女の数は現在二〇〇人ほどである（『オロネッ県におけるクスターリ工業』、ブラゴヴェシチェンスキー、ガリャージン両氏の論文。ペトロザヴォーツク、一八九五年、九二—九三ページ）。

(六) 動物性生産物を加工するその他の生産業

資本主義的マニュファクチュアのとくに顕著な例をなしているのは、トヴェーリ県コルチェヴァ郡キムルィ村とその周辺の有名な製靴業である。* この営業は一六世紀から存在している古いものである。それは農民改革後の時代に成長と発展をつづけている。プレトネフは七〇年代の初めにこの営業の地域で四つの郷をかぞえあげたが、一八八八年にはすでに九つの郷がかぞえられている。この営業の組織の基礎は、次のとおりである。生産の頂点には、賃金労働者をもち、裁断された皮革を外部へ縫い仕事に出す大作業場の経営主がいる。プレトネフ氏は、一二四人の労働者と六〇人の児童をつかい、八一万八〇〇〇ルーブリの生産額をあげる、二〇人のそういう経営主をかぞえている。そのさい筆者は、これらの資本家のために家内仕事をするものの数を、おおよそ、大人の働き手一、七六九人、児童一、八三三人と算定している。そのあとに、一―五人の賃金労働者と一―三人の児童をつかう小経営主がつづく。これらの経営主は、自分の商品を、主としてキムルィ村の市(いち)で売る。彼らの数は二二四人で、四六〇人の大人の働き手と三〇一人の児童をつかい、生産額は一八万七〇〇〇ルーブリである。したがって、全体では、経営主二四四人、大人の働き手二、三五三人(そのうち一、七六九人は家内労働をするもの)、児童の働き手二、一九四人(そのうち一、八三三人は家内労働をするもの)で、一〇〇万五〇〇〇ルーブリの生産額をあげている。それからさらに、さまざまな部分作業をおこなう作業場がある。すなわち、皮削り(削り具をつかって皮を削る)作業場、貼合せ(削られた皮の貼合せ)作業場、商品の特別の運搬業者(一六人の働き手と五〇頭ほどの馬をもつ四人の経営主)、特殊な指物師(箱の製造)、等々がそれである。** プレトネフは、この地域全体の生産総額を四七〇万ルーブリと算定している。一八八一年にはクスターリの数は一〇、六三八人で、出稼人を入れると二六、〇〇〇人、生産額は三七〇万ルーブリと計算された。作業条件については、法外に長い労働日(一四―一五時間)と極度に非衛生的な作業条件、商品による支払い、等々を指摘しなければならない。営業の中心地キムルィ村は、「むしろ小都市に近い」(『報告と調査』、第一巻、二二四ページ)。住民は農耕者としてはだめで、一年中工業に従事している。農村のクスターリだけが草刈期に営業を放棄する。キムルィ村の家屋は都会風で、住民は都会的な生活慣習(たとえば「おしゃれ」)を特徴としている。この営業は、ごく最近まで『工場統計』のなかにはなかったが、それは、

経営主たちが「好んでみずからクスターリと称している」(前掲書、二二八ページ)からにちがいない。『工場一覧表』には、事業所内ではたらく一五―四〇人の労働者をもち、外部労働者をもたないキムルィ地域の六つの履物製造作業場がはじめて入れられた。もちろん、そこには底なしの脱落がある。

＊『ロシア帝国統計時報』、第二巻第三冊、サンクト-ペテルブルグ、一八七二年、を見よ。ロシアにおけるクスターリ工業と手労働の研究のための資料。エリ・マイコフが準備。ヴェ・ア・プレトネフの論文。この労作は、営業の全組織の描写の明白さの点で、最良のものである。最近の諸労作は、貴重な統計資料や生活情況の資料をあたえてはいるが、この複雑な営業の経済構造を解明する点では不十分である。なお、『クスターリ委員会報告書』第八冊、ポクロフスキー氏の論文、および『報告と調査』第一巻を見よ。

＊＊『報告と調査』を参照。工業従事者の七つのグループ、(一)皮革商品をあつかう商人、(二)履物の買占人、(三)製靴用の裁ち皮を生産し、それを家内仕事に出す、大きな作業場の経営主(五―六人)、(四)賃金労働者をもつ小さな作業場の経営主、やはり仕事を家内作業に出す、(五)市場めあてか、または〈(三)か(四)のもとで〉経営主のために仕事をする単独営業者、(六)賃金労働者(親方、職人、児童)、(七)「靴型製造工と刻目打付工、さらに、皮削り、油ひき、貼合せの作業場の経営主と労働者」(前掲書、二二七ページ)。キムルィ村の住民数は、一八九七年の調査によると七、〇一七人である。

モスクワ県のブロンニツィとボゴローツクの両郡のボタン製造業――蹄や牡羊の角からのボタンの生産も、マニュファクチュアのうちにはいる。この営業には五二の事業所で四八七人の労働者が従事しており、生産額は二六万四〇〇〇ルーブリである。労働者五人以下の事業所は一六、五―一〇人のものは二六、一〇人以上のものは一〇ある。賃金労働者なしですましている経営主は一〇人にすぎず、彼らは大経営主から材料を受けとって後者のために仕事をしている。完全に自立的なのは大きな営業者だけである(さきにしめした数字からわかるように、彼らのところには、一事業所あたり一七―二一人の労働者がいるはずである)。彼らは、『工場案内』のなかでは明らかに「工場主」として出ている(二九一ページを見よ。四、〇〇〇ルーブリの生産額と七三人の労働者をもつ二つの事業所)。これは、「有機的マニュファクチュア」である。角は、はじめ「鍛冶場」とよばれるところ(炉のある木造小屋)で蒸される。つぎに作業場へ運ばれ、圧搾裁断機で切られ、型押し機で形が打ち抜かれ、最後に、仕上台にかけられて磨かれる。この営業には徒弟がいる。労働日は一四時間である。ふつう、支払いは商品でなされる。労働者にたいする経営主の

関係は家父長的である。すなわち、経営主は労働者を「小僧」とよび、勘定帳も「小僧帳」とよばれている。勘定のとき、経営主は労働者に説教をし、金銭の支給についての労働者の「願い」を完全にかなえることはけっしてしない。

われわれの小営業の表にはいっている角細工業（第五章の付録I、営業第三一号と三三号）も同じ型のものである。数十人の賃金労働者をもつ「クスターリ」は、『工場案内』にも「工場主」として出ている（二九一ページ）。生産では分業がおこなわれており、仕事を家内作業に出す（櫛研ぎ職人へ）こともある。ボゴローツク郡における営業の中心地はホテイチという大きな村であるが、そこでは農業はすでに第二義的なものとなっている（一八九七年の住民は二、四九四人）。モスクワ・ゼムストヴォの出版物『一八九〇年におけるモスクワ県ボゴローツク郡のクスターリ営業』のなかで、この村は「まさに櫛生産の広大なマニュファクチュアにほかならない」（二四ページ、傍点は私のもの）と述べてあるのは、まったく正しい。一八九〇年には、三五〇万個から五五〇万個の櫛を生産する五〇〇人以上の営業従事者がこの村でかぞえられた。「角の販売者が同時に製品の買占人でもあることが非常に多く、そのうえ、彼が大きな櫛製造業者であることもまれではない」。角を「出来高払い」で受けとることをよぎなくされている経営主の状態は、とくに悪い。すなわち、「事実上、彼らの状態は、大きな事業所ではたらいている賃金労働者よりも悪くさえある」。貧困のため、彼らは家族全体の労働を力以上にこき使い、労働日を延長し、未成年者をはたらかすことをよぎなくされている。「冬に、ホテイチでは夜の一時から仕事がはじまる。『出来高払い』ではたらく『自立的』クスターリの小屋で、いつ仕事が終わるのかを言うことは、おそらく困難であろう」。商品による支払いが広くおこなわれている。「工場では苦労のすえやっと絶滅されたこの制度が、小さなクスターリ事業所では依然としてさかんである」（二七ページ）。ヴォログダ県カドニコフ郡の、五八の村落をふくむウスチエ村地域（いわゆる「ウスチヤンシチナ」）の角細工営業の組織も、おそらく同様である。ヴェ・ボリソフ氏はそこに、生産額四万五〇〇〇ルーブリの三八八人のクスターリをかぞえあげている（『クスターリ委員会報告書』、第九冊）。すべてのクスターリは、角をサンクト・ペテルブルグで、べっ甲を外国から買いいれる資本家のために、仕事をしている。

モスクワ県のブラッシ製造業（第五章の付録I、営業第二〇号を見よ）の頂点には、多数の賃金労働者をもち系統的に分業をおこなっている大きな事業所がある。* ここで、一八七九年から一八九五年までのあいだにこの営業の組織

で起こった変化に注意することは、興味深い（モスクワ・ゼムストヴォの出版物『一八九五年の調査によるブラッシ製造業』を見よ）。若干の裕福な営業者が、この営業をするためにモスクワへ移住してきた。営業者の数は七〇％増大し、そのさい、婦人（一七〇％増）と少女（一五九％増）の数がとくに増加した、賃金労働者のいる大きな作業場の数は減少した。すなわち、賃金労働者のいる事業所の比率は、六二％から三九％に低下した。これは、経営主が仕事を家内作業に出すようになったことが原因である。穿孔機（台木に孔をあけるための）が一般につかわれるようになったので、ブラッシ製造の主要な過程の一つがより迅速で容易なものになった。「植毛工」（台木に剛毛を「植えこむ」クスターリ）にたいする需要が増大し、この作業はますます専門化されていって、より安価な労働力である婦人の受持ちとなった。婦人たちは、自分の家で剛毛を植えこみ、個数による支払いを受けるようになった。このように、家内労働の強化は、この場合には、技術の進歩（穿孔機）により、分業の進歩（婦人はもっぱら剛毛の植えこみだけをする）により、また資本主義的搾取の進歩（婦人と少女の労働はより安価である）によって、ひきおこされたのである。家内労働が資本主義的マニュファクチュアの概念をなんら排除するものでなく、それどころか、ときにはそのいっそうの発展の標識ですらあることが、この例でとりわけはっきり現われている。

＊「挽材工」がブラッシの台木を挽く。「穿孔工」がそれに孔をあける。「洗浄工」が剛毛をきれいにする。「植毛工」が剛毛を「植えこむ」。「指物工」がブラッシにベニヤを貼りつける（『モスクワ県統計報告集』、第六巻第一冊、一八ページ）。

（七）　鉱物性生産物の加工生産業

窯業の分野では、グジェーリ地域（モスクワ県ブロンニツィ、ボゴロツク両郡の二五の村落からなる区域）の営業が資本主義的マニュファクチュアの例をあたえてくれる。それらにかんする統計資料は、われわれの小営業の表にはいっている（第五章の付録I、営業第一五、第二八、第三七号）。これらの資料から明らかなように、グジェーリの三つの営業——陶器製造業、磁器製造業、絵付業——のあいだには大きな相違があるにもかかわらず、それぞれの営業での事業所の個々の部類間の移行がこれらの相違を解消させている。そしてそこには、規模がつぎつぎに拡大する一連の作業場が見うけられる。これら三つの営業の、部類別の一事業所あたりの平均労働者数は、二・四人—四・三人—八・四人—四・四人—七・九人—一三・五人—一八人—

六九人—一二二六・四人である。すなわち、きわめて小さな作業場からきわめて大きなものまでである。大きな事業所が資本主義的マニュファクチュアに属すること（それらが機械を導入しておらず、工場へ移行していないかぎりで）は疑いをいれないが、重要なのはそのことだけでなく、さらに、小さな事業所が大きな事業所と結びついているという事実であり、われわれがここに見るのは、あれこれの型の経済組織をもつ個々別々の作業場ではなく、一つの工業機構であるという事実である。「グジェーリは一つの経済的全一体を形成しており」（イサーエフ、前掲書、一三八ページ）、この地域の大きな作業場は、小さな作業場から成長しながら、ゆっくり徐々に形成されたものである（同右、一二一ページ）。* 生産は、分業をかなり適用した手労働生産である。陶器製造業者のところには、研磨工（食器の種類別に専門化されている）や、製品を焼く労働者その他が見られ、ときには、上薬をつくる特別の労働者が見られることもある。磁器製造工場主のところでは、分業はきわめて細分化されている。すなわち、製粉工、研磨工、運搬工、窯工、絵付工、等々がいる。研磨工は食器の種類ごとにさらに専門化されている（イサーエフ、前掲書、一四〇ページを見よ。ある場合には、分業は労働生産性を二五％も高める）。絵付作業場は磁器製造工場主のために仕事をしている。したがって、それは、工場主のマニュファクチュアの特殊な部分作業をおこなう一部局にすぎない。できあがった資本主義的マニュファクチュアにとって特徴的なのは、ここでは肉体的な力も一つの専門になることである。たとえば、グジェーリでは、ある村落は（ほとんど全村民が）粘土の採取に従事している。重労働だが特別の技能を必要としない作業（製粉工の仕事）には、トゥーラ県とリャザン県からの外来労働者がほとんどもっぱらつかわれている。彼らは、体力と強健さにおいてひよわなグジェーリ人よりもすぐれているのである。商品による支払いが広くおこなわれている。農業は劣悪な状態にある。「グジェーリ人は退化した世代の人々である」（イサーエフ、一六八ページ）。肺が弱く、肩幅がせまく、力がない。絵付工ははやくから視力が衰える。労働日は一二—一三時間である。

* この営業では、さきに述べた織物業におけると同様に、資本主義的マニュファクチュアは事実上昨日の経済であることを、注意しておこう。農民改革後の時期にとって特徴的なことは、このマニュファクチュアの機械制大工業への転化である。蒸気動力をもちいるグジェーリの工場の数は、一八六六年には一つ、一八七九年には二つ、一八九〇年には三つであった（『大蔵省年鑑』、第一冊、および一八七九年度と一八九〇年度の『工場案内』の資料による）。

（八）金属加工業。パヴロヴォの諸営業

有名なパヴロヴォの鉄小鍛冶業は、ニジェゴロド県ゴルバートフ郡とウラヂーミル県ムーロム郡との一帯の地域をとらえている。これらの営業の起源は非常に古い。スミルノフは、パヴロヴォにははやくも一六二一年に（土地台帳[三三]によると）一一の鍛冶工場があったと、指摘している。一九世紀のなかばには、この営業はすでに十分にできあがった資本主義的関係の広く張りめぐらされた網の目をなしていた。農民改革後、この地域の営業は、広くまた深く発展しつづけた。一八八九年のゼムストヴォ調査によれば、ゴルバートフ郡では、一三の郷、一一九の村落で、五、九五三戸の六、五七〇人の男子働き手（これらの村落の働き手総数の五四％）と、二、七四一人の老人、少年少女および婦人、合計九、三一一人が、この営業に従事していた。グリゴリエフ氏は、一八八一年にムーロム郡で営業にたずさわっていたのは、六つの郷と六六の村落、一、五四五戸と二、二〇五人の男子働き手（これらの村落の働き手総数の三九％）であったと計算している。農業に従事していない大きな営業村（パヴロヴォ、ヴォルスマ）が形成されただけでなく、周辺の農民も農業から離れていった。すなわち、パヴロヴォとヴォルスマの両郡以外に、ゴルバートフ郡で四、四九一人の働き手が営業に従事しており、そのうち二、三五七人、つまり半数以上は農業に従事していなかった。パヴロヴォのような中心地の生活はまったく都会風になり、周辺の「粗野な」農耕者とは比較にならないほど高度に発達した欲望、文化的な環境、衣服、生活様式、等々をつくりだした。*

* パヴロヴォとヴォルスマの住民の高い読み書き能力と、農村からのこれら中心地への農民の移住については、上述を見よ。

パヴロヴォの諸営業の経済組織の問題をとりあげるにあたって、われわれはなによりもまず、「クスターリ」の頂点には最も典型的な資本主義的マニュファクチュアがあるという疑う余地のない事実を、確認しなければならない。たとえば、ザヴィヤーロフ家の事業所（そこではすでに六〇年代に、一〇〇人以上の労働者を作業場でつかっていたし、また現在では蒸気発動機も導入している）では、ペン・ナイフが八―九人の手をとおる。すなわち、それをつくるのに、鍛冶工、刃付け工、柄製造工（ふつう家内労働者）、鍛錬工、製面工、艶出し女工、仕上げ工、研ぎ工、刻印工がはたらいている。これは、分業にもとづく広範な資本主義的協業である。なお、部分労働者のうちのかなり

〔第 83 表〕

地域	営業に従事する働き手の数					おおよその生産額（100万ルーブリ）
	市（いち）をめあてに仕事をするもの	経営主のために仕事をするもの	賃金労働者	経営主のために仕事をするものと賃金労働者	合計	
パヴロヴォ地域	3,132	2,819	619	3,438	6,570	2
セリチバ村地域	41	60	136	196	237	
ムーロム地域	500	?	?	2,000	2,500	1
合計	3,673	—	—	5,634	9,307	3

の部分は、資本家の作業場でではなく、自分の家で仕事をしている。ここで、この地域のすべての生産部門にわたってのパヴロヴォ村、ヴォルスマ村、ヴァーチャ村の最大級の事業所にかんするラブジン氏の資料（一八六六年）をあげよう。一五人の経営主のもとで、五〇〇人以上の事業所内労働者と一、一三四人の外部労働者がはたらいていた。すなわち、総数一、六三四人で、生産額は三五万一七〇〇ルーブリであった。経済関係のそういう特徴が、現在どの程度まで地域全体にあてはまりうるかは、次の資料からわかる。*〔第八三表〕

* ゼムストヴォ統計『材料』とアンネンスキー氏の『報告』、および、ア・エヌ・ポトレーソフの調査（先に引用したもの）の資料。ムーロム地域については、数字は近似値である。住民数は、一八九七年の調査によれば、ヴォルスマでは四、六七四人、パヴロヴォでは一二、四三一人である。

このように、われわれが概略をしめした工業組織はすべての地域で優勢である。全体として、労働者総数の約五分の三が資本主義的に就業している。したがって、ここでもわれわれは、マニュファクチュアが工業の全体的構造のなかで主導的地位を占め、*多数の労働者を自己に従属させていながら、しかもなお小規模生産を根絶しえないでいることを見る。小規模生産が比較的生命力があるのは、まったくのところ、第一に、パヴロヴォの営業のいくつかの部門ではまだ機械制生産がすこしも導入されていない（たとえば錠前業で）からであり、第二に、小生産者たちが、賃金労働者よりもずっと低い地位に身をおとすことになるような手段をもちいまでして、みずからを没落から守っているからである。これら手段とは、労働日の延長であり、生活水準や欲望水準の切下げである。「経営主のために仕事を

〔第 84 表〕

年　度	「工場」数	労働者数			生産額(1000ルーブリ)	蒸気力を使用する事業所の数	15人以上の労働者をもつ事業所の数
		事業所内の	外部の	計			
1879年	31	?	?	1,161	498	2	12
1890年	38	約 1,206	約 1,155	2,361	594	11	24
1894／95年	31	1,905	2,197	4,102	1,134	19	31

するクスターリのグループは、稼ぎ高の変動にさらされることがより少ない」(グリゴリエフ、前掲書、六五ページ)。たとえば、ザヴィヤローフのところでは、最も少ない支払いを受けているのは柄製造工である。「彼らは家で仕事をしており、そのため低い稼ぎ高で満足している」(六八ページ)。「工場主のために仕事を」するクスターリは、自分の生産物を市場へもってゆくクスターリの平均稼ぎ高より、いくらか多く稼ぐ可能性をもっている。稼ぎ高の増大は、工場そのもののなかに住んでいる労働者の場合にとくに顕著である」(七〇ページ)。** 「工場」における労働日は、一四時間半――一五時間、最高一六時間である。「ところが、自分の家で仕事をするクスターリの場合には、労働日はいつも一昼夜に一七時間以下ではなく、ときには一八時間、さらには一九時間におよぶことすらある」(同所)。だから、一八九七年六月二日の法律(一三三)がここでは家内労働の強化をひきおこしたとしても、なんら驚くにあたらないであろう。この種の「クスターリ」にとっては、経営主に工場を設立させることにすべての心労と努力をふりむけるときが、とっくにきているのだ！　また、読者も、quasi〔えせ〕自立的な小生産を押しつぶしている、有名なパヴロヴォの「掛買」、「両替」、「妻の質入れ」およびこれに類するあらゆる形態の債務奴隷制、人格的屈辱を思いだしていただきたい。*** さいわいにも、急速に発展しつつある機械制大工業は、マニュファクチュアほど容易にはこれらの最悪の搾取形態と調和しない。先まわりになるが、この地域における工場生産の成長にかんする資料をあげておこう。**** 〔第八四表〕

* ここにかかげた資料は、この主導的地位をけっして完全には現わしていない。以下に本文中で述べることは、市(いち)をめあてにはたらくクスターリよりもいっそう資本に従属しており、経営主のために仕事をするものよりもいっそう資本に従属しており、後者はまた賃金労働者よりもいっそう資本に従属していることをしめしている。パヴロヴォの営業は、小生産者にたいする関係で、一般に資本主義的マニュファクチュアに固有な商業資本と産業資本の不

可分の結びつきを、とくにはっきりしめしている。

** 土地との結びつきもまた、稼ぎ高の低下に重要な役割を演じている。農村のクスターリは、「一般に、パヴロヴォの錠前工より稼ぎが少ない」（アンネンスキー、『報告』、六一ページ）。なるほど、前者は自分のパンをもっていることを考慮に入れなければならないが、しかしそれにしても、「普通の農村のクスターリの状態が、パヴロヴォの中位の錠前工の状態よりめぐまれているとは、とても認められない」（六一ページ）。

*** 恐慌のときには次のようなことも起こる。すなわち、文字どおりただではたらき、「白を黒と」交換する、すなわち完成品を原料と交換することが、おこなわれる。そして、それは「かなりしばしば」あることである（グリゴーリエフ、前掲書、九三ページ）。

**** セリチバとヴァーチャの両村および両村の地域をふくむ、地域全体にかんする『工場案内』と『工場一覧表』の資料。一八九〇年度の『工場案内』は、疑いもなく、外部労働者を工場労働者の総数にふくめている。われわれは、最も大きな二つの事業所（ザヴィヤーロフ家とエフ・ヴァルィパエフの）についてのみ訂正するにとどめて、外部労働者の数を概算した。『工場一覧表』による「工場」数と『工場案内』によるそれとを比較できるようにするためには、労働者数一五人以上の事業所だけをとる必要がある（これについては、より詳しくは筆者の『試論』所収の論文『わが国の工場統計の問題によせて』を見よ）。

このように、われわれは、ますます多数の労働者が、機械の使用へと移行しつつある大きな事業所にあつめられてゆくのを見るのである。*

* パヴロヴォの一工業部門である錠前生産では、逆に、賃金労働者のいる作業場の数がへりつつある。ア・エヌ・ポトレソフ（前掲書）は、この事実を詳細にあとづけ、その原因をしめした。すなわち、コヴノ県の錠前工場の競争がそれである（シュミット兄弟の工場は、一八九〇年には労働者五〇〇人、生産高五〇万ルーブリであったが、一八九四／九五年には労働者六二五人、生産高七三万ルーブリであった。）

（九） その他の金属加工生産

ニジェゴロド県ニジェゴロド郡のベズヴォードノエ村の営業も、やはり資本主義的マニュファクチュアにはいる。これもまた工業村の一つで、その住民の大部分はまったく農業に従事せず、いくつかの村落からなる営業地域の中心地となっている。一八八九年のゼムストヴォ調査（『材料』、第八冊、ニジニーノヴゴロド、一八九五年）によると、ベズヴォードノエ郷（五八一戸）では、全戸数の六七・三％が作付しておらず、七八・三％が馬をもたず、八二・四％が営業に従事し、五七・七％（郡平均の四四・六％にたいして）に読み書きのできるものと就学中のものがいた。ベズヴォードノエ村の営業は、さまざまな金属製品の製造か

らなっている。鎖、釣針、金網がそれであり、生産規模は一八八三年に二五〇万ルーブリ、[*]一八八八／八九年に一五〇万ルーブリと算定された。[**]この営業の組織は、経営主の材料をつかっての経営主のための仕事であり、その仕事は一連の部分労働者に配分されて、一部は企業主の作業場で、一部は家内仕事としておこなわれている。たとえば、釣針の生産では、さまざまな作業が、「曲げ工」、「切断工」（特別の場所ではたらく）、および「尖らし工」（家内仕事で釣針を尖らす婦人と子供）によっておこなわれる。そのさいこれらの労働者はすべて、出来高払いで資本家のために仕事をしており、そして曲げ工はまた、自分のところから切断工や尖らし工に仕事を出している。「鉄線を伸ばす仕事は、いまでは馬力巻取機をつかっておこなわれている。以前には、そこにおおぜいあつめられた盲人たちが針金を引っぱっていた……」。これも、資本主義的マニュファクチュアの「専門職」の一つなのである。「その環境の点で、この生産業は他のすべての生産業とはっきり区別される。人々は、溜ってくる馬の排泄物から発散する毒気のために息苦しい空気のなかではたらかなければならない」。[***]モスクワ県では、篩編み業、[****]ピン製造業[†]および金銀糸製造業[†*]が、同じ型の資本主義的マニュファクチュアとして組織されている。最後にあげた営業では、八〇年代の初めに、六七〇人の労働者数（そのうち七九％が賃金労働者）をもつ生産額三六八、五〇〇ルーブリの六六の事業所があった。なおこれらの資本主義的事業所のいくつかは、ときたま「工場」のうちに入れられることもあった。[†**]

[*] 『クスターリ委員会報告書』、第九冊。一八九七年のベズヴォードノエ村の住民数は三、二九六人。

[**] 『報告と調査』、第一巻。『工場一覧表』は、この地域に、事業所内労働者二一人、外部労働者二九人、生産額六万八〇〇〇ルーブリの四つの「工場」をあげている。

[***] 『報告と調査』、第一巻、一八六ページ。

[****] 第五章の付録I、営業第二九号。

[†] 同、第三二号。

[†*] 『モスクワ県統計報告集』、第七巻第一冊、第二部、および『一八九〇年のボゴロージック郡の営業』。

[†**] たとえば、『工場一覧表』、第八八一九号を見よ。

ヤロスラヴリ県ヤロスラヴリ郡ブルマキノ郷（とその周辺の郷）の小鍛冶業の組織も、おそらくは同じ型である。少なくとも、そこには、同じような分業（鍛冶工、火おこし工、小鍛冶工）があり、同じように広範な賃労働の発展があり（ブルマキノ郷の三〇七の鍛冶場のうち、三三一は賃金労働者をつかっている）、これらすべての部分労働者にたいする大資本の同じような支配があり（頂点には買占人がいて、彼らのために鍛冶工がはたらき、鍛冶工のため

に小鍛冶工がはたらいている)、買占めと、ときにはその一部が「工場」のうちに入れられることもある資本主義的作業場での製品の生産との、同じような結びつきがある。*

* 『クスターリ委員会報告書』、第六冊、一八八〇年の調査、——『報告と調査』、第一巻(一八八八—一八八九年)、二七一ページ。「生産のほとんど全部が、賃金労働者のいる作業場に集中している」。さらに、『ヤロスラヴリ県概観』、第二冊、ヤロスラヴリ、一八九六年、八および一一ページ、『工場一覧表』、四〇三ページを見よ。

前章の付録のなかで、モスクワ県の盆製造業と銅細工業*(後者は「ザガリエ」とよばれる地域にある)にかんする統計資料をあげておいた。この資料からわかるように、これらの営業では賃労働が支配的役割を演じており、頂点には、一経営あたり平均一八—二三人の賃金労働者と一万六〇〇〇—一万七〇〇〇ルーブリの生産額をもつ大きな作業場がある。このことに、ここでは分業が非常に広範囲にもちいられていることをつけくわえるなら、ここにあるのが資本主義的マニュファクチュアであることが明らかとなるであろう。** 「現在のような技術と分業の状況のもとでは変則をなす小さな工業単位は、労働を極限まで延長することによってのみ大きな作業場とならんでやってゆくことができる」(イサーエフ、前掲書、三三ページ)。たとえば、盆製造工の場合、一九時間にもなる。ここでは労働日は一般に一三—一五時間であるが、小経営主のところでは一六—一七時間である。商品による支払いが広くおこなわれている(一八七六年にも、一八九〇年にも)。*** この営業が古くから存在していて(それはおそくとも一九世紀初めには、発生している)、仕事の専門化が広くおこなわれてきたことが、この場合にもきわめて技能のある働き手をつくりだした、ということをつけくわえておこう。ザガリエ人はすぐれた腕前で有名である。この営業では、あらかじめ訓練を必要とせず、若手の労働者にもすぐにできるような専門も現われた。イサーエフ氏は正当にもこう述べている。「すぐにも若手の労働者となることができ、修練なしで手工業を習得できるというこの可能性が、すでに、労働力の養成を要求する手工業の精神が消滅しつつあることをしめしている。多くの部分的操作の簡単さは、手工業のマニュファクチュアへの移行の一つの指標である」(前掲書、三四ページ)。ただし、「手工業の精神」はマニュファクチュアでもつねにある程度まで残るということだけ、指摘しておこう。

* 第五章の付録I、営業第一九号と第三〇号。

** 銅細工業者の作業場では、それぞれ異なる作業をする五人

のものが必要とされる。盆製造業者の場合は最小限三人であるが、「標準的な作業場」では九人の労働者が必要である。「広大な事業所では」、「生産性の増大を考慮に入れた」「緻密な分業」がおこなわれている。(イサーエフ、前掲書、二七、三一ページ)。

*** 一八九〇年度の『工場案内』は、ザガリエ地域で、一八四人の労働者をもつ生産額三万七〇〇〇ルーブリの一四の工場をかぞえあげている。この数字をさきにしめしたゼムストヴォ統計の資料と比較すれば、この場合にも、工場統計が、広範に発達した資本主義的マニュファクチュアの頂上部分しかとらえていないことがわかる。

**** 『ボゴローツク郡のクスターリ営業』を見よ。

(一〇) 貴金属、サモワール、およびアコーディオンの生産

コストロマ県コストロマ郡クラースノエ村は、ふつうわが国の「人民的」資本主義マニュファクチュアの中心地をなす工業村の一つである。この大きな村(一八九七年の住民数二、六一二人)は、純粋に都会的な性格をおびていて、住民は町人の暮しをし、農業には従事していない(きわめてわずかの例外を除く)。クラースノエ村は、七三五戸と約一、七〇六人の働き手をもつ四つの郷と五一の村落(ネレフタ郡シドロフ郷もふくまれている)を包括する、貴金属工業の中心地である。* チルロー氏は次のように述べている。「疑いもなくこの営業のおもな代表者とみなさなければならないのは、クラースノエ村の大工業家であるプシロフ家、マゾフ家、ソローキン家、チュルコフ家、その他の商人である。彼らは材料——金、銀、銅——を買いいれ、職人をかかえ、完成品を買いしめ、家々に仕事の注文を出し、製品見本を配る、等々する」(二〇四三ページ)。大きな工業家のところには、作業場——「ラボトルニ」(ラボラトリー)があり、そこで金属が鍛えられ、溶解され、そのあとそれは仕上げのために「クスターリ」に配られる。彼らのところには、「プレッ」(プレス、小物を切断するための打抜機)、「型押機」(型を刻印するための)、「圧延機」(金属を引きのばすための)、細工台、その他の技術設備がある。生産では分業が広くもちいられている。「ほとんどすべての製品の仕事が、きまった順序で数人の手を経る。たとえば、耳飾りをつくるためには、まず、営業者＝経営主が銀を彼の作業場へひきわたし、そこでその一部が平らにされ、一部が針金に引きのばされる。ついで、この材料は注文によって個々の職人にまわされ、もしその職人に家族がいれば、職人のところで仕事は数人のあいだで手分けしておこなわれる。すなわち、一人が打抜機で銀の薄板から外形すなわち耳飾りの型を打ち抜き、他の一人が針金を曲げて、

〔第 85 表〕

職人のグループ	職人の数	%	労働者総数(概数)	%	製品の量(プード)	%
製品を提出しなかったもの	404	66.0	1,000	58	—	—
12フント以下の製品を提出したもの	81				11	1.3
12—120 フントの製品を提出したもの	194	26.4	500	29	236	28.7
120 フント以上の製品を提出したもの	56	7.6	206	13	577	70.0
計	735	100	1,706	100	824	100

耳飾りを耳にはめるための輪をつくり、第三のものがこれらのものを接合し最後に、第四のものができあがった耳飾りを磨きあげる。作業はすべて困難でなく、たいした修練を必要とせず、接合や磨上げの仕事を婦人や七—八歳の子供がしていることも非常にしばしばある」(二〇四一ページ)。** 労働日はここでも度はずれの長さできわだっており、ふつう一六時間にもおよぶ。物品による支払いがおこなわれている。

* 『クスターリ委員会報告書』、第九冊、ア・チルロー氏の論文。——『報告と調査』、第三巻(一八九三年)。この営業は、ますます発展しつづけている。『ルースカヤ・ヴェードモスチ』、一八九七年、第二三一号、および『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年、第四二号の記事を見よ。生産額は一〇〇万ルーブリ以上で、そのうち約二〇万ルーブリを労働者が、約三〇万ルーブリを買占人と商人が受けとっている。

** 「クラースノエ村のクスターリのあいだでは、製品の種類ごとに、さらには製品の部分ごとにさえ、きまった職人がいる。だから、一つの家で指輪と耳飾り、腕環とブローチ、等等がつくられることは、きわめてまれにしか見られない。普通は、なにか一つの製品がその部分ごとに専門の労働者によってつくられるのであるが、彼らは、異なる家に住んでいるだけでなく、異なる村落に住んでいることさえある」(『報告と調査』、第三巻、七六ページ)。

次の統計資料(この地方の試金監督官によってごく最近公表されたもの)は、この営業の経済構造をはっきり描きだしている。〔第八五表〕

「最初の二つのグループ(職人総数の約三分の二)は、クスターリというよりも、むしろ家で仕事をする工場労働者に近い」。最上級のグループのなかでは、「賃労働がます

ますしばしば見うけられる……。職人はすでに他人の製品を買いいれはじめている」。このグループの上層では「買占めが優勢であり」、「四人の買占人はまったく作業場をもっていない」*。

* 『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年、第四二号。

トゥーラ市とその周辺のサモワール製造業とアコーディオン製造業は、資本主義的マニュファクチュアのきわめて典型的な見本である。一般に、この地域の「クスターリ」営業は、歴史がきわめて古いことできわだっている。それらの起源は一五世紀にさかのぼる。* それらは一七世紀の中葉からとくに発展をとげた。ボリソフ氏はこれ以後の時期をトゥーラの営業の発展の第二期とみなしている。一六三七年に、最初の鋳物工場（オランダ人ヴィニウスによる）が建設された。トゥーラの武器製造業者は特別の鍛冶業自由村を形成し、特別の権利と特典をもつ特殊な身分をなしていた。一六九六年に、トゥーラのすぐれた一鍛冶業者が建設した最初の鋳物工場がトゥーラに生まれ、そして、この営業はウラルやシベリアに移っていった。** このときから、トゥーラの営業の歴史における第三期がはじまる。職人たちは自分の事業所を設立し、周辺の農民にも手工業を教えはじめた。一八一〇―一八二〇年代に最初のサモワール工場が生まれた。「一八二五年にはトゥーラに、武器製造業者に属する種々の工場がすでに四三をかぞえた。現存する工場も、そのほとんどは、かつての武器製造業者でいまのトゥーラの商人のものである」（前掲書、二二六二ページ）。したがって、ここには、以前の同職組合の親方（マイステル）と、のちの資本主義的マニュファクチュアの事業主（プリンツィパル）とのあいだの直接の継承性と関連が見られるわけである。一八六四年にトゥーラの武器製造業者は農奴的隷属から解放され、町人のうちに入れられた。稼ぎ高は、農村のクスターリの激しい競争の結果、低下した（これは、都市から農村への工業従事者の逆方向の移住をもひきおこした）。労働者たちは、サモワール、錠前、ナイフ、アコーディオン（トゥーラ製の最初のアコーディオンは一八三〇―三五年に現われた）の製造業へ移った。

* 『クスターリ委員会報告書』、第九冊所収のヴェ・ボリソフ氏の論文を見よ。

** トゥーラの鍛冶業者ニキータ・デミドフ・アントゥフィエフは、トゥーラ市に面して工場を建てたことでピョートル大帝の寵を得、一七〇二年にネヴィヤンスクの工場をあたえられた。彼の子孫が、ウラル地方の有名な鉱山業者デミドフ家である。

サモワール製造業は現在、次のように組織されている。頂点には、数十人、数百人の賃金労働者のいる作業場をもつ大資本家がいる。なお、彼らは多くの部分作業を都市な

らびに農村の家内労働者にも委託している。ときには、これらの部分作業をおこなう人々自身が、賃金労働者のいる作業場をもっていることもある。もとより、大きな作業場とならんで小さな作業場もあり、それらは資本家への従属のさまざまな逐次的段階にある。分業は、この生産業の全構造の一般的基礎をなしている。サモワールの製造過程は、次のような個別作業に分かれている。(一)銅板を曲げて筒にする仕事(型作り)、(二)その接合、(三)接ぎ目のやすりがけ、(四)台のとりつけ、(五)できたものの鍛造(いわゆる「チャフターニエ」)、(六)内側の清掃、(七)胴部と頸部の研磨、(八)錫メッキ、(九)プレスによる台と上蓋の風穴あけ、(一〇)サモワールの組立て、がそれである。さらにそのほかに、小さな銅製部品の鋳造の仕事がある。(a)鋳型作り、(b)鋳造、である。* 仕事が家内作業に出されるときには、これらの作業のおのおのが別個の「クスターリ」営業をなすこともある。ボリソフ氏は、『クスターリ委員会報告書』第七冊のなかで、そういう「営業」の一つを描写している。その営業(サモワールの型作り)は、農民が商人の材料をつかってさきに述べた部分作業の一つを出来高払いでおこなうというものである。クスターリは一八六一年以後、仕事をするのにトゥーラ市から農村へ移った。農村では生活費がより安く、欲望の水準がより低いからである(前掲書、八九三ページ)。ボリソフ氏は、クスターリのこの生命力を、手労働によるサモワールの鍛造が維持されているせいであると、正しく説明している。「農村のクスターリは、注文主の工場主にとってつねにより有利である。なぜなら、彼らは、都市の手工業者より一〇—二〇%がた安く仕事をするからである」(九一六ページ)。

* 『クスターリ委員会報告書』、第一〇冊。ペルミ県スクスンのサモワール製造業についてのマノーヒン氏によるすばらしい描写。組織はトゥーラにおけると同じである。同書、第九冊、一八八二年博覧会における、クスターリ営業にかんするボリソフ氏の論文を見よ。

ボリソフ氏は、一八八二年に、サモワール生産業の規模を、労働者(クスターリをふくむ)四、〇〇〇—五、〇〇〇人で約五〇〇万ルーブリと算定した。工場統計はこの場合にも、資本主義的マニュファクチュア全体の一小部分しかとらえていない。一八七九年度『工場案内』はトゥーラ県に、一、四七九人の労働者をもつ生産額八三万六〇〇〇ルーブリの五三のサモワール「工場」(すべて手労働)をかぞえた。一八九〇年度の『工場案内』では、一六二工場、労働者二、一七五人、一一〇万ルーブリとなっている。ただし名簿には、五〇工場(一つは蒸気力工場)、労働者一、三二六人、六九万八〇〇〇ルーブリしかのっていない。今

度の場合は、明らかに、一〇〇ばかりの小さな事業所が「工場」にかぞえあげられていたのである。最後に、『工場一覧表』は、一八九四／九五年に、労働者一、二〇二人（十外部労働者六〇七人）、生産額一六一万三〇〇〇ルーブリの二五工場（四つは蒸気力工場）をあげている。これらの資料では（すでに述べた理由から、また、以前の諸年度の場合、事業所内労働者と外部労働者が混同されているため）、工場数も労働者数も比較できない。ただ、機械制大工業がマニュファクチュアを累進的に駆逐していることだけは疑いない。すなわち、一〇〇人以上の労働者をもつ工場は一八七九年に二工場であったが、一八九〇年には二工場（一つは蒸気力工場）、一八九四／九五年には四工場（三つが蒸気力工場）となっている。*

* トゥーラ市とその周辺の鍛冶業の組織にも、同様の特徴があるようである。ボリソフ氏が一八八二年に計算したところによると、これらの営業に二、〇〇〇―三、〇〇〇人の労働者が従事して、約二五〇万ルーブリの製品を生産している。これらの「クスターリ」の商業資本への従属はきわめて大きい。トゥーラ県の金物「工場」もまた、ときおり外部労働者をもっている。（『工場一覧表』、三九三―三九五ページを見よ）。

より低い経済発展段階にあるアコーディオン製造業も、まったく同じような組織をもっている。*「アコーディオンの生産には、一〇以上の別々の専門業種が参加している」（『クスターリ委員会報告書』、第九冊、二三六ページ）。アコーディオンの種々の部分の製造、またはいくつかの部分作業の遂行は、別々のえせ自立的な「クスターリ」営業の対象をなしている。「停滞期には、クスターリはみな、工場または多少とも大きな作業場のために、そこの経営主から材料を受けとって仕事をする。だが、アコーディオンにたいする需要が強まる時期には、数多くの小生産者が現われる。彼らはクスターリから個々の部品を買いいれて、自分でアコーディオンを組みたて、おりしも喜んでアコーディオンを買いいれようとしている地方の小売店、商店へもってゆく」（同所）。ボリソフ氏は一八八二年に、この営業には二、〇〇〇―三、〇〇〇人の働き手がいて、約四〇〇万ルーブリの生産額をあげていたとしている。工場統計は、一八七九年に、労働者二二一人、生産額五、〇〇〇ルーブリの二つの「工場」をあげ、一八九〇年には、労働者二七五人、生産額八万二〇〇〇ルーブリの一九工場を、一八九四／九五年には労働者二三一人（プラス外部労働者一七人）、生産額二万ルーブリの一つの工場をあげている。**蒸気動力はまったくもちいられていない。数字のこのような飛躍はすべて、資本主義的マニュファクチュアの複雑な組織体に構成部分としてはいりこんでいる個々の事業所が、まったく偶然にとり出されていることをしめしている。

* アコーディオン生産業の発展は、原始的な民族楽器の駆逐過程および広範な全国的市場の創出過程としても、興味深い。このような市場なしにはこまかな分業はありえなかっただろうし、また、分業なしには生産物の低廉化は達成されなかったであろう。「アコーディオンは、（その）安さのおかげで、ほとんどどこでも原始的な民族的弦楽器であるバラライカを駆逐した」（『クスターリ委員会報告書』、第九冊、二二七六ページ）。

** 一八九一年一一月二九日のトゥーラ市の調査は、市内に、アコーディオンをあきなう事業所三六と、アコーディオンの製作所三四をかぞえあげている（『一八九五年度のトゥーラ県覚え帳』、トゥーラ、一八九五年を見よ）。

三　マニュファクチュアにおける技術。分業とその意義

さて、さきにあげた資料から結論を引きだし、それらがわが国の工業における資本主義の特殊な発展段階を実際に特徴づけるものであるかどうかを考察しよう。

われわれが考察したすべての営業の共通の特徴は、手労働生産の維持と、系統的で広範におこなわれている分業にある。生産過程は、種々の専門職人によって遂行されるいくつかの部分作業に分かれている。そういう専門家の養成は、かなり長期にわたる教育を必要とし、だから徒弟制度はマニュファクチュアの自然の随伴物である。周知のように、商品経済および資本主義という一般的環境のもとでは、この現象は最悪の形の人格的隷属と搾取にみちびく。* 徒弟制度の消滅はマニュファクチュアのより高度の発展および機械制大工業の形成と結びついており、そのときには、機械が教育期間をminimum〔最小限〕にまでちぢめるか、もしくは子供にでもできるほど簡単な部分作業がつくりだされるのである（前記のザガリエの例を見よ）。

* 一例をあげるにとどめよう。クルスク県グライヴォロン郡のボリソフカ自由村に、約五〇〇人が従事する聖像画業がある。職人たちは、大部分、賃金労働者なしにすませているが、しかし一昼夜に一四—一五時間もはたらく徒弟をおいている。これらの職人たちは、徒弟という形での無償の労働力を奪われることをおそれて、絵画学校の設立という提案に敵対的態度をとった（『報告と調査』、第一巻、三三三ページ）。家内作業のもとでは、資本主義的マニュファクチュアにおける児童の状態は、徒弟の状態とくらべてすこしも良くはない。なぜなら、家内労働者は、労働日をnec plus ultra〔極限〕まで延長し、家族の全力を傾注することをよぎなくされているからである。

工場と比較した場合にとくに目につくマニュファクチュ

アの相対的な不動性は、マニュファクチュアの基盤である手労働生産が保持されているためである。分業の発展と深化はきわめてゆっくり進行し、その結果マニュファクチュアは、ひとたびとった形態を数十年に（さらには数世紀に）わたって保持しつづける。すでに見たように、われわれが考察した諸営業のうちのきわめて多くのものが、起源はきわめて古いが、しかもなおその大部分では、最近にいたるまで生産方法における大きな変革がまったく見うけられなかったのである。

分業についていえば、労働生産力の発展過程におけるその役割にかんする理論経済学の周知の命題を、ここで繰りかえすことはしない。手労働生産の基礎上では、分業という形態以外には技術の進歩はありえなかったのである。* ただ、機械制大工業への準備段階としての分業の必然性を説明する最も重要な二つの事情だけは指摘しておこう。第一に、生産過程が最も簡単で純粋に機械的な一連の作業に分解することによってはじめて、機械の導入が可能となるのであって、機械ははじめは最も簡単な作業にもちいられ、漸次的にのみより複雑な作業をもとらえてゆく。たとえば、織物業では、機械織機はすでにずっと以前から簡単な織物の生産を支配していたが、絹織物業はいまもひきつづき主として手労働でおこなわれている。鍛冶業では、機械はまずはじめに最も簡単な作業の一つである研磨にもちいられる、等々。しかし、最も簡単な作業へのこの分割——それは機械制大規模生産の導入への必要な準備の一歩であるが——は、同時に小営業の成長をもたらす。周辺の住民がそういう部分作業を自分の家でおこなう可能性を得る。彼らは、その仕事を、マニュファクチュア経営主の注文によって経営主の材料をつかってするとか（ブラッシ・マニュファクチュアにおける剛毛の植付け、皮革生産業における羊皮、毛皮外套、冬手袋、靴などの裁縫、櫛マニュファクチュアにおける櫛研ぎ、サモワールの「型作り」、その他）、またある場合には「自立して」材料を買いいれ、生産物の個々の部品をつくり、それをマニュファクチュア経営主に売る（帽子、馬車、アコーディオンなどの製造業）とかする。資本主義的マニュファクチュアの成長の表現としての小規模な（ときには「自立的」ですらある）営業の成長——これは、逆説のように見える。だがそれにもかかわらず、これは事実である。こういう「クスターリ」の「自立性」は、まったく虚構のものである。他の部分作業、生産物の他の部分との関連なしには、彼らの仕事はおこなわれえないだろうし、さらには、彼らの生産物がときにはなんの使用価値ももちえないであろう。そして、この関連をつくりだすことができたし、** またつくりだしたのは、

多数の部分労働者を（あれこれの形で）支配する大きな資本だけである。ナロードニキ経済学の基本的な誤りの一つは、部分労働者としての「クスターリ」が資本主義的マニュファクチュアの構成部分であるという事実を無視したり、ぼかしたりすることにある。

* 「大規模生産の家内的形態とマニュファクチュアは、小規模な自立的産業が広大な地域におよぶときには、その産業にとって不可避的な、そしてある程度まで望ましくさえある結末である」（ハリゾメノフ、『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八八三年、第一一号、四三五ページ）。

** なにゆえに資本だけがこの関連をつくりだすことができたのか？　それは、われわれが見たように、商品生産が小生産者の細分状態と彼らの完全な分解を生みだすからであり、また、小営業かマニュファクチュアに資本主義的作業場と商業資本を遺産として残したからである。

とくに強調しなければならない第二の事情は、マニュファクチュアによる熟達した労働者の養成である。機械制大工業は、もしそれ以前にマニュファクチュアによる労働者養成の長い期間がなかったなら、農民改革後の時期にこれほどはやく発展しえなかったであろう。たとえば、ウラヂーミル県ポクロフ郡の「クスターリ」織物業の調査者たちは、クドィキノ郷（そこには、オレホヴォ村と有名なモロゾフ家の工場がある）の織物工のすばらしい「技術的力能と経験の豊かさ」を指摘して、次のように述べている。「どこへ行っても……労働におけるこれほどまでの緊張は見られない。……ここではつねに、織物工と糸巻き工のあいだで厳密な分業がおこなわれている……。過去は、……クドィキノ人のあいだで……完全な技術的生産方法と……ありとあらゆる困難のもとでやってゆく能力をつくりあげた」[*]。絹織物業についてはこう書かれている。「工場は、どの村落にも好きな数だけ建てるというわけにはいかない」。「工場は、織物工のあとを追い、出稼ぎによって」（または家内作業によって、とつけくわえよう）「仕事に精通した働き手の一隊が形成された村落に、はいってゆかなければならない」[**]。ペテルブルグの製靴工場のような事業所は、もし、たとえば、現在出稼ぎ仕事に精を出している熟達した労働者たちが、キムルィ村の地域に幾世紀もかかって養成されていなかったなら、あれほど急速に発展することができなかったであろう、等々。だから、特定の生産に専門化、かつ熟達した労働者を多数養成してきたいくつかの大きな地域が、マニュファクチュアによって形成されたことは、きわめて重要な意義をもっている[***]。

* 『ウラヂーミル県の営業』、第四冊、二二ページ。

** 前掲書、第三冊、六三ページ。

*** 一八九〇年に、労働者五一四人、生産額六〇万ルーブリ。

一八九四/九五年には、八四五人と一二八万八〇〇〇ルーブリ。

**** 「卸売手工業」という用語は、きわめて的確にこの現象を特徴づけている。コルサックはこう書いている。「一七世紀以後、農村工業はもっと目ざましく発展するようになった。大きな街道に沿った多くの村々、とりわけモスクワ近郊の村村は、なにか一つの手工業生産に従事した。ある村の住民は皮革業者となり、他の村の住民は織物業者となり、また別の村の住民は染物業者、車大工、鍛冶屋、等々となった。前世紀の終りには、若干の人々が卸売手工業とよんでいるこれらのものが、ロシアできわめて多数発達した（前掲書、一一九―一二一ページ）。

資本主義的マニュファクチュアにおける分業は、労働者――部分労働者としての「クスターリ」をもふくめて――を不具にし奇形にする。分業の達人と分業の奇形者が現われる。前者は、調査者の感嘆を呼びおこすまれな個々の例として現われ、* 後者は、胸が弱く、過度に発達した手をもち、「猫背」になった「クスターリ」の大量的出現として現われる、** 等々。

* 二つの例をあげるにとどめよう。パヴロヴォの有名な錠前職人フヴォローフは、一ゾロートニクで二四個の錠前をつくった。こういう錠前の部品には、ピンの頭ほどの大きさしかないものもあった（ラブジン、前掲書、四四ページ）。モスクワ県のある玩具職人は、ほとんど全生涯を通じて馬車馬の仕上げをやっていて、一日に四〇〇個仕あげるまでになった（『モスクワ県統計報告集』第六巻第二冊、三八―三九ページ）。

** グリゴリエフ氏は、パヴロヴォのクスターリを次のように特徴づけている。「私はこのような労働者の一人に出あったことがあるが、彼は六年間も同じ圧搾機のそばではたらき、素足の左足で床板の厚みの半分以上をすりへらすまで立ちとおしてきた。彼は辛辣な皮肉をこめてこう言った――もっと立ちつづけて板に穴があいたら、そのときは経営主は私を追い出そうと考えているのだ、と」（前掲書、一〇八―一〇九ページ）。

四　地域別分業と農業の工業からの分離

すでに指摘したように、分業一般と直接関連するものとして、地域別分業がある。それは、一つの生産物の生産、ときには生産物のある一種類の、さらには生産物のある特定部分の生産に、個々の地域が専門化することである。手労働生産の優勢、多くの小さな事業所の存在、働き手と土地との結びつきの持続、特定の専門への職人の繋縛、これらすべてのことは不可避的に、マニュファクチュアの個々の工業地域の閉鎖性の原因となる。ときには、この地域的

閉鎖性は、他の世界からの完全な孤立にまでなり、[*] 他の世界とは商人である経営主だけが交渉をもつのである。

* カルゴポリ郡の栗鼠皮業、セミョーノフ郡の匙製造業。

ハリゾメノフ氏は以下の長談義のなかで、地域的分業の意義を不十分にしか評価していない。「帝国の巨大な広さと関連して、自然条件がきわだってちがっている。ある地方は木材や野性動物に富み、別の地方は家畜に富み、第三の地方には粘土や鉄が豊富にある。これらの自然的特性が工業の性格をも規定した。距離がはなれていて交通が不便なため、原料の輸送は不可能であるか、もしくはきわめて高くついた。その結果、営業は、どうしても手近に豊富な原料がある地方に居をかまえざるをえなかった。広大なまとまった地域ごとの商品生産の専門化というわが国工業の特徴も、ここから生じたのである」（『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、前掲号、四四〇ページ）。

地域的分業は、わが国工業の特徴ではなく、マニュファクチュアの特徴をなす（ロシアでも他の諸国でも）ものである。小さな営業はそれほど大きな地域をつくりださなかった。工場は地域の閉鎖性を打ちこわし、事業所と労働者大衆の他地方への移動を容易にした。マニュファクチュアは、まとまった地域をつくりだすだけでなく、そういう地域の内部に専門化（商品別分業）をもたらす。その地方に原料があることは、マニュファクチュアにとってけっして必須のことではなく、おそらくはマニュファクチュアにとって普通のことですらない。なぜなら、マニュファクチュアは、すでに十分広範な交易関係を前提とするからである。[*]

* 織物業や、パヴロヴォ、グジェーリ、ペルミの皮革業、その他多くが、外来の（すなわち原地産でない）原料を加工している（『試論』、一二二―一二四ページを見よ）。[(一五)]

さきに述べたマニュファクチュアの特徴と関連して、資本主義的進化のマニュファクチュア段階には、農業の工業からの分離の特殊な形態が固有であるという事情がある。最も典型的な工業従事者は、いまではすでに農民ではなく、農業に従事していない「職人」である（他の極には商人と作業場経営主がいる）。マニュファクチュアの型に組織された営業は、多くの場合、（すでにわれわれが見たように）非農業的な中心地をもっている。それは、都市であることもあれば、村であることもあるが（そのほうがずっと多い）、村といっても、そこの住民はほとんど農業に従事しておらず、商工業的性格の居住地域にふくめられるべきところである。農業からの工業の分離は、この場合、マニュファクチュアの技術、その経済、その日常生活上の（もしくは文化的）特殊性に根ざす、深い基盤をもっている。技術は労働者をある一つの専門に縛りつけ、それによって労

働者を、一方では、農業には役だたない（虚弱な、等々）ものにし、他方では、不断にまた継続的に一つの仕事に従事することを要求する。マニュファクチュアの経済構造は、小さな営業とくらべて、比較にならないほど深められた工業従事者の分化を特徴とする。――そしてわれわれが見たように、小営業では、工業における分解と平行して農業における分解が進行する。マニュファクチュアの条件であり結果でもある、生産者大衆のあの完全な窮乏化のもとでは、マニュファクチュアの労働人員は、すこしでもきちんとした農耕者からは徴集されえない。マニュファクチュアの文化的特徴をなすものとして、第一に、住民に特殊な痕跡を残す、きわめて長期にわたる（ときには一世紀におよぶ）営業の存在があり、第二に、住民のより高い生活水準がある。[*] このあとの事情については、のちにもっと詳しく述べるが、まずはじめに、マニュファクチュアは農業からの工業の完全な分離をもたらすものでないことを、指摘しておこう。手労働技術のもとでは、大経営は小経営を完全に駆逐することはできず、とりわけ、小さなクスターリが労働日を延長し、自己の欲望水準を引きさげる場合にそうである。そのような条件のもとでは、マニュファクチュアは、われわれが見たように、小営業を発展させさえする。だから、非農業的なマニュファクチュア中心地の周辺に、多くの場合、その住民がやはり工業にたずさわっている農業的居住地からなる一帯の区域が見られるのも、当然である。したがって、この点でも、小規模な手労働生産と工場とのあいだのマニュファクチュアの過渡的性格が、はっきり現われている。西欧においてさえ、資本主義のマニュファクチュア期は工業労働者の農業からの完全な分離をもたらしえなかったのであるが、[**] ロシアでは、農民を土地に緊縛する多くの制度が維持されているもとで、そういう分離はなお遅れざるをえなかった。だから、もう一度くりかえすが、ロシアの資本主義的マニュファクチュアにとって最も典型的なのは、周辺の農村――その居住はなかば農業的で、なかば工業的である――の住民を自分のほうへ引きよせ、それらの農村を支配している非農業的中心地である。

[*] ヴェ・ヴェ氏は、その著『クスターリ工業の概説』のなかで、「わが国では……農業を完全に放棄したクスターリ地域はきわめて少ない」（三六ページ）、と言いきっている。――われわれはさきに、それどころか、そういう地域はきわめて多いことをしめした。またいわく。「わが祖国で見うけられる分業の微弱な現れの原因は、工業的進歩のエネルギーによりも、むしろ農民的土地所有の規模が不動であることに帰せられるべきである……」（四〇ページ）。これらの「クスターリ地域」が、技術、経済、文化の特殊な制度を特色としており、それらの地域が資本主義の特殊な発展段階を特徴づける

ものだということに、ヴェ・ヴェ氏は気づいていない。重要なのは、「工業村」の大部分は、「最低の分割地」を受けとった（三九ページ）——（それらの村の営業の歴史がすでに数十年、ときには数百年におよんでいた一八六一年に！）——ということであり、また、もし当局のそういう容認がなかったなら、もとより資本主義もなかったはずだということである。

**『資本論』、第一巻、第二版、七七九―七八〇ページ。(一七)

そのさいとくに目につくのは、このような非農業的中心地における住民の文化水準がより高いという事実である。読み書き能力がより高く、欲望と生活の水準がずっと高く、自分を「粗野な」「いなかもの」とはっきり区別していること——これらが、この種の中心地の住民の、普通に見られる特徴である。* 資本主義の進歩的な歴史的役割をはっきり証明するこの事実がいかに大きな意味をもつものであるかは、明らかである。しかもそれは、最も熱烈なナロードニキでもあえてその「人為性」をかたりえないような、純粋に「人民的な」資本主義である。なぜなら、いま特徴づけをしている中心地の大多数は、通常「クスターリ」工業に入れられているからである！　マニュファクチュアの過渡的性格はここでも現われている。なぜなら、マニュファクチュアは住民の精神的様相の変革をようやく始めるにすぎず、機械制大工業だけが、その変革をなしとげるのだからである。

* この事実は重要なので、すでに第二節であげた資料を、さらに次のことで補足しなければならない。ヴォロネジ県ボブロフ郡のブトゥルリノフカ自由村は、皮革製造業の中心地の一つである。戸数は三、六八一で、そのうち二、三八三戸は農業に従事していない。住民は二万一〇〇〇人以上いる。読み書きできるもののいる世帯の数は、郡全体の三八％にたいして、五三％である（『ボブロフ郡ゼムストヴォ統計集』）。サマラ県のポクロフスカヤ自由村とバラコヴォ村は、それぞれ一万五〇〇〇人以上の住民をもっており、そのなかには、よそものがとくに多い。経営をもたないものは五〇％と四二％である。読み書き能力は平均よりも高い。統計は、商工業的村落が一般に読み書き能力がより高く、「経営をもたない世帯が大量に現われる」のを特徴とすることを記している（ノヴォウゼンスク郡およびニコラーエフ郡のゼムストヴォ統計集）。「クスターリ」の比較的高い文化水準については、さらに、『クスターリ委員会報告書』、第三冊四二ページ、第七冊九一四ページ、スミルノフ、前掲書五九ページ、グリゴリエフ、前掲書一〇六ページ以下、アンネンスキー、前掲書六一ページ、『ニジェゴロド集』、第二巻二二三―二三九ページ、『報告と調査』、第二巻二四三ページ、第三巻一五一ページを見よ。さらに、『ウラヂーミル県の営業』、第三冊一〇九ページは、調査者ハリゾメノフ氏が彼の馭者をしている絹織物工とかわした会話を、生きいきとつたえている。この織物工は、農民の「粗野な」生活や、彼らの低い欲望水準や、彼らの後

進性などを、きびしく、するどく攻撃し、最後にこう叫んでいる。「やれやれ、考えてもみてください、あれではいったいなんのために生きているのやら！」ロシアの農民が、なによりも自分たちの貧しさを自覚するという点で貧しいということは、ずっと以前から指摘されているところである。資本主義的マニュファクチュアの職人についていは（工場についてはいうまでもなく）、この点でずっと富んでいるといわなくてはならない。

五　マニュファクチュアの経済構造

以上で考察した、マニュファクチュア型に組織されているすべての営業では、きわめて多くの労働者が自立的でなく、資本に従属しており、原料も製品も所有せず、賃金を受けとっているだけである。マニュファクチュアではこの関係はけっして工場に固有なあの完結性と純粋さにまで到達していないとはいえ、これらの「営業」における大多数の労働者は、本質において賃金労働者である。マニュファクチュアでは、商業資本が産業資本とありとあらゆる仕方でからみあっており、資本にたいする働き手の従属は、他人の作業場での賃労働から、「経営主」のための家内労働に、さらには原料の買入れや生産物の販売の点での従属にいたる、数多くの形態と色合いをとっている。多数の従属した労働者とならんで、マニュファクチュアのもとでは、多少ともいちじるしい数のえせ自立的な生産者がつねにひきつづきたもたれている。しかし従属形態のこのあらゆる多様さは、すでにここで労働と資本の代理人たちのあいだの分裂が全面的に現われるという、マニュファクチュアのあの基本的性格をおおいかくすだけのものである。この分裂は、わが国のマニュファクチュアの最大級の中心地では、農民解放のころまでに、すでに幾世代にわたりうけつがれて、打ちかためられていた。さきに考察したすべての「営業」において、有産階級の人々に従属してはたらく以外にはいかなる生活手段ももたない多数の住民と、他方には、その地域の生産のほとんどすべてを自分たちの手に（あれこれの形で）にぎっている、少数の富裕な営業者とが見られる。この基本的事実こそ、わが国のマニュファクチュアに、先行の段階とは異なる、はっきり現われた資本主義的性格を付与するものである。資本への従属や賃労働は以前にもあったが、それらはまだいかなる強固な形態をもとるにいたっていなかったし、多数の営業者、多数の住民をまだとらえていなかったし、生産に参加する人々のさまざまな集団のあいだの分裂をひきおこしてもいなかった。また生産そのものも、先行の段階では、まだ小さな規模をたも

っており、経営主と労働者のあいだの差異も比較的小さかった。大きな資本家（いつもマニュファクチュアの頂点に立つ）はほとんどおらず、また、一つの作業に縛りつけられ、そのことによって、これらの部分作業を一つの生産機構に統合する資本に縛りつけられている部分労働者も、やはりいなかった。

われわれがさきにあげた資料のこういう特徴をはっきり裏づける、一老著述家の証言がここにある。「キムルィ村では、たとえばパヴロヴォ村のような他のいわゆる豊かなロシアの村々におけると同様に、住民の半分は、施し物だけで食っている乞食である。……働き手は、もし病気にでもなれば、そしてとりわけ彼が独り者であれば、一切れのパンもなしに次の週をむかえる危険にさらされる」*。

* エヌ・オフシャンニコフ、『ニジェゴロドの定期市にたいするヴォルガ上流地方の関係』。『ニジェゴロド集』、第二巻（ニジニ－ノヴゴロド、一八六九年）所載の論文。筆者は、一八六五年のキムルィ村にかんする資料に依拠している。この著述家は、定期市の概観とともに、定期市に現われる諸営業における社会経済関係の特徴を述べている。

このように、すでに六〇年代に、わが国マニュファクチュアの経済における基本的特徴が完全に現われていた。すなわち、一連の「有名な」「村々」の「富裕さ」と、大多数の「クスターリ」の完全なプロレタリア化とのあいだの対極性が、それである。マニュファクチュアの最も典型的な働き手（すなわち、土地との結びつきを完全に、またはほとんど断ちきった職人）が、資本主義の先行の段階にではなく、これからの段階に心をひかれ、農民によりも機械制大工業の働き手に近い立場にあるという事情は、この特徴と関連している。クスターリの文化水準にかんする前掲の資料は、このことをはっきり証明している。しかし、こういう評価を、マニュファクチュアの労働人員全体におしおよぼすことはできない。多数の小さな事業所と小経営主の残存、土地との結びつきの残存、および家内労働の非常に広範な発展――これらすべてのことの結果、マニュファクチュアにおけるきわめて多くの「クスターリ」が、依然として農民層に、小経営主への転化に心をひかれ、未来にではなく過去に心をひかれ、（労働の極度の緊張によって、節約と抜け目なさによって）自立した経営主に転化できるかのようなありとあらゆる幻想にとりつかれている。**ここで、ウラヂーミル県の「クスターリ営業」の調査者がそういう小ブルジョア的幻想にたいしてあたえた、すばらしく当を得た評価をあげよう。

「小工業にたいする大工業の最終的勝利や、数多くの機小屋にちらばっている働き手の、単一の絹織物工場の

建物内への統合は、たんなる時間の問題にすぎず、そして、この勝利の到来が早ければ早いほど、織物工にとってそれだけ良い。

絹織物業の現在の組織は、経済的諸層の不安定さと不確かさ、小規模生産や農業にたいする大規模生産の闘争を特徴としている。この闘争は、小経営主や織物工にはなにものもあたえずに、彼らを農業から引きはなし、負債に引きずりこみ、不況期にはすべての苦難を彼らにおしかぶせて、不安の大波のなかに彼らを引きこむ。生産の集積は織物工の賃金を引きさげはしないが、それは、労働者を誘惑したり、酒を飲ませたりすることや、彼らの年収につりあわない前貸金で彼らを引きよせたりすることを、不要にする。相互の競争が弱まるにつれて、工場主たちは、織物工を債務で縛るために多額の金を費やすことには興味をなくす。しかも大規模生産は、工場主の利益と働き手の利益、一方の富と他方の貧困を、きわめてはっきり対置するので、織物工にとっても自身が工場主になろうという意欲は生じえない。小規模生産は大規模生産以上のものを織物工にあたえはしない。しかもそれは大規模生産のような安定した性格をもたず、そのため労働者をはるかに深く堕落させる。織物工クスターリにとっては、ある種のいつわりの展望が描きだされる。彼は、自分自身の織機を備えつけることのできるときを待っている。この理想を達成するために、彼は全精力を傾け、借金をし、盗みをし、嘘をつき、自分の仲間たちをもはや同憂の友としてではなく、敵として、遠い未来のかなたに彼にとって描かれているみすぼらしい織機をめざす競争者として、見るのである。小経営主は、自分の経済的なみじめさを理解せず、買占人や工場主にとりいり、仲間には原料の買入れや製品販売の場所と条件をかくす。彼は、自分では自立した経営主だと思いこんでいながら、大商人の手中で、みずからもとめてなった哀れな道具、玩具になる。泥沼から抜けだし、三―四台の織機をやっと備えつけるようになると、彼はもはや、経営主の困難な立場について、織物工の怠惰や飲酒について、債権のこげつきから工場主を守る必要について、かたるのである。小経営主――それは、ちょうど、古き佳かりし時代に執事や家事管理人が農奴制的隷属の生きた化身であったのと同様に、工業的隷属の生きた原理である。生産用具が生産者から完全には分離されておらず、生産者にとって自立した経営主になる可能性があるときには、また、工場主、小経営主、仲買人が、上層の搾取を受けていながら、自分より下位の経済諸層を支配し搾取して、買占人と織物工とのあいだの経済的な溝を結び

つけているときには、働き手の社会的意識は曇らされ、彼らの想念は虚構によって堕落させられる。連帯がなければならないところで競争が生まれ、本質において敵対的な経済的諸集団の利益が結合させられている。絹織物生産の現在の組織は、経済的搾取だけにとどまらないで、被搾取者のあいだに自己の代理人を見つけだし、彼らに、働き手の意識を曇らせてその心を堕落させる仕事をさせるのである」(『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、一二四—一二六ページ)。

* 彼らのイデオローグであるナロードニキとまったく同様に。

** 自主的活動の個々の英雄たち（ヴェ・コロレンコの『パヴロヴォの概観』のなかのドゥジキンのような）にとっては、このような転化はマニュファクチュア期にはまだ可能であるが、もちろん、無産の部分労働者大衆にとってはありえないことである。

六 マニュファクチュアにおける商業資本と産業資本。「買占人」と「工場主」

さきにあげた資料からわかるように、資本主義のこの発展段階では、大規模な資本主義的作業場とならんで、きわめて多数の小さな事業所がつねに見うけられる。これらの小さな事業所は、数のうえでは通常むしろ優勢でさえあるが、生産総額においてはまったく従属的な役割しか演じていない。マニュファクチュアのもとで小さな事業所がこのように維持される（そして、すでに見たように、発展しさえする）のは、まったく自然的な現象である。手労働生産のもとでは、大きな事業所は小さな事業所にたいして決定的な有利さをもたない。分業は、きわめて単純な部分作業をつくりだすことによって、小さな作業場の出現を容易にする。だから、少数の比較的大きな事業所とならんで多数の小さな事業所が存在することこそ、資本主義的マニュファクチュアにとって典型的である。これら両者のあいだになんらかの関連があるだろうか？ 両者のあいだの関連がきわめて密接であって、大きな事業所がほかならぬこれらの小さな事業所から成長するのであり、小さな事業所がときにはマニュファクチュアの外業部にすぎないことがあり、たいていの場合、両者を結びつけているのは、大きな経営主に所属して小さな経営主を従属させている商業資本である、ということについて、さきに検討した資料は疑問の余地を残していない。大きな作業場の経営主は、原料の買入れと製品の販売を大規模におこなわなければならない。彼の商売の取引額が大きければ大きいほど、商品の売買、選別、保管、その他のための支出（生産物一単位あたりの）

は少なくなる。そこで、小経営主に材料を小売で転売し、彼らの製品を買いしめ、それをマニュファクチュア経営主が自分のものとして転売する、という現象が生まれる。* 原料の販売や製品の購入のこれらの業務に、債務奴隷制や高利貸付業が結びつく（しばしばおこなわれているように）場合には、また小経営主が材料を掛けで買い、債務の支払いに製品を引きわたすような場合には、大きなマニュファクチュア経営主は、自分の資本にたいして、賃金労働者からはけっしてとることのできないような高い利潤を手に入れる。分業は、大経営主にたいする小経営主のこういう従属関係の発展に新しい刺激をあたえる。大経営主は、あるいは家々に材料を配って仕あげさせる（または一定の部分作業をやらせる）か、あるいは「クスターリ」から生産物の一部分、特殊な種類の生産物、等々を買いしめるかする。ひとことでいえば、商業資本と産業資本とのあいだのきわめて密接で不可分な結びつきは、マニュファクチュアの最も特徴的な特性の一つである。ここでは、「買占人」は、マニュファクチュア経営主（多少とも大きな作業場はすべて「工場」に入れてしまうという、普通おこなわれているまちがった用語法によれば「工場主」）と、ほとんどつねにからみあっている。だからたいていの場合、大きな事業所の生産規模にかんする資料は、わが国の「クスターリ営業」におけるそれらの真の意義についてはまだいかなる観念もあたえない。** なぜなら、それらの事業所の経営主たちは、自分の事業所の労働者の労働だけではなく、多数の家内労働者の労働や、さらには、彼らが「買占人」として関係する多数のえせ自立的な小経営主の労働までも、（de facto）〔事実上〕支配しているからである。*** このように、商業資本の発展程度は産業資本の発展程度に反比例するという、『資本論』の著者が確立した法則は、（一七）ロシアのマニュファクチュアにかんする資料のうえにとくにはっきり現われている。実際にまた、第二節で記述したすべての営業を、次のように特徴づけることができる。すなわち、それらの営業において、大きな作業場が少なければ少ないほど、それだけ「買占め」が強く発展しており、逆の場合は逆である。ただ資本の形態が変わるだけで、資本そのものはどちらの場合にも支配しており、そしてしばしば「自立的」クスターリを賃金労働者よりも悪い状態におとしいれているのである。

* すでに述べたことに、もう一つの例をつけくわえておこう。モスクワ県の家具製造業では（イサーエフ氏の著書のうちの一八七六年の報告）、最大の営業者は、高価な家具の生産をはじめて「幾世代もの技能の高い手工業者を養成した」ゼニン家である。一八四五年に、彼らは製材所を設立した（一八

九四／九五年に――一万二〇〇〇ルーブリ、労働者一四人、蒸気発動機一台）。この営業全体で七〇八の事業所があり、一、九七九人の労働者がいて、そのうち八四六人、すなわち四二・七％が賃金労働者であり、生産額は四五万九〇〇〇ルーブリであったことを、記しておこう。六〇年代のはじめから、ゼニン家は、ニジニ－ノヴゴロドで材料を卸で仕入れるようになった。薄板を一〇〇枚につき一三ルーブリで数貨車分買いいれ、一八－二〇ルーブリで小さなクスターリに売るのである。七つの村（一一六人の働き手がいる）で、大多数の者がゼニン家に家具を売っているが、このゼニン家は、モスクワに家具とベニヤ板の倉庫をもっていて（一八七四年に建設）、四万ルーブリばかりの取引をしている。二〇人ばかりの単独営業者が、ゼニン家のための仕事をしている。

＊＊ここで、本文で述べたことを例証する一例をあげよう。オリョール県トルブチェフスク郡ネギノ村に、八人の労働者をもつ生産額二〇〇〇ルーブリの一搾油工場がある（一八九〇年度の『工場案内』）。一見したところ、この小さな工場は、この地方の搾油業における資本の役割がきわめて小さいことをしめしている。しかし産業資本の発展が弱いことは、商業資本と高利貸資本の発展が巨大であることを意味するだけである。ゼムストヴォ統計集からわれわれはこの村について次のことを知る。すなわち、一八六戸のうちの一六〇戸は地元の一工場主によって完全に債務奴隷化されており、その工場主は、彼らすべてにかわって税を支払うことまでし、必要ないっさいのものを彼らに貸しつけ（しかも、何年も何年もにわたって）、そして、負債の支払いとして割りびいた値段で麻を受けとっているのである。オリョール県の多数の農民も、同じような債務奴隷の状態にある。こういう情況のもとで、産業資本の発展が弱いといって喜んでいられるだろうか？

＊＊＊だから、大きなマニュファクチュア経営主を考察から除外し（それはクスターリ工業ではなく工場工業ではないのか！）、「買占人」を「本質的にはまったくよけいで、生産物の販売が整備されていないためにのみひきおこされた」（ヴェ・ヴェ氏、『クスターリ工業の概説』、一五〇ページ）現象と見るならば、その種の「クスターリ営業」の経済組織の描写がどんなものになってしまうか、想像できよう。

ナロードニキ経済学の基本的な誤りはまさに、それが、一方で、大きな事業所と小さな事業所との関連を、他方で、商業資本と産業資本との関連を、無視あるいはあいまいにしたりする点にある。「パヴロヴォ地区の工場主は、複雑化した形の買占人にほかならない」――グリゴリエフ氏はこう述べている（前掲書、一一九ページ）。このことは、パヴロヴォについてだけでなく、資本主義的マニュファクチュアの型に組織されている大多数の営業についてあてはまる。逆の命題も正しい。すなわち、マニュファクチュアにおける買占人は、複雑化した形の「工場主」である。ちなみに、この点に、マニュファクチュアにおける買占人と、農民的小営業における買占人とのあいだの、本質的な相違の一つがあるのである。しかし、「買占人」と「工場主」

との関連というこの事実のうちに、小規模工業をよしとするなんらかの論拠を見いだすこと（グリゴリエフ氏や他の多くのナロードニキが考えているように）は、先入観念につごうがいいように事実を歪めてまったく恣意的な結論を引きだすことを意味する。すでに見たように、商業資本の産業資本への接合が、直接的生産者の状態を賃金労働者の状態とくらべて大きく悪化させ、彼の労働日を延長させ、稼ぎ高を低下させ、経済的および文化的発展を押しとどめているということを、多くの資料が証明している。

七　マニュファクチュアの付属物としての資本主義的家内労働

資本主義的家内労働――すなわち、企業主から受けとる材料の、出来高払いでの家内加工――は、前章で指摘したように、農民的小営業でも見うけられる。それはまた、あとで見るように、工場、すなわち機械制大工業とならんでも（しかも広範に）見うけられる。このように、資本主義的家内労働は、工業における資本主義発展のすべての段階で見うけられるが、それが最も特徴的であるのはほかならぬマニュファクチュアにとってである。農民的小営業も機械制大工業も、きわめて容易に家内労働なしですますことができる。だが資本主義発展のマニュファクチュア期――この時期には働き手と土地との結びつきの存続がつきものであり、大きな事業所のまわりに多数の小さな事業所が存在する――は、問屋制前貸なしに考えることが困難であり、ほとんど不可能である。* 実際に、ロシアの資料は、すでに見たように、資本主義的マニュファクチュアの型に組織されている営業で問屋制前貸がとくに広範におこなわれていることを、証明している。だからしてわれわれは、ほかならぬこの章で資本主義的家内労働の特徴的な特性を考察するのが正しいと考える。もっとも、以下にしめす例のうちには、特別マニュファクチュアに関係させることのできないものも、いくつかある。

＊ 周知のように、西ヨーロッパでも、資本主義のマニュファクチュア期は、たとえば織物業におけるように、家内労働の広範な発展を特徴としていた。マルクスが、マニュファクチュアの古典的な例として時計生産を記述したさい、時計の文字盤やゼンマイや側がマニュファクチュア自体のなかでつくられることはまれであり、総じて部分労働者は家で仕事することが多い、と指摘しているのは興味深い（『資本論』、第一巻、第二版、三五三―三五四ページ[一九七]）。

なによりもまず、家内労働では、資本家と働き手とのあいだに数多くの仲介者がいることを、指摘しよう。大企業家は、ときによっては別々の村落に分散している幾百幾千

の労働者に、自分で材料を配ることはできない。だから、材料を卸で引きとり小口で配ってまわる仲介者（ある場合には仲介者たちのピラミッド型組織さえも）の出現が不可欠である。まぎれもない sweating system 〔スウェティング・システム〕[一〇]、汗を搾りだす制度、最もきびしい搾取の制度ができあがる。すなわち、働き手に近い位置にある「小親方」（「機小屋の持ち主」とか、レース業における「女商人」とか、その他等々）は、働き手の困窮の特殊な場合をも利用することができ、大きな事業所では考えられないような、また、どんな統制も監督も絶対に排除するような搾取方法を探しだすのである。*

* ひとつにはこのため、工場は、この種の仲介者に反対して、たとえば「出来高払い職人」——自分で助手の労働者をやとう労働者——に反対して、たたかうのである。コベリャツキー、『工場主便覧……』、サンクト・ペテルブルグ、一八九七年、二四ページ以下を見よ。クスターリ営業にかんするあらゆる文献は、問屋制前貸のもとでの仲介者によるクスターリの法外な搾取を立証する事実でいっぱいである。例として、コルサックの前掲書、二五八ページの一般的論述、「クスターリ」織物業にかんする記述（すでに引用したもの）、モスクワ県における婦人営業の記述（『モスクワ県統計報告集』第六巻、第七巻）、その他多くのものをあげておこう。

sweating system とならんで、そして、おそらくはその一形態として、truck-system 〔トラック－システム〕、物資による支払いをあげなければならない。これは、工場では取り締まられているが、クスターリ営業では、とくに問屋制前貸のもとでは、ひきつづき支配している。さきに個々の営業を記述したさいに、広く見られるこの現象の例をあげておいた。

さらに、資本主義的家内労働は、極度に非衛生的な労働環境と不可避的に結びついている。働き手の完全な貧困、労働条件をなんらかの規則で規制することの完全な不可能、生活の場所と労働の場所との合一——これらが、家ではたらく労働者の住居を、衛生上の乱雑や職業病の発生源にする条件である。大きな事業所では、同様な現象とたたかうことがなお可能であるが、家内労働はこの点では最も「自由主義的な」種類の資本主義的搾取である。

労働日の度はずれた長さもまた、資本家のための家内労働と小営業一般の必然的な特性の一つである。「工場」と「クスターリ」における労働日の長さを比較した例は、さきにすでにあげた。

婦人やほんの小さな子供を生産へ引きいれることは、家内労働のもとではほとんどいつも見うけられる。その例証として、モスクワ県の婦人の営業にかんする記述から若干の資料をあげよう。綿紡糸の糸巻き作業に一〇、〇〇四人

の婦人が従事している。子供たちは五—六歳から（！）はたらきはじめ、日給は一〇カペイカ、年給は一七ルーブリである。婦人の営業における労働日は一般に一八時間に達する。編物業では六歳からはたらきはじめる。日給は一〇カペイカ、年給は二二ルーブリである。婦人の営業を総括すると、婦人の働き手は三七、五一四人で、五—六歳からはたらきはじめ（一九の営業のうちの六つで。なおこれら六つの営業に三三、四〇〇人の婦人の働き手がいる）、平均日給は一三カペイカ、年給は二六ルーブリ二〇カペイカである。*

* 婦人の営業を記述したゴルブーノヴァ女史は、各営業の平均値だけにもとづいて、さまざまな営業における婦人の働き手の数がそれぞれちがうことを考慮に入れないで、一八カペイカおよび三七ルーブリ七七カペイカと、誤った計算をしている。

資本主義的家内労働の最も有害な側面の一つは、それが働き手の欲望水準の低下をもたらすという点にある。企業家は、住民の生活水準がとくに低く、また、土地との結びつきがあるため二束三文ではたらくこともできるような僻地で、労働者をよりどりすることができる。たとえば、農村のある靴下製造企業の経営主はこう説明している。モスクワでは家賃が高いし、それに、女工には「……白パンを食べさせなければならない。……だが、われわれのところでは、彼女たちは自分の家ではたらき、黒パンを食べる。……どうしてモスクワがわれわれに太刀打ちできるはずがあろうか？」。* 綿紡糸の糸巻き業で賃金が極端に安いのは、農民の妻や娘などにとって、それが副次的な稼ぎにすぎないからである。「このように、この生産の現存の制度は、そこからの稼ぎだけで生活するものにとっては、賃金をたえがたいまでに引きさげ、工場労働だけで生活するものにたいしては、よぎなく賃金を欲望の最低限以下に低下させるか、もしくは欲望水準の向上をはばむかする。そのどちらも、きわめて異常な状態をつくりだしている」。** ハリゾメノフ氏はこういっている。「工場は安価な織物工を求めている。そして、そういう織物工を工業の中心地から遠く離れた彼の郷里の村で見つける。……工業の中心地から周辺部へむかうにつれて賃金が低くなることは、疑う余地のない事実である」。*** したがって、企業主たちは、住民を人為的に農村にひきとめている諸条件を、みごとに利用しえているのである。

* 『モスクワ県統計報告集』、第七巻、第二冊、一〇四ページ。
** 前掲書、二八五ページ。
*** 『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、六三ページ。同二五〇ページを参照。

家内労働者の分散も、この制度の、これにおとらず有害な側面である。つぎに、買占人自身によるこの側面の明瞭な特徴づけをあげよう。「どちらの業務も」（トヴェーリの鍛冶工から釘を買う小さな買占人と大きな買占人との）、「同じ原理のうえに立っている。すなわち、釘の買付けにさいして、一部を貨幣で、一部を鉄で支払い、そしてより従順にさせておくために、鍛冶工をつねに各自の家にとどめておく、というのである」。* このことばのなかに、わが国の「クスターリ」工業の「生命力」の、巧まざる種明しがある！

* 『報告と調査』、第一巻、二一八ページ。同、二八〇ページ——家ではたらく手織工に仕事を出すほうが自分にはより有利だという、工場主イロドフの証言を参照。

家内労働者の分散性と多くの仲介者の存在は、おのずから、債務奴隷制の繁栄をもたらし、また、農村の僻地でふつう「家父長制的」関係にともなうあらゆる形態の人格的隷属をもたらす。経営主にたいする労働者の債務は、一般に「クスターリ」営業で、とくには家内労働のもとで最も普及している現象である。* 働き手は、ふつう Lohnsklave〔賃金奴隷〕であるばかりでなく、Schuldsklave〔借金奴隷〕でもある。農村の諸関係の「家父長性」が労働者をどんな状態におくかということのいくつかの例は、さきにしめしておいた。**

* モスクワ県のブラッシ製造業（『モスクワ県統計報告集』、第六巻第一冊、三二ページ）、櫛製造業（同、二六一ページ）、玩具製造業（第六巻第二冊、四四ページ）、装身具製造業、等々における、経営主にたいする労働者の債務の例。絹織物業では、織物工は工場主にたいして全面的に債務を負っており、工場主は織物工にかわって税を支払い、一般に「土地を賃借するのと同じように織物工を賃借している」（『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、五一—五五ページ）。

** ニジェゴロド県の鍛冶工については、こう書かれている。「もちろん、ここでも、経営主は労働者の労働を搾取しているが、その規模はより小さく（？）、しかもそれは、なにか家父長制的に、全体の同意を得て（！）、どんな誤解もなくなされている」（『クスターリ委員会報告書』、第四冊、一九九ページ）。

資本主義的家内労働の特徴づけからその普及の条件に移ると、なによりも、この制度と分与地への農民の緊縛との関係を指摘しなければならない。移動の自由がないこと、土地から解放されるために、ときには金銭上の損失をもしのばなければならないこと（すなわち、土地にたいする賦払金がそこからの収益を上まわるため、分与地を賃貸するものが借地人に払いたすような場合）、農民共同体の身分的閉鎖性、——すべてこれらのことは、資本主義的家内労働が適用される分野を人為的にひろげ、農民をこれらの最

悪の搾取形態に人為的に縛りつける。こうして、古くなった諸制度と、しんまで身分制がしみこんだ土地制度は、債務奴隷制や人格的隷属の最大限の進展と結びついた、また最も苦難にみちて最も救いのない勤労者の状態と結びついた、技術的におくれた生産形態を永続させて、農業においても工業においても最悪の影響をおよぼすのである。*

* もちろん、どんな資本主義社会にも、最悪の条件で家内労働を引きうけることを承諾する農村プロレタリアートがつねにいるであろう。しかし古くなった諸制度は、家内労働が適用される分野を強化し、それとのたたかいを困難にする。すでに一八六一年に、コルサックは、わが国における家内労働のすさまじい普及ぶりとわが国の土地制度との関連を指摘している（前掲書、三〇五―三〇七ページ）。

さらに、資本家のための家内労働と農民層の分解との関連もまた、疑いないことである。家内労働の広範な普及は、二つの条件を前提する。㈠ 自分の労働力を売らなければならない、しかも安く売らなければならない、多数の農村プロレタリアートの存在、㈡ 仕事を下請に配るさいに代理人の役割を引きうけることができるような、地元の事情をよく知っている富裕な農民の存在、である。商人の送りこむ手代は、かならずしもつねにこの役割を果たしうるわけではないし（とくに多少とも複雑な営業では）、また、「身内」であるその地元の農民ほど「みごと」にこの役割を果たしうることは、まずもってありえない。* 大企業家は小企業家に、商品を掛けで売ったり、委託販売に出したりすることができるし、小企業家は、自分のわずかばかりの商取引を拡大するどんな機会にもがつがつとびつくものだが、大企業家は、もしこれらの小企業家の一軍を自分の配下に擁していなかったなら、おそらく、問屋制前貸の彼の業務の半分も実行できないであろう。

* さきに見たように、大きな工業経営主や、買占人や、機小屋の持ち主や、小親方は、同時に富裕な農耕者でもある。たとえば、モスクワ県の組紐織物業にかんする記述のなかで、こう述べられている。「小親方は、彼の織物工とまったく同じような農民であるが、ただ織物工よりは余分に百姓家や牛馬をもっており、おそらくは家族全員で一日に二度お茶を飲むことができる人たちである」（『モスクワ県統計報告集』、第六巻第二冊、一四七ページ）。

最後に、資本主義がつくりだす過剰人口の理論における、資本主義的家内労働の意義を指摘しておくことは、きわめて重要である。ロシアの資本主義による労働者の「解放」について、ヴェ・ヴェ氏やニコライ―オン氏その他のナロードニキたちほど多くをかたったものはいないが、しかし彼らのうちのだれ一人として、農民改革後の時代にロシアでつくりだされてきたし、いまもつくりだされている労働者「予備軍」の具体的諸形態を分析するものはい

なかった。ナロードニキのうちのだれ一人として、家内労働者がわが国の資本主義の「予備軍」のほとんど最大の部分をなしているという些事に、気づきもしなかった*。問屋制前貸によって、企業家たちは、作業場の建設その他のために多くの資本や多くの時間を費やすことなく、生産を望むままの規模にただちに拡大することができる。しかもそのような即時の生産拡張は、市場の情況によって非常にしばしば要請される。なんらかの大きな工業部門（たとえば鉄道建設）が活況をおびる結果、または戦争その他のような事情の結果、需要が強まるときがそうである。だから、われわれが第二章で幾百万の農業プロレタリアートの形成として特徴づけたあの過程のもう一つの側面をなすのは、農民改革後の時代における資本主義的家内労働の巨大な発展である。「自分の家族と近くの市場の少数の消費者のことを念頭においていた、厳密な意味では現物経済的な家内経済の仕事から解放された手は、いったいどこへ行ったのだろうか？　労働者でいっぱいの工場、大規模な家内生産の急速な拡大がはっきりした解答をあたえている」（『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、二〇ページ、傍点は私のもの）。現在のロシアで、企業家によって工業でつかわれている家内労働者の数がどれほど大きなものにちがいないかは次節にあげる数字からわかるであろう。

* ナロードニキたちのこの誤りは、彼らの大部分がマルクスの理論に従いたいと思っているだけに、いっそうひどいものがある。マルクスは、きわめてきっぱりした表現で、「近代的家内労働」の資本主義的性格を強調し、これらの家内労働者が資本主義に固有な相対的過剰人口の一形態をなすことを、とくに指摘している（『資本論』、第一巻、第二版、五〇三ページ以下、および六六八ページ以下。とくに第二三章第四節）。（六二）

** ちょっとした一例。モスクワ県では仕立業が広く普及している（ゼムストヴォ統計は、一八七〇年代末に全県で、一、一二三人の地元の仕立職人と四、二九一人の出稼ぎの仕立職人がいたと計算している）。そして仕立職人の大部分はモスクワの既製服商人のために仕事をしている。仕立業の中心地はズヴェニゴロド郡のペルフシェヴォ郷である（第五章の付録I、営業第三六号、ペルフシェヴォの仕立職人にかんする資料を見よ）。一八七七年の戦争のときには、ペルフシェヴォの仕立職人の景気はとくによかった。彼らは、特別な請負人の注文によって軍用テントをつくった。小親方は、三台のミシンと一〇人の日雇女をつかって、一日に五－六ルーブリの「利益」をあげた。日雇女には一日に二〇カペイカが支払われた。「この活況期には、シャドリン（ペルフシェヴォ郷の主要な村）に、周辺の村落からきた三〇〇人以上の日雇女が住んでいたといわれる」（『モスクワ県統計報告集』、第六巻第二冊、前出、二五六ページ）。「その当時、自分で作業場をもっているペルフシェヴォの仕立職人は、大儲けすることができ、ほとんどのものがみごとに家を建てたほどである」（同所）。五－一〇年に一度、忙しい仕事につくかどうかとい

うこれらの数百人の日雇女は、プロレタリアートの予備軍の隊列のなかでいつも待機していなければならないのである。

八　「クスターリ」工業とはなにか？

さきの二つの章では、わが国で「クスターリ」工業と呼びならわされているものを、主としてとりあつかった。いまや、標題にかかげた問題にたいして解答を試みることができる。

さきに分析した工業の諸形態のうち、まさにどのようなものが、文献のなかで「クスターリ営業」という一般的なグループに入れられているかを判断するために、若干の統計資料からはじめよう。

モスクワの統計家たちは、農民の「営業」にかんする調査の結論で、ありとあらゆる非農業的生業を集計した。その計算では、地方の営業（商品を製造する）で一四一、三二九人（第七巻第三冊）であったが、しかしこのなかには、手工業者（製靴職人やガラス職人の一部、その他多数）、製材業者、その他等々がはいっていた。彼らのうち少なくとも八万七〇〇〇人は（個々の営業についてわれわれが計算したところによると）、資本家にやとわれている家内労働者である。* われわれが資料を集計できた五四の営業では、賃金労働者は二九、四四六人のうち一七、五六六人、すなわち五九・六五％である。ウラヂーミル県については次のような結果が得られた（『ウラヂーミル県の営業』の五つの分冊による）。すなわち、三一の営業に全部で一八、二八六人の働き手がおり、そのうち一五、四四七人は資本主義的家内労働が支配的な営業ではたらいている（そのうち、五〇四人が賃金労働者、すなわち、いわば第二次の雇い人である）。ついで、一五〇人の農村手工業者（そのうち四五人は被雇用者）と、二、六八九人の小商品生産者（そのうち五一一人が被雇用者）がいる。資本主義的につかわれている労働者の総計は、（15,447＋45＋511＝）一六、〇〇三人、すなわち八七・五％である。** コストロマ県については、（『クスターリ委員会報告書』所載のチルローの表にもとづくと）八三、六三三人の地元の営業者がかぞえられ、そのうち、一九、七〇一人は木材労働者（これまた「クスターリ」！）、二九、五六四人は資本家のために仕事をしている家内労働者である。約一九、九五四人が小商品生産者の優勢な営業ではたらいており、約一四、四一四人が農村手工業者である。*** ヴャトカ県の九つの郡については、（同じ『報告書』によれば）六〇、〇一九人の地元の営業者がかぞえられる。そのうち九、六七二人は製粉業者と搾油業者であり、二、〇三二人は純粋な型の手工業者（織物の染色）で

あり、一四、九二八人は、一部が手工業者で、一部が圧倒的に自主的労働をしている商品生産者であり、一四、四二四人は資本に部分的に従属している営業で、一四、八七五人は資本に完全に従属している営業で、四、〇八八人は賃労働が完全に優勢な営業で、はたらいている。*** われわれは、他の諸県にかんする『報告書』の資料により、その組織にかんして多少とも詳しい資料のある営業の表を作成した。こうして、一〇七、九五七人の働き手をもつ生産額二一一五万一〇〇〇ルーブリの九七の営業が得られた。そのうち、賃労働と資本主義的家内労働が優勢な営業では働き手七〇、二〇四人（一八六二万一〇〇〇ルーブリ）、賃金労働者と、資本家に家内労働者としてつかわれているものが少数を占めるにすぎない営業では、働き手二六、九三五人（一七〇万六〇〇〇ルーブリ）、そして最後に、自主的労働がほとんど完全に優勢である営業では、働き手一〇、八一八人（八二万四〇〇〇ルーブリ）、である。ニジェゴロド県のゴルバートフとセミョーノフの両郡の七つの営業にかんするゼムストヴォ統計の資料によると、一六、三〇三人のクスターリがかぞえられ、そのうち、四、六一四人は市場（いちば）めあてにはたらいており、八、五二〇人は「経営主のために」、三、一六九人は賃金労働者として、はたらいている。すなわち、一一、六八九人が資本主義的に使用される労働者である。一八九四／九五年のペルミ県のクスターリ調査の資料によれば、二六、〇〇〇人のクスターリのうち、六、五〇〇人（二五%）は賃金労働者であり、五、二〇〇人（二〇%）は買占人のためにはたらいている。すなわち、四五%が資本主義的に使用される労働者である。***

* ハリゾメノフ氏（さきに引用した論文）が、モスクワ県の四二の営業における一〇二、二四五人の働き手のうち、六六%は大規模生産の家内制度が無条件に支配している営業で使われているとみなしていたことを、思いおこそう。

** 残念ながら、われわれは、ヤロスラヴリ県のクスターリ工業にかんする最新の著作（『クスターリ営業』、ヤロスラヴリ県ゼムストヴォ統計局刊行、ヤロスラヴリ、一九〇四年）を、見ることができない。『ルースキエ・ヴェードモスチ』（一九〇四年、第二四八号）所載の詳しい書評から判断すると、これはきわめて貴重な調査である。県内のクスターリは一八、〇〇〇人と計算されている（一九〇三年には工場労働者は三三、八九八人と計算された）。営業は衰えつつある。賃金労働者をもつ企業は五分の一である。賃金労働者はクスターリ総数の四分の一である。クスターリ総数の一五%が、五人以上の労働者のいる事業所ではたらいている。全クスターリのちょうど半分が、経営主の材料をつかって経営主のために仕事をしている。農業は衰微している。クスターリの六分の一が馬や牛をもたず、三分の一が人をやとって土地を耕しており、五分の一が作付をしていない。クスターリの稼ぎは

週に一ルーブリ半である！（第二版の注）。

*** 出典は正確な資料をつたえていないので、すべてこれらの数字は概数である。農村手工業者のなかには、製粉職人、鍛冶職人、その他等々がふくまれている。

****『試論』、一八一―一八二ページを見よ。(二二三) ここでは、「クスターリ」のなかに、手工業者（二五％）もはいっている。手工業者を除くと、賃金労働者が二九・三％、買占人のためにはたらくものが二九・五％（一一二ページ）で、すなわち、五八・八％が資本主義的に使用される労働者である。

これらの資料がどんなに断片的であるにせよ（われわれの自由になる資料はほかになかった）、それらはやはり、全体として、「クスターリ」のなかに資本主義的に使用される労働者が多数はいっていることを、はっきりしめしている。たとえば、資本家のために家で仕事をするものの数は、（前掲の資料によれば）二〇万人以上をかぞえる。これは、五〇―六〇ばかりの郡についてのことであるが、これらの郡のうち、多少とも完全な調査がおこなわれていないところも少なくない。ロシア全体では、そういう労働者の数はおそらく二〇〇万人に達するにちがいない。* これに、「クスターリ」のところではたらく賃金労働者――前掲の資料からわかるように、これらの賃金労働者の数は、わが国でときおり考えられているほど少ないものではけっしてない――を加えると、われわれは、いわゆる「工場」の外部で資本主義的につかわれている工業労働者の二〇〇万人という数字は、むしろ最小限度の数字であると、認めなければならない。**

* たとえば、既製服製造業では、資本主義的家内労働がとくに発達しており、しかもこの産業は急速に発展している。「既製服のような第一次必需品にたいする需要は、年ごとに増大している」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第五二号、ニジェゴロド定期市の概観）。八〇年代になってはじめて、この生産業は巨大な発展をとげた。現在では、モスクワだけでも、二万人におよぶ労働者がいて、少なくとも一六〇〇万ルーブリの額の既製服を生産している。ロシア全体では、この生産は一億ルーブリに達するものと推定される（『専門家委員会の概観したロシア工業の進歩』、サンクト・ペテルブルグ、一八九七年、一三六―一三七ページ）。サンクト・ペテルブルグでは、一八九〇年の人口調査が、既製服製造業（第一一グループ、第一一六―一一八類）で、営業者の家族をふくめて三九、九一二人をかぞえあげており、そのうち一九、〇〇〇人が労働者で、一九、〇〇〇人が家族のいる単独営業者であった（『一八九〇年一二月一五日の人口調査によるサンクト・ペテルブルグ』）。一八九七年の人口調査によると、ロシア全体で、衣類の生産に一、一五八、八六五人が従事しており、その家族員が一、六二一、五一一人、合計二、七八〇、三七六人である（第二版の注）。(二二四)

** ロシアにおける「クスターリ」の数が四〇〇万人を下らないことを、思いおこそう（ハリゾメノフ氏の数字。アンドレ

ーエフ氏は七五〇万人と計算したが、彼の方法はあまりにも大ざっぱすぎる)。したがって、本文にあげた総括的資料は、「クスターリ」総数の約一〇分の一を包括するものである。

「クスターリ工業とはなにか？」という問にたいして、最後の二つの章で叙述した資料は、次のように答えることをせまっている。すなわち、それは、ふつう、家内工業や手工業から非常に大きなマニュファクチュアにおける賃金労働にいたる、工業のありとあらゆる形態がふくめられる概念であり、科学的研究にとって絶対に役だたない概念である、と。* 種々さまざまな型の経済組織のこのような混同は、「クスターリ営業」にかんする数多くの記述のなかで広くおこなわれているが、** ナロードニキ経済学者たちは、なんの批判もなくなんの分別もなしに、それを見ならっている。彼らは、たとえばコルサックのような著述家にくらべて大きく後退しており、珍妙きわまる理論をつくりだすために、広くおこなわれている概念の混同を利用したのである。「クスターリ工業」は、なにか経済的に同質のもの、それ自体同等のものとみなされ、なんの苦もなく「工場」工業という意味に解された「資本主義」に対置（彼らの表現！）された。たとえば、ニコライーオン氏をとってみられたい。そうすると、『概要』の七九ページに「諸営業の資本主義化（？）***」という標題があり、そのあとすぐに、なんの断り書も説明もなしに、「工場にかんする資料」云々とつづくのを見るであろう。ごらんのとおり、その単純さたるや感動に値する。「資本主義」イコール「工場工業」であり、工場工業イコール官庁出版物においてその標題で意味されているものなのである。そして、これほども深い「分析」にもとづいて、資本主義的につかわれている多数の労働者が資本主義の計算から落とされ、「クスターリ」のなかに入れられるのである。このような「分析」にもとづいて、ロシアにおける工業のさまざまな形態の問題が完全に回避されるのである。このような「分析」にもとづいて、わが国の「クスターリ」工業と「工場」工業との対立とか、前者と後者との断絶とか、「工場」工業の「人為性」等々の、きわめて不合理で有害な偏見の一つがつくられるのである。これはまさに偏見である。なぜなら、工業のすべての部門にわたって「クスターリ」工業と「工場」工業とのあいだのきわめて緊密で不可分な関連をしめしている資料に、いまだかつてだれひとり手をつけようとさえしなかったからである。

* 『試論』、一七九ページ以下を見よ[一〇〇]。

** 「クスタールニチェストヴォ」〔クスターリ経営〕という用語を、工業の形態の科学的規定のために保持しようとする願望は、わが国の文献において、この「クスタールニチェスト

ヴォ」についての純スコラ的な論議や定義をもたらした。ある学者は、クスターリをただ商品生産者としてのみ「理解」し、別の学者は手工業者をもふくめた。あるものは、土地との結びつきを不可欠な標識とみなし、他のものは例外を認めた。あるものは賃労働を除外し、他のものは、たとえば、労働者数一六人未満のものをふくめた、その他等々。このような論義（工業の諸形態の研究ではなく）がなんの役にもたちえなかったことは、いうまでもない。「クスタールニチェストヴォ」という特別な用語が生命をたもっているのは、なによりもロシア社会の身分制によるものであることを、指摘しておこう。すなわち、「クスターリ」というのは、その後見をすることもできれば、彼について遠慮なく勝手な案をめぐらすこともできるような、下層身分の業者なのである。そのさい、工業の形態は区別されない。商人や貴族は（たとえ彼らが小さな業者であったとしても）めったに「クスターリ」に入れられることがない。「クスターリ」営業というのは、普通は、あらゆる種類の農民的営業のことであり、またひとり農民的営業だけのことである。

*** ヴェ・ヴェ氏やニコライ―オン氏のお好みの「資本主義化」というこの用語は、新聞論文でなら簡略さのためにもちいてもよいが、資本主義のさまざまな形態や段階、それらの意義、それらの関連、それらの順次的発展を分析することをもっぱら目的とする経済学的研究においては、まったく不適当である。「資本主義化」ということで、一人の「働き手」の雇用という意味にも、買占めや蒸気力工場の意味にも、好きなように理解できる。これらすべてがひとからげにされていて、なにかが解明できるのなら、どうぞやってほしいものだ！

この章の課題も、この関連がまさにどの点にあり、ロシアで小工業と機械制大工業とのあいだにある工業の形態が、まさにどのような技術、経済、文化の特性をあらわしているかを、しめすことにあったのである。

第七章　機械制大工業の発展

一　工場の科学的概念と「工場」統計の意義

機械制（工場制）大工業に移るにさいして、なによりもまず、その科学的概念は、この術語の普通の、日常もちいられている意味とおよそ合致しないということを、確認しておかなければならない。わが国の官庁統計や一般の文献では、工場とは、多少とも多くの賃金労働者をもつ多少とも大きなあらゆる工業事業所のことと解されている。ところがマルクスの理論では、工業における資本主義の一定の、ほかならぬ最高の段階だけを機械制（工場制）大工業とよぶのである。この段階の基本的で最も本質的な標識は、生産のために機械体系を使用することにある。* マニュファクチュアから工場への移行は、幾世紀もかけてつくりあげられた職人の手工的技巧をくつがえす完全な技術革命を意味する。そしてこの技術革命につづいて、社会的生産関係のきわめて急激な破砕、生産に参加する人々の種々の集団のあいだでの最終的な分裂、伝統からの完全な断絶、資本主義のすべての暗黒面の先鋭化と拡大、それとともに資本主義による労働の大々的社会化が、不可避的にすすむ。このように、機械制大工業は資本主義の最後のことばであり、その否定的および「肯定的諸契機」の最後のことばである。**

* 『資本論』、第一巻、第一三章。

** 前掲書、第一巻、第二版、四九九ページ。(一八〇)

このことから、マニュファクチュアから工場への移行こそが資本主義の発展の問題でとくに重要な意義をもつことは、明らかである。この二つの段階を混同する人は、資本主義の変革的、進歩的役割を理解する可能性をみずから失うことになる。わが国のナロードニキ経済学者はまさにこの誤りをおかしているのであって、彼らは、すでに見たように、素朴にも資本主義一般を「工場」工業と同一視し、また「資本主義の使命」の問題や、さらには資本主義が「結合を推進することの意義」* の問題さえ、工場統計資料を調べるだけで解決しようと考えている。これらの著述家たちが工場統計の問題で驚くべき無知を暴露したこと（あ

とでくわしくしめすように）はさておくとして、彼らのもっと根深い誤りは、マルクスの理論を途方もなく紋切型にせまく理解している点にある。第一に、機械制大工業の発展にかんする問題をもっぱら工場統計だけに帰着させるのは、笑うべきことである。この問題はたんに統計の問題であるだけでなく、所与の国の工業で資本主義の発展が経過する諸形態と諸段階の問題でもある。これらの形態の本質ときわだった特性が明らかにされてはじめて、適切に加工された統計資料によってあれこれの形態の発展を例解することが、意味をもつのである。もしわが国の統計資料だけにかぎるならば、それは不可避的に、資本主義の多種多様な形態を混同し、木を見て森を見ないということになる。第二に、資本主義の全使命を「工場」労働者数の増加に帰着させることは、ミハイロフスキー氏が見せたのと同程度の深い理論的理解をしめすことを意味する。このミハイロフスキー氏は、労働の社会化とは、要するに、数百あるいは数千の労働者が同一の場所で挽いたり、割ったり、切ったり、削ったり、等々することに帰するのに、いったいなぜ人々は資本主義による労働の社会化について論ずるのか、といぶかったのである。**

＊　一八九四年の『ルースコエ・ボガーットヴォ』、第六号所載のニコライーオン氏の論文、一〇三および一一九ページ。また彼の『概説』およびヴェ・ヴェ氏『資本主義の運命』の随所を参照。

＊＊『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』、一八八三年、第七号、ポストロンニー氏の編集部への手紙。(一六〇)

これからさきの叙述の課題は二様である。すなわち、一方では、われわれはわが国の工場統計の情況の問題とその資料の有用性の問題とを、くわしく考察する。この作業の相当部分は消極的なものであるが、それが必要なのは、わが国の文献ではこの統計の数字がまったく濫用されているからである。他方では、われわれは農民改革後の時代における機械制大工業の成長を証明する資料を検討することにしよう。

二　わが国の工場統計

ロシアにおける工場統計の基礎的な典拠となっているのは、今世紀の初頭に公布された法律の要求するところにもとづいて、毎年工場主が商工局に提出する報告書である。*工場主の情報提出について法律に定められた詳細きわまる指示は善良な願望にすぎず、工場統計は現在にいたるまで、古くさいまったく農民改革以前の組織のままにとどまっており、県知事報告書のたんなる付属物にすぎない。「工場」

概念の正確な定義はなにもない。だから、県の行政機関、さらには郡の行政機関でさえこの術語を種々さまざまにつかっている。情報を規則正しく同一様式であつめ、それらを点検することを指導する中央機関は、なにひとつない。種種の官庁（鉱山局、商工局、間接税務局、等々）のあいだで工業事業所が分掌されていることが、混乱をいっそう強めている。[**]

* わが国の工場統計の典拠の詳細な概観は、『ロシア帝国統計時報』、第二シリーズ、第六冊、サンクト・ペテルブルグ、一八七二年、および『一八六八年度ヨーロッパ・ロシア工場工業統計資料』、ボーク氏編、序文一―二三ページを参照。

** 『試論』所収の論文『わが国の工場統計の問題によせて』を参照。そこでは、わが国の工場工業にかんする商工局の最新の刊行物がくわしく検討してある。

付録IIにわれわれは、官庁出版物にのっている、農民改革後の時代の、すなわち一八六三―一八七九年および一八八五―一八九一年のわが国の工場工業にかんする資料をあげておく。これらの資料は内国消費税を課されない生産業だけにかんするものであるが、時期が異なると、情報のある生産業の数も異なる（一八六四―一八六五年と一八八五年以降の資料が最も完全な点ですぐれている）。だからわれわれは、一八六四―一八七九年と一八八五―一八九〇年について、すなわち二二年間について情報のある、三四の生産業をえらびだした。これらの資料の価値を判断するために、まず最初にわが国の工場統計についての最も重要な刊行物を考察しよう。六〇年代からはじめよう。

六〇年代の工場統計の編者たちは、自分たちの処理した資料がきわめて不満足なものであることを、よく自覚していた。彼らの一致した評価によれば、労働者数と生産額は、工場主の申告ではいちじるしく低めにされている。「県がちがうと、なにを工場とみなすべきかの定義さえ一様でない。というのは、多くの県は、たとえば風車小屋や煉瓦を焼く小屋や小さな工業事業所を工場のなかに入れているのにたいして、他の県はこれらを計算から除外しているというぐあいで、その結果、いろいろな県の工場総数の比較をしめすことさえ意味がなくなっている。」[*]ブーシェン、ボークおよびチミリャーゼフはもっと辛辣な批評をしており、[**]以上のほかに、工場労働者のなかに家内労働者がふくまれていることや、若干の工場主は工場内に居住している労働者だけを申告していることなどをあげている。ブーシェン氏はいう。「マニュファクチュア工業や工場工業の正確な官庁統計は存在しないし、第一次資料の収集の主要な原理が変わらないかぎり、それは今後も存在しないであろう。」[***]「多くの生産業についての工場一覧表には、明らかに誤解から、工場的性格をまったくもたない多数の純手工業的な

事業所とクスターリ事業所がはいっている。[****]」このため、『年報』編集部は、「不正確で明らかに過大にされた数字を世間につたえることを欲せず、[†]」印刷された資料による総計を出すことさえしなかったのである。この明らかな過大視の大きさを読者に正確に思いうかべてもらうために、『年報』の資料に目を向けてみよう。これは、生産額一、〇〇〇ルーブリ以上の工場の名簿をのせている点で、ほかのすべての典拠にくらべてつごうのよいのが特徴である。現在では（一八八五年以降）、生産額がそれ以下の事業所は工場から除かれている。『年報』によってこれら小さな事業所を計算してみると、工場総数にはいっているそれらの数は二、三六六で、その労働者数は七、三二七人、生産額は九八万七〇〇〇ルーブリとなる。それでもなお、『年報』によると、七一の生産業における工場の数は六、八九一で、その労働者数は三四二、四七三人、生産額は二億七七六二一万一〇〇〇ルーブリである。したがって、小さな事業所は事業所総数の三四・三%、労働者総数の二・一%、生産額の〇・三%を占めることになる。自明のことであるが、これほども小さな事業所（一経営あたり平均では労働者数三人強、生産額五〇〇ルーブリ弱）を工場とみなすことはばかげているし、それらを多少とも完全に記録することは問題になりえない。わが国の統計では、この種の事業所が工場のなかに入れられているだけでなく、数百のクスターリが、まったく人為的にまた恣意的に、単一の「工場」という形で統合されてしまっている例さえある。たとえば、同じ『年報』は、ニジェゴロド県ゴルバートフ郡イズブィレッ郷の網製造業で、「労働者九二九人、紡車三〇八台、生産額一〇万〇四〇〇ルーブリのイズブィレッ郷の農民たちの」工場をあげており（一四九ページ）、あるいはまた同郡のヴォルスマ村には、「鍛冶場―一〇〇、仕事台（住居内の）―二五〇、馬力砥ぎ車―三、手動砥ぎ車―二〇、労働者―九〇二人、生産額―六六一〇ルーブリの、シェレメーテフ伯爵の一時義務負担農民たちの」工場がある（二八一ページ）。このような統計が現実についてどのような概念をあたえるか、想像にかたくない[†*]！

* 『統計時報』、第一巻、一八六六年、序文二七ページのペ・セミョーノフのことば。

** 『ヨーロッパ・ロシア工場工業最重要部門統計図表、工場名簿付き』、全三冊、サンクト－ペテルブルグ、一八六九年、一八七〇年および一八七三年。

*** 『大蔵省年報』、第一冊、一四〇ページ。

**** 前掲書、三〇六ページ。

† 前掲、同所。

†* 工場主たちが申告のなかで労働者数と生産額を低めにしていることについては、上記の典拠は二つの興味深い点検の

試みをしている。チミリャーゼフは一〇〇人以上の大工場主の官庁統計のための申告を、一八六五年の博覧会のための申告と比較した。そうすると、後者の数字は前者を二二%上まわった（前掲書、第一冊、序文四―五ページ）。一八六八年に中央統計委員会は、試験的にモスクワ県とウラヂーミル県の工場工業の特別調査を実施した（一八六八年には、ヨーロッパ・ロシアの工場の全労働者と全生産額のほとんど半分がこの二県に集中していた）。大蔵省と中央統計委員会の双方の資料がそろっている生産業を抜きだしてみると、次のような数字が得られる。大蔵省の情報によると工場一、七四九、労働者一八六、五二一人、生産額一三二、五六八、〇〇〇ルーブリであり、中央統計委員会の調査によると、工場一、七〇四、事業所内ではたらく労働者一九六、三二五人プラス外部労働者三三、四八五人、生産額一三七、七五八、〇〇〇ルーブリである。

六〇年代の工場統計にかんする典拠のなかで特別の位置を占めるのが、『陸軍統計集』（第四冊、ロシア、サンクトーペテルブルグ、一八七一年）である。それは、鉱業所と内国消費税を課される工場をふくめて、ロシア帝国の全工場にかんする資料をあげており、そしてヨーロッパ・ロシアでは、一八六六年にきっかり、工場七〇、六三一、労働者八二九、五七三人、生産額五八三、三一七、〇〇〇ルーブリあったとしている!! このように、こっけいな数字が得られたのは、第一に、これらの数字を大蔵省の報告書からとらずに、中央統計委員会の特殊な情報からとったためであり（しかもこれらの情報は委員会のどの刊行物にも印刷されていないし、だれによって、どのように、いつ収集され処理されたかも不明である）*、第二に、『陸軍統計集』の編者たちが、きわめて小さな事業所を工場のなかに入れるのをすこしもためらわなかったうえ（『陸軍統計集』、三一九ページ）、さらに商工局の情報、主計局の情報、砲兵工廠や海軍工廠の情報、さらにまた「多種多様な出所の」情報など、他の材料で基本的情報を補足したためである（前掲書、序文二三ページ）**。だから、ニコライ―オン氏***、カルィシェフ氏****およびカブルーコフ氏†は、『陸軍統計集』の資料を現在の資料との比較にもちいることによって、わが国の工場統計の基礎的な典拠にかんする完全な無知と、この統計にたいする極度に無批判的な態度とを暴露することになったのである。

* あとで見るように、これらの情報が、いつも工場数を大幅に過大にしめす県知事の報告から、ごくむぞうさにとられたものであることは、大いにありそうなことである。

** 『陸軍統計集』が工場の概念をどれほど広く、もちいたかは、次のことからとくにはっきりわかる。すなわち、それは『年報』の統計を「わが国の大事業所の統計」とよんでいる（三一九ページ、傍点は原筆者）。われわれが見たようにこれらの大事業所の三分の一は、生産額が一、〇〇〇ルーブリ以

下なのである!! われわれは、『陸軍統計集』の数字を現代の工場統計資料との比較にもちいてはならないということのもっと詳細な証明は省略する。なぜなら、この課題は、すでにトゥガン－バラノフスキー氏が果たしているからである(彼の著書『ロシアの工場』、三三六[一八七]ページ以下を見よ)。『試論』、二七一および二七五ページを参照。

*** 『概説』、一二五ページ、および『ルースコエ・ボガーツトヴォ』、一八九四年、第六号。

**** 『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八八九年、第九号、および『ロシア国民経済資料』、モスクワ、一八九八年。

† 『農業経済学講義』、モスクワ、一八九七年、一三ページ。

『陸軍統計集』の数字の完全な誤りを指摘したエム・イ・トゥガン－バラノフスキーの報告をめぐる自由経済協会での討論のさい、何人かの人は、労働者数に誤りがあるとしても、それはごく小さなもので、一〇－一五％であると言明した。たとえばヴェ・ヴェ氏はそのように述べた(討論の速記録、サンクト－ペテルブルグ、一八九八年、一ページを見よ)。ヴェ・ポクロフスキー氏も彼に「同調した」が、同氏もまた根拠のない言明をしただけであった(三ページ)。これらの人々やその支持者たちは、わが国の工場統計の種々の典拠を批判的に考察する試みすらしないで、工場統計は不満足なものであるとか、最近はその資料がより正確なものになってきた(??)とかいう、きまり文句ですまそうとした。このように、ニコライ－オン氏とカルィシェフ氏のひどい誤りにかんする基本的問題は、ペ・ベ・ストルーヴェがまったく正しく指摘したように(一一ページ)、あっさり塗りつぶされてしまった。だからわれわれは、注意深く典拠に接する人ならだれでも容易に気づくはずであり、また気づかざるをえないような、『陸軍統計集』の資料における誇張を計算してみるのも、よけいなことではないと思う。七一の生産業について、大蔵省のもの(『大蔵省年報』、第一冊)と出所不明のもの(『陸軍統計集』)との、一八六六年についての対応する資料がある。これらの生産業については、冶金業を除き、『陸軍統計集』はヨーロッパ・ロシアの工場労働者数を五万人誇張している。さらに、『年報』が帝国全体の総括的数字をしめすだけで、これらの数字の「明らかな誇張」(『年報』、三〇六ページ)にかんがみて、その詳細な検討をしなかった生産業について、『陸軍統計集』はさらに九万五〇〇〇人のよけいな労働者を計算している。煉瓦製造業については、労働者数は最低一万人は誇張されている。このことを納得するためには、『陸軍統計集』の県別資料や、『大蔵省報告・資料集』の一八六六年第四号および一八六七年第六号の資料を、比較してみればよい。冶金業については、『陸軍統

計集』は、『年報』と比較して労働者数を八万六〇〇〇人も誇張しているが、明らかに、鉱山労働者の一部をふくめてしまったのである。内国消費税を課される生産業については、『陸軍統計集』の誇張は、次節でしめすように、約四万人にのぼる。誇張の総計は二八万人となる。これは最小限であり、不完全な数字である。というのは、『陸軍統計集』の資料をすべての生産業について吟味するにも、われわれの手に材料がないからである。これによって、ニコライ—オン氏やカルィシェフ氏の誤りはたいしたことはないと主張する人々が、この問題にどれほど通じているか判断することができる！

一八七〇年代には、工場統計資料の総括と処理のためになされた仕事は、一八六〇年代よりもずっと少ない。『大蔵省年報』には、一八六七—一八七九年については、わずか四〇の生産業（内国消費税を課されない）にかんする情報が印刷されているだけで（第八、第一〇、第一二冊、付録IIを見よ）、そのさい、残りの生産業を除外したのは、「農業生活と結びついていたり、あるいは手工業やクスターリ営業の付属物となっている」生産業にかんする「資料が、極度に不満足なものである」という理由によるとされている（第八冊、四八二ページ、および第一〇冊、五九〇ページ）。一八七〇年代の最も貴重な典拠は、ペ・オルロフ氏の『工場案内』である（第一版、サンクト—ペテルブルグ、一八八一年、工場主が商工局に提出した報告からとられた、一八七九年度の情報）。この刊行物は、生産額二、〇〇〇ルーブリ以上のすべての事業所の名を列挙している。残りの事業所は、小さくてクスターリ経営と区分できないものであって、名簿にはのせられていないが、しかし『工場案内』があげている総計資料にははいっている。生産額二、〇〇〇ルーブリ以上の事業所にかんする総計はとくにしめされていないから、『工場案内』の全般的資料は、以前の刊行物とまったく同じように、小さな事業所と大きな事業所を混同しており、しかも生産業や県がちがうとちがう数の小さな事業所が（もちろん、まったく偶然に）統計にはいりこんでいるわけである。* 農業と関係のある生産業にかんしては、『工場案内』は『年報』の留保を繰りかえしており（三九六ページ）、資料が不正確で不完全であるということから、「近似的総計さえ」（傍点は原筆者のもの）算定することを避けている。** しかし、この判断（あとで見るように、完全に正しい）は、『工場案内』の全体的総計のなかに、これらのとくにあてにならない資料をすべてふくめることを妨げなかったのであって、こうしてそういう資料が比較的あてになる資料と混同されてしまったのである。ヨーロッパ・ロシアにかんする『工場案内』の全

〔第 86 表〕

年　　次	工　　場　　数	生産額 (1000ルーブリ)	労　働　者　数
1879年*	27,986	1,148,134	763,152
1884年	27,235	1,329,602	826,794
1890年	21,124	1,500,871	875,764

* 若干の不足した資料は，近似的に補足してある．『工場案内』695ページを見よ．

般的資料をつぎにかかげるが〔第八六表〕、これらの資料は、以前のものとはちがい、内国消費税を課される生産業をもふくんでいることを、指摘しておこう（『工場案内』、一八八七年の第二版は一八八四年度の情報を、一八九〇年度の第三版は一八九〇年度の情報をのせている）。

われわれはあとで、これらの資料がしめしているような工場数の減少は実際にはまったくなかったことをしめすであろう。問題はすべて、時期の違いによってちがう数の小さな事業所が工場のなかにはいりこんだことにある。たとえば、生産額一、〇〇〇ルーブリ以上の事業所は一八八四年には一九、二七七、一八九〇年には二一、一二四、生産額二、〇〇〇ルーブリ以上の事業所は一八八四年には一一、五〇九、一八九〇年には一七、六四二をかぞえた。*

一八八九年から、商工局は『ロシア工場工業資料集成』（一八八五年度以降）という特別の刊行物を刊行しはじめた。これらの資料は同じ材料（工場主の報告書）にもとづいているが、材料の整理はとても満足できるものではなく、さきにあげた六〇年代の刊行物における資料の処理にもおよばない。唯一の改善は、小さな事業所、すなわち生産額一、〇〇〇ルーブリ未満の事業所が工場から除かれていて、これらの小さな事業所にかんする情報は生産業別に分けられず、別個にあげてあることにある。* もちろん、「工場」のこのような標識ではまったく不充分である。生産額一、〇〇〇ルーブリ以上の事業所の完全な記録など、現在の情

* 実例は次の節であげるであろう。ここでは『工場案内』の六七七ページ以下を引合いに出しておこう。そこを一瞥すれば、だれでも本文に述べたことの正しさを容易に納得するであろう。

** 『工場案内』第三版（サンクト・ペテルブルグ、一八九四年）では、この留保は繰りかえされていないが、繰りかえさないことには根拠がない。なぜなら、資料はあいかわらず不満足なままだからである。

* 『工場案内』の第二版と第三版の生産額別の工場分類を見よ。

報収集方法のもとでは問題にならない。農業と結びついた生産業については、「工場」の選別はまったく偶然的で、たとえば水車小屋と風車小屋は、ある県では、またある年には工場にふくめてあるが、他の県では、また他の年にはふくめてない。** 『一八八五—一八八七年のロシア工場工業の総決算』という論文（これらの年度の『集成』所収）の筆者は、いろいろな県について資料が同種のものでなく比較不可能であることを見おとして、一度ならず誤りをおかしている。最後に、それらは、一八九一年までは内国消費税を課されない生産業だけを包含していたのにたいして、一八九二年からは鉱業と内国消費税を課される生産業をふくむすべての生産業を包含していることを、『集成』の特徴としてつけくわえておこう。そのさい、以前の資料と比較できるような資料をとくにとりだしていないし、鉱業所を工場総数にふくめるやりかたについては全然説明がない（たとえば、鉱業統計はけっして鉱業所の生産価額をあたえたことはなく、生産物の量しかあたえていない。『集成』の編者たちがどのようにして生産額を算定したかは、不明である）。

* いうまでもないことだが、これらの小さな事業所にかんする資料はまったく偶然的なものである。ある県では、またある年には、それらは数百、数千をかぞえ、他の県では、また他の年には、数十あるいは一の位の数である。たとえば、ベッサラビア県では、一八八七年から一八九〇年までについて、一、四七九—一、七二一—一、六二一—一、六八四、ペンザ県では、一八八五年から一八九一年までについて、四—一五—〇—一、一二七—一、一三五—二、一四八—二、二六四、等々となっている。

** 『試論』、二七四ページ(一八)の例を参照。トゥガン－バラノフスキー氏は小さな誤りをおかし、実際の工場数が一八八五年から一八九一年にかけて減少したと主張し（『工場』、三五〇ページ）、一工場あたりの平均労働者数を、異なる時期の異なる生産業について比較している（前掲書、三五五ページ）。『集成』の資料はあまりにも混沌としているので、特別の処理をしないでは、このような結論をくだすのに利用することはできない。

一八八〇年代にわが国の工場工業にかんする情報のもう一つの典拠があるが、それは、その質が良くないことと、まさにこの資料をカルィシェフ氏が利用したことから、注目に値するものである。* それは『一八八四／八五年度ロシア情報集』（サンクト－ペテルブルグ、一八八七年、中央統計委員会刊行）である。これは表の一つで、「一八八五年のヨーロッパ・ロシアの工場工業の生産額」（第三九表）をしめしているが、工場数と労働者数は各県別に区分せず、ロシア全体についてだけあげてある。情報の出所は『県知事報告の資料』（三一一ページ）である。資料は、内国消

〔第 87 表〕

典拠	工場数	労働者数	生産額 (1000ルーブリ)
『ロシア報告集』	54,179	559,476	569,705
『商工局集成』	14,761	499,632	672,079
	+ 39,418	+ 59,844	− 102,374
	+ 267%	+ 11.9%	− 15.2%

費税を課される生産業をも鉱業をもふくむすべての生産業を包括しており、そして各生産業ごとに全ヨーロッパ・ロシアの一工場あたり「平均」労働者数と生産額が計算してある。そこでカルィシェフ氏は、この「平均」なるものの「分析」にとりかかったしだいである。これらの平均の意義を判断するために、『報告集』と『集成』の資料を対比してみよう（このような対比のためには、前者の資料から冶金業、内国消費税を課される生産業、漁業および「その他」を除外する必要がある。こうして五三の生産業が残る。資料はヨーロッパ・ロシアについてのものである）〔第八七表〕。

* エヌ・ア・カルィシェフ『ロシアにおける最重要加工工業部門の分布の統計的概観』、『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八八九年、第九号、九月号。この論文は、われわれが『試論』のなかで検討したカルィシェフ氏の最新の労作とならんで、わが国の工場統計の資料をどうとりあつかってはならないかの見本として役だつ。

このように、知事報告は何万という小さな農業施設やクスターリ施設を「工場」の数に入れてしまったのだ！ もちろん、この種の施設は、個々の生産業、個々の県や郡により、まったく偶然に工場のなかにはいりこんだのである。ここに『報告集』と『集成』による若干の生産業における工場数の例がある。毛皮精製業―一、二〇五と二五九、皮革製造業―四、〇七九と二、〇二六、筵・叺製造業―五六二と五五、澱粉・糖蜜製造業―一、二二八と一八四、製粉業―一七、七六五と三九四〇、搾油業―九、三四一と五七四、タール製造業―三、三六六と三二八、煉瓦製造業―五、〇六七と一、四八八、陶器・タイル製造業―二、五七三と一四七、となっている。もし「工場」のこのような数え方にもとづく「平均値」によって、わが国の工場工業における「企業の規模」*を判断するとしたら、どのような種類の「統計」が得られるか、想像できよう！ だがカルィシェフ氏はま

さにそのようにして判断して、一工場あたり労働者数の上述の「平均値」（ロシア全体の）が一〇〇人以上の生産業だけを、大工業に入れている。このようなまれに見る方法によって、「上記の規模において理解された大工業」は、全生産額のわずか四分の一をあたえるにすぎないという結論が得られるのだ（引用論文の四七ページ）**!! あとでわれわれは、実際には、一〇〇人以上の労働者のいる工場にわが国の工場工業の全生産額の半分以上が集中していることをしめすであろう。

* カルィシェフ氏の論文の第四節。『報告集』との対比には、『集成』のかわりにオルロフ氏の『工場案内』を採用することもできることを、指摘しておこう。後者の第二版（一八八四年度）はカルィシェフ氏も引用している。

** 「このように後者の」（年間総生産額の）「四分の三は比較的小さな型の企業によって提供される。この現象の根源は、ロシア国民経済の本質的に重要な多くの要因のなかにあるのかもしれない。これに入れるべきものは、ついでながらいえば、住民大衆の土地制度、わが国における職業的な工場労働者階級の発展にたいしてそれ相応の障害となっている、共同体の生命力（原文のまま！）である。これと結びついているのが（！）、まさにわが国の工場の最も重要な所在地であるロシアのその（中部）地帯において、生産物加工の家内的形態が普及していることである」（同所、傍点はカルィシェフ氏のもの）。あわれな「共同体」よ！ それだけが、すべてのことにたいして、その博学な崇拝者の統計上の誤りにたいしてまで、責任を負わなければならないのだ！

ついでに指摘しておくが、地方の県統計委員会の資料（知事報告のために役だつもの）はつねに、「工場」の概念がまったく不確定で小さな事業所を偶然的に記載するということを、特徴としている。たとえば、スモレンスク県では一八九三／九四年度について、ある郡は何十という小さな搾油所を工場に入れたのに、他の郡は一つも入れなかったし、また県内でタール「工場」は一五二をかぞえたが（一八九〇年度の『工場案内』によれば一つもなかった）、個々の郡についての記載はやはり偶然的である、等々。* ヤロスラヴリ県については、九〇年代に地方統計は三、三七六工場をかぞえあげたが（一八九〇年度の『工場案内』の四七二にたいして）、そのなかには（個々の郡について見ると）何百という製粉所、鍛冶屋、小さなじゃがいも澱粉工場、その他をふくめている。**

* 資料はデ・ジバンコフ氏の著書『スモレンスク県の工場衛生調査』（スモレンスク、第一冊、一八九四年）による。

** 『ヤロスラヴリ県概観』、第二冊、ヤロスラヴリ、一八九六年。また『一八九五年トゥーラ県覚え帳』（トゥーラ、一八九五年）、第六部、一四―一五ページ、『一八九三年工場報告』参照。

ごく最近、わが国の工場統計の改革がおこなわれ、情報

収集要綱を変更し、「工場」概念を変更して（新しい標識、すなわち動力機または一五人以上の労働者の存在、の導入）、情報の収集と点検に工場監督官を参加させるようになった。こまかな点については、読者はわれわれの『試論』の前記論文を参照されたい。* そこでは、新しい要綱にそって作成された『工場一覧表』（サンクト-ペテルブルグ、一八九七年）の詳細な検討がなされ、改革にもかかわらずわが国の工場統計には改善のあとがほとんど認められないこと、「工場」の概念はまったく不確定のままであること、資料は従来どおり全面的にまったく偶然的であり、それゆえその取扱いには最大の慎重さが必要であることが、しめされている。** ヨーロッパ式に組織された正しい工業調査だけが、わが国の工業統計を混沌状態から脱出させることができるのである。***

* カルィシェフ氏の計算によれば、ヨーロッパ・ロシアにかんする『一覧表』の資料の総計は次のとおりである。八五、五五五人の労働者をもつ、生産額一、三四五、三四六、〇〇〇ルーブリの一四、五七八工場。

** 商工省発行の工場監督官報告の集成（一九〇一—一九〇三年）には、工場数および工場労働者数（ロシアの六四県）にかんする情報があり、工場は労働者数によってグループに分けられている（二〇人以下、二一—五〇人、五一—一〇〇人、一〇一—五〇〇人、五〇一—一、〇〇〇人、一、〇〇一人以上）。これはわが国の工場統計の大きな進歩である。大きな作業場（労働者二一人以上）にかんする資料は、おそらくすこしはあてになるであろう。労働者数二〇人以下の「工場」にかんする資料は明らかに偶然的なもので、全然役にたたない。たとえば、一九〇三年にニジェゴロド県では、労働者数二〇人以下の工場が二六六あげられているが、これらの工場の労働者は一、九七五人、すなわち平均では労働者八人以下となっている。ペルミ県ではそのような工場が一〇あって、一五九人の労働者がいる！ もちろん、笑うべきことである。六四県にかんする一九〇三年の総計は、工場一五、八二一、労働者一、六四〇、四〇六人であるが、労働者数二〇人以下の工場を差しひくと、工場一〇、〇七二、労働者一、五七六、七五四人となる（第二版の注）。

*** 『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九六年、第三五号を参照。ニジェゴロドの大会における報告および討論にかんする報告書。ミハイロフスキー氏は工場統計の混沌状態を非常にくっきり特徴づけて、「もちろん、自分が注目に値すると判断した工業事業所に、また最もしばしばあることだが、前年にもすでに送付したことのある工業事業所に、最後にもちろん受取証と引換えに調査票を交付する下級の警察官までふくめて、」調査票がどのように遍歴するか、またこの票が、「昨年に同じ」と記したり（このとおりであることを納得するためには、個々の県における個々の生産業について商工局の『集成』を一見すればよい）、あるいはまったく意味のないことを記したりするという回答で、どんなに埋められているかを記述している。

わが国の工場統計の概観から次の結論が出てくる。すなわち、その資料は、圧倒的に多くの場合、特別の処理をしないと利用できず、そしてこの処理の主要な目的は、比較的役にたつものを絶対に役にたたないものから区別することでなければならない、ということである。次節でわれわれはこの点に関連して、最も重要な生産業にかんする資料を考察するが、いまここでは次の問題を提起しよう。ロシアの工場数は増加しているか、それとも減少しているか？この問題の主要な困難は、「工場」の概念がわが国の工場統計ではきわめて混沌とした形でもちいられている点にある。それゆえ、ときによるとこの問題にたいして工場統計資料によってあたえられた否定的回答（たとえばカルィシェフ氏による）は、どんな意味ももちえない。なによりもまず、「工場」の概念のなんらかの正確な標識を確定する必要がある。この条件なしには、ちがう時期にちがう数の小さな製粉所、搾油場、煉瓦製造小屋、その他等々がそのなかにはいっている、事業所にかんする資料によって、機械制大工業の発展を例証しようとするのはばかげたことであろう。このような標識として事業所内の労働者数が一六人以上いることをとると、ヨーロッパ・ロシアにおけるこのような工業事業所は一八六六年には最大限二、五〇〇—三、〇〇〇であり、一八七九年には約四、五〇〇、一八九〇年には約六、〇〇〇、一八九四／九五年には約六、四〇〇、一九〇三年には約九、〇〇〇であったことがわかる。* したがって、農民改革後の時代におけるロシアの工場数は増大しており、しかもかなり急速に増大しているのである。

＊ 資料は鉱業以外のすべての生産業（すなわち内国消費税を課される生産業をふくむ）にかんするものである。一八七九年、一八九〇年および一八九四／九五年度については、資料は『工場案内』と『工場一覧表』からわれわれが算出したものである。『工場一覧表』の資料のうち、以前には工場統計が計算に入れて[六]いなかった印刷所は除外した（『試論』、二七三ページ八九を見よ）。一八六六年度については、七一の生産業にかんする『年報』の資料によれば、事業所総数六、八九一のうち一六人以上の労働者のいる事業所は一、八六一であり、一八九〇年には、これら七一の生産業は一六人以上の労働者のいる事業所総数の約五分の四を占めていた。われわれは、われわれの採用した「工場」概念の標識が最も正確なものであると考える。なぜなら、一六人以上の労働者のいる事業所が工場のうちにはいることは、わが国の工場統計の多種多様な要綱にとっても、またあらゆる生産業にとっても、疑問の余地のないことだったからである。たしかに、工場統計は一六人以上の労働者のいる事業所全部を記載できたことはこれまで一度もなかったし、現在でもできていない（第六章第二節の例を見よ）。だが、記載もれが以前は現在よりも多かったと考えるべき根拠はなにもない。一九〇三年については、資料は『工場監督官報告集成』からとった。ヨーロッ

パ・ロシアの五〇県については、労働者数二〇人以上の工場が八、八五六あった。

三　大工業の発展にかんする歴史的＝統計的資料の検討

さきにすでに指摘したように、工場統計の資料によって大工業の発展を判断するためには、そのうち比較的役にたつ材料を絶対に役にたたないものから区別する必要がある。この目的で、わが国の加工工業の最も重要な諸生産業を考察しよう。

(一)　繊維産業

羊毛加工業の首位にあるのはラシャ製造業であって、一八九〇年には生産額は三五〇〇万ルーブリ以上で、労働者は四万五〇〇〇人をかぞえた。この生産業にかんする歴史的＝統計的資料は、労働者数のいちじるしい減少、すなわち、一八六六年の七二、六三八人から一八九〇年の四六、七四〇人への減少をしめしている。* この現象を評価するためには、一八六〇年以前はラシャ製造業は特殊な独特の組織をもっていたことを考慮に入れなければならない。すなわち、それは比較的大きな事業所に集中されていたが、これらの事業所はけっして資本主義的工場工業にはいるものではなく、農奴あるいは一時的負債義務農民の労働にもとづくものだったのである。だから、六〇年代の「工場」工業を概観した著作のなかで、ラシャ工場を（一）地主あるいは貴族の工場と（二）商人の工場とに区分してあるのを、見うけるであろう。前者は主として軍隊用ラシャを生産していたが、そのさい政府の請負仕事は器具の数に応じて工場に平等に配分された。強制労働が、この種の事業所の技術の立ちおくれと、自由な賃労働にもとづく商人の工場とはくらべものにならないほど多数の労働者の使用の、原因であった。** ラシャ製造業における労働者数の減少は、主としてほかならぬ地主的諸県のものである。すなわち、地主的な一三県（『マニュファクチュア工業概観』にあげられている）では、労働者数は三二、九二一から一四、五三九に減少したが（一八六六年と一八九〇年）、商人的な五県（モスクワ、グロドノ、リフランド、チェルニーゴフ、サンクト－ペテルブルグ）では、三一、二九一から二八、二五七に減少した。このことから明白なように、われわれはここで、相対立するがともに資本主義の発展をあらわす二つの流れと関係しているのである。すなわち、一方では、世襲領地的・農奴使用的性格をもつ地主経営の没落と、他方では、商人的事業所からの純粋に資本主義的な工場の発展が、そ

れである。六〇年代のラシャ製造業の労働者のかなり多くのものは、術語の正確な意味における工場労働者ではけっしてなかった。*** それは地主のためにはたらく隷属農民であった。ラシャ製造業は、農奴労働を工業に適用するというロシア史に特有な現象の一例である。われわれはここでは農民改革後の時代に限定しているのだから、われわれとしては、この現象の工場統計における反映を上記のように簡単に指摘しておくだけで十分である。**** この部門におけるほかならぬ機械制大工業の発展について判断するために、さらに蒸気機関の統計から次の資料を引用しておこう。すなわち、一八七五―一八七八年には、ヨーロッパ・ロシアの毛糸およびラシャ製造業で、四、六三二馬力の出力の二〇九台の蒸気機関をもつ一六七の機械制事業所をかぞえたが、一八九〇年には、六、六〇二馬力の出力の三四一台の蒸気機関をもつ一九七の事業所があった。したがって、蒸気の使用はそれほど急速にすすんだわけではないのであって、これは一部は地主的工場の伝統のためであり、一部はラシャ織物がより安価な梳毛織物や混紡織物によって駆逐されたためである。† 毛織物業では、一八七五―一八七八年には三〇三馬力の出力の二〇台の蒸気機関をもつ七つの機械制事業所があったが、一八九〇年には一、三七五馬力の出力の六一台の蒸気機関をもつ二八の機械制事業所があった。†*

* とくにことわらないかぎり、すべての場合、一八六六年については『年報』の資料を、一八七九年と一八九〇年については『工場案内』の資料をとる。『歴史的＝統計的概観』（第二巻）は、一八五五年から一八七九年までのラシャ製造業にかんする毎年の情報をのせているが、一八五五―一八五九年から一八七五―一八七九年までの五年ごとの平均労働者数は次のとおりである。一〇七、四三三人、九六、一三一人、九二、一一七人、八七、九六〇人および八一、四五八人。

** 『ロシアにおけるマニュファクチュア工業の各種部門の概観』第一巻、サンクト・ペテルブルグ、一八六二年、とくに一六五および一六七ページを見よ。また『陸軍統計集』、三五七ページ以下を参照。現在では、ラシャ工場主の名簿のなかで、一八六〇年代に圧倒的多数を占めていた有名な貴族の名を見うけることはまれである。

*** ゼムストヴォ統計から二つばかり例をあげておこう。サラトフ県ヴォリスク郡のエヌ・ペ・グラトコフのラシャ工場（一八六六年に労働者三〇六人）について、この郡にかんするゼムストヴォ統計集（二七五ページ）に、農民は主人の工場ではたらくことを強制されたと書いてある。「結婚までは工場ではたらき、その後は農奴義務の仕事についた」。リャザン県ラーネンブルグ郡リャスィ村には一八六六年に一八〇人の労働者のいるラシャ工場があった。農民は工場で賦役労働を勤めたが、この工場は一八七〇年に閉鎖された（『リャザン県統計資料集』第二巻第一冊、モスクワ、一八八二年、三三〇ページ）。

**** ニッセロヴィッチ『ロシア帝国工場立法史』、第一部およ

び第二部、サンクトーペテルブルグ、一八八三―一八八四年。ア・セミョーノフ『ロシアの外国貿易および産業にかんする史料の研究』、サンクトーペテルブルグ、一八五八―一八五九年、全三部。ヴェ・イ・セメフスキー、『エカテリーナ二世治下の農民』、サンクトーペテルブルグ、一八八一年。『モスクワ県統計報告集。衛生統計篇』、第四巻、第一部（一般的総括）、モスクワ、一八九〇年、ア・ヴェ・ポゴジェフの論文『モスクワ県の世襲領地的農奴使用工場について』。エム・トゥガン－バラノフスキー『ロシアの工場』、サンクトーペテルブルグ、一八九八年、第一巻。

†『専門委員会の見たロシア工業の進歩』、サンクトーペテルブルグ、一八九七年、六〇ページを参照。

†* 蒸気機関にかんする資料は、ここでも以下でも、『ロシア帝国蒸気機関統計のための材料』、中央統計委員会刊行、サンクトーペテルブルグ、一八八二年、からとった。一八九〇年については『工場工業資料集成』から、また機械制事業所数については『工場案内』からとった。

羊毛加工業のうちからさらにフェルト製造業をあげれば、これは、異なる時期の工場統計資料が比較不能であることをとくにはっきりしめしている。すなわち、一八六六年には二九五人の労働者をもつ七七の工場をかぞえたが、一八九〇年には一、二二七人の労働者をもつ五七の工場をかぞえた。第一の数のうち、生産高二、〇〇〇ルーブリ未満の小さな事業所は六〇で、その労働者数は一三七人であり、第二の数のうちでは一経営で、その労働者数は四人となっている。一八六六年にはニジェゴロド県セミョーノフ郡に三九の小さな事業所がかぞえられ、そこでは現在もフェルト製造業が大いに発展している。しかしそれは「クスターリ」生産に属するものであって、「工場」生産に属するものではない（第六章第二節の二を見よ）。

つぎに、繊維産業のなかでとくに顕著な地位を占めているのは、現在二〇万人以上の労働者のいる綿花加工業である。ここでわれわれは、わが国の工場統計の最大の誤りの一つ、すなわち工場労働者と資本主義的につかわれている家内労働者との混同を見る。機械制大工業の発展は、この場合（他の多くの場合もそうであるが）家内労働者を工場に集結することにあった。もし前貸問屋や機小屋が「工場」に算入され、家内労働者が工場労働者と混同されるとしたら、この過程がどんなにゆがめられた形であらわされることになるか、わかりきっている！　一八六六年には（『年報』によると）、工場労働者に入れられた家内労働者は二万二〇〇〇人かぞえられた（しかもこの数はとても完全なものではない。というのは、『年報』では――おそらく純粋に偶然的な原因により――、ウラヂーミル県についてあれほどたくさんある「村での仕事」にかんする注釈が、モスクワ県については抜けているからである）。一八九〇

〔第 88 表〕

年　次	綿織物「工場」総数	そのうち		
		工　場	前貸問屋	機小屋
1866年	436	256	38	142
1879年	411	209	66	136
1890年	311	283	21	7

年には（『工場案内』によると）、このような労働者は約九、〇〇〇人かぞえられたにすぎない。工場統計の数字が（一八六六年には綿織物工場の労働者五九、〇〇〇人、一八九〇年には七五、〇〇〇人）、実際に起こった工場労働者数の増大を小さくあらわしていることは明らかである。* いろいろな時期にどんなにさまざまな事業所が綿織物「工場」に入れられたかということにかんする資料を、つぎにあげよう。**〔第八八表〕

* トゥガン－バラノフスキー、前掲書、四二〇ページを参照。セミョーノフは、村で資本家にやとわれている手織工の総数を、一八五九年にはおよそ三八五、八五七人と算定した（前掲書、第三部、二七三ページ）。彼は、農村で「他の工場生産」にやとわれている二〇万人の労働者を、これにさらにつけくわえた（同、三〇二ページ）。現在では、さきに見たように、資本主義的にやとわれている家内労働者の数は比較にならないほど多い。

** 機小屋に入れたのは、生産額二、〇〇〇ルーブリ未満の事業所である。一八六八年に中央統計委員会がおこなったモスクワ県とウラヂーミル県の工場特別調査の資料では、小さな織物事業所の生産額とは工賃のことにほかならないと、何度か指摘されている。前貸問屋に入れたのは、各戸に仕事を下請に出す事業所である。一八六六年については、これらの事業所の数は、モスクワ県について明白な脱落があるため、とても完全なものとはいえないと、指摘してある。

このように、「統計」がしめしている「工場」数の減少は、実際には、工場による前貸問屋と機小屋の駆逐を意味する。このことを二つの工場の例でしめそう。〔第八九表〕

したがって、この部門における機械制大工業の発展について判断するには、機械織機の数にかんする資料をとるのが最も便利である。一八六〇年代にはその数は約一一、〇〇〇台であったが、* 一八九〇年代には約八七、〇〇〇台であった。したがって、機械制大工業は巨大な速度で発展したわけである。綿紡績・綿織物業では、一八七五―一八七八年には一四八の機械制事業所をかぞえ、その蒸気機関四八一台、出力二〇、五〇四馬力であったが、一八九〇年に

〔第 89 表〕

年次	シューヤ市のイ・エム・テレンチエフの工場						イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク市のイ・エヌ・ガレーリンの工場					
		機械織機数	労働者数			生産額（1000ルーブリ）		機械織機数	労働者数			生産額（1000ルーブリ）
			事業所内	外部	合計				事業所内	外部	合計	
1866年	手織	—	205	670	875	130	前貸問屋	—	?	1,917	1,917	158
1879年	蒸気力	648	920	—	920	1,346	蒸気力	893	1,274	—	1,274	2,137
1890年	〃	1,502	1,043	—	1,043	1,244	〃	1,141	1,483	—	1,483	2,058
1894／95年	〃	?	1,160	—	1,160	1,878	〃	?	2,134	—	2,134	2,933

は機械制事業所一六八、その蒸気機関五五四台、出力三八、七五〇馬力であった。*

* 『陸軍統計集』、三八〇ページ。『マニュファクチュア工業概観』第二巻、サンクトーペテルブルグ、一八六三年、四五一ページ。一八九八年には、綿織物業に（おそらく帝国全体の）、機械織機一〇〇、六三〇台をかぞえた。『ロシア工業の成功』、三三ページ。

わが国の統計は、亜麻布製造業についてもこれとまったく同じ誤りをおかしており、まちがって工場労働者数の減少がしめされている（一八六六年には一七、一七一人、一八九〇年には一五、四九七人）。実際には、一八六六年に亜麻布工場主がもっていたのは、一六、九〇〇台の織機のうち事業所内にある四、七四九台だけであって、残りの一二、一五一台は機小屋の持ち主のものであった。* したがって、一八六六年には工業労働者のなかに約一二、〇〇〇人の家内労働者がふくまれていたが、一八九〇年にはそれは約三、〇〇〇人にすぎなかったのである（『工場案内』によって算出）。機械織機数のほうは、一八六六年の二、二六三台から（『陸軍統計集』によって算出）、一八九〇年には四、〇四一台に増加したし、紡錘は九五、四九五錘から二一八、〇一二錘に増加した。亜麻紡績と織物業では、一八七五—一八七八年に機械制事業所は二八、その蒸気機関四七台、出力一、六〇四馬力であったが、一八九〇年には機械制事業所は四八、その蒸気機関八三台、出力五、〇二七馬力であった。**

* 『陸軍統計集』、三六七—三六八ページ。経理部の報告。
** 絹織物業では、一八七九年に機械織機は四九五台、手織機は五、九九六台であったが（『歴史的＝統計的概観』）、一八九〇年には前者は二、八九九台、後者は七、五〇〇台以上であった。

最後に、繊維産業のうち、さらに染物業、捺染業、仕上業をあげなければならないが、工場統計はこれらにおいて、労働者一—二人、生産額数百ルーブリの零細な手工業施設

を工場とまぜこぜにしている。* ここから、機械制大工業の急速な成長をあいまいにする小さくない混乱が生ずることは、明白である。この成長にかんする資料をあげれば、次のとおりである。洗毛業、染物業、漂白業および仕上業は、一八七五—一八七八年に機械制事業所八〇、その蒸気機関二五五台、出力二、六三四馬力であったが、一八九〇年には機械制事業所一八九、その蒸気機関八五八台、出力九、一〇〇馬力であった。

* たとえば、一八七九年にはこれらの生産業で七二九工場をかぞえた。そのうち四六六工場で労働者九七七人、生産額一七万ループリであった。現在でもこの種の工場を多くかぞえることができる。たとえば、ヴャトカとペルミ両県のクスターリ営業の記録のなかに。

(二) 木材加工業

この部門では、製材業にかんする資料が、以前にはここでも小さな事業所を算入していたとはいえ、最も信頼できる。農民改革後の時代におけるこの生産業の巨大な発展は（一八六六年に四〇〇万ループリ、一八九〇年に一九〇〇万ループリ）、労働者数（四、〇〇〇人と一万五〇〇〇人）と蒸気力利用の事業所数（二六と四三〇）とのいちじるしい増大をともなったが、それがとくに興味深いのは、それが木材工業の成長をはっきり証明しているからである。製材業は、機械制大工業の最初の歩みの必然的な随伴物である、木材工業の作業のうちの一つにほかならない。

* 『陸軍統計集』、三八九ページ。『マニュファクチュア工業概観』、第一巻、三〇九ページを参照。

この部門のその他の生産業である家具・指物業、樹皮マット製造業、樹脂・タール製造業についていえば、それらは工場統計資料がとくに混沌としていることできわだっている。小さな事業所はこれらの生産業ではおびただしい数にのぼるが、以前は勝手な数だけ「工場」に算入されたし、現在でもときおり算入されている。*

* たとえば、一八七九年には樹皮マット製造工場九一のうち三九が、生産高一、〇〇〇ループリ未満のものであった（『試論』、一五五ページを参照）[一六〇]。樹脂・タール製造業では、一八九〇年に一四〇工場をかぞえたが、全部が生産額二、〇〇〇ループリ以上のものであった。一八七九年には一、〇三三工場をかぞえ、そのうち九一一は生産額二、〇〇〇ループリ未満であった。一八六六年には六六九工場をかぞえたが（帝国全体で）、『陸軍統計集』[一六一]では三、一六四もあった!!（『試論』、一五六および二七一ページを参照。）

(三) 化学工業、動物性生産物の加工業および窯業

本来の化学工業にかんする資料は比較的信頼できることを特徴とする。その成長にかんする情報は次のとおりである。一八五七年にロシアでは化学製品の消費は一四〇〇万ルーブリであったが（生産―三四〇万ルーブリ、輸入―一〇六〇万ルーブリ）、一八八〇年には三六二五万ルーブリ（生産―七五〇万ルーブリ、輸入―二八七五万ルーブリ）、一八九〇年には四二七〇万ルーブリ（生産―一六一〇万ルーブリ、輸入―二六六〇万ルーブリ）であった。* これらの資料は、化学工業が機械制大工業のための補助的材料、すなわち、生産的（個人的ではなく）消費の対象を製造するものとしてきわめて重要な意義をもつところから、とくに興味深いものがある。炭酸カリおよび硝石の製造業については、工場数は、またしても小さな事業所がふくまれているため信頼できないということを、指摘しておこう。**

* 『陸軍統計集』、『歴史的＝統計的概観』および『生産力』、第九巻、一六ページ。労働者数は一八六六年に五、六四五人、一八九〇年に二五、四七一人、一八七五―一八七八年には機械制事業所三八、その蒸気機関三四台、出力三三二馬力、一八九〇年には機械制事業所は一四一、その蒸気機関二〇八台、出力三、三一九馬力であった。

** 炭酸カリ製造業については、『工場案内』、一八七九年および一八九〇年を参照。硝石の生産は、現在ではサンクト・ペテルブルグの一工場に集中されているが、六〇年代と七〇年代には、糞土から硝石製造が存在した（糞土とは糞の塚のことである）。

獣脂加工業は、農民改革後の時代には疑いもなく衰退したことを特徴とする。たとえば、蠟燭＝獣脂および脂肪の生産額は一八六六―一八六八年には一三六〇万ルーブリであったが、一八九〇年には五〇〇万ルーブリであった。* この衰退は、照明用の鉱物油の使用が増大して、それが昔からの獣脂蠟燭を駆逐していったことによる。

* ここでも六〇年代と七〇年代には工場のなかに大量の小さな事業所がふくまれている。

皮革製造業については（一八六六年に二、三〇八事業所、その労働者数一一、四六三人、生産額一四六〇万ルーブリ、一八九〇年に一、六二一事業所、その労働者数一五、五六四人、生産高二六七〇万ルーブリ）、統計は工場と小さな事業所をたえず混同している。材料が比較的高価なため生産額が高くなるということ、およびこの生産業はきわめて少数の労働者しか必要としないという事情が、クスターリ企業と工場企業との区別をとくに困難なものにしている。一八九〇年には工場総数（一、六二一）のうち生産額二、〇〇〇ルーブリ未満のものは一〇三しかはいっていなかったが、* 一八七九年には総数三、三二〇のうち二、〇〇八がそうであったし、一八六六年には二、三〇八工場のうち一、〇四二は、**

生産額一、〇〇〇ルーブリ未満のものであった（これら一、〇四二工場に二、〇五九人の労働者がおり、生産額は四七万四〇〇〇ルーブリであった）。したがって、工場統計では工場数は減少したことになっているとはいえ、実際には増加したのである。小さな皮革製造の事業所はいまでも非常に多い。たとえば、大蔵省の刊行物『ロシアの工場工業と商業』（サンクトーペテルブルグ、一八九三年）は、クスターリ工場は約九、五〇〇、その労働者二一、〇〇〇人、生産額一二〇〇万ルーブリと計算している。これらの「クスターリ」企業は、六〇年代に「工場」企業に算入されていたものよりずっと大きい。「工場」のなかに算入されている小さな事業所の数は、県によりまた年度によって一様でないから、この生産業にかんする統計資料にたいしては、きわめて慎重な態度をとることが必要である。蒸気発動機の統計の計算によれば、この生産業で一八七五―一八七八年に二八の機械制事業所が出力四八八馬力の三三台の蒸気発動機をもっていたが、一八九〇年には六六以上の機械制事業所が出力一、一一二馬力の八二台の蒸気発動機をもっていた。これら六六の工場に、労働者五、五二二人（総数の三分の一以上）と生産額一二三〇万ルーブリ（総額の四六％）が集中されているのだから、生産の集積はきわめていちじるしいものがあり、最大級の事業所における労働生産性は平均より比較にならないほど高いわけである。***

* 一八七五年にキッタルィ教授はその著『ロシア皮革製造業図絵』のなかで、生産額四七五〇万ルーブリの一二、九三九事業所をかぞえているが、工場統計では生産額二六五〇万ルーブリの二、七六四の事業所となっている（『歴史的＝統計的概観』）。この部門の他の生産業である毛皮精製業でも、工場と小さな事業所との同じような混同が見られる。一八七九年および一八九〇年度の『工場案内』を対比せよ。

** 『陸軍統計集』は三、八九〇としているほどである!!

*** 一八九〇年度の『工場案内』にのっている工場を創立時期によって分類すると、一、五〇六工場のうち創設時期の不明のもの―九七、一八五〇年以前のもの―三三一、一八五〇年代―一四七、六〇年代―二三九、七〇年代―三二〇、八〇年代―三五一、一八九〇年―二一となる。あとになればなるほど、毎一〇年間に創設されたものが多くなっている。

窯業は工場統計資料の性質によって二つの部類に分けられる。ある資料では大規模生産と小規模生産との混同はほとんど見られない。だから統計資料は比較的信頼できる。これにはいるのは、ガラス、陶磁器、雪花石膏およびセメント製造業である。とくに注目すべきは、建設業の発展を証明するセメント製造業の急速な成長である。その生産額は一八六六年には五三万ルーブリ（『陸軍統計集』）、一八九〇年には三八二万六〇〇〇ルーブリであり、また機械制

事業所は一八七五—一八七八年には八、一八九〇年には三九であった。これに反して、壺製造業と煉瓦製造業では、小さな事業所が大量にふくまれていることが見られ、そのため工場統計の資料はとくに不満足で、六〇年代と七〇年代についてはとくに誇張されたものとなっている。たとえば、壺製造業では、一八七九年には一、九〇〇人の労働者をもつ生産額五三万八〇〇〇ルーブリの五五二経営がかぞえられたが、一八九〇年には一五八経営で労働者一、九七八人、生産額九一万九〇〇〇ルーブリである。しかし小さな事業所(生産額二、〇〇〇ルーブリ未満の)を除外すると、以下のようになる。一八七九年には七〇事業所、労働者八四〇人、生産額五〇万五〇〇〇ルーブリ、一八九〇年には一四三事業所、労働者一、八五九人、生産額八五万七〇〇〇ルーブリ。要するに、統計のしめすような「工場」数の減少と労働者数の停滞ではなく、実際には双方のいちじるしい増大が生じたのである。煉瓦製造業については、一八七九年の官庁資料は、二、六二七事業所、労働者二八、八〇〇人、生産額六九六万三〇〇〇ルーブリ、一八九〇年は一、二九二事業所、労働者二四、三三四人、生産額七二二四万九〇〇〇ルーブリであるが、小さな事業所(生産額二、〇〇〇ルーブリ未満の)を除くと、一八七九年は、五一八事業所、労働者一九、〇五七人、生産額五六二二万五〇〇〇ルーブリ、一八九〇年は、一、〇九六事業所、労働者二二、二二三人、生産額七二二四万ルーブリとなる。*

* これらの生産業における小さな事業所はいまではクスターリ経営に入れられている。見本として小営業の表(付録I)または『試論』、一五八—一五九ページ(一三)を参照。『大蔵省年報』(第一冊)は、資料が明白に誇張されているという理由から、これらの生産業にかんして総計を出すことをやめた。その当時以降の統計の進歩は、材料の価値にかんする大胆さと無頓着さが増大した点にある。

(四) 冶金業

冶金業の工場統計では、支離滅裂の源泉となっているのは、第一に、小さな事業所をふくめていることであり(もっぱら六〇年代と七〇年代に)*、第二に、そして主として、鉱業所が商工局ではなく鉱山局の「管轄に属すること」である。大蔵省の報告はふつう「原則として」鉱業所を除外しているが、鉱業所とその他の工場との区別にかんする一律で不変の基準は、かつてまったく存在したことがなかった(それをつくることなどとてもできはしない)。だから、工場統計にかんする大蔵省の刊行物は、つねに部分的に鉱業所をふくんでいるのであって、そのさいこの包合の範囲が県により年によって一様でないのである。** 冶金業への蒸気発動機の応用が農民改革後にどのようにすすんだかにつ

いての資料は、あとで鉱業を考察するさいにあげよう。

* たとえば、六〇年代にはいくつかの県では何十という鍛冶屋を「製鉄工場」にふくめていた。『大蔵省報告・資料集』、一八六六年、第四号、四〇六ページ、一八六七年、第六号、三八四ページを見よ。『統計時報』、第二集第六冊。また、一八六六年度の『年報』がパヴロフ地域の小クスターリを「工場主」にふくめている。さきにあげた例（第二節）をも参照。

** 『試論』、二六九および二八四ページの例――カルィシェフ(一六三)氏がこの事情を無視したためにおちいった誤りの検討を見よ。一八七九年の『工場案内』は、たとえば、一八九〇年度『工場案内』では除外されているクレバカやヴィクスンの鉱業所あるいはその支所を算入している（三五六ページおよび三七四ページ）。

（五）食品製造業

この生産業はわれわれが関心をもっている問題で、とくに注目に値する。というのは、工場統計資料の支離滅裂さがここでは頂点に達しているからである。それに、わが国の工場工業全体のなかで、これらの生産業は顕著な地位を占めているのである。たとえば、一八九〇年度の『工場案内』によれば、ヨーロッパ・ロシアの工場総数二一、一二四、その労働者八七五、七六四人、生産額一五億〇一〇〇万ループリのうち、これらの生産業の占める部分は、工場七、〇九五、労働者四五、〇〇〇人、生産額一億七四〇〇万ループリであった。問題は、この部門のおもな生産業――製粉業、碾割業および搾油業――が、農業生産物の加工業であるという点にある。この加工業に従事している小さな事業所はロシアでは各県で数百、数千をかぞえるが、これらの事業所のなかから「工場」をぬきだすのに一般的に確定した基準はなにもないのだから、統計はこれらの小さな事業所をまったく偶然にとらえているわけである。だから、「工場」数は年により県によって驚くべき飛躍をすることになる。一例として、製粉業の工場数をいろいろの年についていろいろの典拠によってしめそう。一八六五年――八五七（『大蔵省報告・資料集』）、一八六六年――二、一七六（『年報』）、一八六六年――一八、四二六（『陸軍統計集』）、一八八五年――三、九四〇（『集成』）、一七、七六五（『ロシア報告集』）、一八八九年、一八九〇年および一八九一年――五、〇七三、五、六〇五および五、二〇一*（『集成』）、一八九四／九五年――二、三〇八（『一覧表』）。一八九二年にかぞえられた五、〇四一の製粉所のうち（『集成』）、八〇三は蒸気力、二、九〇七は水力、一、三二三は風力、八は馬力使用であった！　一部の県は蒸気力製粉所だけを数に入れ、他の県は水力製粉所も入れ（その数は一から四二五におよぶ）、別の県（少数）はさらに風力製粉所（一から五三〇）

〔第 90 表〕

ヨーロッパ・ロシアの50県			
年度	蒸気製粉所数	労働者数	生産額（1000ルーブリ）
1866年	126	?	?
1879年	205	3,621	21,353
1890年	649	10,453	67,481
1892年	803	11,927	80,559

や馬力製粉所も入れたのである。このような統計と、その資料を軽軽しく信じて使用して得られた結論とが、どのような意義をもつか、容易に想像がつく！** 明らかに、機械制大工業の成長を判断するためには、われわれはまず「工場」の概念の一定の標識を確立しなければならない。このような標識として、蒸気機関の有無をとろう。蒸気力製粉所は機械制大工業の時代の特徴的な随伴物なのである。***

* このほか「工場」に算入されない「小製粉所」が三二、九五七。

** 『試論』所載のさきに引用した論文におけるカルィシェフ氏の同様の結論の例を見よ。

*** 大きな水力製粉所も、もちろん、工場の性格をおびてはいるが、これを小さな製粉所から区別するための資料がわれわれにはない。一八九〇年度の『工場案内』によれば、一〇人以下労働者のいる水力製粉所は二五〇をかぞえた。またその労働者数は六、三七八人であった。

この部門における工場制生産の発展の状況は次のようになる。* 〔第九〇表〕

* 『陸軍統計集』、『工場案内』および『集成』。一八九四／九五年度の『工場一覧表』によれば、ヨーロッパ・ロシアで蒸気力製粉所は一、一九二をかぞえる。蒸気発動機の統計は一八七五―一八七八年にヨーロッパ・ロシアで蒸気力製粉所が一二九四あったとしている。

まったく同じ理由で、搾油業の統計も不満足なものである。たとえば、一八七九年には、七、二〇七人の労働者をもつ生産額六四八万六〇〇〇ルーブリの二、四五〇工場がかぞえられたが、一八九〇年には四、七四六人の労働者をもつ生産額一二二三万二〇〇〇ルーブリの三八三工場であった。しかし工場数と労働者数のこの減少は、外見だけのことである。もし一八七九年と一八九〇年の資料を比較可能なものにすると、すなわち、生産額二、〇〇〇ルーブリ未満の事業所（名簿にはいっていないもの）を除外すると、

一八七九年には二、九四一人の労働者をもつ生産額五七七万一〇〇〇ルーブリの二七二工場、一八九〇年には四、七四一人の労働者をもつ生産額一二二三万二〇〇〇ルーブリの三七九工場となる。機械制大工業がこの生産業で製粉業に劣らず急速に発展したことは、たとえば蒸気発動機の統計からわかる。すなわち、一八七五―一八七八年には蒸気力工場は二七、その蒸気機関二八台、出力五二一馬力であったが、一八九〇年には機械制工場は一一三、その蒸気機関一一六台、出力一、八八六馬力であった。

この部門のその他の生産業は比較的小さい。たとえば、マスタード製造業と魚類加工業で、六〇年代の統計は数百の小さな事業所をかぞえあげているが、それらは工場とはなんの共通点ももたず、現在では工場にはふくめられていないものである。いろいろな年次のわが国の工場統計の資料がどのような訂正を必要とするかは、次のことから明らかである。すなわち、製造業を除いて、『工場案内』は、一八七九年にはこの部門に一五、三二三人の労働者をもつ三、五五五の工場が、一八九〇年に一九、一五九人の労働者をもつ一、八四二の工場があったとしている。七つの生産業*について、一八七九年に算入された小さな事業所（生産額三、〇〇〇ルーブリ未満の）は二、四八七、その労働者五、一七六人、生産額九一万六〇〇〇ルーブリであったが、一八九〇年には七事業所その労働者一〇人、生産額二、〇〇〇ルーブリであった！　したがって、資料が比較可能であるためには、一方の場合には五、〇〇〇人の労働者を、他方の場合には一〇人を差しひかなければならないのである！

* 搾油業、澱粉製造業、糖蜜製造業、麦芽製造業、製菓業、罐詰製造業および酢製造業。

（六）内国消費税を課される生産業およびその他の生産業

内国消費税を課されるいくつかの生産業で、一八六〇年代から現在までのあいだに工場労働者数の減少が見られるが、しかしこの減少の規模は、印刷された数字の一つひとつを盲目的に信じているニコライ―オン氏が断言する*ようなものとはほど遠い。問題は、内国消費税を課される生産業の大多数については、『陸軍統計集』が唯一の典拠であり、それが、われわれの知っているように、工場統計の総計を大幅に誇張しているという点にある。しかしその資料を吟味するのに、われわれは残念ながら材料をすこししかもっていない。火酒製造業で、『陸軍統計集』は一、八六六年に五二、六六〇人の労働者をもつ三、八三六の工場をかぞえているが（一八九〇年には、二六、一〇二人の労働者をもつ一、六二〇の工場）、このばあい工場数は、一八六五／

六六年に操業中の工場二、九四七、一八六六／六七年には三、三八六とした大蔵省の資料と一致しない。** これから判断すると、労働者数は五、〇〇〇—九、〇〇〇人ほど誇張されていることになる。ウォトカ製造業では、『陸軍統計集』は、八、三二六人の労働者をもつ四、八四一工場をかぞえているが（一八九〇年には、五、二六六人の労働者をもつ二四二工場）、そのうちベッサラビア県に六、八七三人の労働者をもつ三、二〇七工場があったとしている。この数字のばからしさは一目瞭然である。実際、大蔵省の情報***からわれわれは、ウォトカ工場の実際の数がベッサラビア県で一〇—一二、ヨーロッパ・ロシア全体で一、一五七であったことを知っている。したがって、労働者数は最小限六〇〇〇人誇張されていることになる。誇張の原因は、おそらく、ベッサラビアの「統計家たち」がぶどう園主を工場主にふくめたことにある（タバコ製造業についての後述を参照）。ビールおよび蜜酒醸造業では、『陸軍統集計』は六、八二五人の労働者をもつ二、三七四工場をかぞえているが（一八九〇年には八、三六四人の労働者をもつ九一八工場）、それにたいして『大蔵省年報』はヨーロッパ・ロシアで一八六六年に二、〇八七工場をかぞえている。労働者数はここでも誇張されている。**** 甜菜糖製造業と砂糖精製業では、『陸軍統計集』は労働者数を一一、〇〇〇人誇張しており、『大蔵省年報』の資料の八〇、九一九人（一八九〇年には労働者七七、八七五人）にたいして、九二、一二六人をかぞえている。タバコ製造業では、『陸軍統計集』は二六、一一六人の労働者をもつ五、三二七工場（！）をかぞえており（一八九〇年には二六、七二〇人の労働者をもつ二八一工場）、そのうち労働者二〇、〇三八人をもつ四、九九三工場がベッサラビア県内となっている。だが実際には、一八六六年のロシア国内のタバコ工場は三四三で、ベッサラビア県にあったのは一三であった。† 労働者数の誇張は約二万人となり、『陸軍統計集』の編者たち自身でさえ、「ベッサラビア県でしめされている工場は……タバコ農園にほかならない」（四一四ページ）と書きとめたほどである。ニコライーオン氏は、自分が利用している統計刊行物の本文に目をとおすことはよけいなことだと考えたのに違いない。だから、彼は誤りに気づかないで、「タバコ工場……における労働者数のわずかな増加」（前掲論文、一〇四ページ）について、大まじめに論じたのである!! ニコライーオン氏は、内国消費税を課される生産業における労働者の総数を、『陸軍統計集』と一八九〇年度の『工場案内』から直接とってきて（一八六、〇五三人と一四四、三三二人）、減少のパーセントを計算する……「二五年間に就業労働者数のかなりの減少が生じ、それは二二・四％がた少なくなった」

……「ここでは」（すなわち、内国消費税を課される生産業では）、「われわれは、増加は問題になりえないこと、労働者数は以前より四分の一がたあっさり低下したことを見る」（同書）。実際、これほど「あっさりした」ことはない！ 手あたりしだいの数字をとってパーセントを計算すればよい！ そして『陸軍統計集』の数字が労働者を四万人だけ誇張しているという小さな事情には、気をとめなければよいのである。

* 『ルースコエ・ボガーツトヴォ』、一八九四年、第六号、一〇四―一〇五ページ。

** 『大蔵省年報』、第一冊、七六ページおよび八二ページ。工場総数（操業していないものもふくめて）は四、七三七と四、六四六であった。

*** 『年報』、第一冊、一〇四ページ。

**** たとえば、シンビールスク県に『陸軍統計集』は、二九九人の労働者をもつ生産額二一、六〇〇ルーブリの二一八工場（！）、をかぞえている。（『年報』によれば、この県には七工場あった。）おそらく、これは小さな家内あるいは農民事業所である。

† 『大蔵省年報』、六一ページ。『マニュファクチュア工業概観』（第二巻、サンクト・ペテルブルグ、一八六三年）を参照。そこであたえられている一八六一年の詳細な情報は次のとおり。五三四工場、その労働者六、九三七人、ベッサラビア県では工場三一、その労働者七三人。タバコ工場数は年によって激しい変動がある。

（七）結論

最後の二つの節で述べたわが国の工場統計の批判は、われわれを次のような最も主要な結論にみちびく。

一 ロシアにおける工場数は農民改革後の時代に急速に増大している。

わが国の工場統計の数字から出てくるこれと反対の結論は、誤りである。問題は、わが国では小さな手工業的、クスターリ的および農村経済的事業所が工場数のなかにはいっており、しかも、われわれが現在から過去にさかのぼればさかのぼるほど、ますます多くの小さな事業所が工場数のなかにはいってくる、という点にある。

二 工場労働者と工場の生産規模も同様に以前についてはわが国の統計では誇張されている。それは、第一に、以前にはより多くの小さな事業所がふくめられたことに由来する。そのため、クスターリ営業と境を接する生産業にかんする資料はとくに信頼できない。* 第二に、それは、以前にはいまよりも多くの、資本主義的にやとわれている家内労働者が工場労働者の数にふくめられたことに由来する。

* 全生産業について、またより長い期間にわたって総体的資

料をとるならば、上記の原因によって生ずる誇張は大きなものにはならないであろう。というのは、小さな事業所が労働者総数と総生産額に占めるパーセントはわずかなものだからである。もちろん、この場合、同じ典拠からとった資料を比較することが前提である（大蔵省の情報を県知事報告の情報あるいは『陸軍統計集』の情報と比較することなど、問題にならない）。

三　わが国では、ふつう次のように考えられている。すなわち、官庁工場統計の数字をとるからには、それはこの統計の他の数字と比較しうるものと見なければならず、逆のことが証明されないかぎり、多少とも信頼できるものと見なければならない、と。われわれがさきに述べたことからは、反対の命題が出てくる。すなわち、違う時期、違う県にかんするわが国の工場統計資料の比較は、逆のことが証明されないかぎり、すべて信頼できないものと見なければならない。

四　鉱業の発展*

* 典拠は、次のとおり。セミョーノフ『ロシアの商工業にかんする史料の研究』、第三巻、サンクト-ペテルブルグ、一八五九年、三二三―三三九ページ。『陸軍統計集』、鉱業篇。『大蔵省年報』、第一冊、一八六九年。『一八六四―一八六七年鉱山局統計報告集』、サンクト-ペテルブルグ、一八六四―一八六七年（鉱山技師団学術委員会刊行）。イ・ボゴリュプスキー『ロシア帝国鉱業統計の試み』、サンクト-ペテルブルグ、一八七八年。『ロシア工業の歴史的=統計的概観』、サンクト-ペテルブルグ、一八八三年、第一巻（ケッペンの論文）。『一八九〇年のロシア鉱山・冶金業統計報告集』、サンクト-ペテルブルグ、一八九二年。同書の一九〇一年度（サンクト-ペテルブルグ、一九〇四年）および一九〇二年度のもの（サンクト-ペテルブルグ、一九〇五年）。カ・スカリコフスキー『一八七七年におけるロシアの鉱山・冶金業の生産性』、サンクト-ペテルブルグ、一八七九年。『ロシアの鉱山・冶金業』、シカゴ博覧会のための鉱山局刊行物、サンクト-ペテルブルグ、一八九三年（ケッペン編）。『一八九〇年度ロシア報告集』、中央統計委員会刊行、サンクト-ペテルブルグ、一八九〇年。同書の一八九六年度のもの、サンクト-ペテルブルグ、一八九七年。『ロシアの生産力』、サンクト-ペテルブルグ、一八九六年、第七篇。一八九六―一八九七年の『ヴェーストニク・フィナンソフ』。ペルミ県エカテリンブルグ郡とクラスノウフィムスク郡にかんするゼムストヴォ統計報告集、その他。

ロシアの農民改革後の発展の初期には、鉱業の主要な中心地はウラルであった。ウラルは、ごく最近まで中央ロシアからはっきり隔絶されていた地方であり、同時に独特の産業構造をもっている。ウラルにおける「労働組織」の基礎には古くから農奴制度があったが、それは現在にいたる

もなお、一九世紀末にいたってもなお、鉱山・冶金業の生活のきわめて重要な諸側面において認められるのである。

かつて農奴制度は、ウラルの最高の繁栄と、ロシアばかりでなく部分的にはヨーロッパにおけるウラルの優越との基礎となっていた。一八世紀には鉄はロシアのおもな輸出品目の一つであった。鉄は一七八二年には約三八〇万プード、一八〇〇―一八一五年には二〇〇―一五〇万プード、一八一五―一八三八年には約一三三万プード輸出された。すでに「一九世紀の二〇年代に、ロシアはフランスの一倍半、プロイセンの四倍半、ベルギーの三倍もの銑鉄を得ていた」。しかし、ヨーロッパ資本主義の萌芽的発展の時代にウラルがこのように高い地位にのぼるのを助けたその同じ農奴制度は、資本主義の繁栄の時代にはウラルの衰微の原因となった。ウラルにおける鉄工業の発展は非常にゆっくりすすんだ。一七一八年にロシアは約六五〇万プードの銑鉄を得たが、一七六七年には約九五〇万プード、一八〇六年には一二〇〇万プード、三〇年代には九〇〇〇―一一〇〇万プード、四〇年代には一一〇〇―一三〇〇万プード、五〇年代には一二〇〇―一六〇〇万プード、六〇年代には一三〇〇―一八〇〇万プード、一八六七年には一七五〇万プードであった。一〇〇年間に生産は二倍にもならなかったわけで、ロシアは、機械制大工業が冶金業の巨大な発展を呼びおこした他のヨーロッパ諸国のはるか後方に、取り残されてしまったのである。

ウラルの停滞の主要な原因は農奴制度であった。鉱山・冶金業者は地主でもあり工場主でもあって、彼らの支配の基礎は資本および競争にではなく、独占*に、また彼らの所領権にあった。ウラルの工場主はいまでも最大級の土地所有者である。一八九〇年に帝国の二六二の製鉄工場全部で一一四〇万デシャチーナの土地をもっていたが（うち八七〇万デシャチーナは森林）、そのうち一〇二〇万デシャチーナはウラルの一一一の工場のものであった（森林は七七〇万デシャチーナ）。したがって、ウラルの各工場は、平均すれば一〇万デシャチーナという広大な私有地をもっているわけである。これらの領地からの農民への分与地の割譲は、現在でもなお完全にはやんではいない。ウラルでは雇用だけでなく、雇役もまた働き手を獲得する手段である。たとえば、ペルミ県クラスノウフィムスク郡にかんするゼムストヴォ統計は、あるいは無料で、あるいは割引料金で、工場から土地、放牧地、森林、等々を借りて利用している農民経営が数千あるとしている。この無料の利用が実際には非常に高くつくことは、自明の理である。なぜなら、そのため賃金はとほうもなく引きさげられるのだからである。工場は、工場に縛りつけられた「自分の」安い労働者

を手に入れるわけである。** この関係をヴェ・デ・ベロフ氏はまさに次のように特徴づけている。

ベロフ氏はこうかたっている――ウラルが強いのは「独特の」歴史が育てあげた労働者のせいである。「他の外国の工場では、あるいはペテルブルグの工場においてさえ、労働者はこれらの工場の利益には無関係である。今日はここにいるが、明日はよそにいる。工場が操業していれば、彼ははたらく。利益から欠損に変わると、彼は背負袋をかついで、やって来たときと同じようにさっさと身軽に出てゆく。労働者と工場経営主とはたがいに宿敵である。……ウラルの工場の労働者はまったくちがった状態にある。彼はこの土地の住民であり、そこに工場のそばに自分の土地も自分の経営も、最後に自分の家族ももっている。工場の福祉と彼自身の福祉とは密接不可分に結びついている。工場がうまくゆけば、彼もうまくゆくし、工場がまずくなると、彼もまずくなる。だが、出てゆくことはできない（原文のまま！）。そこには背負袋一つない（原文のまま！）。出てゆくことは自分の全世界を破壊すること、土地も、経営も、家族も、捨てさることを意味する。……だからこそ彼は何年間も耐えしのぶことをいとわず、半分の労賃ではたらくこと、あるいは同じことだが、他の同じような地元の労働者に一片のパンをかせぐ可能性をあたえるために、自分の労働時間の半分は仕事なしでいることを、いとわないのである。要するに、彼は工場にとどまることさえできれば、彼の主人とのあいだでどのような合意にでも達することをいとわない。このように、ウラルの労働者と工場のあいだには不可分の結びつきがある。両者の関係は、農奴的従属から解放される以前と同じである。この関係の形態が変わっただけ、ただそれだけである。以前の隷属の原則に相互利益の偉大な原則がとって代わったのである」。***

* 農民解放のさい、ウラルの鉱山業者は、工場地区で火力で操業する事業所を開設することを禁止している法律の維持をとくに固執[一四〇]しとおした。若干の詳細は『試論』、一九三―一九四ページを見よ。

** ウラルの労働者は「半分は農耕者である。だから、労賃はほかの鉱山・冶金業地域よりも低いのに、鉱山の仕事は彼にとっては家計のよい助けになっている」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第八号）。周知のように、ウラルの農民の農奴制的従属からの解放の条件は、まさに鉱山の仕事にたいする農民の関係に適応したものであった。鉱山・冶金業の住民は土地をもたないで一年中工場の仕事に従事しなければならない職人と、分与地をもっていて副業をおこなわなければならない農村の働き手とに分かれた。ウラルの労働者にかんして今日まで残っているあの用語、すなわち、彼らは仕事で「借金をつくる」ということが、最高度に特徴的

である。たとえば、ゼムストヴォ統計のなかで、「アルチンスク工場の職場の仕事にあたって負債を負った労働者班にかんする情報」を読むとき、思わず本の表紙を見て日付を調べるのである。本当にこれは実際のところ九四年であって、四四年ではないのか？(一六六)と。

*** 『クスターリ営業調査委員会報告書』、第一六冊、サンクトペテルブルグ、一八八七年、八一九ページ以下。同じ筆者はあとで「健全な人民的」工業について論じている！

この偉大な相互利益の原則は、なによりもまず賃金の特別の引下げに現われている。「南部では……労働者は、ウラルにおけるよりも二倍あるいは三倍も高い」。たとえば数千人の労働者にかんする資料によれば、一七七ループリにたいして四五〇ループリ（一労働者あたり一年に）である。南部では、「自分の郷里で、あるいは一般にどこであろうと、野良仕事でなんとか暮らせるだけの稼ぎを得る機会さえあれば、労働者は工場や炭鉱や鉱山を見捨てる」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第一七号、二六五ページ）。ウラルはといえば、なんとか暮らせるだけの稼ぎについて夢みることさえできないのである。

ウラルの労働者の低い賃金および債務奴隷的状態と自然にまた不可分に結びついているのが、ウラルの技術的立ちおくれである。ウラルでは、加熱しないか、あるいはすこし加熱しただけの送風による旧式の構造の溶鉱炉で、薪を燃料にして銑鉄を生産する方法が優勢である。一八九三年には加熱しない送風による溶鉱炉は、ウラルでは一一〇基の炉のうち三七基、南部では一八基のうち三基あった。鉱物性燃料をつかう溶鉱炉は一年間に一基平均一四〇万プードを生産したが、薪を燃料にするものは二一万七〇〇〇プードであった。一八九〇年にケッペン氏はこう書いている。「ウラルの工場では精銑炉製鉄法にあいかわらず固執しているが、ロシアの他の地方では、それはすでに反射炉精錬法によって完全に駆逐されつつある。」ウラルにおける蒸気発動機の使用は南部にくらべてはるかに少ない。最後に、距離がきわめて遠く、また鉄道がないため、ウラルが閉鎖的であって、ロシアの中心から切りはなされていることをも、指摘しないわけにはいかない。ごく最近まで、ウラルからモスクワへの生産物の輸送は、主として年一回河川での原始的な「筏流し」によっておこなわれていた。*

* マミン＝シビリャーク氏の短編小説『戦士』におけるこの筏流しの記述を参照。この作品には、農民改革前の生活様式に近いウラルの独特の生活様式、それにともなう、工場に縛りつけられた住民の無権利と無知と卑屈、「旦那がた」の「気の良い子供っぽい放埒」、ロシアをもふくむあらゆる国の資本主義的発展にとってあれほども特徴的な中間層の人々（ラズノチーネツ、インテリゲンツィア）の欠如が、浮彫りに出ている。

〔第 91 表〕

年 次	銑鉄精錬高（1000プード）						帝国の石炭採掘高総計（100万プード）
	帝国全体	%	ウラル	%	南部	%	
1867年	17,028	100	11,084	65.1	56	0.3	26.7
1877年	24,579	100	16,157	65.7	1,596	6.5	110.1
1887年	37,389	100	23,759	63.5	4,158	11.1	276.8
1897年	114,782	100	41,180	35.8	46,349	40.4	683.9
1902年	158,618	100	44,775	28.2	84,273	53.1	1,005.21

こうして、農民改革前の制度の最も直接的な遺物、雇役のいちじるしい発展、労働者の緊縛、低い労働生産性、技術の後進性、低賃金、手労働生産の支配、この地方の自然の富の幼稚で略奪的・原始的な開発、独占、競争の排除、時代の一般的な商工業の動きからの閉鎖と隔絶、これらがウラルの一般的な状況である。

南部の鉱業地方*は、多くの点でウラルと正反対である。ウラルが古くて、またウラルで支配的な秩序が「長い歳月によって神聖化された」ものであるのとちょうど同程度に、南部は若くて形成期にある。ここで最近数十年間に成長した純粋に資本主義的な工業は、伝統も、身分も、民族も、特定の住民の閉鎖性も知らない。南ロシアへは、外国の資本と技師と労働者が大量に移住してきたし、いまも移住している。そして現代の熱狂時代（一八九八年）には、アメリカからここへ多くの工場が移されている。** 国際関係は関税障壁を突破して移住し、「他人の」土地に腰を落着けることをためらわなかった。ubi bene, ibi patria〔住めば都〕である……。ここで南部によるウラルの駆逐にかんする統計資料をあげておこう。(九七)〔第九一表〕

* 鉱山統計では、「南部および西南ロシア」というのは、ヴォルィニ、ドン、エカテリノスラフ、キエフ、アストラハン、ベッサラビア、ポドリスク、タヴリーダ、ハリコフ、ヘルソンおよびチェルニーゴフの諸県のことである。引用した数字はこれらの諸県にかんするものである。以下、南部にかんするすべてのことは（多少の修正を加えて）、農民改革後の時代のもう一つの顕著な鉱業地域を形成するポーランドについても言うことができよう。

** 『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第一六号――ニコポリ－マリウポリ会社はアメリカへ注文して、そこから鋼管圧延工場をロシアに移した。

これらの数字から、現在ロシアでどのような技術革命が進行中であるか、また機械制大工業は生産力を発展させるどんなに巨大な能力をもっているかが、はっきりわかる。ウラルの支配は、強制労働、技術的後進性および停滞の支配と同じであった。* これに反して、現在われわれは、鉱山・冶金業の発展がロシアでは西ヨーロッパよりも急速に、それどころか部分的には北アメリカよりも急速にすすんでいるのを見る。一八七〇年にはロシアは世界の銑鉄生産の二・九%を生産したが（七億四五〇〇万プードのうち二二〇〇万プード）、一八九四年には五・一%を生産した（一五億八四二〇万プードのうち八一三〇万プード）（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第二二号）。最近一〇年間（一八八六―一八九六年）に、ロシアの銑鉄精錬高は三倍になったが（三二五〇万プードと九六五〇万プード）、これにたいして、たとえばフランスは同様の前進をするのに二八年（一八五二―一八八〇年）、合衆国は二三年（一八四五―一八六八年）、イギリスは二二年（一八二四―一八四六年）、ドイツは一二年（一八五九―一八七一年）、（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第五〇号を見よ）かかった。若い国々における資本主義の発展は古い国々の手本と援助によっていちじるしく促進される。もちろん、最近の一〇年間（一八八八―一八九八年）は、あらゆる資本主義的繁栄と同じように不可避的に恐慌という結果にみちびく特殊な熱狂期である。しかし飛躍によるほかには、資本主義的発展は一般にすすみようがないのである。

＊ ウラルの鉱山・冶金業者が事態をやや別様に描写していることは、いうまでもない。昨年の大会で、彼らは次のようにことば巧みに泣き言をならべた。「ウラルの歴史的功績は周知のことである。二〇〇年のあいだ、全ロシアがウラルの工場の製品をつかって耕し、刈りいれ、鍛え、掘り、そして切ってきた。ロシアはウラルの銅でつくった十字架を胸につけ、ウラルの車軸で往き来し、ウラルの鋼鉄でつくった鉄砲で射ち、ウラルのフライパンでパンケーキを焼き、ウラルの五カペイカ玉をポケットのなかでじゃらつかせた。ウラルは全ロシア国民の消費をみたしてきた……」（もっとも、ロシア国民はほとんど鉄を消費していなかった。一八五一年にロシアの銑鉄の消費は一人あたり約一四フント、一八九五年には一・一三プード、一八九七年には一・三三プードと計算されている）「……そしてロシア国民の必要と好みに応じて生産物をつくった。ウラルは流行を追うこともなく、レールや暖炉の火床や記念碑の製造に夢中になることもなく、その自然の富を惜し気なく（?）どしどしつかった。しかもこの長い年月のあいだの奉仕にたいする代償として、ウラルはある晴れた日に忘れられ、捨てさられてしまった」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第三二号、『ウラル鉱山・冶金業大会の成果』）。実際、「長い歳月によって神聖化され

〔第 92 表〕

年次	鉱業生産に使用された蒸気機関数と馬力数						鉱業労働者数（岩塩の採掘に従事するものを除く）		
	ロシア全体		ウラル		南部		ロシア全体	ウラル	南部
	蒸気機関	馬力	蒸気機関	馬力	蒸気機関	馬力			
1877年	895	27, 880	268	8, 070	161	5, 129	256, 919	145, 455	13, 865
1893年	2, 853	115, 429	550	21, 330	585	30, 759	444, 646	238, 630	54, 670

た」原則にたいするなんという侮蔑であろう！その罪はすべて、わが国の国民経済にこのような「不安定性」をもちこんだ、あの悪賢い資本主義にある。「レールの製造に夢中になることなく」、昔風に生活して、ウラルのフライパンでパンケーキを焼けたら、どんなによかっただろうに！

生産への機械の応用と労働者数の増加は、南部ではウラルよりもずっと急速にすすんだ。*〔第九二表〕

* ボゴリュブスキー氏は、一八六八年に鉱業で、出力一三、五七五馬力の五二六台の蒸気機関が使用されたと計算している。

このように、ウラルでは蒸気機関の馬力数は二倍半に増大しただけであるが、南部では六倍になったし、労働者数はウラルでは一2/8倍に、南部ではほとんど四倍に増大した。*したがって、まさに資本主義的大工業が、労働生産性の巨大な上昇とならんで、労働者数を急速に増加させるのである。

* 製鉄業における労働者数は、ウラルでは一八八六年に一四五、九一〇人、一八九三年に一六四、一二六人であったが、南部では五、九五六人と一六、四六七人であった。八分の一（概数）増加と、二3/4倍への増加である。一九〇二年については蒸気機関数と馬力数にかんする資料はない。鉱業労働者数（岩塩採掘に従事するものを除く）は、一九〇二年にロシア全体で六〇四、九七二人、そのうちウラルは二四九、八〇五人、南部は一四五、二八〇人であった。

南部とならんで、同じように農民改革後の時期における鉱業の驚異的な成長を特徴とするカフカーズにも、言及しなければならない。石油採掘は、六〇年代には一〇〇万プードにも達しなかったが（一八六五年に五五万七〇〇〇プード）、一八七〇年には一七〇万プード、一八七五年には五二〇万プード、一八八〇年には二一五〇万プード、一八八五年には一億一六〇〇万プード、一八九〇年には二億四二九〇万プード、一八九五年には三億八四〇〇万プード、一九〇二年には六億三七七〇万プードにおよんだ。ほとんど全部の石油がバクー県で採掘され、バクー市は「とるにたりない町から、一一万二〇〇〇人の住民をもつロシア第

田		1炭鉱あたり				1労働者あたりの石炭採掘高（1000プード）
蒸気機関		労働者	石炭（1000プード）	蒸気機関		
台数	馬力数			台数	馬力数	
—	—	6.4	6.6	—	—	1.0
8	68	16.2	45.3	0.1	0.8	2.8
62	766	48.3	241.1	0.5	6.4	4.9
87	1,704	240.4	2,038.9	3.0	58.7	8.4
24	756	739.6	4,632.8	4.8	151.2	6.3
29	1,724	1,673.7	17,868.3	9.6	574.6	10.6
18	808					
228	5,826	93.5	681.3	0.9	21.6	7.3

一級の工業中心地になった」*。石油の採掘と加工業の巨大な発展は、ロシアにおける灯油の消費のいちじるしい増加をまねき、それはアメリカ製品を完全に駆逐し（工場加工の製品の価格低下にともなう個人的消費の増加）、また工場や鉄道の燃料としての廃油の消費のもっといちじるしい増加をまねいた（生産的消費の増加）**。カフカーズの鉱業に従事する労働者数もまたきわめて急速に増加した。すなわち、一八七七年の三、四三一人から一八九〇年の一七、六〇三人へと五倍に増大した。

* 『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第二一号。一八六三年にバクーの住民は一四、〇〇〇人、一八八五年には四五、七〇〇人であった。

** 一八八二年には蒸気機関車の六二%以上が薪をたいていたが、一八九五／九六年には薪をたいていたのは八・三%、石油が三〇%、石炭が四〇・九%であった（『生産力』、第一七巻、六二ページ）。国内市場を征服したあと、石油産業は外国市場の探求に乗りだし、ロシア資本主義のための外国市場の欠如を好んで論ずる一部のロシア経済学者たちのアプリオリな予言に反して、アジアへの石油輸出が非常に急速に増加している（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第三二号）。

南部の工業の構造を例解するために、ドネツ炭田の石炭産業にかんする資料をとりあげよう（ここでは炭鉱の平均

〔第 93 表〕

労働者数別炭鉱グループ	ドネツ炭			
	数			石炭採掘高(1000プード)
	炭鉱	竪坑と水平坑道	労働者	
I　労働者10人未満の炭鉱	27	31	172	178
II　〃　10—24人　〃	77	102	1,250	3,489
III　〃　25—99人　〃	119	339	5,750	28,693
IV　〃　100—499人　〃	29	167	6,973	59,130
V　〃　500—999人　〃	5	67	3,698	23,164
VI　〃　1000人以上　〃	3	16	5,021	53,605
労働者数不明の炭鉱	9	40	? (2,296)	15,008
総数	269	762	25,167	183,267

の大きさはロシアの他のすべての地方よりも小さい)。労働者数によって炭鉱を分類すると、次のような情況が得られる。*〔第九三表〕

*、資料は『一八九〇年鉱山・冶金業報告集』の炭鉱一覧表からとった。

このように、この地方には(そしてこの地方だけに)きわめて小さな農民の炭鉱があるが、しかしそれらは、数が多いにもかかわらず、総生産高においてまったくとるにたりない役割しか演じておらず(一〇四の小さな炭鉱で石炭の総採掘量の二%にしかならない)、極度に低い労働生産性を特徴としている。これに反して、三七の最大級の炭鉱で労働者総数の約五分の三を占め、石炭総採掘量の七〇%を出している。労働生産性は炭鉱の規模の増大とならんで、機械の使用とは関係なく上昇している(たとえば、第五と第三の等級の炭鉱を蒸気機関の馬力数と労働者一人あたり生産高について比較せよ)。ドネツ炭田における生産の集積はますます増大している。たとえば、一八八二—一八八六年の四年間に、石炭出荷主五一二人のうち二一人が、それぞれ貨車五、〇〇〇台(すなわち三〇〇万プード)以上を、四八〇、八〇〇台のうち全部で二一九、七〇〇台、すなわち半分たらずを積み出したにすぎなかった。しかし一八九一—一八九五年の四年間については八七二人の出荷主が

いたが、そのうち五五人がそれぞれ貨車五、〇〇〇台以上を、一、一七八、八〇〇台のうち全部で九二五、四〇〇台、すなわち総数の一〇分の八以上を積み出した。*

* エヌ・エス・アヴダーコフ『ドネツ石炭産業の簡単な統計的概観』、ハリコフ、一八九六年の資料から。

鉱業の発展にかんする上記の資料は二つの点で特別に重要である。第一に、それは、ロシアで国民経済の全分野で進行している社会経済関係の交替の本質を、とくにはっきりしめしている。第二に、それは、発展しつつある資本主義社会では、生産手段を、すなわち個人的消費のではなく生産的消費の対象を製造する工業部門が、とくに急速に成長するという理論的命題を例証している。社会経済の二つの制度の交替は、鉱業では、双方の制度の典型的代表者がここでは別々の地方であるということのため、とくに明瞭に現われている。すなわち、一方の地方では、原始的で旧態依然とした技術、地域に縛りつけられた住民の人格的隷属、強固な身分的伝統や独占その他をともなう前資本主義的な旧習を見ることができ、もう一方の地方では、あらゆる伝統との完全な断絶、技術革命、純資本主義的な機械制工業の急速な発展を見ることができる。* この実例に照らせば、ナロードニキ経済学者の誤りはとくに明白である。彼らはロシアにおける資本主義の進歩性を否定して、わが国の企業家が、農業ではすすんで雇役にたより、工業では家内下請仕事にたより、鉱業では労働者の緊縛、法律による小さな事業所の競争の禁止、等々をかちえようとしていることを指摘する。この種の議論の非論理性とそのなかでの歴史的展望の驚くべき歪曲は明白である。実際に、前資本主義的経営方法の利益を利用しようというわが国の企業家のこの志向は、わが国の資本主義のせいにすべきものであって、資本主義の発展を阻害し、多くのばあい法律の力によって維持されている、旧習の遺物のせいにすべきものではないなどという結論が、いったいどこから出てくるのか？ もし他の鉱業地方で、労働者の緊縛と立法による小さな事業所の競争の禁止が昔から今にいたるまで存続しており、またもし他の地方で、工場主がより低い技術とより安くて従順な労働者をつかって、苦労せずに銑鉄で「一カペイカにたいして一カペイカを、いやときには一カペイカにたいして一カペイカ半も」得るとしたら、** たとえば南部の鉱山業者がこの労働者の緊縛と競争の禁止とを渇望することに驚くことができるだろうか？ 反対に、このような条件のもとでも、ロシアの前資本主義的経済秩序を理想化することができる人々、資本主義の発展を阻害するすべての古くなった制度を絶滅するという、最も焦眉で機の熟した必要のまえに目を閉じる人々がいることに、驚くべきで

はないだろうか？***

* 最近ウラルも、新しい生活条件の影響のもとに変革されはじめており、そしてこの変革は、鉄道がウラルを「ロシア」にいっそう緊密に結びつけるとき、いっそう急速にすすむであろう。この点で、ウラルの鉱石とドネツの石炭との交換のために予定されているウラルと南部との鉄道連絡が、とくに重要な意義をもつであろう。現在までは、ウラルと南部はたがいに競争することがほとんどなく、異なる市場めあてに操業し、主として政府発注によって暮らしてきた。しかし、多量の政府発注の慈雨は永久のものではない。

** 『クスターリ営業にかんする報告と調査』、第三巻、一三ページ所収のエグーノフの論文。

*** たとえば、ニコライ―オン氏はそのいっさいの愚痴を資本主義に向けており（とくに南部の鉱業者について『概要』、二一一ページおよび二九六ページを参照）、こうして、わが国の鉱業の前資本主義的構造にたいするロシア資本主義の関係を完全に歪曲した。

他方では、鉱業の成長にかんする資料は、資本主義と国内市場が、個人的消費物資の生産の成長にくらべて生産的消費物資の成長がより急速であることによってより急速に成長することを明白にしめしている点で、重要である。この事情をたとえばニコライ―オン氏は無視しており、鉱業生産物にたいする全国内需要の充足は、「おそらくきわめて近いうちに実現しよう」（『概要』、一二三ページ）と論じている。問題は、金属、石炭その他の消費量（住民一人あたり）が、資本主義社会では不変ではないし、また不変ではありえないのであって、それは必然的に高まるという点にある。鉄道網が新しく一ヴェルスタ延びるごとに、新しい作業場が建てられるごとに、また農村ブルジョアがプラウを備えつけるごとに、鉱業生産物にたいする需要の大きさが高まるのである。一八五一年から一八九七年までのあいだに、たとえばロシアにおける銑鉄の消費は、一人あたり一四フントから一$\frac{1}{3}$プードに増大したが、この後者の大きさもまた、先進諸国における銑鉄の需要の大きさ（ベルギーとイギリスでは一人あたり六プード以上）に近づくためには、なお非常に大きく増大しなければならないのである。

五　資本主義的大企業における労働者数は増加しているか？

工場工業と鉱業にかんする資料の考察を終えて、われわれはいまや、あのようにナロードニキ経済学者たちの心をとらえ、そして彼らが否定的に解答したこの問題に、答えようと試みることができる（ヴェ・ヴェ氏、ニコライ―オン氏、カルィシェフ氏、カブルーコフ氏は、ロシアの工場

労働者数は――もし増加しているとしても――人口より緩慢に増加していると主張した）。はじめに、問題は、商工業人口が農業人口を犠牲にして増加しているかという点（これについては後述）、あるいはまた、機械制大工業における労働者数は増大しているかという点になければならない、ということを指摘しておこう。小さな工業事業所あるいはマニュファクチュアにおける労働者数は、発展している資本主義社会では増大しなければならないと、主張することはできない。なぜなら、工場は、より原始的な形態の工業をたえず駆逐してゆくからである。またわが国の工場統計資料は、さきにくわしくしめしたように、かならずしもつねに用語の科学的な意味での工場に関連するものではけっしてないのである。

　われわれの当面の問題にかんする資料を考察するためには、われわれは、第一に、すべての生産業にかんする情報を、第二に、長期間にわたる情報を、とりあげなければならない。これらの条件のもとではじめて、資料が多少とも比較可能になるのである。われわれは一八六五年と一八九〇年を、つまり農民改革後の時代の二五年間をとりあげる。手もとにある統計資料を総括してみよう。工場統計は一八六五年についてきわめて完全な情報をあたえており、火酒製造業、ビール醸造業、甜菜糖製造業およびタバコ製造業を除くヨーロッパ・ロシアの全生産業の工場労働者数を、三八〇、六三八人としている。* これらの生産業の労働者数を算定するためには、現在ある唯一の資料『陸軍統計集』をとる必要があるが、そのさい、この資料はさきに証明したように、修正しなければならない。上記の生産業の労働者一二七、九三五人を加えると、** 一八六五年のヨーロッパ・ロシアにおける労働者数の総計（内国消費税を課されるのと課されない生産業について）五〇八、五七三人を得る。*** 一八九〇年については、これに対応する数字は八三九、七三〇人である。**** 増加は六五%で、これは人口の増大よりもいちじるしい増加である。しかし、実際には増大はこれらの数字がしめしているよりも疑いもなく大きかったことを、考慮に入れる必要がある。さきにくわしく証明したように、工場統計資料はクスターリや手工業や農業の小さな事業所をふくみ、さらに家内労働者をふくんでいるため、誇張されている。残念ながら、これらの誇張をすべて完全に訂正することは、材料不足のためわれわれにはできないし、部分的訂正は避けたいとおもう。あとで最大級の工場における労働者数にかんするもっと正確な資料をあげることにするから、なおさらである。

* 『大蔵省報告・資料集』、一八六七年、第六号。現在の資料と対比するためには、この典拠の資料、すなわち大蔵省の資

料しかとることができないということは、さきにすでにしめしたところである。

** ビール醸造業では六、八二五人。誇張はここにもあるが、訂正のための資料がない。甜菜糖製造業—六八、三三四人（『大蔵省年報』による）、タバコ製造業—六、一一六人（訂正ずみ）、火酒製造業—四六、六六〇人（訂正ずみ）である。

*** トウガン-バラノフスキー氏は、一八六六年についてヴェシニャコフ氏の四九三、三七一人という数字をあげている（『工場』、三三九ページ）。この数字がどのような方法で得られたものかはわからないが、われわれのあげた数字との違いはまったくわずかである。

**** 一八九〇年の『工場案内』による。総計八七五、七六四人から、鉱業統計で重複してかぞえられている労働者、すなわち、アスファルト製造業の二九一人、製塩業の三、四六八人およびレール製造業の三二、二七五人を差しひく必要がある。

鉱業所の統計に移ろう。一八六五年には、鉱業労働者数は製銅業と製鉄業ならびに金鉱山と白金鉱山だけについてあたえられており、ヨーロッパ・ロシアで一三三、一七六人であった。* 一八九〇年には、これらの生産業に二七四、七四八人、** すなわち二倍以上多くの労働者がいた。この後者の数字は、一八九〇年のヨーロッパ・ロシアにおける鉱業労働者総数の八〇・六%をとらえている。一八六五年にもこれらの生産業が鉱業労働者総数の八〇・六%を占めていたとすると、*** 鉱業労働者総数は、一八六五年については一六五、二三〇人、一八九〇年については三四〇、九一二人となる。増加は一〇七%である。

* 六〇年代の、鉱業労働者数については、『統計時報』、第一冊、一八六六年、『大蔵省年報』、第一冊、一八六四—一八六七年の『鉱山部統計報告集』、サンクト・ペテルブルグ、一八六四—一八六七年、鉱山学術委員会刊行、を見よ。

** 『一八九〇年鉱業統計報告集』、サンクト・ペテルブルグ、一八九二年。この『報告集』による総計は、ヨーロッパ・ロシアで労働者三四二、一六六人であるが、灯油工場の労働者（『工場案内』のなかでかぞえられたもの）を差しひき、若干の小さな誤りを訂正すると、三四〇、九一二人となる。

*** その他の鉱業生産のなかには、労働者数がおそらく少ししか増大しなかったもの（岩塩採掘）もあれば、労働者数がきわめて大きく増加したにちがいないもの（石炭産業、採石業）もあり、また一八六〇年には全然なかったもの（たとえば水銀採掘）もある。

さらに、鉄道労働者もまた資本主義的大企業の労働者のうちにはいる。一八九〇年にヨーロッパ・ロシアとポーランドおよびカフカーズをあわせると、その数は二五二、四一五人であった。* 一八六五年の鉄道労働者数は不明であるが、十分近似的に算出することができる。なぜなら、鉄道網一ヴェルスタあたり鉄道労働者数の変動は非常にわずかだからである。一ヴェルスタあたり労働者九人として計算すると、一八六五年の鉄道労働者数は三二、〇七六人となる。**

*『鉄道および国内水路の統計的概観』、サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、二二ページ。交通省刊行。残念ながら、われわれにはヨーロッパ・ロシアだけをとりだすための資料がなかった。われわれは常勤者だけでなく、臨時雇い（二〇、四四七人）と日雇い（七四、五〇四人）をも鉄道労働者とみなす。臨時雇労働者の平均年間給与は一九二ルーブリ、日雇いは二三五ルーブリである。平均日給は七八カペイカ。したがって、臨時雇いも日雇いの労働者も一年の大半就業したわけである。だからニコライ―オン氏がやっているように（『概要』、一二四ページ）彼らを抜かすことは正しくない。

**ヴェルスタあたり鉄道労働者は、一八八六年に九・〇人、一八九〇年に九・五人、一八九三年に一〇・二人、一八九四年に一〇・六人、一八九五年に一〇・九人であった。このように、この数は明白な増加傾向をもっている。一八九〇年と一八九六年の『ロシア報告集』および『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第三九号を見よ。ことわっておくが、本節ではわれわれはもっぱら、一八六五年と一八九〇年の資料の比較をしているのである。だから、われわれが帝国全体の鉄道労働者数をとろうと、ヨーロッパ・ロシアだけをとろうと、ヴェルスタあたり九人にしようと、それより少なくしようと、鉱業の全部門をとろうと、一八六五年について資料が存在する部門だけをとろうと、まったくどうでもよいのである。

われわれの計算を総括しよう。〔第九四表〕

このように、資本主義的大企業における労働者数は二一五年間に二倍以上に増大した。すなわち、それは人口一般よりもずっと急速に増大しただけでなく、都市人口よりも急速に増大しさえした。* したがって、農業および小営業から大規模工業企業へのますます多くの労働者の吸引は、疑う余地がない。** わが国のナロードニキがあれほどしばしば頼りにし、あれほど濫用したその当の統計の資料が、こうものがたっているのである。しかし彼らの統計濫用の頂点をなすのは、次のような実に異常な手法である。すなわち、全人口にたいする工場労働者の比率をとり（！）得られた数字（約一％）にもとづいて、この「ひとにぎりの」*** 労働者が、どんなにとるにたりないものであるかについて駄弁を弄するのである！　たとえば、カブルーコフ氏は、人口にたいする「ロシアの工場労働者の」**** パーセントのこの計算を繰りかえしたあとで、つづけてこう言っている。「だが西欧では（!!）、加工工業に従事する労働者の数は……」（「工場労働者」と「加工工業に従事する労働者」とがまったく同じものであるわけではないことは、どんな中学生にも明白なことではないのか？）……「全人口にたいする比率がまったくちがっており」、イギリスの五三％からフランスの二三％までである。「彼地とわが国とでは工場労働者(!!) 階級の比率の差は非常に大きく、わが国の発展の歩みを西欧のそれと同一視することなど問題になりえない、

〔第 94 表〕

資本主義的大企業における労働者数　(単位1000人)

年　次	工場工業	鉱山業	鉄　道	総　計
1865年	509	165	32	706
1890年	840	340	252	1,432

ということは容易にわかる」。こんなことを教授で専門の統計家が書いているのだ！　彼は異常な大胆さで一気に二つのごまかしをしている。すなわち、(一)工場労働者が加工工業に従事する労働者にすりかえられ、(二)この後者が加工工業に従事する人口にすりかえられている。博学なわが統計家たちのためにこれらの差異の意味を明らかにしておこう。フランスでは、一八九一年の人口調査によれば、加工工業に従事する労働者は三三〇万人で、人口の一〇分の一たらずであった(職業別に分類された人口は三六八〇万人。一三〇万人が職業別に分類されていない)。これは工業のすべての事業所と企業の労働者であって、工場労働者だけではない。加工工業に従事する人口は九五〇万人であった(全人口の約二六%)。ここでは労働者のなかに、経営主その他(一〇〇万人)が、つぎに職員二〇万人、家族員四八〇万人および召使二〇万人が加えられている。† ロシアにおけるこれに対応する比率を例示するためには、例として個々の中心地をとりあげなければならない。なぜなら、全人口の職業統計がわが国にはないからである。一つの都市中心地と一つの農村中心地をとりあげよう。ペテルブルクでは、工場統計は一八九〇年について五一、七六〇人の工場労働者がいたとしているが(『工場案内』による)、一八九〇年一二月一五日のサンクト・ペテルブルグの人口調査によると、加工工業に従事していた男女人員は三四一、九九一人で、それは次のように分類されていた。†*

〔第九五表〕

* ヨーロッパ・ロシアでは一八六三年に都市人口は六一〇万人であったが、一八九七年には一二〇〇万人であった。

** 資本主義的大企業における労働者数にかんする最新の資料は、次のとおりである。一九〇〇年については、内国消費税を課されない企業の工場労働者数にかんする資料があり、一九〇三年については、内国消費税を課される企業にかんする資料がある。鉱業労働者にかんしては一九〇二年のものがある。鉄道労働者数は一ヴェルスタあたり一一人(一九〇四年一月一日の情報)として算出できる。『ロシア年報』、一九〇六年、および一九〇二年の『鉱山・冶金業報告集』を見よ。

〔第 95 表〕

	男女の人員数		
	独立生計者（すなわち自分で生計をたてているもの）	家族員と召使	総計
経営主	13,853	37,109	50,962
行政・管理職（職員）	2,226	4,574	6,800
労働者	148,111	61,098	209,209
個人営業者	51,514	23,506	75,020
総計	215,704	126,287	341,991

これらの資料をまとめると、次のようになる。ヨーロッパ・ロシアの五〇県で、一九〇〇―一九〇三年に工場労働者―一、三六一、五七一人、鉱業労働者―四七七、〇二五人、鉄道労働者―四六八、九四一人、総計―二、二〇七、五三七人。ロシア帝国全体では、工場労働者―一、五〇九、五一六人、鉱業労働者―六二六、九二九人、鉄道労働者―六五五、九二九人、総計―二、七九二、三七四人。これらの数字も本文で述べたことを完全に確認している（第二版の注）。

*** ニコライ―オン、前掲書、三二六ページ、その他。

**** 『農業経済学講義』、モスクワ、一八九七年、一四ページ。

† "The Statesman's Yearbook"〔『政治年鑑』〕、一八九七年、四七二ページ。

†* 『一八九〇年の人口調査によるサンクト・ペテルブルグ』、サンクト・ペテルブルグ、一八九三年。営業的職業の第二―第一五グループの総計をとった。営業的職業に従事していたものは全部で五五一、七〇〇人、そのうち二〇〇、七四八人は商業、運輸業および飲食業である。「個人営業者」とは賃金労働者をもたない小生産者のことである。

もう一例――ニジェゴロド県ゴルバートフ郡ボゴローツコエ村では（この村は、われわれが見たように、農業には従事せず、「いわば一つの皮革工場」をなしている）、一八九〇年の『工場案内』によれば工場労働者は三九二人をかぞえるが、他方一八八九年のゼムストヴォ調査では営業人口は約八、〇〇〇人である（総人口九、二四一人、営業をもつ家族は一〇〇分の九以上）。ニコライ―オン氏、カブルーコフ氏一派はこれらの数字をよく考えてみるがよい！

第二版への補遺。現在われわれは、全人口の職業統計にかんする一八九七年の国勢調査資料の結果をもっている。ロシア帝国全体についてわれわれが加工した資料を、つぎ

〔第 96 表〕

職　業	独立生計者	家族員	総人口
	（男		女）
a）官吏と軍人	1.5	0.7	2.2
b）聖職者および自由業者	0.7	0.9	1.6
c）金利生活者と恩給受給者	1.3	0.9	2.2
d）自由剝奪者，淫売婦，職業不定者および不明のもの	0.6	0.3	0.9
非生産的人口　合計……………………	*4.1*	*2.8*	*6.9*
e）商　　業	1.6	3.4	5.0
f）交通と通信業	0.7	1.2	1.9
g）私的使用人，召使，日雇い	3.4	2.4	5.8
半生産的人口　合計……………………	*5.7*	*7.0*	*12.7*
h）農　　業	18.2	75.5	93.7
i）工　　業	5.2	7.1	12.3
生産的人口　合計……………………	*23.4*	*82.6*	*106.0*
総　計	33.2	92.4	125.6

にかかげよう。* 〔第九六表〕

* 『一八九七年一月二八日の第一回国勢調査資料の検討の結果の帝国全土にかんする総括』、中央統計委員会刊行、第二巻、第二一表、二九六ページ。職業グループは私が次のように編成した。(a) 一、二および四、(b) 三および五—一二、(c) 一四および一五、(d) 一六および六三—六五、(e) 四六—六二、(f) 四一—四五、(g) 一三、(h) 一七—二一、(i) 二二—四〇。

いうまでもないことだが、これらの資料は、工場労働者数を全人口と比較するというナロードニキの手法のでたらめさ加減についてさきに述べたことを、完全に確証している。

ロシアの全人口の職業別分布にかんする上掲の資料は、なによりも、ロシアにおける全商品生産と資本主義の基礎としての社会的分業を例証するために分類してみると、興味深いものがある。この観点から、全人口は三つの大きな部類に区分されなければならない。I 農業人口、II 商工業人口、III 非生産的（より正確には、経済活動に参加しない）人口。上掲の九つのグループ（a—i）のうち一つだけは、これら三つの基本的部類のいずれにも、そのまま直接には入れることができない。それはグルー

〔第 97 表〕

	（単位 100万人）
ロシアの農業人口	97.0
商工業人口	21.7
非生産的人口	6.9
総数	125.6

プ（g）私的使用人、召使、日雇いである。このグループは商工業人口と農業人口とに概算で配分しなければならない。われわれは、このグループのうち都市に住んでいることがしめされている部分（二五〇万人）を前者に入れ、郡部に住んでいるもの（三三〇万人）を後者に入れた。そうするとロシアの全人口の分布図は次のようになる。〔第九七表〕

この図から、一方では、商品流通、したがってまた商品生産が、ロシアで十分しっかりした足で立っていることが、はっきりわかる。ロシアは資本主義国なのである。他方では、ここから、ロシアはその経済発展において、他の資本主義諸国に比してまだ非常におくれているということがわかる。

さきにすすもう。本書でわれわれがおこなった分析のあとでは、ロシアの全人口がその階級的地位によって、すなわち社会的生産構造におけるその地位によって、どのような基本的カテゴリーに分かれるかを近似的に算定するために、ロシア全人口の職業統計を利用することができるし、また利用しなければならない。

このような――もちろん近似的なものにすぎない――算定が可能になるのは、基本的な経済グループへの農民の一般的区分をわれわれが知っているからである。そしてロシアの全農業人口はすべて農民とみなしてまったくさしつかえない。というのは、総数のうち地主の数はまったくとるにたりないからである。しかも地主のかなりの部分は、金利生活者、官吏、高級官僚、等々としてかぞえられている。さて九七〇〇万人の農民大衆のなかでは、三つの基本的グループを区別する必要がある。すなわち、下級のグループ――プロレタリア的および半プロレタリア的住民層、中位のグループ――きわめて貧しい小経営主、および上級のグループ――富裕な小経営主。異なる階級的要素としてのこれらのグループの基本的な経済的標識は、さきにくわしく分析しておいた。下級のグループは、財産をもたず、主としてあるいはなかば労働力の販売によって生活している住民である。中位のグループは、きわめて貧しい小経営主である。というのは、中農は豊年のときでさえ収支を合わせるのがやっとであるが、しかし生活のおもな源泉はここでは「自立的な」（もちろん、自立的であるかに見える）小経営であるからである。最後に、上級のグループは、分与地をもつ雇農や日雇いおよびあらゆる賃金労働者一般を

多少とも大勢搾取している、富裕な小経営主である。

総数中のこれらのグループのおおよその割合は、五〇%、三〇%、二〇%である。さきにはわれわれはいつも、戸数または経営数の割合をとってきた。今度は人口の割合をとろう。このように変えると、下級のグループは増大し、上級のグループは減少する。しかし、まさにこのような変化が、過去一〇年のあいだにロシアで疑いもなく起こったのであって、このことについては、農民が馬を失って零落したこと、村々で貧窮と失業が増大したこと、等々が議論の余地なく証明している。

つまり農業人口のうち、約四八五〇万人はプロレタリア的および半プロレタリア的人口、約二九一〇万人はきわめて貧しい小経営主とその家族、そして約一九四〇万人は富裕な小経営の人口、ということになる。

つぎに、商工業人口と非生産的人口をどのように分けるかという問題が生ずる。後者のなかには明らかに大ブルジョア的な人口要素、すなわち、すべての金利生活者（「資本および不動産からの収入で生活するもの」——わが国の統計では第一四グループの第一部類——九〇万人）、つぎにブルジョア・インテリゲンツィアの一部、文武の高官、等々がある。ここにはいるのは全部で約一五〇万人である。同じ非生産的人口のなかの他の極には、陸軍、海軍、憲兵隊、警察の下級官（約一三〇万人）、召使と多数の使用人（合計五〇万人以下）、五〇万人に近い乞食、浮浪者、等々がいる。ここでは基本的な経済的型に最も近いグループを、おおよそふりわけることしかできない。すなわち、約二〇〇万人はプロレタリアおよび半プロレタリア人口部分的にはルンペン）に、約一九〇万人はきわめて貧しい小経営主に、そして約一五〇万人は、職員、管理職員、ブルジョア・インテリゲンツィア、等々の大半をふくめて、富裕な小経営主に。

最後に、商工業人口のうちでは疑いもなくプロレタリアートが最も多く、プロレタリアートと大ブルジョアジーのあいだの溝は最も深い。しかし、人口調査は商工業人口を経営主、個人営業者、労働者等々へふりわける資料をまったくあたえていない。生産における地位によって分類したペテルブルグの工業人口にかんする前掲の資料を、見本としてとりあげるほかないことになる。この資料にもとづいて、約七%は大ブルジョアジーに、一〇%は富裕な経営主に、二二%はきわめて貧しい小経営主に、そして六一%はプロレタリアートに、おおよそ入れることができる。ロシア全体では、工業における小規模生産は、もちろん、ペテルブルグよりもずっとさかんであるが、そのかわりわれわれは、経営主のために自分の家で仕事をする個人営業者や

〔第 98 表〕

男女総人口	(単位 100 万人)
大ブルジョアジー，地主，高級官僚その他	約　3.0
富裕な小経営主	約　23.1
極貧の小経営主	約　35.8
プロレタリアート*および半プロレタリアート	約　63.7
総計	約　125.6

* 彼らは2200万人以下ではない．下記を見よ．

クスターリの大群を、半プロレタリア的人口には入れていない。したがって、全体としては、右の比率はおそらく実際と大差がないであろう。こうして商工業人口について、約一五〇万人のブルジョアジー、約二二〇万人の富裕な小生産者、約四八〇万人の貧困な小生産者約一三二〇万人のプロレタリア的および半プロレタリア的住民層が得られる。

農業人口、商工業人口および非生産的人口をまとめると、ロシアの総人口について、階級的地位による次のようなおおよその分類が得られる。〔第九八表〕

われわれは、わが国のカデット的およびカデット化しつつある経済学者や政治家の側から、ロシアの経済をこのように「単純化」することに反対して憤激の声があがるであろうことを疑わない。こまごました分析で経済的諸矛盾の深さを塗りつぶし、同時にこれらの矛盾の全体にたいする社会主義的見解の「粗雑さ」に苦情をいうとは、なんと好都合で、なんと有利なことではないか。われわれが到達した結論にたいするこの種の批判は、いうまでもなく、科学的意味をもたない。

あれこれの数字の近似の程度については、もちろん部分的な意見の不一致がありうる。この観点から、ロシツキー氏の労作『一八九七年の国勢調査によるロシアの人口にかんする試論』(『ミール・ボージー』、一九〇五年、第八号)を指摘するのは、興味深いことである。著者は、労働者と召使の数にかんする人口調査の第一次資料を利用した。彼はこの資料によって、ロシアのプロレタリア人口を二二〇〇万人、農民および地主人口を八〇〇〇万人、商工業の経営主と職員を約一二〇〇万人、非営業人口を約一二〇〇万人と算定した。

この資料によると、プロレタリアートの数はわれわれの

結論にごく近い。* 「賃仕事」に依存する貧農やクスターリのなかの膨大な数の半プロレタリア人口を否定することは、ロシアの経済にかんするすべての資料を愚弄することを意味するだろう。ヨーロッパ・ロシアだけで馬をもたない農家が三二五万戸、馬一頭をもつ農家が三四〇万戸あること、また、小作、「賃仕事」、家計、その他についてのゼムストヴォ統計の情報全体のことを思いだしてみさえすれば、半プロレタリア人口の膨大な数に疑いをさしはさむことはできないであろう。プロレタリアおよび半プロレタリア人口を合わせると、農民の半分になるとみなすことは、おそらく、その数を過小評価することになっても、けっして過大評価することにはならない。だが、農業人口以外では、プロレタリアおよび半プロレタリア階層のパーセントは無条件にもっと高い。

* ここは、ロシッキー氏が利用している労働者と召使の統計にかんしてくわしく立ちいるべき場所ではない。この統計は、どう見ても労働者数をいちじるしく過小評価する誤りをおかしている。

さらに、もしまとまった経済的絵図をばらばらにしてしまうことを欲しないなら、商工業の管理職、職員、ブルジョア・インテリゲンツィア、官吏、等々のかなりの部分を、富裕な小経営主に入れる必要がある。ここでわれわれは、おそらく過度に慎重な態度をとって、この人口数をあまりにも過大に算定しすぎたかもしれない。きわめて貧しい小経営主の数をふやし、富裕な小経営主の数をへらすべきであったろうということも、十分ありうることである。だがこの種の区分は、もちろん、無条件の統計的正確さを僭望するものではない。

統計は全面的分析によって確認された社会経済関係を例証しなければならないのであって、わが国であまりにもしばしば見られるように、自己目的に転化されてはならない。ロシアの人口において小ブルジョア層が多数であることを塗りつぶすのは、わが国の経済的現実の絵図をまったく変造することを意味するであろう。

六　蒸気発動機統計

生産への蒸気発動機の応用は、機械制大工業の最も特徴的な標識の一つである。だから、この問題について手もとにある資料を考察するのは、興味あることである。一八七五―一八七八年の蒸気発動機数は、『ロシア帝国における蒸気発動機統計のための材料』（サンクト-ペテルブルグ、一八八二年、中央統計委員会刊行）がつたえている。* 一八九二年については、すべての工場工業と鉱業を包括する

〔第 99 表〕 産業における蒸気発動機数

	1875—1878年			1892年		
	ボイラー	蒸気機関	馬力	ボイラー	蒸気機関	馬力
ヨーロッパ・ロシア（50県）	7,224	5,440	98,888	11,272	10,458	256,469
ポーランド	1,071	787	14,480	2,328	1,978	81,346
カフカーズ	115	51	583	514	514	5,283
シベリアおよびトゥルケスタン	100	75	1,026	134	135	2,111
帝国総計	8,510	6,353	114,977	14,248	13,085	345,209

『工場工業資料集成』の数字がある。次にこれらの資料の比較をしよう。〔第九九表〕

＊一八九二年との比較のために、一三のグループの生産業のなかから、第一（農業）、第一二（活版および石版印刷業）、第一三（「水道」その他）のグループを除く。移動発動機は蒸気機関といっしょにかぞえられている。

一六年間に、蒸気発動機数は、馬力についてみると、ロシアでは三倍に、ヨーロッパ・ロシアでは二倍半に、増加した。だから蒸気機関数の増大の規模は、これより小さかった。ヨーロッパ・ロシアで一台の平均馬力は、一八馬力から二四馬力へ、またロシア領ポーランドでは一八馬力から四一馬力へと、いちじるしく高まった。したがって、機械制大工業は所与の期間に非常に急速に発展したわけである。一八七五—一八七八年には、蒸気機関の馬力数が次の諸県が他の県よりもすすんでいた。サンクト・ペテルブルグ県（一七、八〇八馬力）、モスクワ県（一三、六六八馬力）、キエフ県（八、三六三馬力）、ペルミ県（七、三四八馬力）、ウラヂーミル県（五、六八四馬力）、——これら五県で総計五二、八七一馬力、ヨーロッパ・ロシアの総数の約五分の三であった、——ついでポドリスク県（五、四八〇馬力）、ペトロコフ県（五、〇七一馬力）、ワルシャワ県（四、七六〇馬力）である。一八九二年にはこの順序は変化している。すなわち、ペトロコフ県（五九、〇六三馬力）、サンクト・ペテルブルグ県（四三、九六一馬力）、エカテリノスラフ県（二七、八三九馬力）、モスクワ県（二四、七〇四馬力）、ウラヂーミル県（一五、八五七馬力）、キエフ県（一四、二一一馬力）——あとの五県で一二六、五七二馬力、すなわちヨーロッパ・ロシアの総数のほとんど二分の一——ついでワルシャワ県（一一、三一〇馬力）とペルミ県（一一、二四五馬力）

である。これらの数字は、二つの新しい工業中心地の形成――すなわち、ポーランドと南部における――を明瞭にしめしている。ペトロコフ県では蒸気機関の馬力数は一一・六倍に増大したし、エカテリノスラフとドンの両県では合わせて二、八三四馬力から三九、三二一馬力に、すなわち一〇・九倍に増大した。*これほども急速に成長したこれらの工業中心地は、最下位から最上位に移って古い工業中心地を押しのけた。これらの資料にもとづいても、生産的消費の対象を製造する工業、すなわち鉱業と冶金工業のとくに急速な成長が明らかになることを、指摘しておこう。一八七五―一八七八年には、これらの工業で一、〇四〇台、二二、九六六馬力の蒸気機関が使用されたが（ヨーロッパ・ロシアで）、一八九〇年には一、九六〇台、七四、二〇四馬力の蒸気機関が使用された。すなわち、一四年間の増加は、工業全体における一六年間の蒸気発動機総数の増加よりも大きい。生産手段を製造する工業は、工業全体のますます大きな部分を占めつつある。**

* これらの県といっしょにするのは、一八七八年以後のそれらの境界の変化を考慮してである。

** 一八九二年以後のロシアにおける蒸気発動機の応用がどんなに大きく前進したかは、一九〇四年には、工場監督官報告によれば、六四県で二七、五七九台の工場用ボイラーがかぞえられ、農業用を除いて、全部で三一、八八七台のボイラーがかぞえられたことからわかる（第二版の注）。

七　大工場の成長

さきに説明したわが国の工場統計資料の不満足な状態のため、われわれは、農民改革後にロシアで機械制大工業がどのように発展したかを規定するのに、より複雑な計算にたよることをよぎなくされた。われわれは、最大級の工場、すなわち一〇〇人以上の事業内労働者をもつ工場にかんする、一八六六年、一八七九年、一八九〇年および一八九四年／九五年の資料を抜きだした。*外部の労働者が厳密に区別してあるのは、一八九四／九五年の『工場一覧表』の資料だけである。だから、それ以前の年度については（とくに一八六六年と一八七九年）、注で述べた修正にもかかわらず、資料がやはりいくぶん誇張されているということも、ありうることとである。

* 典拠は次のとおり。『大蔵省年報』、第一冊（七一の生産業のみにかぎっての資料）、『工場案内』、第一版と第三版。『工場一覧表』と同様すべての生産にかんする資料。しかし、『一覧表』と『案内』の資料を比較するためには、後者の表にはいっている生産業からレール製造業を控除しなければな

〔第 100 表〕ヨーロッパ・ロシアの最大級の工場

工場グループ（労働者数別）	1866年				1879年				1890年				1894／95年			
	工場数		労働者数	生産額（〇〇〇ルーブリ）	工場数		労働者数	生産額（〇〇〇ルーブリ）	工場数		労働者数	生産額（〇〇〇ルーブリ）	工場数		労働者数	生産額（〇〇〇ルーブリ）
	総数	それらのうち蒸気発動機をもつもの			総数	それらのうち蒸気発動機をもつもの			総数	それらのうち蒸気発動機をもつもの			総数	それらのうち蒸気発動機をもつもの		
A）労働者100—499人のもの	512	204	109,061	99,830	641	354	141,727	201,542	712	455	156,699	186,289				
B）〃 500—999人 〃	90	68	59,867	48,359	130	119	91,887	117,830	140	140	94,305	148,546				
C）〃 1000人以上 〃	42	35	62,801	52,877	81	76	156,760	170,533	99	99	213,333	253,130				
総計*	644	307	231,729	201,066	852	549	390,374	489,905	951	694	464,337	587,965				
A）労働者100—499人のもの					981	534	219,735	289,006	1,133	769	252,656	355,258				
B）〃 500—999人 〃					166	145	115,586	142,648	183	183	121,553	190,265				
C）〃 1000人以上 〃					91	83	174,322	198,272	115	115	248,937	313,065				
総計**					1,238	762	509,643	629,926	1,431	1,067	623,146	858,588				
A）労働者100—499人のもの					979	532	219,436	288,759	1,131	767	252,063	352,526	1,136	935	252,676	374,444
B）〃 500—999人 〃					164	144	113,936	140,791	182	182	120,936	186,115	215	212	143,453	229,363
C）〃 1000人以上 〃					86	78	163,044	177,537	108	108	226,207	276,512	117	117	259,541	351,426
総計***					1,229	754	496,416	607,087	1,421	1,057	599,206	815,153	1,468	1,264	655,670	955,233

* 1866年，1879年，1890年の資料は，1866年度の情報のある71の生産業にかんするもの．
** 1879年，1890年の資料は，内国消費税を課されるものも課されないものもふくむ，すべての生産業にかんするもの．
*** 1879年，1890年，1894／95年の資料は，レール製造業（鋳鋼）を除くすべての生産業にかんするもの．

らない。工場労働者数に家内労働者がふくまれている事業所は、除外した。家内労働者がこのようにふくまれていることは、ときには前掲の刊行物の注に直接ことわってあることもあれば、ときにはちがう年度について資料の対比から明らかになることもある。たとえば、一八七九年、一八九〇年および一八九四／九五年のサラトフ県の綿織物業にかんする資料を参照。(第六章、第二節一を参照)――シンツハイマー(『ドイツにおける大規模工場生産の展開の限界について』、シュトゥットガルト、一八九三年)は、五〇人以上の労働者をもつものを大規模工場企業に入れている。この基準はけっして低いとはおもえないが、ロシアの資料の計算が困難なことを考慮して、最大級の工場だけに限定せざるをえなかった。

これらの最大級の工場にかんする情報をあげよう。〔第一〇〇表〕

この表の分析を、一八六六年—一八七九年—一八九〇年の資料からはじめよう。大工場の総数はこれらの年次について次のように変化した。六四四—八五二—九五一、あるいはパーセントは一〇〇—一三二—一四七。したがって、二四年間に大工場の数はほとんど一倍半に増加したわけである。そのさい、大工場の個々の部類にかんする資料をとると、工場が大きければ大きいほどその数はいっそう急速に増加していることがわかる。(A、五一二—六四一—七一二工場、B、九〇—一三〇—一四〇工場、C、四二—八一—九九工場)。このことは生産の集積の成長をしめすものである。

機械制事業所の数は工場総数よりも急速に増加している。パーセントでは一〇〇—一七八—二二六である。ますます多数の大きな事業所が蒸気発動機の使用に移っている。工場が大きければ大きいほど、そのうちの機械制事業所はそれだけ多い。所与の部類の工場総数にたいするこれらの事業所のパーセントを計算すると、次のような数字が得られる。(A)三九%—五三%—六三%、(B)七五%—九一%—一〇〇%、(C)八三%—九四%—一〇〇%。蒸気発動機の使用は、生産規模の拡大、生産における協業の拡大と密接に結びついている。

大工場全体における労働者数はパーセントで次のように変化した。一〇〇—一六八—二〇〇。二四年間に労働者数は二倍になった。すなわち、「工場労働者」総数の増大よりも早くすすんだ。大工場一つあたりの平均労働者数は、年次別では三五九—四五八—四八八人、部類別では、(A)二二三—二二一—二二〇人、(B)六六五—七〇六—六七三人、(C)一、四九五—一、九三五—二、一五四人であった。したがって、最大級の工場は労働者のますます多くの部分を集中しつつあるわけである。一八六六年には、一、〇〇〇人以上の労働者のいる工場に大工場の労働者総数は二七%

〔第 101 表〕

工場事業所のグループ	ロシアの64県		ヨーロッパ・ロシアの50県	
	事業所数	労働者数	事業所数	労働者数
労働者20人以下	5,749	63,652	4,533	51,728
〃 21—50人	5,064	158,602	4,253	134,194
〃 51—100人	2,271	156,789	1,897	130,642
〃 101—500人	2,095	463,366	1,755	383,000
〃 501—1000人	404	276,486	349	240,440
〃 1001人以上	238	521,511	210	457,534
合計	15,821	1,640,406	12,997	1,397,538

いたが、一八七九年には四〇%、一八九〇年には四六%であった。

大工場全体の生産額の変化はパーセントであらわすと、一〇〇―二四三―二九二である。部類別では、(A)一〇〇―二〇一―一八七、(B)一〇〇―二四五―三〇八、(C)一〇〇―三二三―四七九。したがって、大工場全体の生産額はほとんど三倍に増加し、そのさい工場が大きければ大きいほど、この増加はいっそう急速だったわけである。しかし、種々の部類別に個々の年度の労働生産性を比較してみると、いくらか別のことがわかる。大工場全体の労働者一人あたりの生産額の平均的な大きさは八六六―一、二五〇―一、二六〇ルーブリ、部類別では、(A)九〇一―一、四一〇―一、一九一ルーブリ、(B)八〇〇―一、二八二―一、五七四ルーブリ、(C)八四二―一、〇八二―一、一八八ルーブリとなる。したがって、個々の年度については、下級の部類から上級の部類にすすむにつれて生産額(労働者一人あたり)が上昇するということは、見られない。こうなるのは、異なる部類のなかには、原料の価額がちがい、したがって労働者一人あたりの年間生産高がちがうさまざまな生産業の工場が、不均等な比率ではいっているためである。*

* たとえば、一八六六年については、部類Aには一七の精糖工場がはいっており、そこでは労働者一人あたりの年間生産高は約六、〇〇〇ルーブリであったが、他方、繊維工場(最上級の部類にはいっている)では、労働者一人あたりの年間生産高は五〇〇―一、五〇〇ルーブリであった。

一八七九―一八九〇年と一八七九―一八九〇―一八九四/九五年の資料を、同じように詳細に検討することはよ

けいなことであるとおもう。なぜなら、それは右に述べたすべてのことを、いくぶん異なる百分率で繰りかえすことになるだろうからである。

近年は『工場監督官報告集成』のなかに、労働者数による工場のグループ分けにかんする資料があげられている。次に一九〇三年のこれらの資料をしめそう。〔第一〇一表〕

この資料は若干の不正確さを許容しさえすれば、さきにあげた資料と比較することができる。しかもそれはとるにたりない不正確さである。いずれにしても、この資料は、大きな（労働者九九人以上あるいは一〇〇人以上の）工場数とその労働者数が急速に増加していることをしめしている。また、これらの大工場のうちの最大級の工場における労働者の——したがってまた生産の——集積も、増加している(九七)。

大工場にかんする資料をわが国の官庁統計の全「工場」にかんする資料と対比してみると、一八七九年に「工場」総数の四・四％を占める大工場が、工場労働者総数の六六・八％と総生産額の五四・八％を集中していたことがわかる。一八九〇年には、大工場は「工場」総数の六・七％を占め、工場労働者総数の七一・一％と総生産額の五七・二％を集中していた。一八九四／九五年には、大工場は「工場」総数の一〇・一％を占め、工場労働者総数の七四％と総生産額の七〇・八％を集中していた。一九〇三年には、一〇〇人以上の労働者をもつ大工場は、ヨーロッパ・ロシアで工場総数の一七％を占め、工場労働者総数の七六・六％を集中していた。* このように、大きな、主として蒸気力の工場は、その数はわずかであるにもかかわらず、全「工場」の労働者数と生産額の圧倒的でますます増大する部分を集中している。農民改革後の時代にこれらの大工場がどんなにすさまじい速度で成長しているかは、すでに見たところである。今度はさらに、鉱業における同様の大企業にかんする資料をあげよう。** 〔第一〇二表〕

* 『工場案内』および『一覧表』によるわが国の工場工業の総括的資料は、さきに第二節で引用した（『試論』、二七六ページ(九八)を参照）。「工場」総数にたいする大工場の百分率の増大は、なによりもまず、わが国の統計における工場概念がしだいに狭まってきたことをしめしている。

** 資料は『一八九〇年鉱山・冶金業統計報告集』から計算したが、そのさい『工場案内』にはいっている工場は除外した。この除外によって、ヨーロッパ・ロシアの鉱業労働者の総計は三五、〇〇〇人だけ減少する（340−35=305千人）。

鉱業では、大企業における労働者の集積はさらに激しく（蒸気発動機を生産に使用する企業のパーセントはより低いのに）、三〇五、〇〇〇人の労働者のうち二五八、〇〇〇人が、すなわち鉱業労働者の八四・五％が、一〇〇人以上

〔第 102 表〕 1890年におけるヨーロッパ・ロシアの最大級の工業企業

工場・鉱山・炭鉱その他のグループ（労働者数別）	鉱業			工場工業と鉱業		
	企業数		労働者数	企業数		労働者数
	総数	そのうち蒸気発動機をもつもの		総数	そのうち蒸気発動機をもつもの	
A）労働者100―499人をもつもの	236	89	58, 249	1, 369	858	310, 906
B） 〃 500―999人 〃	73	38	50, 607	256	221	172, 160
C） 〃 1000人以上 〃	71	49	149, 098	186	164	398, 035
総計	380	176	257, 954	1, 811	1, 243	881, 101

の労働者数のいる企業に集中されており、鉱業労働者のほとんど半数が（三〇五、〇〇〇人のうちの一四五、〇〇〇人）、一、〇〇〇人以上の労働者をもつ少数の最大級の工場ではたらいてる。ヨーロッパ・ロシアの工場および鉱業労働者総数（一八九〇年に一一八万人）のうち、四分の三（七四・六％）が一〇〇人以上の労働者をもつ企業に集中されており、約半数（一一八万人のうちの五七万人）が五〇〇人以上の労働者をもつ企業に集中されている。*

* 一八九五年のドイツの工業調査では、ロシアでは記録されていない建設用土石採取業をふくめて、全工業で一、〇〇〇人以上の労働者のいる事業所は二四八あった。またこれらの事業所の労働者は四三〇、二八六人であった。したがって、ロシアの最大級の工場はドイツのよりも大きいわけである。

ここでニコライ―オン氏が提起した問題、すなわち、一八八〇―一八九〇年の時期には、一八六五―一八八〇年の時期にくらべて、資本主義の発展と「工場人口」の成長が「緩慢化」したという問題にふれるのは、よけいなことではないと考える。* この注目すべき発見から、ニコライ―オン氏は彼独特の論理をもちいて、「資本主義はその発展の一定の限界に達するとみずからの国内市場を狭める」という、『概要』のなかで開陳された主張を、「諸事実が完全に確認している」という結論をくだしたのである。――第一に、「増加の緩慢化」から国内市場の縮小を結論することは、乱暴である。工場労働者数が人口よりも急速に増加しているなら（これはニコライ―オン氏自身の資料によってもまさにそうなのであって、一八八〇年から一八九〇年ま

での増大は二五％）、人口は農業から流出しており、国内市場は個人消費資料にたいしても成長していることを意味する。（生産手段の市場についてはいうまでもない。）第二に、パーセントで現わされた「増加の減少」は、資本主義国では一定の発展段階でつねにおこらないわけにはいかない。というのは、小さな数量は大きな数量よりもパーセントではつねに急速に増加するからである。資本主義の発展の最初の歩みはとくに急速であるという事実から引きだすことができる結論は、若い国がより古い国に追いつこうと努力する、ということだけである。初期の増加のパーセントをその後の時期の基準としてとりあげることは、まちがっている。第三に、「増加の減少」という事実自体が、ニコライ―オン氏のとりあげた時期の比較によってはけっして証明されない。資本主義工業の発展は周期的にでなければすすみえない。だから、種々の時期を比較するためには何年もの期間の資料をとり、** 特別な繁栄と高揚の年と衰退の年とを明確に区別することが必要である。これをしなかったため、ニコライ―オン氏は大きな誤りにおちいって、一八八〇年が特別の高揚の年であったことに気づかなかったのである。それどころか、ニコライ―オン氏は反対の主張を「編みだす」ことさえはばからなかった。彼はこう論じている。「さらに次のことを注意しなければならない。すなわち、中間の」（一八六五年と一八九〇年のあいだの）「一八八〇年が凶作の年であって、だからこの年に記録された労働者数は通常の年よりも少なかった」!!（前掲書、一〇三―一〇四ページ）。ニコライ―オン氏は、自分が一八八〇年の数字を引きだした当の刊行物（『工場案内』、第三版）の本文を一読すればよかったのだ。そうすれば、彼はそこで、一八八〇年が工業、とくに皮革製造業と機械製作業の「飛躍」という特徴をもつこと（序文四ページ）、これは戦後の製造品にたいする需要の増大と政府の発注の増加によるものであったことを、読みとれたであろう。この飛躍の規模をはっきり心にえがくためには、一八七九年度の『工場案内』のページをめくってみるだけで十分である。*** しかしニコライ―オン氏は、自分のロマンチックな理論にあうように事実をまったく歪曲することをも辞さないのである。

*『ルースコエ・ボガーツトヴォ』、一八九四年、第六号、一〇一ページ以下。われわれが引用した大工場にかんする資料はまた、増大のパーセントが、一八七九―一八九〇年には一八六六―一八七九年にくらべて小さいことを、証明している。

** たとえば、トゥガン－バラノフスキー氏がその著『ロシアの工場』、三〇七ページおよび図表のなかでしたように、図表によると、一八七九年は、また一八八〇年と一八八一年はなおさら、特別の高揚の年であったことが明白にわかる。

*** たとえば、以下を参照。ラシャ製造業では軍隊用ラシャの製造の強化、皮革製造業では非常な活況。皮革製品については、大工場は「陸軍省用に」二五〇万ルーブリを生産（二八八ページ）。イジェフスク工場とセストロレツク工場は、一八九〇年の一二五万ルーブリにたいして七五〇万ルーブリの砲兵用製品を生産。製銅業は軍隊と兵器用の製品の生産が注意をひく（三八八―三九〇ページ）。火薬工場はフル操業している、等々。

八　大工業の配置

機械制大工業の特徴づけのためには、最大級の事業所における生産の集積の問題のほかに、さらに工場工業の個々の中心地における生産の集積と、工場中心地の種々の型の問題が、重要である。残念ながら、わが国の工場統計は、不満足で比較不能な材料をあたえているだけでなく、材料の処理の仕方がきわめて不十分である。たとえば、現在の刊行物では工業の配置は全県ごとにしめしてあるにすぎない（都市および郡別にではなく。工場工業の配置をも地図でしめしてある六〇年代の最もすぐれた刊行物はそうしているのだが）。しかし、大工業の配置にかんする正確な配置をあたえるためには、個々の中心地別に、すなわち、個個の都市、工場町、あるいはたがいに近距離にある工場町のグループ別に、資料をとることが必要である。県あるいは郡は、地域的単位としてはあまりにも大きすぎる。* それでわれわれは、一八七九年と一八九〇年の『工場案内』から、最も重要な中心地におけるわが国の工場工業の集積にかんする資料を計算することが、必要であると考えた。付録にのせた表（付録III）には、工場労働者総数の約半分を集中しているヨーロッパ・ロシアの一〇三の工場中心地にかんする資料がはいっている。**

* 「……郡部（モスクワ県の）では工場ははなはだ不均等に分布している。すなわち、きわめて工業的な郡では、工場施設が多少ともいちじるしく密集していることから真に工場中心地とよぶことができる地方とならんで、およそ工場工業などほとんどないいくつもの郷があるし、――また反対に、一般に工場に乏しい郡において、あれこれの営業が多少ともいちじるしい程度に発展していて、しかもクスターリ小屋や作業部屋とならんで、大規模生産のすべての属性をもつより大きな事業所が発生したような地方がある」（『モスクワ県統計報告集』、衛生統計篇、第四巻、第一部、モスクワ、一八四〇年、一四一ページ）。現代の工場統計の文献中最良のものであるこの刊行物は、周到に作成された地図で大工業の配置を図示している。工場工業の配置の完全な絵図のためには、工場数、労働者数および生産額による中心地の分類だけでは十分ではない。

** 表には生産額二、〇〇〇ルーブリ以上の事業所だけ入れて

あり、そして製粉所は蒸気力製粉所だけ入れてある。外部労働者は、労働者数にふくめたことがしめしてある場合には除外した。このような除外には星印（*）をつけた。一八七九年の産業の高揚はこれらの資料にも現われないではおかなかった。

表はロシアの工業中心地の三つの主要な型をわれわれにしめしている。すなわち、（一）都市。それは第一位にあって、労働者と事業所との最大の集中を特徴としている。この点でとくに顕著なのは大都市である。一八九〇年に両首都は七万人の工場労働者を集中しており（首都の近郊もふくめて）、リガは一六、〇〇〇人、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクは一五、〇〇〇人、ボゴローツクは一万人、他の都市は一万人以下であった。若干の大都市における公式の工場労働者数を一瞥してみさえすれば（一八九〇年にオデッサ－八、六〇〇人、キエフ－六、〇〇〇人、ドン河畔ロストフ－五、七〇〇人、等々）、これらの数字が笑止なまでに小さいことを確信できる。さきにあげたサンクト－ペテルブルグの例は、この種の中心地の工業労働者総数を得るためには、これらの数字を何倍か拡大しなければならないであろう、ということをしめしている。都市とならんでまた近郊をもしめすことが必要である。大都市の近郊はしばしば大きな工業中心地をなしているが、われわれの資料ではこのような中心地を一つしか取りだすことができなかった。それはサンクト－ペテルブルグの近郊で、一八九〇年に一八、九〇〇人の労働者をかぞえた。われわれの表にはいっているモスクワ郡の若干の村落も本質的には近郊である。*

* 「モスクワ近郊の大きな村チェルキゾヴォは、土地の住民のことばによると、一大工場であって、文字どおりの意味で、モスクワの延長である。……すぐそばに、セミョーノフ関門のそとに……やはり多様な工場が多数ひしめいている。……ここからほど遠くないところに、いくつかの織物工場と巨大なイズマイロヴォ繊維工場のあるイズマイロヴォ村が見られる」。これはモスクワの北方である。南方には、「セルプホフ関門のそとに、われわれはまず、それ自体が一つの小都市の観のある巨大なダニーロフ繊維工場を見うける。……さらに、多数の大きな煉瓦工場がたがいに近接して環状にならんでいる」、等々（前掲『統計報告集』、第四巻、第一部、一四三－一四四ページ）。したがって、実際には工場工業の集中は、われわれの表であらわしえたよりも、もっといちじるしい。

中心地の第二の型は工場村で、とくにモスクワ、ウラヂーミルおよびコストロマの諸県に多い（われわれの表に入れた総数六三の最も重要な農村中心地のうち、四二がこれらの県にある）。これらの中心地の首位にあるのはオレホヴォ－ズーエヴォ町（表ではオレホヴォとズーエヴォが別別にしめしてあるが、これは単一の中心地である）であり、

それは労働者数で両首都に劣るだけである（一八九〇年に二六、八〇〇人）*。上記の三県では、そしてまたヤロスラヴリとトヴェーリの両県でも、農村の工場中心地の大多数を形成するのは最大級の繊維工場、（綿紡織工場、亜麻布工場、毛織物工場、その他）である。以前にはこれらの村には、ほとんどつねに前貸問屋、すなわち、周辺の多数の手機職人を従属させていた資本主義的マニュファクチュアの中心があった。統計が家内労働者と工場労働者を混同していない場合には、これら中心地の発展にかんする資料は、近在から何千人という農民をあつめてこれらの農民を工場労働者に転化させる機械制大工業の成長を、浮彫りにしめしてくれる。さらに、多数の農村工場中心地を形成するものに、大きな鉱業所と冶金工場がある（ボブロヴォ村コロムナ工場、ユーゾフカ工場、ブリャンスク工場、その他）。これらの中心地の大半は鉱業に関係しており、それゆえわれわれの表にははいっていない。西南部諸県の村や町にある甜菜糖工場もまた、少なからぬ農村工場中心地を形成している。例として、われわれはそれらのうち最大のものの一つであるキエフ県のスメラ町をとった。

＊　一八七九年にはここではわずか一〇、九〇〇人をかぞえたにすぎない。明らかに、異なる記録方法がもちいられたのである。

工場中心地の第三の型は「クスターリ」村で、そこの最大級の事業所は「工場」とみなされていることがまれでない。このような中心地の見本になるのは、われわれの表ではパヴロヴォ、ヴォルスマ、ボゴローツコエ、ドゥボフカの村々である。これら中心地の工場労働者数と全営業人口との比較は、さきにボゴローツコエ村についておこなった。[100]

われわれの表に入れた中心地を、各中心地の労働者数と中心地の種類（都市と農村）によって分類すると、次の資料が得られる。〔第一〇三表〕

この表から一八七九年には一〇三の中心地に三五万六〇〇〇人の労働者が集中していたが（総数七五万二〇〇〇人のうち）、一八九〇年には四五万一〇〇〇人が集中していた（八七万六〇〇〇人のうち）ことがわかる。したがって、労働者数は二六・八％増大したのにたいして、一般に大工場（一〇〇人以上の労働者のいる）では、増加は二二・二％にすぎず、また工場労働者数はこの期間に一六・五％しか増加しなかったわけである。このように、最大級の中心地への労働者の集結が起こっているのである。一八七九年に五、〇〇〇人以上の労働者のいる中心地は一一しかなかったが、一八九〇年にはすでに二一あった。とくに五、〇〇〇―一万人のいる中心地の数の増加が目につく。こうなったのは二つの原因からである。（一）南部における工場工

〔第 103 表〕　ヨーロッパ・ロシアにおける工場工業の最重要中心地

労働者数および中心地の種類による，中心地の部類	1879年						1890年					
	中心地数			工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数	中心地数			工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数
	都市	集落	合計				都市	集落	合計			
10,000人以上の労働者のいる中心地	4	1	5	1,393	279,398	158,670	6	1	7	1,644	361,371	206,862
5,000—10,000人の労働者のいる中心地	6	—	6	148	65,974	49,340	10	4	14	931	151,029	90,229
1,000—5,000人の労働者のいる中心地	22	37	59	1,029	174,171	133,712	17	48	65	804	186,422	144,255
1,000人以上の労働者のいる中心地総計	32	38	70	2,570	519,543	341,722	33	53	86	3,379	698,822	441,346
1,000人以下の労働者のいる中心地	8	20	28	260	17,144	14,055	6	10	16	259	8,159	9,898
労働者のいない中心地	—	5	5	1	—	—	1	—	1	—	—	—
合　計	40	63	103	2,831	536,687	355,777	40	63	103	3,638	706,981	451,244
都市（および近郊地）	40	—	40	2,574	421,310	257,181	40	—	40	3,327	535,085	298,651
集落（外郭地帯および町）	—	63	63	257	115,377	98,596	—	63	63	311	171,896	152,593

業のきわだった成長の結果として（オデッサ、ドン河畔ロストフ、その他）、（二）中央諸県における工場村の成長の結果としてである。

都市中心地と農村中心地を比較してみると、一八九〇年には後者が最重要中心地の労働者総数の約三分の一を占めていたことがわかる（四五万一〇〇〇人のうち一五万二〇

〇〇人)。ロシア全体についてはこの比率はもっと高いはずである。すなわち、工場労働者の三分の一以上が都市のそとにいるはずである。実際に、顕著な都市中心地はすべてわれわれの表にはいっているが、他方、数百人の労働者をもつ農村中心地は、われわれがあげたもの以外にまだ非常にたくさんある(ガラス工場、煉瓦工場、火酒製造工場、甜菜糖工場その他のある集落)。鉱業労働者もまた主として都市のそとにいる。だから、ヨーロッパ・ロシアの工場および鉱業労働者総数のうち少なくとも半分が(おそらくは、より以上が)、都市のそとにいると考えることができる。この結論は重要な意味をもっている。というのは、それは、ロシアの工業人口の大きさが都市人口をはるかに上まわることをしめしているからである。*

* 一八九七年一月二八日の国勢調査はこの結論を完全に裏書きした。帝国全体の都市人口は男女あわせて一六、八二八、三九五人と算定された。商工業人口は、われわれがさきにしめしたように、二一七〇万人であった(第二版の注)。

都市中心地と農村中心地における工場工業の発展速度の比較の問題に転ずると、この点では後者が無条件にまさっていることがわかる。われわれがとりあげた期間に、一、〇〇〇人以上の労働者のいる都市中心地の数の増加はきわめて微弱であったが(三二から三三へ)、同じような農村中心地は非常に大幅に増加した(三八から五三へ)。四〇の都市中心地における労働者数は一六・一%しか増加しなかったが(二五七、〇〇〇人から二九九、〇〇〇人へ)、六三の農村中心地では五四・七%増加した(九八、五〇〇人から一五二、五〇〇人へ)。都市中心地一つあたりの平均労働者数は六、四〇〇人から七、五〇〇人に上昇したにすぎないが、農村中心地一つあたりでは一、五〇〇人から二、四〇〇人に上昇した。このように、工場工業は、明白に、都市のそとでとくに急速にひろがってゆく傾向、すなわち、新しい工場中心地をつくりだしてそれらを都市中心地よりも急速に前進させる傾向、資本主義的大企業の世界から一見切りはなされているよう見みえる農村僻地に奥深くはいりこむ傾向を、もっているのである。この最高度に重要な事情は、第一に、機械制大工業がどのような速度で社会経済関係を改造するかを、われわれにしめしている。以前には何世紀もかけてできあがったものが、今日では一〇年そこそこで実現される。たとえば、前章でしめした「クスターリ村」、すなわち、ボゴローツコエ、パヴロヴォ、キムルイ、ホテイチ、ヴェリーコエその他のような非農業的中心地の形成と、何千という農村人口を一挙に工業町に吸引する現代的工場による新しい中心地の創出過程とを、比較してみればよい。* 社会的分業は巨大な衝撃を受ける。以前の定住

性と閉鎖性とにかわって、人口の移動性が経済生活の必要条件となる。第二に、工場が農村へ移ってゆくことは、資本主義が、農民共同体の身分的閉鎖性のつくりだす障害を克服して、この閉鎖性から自己のために利益さえ引きだすことをしめしている。農村における工場の設立には少なからぬ不便があるにしても、そのかわりそれは安い労働者を保障する。百姓を工場に入れるのではなく、――工場が百姓のところに出かけてゆくのである。** 百姓は（連帯責任と共同体からの脱退の制限のため）最も有利な雇い主を探す完全な自由をもたないが、雇い主は最も安い労働者を見つけることがみごとにできるのである。第三に、いちじるしい数の農村工場中心地とそれらの急速な成長とは、ロシアの工場が農民大衆から切りはなされているとか、農民大衆におよぼす影響が弱いとかいう見解が、どんなに根拠のないものであるかをしめしている。それどころか、わが国の工場工業の配置の特性は、その影響が非常に広範なこと、そしてそれがけっして事業所の内部にかぎられはしないことを、しめしている。*** しかし他方では、わが国の工場工業の配置の前記の特性は、機械制大工業がそこにやとわれている人口におよぼす改造作用の一時的停滞という方向にも、影響しないわけにはいかない。僻地の百姓を一挙に労働者に転化させることによって、工場はしばらくのあいだは、最も安く、最も未成熟で、最も要求の少ない「働き手」を確保することができる。しかし、この種の停滞は短期間のものでしかありえないこと、またその停滞の代償として、機械制大工業の影響が現われる分野のいっそうの拡大が生じることは、明白である。

* 「クリヴォイ・ローグ町では、人口は一八八七年から一八九六年までのあいだに六、〇〇〇人から一七、〇〇〇人に増加した。ドニエプロフスク会社のカーメンカ工場では二、〇〇〇人から一八、〇〇〇人に増加した。一八九二年にはまだ停車場の建物しかなかったドルジコフカ停車場の付近に、現在では六、〇〇〇人の町ができた。グダンツェフカ工場には約三、五〇〇人がいる。コンスタンチノフカ停車場付近には多数の工場が建って、新しい居住地ができつつある。ユーゾフカには二九、〇〇〇人の人口をもつ大都市ができた。……エカテリノスラフ近郊のニジネードニエプロフスクでは、荒れはてた砂地の場所にいまでは一連の工場があり、六、〇〇〇人の新しい居住地ができた。マリウポリの工場は一万人の新しい居住地を吸引しつつある、等々。炭鉱では居住中心地ができつつある」（『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年、第五〇号）。『ルースキエ・ヴェードモスチ』（一八九七年、第三二二号、一一月二一日付）の報道によると、バフムト郡のゼムストヴォ会議は、一、〇〇〇人の人口をもつ商業集落を町に、五、〇〇〇人の人口を市に改編することを請願している。……「われわれのところでは商業的および工場的居住地の無類の成長が見うけられる……純粋に

アメリカ的速度で発生し成長しつつある居住地が、全部ですでに三〇をかぞえる……ヴォルィンツェヴォでは、二つの熔鉱炉、鋳鋼およびレール圧延工場をもつ巨大な冶金工場が建設されており、一一月はじめには操業を開始することになっているが、そこでは五、〇〇〇人―六、〇〇〇人の人口をかぞえ、それがついこのあいだまではほとんど人影を見ない草原だった土地を、家屋で埋めている。労働者人口の流入にともなって、ありとあらゆる商品を彼らに手軽にさっさと売りさばくことをめあてにした商人、手工業者、一般に小工業者の流入も見うけられる」。

** 「工場は安い機織工を求め、それを郷里の村で見いだす。工場は機織工のあとを追っていかなければならない」(『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、六三ページ)。

*** エカテリノスラフ県バフムート郡の鉱業がその土地の農業制度におよぼす影響という、さきに引用した事実(第三章、第四節、一四六ページ〔本訳書、一八五―一八六ページ〕、注)を想起しよう。工場によって住民が「堕落」するという土地所有者たちの通例の苦情も特徴的である。

九　木材産業と建設業の発展

機械制大工業の成長の不可欠の条件の一つ(そしてその成長のきわめて特徴的な随伴物)は、燃料と建設材料をあたえる工業および建設業の発展である。木材産業からはじめよう。

木材の伐採と自家消費のための第一次加工は、ほとんどどこでも農耕者の仕事の一般的範囲にはいる、農民の太古以来の生業である。しかしわれわれが木材産業というのは、もっぱら販売のための木材の製造のことである。農民改革後の時代はこの産業がとくに成長したことを特徴としており、木材にたいする需要は、個人的消費の対象としても(都市の成長、農村における非農業人口の増加、農民解放のさいの農民の森林喪失)、またとくに生産的消費の対象としても、急速に増大した。商業、工業、都市生活、軍事、鉄道、その他等々の発展――すべてこれらは、人々によるのではなく資本による消費のための木材にたいする需要を大きく増大させた。たとえば、工業県では薪の価格は「日ごとにではなく、時間ごとに」騰貴した。「最近の五年間に」(一八九一年にいたる)「薪の価格は二倍以上になった」*。「木材の価格は巨大な足どりで騰貴しはじめた」**。コストロマ県では、「工場が薪を大量につかうため、薪の価格は七年間に二倍に高騰した」***、等々。国外への商品木材の出荷は、一八五六年の五九四万七〇〇〇ルーブリから、一八八一年の三〇一五万三〇〇〇ルーブリおよび一八九四年の三九二〇万ルーブリに上昇し、すなわち比率では一〇〇―五〇七―六五九と増加した****。ヨーロッパ・ロシアの国内水路

によって輸送された建設用木材と薪は、一八六六—一八六八年には年平均一億五六〇〇万プード、† 一八八八—一八九〇年には年平均七億〇一〇〇万プードで、†* すなわち輸送量は四倍以上に増加した。鉄道で輸送されたのは、一八八八—一八九〇年には平均二億九〇〇〇万プードであったが、†** それにたいして一八六六—一八六八年にはおそらく七〇〇〇万プード以上ではなかった。†*** すなわち、商品木材の総輸送額は、六〇年代には約二億二六〇〇万プードであったが、一八八八—一八九〇年には九億九一〇〇万プードで、これは四倍以上の増加になる。ほかならぬ農民改革後の時代における木材産業の巨大な成長は、このように疑問の余地がない。

* 『ウラヂーミル県の営業』、第一冊、六一ページ。
** 前掲書、第四冊、八〇ページ。
*** ジバンコフ『人口の運動にたいする出稼ぎの影響』、コストロマ、一八八七年、二五ページ。
**** 『生産力』、ロシアの外国貿易、三九ページ。一九〇二年の木材輸出は五五七〇万ルーブリ、一九〇三年には六六三〇万ルーブリ（第二版の注）。
† 『陸軍統計集』、四八六—四八七ページ。
†* 『鉄道および国内水路の統計的概観』、サンクト・ペテルブルグ、一八九三年（交通省刊行）、四〇ページ。
†** 前掲書、二六ページ。
†*** 大体のところ、全鉄道貨物の約五分の一と仮定して（『陸軍統計集』、五一一ページ。なお五一八—五一九ページを参照）。

この産業の組織はどのようなものか？　純粋に資本主義的である。木材は、企業家——伐採、木材の鋸挽き、その筏流しなどのために労働者をやとっている「木材業者」が、土地所有者のもとで買いつける。たとえば、モスクワ県では、ゼムストヴォ統計は木材業に従事する二四、〇〇〇人の農民のうちに、わずか三三七人の木材業者をかぞえたにすぎない。* ヴャトカ県スロボツコイ郡では一二三人の木材業者がかぞえられたが（「小木材業者は大部分が大木材業者の下請をやっており」、後者はわずか一〇人である）、木材業に従事する労働者は一八、八六五人、その賃金は労働者一人あたり一九ルーブリ半である。** エス・コロレンコ氏は、ヨーロッパ・ロシア全体で二〇〇万人におよぶ農民が木材労働に従事していると計算したが、*** この数は、たとえば、ヴャトカ県の九郡（一一のうち）で約五六、四三〇人の木材労働者を、コストロマ県全体では約四七、〇〇〇人をかぞえているのだから、**** おそらく誇張されていないであろう。木材労働は最も賃金支払いの悪いものに属し、その衛生条件は嫌悪をもよおすほどであり、労働者の健康は最もひどい破壊にさらされている。森の奥深くに打ちすてら

れた労働者の状態は最も保護の薄いものであって、この産業部門では、債務奴隷制、トラック－システムその他の「家父長制的」農民的営業の随伴物が、力のかぎり支配している。この特徴づけを確認するために、現地の調査員たちの意見をいくつか引用しよう。モスクワの統計家は、「食料品をよぎなく掛買いする」ため木材労働者の賃金がふつういちじるしく引きさげられることを、指摘している。コストロマの木材労働者は、「森林では急いで粗末に建てられた小屋のなかで組合(アルテリ)をつくって生活するが、その小屋には暖炉がなく、彼らはかまどで暖をとる。粗悪な副食と一週間で石と化してしまったパンとからなる粗悪な食物、嫌悪をもよおす空気……いつも半乾きの衣服……これらすべては木材業者の健康に破滅的な影響をおよぼさずにおかない」。「森林」の郷の人々は、出稼ぎの郷（すなわち、出稼営業が優勢な郷）よりも、「はるかに汚い」生活をしている。†ノヴゴロド県チフヴィン郡についてこう書いてある。「すべての公式の資料に人々は穀物耕作に従事していると書いてあるけれども、農業は副次的な収入源泉である。……農民が自分の本質的な入用をみたすために受けとるものは、すべて木材業者のもとでの木材の調製と筏流しで稼ぐのである。しかし、まもなく危機が訪れるであろう。五ー一〇年もすれば、木材はもはやなくなってしまうだろう……」「木材業に従事するものはむしろ曳舟人夫である。冬は森の奥の仮小舎ですごし……春になると、家内労働の習慣をすてて、もう薪の筏流しに出かける。農繁期と草刈期だけが彼に定住をしいるのである」……農民は木材業者のもとで「永久的債務奴隷」の状態にある。†*ヴャトカ県の調査員は、木材業の仕事への雇用がふつう租税の徴収期と一致していること、経営主のもとでの生活用品の掛買いが賃金をひどく引きさげることを指摘している……「木材伐採人も薪伐採人も夏は日に約一七カペイカを、馬をつかう日には約三三カペイカを受けとる。このようにわずかな労賃は、この営業が最も非衛生的な状態のもとでおこなわれることを想起するなら、労働にたいする報酬としては不十分なものである」†**、等々。

* 『モスクワ県統計報告集』、第七巻第一冊、第二部。わが国ではしばしば、木材業でも経営主と労働者を厳密に区別せず、後者をも木材業者とよんでいる。

** 『クスターリ委員会報告書』、第一一冊、三九七ページ。

*** 『自由な賃労働』。

**** 『クスターリ委員会報告書』によって算出。

† 前掲書、一九－二〇ページ、三九ページ。『クスターリ委員会報告書』、第一二冊、二六五ページのまったく類似の意見を参照。

†* 『クスターリ委員会報告書』、第八冊、一三七二－一三七

三ページ、一四七四ページ。「チフヴィン郡では、木材産業の需要のおかげで、鍛冶業、皮革製造業、毛皮精製業が、また部分的には靴製造業が、発展した。第一のものは鉤竿を供給し、第二以下のものは長靴、毛皮裏の半外套、手袋を供給する」。ところで、われわれはここで、生産手段の製造（すなわち、資本主義経済における第一部門の成長）が、どのようにして消費資料の製造（すなわち、第二部門）に刺激をあたえるかの例を見る。生産が消費のあとを追うのではなくて、消費が生産のあとを追うのである。

†** 『クスターリ委員会報告書』、第一一冊、三九九—四〇〇ページ、四〇五ページ、一四七ページ。「農業は第二義的意義をもち」、主要な役割は営業、とくに木材業に属するという、オリョール県トルブチェフスク郡のゼムストヴォ統計集にある多数の指摘を参照（『トルブチェフスク郡統計報告集』、オリョール、一八八七年、とくに村落ごとの注）。

こうして、木材労働者は、わずかばかりの土地をもち、農村プロレタリアートの大きな構成部分の一つである。この職業は最高度に不規則で不安定である。だから木材労働者は、理論が潜在的と名づけたあの形態の予備軍*（あるいは資本主義社会における相対的過剰人口）を形成している。すなわち、農村人口の一定の（そしてわれわれが見たように、小さくない）部分が、たえずこの種の仕事につく用意をしていなければならず、たえずこの仕事を必要としていなければならない。これは資本主義の存在と発展の条件である。木材業者の乱伐経営のもとで森林が絶滅してゆくにつれて（そしてこの過程は巨大な速度ですすんでいる）、薪を石炭に代えることの必要がますます強く感じられ、石炭産業はますます急速に発展するが、この石炭産業だけが機械制大工業のための堅固な基盤となりうるのである。一定のあまり変動しない価格でいつでも好きなだけ得られるような安い燃料の存在、これが現代工場の要求である。木材産業はこの要求をみたすことはできない。** だから、燃料供給における木材産業の石炭産業にたいする優位は、資本主義の未発展の状態に対応するものである。社会的生産関係についていえば、この点では、木材産業の石炭産業にたいする関係は、資本主義的マニュファクチュアの機械制大工業にたいする関係とほぼ同じである。木材産業は、原始的方法で自然の富を開発するという、技術の最も幼稚な状態を意味する。石炭産業は、技術における完全な変革と機械の広範な使用にみちびく。木材産業は生産者を農民のままにしておくが、石炭産業は彼を工場生産者に転化させる。木材産業は、古い家父長制的生活構造全体をほとんど手の触れないままで残して、森林の奥深くに打ちすてられた労働者を最悪の債務奴隷状態に縛りつけ、彼らの無知、無保護および分散性を利用する。石炭産業は、人口の移動性をつくり

だし、大工業中心地を形成し、そして不可避的に生産の社会的統制にみちびく。一言でいえば、上述の交代は、マニュファクチュアと工場との交代と同様の進歩的意義をもつのである。***

* 『資本論』、第一巻、第二版、六六八ページ。(一九九)

** このことの例証を、『ロシア領ポーランド工場工業調査委員会委員報告』(サンクト・ペテルブルグ、一八八八年、第一部)の資料からあげておこう。ポーランドの石炭はモスクワの半分の安さである。紡糸一プードあたり平均燃料費はポーランドでは一六—三七カペイカであるが、モスクワ管区では五〇—七三カペイカである。また燃料の貯蔵はモスクワ管区では一二—二〇ヵ月分であるが、ポーランドでは三ヵ月分以上ではなく、たいていは一—四週間である。

*** ニコライーオン氏は、木材産業と石炭産業の交代の問題に言及したとき(『概要』、二一一ページ、二四三ページ)、いつものように泣き言をいうだけにとどまった。資本主義的石炭産業の後方に、これと比較にならないほど最悪の種類の搾取を特徴とする、同じく資本主義的な木材産業がひかえているというささやかな事情を、わがロマンティストは認めまいとつとめている。そうするかわりに、彼は「労働者数」についてしゃべりたてるのだ! 幾百万の失業農民にくらべれば、およそ六〇万ばかりのイギリスの炭鉱夫がなにを意味するだろうか?——彼はこのように言う(二一一ページ)。われわれはこれに答えよう。資本主義による相対的過剰人口の形成は疑問の余地がない。しかしニコライーオン氏には、この現象と機械制大工業の欲求との関連がまったくわからなかったのだ。臨時にまた不規則にではあっても種々な仕事に従事する農民の数と、石炭の採掘だけに従事する専門の坑夫の数とを比較することは、まったく無意味なやり方である。ニコライーオン氏がこの種の手法をもちいるのは、彼の理論を破壊するような、工場労働者と鉱業労働者の、また一般に全商工業人口の、ロシアにおける急速な成長という事実を、塗りつぶすためにすぎない。

建設業も、最初はまったく同様に農民の家内労働の範囲にはいっていたし、——そして半現物的な農民経済が維持されているかぎりでは、いまもひきつづきそうである。いっそうの発展の結果、建設労働者は、消費者の注文によって仕事をする専門の手工業者に転化する。農村や小都市では、建設業のこのような組織は現在でもいちじるしく発展している。手工業者は通常土地との結びつきを維持しており、きわめて狭い範囲の小規模な消費者をめあてに仕事をしている。資本主義の発展にともない、このような産業構造を維持することは不可能となる。商業、工場、都市、鉄道の成長は、建築様式の点でも、大きさの点でも、家父長制時代の古い建物とは似ても似つかない、まったく別の建造物にたいする需要をしめしてくる。新しい建造物は非常に多様で高価な材料を要求し、多種多様な専門の多数の労働者の協業を要求し、その完成に長期間を要求する。この

新しい建造物の配置は伝統的な人口配置とはまったく一致しない。それらは、大都市あるいは近郊に、人の住んでいない地方の真中に、建設中の鉄道線路沿い等々に、建てられる。その土地の手工業者は出稼労働者に転化するが、それをやとうのは、消費者と生産者とのあいだにしだいに割りこんできて本物の資本家に転化しつつある請負企業家である。資本主義経済の飛躍的発展、長年の不景気と「建設熱」の時期（現在、一八九八年に経験されているような）との交替は、建設業における資本主義的関係の拡大と深化に巨大な衝激をあたえる。

これが、ロシアの経済文献の資料によれば、いま考察している産業の農民改革後の進化である。* この進化は、地域的分業のうちに、つまり労働人口がなんらかの種類の建設労働に専門化するような個々の広大な地域の形成のうちに、とくにくっきり現われる。** この種の地域別の専門化はすでに、建設労働の大市場の形成を、またこれと関連して、資本主義的関係の形成を、前提している。例証のために、このような地域の一つにかんする資料をあげよう。ウラヂーミル県ポクロフ郡は古くから大工で有名であって、彼らはすでに今世紀の初頭に全人口の半数以上を成していた。農民改革後、大工職はひきつづきひろまっている。*** 「大工の地方では、親方や工場主に類似した分子は請負人であって」、それは通常大工組合（アルテリ）の最も抜け目のない組合員から出てくる。「請負人が一〇年間に五—六万ルーブリまたはそれ以上の純利益を得る例もまれではない。若干の請負人は三〇〇—五〇〇人の大工を擁しており、すでに本物の資本家になっている。……この地の農民が『大工ほど有利な商売はない』というのをもうなずける」。**** この営業の現在の組織の本質そのものを、これ以上くっきり特徴づけるのは困難である！「大工職は当地の農民生活の性格全体に深い刻印を残した。……農民大工は少しずつ農業になじまなくなり、やがて完全にそれを放棄してしまう」。首都での生活は大工に文化生活の刻印を残した。彼は近在の農民とは比較にならないほど小ぎれいに生活しており、その「知的教養」によって、「比較的高度の精神的発達」によって、いちじるしく目だっている。†

* すでにさきに指摘する機会があったが、この進化を確認することは、わが国の文献では建設労働者一般がしばしば「手工業者」とよばれており、賃金労働者もまったく誤ってこのカテゴリーに入れられているため、困難である。西欧における建設業の組織の類似の発展については、たとえば、ウェッブ『イギリス労働組合主義（トレード・ユニオニズム）の歴史』〔100〕、シュトットガルト、一八九五年、七ページを見よ。

** たとえば、ヤロスラヴリ県では、ダニーロフ郡が暖炉工、左官および石工でとくに有名であって、しかもそのなかの異

なる郷が、主としてこれらの職業のうちの一つの職人を出している。また、塗装師をとくに多数出しているのはヤロスラヴリ郡の外ヴォルガ地方であり、大工を出しているのはモロガ郡の中部地方である、等々（『ヤロスラヴリ県概観』、第二冊、ヤロスラヴリ、一八九六年、一三五ページその他）。

*** 五〇年代の末にはアルグノヴォ地方（アルグノヴォ郷はこの営業の中心地である）から約一万人の大工が出た。六〇年代には、ポクロフ郡の五四八の農村のうち五〇三に大工がいた（『ウラヂーミル県の営業』、第四冊、一六一ページ以下）。

**** 前掲書、一六五ページ。傍点はわれわれのもの。

† 前掲書、一六六ページ。同種の特徴づけを他の典拠もあたえている。以下を見よ――ジバンコフ『一八六六―一八八三年のコストロマ県の人口移動にたいする出稼労働の影響』、コストロマ、一八八七年。『コストロマ県ソリガリチ郡における都市出稼労働について』、『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八九〇年、第九号。『女人国』、コストロマ、一八九一年。『出稼労働調査の一般的計画の試み』。『一八九二―一八九五年のスモレンスク県の出稼営業』、スモレンスク、一八九六年。『人口移動にたいする出稼労働の影響』、『ヴラーチ』（『医師』）、一八九五年、第二五号。また引用した『ヤロスラヴリ県概観』、『クスターリ営業小委員会報告書』、『一八九六年度カルーガ県の統計的概観』、カルーガ、一八九七年、『一八九六年におけるニジェゴロド県の農業概観』、ニジニー・ノヴゴロド、一八九七年、その他のゼムストヴォ統計刊行物を参照。

ヨーロッパ・ロシアの建設労働者の総数は、手もとにある断片的資料から判断すると、まったくいちじるしいに相違ない。カルーガ県では、一八九六年に建設労働者は土地の労働者と出稼労働者を合わせて三九、八六〇人をかぞえた。ヤロスラヴリ県では、一八九四／九五年に――公式資料によれば――出稼労働者は二〇、一七〇人である。コストロマ県では出稼労働者約三九、五〇〇人、ヴャトカ県の九つの郡では（一一のうち）出稼労働者は約三〇、五〇〇人（八〇年代に）、トヴェーリ県の四つの郡では（一二のうち）、地元の労働者と出稼労働者とで一五、五八五人、ニジェゴロド県ゴルバートフ郡では地元の労働者と出稼労働者とで二、二二一人であった。一八七五―一八七六年の公式資料によると、リャザン県からは、一年に大工だけで少なくとも二万人が出稼ぎにいった。オリョール県オリョール郡では建設労働者は二、〇〇〇人、ポルタワ県の三つの郡では（一五のうち）一、四四〇人、サマラ県ニコラーエフスク郡では一、三三九人である。* これらの数字から判断して、ヨーロッパ・ロシアにおける建設労働者の数は一〇〇万を下らないに相違ない。** この数字はむしろ最小限のものとみなさなければならない。なぜなら、すべての典拠が、建設労働者の数は農民改革後の時代に急速に増加しつつあることを証明しているからである。*** 建設労働者は形成され

つつある工業プロレタリアートであって、土地との結びつきは——すでに現在非常に弱いが[***]——年々ますます弱くなっている。建設労働者は、その状態の点で木材労働者と鋭く異なっており、工場労働者により近づいている。彼らは大都市中心地および産業中心地ではたらいているが、これら中心地は、われわれが見たように、彼らの文化水準をいちじるしく高めるのである。衰退しつつある木材産業が、いまなお家父長制的生活構造に順応している未発展な形態の資本主義を特徴づけるとすれば、発展しつつある建設業は資本主義のより高い段階を特徴づけるのであって、新しい工業労働者階級の形成にみちびき、古い農民層の奥底からの分解を告知している。

＊　典拠は、さきの注であげたもの以外はゼムストヴォ統計集である。ヴェ・ヴェ氏は『クスターリ営業概説』、六一ページ、ポルタワ、クルスク、タムボフの諸県の一三郡にかんする資料をあげている。建設労働者は（ヴェ・ヴェ氏は不当にも彼らをみな「小営業者」に入れている）全部で二八、六四四人で、郡の成人男子人口全体の二・七％から二二・一％になる。基準として平均パーセント（八・八％）をとると、ヨーロッパ・ロシアについては一三三万人の建設労働者を得るであろう（成年男子労働者を一五〇〇万人とみなして）。なお前記の諸県は、建設業の最も発展した県と最も未発展の県との中間を占めている。

＊＊　一八九七年一月二八日の国勢調査は（『集大成』、一九〇五年）、帝国全体で、建設業における自立的人口（みずから生活手段を得るもの）を七一万七〇〇〇人、それに加えて、この産業に副業として従事する農耕者を四六万九〇〇〇人とかぞえている（第二版の注）。

＊＊＊　建設業の規模を判断するには、火災保険をかけてある建造物の価額にかんする資料がいくらか役だちうる。一八八四年にこの価額は五九億六八〇〇万ルーブリ、一八九三年には七八億五四〇〇万ルーブリであった（『生産力』、第一二巻、六五ページ）。これは毎年一億八八〇〇万ルーブリの増加になる。

＊＊＊＊　たとえば、ヤロスラヴリ県では、全人口の一一—二〇％、すなわち男子労働者の三〇—五六％がよそへ出稼ぎにいっており、出稼労働者の六八・七％が年中不在である（『ヤロスラヴリ県概観』）。これらはみな「公式の名称でのみ農民」であることは明らかである（一一七ページ）。

一〇　工場の付属物

工場の付属物と名づけるのは、その存在が直接に工場と結びついている賃労働および小工業の諸形態のことである。これにはいるのは、なによりもまず（ある部分の）木材および建設労働者であって、彼らについてはわれわれはすでに述べたが、彼らはときには工場中心地の工業人口に直接

はいっていることもあり、ときには周辺の農村住民に入れられていることもある。* さらに、これにはいるものに、ときには工場所有者自身が採掘をおこなうこともある泥炭沼の労働者** や、荷馬車ひき、仲仕、商品荷造人夫、および一般に、常に工場中心地の人口の少なからぬ部分を占めているいわゆる雑役夫がある。たとえば、ペテルブルグでは、一八九〇年一二月一五日の国勢調査は「日雇い、雑役夫」のグループに四四、八一四人（男女）を記載し、つぎに運輸業に五一、〇〇〇人（男女）を記載しているが、後者のうち九、五〇〇人はとくに重量物や荷物の運搬に従事している。つぎに、工場のための若干の補助的な仕事は小さな「自立的」営業者がおこなっており、工場中心地あるいはその周辺では次のような営業が現われている。すなわち、搾油工場や火酒製造工場用の樽の製造、*** ガラス器包装用の篭編み、**** 金物や鍛冶製品の荷造用の箱の製作、大工や鍛冶工の道具箱の製造、† 靴屋用の鋲や皮革工場用の「鞣皮（なめし）用木粉末」の製造その他、†* 工場製品の荷造用の莚編み（コストロマ県その他）、マッチの「軸木」の製造（リャザン県、カルーガ県その他）、タバコ工場用紙箱の糊づけ（ペテルブルグ近郊）、†** 酢製造工場用の木粉末の製造、†*** 大工場の需要に†**** よって発展した小さな紡績工場（ロッジ）による屑糸の加工、その他等々。これらの小営業者はみな、前記の賃金労働者とまったく同様に、工場中心地の工業人口に属するか、それとも周辺の村落の半農業人口に属するかである。さらに、工場が半製品の生産にとどまっているときには、それはときおり半製品のそれからさきの加工に従事する小営業を発生させる。たとえば、紡糸の機械制生産はクスターリ織物業に刺激をあたえるし、鉱業所のそばに金属製品その他を生産する「クスターリ」が出現する、等々。†† 最後に、資本主義的家内労働もしばしば工場の付属物である。機械制大工業の時代は、すべての国で、たとえば既製服製造業などの工業部門における資本主義的家内労働の広範な発展を特徴としている。このような労働がロシアでどれほど普及しているか、それはどのような条件を特徴としているか、そしてなぜわれわれにはマニュファクチュアにかんする章でそれを記述するのがより正しいようにおもわれるかについては、さきにすでに述べた。

* たとえば、リャザン県では、「フルードフ工場だけで」（一八九四／九五年に労働者四、八四九人、生産六〇〇万ループリ）「冬には馬七、〇〇〇頭が薪の運搬に従事するが、その大部分はエゴーリエフスク郡の農民のものである」（『クスターリ委員会紀要』、第七冊、一一〇九—一一一〇ページ）。

** 泥炭採掘業の統計でも混沌が支配している。通常それは「工場」生産には入れてないが（コペリャッキー『便覧』、一五ページを参照）、ときには入れることもあって、たとえば、

『工場案内』は、ウラヂーミル県に二、二〇一人の労働者をもつ一二の採掘所をかぞえており、しかも泥炭は他の県でも採掘しているのに、この県でだけかぞえている。スヴィルスキー（『ウラヂーミル県の工場』）によれば、一八九〇年にはウラヂーミル県で六、〇三八人が泥炭採掘に従事していた。ロシア全体の泥炭採掘に従事する労働者数は何倍も大きいに相違ない。

*** 『クスターリ委員会報告書』、第六冊。

**** 前掲書、第八冊、ノヴゴロド県で。

† 前掲書、第九冊、トゥーラ郡の都市近郊の郷で。

†* ペルミ県ではクングール市付近、トヴェーリ県ではキムルィ村その他で。

†** 『一八八九年サンクト・ペテルブルグ郡ゼムストヴォ参事会報告』、第五医療区にかんするヴォイノフ氏の報告を見よ。

†*** 『報告および調査』、第一巻、三六〇ページ。

†**** 『ロシア領ポーランド工場工業調査報告』、サンクト・ペテルブルグ、一八八八年、二四ページ。

†† 『工場案内』によって、われわれは事業所内の一、〇〇〇人以上の労働者をもつ工場一六をかぞえたが、それらは外部の労働者をも七、八五七人もっている。五〇〇—九九九人の労働者をもつ一四の工場は、外部に一、三五二人の労働者をもっている。『工場案内』による事業所外労働の記録はまったく偶然的なもので、底しれぬ欠落がある。『工場監督官報告集成』は、一九〇三年について労働者六五、一一五人をもつ六三二の前貸問屋をかぞえている。この資料はもちろんきわめて不完全なものではあるが、それでも、これらの前貸問屋とそこでやとわれている労働者との大多数が、工場工業の中心地にいることになっていることは、特徴的である（モスクワ管区——前貸問屋五〇三、労働者四九、三四五人。サラトフ県——縞木綿織物——前貸問屋三三、労働者一〇、〇〇〇人）（第二版の注）。

工場付属物をいくらかでも完全に記述するためには、完全な職業人口統計、あるいは工場中心地とその周辺の全経済生活を記述した論文が必要である。しかし、われわれがそれであまんじるほかはなかった断片的資料でさえ、工場工業は工業の他の形態とは無縁であり、工場人口は工場内で仕事をしていない人口とは無縁であるという、わが国でひろまっている考えがどんなに誤っているかをしめしている。工業の諸形態の発展は、一般にあらゆる社会関係の発展と同じように、多くの過渡的諸形態のからみあいのなかで、見かけは過去に復帰するかのような形をとったりしながら、きわめて漸進的にすすんでゆくほかはない。たとえば、小営業の成長は（われわれが見たように）資本主義的マニュファクチュアの発達を表現することもありうる。だがいまやわれわれは、工場もまたときには小営業を発展させうることを見るのである。「買占人」のための仕事も、マニュファクチュアの付属物でも工場の付属物でもありうる。この種の現象の意義を正しく評価するためには、それ

らを所与の発展段階における工業の全構造およびこの発展の基本的諸傾向と関連させることが必要である。

二　農業からの工業の完全な分離

農業からの工業の完全な分離をひきおこすのは機械制大工業だけである。ロシアの資料は、『資本論』の著者が他の国々について確立した命題、* しかしナロードニキ経済学者たちがふつう無視しているこの命題を、完全に確証している。ニコライーオン氏は、その『概要』のなかで、ところかまわず「農業からの工業の分離」について論じているが、しかしこの過程がいったいどのように進行するか、そしてそれはどのような種々の形態をとるかということを、正確な資料にもとづいて分析しようとは考えもしないのである。ヴェ・ヴェ氏は、わが国の工業労働者の土地との結びつきを指摘して（マニュファクチュアにおける——わが著者は、『資本論』の著者の理論に従うようなふりをしてはいるが、資本主義の個々の段階を区別することが必要だとは考えていないのだ！）、この点にかんして、労働者にたいする「わが国の（傍点は著者のもの）資本主義的生産の」「恥ずべき（原文のまま！）依存性」等々について大いに論じたてている（『資本主義の運命』、一一四ページその他）。「わが国」だけではなく、西欧のどこでも、資本主義は機械制大工業以前には、労働者の土地との結びつきを最終的に断ちきってしまうことはできなかったということについては、ヴェ・ヴェ氏はどうやら聞いたことがなく、また聞いていたとしても忘れてしまったのだ！　最後にカブルーコフ氏は、ごく最近学生たちにむかって次のような驚くべき事実の歪曲までおこなっている。「西欧では工場での労働が労働者にとって唯一の生活源泉をなすのにたいして、わが国では比較的わずかな例外を除いて（原文のまま!!）、労働者は工場での労働を副業とみなしており、彼は土地により引きつけられている」。**

* 『資本論』、第一巻、第二版、七七九―七八〇ページ。（三二）

** 『農（原文のまま！）業経済学講義』、学生版、モスクワ、一八九七年、一三ページ。ひょっとすると、この博学な統計家は、「比較的わずかな例外」にすべての事例の八五％をふくめることが可能であるとでも考えているのであろうか（下記の本文を見よ）？

この問題の事実検討をおこなったのは、モスクワの衛生統計、すなわち「工場労働者の農業とのつながり」にかんするデメンチエフ氏の労作である。* 系統的にあつめられた資料は約二万人の労働者を包括しているが、それは、工場労働者のうち農業の仕事に出かけるのはわずか一四・一％

〔第 104 表〕

畑仕事に出かける労働者のパーセント		
染色工場をもつ手機式綿織物工場	72.5	手労働生産
絹織物工場	63.1	手労働生産
陶磁器工場	31.0	手労働生産
手動式サラサ捺染工場および経糸前貸問屋	30.7	手労働生産
ラシャ工場（全工程）	20.4	
綿糸紡績工場および自動式織物工場	13.8	機械制生産
サラサ捺染工場と仕上工場とをもつ自動式織物工場	6.2	機械制生産
機械製作工場	2.7	機械制生産
機械制サラサ捺染および仕上工場	2.3	機械制生産

であることをしめした。だがさらにずっと重要なのは、まさに機械制生産こそが労働者を土地から引きはなすという、右の労作のなかで綿密に証明された事実である。このことを確認するのに引用されている多くの数字のうち、次の最も鮮明なものをとりあげよう。** 〔第一〇四表〕

* 『モスクワ県統計報告集』、衛生統計篇、第四巻第二部、モスクワ、一八九三年。デメンチエフ氏の有名な著作『工場、……』に収録。

** 『統計報告集』、前掲、二九二ページ。三六ページ。

われわれは著者の表に、手労働生産と機械制生産への八つの生産業の区分を付加しておいた。第九の生産業、すなわちラシャ製造業については、一部は手工的方法、一部は機械的方法によって生産がおこなわれていることを注意しておこう。さて、手織工場の織物工のうち野良仕事に出かけるものは約六三％であるが、自動織機で作業している織物工のうちからは、出かけるものは一人もないし、機械力で操業しているラシャ工場の諸部門の労働者のうちからは、出かけるものは三・三％である。「したがって、工場労働者に土地との結びつきを断ちきることをよぎなくさせる最も重要な原因は、手労働生産から機械制生産への移行である。手労働生産の工場の数が比較的なおかなり多いにもかかわらず、そこでの労働者数は、機械制生産の工場ではたらいている労働者数に比較するとまったくとるにたりないのであって、そのためわれわれは、野良仕事に出かけるものは一般に全成年労働者については一四・一％、またもっぱら農民身分の成年労働者については一五・四％という、わずかなパーセントを得るのである」*。モスクワ県の工場

の衛生調査資料は次のような数字を提供していることを想起しよう。動力機械をもつのは全工場の二二・六%で（そのうち一八・四%は蒸気発動機をもつ）、それらの工場に労働者総数の八〇・七%が集中されている。手労働の工場は六九・二%を占めるが、そこではたらく労働者は一六・二%にすぎない。動力機械をもつ二四四の工場には九二、三〇二人の労働者がいるが（一工場あたり労働者三七八人）、七四七の手労働の工場の労働者は一八、五二〇人である（一工場あたり労働者二五人）。** われわれはさきに、一事業所あたり平均四八八人以上の労働者をもつ、大部分が機械制であるような最大級の事業所へのロシアの全工場労働者の集中が、どれほどにいちじるしいかをしめした。デメンチエフ氏は、土地との断絶にたいする労働者の出生地の影響、地元の者とよそ者との違いの影響、身分の違い（小市民と農民）の影響をくわしく研究したが、その結果、これらの違いはすべて、手労働生産の機械制生産への移行という基本的要素の影響のまえには影が薄くなることがわかった。**「以前の農民の工場労働者への転形を助長した原因がなんであろうと、この専門的な労働者はすでに存在している。彼らは農民としてかぞえられているだけで、彼らが農村とつながっているのは、身分証明書の更新にあたって納める税金を通じてだけである。なぜなら、実際には彼らは農村に経営ももたなければ、ほとんどみな家さえもたないのであって、それは通常売りはらってしまっている。土地にたいする権利でさえ、彼らはいわばたんに法律上保持しているにすぎず、多くの工場で起こった一八八五—一八八六年の騒動は、これらの労働者自身が自分たちは農村にはまったく無縁であると考え、またちょうどそれと同じように、農村の農民のほうも、自分たちの同郷人の子孫である彼らをよそ者と見ていることをしめした。われわれのまえにあるのは、したがって、すでに形成された労働者階級、なんらの財産をもたない、すでに自分の家をもたず、事実上なにものにも束縛されずにその日暮しをする階級である。そしてそれは昨日になってはじめて形成されたのではない。それはすでに自分の工場系譜をもっており、その少なからぬ部分はすでに三代目にあたるのである」***。最後に、工場の農業との断絶の問題について、最新の工場統計が興味ある材料をあたえている。『工場一覧表』（一八九四／九五年の報告）には、各工場が一年間に操業する日数にかんする情報が出ている。カスペーロフ氏は急いでこの資料をナロードニキ理論のために利用して、「ロシアの工場は一年に平均一六五日作業する」こと、「わが国では工場の三五%が一年に二〇〇日以下作業する」ことを算出した。† いうまでもなく、「工場」概念があいまいなのであるから、この

種の概数は、どれだけの数の労働者が一年間にあれこれの日数だけ就業するかがしめされないかぎり、ほとんどなんの意味ももたない。われわれは、これに対応する『工場一覧表』の資料の計算を、さきに見たように（第七節）工場労働者総数の約四分の三を占める大工場（一〇〇人以上の労働者をもつ）にかんして、おこなった。その結果、一年間の平均労働日数は、部類別では、（A）二四二日、（B）二三五日、（C）二七三日であり、†* 大工場全体では二四四日であることがわかった。労働者一人あたり平均労働日数を算定すると、年に二五三労働日となる。——それは大工場の労働者にとっての平均数である。『工場一覧表』のなかで区分されている全部で一二部門の生産業のうち、一部門だけで平均労働日数が低位の二部類について二〇〇日以下となっている。それは第一一部門（食料品）で、（A）一八九日、（B）一四八日、（C）二八〇日である。この部門のAおよびB部類の工場には、一一〇、五八八人の労働者、すなわち、大工場労働者総数（六五五、六七〇人）の一六・二%が就業している。この部門では、まったく異なる生産業、たとえば、甜菜糖製造業とタバコ製造業、火酒製造業と製粉業、その他がいっしょにされていることに注意しておこう。残りの部門については、一工場あたり平均労働日数は次のとおりである。（A）二五九日、（B）二七一日、（C）二七二日。このように、工場が大きければ大きいほど、一年間に操業する日数はそれだけ多い。したがって、ヨーロッパ・ロシアのすべての大工場にかんする全般的資料は、モスクワ衛生統計の結論を確認しており、工場が恒常的な工場労働者の階級を創出することを証明している。

* 『資料集』、二八〇ページ。『工場』、二六ページ。

** 『資料集』、第四巻、一六七ページ、一七〇ページ、一七七ページ。

*** ジバンコフ氏は、その著『スモレンスク県の工場の衛生調査』（スモレンスク、一八九四—一八九六年）のなかで、ヤルツェヴォの繊維工場だけについてみて、野良仕事に出かける労働者数をおよそ一〇—一五%にすぎないと算定している（第二巻、三〇七ページ、四四五ページ。ヤルツェヴォの繊維工場には、一八九三／九四年に、スモレンスク県の工場労働者八、八一〇人中の三、一〇六人がいた）。この工場の常雇でない労働者は男子の二八%（全工場では二九%）、女子の一八・六%（全工場では二一%）。第二巻、四六九ページを見よ）である。常雇でない労働者には、(一)工場にはいってから一年未満のもの、(二)夏季の仕事に出かけるもの、(三)「一般に、工場での仕事をなんらかの理由で数年間休んだ」もの（第二巻、四四五ページ）が算入されていることを、指摘しておく必要がある。

**** 『資料集』、二九六ページ。『工場』、四六ページ。

† 『ロシアの工業的発展の統計的総括』。帝国自由経済学会会員エム・イ・トゥガン－バラノフスキーの報告、および第三

部会におけるこの報告にかんする討論、サンクト・ペテルブルグ一八九八年、四一ページ。

†* 部類Aは労働者一〇〇—四九九人の工場、Bは労働者五〇〇—九九九人の工場、Cは労働者一〇〇〇人以上の工場をふくむことを、想起しよう。

こうして、ロシアの工場労働者にかんする資料は、まさに機械制大工業こそが工業人口の生活条件における完全で決定的な変革をひきおこし、工業人口を、農業およびそれと結びついた古くからの家父長制的生活の伝統から最終的に引きはなすという、『資本論』の理論を完全に確証している。しかし、家父長制的および小ブルジョア的諸関係を破壊しながら、機械制大工業は、他方では、農業と工業との賃金労働者を接近させる条件をつくり出す。すなわち、第一に、それは一般に、まず最初は非農業的中心地でつくりだされた商工業的生活様式を農村にもちこむ。第二に、それは人口の移動性と、農業労働者と工業労働者の双方の雇用の大きな市場とをつくりだす。第三に、機械を農業にもちこむことによって、機械制大工業は、生活水準が最も高いという特徴をもつ熟練工業労働者を農村につれてくるのである。

一二 ロシアの工業における資本主義の発展の三つの段階

それでは、わが国の工業における資本主義の発展にかんする資料から得られる基本的結論の総括をしよう。*

* 序文で述べたように、われわれは農民改革後の時代に限定しているので、農奴人口の労働にもとづく工業諸形態にはふれないでおく。

この発展の基本的段階は三つある。すなわち、小商品生産（小規模な、主として農民的な営業）——資本主義的マニュファクチュア——工場（機械制大工業）である。諸事実は、「工場」工業と「クスターリ」工業とは無関係であるというわが国でひろまっている見解を、完全に論破している。反対に、それらの区別は純粋に人為的なものである。われわれがしめした工業の諸形態の関連と継承性とはきわめて直接的であり、きわめて緊密である。諸事実は、小商品生産の基本的傾向が資本主義の発展、とくにマニュファクチュアの形成にあり、そしてマニュファクチュアは、われわれの目のまえで巨大な速度で機械制大工業に転化しつつあることを、まったく明白にしめしている。おそらく、工業の継起的な諸形態のあいだの緊密で直接的なつながり

の最も鮮明な現れの一つとして役だつものは、多数の大きな工場主および最大級の工場主自身が、かつては小営業者のうちで小さなものであったし、そして「人民的生産」から「資本主義」にいたるすべての段階をとおってきた、という事実であろう。サッヴァ・モロゾフはかつては農奴的農民であり（一八二〇年に身代金を払って自由の身となった）、牧夫であり、馭者であり、機織労働者であり、機織クスターリであって、自分の商品を買占人に売るために歩いてモスクワに出かけたものだが、その後、小さな事業所の、前貸問屋の、工場の、所有者となっていったのである。彼は一八六二年に死んだが、そのとき彼と彼の大勢の息子たちは二つの大工場をもっていた。一八九〇年には、彼の子孫に属する四つの工場では三九、〇〇〇人の労働者がやとわれていて、三五〇〇万ルーブリの製品を生産していた。* ウラヂーミル県の絹織物業では、多数の大工場主が機織労働者と機織クスターリから成りあがった。** イヴァノヴォーヴォズネセンスクの最大の工場主たち（クヴァーエフ家、フォーキン家、ズブコフ家、コクシキン家、ボブロフ家、その他多数）は、クスターリの出である。*** モスクワ県の金襴工場は、もとは全部クスターリの機織部屋であった。**** パヴロヴォ地区の工場主ザヴィヤーロフは、一八六四年になっても、「彼自身が親方のハバロフのところで一介の労働者だったときのことをまざまざと覚えていた」。工場主ヴァルィパーエフは小クスターリであった。†* コンドラトフは、自分の製品の篭をもってパヴロヴォに歩いて出かけたクスターリであった。†** 工場主アスモロフは織物行商人の馬丁であったが、その後小商人となり、小さなタバコ製造工場の所有者となり、さらにのちには何百万もの取引のある工場の所有者となった、†*** その他等々。ナロードニキ経済学者たちが、このような場合に、「人為的」資本主義の始りと「人民的」生産の終りとをどのように規定したかを見るのは、興味深いことであろう。

* 『ウラヂーミル県の営業』、第四冊、五一七ページ。一八九〇年の『工場案内』。シシュマレフ『ニジェゴロドおよびシューヤ＝イヴァノヴォ鉄道地区の工業の概観』、サンクトーペテルブルグ、一八九二年、二八―三二ページ。

** 『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、七ページ以下。

*** シシュマレフ、五六―六二ページ。

**** 『モスクワ県統計報告集』、第七巻第三冊、モスクワ、一八八三年、二七―二八ページ。

† ア・スミルノフ『パヴロヴォとヴォルスマ』、一四ページ。

†* ラブジン、前掲書、六六ページ。

†** グリゴリエフ、前掲書、三六ページ。

†*** 『歴史的＝統計的概観』、第二巻、二七ページ。

右にあげた工業の三つの基本的形態は、なによりもまず

異なる技術方式によって区別される。小商品生産は、ほとんど太古の昔から不変のままのまったく原始的な手工的技術を特徴とする。営業者は依然として農民であって、彼らは原料の加工法を伝統によって踏襲している。マニュファクチュアは分業を導入し、分業は技術の本質的変革をもたらし、農民を職人に、「部分労働者」に転化させる。しかし手労働生産は残るのであって、その基盤のうえでは、生産方法の進歩はきわめて緩慢なことを不可避的に特徴としている。分業は自然発生的にできあがってゆき、農民の仕事と同じように伝統によって踏襲される。機械制大工業だけが根本的変化をもたらすのであって、手工的技巧を放棄し、新しい合理的な原則にもとづいて生産を改造し、科学の成果を系統的に生産に応用する。資本主義がロシアに機械制大工業を組織するにいたらないあいだは、また資本主義がそれをまだ組織するにいたっていない工業部門では、われわれはほとんど完全な技術の停滞を見るし、何世紀もまえに生産にもちいられたのと同じ手織機や、同じ水車あるいは風車が使用されているのを見る。反対に、工場に従属するようになった工業部門では、われわれは完全な技術革命と機械制生産方法のきわめて急速な進歩とを見る。

異なる技術方式と関連して、われわれは資本主義の発展の異なる段階を見る。小商品生産とマニュファクチュアは小経営の優勢によって特徴づけられ、このうちから少数の大経営が区別されるにすぎない。機械制大工業は小経営を最終的に駆逐する。資本主義的関係は小営業においても形成されるが（賃金労働者をもつ作業場や商業資本の形で）、それはここではまだ発展が微弱で、生産に参加する人々のグループのあいだの鋭い対立に固定化していない。大資本も、プロレタリアートの広範な層も、ここにはまだない。マニュファクチュアにおいて、われわれはこの両者の形成を見る。生産手段の所有者と働き手とのあいだの溝は、すでにいちじるしい規模に達する。「富んだ」工業町が発達するが、そこでは多数の住民はまったく無産の働き手たちである。原料の買付と生産物の販売で巨額の金を運用する少数の商人と、その日暮しに追われる多数の部分労働者、これがマニュファクチュアの一般的状況である。しかし、多数の小さな事業所の存在、土地との結びつきの保存、生産と生活全体における伝統の保存、これらすべてがマニュファクチュアの両極のあいだに大量の仲介者的分子をつくりだし、これら両極の発展を阻止する。機械制大工業ではこれらの阻止的要因はすべてなくなり、社会的対立の両極は最高の発展をとげる。資本主義のすべての暗黒面が一ヵ所に凝集されたかのようである。機械は、周知のように、労働日の法外な延長に巨大な衝撃をあたえ、婦人と子供が

生産に引きいれられ、失業者の予備軍が形成される（そして工場制生産の条件によって形成されずにはおかない）、等々。しかし、工場によって巨大な規模でなしとげられる労働の社会化、および工場に雇用される住民の感情と観念の変革（とくに家父長制的および小ブルジョア的伝統の破壊）は反動を呼びおこす。すなわち、機械制大工業は、それ以前の諸段階とは異なり、生産の計画的調整と社会的統制とを切実に要求する（この傾向の現れの一つが工場立法である）*。

* 工場立法と、機械制大工業によって生みだされた諸条件および諸関係とのつながりの問題については、トゥガン－バラノフスキー氏の著書『ロシアの工場』の第二部第二章、およびとくに『ノーヴォエ・スローヴォ』一八九七年七月号の論文を見よ。

生産の発展の性格そのものは資本主義の異なる段階で変化する。小営業においては、この発展は農民経済の発展についてすすむ。市場は極度に狭く、生産者から消費者までの距離は大きくなく、微々たる生産の規模は変動の少ない地方的需要に容易に順応する。だから、最大の安定性がこの段階の工業を特徴づけるが、この安定性は技術の停滞、および中世的伝統のあらゆる遺物に縛られた家父長制的社会関係の保存と同然である。マニュファクチュアは大きな市場めあてに、ときには全国民めあてに作業し、これに応じて生産は資本主義に固有な不安定性という性格をおびるようになり、この性格は工場において最大の強さに達する。機械制大工業の発展は、飛躍による以外には、すすみえない。繁栄期と恐慌期の周期的交代による以外には、すすみえない。小生産者の零落はこの工場の飛躍的成長によっていちじるしく強められ、労働者は熱狂時には大量に工場に吸引されるかと思うと、ほかのときには押しだされる。失業していてどんな仕事にでもつく用意のある人々の巨大な予備軍の形成が、機械制大工業の存在と発展の条件になる。第二章でわれわれはこの軍隊が農民のどの階層から徴集されるかをしめしたし、それにつづく諸章では、資本がこの予備軍をそのために用意しておく最も主要な職業の種類をも指摘した。機械制大工業の「不安定性」は、あいかわらず小生産者の眼でものごとを見て、この「不安定性」だけが、以前の停滞を生産様式と社会関係全体との急速な改造でおきかえたのだ、ということを忘れている人々の反動的な泣き言を、つねに呼びおこしたし、いまも呼びおこしている。

この改造の現れの一つが、農業からの工業の分離、農業のうえにのしかかっている農奴制的および家父長制的な制度の伝統からの、工業における社会関係の解放である。小商品生産では、営業者はまだ完全には農民から抜けだして

はいなかったのであって、彼はたいていの場合、農耕者にとどまっており、この小工業と小農業とのつながりは非常に根深く、われわれは工業と農業における小生産者の並行的分解という興味深い法則を見るほどである。小ブルジョアジーと賃金労働者との分離は国民経済のこれらの両分野で手に手をとってすすみ、そのことによって分解の両極においてい農業からの営業者の絶縁を準備する。マニュファクチュアにおいてはこの絶縁はすでに非常にいちじるしいものがある。農業にはたずさわらない多数の工業中心地が形成される。工業の主要な代表者となるのはもはや農民ではなく、一方では商人とマニュファクチュア経営主であり、他方では「職人」である。工業および他の世界との比較的発展した商業的交流は、住民の生活水準と文化性を高め、マニュファクチュアの働き手はもはや農耕農民を見くだすようになる。機械制大工業はこの改造を完了させ、最終的に工業を農業から引きはなし、われわれが見たように、古い農民とはまったく縁がなく、別の生活構造、別の家族関係の構造、物質的および精神的欲望のより高い水準によって農民と区別される、住民の特殊な階級をつくりだす。* 小営業とマニュファクチュアにおいては、われわれはつねに家父長制的関係と人格的従属の種々の形態との遺物を見るが、これらは資本主義経済の一般的事情のもとでは、勤労者の状態をはなはだしく悪化させ、彼らをおとしめ、堕落させる。機械制大工業は、しばしば国のいろいろな地方からやってくる労働者大衆を一ヵ所に集中するのであって、家父長制や人格的従属の遺物とはもはや絶対に和解しない、真に「過去にたいする軽蔑的な態度」をもって特色とする。そしてまさに古くなった伝統とのこの絶縁こそが、生産の規制と生産にたいする社会的統制の可能性をつくりだし、その必要性を呼びおこした、本質的条件の一つであった。とくに、工場による住民の生活条件の改造について かたる場合、婦人と未成年者との生産への吸引は、** その基礎においては進歩的な現象であるということを指摘しておく必要がある。資本主義的工場がこれらの種類の労働人口をとくに苦しい状態におくこと、彼らにたいしては労働日の短縮と規制、衛生的な作業条件の保障、その他がとくに必要なことは議論の余地がない。しかし婦人や未成年者に工業労働を完全に禁止しようとしたり、あるいはこのような労働を排除した家父長制的生活構造を維持しようとする試みは、反動的で空想的なものであろう。以前には家庭的、家族的関係の狭い範囲からそとに出なかったこれらの部類の人口の家父長制的閉鎖性を破壊し、彼らを社会的生産への直接的参加に引きいれることによって、機械制大工業は彼らの発達を推しすすめ、彼らの自立性を高める。すなわ

ち、それは前資本主義的関係の家父長制的非可動性とはくらべものにならないほど高い生活条件を創出するのである。***

* 「工場人」の型については前出、第六章第二節(五)、三一七ページ〔本訳書、三五七―三五八ページ〕を参照。また『モスクワ県統計報告集』、第七巻第三冊、モスクワ、一八八三年、五八ページ(工場人は理屈屋、「賢人」である)。『ニジェゴロド集』、第一巻、四二―四三ページ、第四巻、三三五ページ。『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、一一三―一一四ページその他。『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九七年一〇月、六三ページ。また、都市での商工業の仕事に出かける労働者を特徴づけているジバンコフ氏の前掲の著作を参照。

** 『工場案内』の資料によれば、ヨーロッパ・ロシアの工場には一八九〇年に八七五、七六四人の労働者がはたらいており、そのうち二一〇、二〇七人(二四%)が婦人、一七、七九三人(二%)が少年、八、二一六人(一%)が少女であった。

*** 「貧しい機織女工は父や夫のあとについて工場にゆき、彼らとならんで、そして彼らとは独立にはたらく。彼女は男と同じように家族の養い手である」。「工場では……婦人は自分の夫とは別個のまったく自立した生産者である」。工場の婦人労働者の読み書き能力はとくに急速に成長する(『ウラヂーミル県の営業』、第三冊、一一三、一一八、一一二ページその他)。ハリゾメノフ氏の次のような結論は完全に正当である。すなわち、工業は「家族……および家長への婦人の経済的従属」を絶滅する。「他人の工場では婦人は男子と同等視される。これはプロレタリアートの平等である。……工業の資本主義化は、家族内での自立性のための婦人のたたかいで顕著な役割を果たす」。「工業は婦人のために新しい、そして家族と夫からまったく独立した地位をつくりだす」(『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八八三年、一二号、五八二ページ、五九六ページ)。『モスクワ県統計報告集』(第七巻第二冊、モスクワ、一八八二年、一五二、一三八―一三九ページ)のなかで、調査員たちは長靴下の手労働生産と機械制生産における婦人労働者の状態を比較している。一日の賃金は手労働生産では約八カペイカ、機械制生産では一四―三〇カペイカである。機械制生産における婦人労働者の状態は次のように記述されている。「……われわれのまえにいるのはすでに、どんな障害にも拘束されない、家族から、また農婦の存在条件をなすすべてのものから解放された自由な娘であり、そのときどきにいつでもあちこちと経営主をかえて渡り歩くことができ、またそのときどきにいつでも仕事を失って、一片のパンもなくなってしまうかもしれない娘である……手労働生産のもとでは、織物女工はきわめてわずかな稼ぎしか得ない。それは食費をまかなうにもたりないほどの稼ぎであり、彼女が分与地をもつ主人の家族の一員としてこの土地の生産物の一部を利用するという条件のもとで、はじめてやってゆけるような稼ぎである。機械制生産のもとでは、女工は食料と茶のほかに、彼女が家族と離れて生活することができ、家族の土地からの収入をもはや利用しなくてもよいだけの稼ぎを得る。同時に、機械制生産のもとでの女工の稼ぎは、現存の条件のもとでは、より安定している」。

工業の発展の初めの二つの段階は住民の定着性を特徴としている。小営業者は依然として農民であって、農業経営によって自分の村に緊縛されている。マニュファクチュア職人は、やはり普通は、マニュファクチュアのつくりだす大きくない閉鎖的な工業地域に縛りつけられている。その発展の第一および第二段階における工業の構造自体のなかには、生産者のこの定着性と閉鎖性をかきみだすようなものはなにもない。異なる工業地域間の交通はまれである。他地方への工業の移動は、国の辺境地方に新しい小営業を創設する個々の小生産者の移住によってしかおこなわれない。これに反して、機械制大工業は必然的に住民の可動性をつくりだす。個々の地域間の商業関係は大きくひろがる。鉄道は移動を容易にする。労働者にたいする需要は、熱狂期には上昇し、恐慌期には低下しながら、全体として増大し、こうして一つの事業所から他の事業所へ、国の一隅から他の一隅への労働者の移動が必然となる。機械制大工業は一連の新しい工業中心地をつくりだすが、それらは以前には見られなかったような速さで、ときには無人の境に発生する。——これは、労働者の大量移動なしには不可能なような現象である。われわれはあとでいわゆる非農業的出稼営業の規模と意義について述べるであろう。それでいまはモスクワ県のゼムストヴォ衛生統計資料を簡単にしめすにとどめよう。一〇三、一七五人の工場労働者にたいする質問の結果、ある郡出身の労働者で自分の郡の工場ではたらいているものは五三、二三八人、すなわち総数の五一・六%であることがわかった。したがって、全労働者のほとんど半分が一つの郡から他の郡へ移住したことになる。モスクワ県では、同県出身の労働者は六六、〇三八人で、六四%になる。[*] 三分の一以上の労働者が他県から来たものである（主としてモスクワ県に隣接する中央工業地帯からの）。そのさい、個々の郡を比較してみると、最も工業的な郡の特徴は、その郡出身の労働者のパーセントが最小であるということがわかる。たとえば、工業の未発展なモジャイスク郡とヴォロコラムスク郡では、工場労働者の九二—九三%が、自分のはたらいている郡の土地の人間である。非常に工業的なモスクワ、コロムナおよびボゴロークの三郡では、その郡出身の労働者のパーセントは二四%—四〇%—五〇%と低くなっている。調査員たちはここから、「郡における工場生産のいちじるしい発展は、その郡へのよその者の流入を助ける」という結論を出している。[**] これらの資料はまた（われわれ自身がつけくわえよう）、工業労働者の移動は、われわれが農業労働者の移動にかんして確認したのと同じ特徴をもつことを、しめしている。すなわち、工業労働者もまた、労働者が過剰なところからだけでなく、

労働者が不足しているところからも出てゆくのである。たとえば、ブロンニツィ郡はモスクワ県の他の郡および他県から一、一二五人の労働者を吸収しているが、同時に一、二四六人の労働者をより工業的なモスクワ郡とボゴロークク郡に送りだしている。したがって、労働者は「手近に地元での仕事」を見いだせないからというだけでなく、よりよいところに行こうとして出てゆくわけである。この事実がどんなに初歩的なものであっても、地元での仕事を理想化して出稼営業を非難し、資本主義がつくりだす住民の可動性のもつ進歩的意義を無視するナロードニキ経済学者たちに、この事実をもう一度思いださせるべきであろう。

* それほど工業的でないスモレンスク県では、五、〇〇〇人の工場労働者にたいする質問は、彼らのうち八〇%がスモレンスク県の出身者であることをしめした（ジバンコフ、前掲書、第二巻、四四二ページ）。

**『モスクワ県統計報告集』、衛生統計篇、第四巻、第一部（モスクワ、一八九〇年）、二四〇ページ。

機械制大工業を工業のそれ以前の諸形態から区別する上記の特徴的な特質は、労働の社会化ということばで要約することができる。実際において、巨大な国民的および国際的市場めあての生産も、原料および補助材料の買入れにかんする国内の種々の地方およびさまざまな国との密接な商業的つながりの発展も、絶大な技術的進歩も、巨大企業による生産と人口との集中も、家父長制的生活様式の古びた伝統の破壊も、人口の可動性の創出も、働き手の欲望と啓発の水準の向上も——すべてこれらのことは、国の生産を、そしてそれとともに生産参加者をも、ますます社会化してゆく資本主義的過程の諸要素なのである。*

* 最後の三つの章で叙述した資料は、われわれの意見によれば、マルクスのあたえた工業の資本主義的諸形態と諸段階の分類のほうが、マニュファクチュアと工場とを混同して、買占人のための仕事を工業の特殊な形態として区別する、現在普及している分類（ヘルド、ビュッヒャー）よりも、正しくて内容があることをしめしている。マニュファクチュアと工場とを混同することは、純粋に外面上の標識を分類の基礎にもちこみ、資本主義のマニュファクチュア時代と機械制時代とを区別する技術、経済および生活環境の本質的特殊性を見おとすことを意味する。資本主義的家内労働についていえば、それは疑いもなく資本主義工業の機構のなかで非常に重要な役割を演じる。また、買占人のための仕事はまさに機械制以前の資本主義にこそとくに特徴的であることも疑いないが、しかしそれは（しかもかなりな規模で）資本主義の発展の種種のさまざまな時期に見られるのである。買占人のための仕事は、それを資本主義の発展の所与の時期あるいは所与の段階における工業の全機構と関連させることなしには、その意義を理解することはできない。農村の小店主の注文で篭を編

む農民も、ザヴィヤーロフの注文で小刀の柄を自宅でつくるパヴロヴォの柄作り工も、大工場主または商人の注文で衣類や靴や手袋を縫い、紙箱を貼る婦人労働者も、みな買占人のためにはたらいているのであるが、しかし資本主義的家内労働はこれらすべての場合に異なる性格と異なる意義をもっている。われわれは、もちろん、たとえば工業の前資本主義的形態の研究におけるビュッヒャーの貢献をけっして否定するものではないが、彼の資本主義工業形態の分類は正しくないと考える。――ストルーヴェ氏の見解(『ミール・ボージー』、一八九八年、第四号)には、彼がビュッヒャーの理論を(うえにしめした部分において)採用して、それをロシアの『クスターリ』に適用しているかぎり、われわれは同意できない。(これらのことを書いたとき――一八九九年――以来、ストルーヴェ氏は自分の科学的および政治的な発展の循環をついに完成させた。ビュッヒャーとマルクスのあいだ、自由主義経済学と社会主義経済学のあいだを動揺する人から、彼は最も純粋な自由主義的ブルジョアになった。この文の筆者は、この種の分子を社会民主党から一掃することに力相応につくしたことを、誇りとするものである(第二版の注)。

ロシアにおける機械制大工業と資本主義のための国内市場との関係の問題については、上記の資料は次のような結論にみちびく。ロシアにおける工場工業の急速な発展は、生産手段(建設材料、燃料、金属、その他)の巨大なそしてますます増大する市場をつくりだし、個人的消費ではなく生産的消費の対象の製造に従事する人口部分をとくに急速に増大させる。しかし個人的消費資料の市場も、ますます多くの人口部分を農業から商工業の仕事に転じさせる機械制大工業の成長の結果、急速に増大する。工場生産物の国内市場についていえば、この市場の形成過程は本書の初めの諸章でくわしく考察したところである。

第八章　国内市場の形成

いまやわれわれに残されていることは、これまでの諸章で考察した資料を総括して、国民経済のさまざまな分野が資本主義的に発展するなかでの各分野の相互依存性について表象をあたえるよう試みることである。

一　商品流通の成長

周知のように、商品流通は商品生産に先行し、後者の発生の一つの条件（だが唯一の条件ではない）をなしている。本書では、われわれは課題を、商品生産と資本主義的生産にかんする資料の分析に限定したので、農民改革後のロシアにおける商品流通の成長という重要な問題を詳細に論じるつもりはない。国内市場の成長が急速であることについて一般的な表象をあたえるためには、次のような簡単な指摘で十分である。

ロシアの鉄道網は、一八六五年の三、八一九キロメートルから一八九〇年の二九、〇六三キロメートルに延びた。すなわち七倍以上に増大した。＊これに相当する前進は、イギリスではより長い期間をかけておこなわれた（一八四五年——四、〇八二キロメートル、一八七五年——二六、八一九キロメートルで、六倍の増大）が、ドイツではより短い期間におこなわれた（一八四五年——二、一四三キロメートル、一八七五年——二七、九八一キロメートルで、一二倍の増大）。一年間に開通する鉄道のヴェルスタ数は、さまざまな期間にひどく変動した。たとえば、一八六八—一八七二年の五年間には八、八〇六ヴェルスタが開通したが、一八七八—一八八二年の五年間にはわずか二、二二一ヴェルスタであった。＊＊このような変動の規模によって、労働者にたいする需要を拡大したり縮小したりする資本主義にとってどれだけ膨大な失業者の予備軍が必要であるかを、判断することができよう。ロシアの鉄道建設の発展のなかでは、非常な高揚期が二つあった。すなわち、六〇年代の終り（および七〇年代の初め）と九〇年代の後半である。一八六五年から一八七五年にかけて、ロシアの鉄道網の年平均増加は一、五〇〇キロメートルであり、一八九三年から一八九七年にかけては約二、五〇〇キロメートルであった。

* 〈Uebersichten der Weltwirtschaft〉(『世界経済概観』)、前出箇所。一九〇四年には、ヨーロッパ・ロシア（ロシア領ポーランド、カフカーズおよびフィンランドをふくめた）では五四、八七八キロメートル、アジア・ロシアでは八、三五一キロメートルである（第二版への注）。

** ヴェ・ミハイロフスキー『ロシア鉄道網の発展』、『自由経済学会報告集』、一八九八年、第二号。

鉄道による貨物輸送は次のような規模と算定されている。すなわち、一八六八年——四億三九〇〇万プード、一八七三年——一一億一七〇〇万プード、一八八一年——二五億三二〇〇万プード、一八九三年——四八億四六〇〇万プード、一八九六年——六一億四五〇〇万プード、一九〇四年——一一〇億七二〇〇万プード。旅客輸送もこれに劣らず急速に増大した。すなわち、一八六八年——一〇四〇万人、一八七三年——二二七〇万人、一八八一年——三四四〇万人、一八九三年——四九四〇万人、一八九六年——六五五〇万人、一九〇四年——一億二三六〇万人。*

* 『陸軍統計集』、五一一ページ。——ニコライ—オン氏『概要』、付録。——『生産力』、第一七冊、六七ページ。——『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年第四三号。——『ロシア年鑑』、一九〇五年、サンクト・ペテルブルグ、一九〇六年。

水路による運輸の発展は、次のとおりである（ロシア全体にかんする資料）。*（第一〇五表）

* 『陸軍統計集』、四四五ページ。——『生産力』、第一七冊、四二ページ。——『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年、第四四号。

ヨーロッパ・ロシアの国内水路による貨物輸送量は、一八八一年——八億九九七〇万プード、一八九三年——一一億八一五〇万プード、一八九六年——一五億五三〇〇万プードであった。これらの貨物の価額はそれぞれ、一億八六五〇万ルーブリ、二億五七二〇万ルーブリ、二億九〇〇〇万ルーブリであった。

ロシアの商船隊は一八六八年に、積載量一四、三〇〇ラスト(101)の五一隻の汽船と積載量四一、八〇〇ラストの七〇〇隻の帆船からなっていたが、一八九六年には、積載量一六一、六〇〇ラストの五二二隻の汽船からなっていた。*

* 『陸軍統計集』、七五八ページ、および『大蔵省年報』、第一冊、三六三ページ。——『生産力』、第一七冊、三〇ページ。

外洋のあらゆる港との商業航海の発展は次のとおりであった。一八五六—一八六〇年の五年間には出入船舶の数は年平均一八、九〇一隻で、その積載量は三、七八三、〇〇〇トン、一八八六—一八九〇年には年平均二三、二〇一隻（一二三%増）、積載量一三、八四五、〇〇〇トン（二六六%増）であった。したがって、積載量は三2/8倍にふえたこと

〔第 105 表〕

年次	汽船		汽船以外の船舶の数	積載力（100万プード）			価額（100万ルーブリ）			乗組員数		
	隻数	馬力		汽船	汽船以外の船舶	合計	汽船	汽船以外の船舶	合計	汽船	汽船以外の船舶	合計
1868年	646	47,313	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1884年	1,246	72,105	20,095	6.1	362	368.1	48.9	32.1	81	18,766	94,099	112,865
1890年	1,824	103,206	20,125	9.2	401	410.2	75.6	38.3	113.9	25,814	90,356	116,170
1895年	2,539	129,759	20,580	12.3	526.9	539.2	97.9	46.0	143.9	32,689	85,608	118,297

になる。三九年間に（一八五六年から一八九四年までに）、積載量は五・五倍にふえたが、そのさいロシアの船舶と外国の船舶とを区別すると、前者の隻数はこの三九年間に三・四倍（八二三隻から二、七八九隻に）、その積載量は一二・一倍（一一二、八〇〇トンから一、三六八、〇〇〇トンに）増大したが、後者の隻数は一六%（一八、二八四隻から二一、一六〇隻に）、その積載量は五・三倍（三、四四八、〇〇〇トンから一八、二六七、〇〇〇トンに）増大した。* なお、出入船舶の積載量の規模は、個々の年についてもきわめていちじるしく変動している（たとえば、一八七八年——一三〇〇万トン、一八八一年——八六〇万トン）ことを、注意しておこう。この変動によって、雑役夫、港湾労働者その他にたいする需要の変動について、ある程度判断することができる。資本主義はここでも、いつも仕事にあふれていて、その仕事がたとえ恒常的なものでなくても、要求があればすぐにそれにありつこうと待ちかまえている、多数の人々の存在を必要としているのである。

* 『生産力』、ロシアの外国貿易、五六ページ以下。

外国貿易の発展は次の資料から明らかである。*（第一〇六表）

* 前掲書、一七ページ。一九〇四年度『ロシア年鑑』、サンクト・ペテルブルグ、一九〇五年。

銀行取引と資本の蓄積との規模については、次の資料が一般的表象をあたえてくれる。国立銀行の支払総額は、一八六〇—一八六三年の一億一三〇〇万ルーブリ（一八六四—一八六八年は一億七〇〇〇万ルーブリ）から一八八四—一八八八年の六億二〇〇〇万ルーブリに増加し、当座預金額は、一八六四—一八六八年の三億三五〇〇万ルーブリから一八八四—一八八八年の一四億九五〇〇万ルーブリに増加した。* 貸付貯蓄組合および同金庫（農業と工業の）の取引高は、一八七二年の二七五万ルーブリ（一八七五年は二一八〇万ルーブリ）から一八九二年の八二六〇万ルーブ

〔第 106 表〕

年次	フィンランドを除くロシアの住民数（100万人）	輸出入総額（100万紙幣ルーブリ）	人口1人あたりの外国貿易取引額（ルーブリ）
1856—1860年	69.0	314.0	4.55
1861—1865年	73.8	347.0	4.70
1866—1870年	79.4	554.2	7.00
1871—1875年	86.0	831.1	9.66
1876—1880年	93.4	1,054.8	11.29
1881—1885年	100.6	1,107.1	11.00
1886—1890年	108.9	1,090.3	10.02
1897—1901年	130.6	1,322.4	10.11

り、一九〇三年の一億八九六〇万ルーブリに増加した。** 土地抵当負債は一八八九年から一八九四年までに次のような規模で増加した。すなわち、抵当に入れられた土地の評価額は一三億九五〇〇万ルーブリから一八億二七〇〇万ルーブリに、また貸付額は七億九一〇〇万ルーブリから一〇億四四〇〇万ルーブリに上昇した。*** 貯蓄金庫の業務はとくに八〇年代と九〇年代に発展した。一八八〇年には七五の金庫があったが、一八九七年には四、三一五（そのうち三、四五四は郵便局）がかぞえられた。預金額は、一八八〇年——四四〇〇万ルーブリ、一八九七年——二億七六六〇万ルーブリであった。年末の残高は、一八八〇年には九〇〇〇万ルーブリ、一八九七年には四億九四三〇万ルーブリであった。資本の年間増加額については、一八九一年と一八九二年の飢饉の年（五二九〇万ルーブリと五〇五〇万ルーブリ）と、最近の二年（一八九六年の五一六〇万ルーブリと一八九七年の六五五〇万ルーブリ）がとくにめだっている。****

* 『ロシアにかんする報告集』、一八九〇年、序文一〇九ページ。

** 『ロシアにかんする報告集』、一八九六年、表、一二七ページ。

*** 同所。

**** 『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九八年第二六号。

〔第 107 表〕　ロ　シ　ア

預金の大きさ	預金者数 (1000人)	%	預金額 (100万ルーブリ)	%
25ルーブリ未満	1,870.4	38.7	11.2	1.2
25—99ルーブリ	967.7	20.0	52.8	5.4
100—499ルーブリ	1,380.7	28.6	308.0	31.5
500ルーブリ以上	615.5	12.7	605.4	61.9
総計	4,834.3	100	977.4	100

フ　ラ　ン　ス

預金の大きさ	預金者数 (1000人)	%	預金総額 (100万フラン)	%
100フラン未満	5,273.5	50.1	143.6	3.3
100—499フラン	2,197.4	20.8	493.8	11.4
500—999フラン	1,113.8	10.6	720.4	16.6
1000フラン以上	1,948.3	18.5	2,979.3	68.7
総計	10,533.0	100	4,337.1	100

最新の情報は、貯蓄金庫のなおいっそうの発展をしめしている。一九〇四年には、ロシア全体で貯蓄金庫の数は六、五五七、預金者数は五一〇万人、預金総額は一一億〇五五〇万ループリであった。ついでながらいえば、わが国の古いナロードニキも、社会主義における新しい日和見主義者も、貯蓄金庫の成長があたかも「人民」福祉の標識であるかのように、たいへん（おだやかに表現すれば）素朴なことを、何度も述べてきた。だから、ロシア（一九〇四年）とフランス（一九〇〇年——『労働局通報』、一九〇一年第一〇号の情報）における貯蓄金庫への預金の配分を比較することは、おそらく、よけいなことではないであろう。〔第一〇七表〕

ナロードニキ的＝修正主義的＝カデット的な弁護論者にとって有利な材料が、ここにどれだけあるというのだろう！ついでながら、興味あることには、ロシアでは、預金は預金者の生業と職業の一

二のグループ別にも分類されている。預金の最も多く――二億二八五〇万ルーブリ――が、農業と農村の諸営業のものであり、そしてそれらの預金がとくに急速に増大していることがわかる。農村は文明化しつつあり、百姓の零落を営業の種にすることがますます有利になりつつある。

だが、われわれの当面のテーマにたちかえろう。われわれが見るように、資料は商品流通と資本蓄積の巨大な成長を証明している。国民経済のすべての分野で資本投下のための場がどのように形成されてきたか、そして、商業資本がどのように産業資本に転化していったか、すなわち、前者がどのように生産に向けられて、生産当事者間の資本主義的関係をつくりだしてきたか、――このことは、さきにしめしたところである。

二　商工業人口の増加

すでに述べたように、農業人口の減少による工業人口の増加は、いかなる資本主義社会においても必然的な現象である。農業からの工業の分離がどのように順を追って完成されるかということもすでに考察したから、いまや残るところは、この問題について総括をすることだけである。

（一）　都市の成長

いま考察している過程を最も明瞭に表現するものは都市の成長である。農民改革後の時代のヨーロッパ・ロシア（五〇県）におけるこの成長にかんする資料を、つぎにかかげよう。* 〔第一〇八表〕

* 一八六三年については、『統計時報』（第一巻、一八六六年）と『陸軍統計集』の数字。オレンブルグ県とウファ県の都市人口の数字は、都市の表によって修正してある。このため、わが国の都市人口は『陸軍統計集』がしめしている六、〇八七、一〇〇人ではなく、六、一〇五、一〇〇人となる。――一八八五年については、『一八八四／八五年度のロシアにかんする報告集』の資料。――一八九七年については、一八九七年一月二八日の調査（『一八九七年の第一回ロシア帝国国勢調査』、中央統計委員会刊行、サンクト・ペテルブルグ、一八九七年および一八九八年、第一冊および第二冊）の数字。都市の定住人口は、一八九七年の調査では一一、八三〇、五〇〇人、すなわち一二・五五％である。われわれは都市の実在人口をとった。――なお、一八六三年、一八八五年、一八九七年の資料が完全に同質的で比較可能であるとはけっしてうけあえないということを、注意しておこう。だからわれわれは最も一般的な関係だけを比較するにとどめ、大都市にかんする資料は別にしてある。

このように、都市人口のパーセントはたえず増加してい

る。すなわち、農業から商工業的職業への人口の転出が起こっている。[*]都市は、それ以外の人口にくらべて二倍も急速に増加している。すなわち、一八六三年から一八九七年までに、総人口は五三・三%、農村人口は四八・五%増大したが、都市人口は九七・〇%増大した。一一年間（一八八五—一八九七年）に、「農村人口の都市への流入は最小限」二五〇万人、[**]すなわち、年に二〇万人以上であると、ヴェ・ミハイロフスキー氏は算定している。

* 「農業的性格をもつ都市居住地の数はきわめて少なく、その住民数は、都市住民総数と比較すれば、まったくとるにたりない」（著書『収穫と穀物価格の影響』におけるグリゴリエフ氏、第二巻、一二六ページ）。

** 『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九七年六月、一一三ページ。

大きな工業中心地や商業中心地となっている都市の人口は、都市人口一般よりもはるかに急速に増加している。五万人以上の住民をもつ都市の数は、一八六三年から一八九七年までに三倍以上になった（一三から四四へ）。一八六三年には、都市住民総数のうちの約二七%（六一〇万人のうちの一七〇万人）だけが、このような大中心地に集中していたが、一八八五年には約四一%（九九〇万人のうちの四一〇万人）、[*]一八九七年にはすでに半分以上の約五三%（一二〇〇万人のうちの六四〇万人）が集中していた。このように、六〇年代には、都市人口の性格がもっぱら、それほど大きくない都市の人口によって規定されていたのにたいして、九〇年代には、大都市が完全に優勢になった。一八六三年に最も大きかった一四の都市の人口は、一七〇万人から四三〇万人に、すなわち一五三%増加したが、都市人口全体は九七%増大したにすぎない。したがって、大工業中心地の巨大な成長と一連の新しい中心地の形成は、農民改革後の時代の最も特徴的な徴候の一つである。

* グリゴリエフ氏は表をあげているが（前掲書、一四〇ページ）、そこからは次のことが明らかである。すなわち、一八八五年には、都市総数の八五・六%が人口二万人以下であり、そこには都市住民の三八・〇%がいた。また都市総数の一二・四%（六六〇のうちの八二）が人口二、〇〇〇人以下であり、そこには都市住民総数の一・一%（九九六万二〇〇〇人のうちの一一万人）がいたにすぎなかった。

（二）　国内植民の意義

われわれがさきにすでに指摘したように（第一章第二節）、農業人口の減少による工業人口の増加という法則を理論が引きだすのは、工業では可変資本は絶対的には増加するが（可変資本の増加は工業労働者の増加と商工業人口全体の増加を意味する）、農業では、「一定の地所を利用するために必要な可変資本は絶対的に減少する」という事情

の人口数をもつ都市			下記の人口をもつ都市の人口数（単位 1000人）				
10万―20万	5万―10万	大都市の総数	20万以上	10万―20万	5万―10万	総計	1863年には最大級の都市だった14都市の人口（1000人）
1	10	13	891.1	119.0	683.4	1,693.5	1,741.9
7	21	31	1,854.8	998.0	1,302.7	4,155.5	3,103.7
9	30	44	3,238.1	1,177.0	1,982.4	6,397.5	4,266.3

からである。そしてマルクスは次のようにつけくわえている。「したがって、可変資本は新しい土地が耕作されるかぎりでのみ増大しうるが、しかしそれはふたたび、非農業人口のさらに大きな増大を前提する」[103]。ここから明らかなように、工業人口の増加という現象を純粋な姿で観察することができるのは、ただ、すでに人が住んでおり、すべての土地がすでに占拠されているような地域をとりあげる場合だけである。資本主義によって農業から押しだされるこのような地域の住民にとっては、工業中心地か他の国に移住する以外には活路はない。だが、まだすべての土地が占拠されているわけではなく、まだ全土に人が住んでいるわけではない地域をとりあげると、事態は本質的に変わってくる。このような地域の住民は、人が住んでいる地区で農業から押しだされても、その地域の人が住んでいない部分に移住して、「新しい土地の耕作」にとりかかることができる。農業人口の増加が起こり、その増加が、工業人口の増加ほどではないにしても、それに劣らず急速にすすむ（一定の期間）ことがありうる。この場合、われわれのまえに二つの異なる過程があるわけである。すなわち、(一) すでに人が住んでいる古い国あるいは国の一部分における資本主義の発展と、(二)「新しい土地」における資本主義の発展である。第一の過程は、すでに形成された資本主義的関係のいっそうの発展を、第二の過程は、新しい地域における新しい資本主義的関係の形成を、表現している。第一の過程は資本主義の奥への発展を意味し、第二の過程はそれの横への発展を意味する。これらの過程を混同すると、不可避的に、農業から商工業的職業に住民を転じさせる過程についての誤った表象に落ちこまないわけにはいかない、ということは明らかである。

　農民改革後のロシアはわれわれに、この二つの過程がまさに同時に現われていることをしめしている。農民改革後

〔第 108 表〕

年次	ヨーロッパ・ロシアの人口（単位 1000人）			都市人口の%	下記の数
	総数	都市	郡		20万以上
1863年	61,420.5	6,105.1	55,315.4	9.94	2
1885年	81,725.2	9,964.8	71,760.4	12.19	3
1897年	94,215.4	12,027.1	82,188.3	12.76	5

の時代の初期の六〇年代には、ヨーロッパ・ロシアの南部と東部の辺境地方は、ほとんど人が住んでいない地域であって、そこには農業的な中部ロシアからたくさんの移住者が流れこんだ。新しい土地に新しい農業人口がこのように形成されたことは、これと並行してすすんでいる農業から工業への人口の転出を、ある程度見えにくくした。いま記述しているようなロシアの特質を都市人口にかんする資料によって明瞭にしめすためには、ヨーロッパ・ロシアの五〇の県を個々のグループに分けることが必要である。一八六三年と一八九七年におけるヨーロッパ・ロシアの九つの地区の都市人口にかんする資料をあげよう。〔第一〇九表〕

われわれがあつかっている問題で最も大きな意義をもつのは、次の三つの地区にかんする資料である。（一）非農業的＝工業的地区（最初の二つのグループの一一県で、首都のある両県をふくむ）*。これは、他の地区への移住がきわめて微弱だった地区である。（二）中部の農業的地区（一三県――第三グループ）。この地区からの移住はきわめて活発であったが、それは部分的には前記の地区へ、主としては第三の地区へのものであった。（三）農業的辺境地方（第四グループの九県）。これは、農民改革後の時代に植民された地区である。これら三三県全体における都市人口のパーセントは、表から明らかなように、ヨーロッパ・ロシア全体における都市人口のパーセントとほとんど違わない。

* われわれがとりあげたほかならぬ非農業的諸県を、首都のある両県といっしょにすることの正しさは、両首都の人口が主としてこれらの県からの転出者によって補充される、ということによって証明される。一八九〇年一二月一五日のペテルブルグの人口調査によれば、そこには全部で七二万六〇〇〇人の農民と町民がいたが、そのうち五四万四〇〇〇人（すなわち四分の三）は、われわれが第一の地区としてまとめた一一の県の農民と町民であった。

〔第 109 表〕

ヨーロッパ・ロシアの県のグループ	県の数	人口 (1000人) 1863年 総数	1863年 農村	1863年 都市	1897年 総数	1897年 農村	1897年 都市	都市人口の% 1863年	都市人口の% 1897年	1863年から1897年までの人口増加率(%) 総計	農村	都市
I) 首都のある県	2	2, 738. 4	1, 680. 0	1, 058. 4	4, 541. 0	1, 989. 7	2, 551. 3	38. 6	56. 2	65	18	141
II) 工業的および非農業的諸県	9	9, 890. 7	9, 165. 6	725. 1	12, 751. 8	11, 647. 8	1, 104. 0	7. 3	8. 6	29	26	52
I と II	11	12, 629. 1	10, 845. 6	1, 783. 5	17, 292. 8	13, 637. 5	3, 655. 3	14. 1	21. 1	36	25	105
III) 農業的中部, 小ロシア, ヴォルガ中流の諸県	13	20, 491. 9	18, 792. 5	1, 699. 4	28, 251. 4	25, 464. 3	2, 787. 1	8. 3	9. 8	38	35	63
IV) ノヴォロシア, ヴォルガ下流および東部の諸県	9	9, 540. 3	8, 472. 6	1, 067. 7	18, 386. 4	15, 925. 6	2, 460. 8	11. 2	13. 3	92	87	130
I — IV の合計	33	42, 661. 3	38, 110. 7	4, 550. 6	63, 930. 6	55, 027. 4	8, 903. 2	10. 5	13. 9	49	44	95. 6
V) バルト海沿岸の諸県	3	1, 812. 3	1, 602. 6	209. 7	2, 387. 0	1, 781. 6	605. 4	11. 5	25. 3	31	11	188
VI) 西部諸県	6	5, 548. 5	4, 940. 3	608. 2	10, 126. 3	8, 931. 6	1, 194. 7	10. 9	11. 8	82	81	96
VII) 西南部諸県	3	5, 483. 7	4, 982. 8	500. 9	9, 605. 5	8, 693. 0	912. 5	9. 1	9. 5	75	74	82
VIII) ウラル諸県	2	4, 359. 2	4, 216. 5	142. 7	6, 086. 0	5, 794. 6	291. 4	3. 2	4. 7	39	37	105
IX) 極北諸県	3	1, 555. 5	1, 462. 5	93. 0	2, 080. 0	1, 960. 0	120. 0	5. 9	5. 8	33	34	29
総計	50	61, 420. 5	55, 315. 4	6, 105. 1	94, 215. 4	82, 188. 2	12, 027. 2	9. 94	12. 76	53. 3	48. 5	97. 0

それぞれのグループにはいる県は次のとおり.
I) サンクトーペテルブルグ, モスクワ. II) ウラヂーミル, カルーガ, コストロマ, ニジェゴロド, ノヴゴロド, プスコフ, ス

モレンスク, トヴェーリ, ヤロスラヴリ.
III) ヴォロネジ, カザン, クルスク, オリョール, ペンザ, ポルタワ, リャザン, サラトフ, シンビールスク, タンボフ, トゥーラ, ハリコフ, チェルニーゴフ.
IV) アストラハン, ベッサラビア, ドン, エカテリノスラフ, オレンブルグ, サマラ, タヴリーダ, ヘルソン, ウファ.
V) クールランド, リフランド, エストランド. VI) ヴィリナ, ヴィテブスク, グロドノ, コヴノ, ミンスク, モギレフ.
VII) ヴォルイニ, ポドリスク, キエフ. VIII) ヴャトカ, ペルミ. IX) アルハンゲリスク, ヴォログダ, オロネッツ.

第一の非農業的あるいは工業的な地区では、われわれは、都市人口のパーセントがとくに急速に高まっていることを見る。すなわち、一四・一%から二一・一%への上昇である。農村人口の増加はここでは非常に微弱であって、ロシア全体にくらべてほとんど半分である。都市住民の増加は、その逆に、平均よりもいちじるしく高い（九七%にたいして一〇五%）。もしロシアを西ヨーロッパの工業諸国と比較するのなら（わが国でしばしばおこなわれているように）、それらの諸国をただこれらの地区だけと比較しなければならない。なぜなら、この地区だけが工業的な資本主義諸国とほぼ同質の条件のもとにあるからである。

第二の中部の農業的地区では、われわれは別の情景を見る。都市人口のパーセントはここでは非常に低く、平均よりも緩慢に増加している。一八六三年から一八九七年までの人口の増加は、都市人口も農村人口も、ここではロシアの平均よりもいちじるしく微弱である。この現象は、この地区から辺境地方への移民の大きな流れがあったためである。ヴェ・ミハイロフスキー氏の計算によれば、一八八五年から一八九七年までに約三〇〇万人、すなわち人口の一〇分の一以上がここから出ていった。*

* 前掲書、一〇九ページ。「西ヨーロッパの最近世史においてこの移動に匹敵するものはない」（一一〇—一一一ページ）。

第三の地区すなわち辺境地方では、われわれが見るように、都市人口のパーセントは平均よりもいくらかすこしか増大しなかった（一一・二%から一三・三%へ、すなわち比率で一〇〇対一一八であるが、平均は九・九四%から一二・七六%へ、すなわち比率で一〇〇対一二八である）。ところが、都市人口の増加は、ここでは微弱でないどころか、平均よりはるかに高い（九七%増にたいして一三〇%増）。したがって農業から工業への人口の転出はきわめて活発であったのだが、その転出は、移住による農業人口の著増によっておおいかくされている。この地区では、農業人口はロシアの平均四八・五%にたいして八七%も増加した。個々の県については、人口の工業化の過程のこのよう

な不明確化はさらに顕著である。たとえば、タヴリーダ県では、一八九七年の都市人口のパーセントは一八六三年と同じであったし(一九・六%)、ヘルソン県ではこのパーセントは低下さえしている(二五・九%から二五・四%へ)。とはいえ、この両県における都市の成長は首都の成長からほんのすこししか立ちおくれなかった(首都のある両県における一四一%増にたいして、一三一%増と一三五%増)。したがって、新しい土地における新しい農業人口の形成は、それはそれで非農業人口のさらにいっそう大きな増加をもたらすのである。

(三) 工場的および商工業的町村の成長

都市のほかに工業中心地という意義をもつのは、第一に、つねに都市といっしょに考えられているわけではないが、大都市の周辺のますます大きな地区を包括している都市近郊であり、第二に、工場的な町村である。このような工業中心地は、*都市人口のパーセントがきわめて低い工業的諸県にとくに多い。** さきにあげた都市人口にかんする地区別の資料の表がしめすところでは、九つの工業県で、このパーセントは一八六三年には七・三%、一八九七年には八・六%であった。問題は、これらの県の商工業人口が主として都市にではなく、工業的な村落に集中していることにある。ウラヂーミル、コストロマ、ニジェゴロドおよびその他の県の「都市」のうちには、三、〇〇〇人、二、〇〇〇人、さらには一、〇〇〇人以下の人口しかないものが少なくない。ところが、一連の「村落」は、工場労働者だけでも二、〇〇〇—三、〇〇〇—五、〇〇〇人をかぞえている。『ヤロスラヴリ県概観』(第二冊、一九一ページ)の編者が正当に述べているように、農民改革後の時代には、「都市はさらにより急速に成長するようになったが、それらにくわえて新しい型の、すなわち都市と農村との中間の型の居住地——工場中心地——の成長があった」。これらの中心地の巨大な成長にかんする資料とそれらに集中している工場労働者の数にかんする資料は、さきにすでにあげておいた。われわれが見たように、このような中心地は、ロシア全土にわたって、工業的諸県だけでなく、南部にも少なくない。ウラルでは都市人口のパーセントは最も低い。すなわち、ヴャトカとペルミの両県では、一八六三年は三・二%、一八九七年は四・七%である。だがここに、「都市」人口と工業人口の大きさの関係をしめす例がある。ペルミ県のクラスノウフィムスク郡では、都市人口は六、四〇〇人(一八九七年)であるが、一八八八—一八九一年のゼムストヴォ調査の計算では、この県の工場地域の住民は八四、七〇〇

〇人であって、そのうちの五六、〇〇〇人はまったく農業に従事しておらず、主として土地から生活資料を得ているのはわずか五、六〇〇人である。ゼムストヴォ調査によれば、エカテリンブルグ郡では、六、五〇〇人が土地をもたず、八、一〇〇人は採草地しかもっていない。つまり、たった二つの郡の都市の外部の工業人口が、県全体の都市人口（一八九七年に一九五、六〇〇人！）よりも多いのである。

＊ それらについては、さきの第七章第八節と第七章への付録Ⅲを見よ。

＊＊ すでにコルサックが指摘したこの事情の意義については、ヴォルギン氏の公正な意見を参照（前掲書、二一五―二一六ページ）。

最後に、工場町のほかに、工業中心地の意義をもつものに、さらに商工業村がある。それらは、大きなクスターリ地区の頂点にあるか、あるいは、河川の沿岸、鉄道の駅のそばに位置しているなどのおかげで、農民改革後の時代に急速に発展したものである。このような村の実例は、第六章第二節でいくつかあげておいた。そのさい、われわれが見たように、この種の村は、都市と同様に、農村から人口を吸引しており、また、それらはふつう住民の読み書き能力が高いという特色をもっている。[＊] 都市的な商工業的居住地と非都市的な商工業的居住地との対照的な意義をしめすために、さらに見本として、ヴォロネジ県についての資料をとりあげよう。ヴォロネジ県についての『集成』は、県の八つの郡について村落をグループ分けした組合せ表をのせている。[(三〇三)] これらの郡には八つの都市があり、その人口は五六、一四九人（一八九七年）である。ところが村落のうちでは、九、三七六世帯、五三、七三二人の住民をもつ、すなわち都市よりもはるかに大きな四つの村落がめだっている。これらの村落には、二四〇の商業施設と四〇四の工業施設がある。総戸数のうち六〇％はまったく土地を耕しておらず、二一％は賃労働によるか分益小作で耕作しており、七一％は役畜も農具ももたず、六三％は一年中穀物を買っており、八六％は営業に従事している。これらの中心地の全人口を商工業人口に入れても、われわれは、商工業人口の規模を過大視しないだけでなく、むしろまだ過小に見ることになる。なぜなら、これら八つの郡で、全部で二一、九五六の経営がまったく土地を耕作していないからである。またわれわれがとりあげた農業県でもやはり、都市の外部にいる商工業人口は都市におけるよりも少なくない。

＊ 非常に大きな人口中心地となっている村の数がロシアにどれだけ多いかについては、次のような（古くなっているとはいえ）『陸軍統計集』の資料によって判断することができる。

すなわち、ヨーロッパ・ロシアの二五県では、二、〇〇〇人以上の住民をもつ村落が六〇年代には一、三三四かぞえられた。それらのうち、一〇八の村は五、〇〇〇―一五、〇〇〇人、六つは一〇、〇〇〇―一五、〇〇〇人、一つは一五、〇〇〇―二〇、〇〇〇人、そしてもう一つが二〇、〇〇〇人以上の住民をもっていた（一六九ページ）。資本主義の発展は、ひとりロシアにかぎらずすべての国で、公式には都市にかぞえられていない新しい工業中心地の形成をもたらした。「都市と農村のあいだの相違は消えさってゆく。すなわち、発達しつつある工業都市の付近では、このことは、工業施設と労働者住宅が都市の近郊と周辺に移転する結果として起こるし、没落しつつある小都市の付近では、それらが周辺の村落と接近する結果として、また、大きな工業的村落が発展する結果として起こる。……都市的な民住地と農村的な民住地のあいだの相違は、多数の過渡的な構造のものがあるため均らされる。統計学はずっと以前からこのことを認識して、法制史的な都市概念をしりぞけそれにかえて、民住地を住民数によってのみ区別する統計学的概念をもってきた」（ビュッヒャー『国民経済の成立』、テュービンゲン、一八九三年、二九六―二九七および三〇三―三〇四ページ）。ロシアの統計学は、この点でも、ヨーロッパのそれからひどく立ちおくれている。ドイツとフランスでは（『ステイツマンズ・イアブック』、五三六および四七四ページ）、都市にかぞえられるのは、二、〇〇〇人以上の住民をもつ居住地であり、イギリスでは、net urban sanitary districts〔純都市型の衛星地域〕、すなわち工場村その他を都市にかぞえている。したがって、「都市」人口にかんするロシアの資料をヨーロッパのそれと比較することはまったく不可能である。

（四）　非農業的出稼営業

だが、工場的な町村と商工業的な町村とを都市に加えても、まだロシアの工業人口の全体をつくすにはほど遠い。移転の自由の欠如や農民共同体の身分的な閉鎖性のため、ロシアには次のようなきわだった特質がある。すなわち、ロシアでは、工業中心地での仕事によって生活手段を獲得し、それらの中心地で年の一部分をすごす農村人口の少なからぬ部分が、工業人口にかぞえられるべきなのである。われわれがいうのは、いわゆる非農業的出稼営業のことである。官庁的な観点からすれば、これらの「営業者」は、「副業的な賃仕事」をもつにすぎない農耕農民であり、またナロードニキ的経済学の代表者の大部分は、ずるくもよく考えないで、この観点を受けいれている。この観点が根拠のないものであることは、さきにいろいろと述べたいまでは、より詳細に証明する必要はない。いずれにせよ、この現象のとりあげかたが人によってどれだけちがっていても、次のことには疑問の余地がない。すなわち、この現象は、農業から商工業的職業への人口の転出を表現しているのである。* 都市があたえる工業人口の規模についての表象

が、この事実によってどれだけ変化するかは、次の例から判断することができる。カルーガ県では、都市人口のパーセントはロシアの平均よりもはるかに低い（一二・八％にたいして八・三％）。だが、一八九六年度のこの県の『統計的概観』は、旅券にかんする資料によって、出稼労働者の不在月の総数を算出している。それによれば、その総数は一、四九一、六〇〇月であるが、これを一二で割ると、不在人口は一二四、三〇〇人、すなわち「全人口の約一一％」（前掲書、四六ページ）となる！　この人口を都市人口（一八九七年―九七、九〇〇人）に加えると、工業人口のパーセントはきわめて大きなものとなるであろう。

＊　ニコライ―オン氏は、ロシアにおける人口の工業化の過程にまったく注意をはらわなかった！　ヴェ・ヴェ氏は、出稼ぎの増加が農業からの人口の転出をあらわすことに注意を向け、そのことを認めた（『資本主義の運命』、一四九ページ）。しかし彼は、「資本主義の運命」についての自分の考えの総体のなかにこの過程をもちこまなかっただけでなく、「このことはすべてきわめて自然な」（資本主義社会にとって？ところでヴェ・ヴェ氏はこの現象のない資本主義を考えることができるのだろうか？）「そしてほとんど望ましいものである、と認める人々がいる」（前出）、ということについての悲嘆でもってそれを塗りつぶそうと努めたのである。ヴェ・ヴェ氏よ、「ほとんど」どころでなく、望ましいのだ！

もちろん、非農業的出稼労働者の一定部分は、都市の実在人口数のなかに記録されているし、すでに述べた非都市的な工業中心地の人口のなかにもはいっている。だがそれは一部分にすぎない。なぜなら、この人口は浮動的なものであるから、個々の工業中心地の人口調査によってそれを算定することは困難だからである。さらに、人口調査はふつう冬におこなわれるが、営業的労働者の大部分は春に家を出るからである。つぎに、主要な非農業的出稼県の一つにかんする資料をあげよう。*〔第一一〇表〕

＊『一八八〇年と一八八五年のモスクワ県の農民人口に交付された居住証明書』。――『一八九七年度トヴェーリ県統計年鑑』。――ジバンコフ『スモレンスク県における出稼営業』、スモレンスク、一八九六年。――同『出稼賃仕事の影響……』、コストロマ、一八八七年。――『プスコフ県農民人口の諸営業』、プスコフ、一八九八年。――モスクワ県についてのパーセントの誤りは、絶対数の資料があたえられていないので、訂正できなかった。――コストロマ県については郡別の資料があるだけで、それもパーセントでしめされているだけである。だからわれわれは、郡別の資料の平均をとらなければならなかった。その結果、われわれはまたコストロマ県にかんする資料をとくに別にしている。ヤロスラヴリ県については出稼営業者のうち一年中不在なのは六八・七％、秋と冬に不在なのは一二・六％、春と夏に不在なのは一八・七％と計算されている。注意しておくが、ヤロスラヴリ県にかんする資

〔第 110 表〕

交付された居住証明書数の百分率分布

季節別	モスクワ県（1885年）		トヴェーリ県（1897年）	スモレンスク県（1895年）	プスコフ県（1895年）旅券		コストロマ県（1880年）		
							男		女
	男	女	男と女		男	女	旅券	証明書	旅券および証明書
冬	19.3	18.6	22.3	22.4	20.4	19.3	16.2	16.2	17.3
春	*32.4*	*32.7*	*38.0*	*34.8*	*30.3*	*27.8*	*43.8*	*40.6*	*39.4*
夏	20.6	21.2	19.1	19.3	22.6	23.2	15.4	20.4	25.4
秋	27.8	27.4	20.6	23.5	26.7	29.7	24.6	22.8	17.9
合計	100.1	99.9	100	100	100	100	100	100	100

料（『ヤロスラヴリ県概観』、第二冊、ヤロスラヴリ、一八九六年）はさきの資料と比較できない。なぜなら、それは聖職者などの証言にもとづくものであって、旅券にかんする資料にもとづくものではないからである。

交付された旅券の数は、どこでも春に一番多い。したがって、一時的に不在である労働者の大部分は、都市の人口調査にははいってこない*。だが、これらの一時的な都市住民は、農村人口にかぞえるよりも都市人口にかぞえるほうがはるかに正当である。「一年を通じて、あるいは年の大部分、都市における手間稼ぎから生活手段を引きだしている家族にとっては、親族的および納税上の結びつきをもつにすぎない農村よりも、その生存を保障している都市を定住地とみなすほうが、はるかに根拠がある**」。いまでもこのような納税上の結びつきがどれだけ大きな意義をもっているかは、たとえば、次のことからもわかる。すなわち、出稼ぎのコストロマ人のうち、「それ（土地）にたいして租税のわずかな一定部分を受けとる所有主はまれであって、ふつうは、借地人がその土地のまわりに垣をめぐらすという条件だけで土地を貸しだし、租税はすべて所有主自身が支払うのである」（デ・ジバンコフ『女人国』、コストロマ、一八九一年、二一ページ）。また、『ヤロスラヴリ県概観』（第二冊、ヤロスラヴリ、一八九六年）では、出稼営業の

労働者にとっては金を払って農村や分与地から解放されることが必要だ、という指摘がなんどもなされているのを、われわれは見うける（二八、四八、一四九、一五〇、一六六ページその他***）。

* たとえば、周知のように、サンクト・ペテルブルグ市の近郊地では、夏には人口がいちじるしくふえる。

** 『一八九六年度カルーガ県の統計的概観』、カルーガ、一八九七年、第二篇、一八ページ。

*** 「出稼営業は……都市のとどまることを知らない成長過程をおおいかくす形態である……。ロシアの共同体的土地所有と財政的および行政的生活のいろいろな特質のため、農民は、西欧で可能なほど容易には都市住民になりかわることができない。……法律的な糸が彼（出稼人）の農村との結びつきを維持しているが、しかし本質的には、その職業、習慣、趣味の点で彼は完全に都市に同化しており、この結びつきを重荷と見ることがまれでない」（『ルースカヤ・ムィスリ』、一八九六年第一一号、二二七ページ）。これは非常に正しい。この筆者たちにとっては、これだけでは十分でない。この筆者はなぜ、移動の完全な自由、共同体からの農民の脱退の自由を、断固として主張しなかったのか？　わが国の自由主義者たちはやはりまだわが国のナロードニキをおそれている。これは無用なことである。

ところで比較するため、ナロードニキ主義に共感しているジバンコフ氏の議論をあげよう。「都市への出稼ぎは、わが国の首都や大都市が急速に成長し、都市のプロレタリアートと土地をもたないプロレタリアートが増大していることにたいする、いわば避雷針（原文のまま！）である。出稼賃仕事のこの影響は、衛生の点でも社会経済の点でも有益であると考える必要がある。すなわち、出稼労働者にとって若干の保障となっている土地から人民大衆が完全に切りはなされないかぎり」（彼らは金を払ってこのような「保障」から解放されようとしているのだ！）「このような労働者は、資本主義的生産の盲目的な道具となるわけにはゆかず、それとともに、農工業的共同体の設立への希望が残っているのである」（『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八九〇年、第九号、一四五ページ）。小ブルジョア的な希望が残っていることは、実際に有益でないか？　ところで、「盲目的な道具」についていえば、ヨーロッパの経験とロシアで観察されるすべての事実がともにしめしているところだが、この資格は、土地や家父長制的関係との結びつきを断ちきった労働者にたいしてよりも、それらの結びつきを残している労働者に、はるかによくあてはまる。ジバンコフ氏自身の数字と資料がしめしているように、出稼ぎの「ペテルブルグ人」は、どこかの「森林」郡に住みついているコストロマ人よりも、よりよく読み書きができ、より文化的で、より啓発されている。

非農業的出稼労働者の数はどれほどであろうか？　あらゆる出稼営業にたずさわっている労働者の数は、五〇〇―六〇〇万人を下らない。実際、一八八四年にヨーロッパ・ロシアで、四六七万枚にのぼる旅券と身分証明書が交付された。* 一八八四年から一八九四年までに旅券収入は三分の

一以上（三三〇万ルーブリから四五〇万ルーブリ）にふえた。一八九七年には、ロシア全体で九、四九五、七〇〇枚（そのうち、ヨーロッパ・ロシアの五〇の県では、九、三三三、二〇〇枚）の旅券と身分証明書が交付された。一八九八年には八、二五九、九〇〇枚（ヨーロッパ・ロシアでは七、八〇九、六〇〇枚）であった。** ヨーロッパ・ロシアにおける過剰な（地方的需要とくらべて）労働者の数を、エス・コロレンコ氏は六三〇万人と算定した。さきにわれわれが見たように（第三章第九節、一七四ページ〔本訳書、二二二—二二三ページ〕）、一一の農業県で、交付された旅券の枚数はエス・コロレンコ氏の計算を上まわっていた（一七〇万枚にたいして二〇〇万枚）。いまわれわれは、六つの非農業県にかんする資料をつけくわえることができる。すなわち、コロレンコ氏はそれらの県の過剰労働者を一、二八七、八〇〇人と計算しており、他方、交付された旅券の枚数は一、二九八、六〇〇枚である。*** このように、ヨーロッパ・ロシアの一七県（黒土地帯の一一県と非黒土地帯の六県）については、エス・コロレンコ氏は過剰な（地方的需要にたいして）労働者を三〇〇万人と計算した。ところで九〇年代には、これらの県で三三〇万枚の旅券と身分証明書が交付された。一八九一年には、これら一七県で旅券収入全体の五二・二％を占めていた。したがって、出稼労働者の数はほぼまちがいなく六〇〇万人を超える。最後に、ゼムストヴォ統計の資料（その大部分は古くなったが）からウヴァーロフ氏は、エス・コロレンコ氏の数字は真実に近く、五〇〇万人の出稼労働者という数字は「きわめて確からしい」という結論をくだした。****

* エリ・ヴェーシン『出稼営業の意義……』、『デーロ』〔『事業』〕、一八八六年第七号、および一八八七年第二号。

** 『一八九七—一八九八年度、内国消費税を課される生産業の統計……』、サンクト・ペテルブルグ、一九〇〇年、不定額徴税総管理局刊行。

*** モスクワ（一八八五年、古くなった資料）、トヴェーリ（一八九六年）、コストロマ（一八九二年）、スモレンスク（一八九五年）、カルーガ（一八九五年）およびプスコフ（一八九六年）の諸県。出典はさきにあげたもの。男女のすべての不在証明書にかんする資料。

**** 『社会衛生学、法医学、臨床医学通報』、一八九六年七月。エム・ウヴァーロフ『ロシアの衛生状態におよぼす出稼営業の影響について』。ウヴァーロフ氏は二〇県の一二六郡について資料をまとめた。

さて次の問題はこうである。非農業的および農業的出稼労働者の数はどれだけか？　ニコライ—オン氏はきわめて大胆に、だが完全に誤って、次のように主張している。「農民の出稼農業の圧倒的大多数はまさに農業出稼ぎである」（『概要』、一六ページ）。ニコライ—オン氏が引合いにだ

出しているチャスラフスキーは、これよりはるかに慎重に述べており、いかなる資料もあげていないし、あれこれの労働者を送りだしている地区の大きさについて一般的に考察するにとどめている。ニコライ―オン氏の資料といえば、鉄道による旅券の移動にかんするものであるが、それはまったくなにも証明しない。なぜなら、非農業的労働者が家を出るのも主として春であり、しかも彼らは、農業労働者とは比較にならないほど多く鉄道を利用するからである。* われわれは、これとは逆に、出稼労働者の大多数をなすのは（たとえ「圧倒的」多数でないとしても）、おそらくは非農業的労働者である、と考える。この意見は、第一に旅券収入の分布にかんする資料に第二に、ヴェーシン氏の資料にもとづいている。すでにフレロフスキーは、「種々の名称の租税」からの収入（その三分の一以上は旅券収入であった）の分布にかんする一八六二―一八六三年度の資料にもとづいて、賃仕事のための農民の最大の移動は首都のある両県と非農業的諸県から起こっている、という結論をくだした。** もしわれわれが、さきに一つの地区にまとめた（本節第二項）、非農業的労働者の大多数が出てくる一一の非農業県をとると、これらの県には、一八八五年にヨーロッパ・ロシア全体の人口の一八・七％（一八九七年には一八・三％）しかいなかったのに、これらの県は旅券収入の点では一八八五年に四二・九％（一八九一年には四〇・七％）を占めていた、ということがわかる。*** 非農業的労働者は、さらに非常に多数の県が送りだしているのだから、われわれは、農業労働者は出稼人の半分以下であると考えなければならない。ヴェーシン氏は、ヨーロッパ・ロシアの三八県（不在証明書総数の九〇％を占めている）を、そこで優位を占めるさまざまな種類の出稼ぎによってグループ分けして、次のような資料をあたえている。****〔第一一表〕

* 前出、一七四ページ〔本訳書二一三ページ〕の注を参照。

** 『ロシアにおける労働者階級の状態』、サンクト・ペテルブルグ、一八六九年、四〇〇ページ以下。

*** 一八八四／八五年度および一八九六年度の『ロシアにかんする報告集』の旅券収入にかんする資料。一八八五年にはヨーロッパ・ロシアにおける旅券収入は、住民一、〇〇〇人あたり三七ルーブリで、一一の非農業県では住民一、〇〇〇人あたり八六ルーブリであった。

**** 次の表の最後の二つの欄は、われわれがつけくわえたものである。第一のグループにはいる県は、アルハンゲリスク、ウラヂーミル、ヴォログダ、ヴャトカ、カルーガ、コストロマ、モスクワ、ノヴゴロド、ペルミ、サンクト・ペテルブルグ、トヴェーリおよびヤロスラヴリの諸県、第二グループにはいるのは、カザン、ニジェゴロド、リャザン、トゥーラおよびスモレンスクの諸県、第三グループにはいるのは、ベッサラビア、ヴォルィニ、ヴォロネジ、エカテリノスラフ、ド

〔第 111 表〕

県のグループ	1884年の不在証明書数 (1000枚) 旅券	証明書	合計	1885年の人口 (1000人)	住民1000人あたりの証明書数
I 非農業出稼ぎの優勢な12県	967.8	794.5	1,762.3	18,643.8	94
II 中間的な5県	423.9	299.5	723.4	8,007.2	90
III 農業出稼ぎの優勢な21県	700.4	1,046.1	1,746.5	42,518.5	41
38県	2,092.1	2,140.1	4,232.2	69,169.5	61

ン、キエフ、クルスク、オレンブルグ、オリョール、ペンザ、ポドリスク、ポルタワ、サマラ、サラトフ、シンビールスク、タヴリーダ、タンボフ、ウファ、ハリコフ、ヘルソンおよびチェルニーゴフの諸県である。――なお、このグループ分けには正しくない点、農業出稼ぎの意義の過大評価があることを、注意しておこう。スモレンスク、ニジェゴロドおよびトゥーラの諸県は、第一のグループに入れるべきである(『一八九六年度ニジェゴロド県農業概観』、第一一章、――『一八九五年度トゥーラ県覚え帳』、第六篇、一〇ページを参照。出稼営業に出かけるものの数は一八八、〇〇〇人とされている――ところがエス・コロレンコ氏は過剰労働者の数をたった五万人としている――そのさい、北部の、非黒土地帯の六つの郡は一〇七、〇〇〇人の出稼人を出している)。クルスク県は第二のグループに入れるべきである(エス・コロレンコ、前掲書。七つの郡からは大部分が手工業的営業に出かけており、それ以外の八つの郡からは農業的営業にだけ出ている)。残念ながら、ヴェーシン氏は、不在証明書の数にかんする県別の資料をあたえていない。〔第一一一表〕

「これらの数字がしめしているように、出稼営業は第三のグループにおけるよりも第一のグループでさかんに発展している。……つぎに、ここであげた数字から明らかなように、グループがちがうのに応じて、賃仕事のための不在の長さそのものも多様である。非農業的出稼農業が優勢なところでは、不在期間ははるかに長い」(『デーロ』、一八八六年第七号、一三四ページ)。

最後に、さきにしめした、内国消費税を課される生産部門その他の総計は、ヨーロッパ・ロシアの五〇県のすべてについて、交付された居住証明書の数を分けることを可能にしている。ヴェーシン氏のグループ分けにさきの訂正を加え、一八八四年には欠けている一二の県を同じ三つのグループに分ける(第一のグループにオロネッツ県とプスコフ県を、第二のグループにバルト海沿岸と西北部の九県を、第三のグループにアストラハン県を入れて)と、次のよう

〔第 112 表〕

県のグループ	交付されたすべての居住証明書の数	
	1897年	1898年*
I　非農業出稼ぎの優勢な17県	4,437,392	3,369,597
II　中間的な12県	1,886,733	1,674,231
III　農業出稼ぎの優勢な21県	3,009,070	2,765,762
50 県 合 計	9,333,195	7,809,590

* ついでながら，この資料の概観の筆者は（前掲書，第6章，639ページ），1898年における旅券交付の減少を，不作と農業機械の普及との結果，南部の諸県への夏季労働者の出稼ぎが減少したためと説明している．この説明はなんの役にもたたない．なぜなら，居住証明書の交付数の減少が最も少なかったのはグループIIIであり，最も多かったのはグループIであるからである．1897年と1898年における記録方法は比較できるものなのだろうか？（第2版の注）

な情景が得られる。〔第一一二表〕

この資料によると、出稼営業は、第三のグループよりも第一のグループでいちじるしくさかんである。こうして、ロシアの非農業地帯における人口の移動性が、農業地帯におけるよりも比較にならないほど高いことは、疑いをいれない。非農業的出稼労働者の数は農業出稼労働者よりも多く、三〇〇万人を下らないにちがいない。

出稼ぎが非常に増加し、ますますはげしく増加していることについては、すべての典拠が証明している。旅券収入は一八六八年の二一〇万ルーブリ（一八六六年には一七五万ルーブリ）から、一八九三／九四年の四五〇万ルーブリに増加した。すなわち、二倍以上増加した。交付された旅券と身分証明書の数は、一八七七年から一八八五年までに、モスクワ県で二〇％（男子）と五三％（女子）増加した。トヴェーリ県では一八九三年から一八九六年までに五・六％、カルーガ県では一八八五年から一八九五年までに二三％（不在月数は二六％）、スモレンスク県では一八七五年の一〇万から一八八五年の一一万七〇〇〇と一八九五年の一四万に、プスコフ県では一八六五―一八七五年の一一、七一六から一八七六年の一四、九四四および一八九六年の四三、七六五（男子）に増加した。コストロマ県については、一八六八年に、男子一〇〇人あたり二三・八枚、女子

一〇〇人あたり〇・八五枚の旅券と証明書が交付されたが、一八八〇年にはそれぞれ三三・一枚と二・二枚であった、等々。

農業から都市への人口の転出と同様に、非農業的出稼ぎは進歩的な現象である。それは、打ちすてられた、おくれた、歴史から忘れられた僻地から住民を引きだして、現代の社会生活の渦中に引っぱりこむ。それは、住民の読み書き能力*と自覚**を高め、住民に文化的慣習と文化的欲望***を植えつける。農民を出稼ぎに引きつけるものは、「より高い秩序の動機」である。すなわち、ペテルブルグ人が外見上非常に開けており洗練されていることである。つまり、彼らは「より良いところ」をさがしているのである。「ペテルブルグの仕事と生活は、農村のそれよりも楽だと考えられている****」。「農村住民はすべて粗野な人とよばれており、しかも奇妙なことに、彼らはそうよばれることにすこしも腹をたてないで、みずから自分をそのようによび、サンクト-ペテルブルグでの勉強に出してくれなかった両親をうらんでいる。とはいえ、農村のそれらの粗野な住民たちは、純粋に農業的な地方におけるほどには粗野でないことを、ことわっておかなければならない。彼らは無意識のうちに、ペテルブルグ人からその外見と慣習を見ならっており、首都の光は間接に彼らにもふりそそいでいるのである†」。ヤロスラヴリ県では（富裕になった例のほかに）「さらに別の原因があらゆる人をその家から追いたてている。それは、ペテルブルグあるいはどこかそのあたりに住んだことがなく、農業あるいはなんらかの手工業に従事している人に、その一生にわたって牧人という呼び方をしている世論である。そしてそのような人には、花嫁を見つけることも困難なのである」（『ヤロスラヴリ県概観』、第二巻、一一八ページ）。都市への出稼ぎは、農民の市民的人格を高め、農村できわめて強い家父長制的および人格的な従属関係や身分制の地獄から、彼を解放する†*。……「出稼ぎの存在をささえている最も重要な要因は、人民のなかにある人格の自覚の成長である。農奴的従属から解放されたこと、農村人口の最も精力的な部分がすでにずっと以前から都市の生活と結合していることは、ヤロスラヴリの農民のなかに、『自我』を主張し、農村生活の諸条件が彼らに運命づけている悲惨で従属的な状態から脱けだして、豊かな、独立した、名誉ある地位を得ようとする希望を、早くからおこさせた。……農民は、よそで賃仕事によって生活すると、自分をより自由であり、またその他の身分の人々と同権に近いとも感じるのであって、そのため農村の若者はますます強く都会へと志すのである」（『ヤロスラヴリ県概観』、第二巻、一八九—一九〇ページ）。

* ジバンコフ『出稼労働の影響……』、三六ページ以下。コストロマ県の出稼ぎのさかんな郡における読み書きのできる男子のパーセントは、五五・九%、工場的な郡では三四・九%、定住的な（森林地帯の）郡では二五・八%である。女子はそれぞれ、三・五%、二・〇%、一・三%であり、通学中のものは一・四四%、一・四三%、一・〇七%である。出稼ぎのさかんな郡では、子供たちはまたサンクトーペテルブルグでも学んでいる。

** 「読み書きのできるペテルブルグ人は、ずっと良い治療をずっと意識して受ける」（前掲書、三四ページ）。だから伝染病は、彼らのあいだでは、「あまり文化的でない」郷におけるほど破滅的には勢いをふるわない（傍点は原筆者のもの）。

*** 「出稼ぎのさかんな郡は、その生活が快適である点で、農業地方や森林地方をいちじるしくしのいでいる。……ペテルブルグ人の衣服ははるかに清潔で、粋で、衛生的である。……子供たちは清潔にそだてられているので、疥癬やその他の皮膚病にかかることはめったにない」（前掲書、三九ページ。『スモレンスク県における出稼営業』、八ページを参照）。「出稼ぎのさかんな農村は定住的な農村とはっきり区別される。住居、衣服、すべての慣習、娯楽は、農民の生活というよりもむしろ町民の生活をおもわせる」（『スモレンスク県における出稼営業』、三ページ）。コストロマ県の出稼ぎのさかんな郷では、「半数の家で、紙、インク、鉛筆、ペンを見いだすだろう」（『女人国』、六七―六八ページ）。

**** 『女人国』、二六―二七ページ、一五ページ。

† 前掲書、二七ページ。

†* たとえば、コストロマの農民に町人に登録がえしようとする気をおこさせるものは、ひとつには、万一あるかもしれない「体罰」である。これは、「めかしこんだペテルブルグ人にとっては、粗野な住民がこわがるよりもずっとこわいものである」（前掲書、五八ページ）。

都市への出稼ぎは、古い家父長制的な家族を弱め、婦人をより自立的な、男子と同権の状態におくようになる。「定住的な地方とくらべて、ソリガリチ郡やチュフロマ郡」（コストロマ県の最も出稼ぎのさかんな郡）「の家族は、家長の家父長制的権威という意味でばかりでなく、両親と子供、夫と妻のあいだの関係においてさえ、はるかに強固でない。一二歳でペテルブルグにやられる息子からは、もちろん、両親にたいする強い愛情も、肉親への愛着もけっして期待できない。彼らは無意識のうちにコスモポリタンとなる。『住めば都』である」*。「ソリガリチの女は、夫の権威や助けがなくてもやってゆくことに慣れて、農業地帯のしいたげられた農婦とはまったく似ないものになっている。すなわち、彼女は独立的で、自立的である。……妻をなぐったり、虐待することは、ここではまれな例外である。……一般に男女の平等はほとんどいたるところで、またすべての点で現われている」**。

* 前掲書、八八ページ。

**『ユリチーチェスキー・ヴェーストニク』、一八九〇年、第九号、一四二ページ。

最後に——last but not least〔順番は最後だが、意義は最少ではない〕——非農業的出稼ぎは、出てゆく賃金労働者の賃金を高めるだけでなく、残っているものの賃金をも高める。

この事実は、農業県よりも賃金が高いことを特徴とする非農業的諸県は、農業県から非農業労働者を引きつける、*という一般的事実のうちに最もはっきり現われている。ここでカルーガ県にかんする興味ある資料をあげよう。〔第一一三表〕

* 第四章、第四節〔本訳書、二三九—二四〇ページ〕を参照。

〔第 113 表〕

出稼ぎの規模による郡のグループ	男子総人口にたいする男子出稼労働者の%	1ヵ月の稼ぎ（ルーブリ）	
		出稼営業者	年雇農村労働者
I	38.7	9	5.9
II	36.3	8.8	5.3
III	32.7	8.4	4.9

「これらの数字は、……（一）出稼営業が農業生産における賃金の上昇に影響をあたえるという現象、および（二）出稼営業が住民中のすぐれた力を引きぬくという現象を、十分に説明する」。* 貨幣賃金だけでなく、実質賃金も高まる。働き手一〇〇人あたり少なくとも六〇人の出稼人を出している郡のグループでは、年ぎめの雇農の平均賃金は六九ルーブリあるいはライ麦一二三プード、出稼労働者が四〇—六〇%を占める郡では六四ルーブリあるいはライ麦一二五プード、四〇%以下の出稼人を出している郡では五九ルーブリあるいはライ麦一一六プードである。** これと同じグループの郡のそれぞれについて、労働者の不足を訴える通信のパーセントは規則的に低下して、五八%、四二%、三五%となっている。加工工業では賃金は農業におけるよりも高い。そして、「非常に多くの通信員諸君の言明によれば、営業は農民のなかに新しい欲望（茶、サラサ、長靴、時計、等々）が発展するのをうながし、欲望の一般的水準を高め、こうして賃金の上昇に影響をあたえる」。*** 次はある通信員による典型的な意見である。「（労働者の）不足はつねに徹底しているが、その原因は、近郊の住民が甘やかされ、鉄道工場ではたらいたり、そこに勤めたりしているからである。カルーガの近辺とそこの市場には、卵や牛乳などを売って、そのあとで居酒屋で大酒を飲むために、周

辺の住民がたえずあつまってくる。その原因は、すべての住民が多くの給料と無為をもとめることである。農業労働者として生活することは恥と考えられており、人々は都市にむかい、そこでプロレタリアートとルンペンを構成する。農村はといえば、有能で健全な働き手がなくて苦しんでいる」。** 出稼営業のこのような評価を、われわれはまったく正当にナロードニキ的とよぶことができる。たとえばジバンコフ氏は、過剰な働き手ではなく「必要な」働き手が出ていって、将来の農耕者がそれにとってかわっていることを指摘して、「このような相互的な入替えがきわめて不利益である」ことは「明白である」†、と見ている。おお、ジバンコフ氏よ、だれにとってなのか？「首都における生活は多くの最も低級な種類の文化的慣習とぜいたくや華美への傾向を植えつけるが、このことはいたずらに（原文のまま!!）多くの金をうばいさる」†*。この華美やその他への支出は、大部分「不生産的である」（!!）†**。ゲルッェンシュテイン氏は、「虚飾の文明」、「奔放な馬鹿騒ぎ」、「放埒な酒宴」、「暴飲と安っぽい淫蕩」その他について、あからさまに非をならしている。†*** モスクワの統計家たちは大量的な出稼ぎの事実からただちに、「出稼賃仕事にたいする需要を減少させるような措置」の必要を結論している。†**** またカルィシェフ氏は出稼営業について次のように論じている。「家族の最も主要な（!）欲望をみたすのに十分な規模にまで農民の土地用益を増大させることだけが、わが国の国民経済のこの最も重大な問題を解決することができる」††、と。

* 『一八九六年度カルーガ県の統計的概観』、第二篇、四八ページ。

** 前掲書、第一篇、二七ページ。

*** 同、四一ページ。

**** 同、四〇ページ。傍点は原筆者のもの。

† 『女人国』、三九および八ページ。「これらの本当の農耕者」（外来のもの）「は、その富裕な生活状態によって、自分の生存の基礎を土地にでなく出稼賃仕事のうちに見ている土着の住民にも、覚醒的な影響をおよぼさないだろうか？」（四〇ページ）。「ところが――と著者はなげいている――われわれはさきに逆の影響の例をあげた」。次がその実例である。ヴォログダ人たちは土地を買いいれ、「きわめて豊かに」暮らしていた。「裕福なのになぜ息子をサンクト・ペテルブルグへ出したのか、と私は一人のヴォログダ人に質問したが、それにたいする答えは次のようであった。『そりゃ、われわれは貧乏ではない、だがわれわれのところではとにかく非常に粗野だ。それで息子は、他人を見て、自分で勉強したくなったのだ。息子は、われわれの家ではもう習うことがなくなってしまったのだ』、と」（二五ページ）。哀れなナロードニキよ！ 土地を買いいれる富裕な耕作百姓の実例さえ、「勉強する」ことをのぞみ、「彼を保障している分与地」から逃げだす若者を「覚醒させる」ことができないということを、ど

うして悲しまずにいられようか！

†* 『出稼賃仕事の影響……』、三三ページ、傍点は原筆者のもの。

†** 『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』、一八九〇年第九号、一三八ページ。

†*** 『ルースカヤ・ムィスリ』（『ルースキー・ヴェーストニク』ではなく、『ルースカヤ・ムィスリ』）、一八八七年第九号、一六三ページ。

†**** 『居住証明書……』、七ページ。

†† 『ルースコエ・ボガーツトヴォ』、一八九六年第七号、一八ページ。こうして、「最も主要な」欲望は分与地がみたさなければならないが、それ以外の欲望は、明白に、「有能で健全な働き手がなくて苦しんでいる」「農村」から得られる、「地方的賃仕事」がみたさなければならないのだ！

そして、これらの甘っちょろい紳士諸君のだれ一人として、「最も重大な諸問題の解決」について論じるよりまえに、農民にとっての移動の完全な自由、土地を拒否して共同体から出てゆく自由、都市であれ農村であれ、国内のどの共同体にでも好きなように居住する（「身請け」金なしで）自由について、心をくだく必要があるということには、考えおよばないのである。

このように、農業からの人口の転出は、ロシアでは、都市の成長（部分的には国内植民によってぼかされているが）、郊外地、工場的および商工業的な町村の成長、ならびに非農業的出稼ぎのうちに現われている。これらの過程はすべて、農民改革後の時代に、広さにおいても深さにおいても急速に発展したしまた発展しているのであって、それらは資本主義的発展の必然的な構成部分であり、古い生活様式にたいしてきわめて進歩的な意義をもっているのである。

三　賃労働の使用の増加

資本主義の発展の問題で、賃労働の普及の程度ほど大きな意義をもつものはない。資本主義とは、労働力も商品となるような、商品生産の発展段階である。資本主義の基本的傾向は、国民経済のすべての労働力が、企業家によって売買されたあとではじめて生産に適用される、という点にある。農民改革後のロシアでこの傾向がどのように現われたかについては、われわれはさきに詳細に考察することにつとめたので、いまやこの問題について総括をすべきである。まず、さきの諸章であげた労働力の売り手にかんする資料を総計し、そのあとで（次の節で）労働力の買い手の総体を描きだすことにしよう。

労働力の売り手は、物質的財貨の生産に参加する国内の

労働者人口である。この人口は約一五五〇万人の成人男子労働者からなる、と考えられている。* 第二章でしめしたように、農民の最下層は農村プロレタリアート以外のなにものでもない。そのさい、このプロレタリアートによる労働力の販売の諸形態はのちに検討されるであろう、と指摘しておいた（一二二ページ〔本訳書、一六三ページ〕の注）。いまや、さきの叙述のなかで列挙した賃金労働者の諸部類を総括しよう。（一）農業賃金労働者。その数は約三五〇万人である（ヨーロッパ・ロシアについて）。（二）工場労働者、鉱山労働者および鉄道労働者――約一五〇万人。合計五〇〇万人の専門的な賃金労働者。さらに（三）建築労働者――約一〇〇万人。（四）林業にたずさわる労働者（木材の伐採とその第一次加工、筏流し、等々）、土木労働、鉄道敷設、貨物の積込みと積卸しの仕事、工業中心地におけるあらゆる種類の「雑役」にたずさわる労働者。彼らは約二〇〇万人である。** （五）家で資本家にやとわれている労働者、および「工場工業」にかぞえられない加工工業でやとわれてはたらいている労働者。彼らは約二〇〇万人である。

合計約一〇〇〇万人の賃金労働者がいる。これらのうちからほぼ四分の一を婦人および子供とみて除外すると、* 七五〇万人の成年男子の賃金労働者、すなわち、物質的財貨の生産に参加しているこの国の成年男子総人口の約半分が残る。** この膨大な数の賃金労働者の一部分は、土地とのつながりを完全に断ちきって、もっぱら労働力の販売によって生活している。これにはいるのは、工場労働者（疑いもなく、また鉱山労働者と鉄道労働者）の大多数、ついで建設労働者、船舶労働者、雑役労働者の一定部分であり、最後に、資本主義的マニュファクチュアの労働者の少なからぬ部分と、非農業的中心地の住民で資本家のために家内労働に従事している人々である。もう一つの大きな部分は、まだ土地とのつながりを断ちきっておらず、猫のひたいほ

* 『統計資料集成……』（内閣官房刊行、一八九四年）の数字は、一五、五四六、六一八人である。この数字は次のようにして得られたものである。都市人口は、物質的財貨の生産に参加していない人口に等しい、とされている。成年男子農民の人口は七％だけ少なくされている（四・五％は兵役に服しているもの、二・五％は一般職務についているもの）。

** さきに見たように、山林労働者だけでも二〇〇万人にのぼる。われわれがあげた最後の二つの種類の仕事にたずさわっている労働者の数は、非農業的出稼労働者の総数よりも多いにちがいない。なぜなら、建築労働者、雑役労働者、そしてとくに山林労働者の一部は、その地方の労働者であって、出稼労働者ではないからである。ところで、われわれが見たように、非農業的出稼労働者の数は三〇〇万人を下らない。

どの小さな土地での自分の農業経営の生産物によって自分の支出の一部をまかなっており、したがって、われわれが第二章で詳細に描きだそうとつとめた、分与地をもつ賃金労働者のあの型を形成するものである。さきの叙述ですでにしめしたように、この膨大な数の賃金労働者はすべて、主として農民改革後の時代に形成されたものであり、それは急速に増加しつづけている。

* 工場工業では、われわれが見たように、婦人と子供は労働者総数の四分の一以上である。鉱業、建築業、林業などでは、婦人と子供は非常に少ない。反対に、資本主義的家内労働には、彼らはおそらく男子よりも多く参加している。

** 誤解を避けるためにことわっておくが、われわれは、これらの数字が正確に統計的に証明されうるものである、というつもりはけっしてない。ただ、賃労働の形態の多様性と賃労働をおこなう人々が多数であることを、おおよそしめしたいだけである。

資本主義のつくりだす相対的な過剰人口（あるいは失業者予備軍の一隊）の問題におけるわれわれの結論の意義を指摘しておくことは、重要である。国民経済の全部門におけるすべての賃金労働者の総数にかんする資料は、この問題でのナロードニキ経済学の基本的な誤りを、とくに明確に暴露している。すでに機会を得て他の箇所で指摘したように（『試論』、三八―四二ページ）[108]、この誤りは次の点にある。すなわち、ナロードニキ経済学者たち（ヴェ・ヴェ氏、ニコライ―オン氏その他）は、資本主義による労働者の「解放」について多くしゃべりはしたものの、ロシアにおける資本主義的過剰人口の具体的形態を研究しようとは考えなかった点にある。さらにまた、彼らは、わが国の資本主義の存在そのものと発展とにとって膨大な数の予備労働者が必要であることを、まったく理解しなかった点にある。彼らは、「工場」労働者の数についてのぼそぼそしたことばと奇妙な計算とによって、*資本主義の発展の基本的条件の一つを、資本主義が不可能であり、誤っており、基盤がないということの証明に変えてしまった。だが実際には、もし小生産者たちの収奪が、農業、林業と建設業、商業、加工工業、鉱業、運輸業、等々における企業家の最大の需要を、いつでもすぐにみたそうと待ちかまえている幾百万の賃金労働者をつくりださなかったならば、ロシアの資本主義はけっして現在の高さまで発展できなかったであろうし、一年といえども存続できなかったであろう。われわれは、最大限の需要という。なぜなら、資本主義は飛躍によってのみ発展しうるのであり、したがって、労働力の販売を必要とする生産者たちの数は、労働者にたいする資本主義の平均的需要よりもつねに高くなければならないからである。われわれはいま種々の部類の賃金労働者の総数を計

算したけれども、だからといって、資本主義は彼らのすべてをたえず雇用できるといおうとおもったわけではけっしてない。雇用のそのような恒常性は、どの部類の賃金労働者をとってみても、資本主義社会にはないし、またありえない。渡り歩く労働者と定着の労働者のうち、一定部分はつねに失業者の予備軍として残っている。そしてこの予備軍は、恐慌の年には、あるいはある地区のあれこれの産業が没落するさいには、あるいはまた、労働者を駆逐する機械制生産がとくに急速に拡張するさいには、巨大な規模にまでふくれるかとおもうと、あるときには最小限にまで低下して、労働者の「不足」さえもひきおこし、しばしば個々の産業部門の企業家たちが個々の年に国内の個々の地区で、それについて苦情をいうこともある。平均的な年失業者数をたとえ近似的にでも算定することは、いくらかでも信頼できる統計資料が完全に欠如しているので、不可能である。だが、その数がきわめて多いにちがいないことは、疑いない。さきになんども指摘したような、資本主義的工業、商業および農業のあの大きな変動が、また、ゼムストヴォ統計が確認しているような、最下層の農民の家計における通常の赤字が、このことを証明している。工業および農業プロレタリアートの隊列に押しやられる農民の数の増大と、賃労働にたいする需要の増大とは、一つのメダルの両面である。賃労働の形態についていえば、それは、前資本主義的体制の遺物や制度によってすべての側面からなおがんじがらめにされている資本主義社会においては、極度に多様である。この多様性を無視することは、ひどい誤りであろう。ヴェ・ヴェ氏のように、資本主義は「一〇〇万—一五〇万人の労働者のいる一角をみずから区切って、そこからは出てこない」などと論ずる人は、この誤りにおちいっているのである。**ここにあるのは、資本主義ではなく、ひとり機械制大工業にすぎない。だが、ここでこれら一五〇万人の労働者が、賃労働のその他の分野とは結びついていないかのような特殊な「一角」に、なんと恣意的に、なんと人為的に囲いこまれていることだろう！　ところが実際には、この結びつきはきわめて緊密であり、そしてその結びつきを特徴づけるためには、現代の経済制度の二つの基本的な特徴に言及するだけで十分である。第一に、この制度の基礎には貨幣経済が横たわっている。「貨幣の権力」は、工業でも農業でも、また都市でも農村でも、完全な力をもって現われるが、しかし機械制大工業においてははじめてそれは完全な発展をとげ、家父長制的経済の遺物を完全に駆逐し、少数の巨大な施設（銀行）に集中され、巨大な社会的生産と直接に結びつけられる。第二に、現代の経済制度の基礎には、労働力の売買が横たわっている。農

業あるいは工業における最も小さな生産者をとってみてさえ、諸君は、自分が雇われないかあるいは他人を雇わないような人は例外である、ということがわかるであろう。だがまたしても、これらの関係が完全な発展をとげ、以前の経済形態から完全な分離を達成するのは、機械制大工業においてだけである。だから、あるナロードニキにはあれほどとるにたりないものに見えるあの「一角」も、実際には、現代の社会関係の真髄をそのなかに体現しているのであり、この「一角」の住民すなわちプロレタリアートは、文字どおりの意味で、全勤労被搾取大衆のただ一つの最前列であり前衛なのである。*** だから、この「一角」に形成された諸関係の視角から現代の経済構造全体を考察することによってはじめて、生産に参加している人々のさまざまなグループのあいだの基本的な相互関係を解明し、したがってこの構造の発展の基本的方向を考察することができるのである。逆に、この「一角」から顔をそむけて、家父長的な小生産の関係の視角から経済現象を考察する人は、歴史の進行によって、あるいはおめでたい夢想家に、あるいは小ブルジョアジーと土地所有者のイデオローグに、転化させられるのである。

* 「ひとにぎりの」労働者についてのニコライ―オン氏の議論、およびヴェ・ヴェ氏の次の、真に古典的な計算（『理論経済学概論』、一三一ページ）を思いおこそう。ヨーロッパ・ロシアの五〇県には、一五五四万七〇〇〇人の農民身分の成年男子労働者がおり、そのうち、「資本によって統合されている」のは一〇二万人（工場工業にいる八六万三〇〇〇人プラス鉄道労働者一六万人）であり、残りは「農業人口」である。「加工工業の完全な資本主義化」のもとでは、「資本主義的工場工業」は、二倍の人手をやとうであろう（七・六％ではなく一三・三％を。ところで残りの八六・七％の人口は、「土地にとどまって、半年間は無為にすごすであろう」）。もし注釈を加えると、きっと、経済科学と経済統計のこのすばらしい見本のあたえる印象を弱めることになるだけであろう。

** 『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九六年第六号、二一ページ。

*** 機械制大工業における賃金労働者のその他の賃金労働者にたいする関係については、Mutatis mutandis〔適当な修正を加えて〕、ウェッブ夫妻がイギリスにおける労働組合員の非組合員にたいする関係についてかたっているのと同じことをいうことができる。「労働組合員は全人口の約四％である。……労働組合はその隊列のなかに、筋肉労働によって生活している成年男子労働者の約二〇％をかぞえている。」だが、《Die Gewerkschaftler……zählen in der Regel die Elite des Gewerbes in ihren Reihen. Der moralische und geistige Einfluss, den sie auf die Masse ihrer Berufsgenossen ausüben, steht deshalb ausser jedem Verhältniss zu ihrer numerischen Stärke》(S. & B. Webb: 《Die Geshichte des britischen Trade Union-

ism us》, Stuttgart, Dietz, 1895, S.S. 363, 365, 381).〔「労働組合員は、……通常、各部門の精鋭をふくんでいる。だから、彼らが彼らの階級の残りの大衆におよぼす道徳的および精神的影響は、彼らの人数とはまったく比例しない」(203)(Sおよび B・ウェッブ『イギリス労働組合史』、シュトゥットガルト、ディーツ、一八九五年、三六三、三六五、三八一ページ)〕。

四　労働力にたいする国内市場の形成

この問題についてこれまでの叙述のなかであげた資料を要約するのに、われわれは、ヨーロッパ・ロシアについての労働者の移動の状況に限定する。このような状況をわれわれにあたえるのは、経営主の申告にもとづく農務省の一刊行物*である。労働者の移動の情況は、労働力にたいする国内市場がいったいどのようにして形成されるかについて、一般的な表象をあたえてくれるであろう。われわれは、前記の出版物の材料を利用して、農業労働者と非農業労働者との移動を区別することだけにつとめた。もっとも、前記の出版物に付録としてついていて、労働者の移動を図解している地図では、このような区別はされていない。

* 『経営主から得られた材料による農業上および統計上の情報。第五冊。地主経営における自由な賃労働と労働者の移動——農業と工業におけるヨーロッパ・ロシアの経済統計的概観との関連において』、エス・ア・コロレンコ編。農務省刊行、サンクト－ペテルブルグ、一八九二年。

農業労働者の最も主要な移動は次のとおりである。(一)中部の農業諸県から南部および東部の辺境地方へ。(二)北部の黒土諸県から南部の黒土諸県へ。労働者はそこからさらに辺境地方へ出てゆく(第三章第九節および第一〇節を参照)。(三)中部の農業諸県から工業諸県へ(第四章第四節を参照)。(四)中部および西南部の農業諸県から甜菜農場の地区へ(ここには、ガリツィアの労働者の一部さえゆく)。

非農業労働者の最も主要な移動は次のとおりである。(一)主として非農業諸県から、だがかなりの程度農業諸県からも、両首都および大都会へ。(二)同じ地方から工業地域へ、ウラヂーミル、ヤロスラヴリその他の諸県の工場へ。(三)新しい産業中心地あるいは新しい産業部門へ、非工場的産業の中心地へ、等々の移動。これには、次の移動がはいる。(a)西南部諸県の甜菜糖工場へ、(b)南部の鉱山地域へ、(c)港湾労働へ(オデッサ、ドン河畔ロストフ、リガ、その他へ)、(d)ウラヂーミルその他の県における泥炭採掘へ、(e)ウラル鉱業地域へ、(f)漁業

へ（アストラハン、黒海およびアゾフ海その他へ）、（g）造船、水運労働、木材の伐採および筏流し、等々へ、（h）鉄道労働へ、等々。

以上が労働者の主要な移動であって、それらは、さまざまな地方における労働者の雇用条件に多少とも本質的な影響をおよぼすものとして、通信者である雇い主たちによって指摘されている。それらの移動の意義をより明らかにしめすために、労働者が転出入するいろいろな地方における賃金にかんする資料を、これらの移動と対照してみよう。ヨーロッパ・ロシアの二八県に限定して、労働者の移動の性格によってそれらを六つのグループに分けると、次のような資料が得られる。* 〔第一一四表〕

＊ いま考察している問題ではなにも新しいものをあたえない資料によって叙述を複雑にしないために、残りの県は除外する。しかも残りの県は、労働者の主要な、大量の移動から遠く離れている（ウラル、北部）か、あるいは、人種誌的および行政的＝法律的な特性をもつ県である（バルト海沿岸諸県、ユダヤ人居住区域の諸県、ベロルシアの諸県、その他）。資料はさきにあげた刊行物からのもの。賃金の数字は県別の数字の平均である。日雇労働者の夏季賃金は、種播き、草刈りおよび取入れの三つの時期の平均である。各地区（一―六）には次の県がはいっている。（一）タヴリーダ、ベッサラビアおよびドン。（二）ヘルソン、エカテリノスラフ、サマラ、サラトフおよびオレンブルグ。（三）シンビールスク、ヴォロネジおよびハリコフ。（四）カザン、ペンザ、タンボフ、リャザン、トゥーラ、オリョールおよびクルスク。（五）プスコフ、ノヴゴロド、カルーガ、コストロマ、トヴェーリおよびニジェゴロド、（六）サンクト・ペテルブルグ、モスクワ、ヤロスラヴリおよびウラヂーミル。

この表は、労働力にたいする国内市場、したがってまた資本主義のための国内市場をつくりだす過程の基礎を、われわれにはっきりしめしている。資本主義的に最も発展した二つの主要な地域が、大量の労働者を吸引している。農業資本主義の地域（南部と東部の辺境地方）と工業資本主義の地域（首都のある両県と工業的諸県）。賃金が最も低いのは転出の地域、すなわち農業においても工業においても資本主義が最も発展していないことできわだっている、中部の農業諸県である。* 転入の地域では、賃金はすべての種類の仕事について高くなっており、総賃金にたいする貨幣賃金の比率も高くなっている。すなわち、現物経済を犠牲にして貨幣経済が強まっている。最大の転入（と最高の賃金）の地域と転出（と最低の賃金）の地域とのあいだにある中間的な地域は、さきに指摘した労働者の相互交替をしめしている。すなわち、労働者が大量に出てゆくので、転出の地方には労働者の不足が生じ、それはより「安い」

〔第 114 表〕

労働者の移動の性格による県の地区別	10年間の平均賃金（1881—1891年）					労働者の移動の規模			
	年雇労働者		総額にたいする貨幣賃金の%	定期雇(夏季)労働者	食費自弁の夏季日雇い	農業的		非農業的	
	食費なし	食費込み				転入	転出	転出	転入
	ルーブリ	ルーブリ		ルーブリ	カペイカ				
1. 農業的転入の大きな地区	93.00	143.50	64.8	55.67	82	約 100万人	—	—	鉱山地区でいちじるしい
2. 農業的転入の大きな地区, 転出は僅少	69.80	111.40	62.6	47.30	63	約 100万人	僅少	—	
3. 農業的転出のいちじるしい地区, 転入は微弱	58.67	100.67	58.2	41.50	53	僅少	30万人以上	僅少	僅少
4. 転出の大きな地区, 大部分は農業的転出, しかし非農業的転出もある	51.50	92.95	55.4	35.64	47	—	150万人以上		—
5. 非農業的転出の大きな地区, 農業的転出は微弱	63.43	112.43	56.4	44.00	55	僅少	非常に僅少	約 125万人	—
6. 非農業的転入の大きな地区, 農業的転入もかなりいちじるしい	79.80	135.80	58.7	53.00	64	かなりいちじるしい	—	（首都へ）	膨大な数

諸県から外来者を吸収するのである。

* このように、農民は、最も家父長制的な経済関係をもち、雇役と原始的な形態の工業を最も多く残している地方から、「基柱」が完全に分解していることときわだっている地方へ、大量に逃げだしている。彼らは「人民的生産」から逃げだし、彼らを追ってつたわってくる「社会」の声の合唱に耳をかさない。ところで、この合唱のなかでは、二つの声がはっきり聞きわけられる。「しばりつけがたりない！」──黒百人組のソバケーヴィチ(105)はおどかすように吠えたてる。──「分与地が十分保障されていないのだ」──カデットのマニーロフはいんぎんにそれを訂正する。

本質において、農業から工業への人口の転出（人口の工業化〔インドゥストリアリザーツィヤ〕）と商工業的、資本主義的農業の発展（農業の産業化〔インドゥストリアリザーツィヤ〕）との、われわれの表がしめしている二面の過程は、資本主義社会のための国内市場の形成の問題についてさきに述べたすべてのことを要約している。資本主義のための国内市場は、資本主義が農業においても工業においても並行的に発展することによって、* 一方では農業および工業企業家の階級が、他方では農業および工業賃金労働者の階級が形成されることによって、つくりだされる。労働者の移動の主たる流れは、この過程の主要な形態をしめしはするが、そのすべての形態をしめすものではない。これまでの叙述でしめしたように、この過程の形態は、農民経営と地主経営とでは異なるし、商業的農業のそれぞれの地域で異なるし、また工業の資本主義的発展のそれぞれの段階で異なる、等々。

* 理論経済学はずっと以前からこの単純な真理を確認している。農業における資本主義の発展を「産業資本のための国内市場」をつくりだす過程として直接に指摘したマルクス（『資本論』、第一巻、第二版、七七六ページ、第二四章、第五節）(106)についてはもはや述べないで、アダム・スミスを引合いに出そう。彼は、『諸国民の富』、第一篇第一一章と第三篇第四章で、資本主義農業の発展の最も特徴的な諸点を指摘して、この過程と都市の成長および工業の発展の過程との並行性を強調した。

この過程がわが国のナロードニキ経済学の代表者たちによってどれだけゆがめられ、わけがわからなくさせられているかは、「農業人口の経済状態にたいする社会的生産力の再配分の影響」という注目すべき表題をもつ、ニコライ―オン氏の『概要』の第二篇第六節が、とくに明白にしめしている。ニコライ―オン氏はこの「再配分」を次のように考えている。「資本主義……社会では、労働の生産力が増大するごとに、それにともなって、それに応じた数の労働者の『解放』がおこなわれ、彼らは、なんらか別の賃仕事をさがすことをよぎなくされる。ところで、これは社会のすべての部門でおこり、またこのような『解放』は資本

主義社会の全面にわたっておこなわれるので、彼らには、彼らがまだ失っていない生産用具、すなわち土地にたちかえる以外に活路は残されていない」（一二六ページ）……。「わが国の農民は土地を失っていない。だから彼らは自分の力をこの土地に向ける。工場での仕事を失い、あるいは自分の家内的副業を放棄することをよぎなくされて、彼らは、熱心に土地の開発にとりかかる以外には活路を知らない。すべてのゼムストヴォ統計集が、耕地の拡大という事実を確認している……」（一二八ページ）。

ごらんのように、ニコライーオン氏は、いつどこにもなかった、また理論経済学者のだれひとり考えることができなかった、まったく特殊な資本主義を知っているのである。ニコライーオン氏の資本主義は、農業から工業へ人口を転出させないし、農耕者を対立する諸階級に分裂させもしない。まったく逆なのである。資本主義は工業から労働者を「解放」し、「彼らには」土地にたちかえる以外にはなにも残されていない。なぜなら、「わが国の農民は土地を失っていない」からだ!!　資本主義的発展のすべての過程を詩的な無秩序のうちに独創的に「再配分」するこの「理論」の基礎には、これまでの叙述で詳細に検討した、ナロードニキに共通の安直な手法が横たわっている。すなわち、農民ブルジョアジーと農村プロレタリアートの混同、商業的農業の成長の無視であり、また、工業における資本主義の順を追った諸形態と多様な現れを分析するかわりに、「資本主義的」「工場工業」からの「人民的」、「クスターリ的営業」の隔絶というおとぎ話をもちだすことである。

五　辺境の意義。国内市場か外国市場か？

第一章では、資本主義にとっての外国市場の問題を生産物実現の問題と結びつける理論が誤りであることを指摘しておいた（二五ページ〔本訳書五五ページ〕以下）。資本主義にとっての外国市場の必然性は、生産物を国内市場で実現することが不可能であるからではけっしてなく、資本主義は同一の生産過程を従来の規模で、不変の条件のもとで（前資本主義的諸制度のもとでそうであったように）、反復することはできないという事情、また、資本主義は従来の経済単位の古い、狭い限界をのりこえて成長する、生産の無限の増加を不可避的にもたらすという事情のためである。資本主義に固有な発展の不均等性のもとでは、ある生産部門は他の生産部門を追いこし、古い経済関係の地域の範囲外に出ようとする。たとえば、農民改革後の時代の初期の繊維工業をとってみよう。資本主義的にかなり高度

に発展していたから（工場へ移行しはじめているマニュファクチュア）、それは中部ロシアの市場を完全にとらえていた。だが、このように急速に成長した大工場は、従来の規模の市場ではもはや満足できなくなった。それらは、市場をいっそう遠くへ、ノヴォロシア、外ヴォルガ地方東南部、北カフカーズ、さらにシベリア、等々に入植した新しい住民のなかに、もとめるようになった。古い市場の範囲外に出ようとする大工場の志向は、疑問の余地がない。このことは、これらの古い市場となっていた地域で、繊維工業のより多量の生産物が、一般的に消費されえなかったことを意味するであろうか？　このことは、たとえば、工業的な諸県と中部の農業的な諸県が、もはや、一般に、より多量の製品を吸収しえないことを意味するであろうか？　そうではない。われわれが知っているように、農民層の分解、商業的農業の成長および工業人口の増加は、この古い地域でも国内市場を拡大しつづけたし、いまも拡大しつづけている。だが、国内市場のこのような拡大は、多くの事情（主として、農業資本主義の発展を押しとどめる古い諸制度の存続）によって押しとどめられている。そして工場主たちは、もちろん、国民経済の他の部門がその資本主義的発展において繊維工業に追いつくのを待とうとはしないであろう。工場主たちにはいますぐにも市場が必要なのであって、もし国民経済の他の側面の後進性が古い地域で市場をせばめているならば、彼らは他の地域に、あるいは他国に、あるいは古い国の植民地に、市場をもとめるであろう。

だが、経済学的な意味での植民地とはなにか？　すでにさきに述べたように、マルクスによれば、この概念の基本的標識は次のとおりである。（一）移住者が容易に入手できる、占拠されていない自由な土地が存在すること、（二）すでに形成された世界的分業、世界市場が存在しており、そのおかげで植民地は農産物の大量生産に専門化することができ、それと交換に、「他の事情のもとではそれらを自分で生産しなければならないであろう」（前出一八九ページ〔本訳書、二二九ページ〕の注、第四章第二節を見よ）完成工業製品を得ることができること。農民改革後の時代に人が住むようになったヨーロッパ・ロシアの南部および東部の辺境が、ほかならぬこのような特徴によってきわだっており、経済学的意味では中部ヨーロッパ・ロシアの植民地であるということについては、すでにその箇所で述べておいた。* 植民地のこの概念は、その他の辺境たとえばカフカーズには、さらによくあてはまる。ロシアによるこの地の経済的「征服」は、政治的征服よりもはるかあとでおこなわれ、そしてこの経済的征服はいまでも完全には完了していない。農民改革後の時代には、一方では、カフカー

ズの強力的な植民地化***、入植者たちによる土地の広範な開墾が（とくに北カフカーズで）おこなわれ、彼らは、小麦、タバコ、その他を販売のために生産し、大量の農村賃金労働者をロシアから吸引した。他方では、古くからの土着の「クスターリ」営業の駆逐がすすみ、それらは、もちこまれるモスクワ製品の競争を受けて没落した。古くからの武器生産は、もちこまれるトゥーラとベルギーの製品の競争を受けて没落し、クスターリによる鉄の加工は、もちこまれるロシアの生産物の競争を受けて没落し、銅、金銀、粘土、獣脂、ソーダ、皮革、等々の家内工業的加工も同様であった***。これらの生産物はすべて、ロシアの工場でより安く生産され、それが自分の製品をカフカーズに送ってきたのである。また、脚付酒盃の角細工は、グルジアで封建制度とその歴史的な酒宴が衰えた結果として没落し、帽子製造業はアジア的服装にヨーロッパ的服装がとってかわった結果として没落した。地酒のための革袋と壺の生産は没落したが、地酒ははじめて販売に出されるようになり（樽の生産を発展させながら）、それがこんどはロシアの市場を征服していった。ロシアの資本主義は、カフカーズをこのように世界的な商品流通に引きいれ、その地方的な特質——古くからの家父長制的封鎖性の遺物——をなくし、自分の工場のための市場をみずからにつくりだした。農民改革後の時期の初期にはあまり人が住んでおらず、あるいは、世界経済からかけはなれ、歴史からさえもかけはなれていた山地人が住んでいたこの国は、石油産業家、ぶどう酒商人、小麦やタバコの製造家の国に変わっていった。そして、クーポン氏(三二)は無情にも、高慢な山地人を、その詩的な民族的衣裳からヨーロッパの従僕の衣裳に着替えさせてしまった（グレブ・ウスペンスキー）。カフカーズの急激な植民地化とその農業人口の急激な増加との過程とならんで（この過程によってかくされているが）、農業から工業への人口の転出過程もまた進行した。カフカーズの都市人口は、一八六三年の三五万人から一八九七年には約九〇万人に増加した（カフカーズの全人口は一八五一年から一八九七年までに九五％増加した）。中央アジアでもシベリア等々でもこれと同じことが起こったし、また起こっていることを、つけくわえる必要はない。

* 「……もっぱらそれらのおかげで、これらの人民的生産形態のおかげで、そしてそれらにもとづいて、南部ロシア全体に植民され、そこに人が住むようになった」（ニコライ—オン氏『概要』、二八四ページ）。「人民的生産形態」ということの概念が、なんとすばらしく広くて内容豊かであることか！　それは、なんでもすべてつつんでしまう。すなわち、家父長的な農民的農業も、雇役も、原始的な手工業も、小商品生産も、また、タヴリーダ県とサマラ県の資料によってわれわれ

がさきに見たような（第二章）、農民共同体の内部におけるあの典型的な資本主義的関係も、その他等々も、すべてつつんでしまう。

＊＊『ヴェーストニク・フィナンソフ』、一八九七年第二一号所載のペ・セミョーノフの論文、および『ノーヴォエ・スローヴォ』、一八九七年六月号所載のヴェ・ミハイロフスキーの論文を見よ。

＊＊＊『クスターリ工業にかんする報告と調査』第二巻所収のカ・ハチソフの論文、および『クスターリ委員会報告集』第五冊所収のペ・オストリャコフの論文を見よ。

こうしておのずから次の問題が生じてくる――国内市場と外国市場との境界はどこにあるか？　国家の政治的境界をとることは、あまりにも機械的な解決であろう。そしてこれは解決だろうか？　中央アジアが国内市場で、ペルシアが外国市場であるとしたら、ヒヴァやブハラはどちらへ入れたらよいのか？　シベリアが国内市場で、中国が外国市場であるとしたら、満州はどちらへ入れたらよいのか？　このような問題は重要な意義をもたない。重要なことは、資本主義は、その支配の範囲をたえず拡大することなしには、新しい国々を植民地化し非資本主義的な古い国々を世界経済の渦に引きこむことなしには、存在することも発展することもできない、ということである。そして資本主義のこの属性は、農民改革後のロシアで、巨大な力で現われたし、いまでもひきつづき現われているのである。

したがって、資本主義にとっての市場の形成過程は、二つの側面をしめしている。すなわち、資本主義の奥への発展、すなわち、所与の、一定の、閉じられた地域における、資本主義農業と資本主義工業とのいっそうの成長と、資本主義の横への発展、すなわち、新しい地域への資本主義の支配範囲の拡張である。本書の計画では、われわれは過程の第一の側面にほとんどもっぱら限定しているので、過程のもう一つの側面のもつきわめて重要な意義をここで強調することはとくに必要である、と考える。辺境の植民地化とロシア領土の拡張との過程を、資本主義の発展という見地からいくらかでも完全に研究するには、特別の労作が必要であろう。われわれにとっては、ここで次のことを強調しておけば十分である。すなわち、ロシアは、その辺境に植民が可能な空いた土地が豊富にあるので、他の資本主義国にくらべてとくに有利な条件にある。＊アジア・ロシアについてはいうまでもなく、ヨーロッパ・ロシアにも――長大な距離と劣悪な交通路のため――中部ロシアと経済的にはまだきわめて微弱な結びつきしかない辺境がある。たとえば「極北」でのアルハンゲリスク県をとってみよう。広大無辺の土地と自然の富は、まだきわめてわずかな程度しか開発されていない。主要な地方的生産物のひとつである

木材は、最近まで主としてイギリスにいっていた。この点では、したがって、ヨーロッパ・ロシアのこの地区は、ロシアにとっては国内市場ではなく、イギリス人にとっての外国市場となっていた。もちろん、ロシアの企業家たちはイギリス人をうらやんでいたが、いま、アルハンゲリスクまで鉄道が開通してからは、「この地方のさまざまな産業部門での精神の高揚と企業家的活動」を予見して、彼らは狂喜しているのである。**

* 本文で述べた事情は、他の側面をももっている。古い、早くから人が住んでいた地域での資本主義の奥への発展は、辺境の植民地化の結果おしとどめられる。資本主義に固有の、そして資本主義が生みだす諸矛盾の解決は、資本主義が容易に横へ発展しうることの結果、一時さきに延ばされる。たとえば、工業の最も先進的な諸形態と農業のなかば中世的な諸形態との同時的存在は、疑いもなく、矛盾である。もしロシア資本主義にとって、農民改革後の時期の初期にすでに占拠されていた地域の範囲をこえてひろがってゆく場所がどこにもなかったなら、資本主義的大工業と農村生活における古風な諸制度（農民の土地への緊縛、その他）とのあいだのこの矛盾は、これらの制度の完全な廃止、ロシアにおける農業資本主義のための道の完全な清掃を、急速にもたらさずにはおかなかったであろう。だが、植民される辺境に市場をもとめ、かつそれを見いだす可能性（工場主にとっての）、新しい土地に出かけてゆく可能性（農民にとっての）は、この矛盾の鋭さを弱め、その解決を遅らせる。資本主義の成長がこのように遅れることは、最も近い将来における資本主義のさらに大きな、そしていっそう広範な成長を準備することと同じであることは、いうまでもない。

**『生産力』、第二〇巻、一二ページ。

六　資本主義の「使命」

終りにあたってわれわれになお残されていることは、文献では資本主義の「使命」という名称を付与された問題、すなわちロシアの経済的発展における資本主義の歴史的役割の問題について、総括することである。この役割の進歩性を承認することは（われわれが事実にかんする叙述の各段階で詳細にしめそうとつとめたように）、資本主義の否定的で暗黒な側面を完全に承認することと、また、この経済制度の歴史的に経過的な性格を暴露する、資本主義にとって不可避的に固有な、深刻で全面的な社会的諸矛盾を完全に承認することと、完全に両立する。資本主義の歴史的進歩性を承認することがあたかもそれを弁護することを意味するかのように事態を描きだそうと全力をつくしているナロードニキこそ、ほかならぬこのナロードニキこそが、ロシアの資本主義の最も深刻な諸矛盾を不十分にしか評価しない（しかもしばしば黙殺しさえする）という誤りをお

かし、農民層の分解、わが国の農業の進歩の資本主義的性格、分与地をもつ農村および営業の賃金労働者の階級の形成を塗りかくし、あの名高い「クスターリ」工業のなかで資本主義の最低かつ最悪の諸形態が完全に支配していることを塗りかくしているのである。

資本主義の進歩的な歴史的役割は、二つの短い命題に要約することができる。すなわち、社会的労働の生産力の向上と労働の社会化である。だがこれら二つの事実は、国民経済の種々の部門で、多種多様な過程のうちに現われる。

社会的労働の生産力の発展は、機械制大工業の時代にのみ完全に鮮明に見うけられる。資本主義のこの最高の段階以前は、手労働生産と、純粋に自然成長的に、そしてきわめて緩慢に進歩した原始的技術とが、まだ残っていた。農民改革後の時代は、この点で、ロシア史のそれ以前の時代から鋭く区別される。木製犂と連枷、水車と手織機のロシアは、プラウと脱穀機、蒸気製粉所と蒸気織機のロシアに急速に転化しはじめた。資本主義的生産に従属している国民経済の部門のどの一つとして、そこで同様の完全な技術改造が見うけられないものはない。この改造の過程は、資本主義の本性そのものからして、一連の不均等と不均衡のうちで以外にはすすむことはできない。繁栄期に恐慌期がとってかわり、ある産業部門の発展は他の産業部門の衰微をもたらし、農業の進歩は、ある地域では農業のある側面を、他の地域では他の側面をとらえ、商業と工業の成長は農業の成長を追いこす、等々。ナロードニキ的著述家たちの一連の多くの誤りは、この不均衡的な、飛躍的な、投機的な発展は発展ではない、ということを証明しようとする彼らの試みから生じている。*

* 「われわれがイギリスを海にしずめてみずからその地位を占めるのに成功したとした場合でさえ、資本主義のいっそうの発展がわれわれになにをもたらしうるだろうか……を見よう」（ニコライ―オン氏『概要』、二一〇ページ）。世界の消費の三分の二を充足している、イギリスとアメリカの木綿工業では、全部で六〇万人あまりが就業している。「そこで、われわれが世界市場のきわめていちじるしい部分を手に入れたとした場合でさえ、……やはり資本主義は、それがいまたえず仕事をうばっている労働力の全部を利用することはできないであろう。どんな仕事もしないで数ヵ月も坐っている幾百万もの農民とくらべれば、六〇万そこらのイギリスとアメリカの労働者は、実際、どんな意味があるというのか」（二一一ページ）。

「これまでは歴史があったが、いまではもはや歴史はない」。これまでは、繊維工業における資本主義の発展の一歩一歩は、農民層の分解、商業的農業と農業資本主義の成長、農業から工業への人口の転出、建設業、林業および他のあらゆる種類の非農業的な雇用労働への「幾百万もの農民」の転換、多数

の人民の辺境への移住、これらの辺境の資本主義にとっての市場への転化、をともなってきた。だが、このようなことはすべて、これまでにあっただけであって、いまではそのようなことはもはやなにも起こらない！

資本主義による社会的生産力の発展のもう一つの特性は、生産手段（生産的消費）の増加が、個人的消費の増加をはるかに上まわることにある。われわれは、このことが農業と工業でどのように現われるかを、なんども指摘した。この特性は、資本主義社会における生産物実現の一般的諸法則から生じるのであり、この社会の敵対的な本性に完全に照応しているのである。*

* 生産手段の意義の無視と「統計」にたいする不注意な態度は、ニコライ―オン氏の、いかなる批判にもたえない次のような主張を呼びおこした。「……加工工業の分野における全（！）資本主義的生産は、せいぜい、四―五億ルーブリを超えない新しい価値を生産するだけである」（『概要』、三二八ページ）。ニコライ―オン氏は、三パーセント税と付加税にかんする資料にもとづいてこの計算をしているが、そのさい、これらの資料が「加工工業の分野における全資本主義的生産」を包括しうるかどうかを、考えもしていないのである。それだけでなく、彼は、鉱山・冶金業を包括しない（彼自身のことばによる）資料をとっているのであり、しかもそのうえ、剰余価値と可変資本だけを「新しい価値」としているのである。わが理論家は、個人的消費資料を生産する工業部門における不変資本も、社会にとっては新しい価値を構成し、それは、生産手段を製造する工業部門（鉱山・冶金業、建築業、林業、鉄道建設、その他）の可変資本と剰余価値と交換される、ということを忘れているのだ。もしニコライ―オン氏が、「工場」労働者数を、加工工業で資本主義的にやとわれている労働者総数と混同しなかったなら、彼は容易に自分の計算の誤りに気づいたであろう。

資本主義による労働の社会化は次の諸過程のなかに現われる。第一に、商品生産の成長そのものが、現物経済に固有な小さな経済単位の細分状態を破壊し、小さな地方的市場を巨大な国民的（ついで世界的）市場に結合する。自分のための生産は社会全体のための生産に転化する。そして資本主義が高度に発展すればするほど、生産のこの集団的性格と取得の個人的性格との矛盾がますますはげしくなる。第二に、資本主義は、生産の旧来の細分状態にかわって、農業においても工業においても、以前には見られなかったような生産の集積をつくりだす。このことは、いま考察している資本主義の特性の、最も明白な、そして最もきわだった現象であるが、しかしけっして唯一の現象ではない。第三に、資本主義は、先行の諸経済制度の不可欠の属性をなしていた人格的隷属の諸形態を駆逐する。ロシアでは、資本主義の進歩性がこの点でとくに鋭く現われる。なぜなら、生産者の人格的隷属は、わが国では、農業においてだ

けではなく加工工業においても（農奴労働をもつ「工場」）、鉱業においても漁業*その他においても、存在していた（部分的には、現在もなおひきつづき存在している）。従属的あるいは債務奴隷的な農民の労働とくらべれば、自由な賃金労働者の労働は、国民経済のすべての分野で進歩的現象である。第四に、資本主義は必然的に住民の移動性をつくりだすが、これは、以前の社会経済制度が必要としなかったし、それらの制度のもとでは多少とも広範な規模では不可能なものであった。第五に、資本主義は、農業（そこでは、最も遅れた形態の社会経済関係がつねに広く存在している）にたずさわる人口の割合をたえず減少させ、大きな工業中心地の数を増大させる。第六に、資本主義社会は、結社への、結合への住民の欲求を増大させ、この結合に、以前の時代の結合とくらべて特別な性格を付与する。中世社会の狭い、地方的な、身分的な団体を破壊し、激烈な競争をつくりだしながら、資本主義は、同時に、生産において相異なる地位を占める人々の大きな諸グループに社会全体を分裂させ、そのようなグループのそれぞれの内部での団結に大きな刺激をあたえる。** 第七に、資本主義による古い経済機構の前記のすべての変化は、不可避的にまた住民の精神的風貌の変化をもたらす。経済的発展の飛躍的性格、生産方法の急速な改変と生産の巨大な集積、あらゆる形態の人格的隷属と家父長制的関係の消滅、住民の移動性、大きな産業中心地の影響、等々——これらはすべて、生産者たちの性格そのものの深刻な変化をもたらさないわけにはいかないのであって、われわれはすでに、ロシアの調査者たちのこれらについての観察を指摘する機会があった。

* たとえば、ロシアの漁業の主要な中心地の一つであるムルマンスク海岸では、経済関係の「昔からの」、そして真に「長い歳月によって神聖化された」形態は「ポクルート」[三〇]であって、それはすでに一七世紀に完全に形成され、ごく最近にいたるまでほとんど変化しなかった。「その主人にたいするポクルチェンニク（債務奴隷）の関係は、営業の時間だけにかぎられていない。それどころか、それはポクルチェンニクの全生涯を包含しており、彼らはその主人にたいする永遠の経済的従属におかれている」（『ロシアにおけるアルテリにかんする資料集』、第二冊、サンクト・ペテルブルグ、一八七四年、三三ページ）。さいわいにも、資本主義はこの部門においても、明白に、「自分自身の歴史的過去にたいする侮蔑的態度」においてきわだっている。「独占は……自由な賃金労働者をつかう資本主義的な営業組織にとってかわられる」（『生産力』、第五巻、二—四ページ）。

** 『試論』、九一ページの注八五、一九八ページ[三一]を参照。

その代弁者たちとわれわれがたえず論争しなければならなかったナロードニキ経済学に目を向けると、われわれは、彼らとわれわれとの意見の相違の原因を次のように要約す

法外に悪くしている旧時の諸制度が、これほど豊富に無事に残ってはいないからである。最後に、ナロードニキとの意見の相違のおそらく最も深い原因は、社会経済的諸過程にたいする基本的見解の相違のうちにある。これら過程を研究するさい、ナロードニキはあれこれの道徳論的結論をくだすのがふつうである。彼は、生産に参加している人々のさまざまなグループを、あれこれの生活形態の創造者とは見ない。また彼は、社会経済関係の全総体を、異なる利害と異なる歴史的役割をもつこれらのグループのあいだの相互関係の結果としてしめすことを、目的として立てないのである……。もしこの文章を書いている私が、これらの問題の解明のための若干の材料をあたえることに成功したとするならば、私は自分の仕事がむだではなかったと考えることができる。

ることができる。第一に、ほかならぬロシアで資本主義の発展がどのように進行しているかという過程の理解そのものが、また同時にロシアにおいて資本主義に先行した経済関係の構造についての表象が、ナロードニキにあっては無条件にまちがっている、と認めないわけにはいかない。しかも、われわれの観点からとくに重要と考えられることは、農民経営（農業のであれ営業のであれ）の構造のなかにある資本主義的諸矛盾を、彼らが無視していることである。さらに、ロシアにおける資本主義の発展が緩慢であるか急速であるかという問題についていえば、すべては、この発展をなにと比較するかにかかっている。もし、ロシアにおける前資本主義時代を資本主義時代と比較するならば（そしてこのような比較こそが問題の正しい解決のために必要なのであるが）、資本主義のもとでの社会経済の発展はきわめて急速である、と認めなければならない。だがもし、発展のこの速度を、技術と文化一般の現代の水準のもとで可能なはずの速度と比較するならば、実際に、ロシアにおける資本主義のこの発展は緩慢であると認めなければならない、そしてそれは緩慢でしかありえない。なぜなら、他のどの資本主義国においても、資本主義と両立しないでその発展を押しとどめ、「資本主義のゆえにも資本主義の不十分な発展のゆえにも苦しんでいる」〔三〕生産者たちの状態を

付 録 I

(第5章の265ページ)〔本訳書 305 ページ〕

モスクワ県の農民的小営業にかんする統計資料の総括表

(1) 欄のなかの「—」はゼロの代り，空欄は「報告なし」を意味する．
(2) 営業の配列は，事業所あたり平均労働者（家族労働者および賃金労働者）の数の大きい順になされている．
(3) 営業No. 31とNo. 33については，加工される原料の価額があたえられているが，これは，製品の価額の，すなわち生産額の50—57%を占める．
(4) 経営主1人あたりの馬の平均頭数は，19の営業にかんする資料によれば 1.4頭であるが，等級別には（Ｉ）1.1頭，（II）1 5頭，（III）2.0 頭
(5) 労働者をもちいて土地を耕作する経営主のパーセントは，16の営業にかんする資料によれば12%であるが，等級別には（Ｉ）4.5%，（III）16.7%，（III）27.3%

営業番号	営業の名称	事業所総数				労働者総数				生産額（ルーブリ）				賃金労働者をもつ事業所の数				賃金労働者数				1経営主あたりの馬の平均頭数				労働者をもちいて土地を耕作する経営主の%				事業所の等級別の基準			営業番号
		総数	I	II	III	総数	I	II	III	総数	I	II	III	総数	I	II	III	総数	I	II	III	総数	I	II	III	総数	I	II	III	I	II	III	
1	馬車製造業	76	40	25	11	127	40	50	37	30,100	9,500	10,500	10,100	4	—	1	3	7	—	1	6	1.2	0.9	1.3	1.9	1	—	—	9	労働者1人をもつもの	労働者2人をもつもの	労働者3人以上をもつもの	1
2	玩具製造業(ろくろ師)	47	22	17	8	83	22	34	27	13,500	2,900	5,300	5,300	7	—	4	3	10	—	4	6	1.2	0.8	1.3	2.0	—	—	—	—		No. 1 と 同 じ		2
3	眼鏡製造業	27	12	8	7	49	12	16	21	11,550	3,000	4,300	4,250	1	—	—	1	2	—	—	2										〃 〃		3
4	指物業	274	196	66	12	576	277	213	86	96,800	48,650	33,850	14,300	16	—	5	11	48	—	7	41									〃1—2人〃	〃3—4人〃	〃5人以上〃	4
5	籠編業	121	35	52	34	265	35	104	126	40,860	4,100	16,250	20,510	—	—	—	—	—	—	—	—	0.9	1	0.8	1	—	—	—	—		No. 1 と 同 じ		5
6	ギター製造業	29	9	12	8	61	9	24	28	16,000	2,025	5,900	8,075	—	—	—	—	—	—	—	—	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—		〃 〃		6
7	玩具製造業(セルギエフスキー集落)	41	28	8	5	95	48	24	23	27,330	13,130	8,000	6,200	5	—	3	2	9	—	4	5	0.7	0.6	0.5	1.4	—	—	—	—	〃1—2人〃	〃3人〃	〃4—5人〃	7
8	鏡製造業	142	99	27	16	332	134	89	109	67,350	19,170	18,180	30,000	32	3	13	16	84	3	20	61	1.4	1.1	1.5	2.5	9.9	—	7.4	75		No. 4 と 同 じ		8
9	温室園芸業	74	29	36	9	188	50	100	38	54,400	11,900	30,090	12,410	34	5	21	8	42	6	23	13	2.2	1.7	2.5	2.7					炉 1—3基 〃	炉 4—6基 〃	炉 7—12基 〃	9
	9 営業計 (No.No. 1—9)	831	470	251	110	1,776	627	654	495	357,890	114,375	132,370	111,145	99	8	47	44	202	9	59	134												
10	皮革製造業(鞣皮)	10	4	3	3	27	9	9	9	29,890	2,450	6,040	21,400	8	2	3	3	13	2	6	5									皮革50—150枚を加工	皮革300—600枚を加工	皮革1,000枚を加工	10
11	皮革製造業(大皮)	22	7	11	4	63	10	31	22	78,911	6,942	34,135	37,834	6	—	3	3	16	—	8	8									〃60—200枚 〃	〃 250—800 枚 〃	〃 1,200—1,700枚〃	11
12	画筆製造業	15	8	4	3	42	16	12	14	19,700	7,000	6,600	6,100	1	—	1	—	2	—	2	—	0.8	0.7	1.2	0.6	—	—	—	—	労働者2人をもつもの	労働者3人をもつもの	労働者4—6人をもつもの	12
13	鍛冶業	42	9	24	9	133	18	72	43	25,700	3,100	13,900	8,700	28	3	17	8	32	3	17	12										No. 12 と 同 じ		13
14	塗物業	40	22	9	9	130	44	25	61	37,400	7,400	5,100	24,900	13	3	1	9	43	3	2	38	1.2	0.8	1.0	2.3	—	—	—	—	絵師と仕上師	露店商品を製造	店舗商品を製造	14
15	製陶業	121	72	33	16	452	174	144	134	224,800	81,500	71,800	71,500	60	28	16	16	149	33	29	87									労働者1—3人をもつもの	労働者4—5人をもつもの	労働者6人以上をもつもの	15
16	毛皮製造業	28	14	8	6	105	37	32	36	9,167	3,261	2,821	3,085	—	—	—	—	—	—	—	—	1.2	1.2	0.9	1.6	—	—	—	—	〃2—3人 〃	〃4人 〃	〃5人以上 〃	16
17	縁なし帽製造業	25	8	10	7	92	13	35	44	40,450	7,500	14,750	18,200	4	—	1	3	9	—	2	7									〃1—2人 〃	〃3—4人 〃	〃5人以上 〃	17
18	ホック製造業	45	22	16	7	198	54	77	67	50,250	12,150	19,200	18,900	22	6	9	7	70	7	24	39	1.1	0.9	1.0	2.1	27.9	9.1	31.2	71.4	〃2—3人 〃	〃4—7人 〃	〃8—12人以上 〃	18
	9 営業計 (No.No. 10—18)	348	166	118	64	1,242	375	437	430	516,268	131,303	174,346	210,619	142	42	51	49	334	48	90	196												
19	銅細工業	139	70	58	11	716	138	348	230	441,700	44,500	219,200	178,008	86	19	56	11	428	22	204	202									〃1—3人 〃	〃4—11人〃	〃12人以上 〃	19
20	ブラッシ製造業	150	81	59	10	835	264	426	145	233,000	62,300	122,400	43,300	94	32	52	10	343	47	188	108	1.2	1	1.5	1.8	39	20	54	91		No. 19 と 同 じ		20
21	靴製造業	64	39	14	11	362	116	99	147	291,490	87,740	82,990	120,760	41	16	14	11	217	47	68	102	1 5	1.3	1.6	2.1	12	8	21	19	〃1—5人 〃	〃6—10人 〃	〃11人以上 〃	21
22	煉瓦製造業	233	167	43	23	1,402	476	317	609	357,000	119,500	79,000	158,500	105	43	39	23	835	92	186	557										No 21 と 同 じ		22
23	馬具製造業	32	17	10	5	194	49	57	88	70,300	16,200	18,600	35,500	26	11	10	5	135	19	36	80									〃2—4人 〃	5—7人 〃	〃13人以上 〃	23
24	澱粉製造業	68	15	42	11	429	75	261	93	129,808	12,636	55,890	61,282	68	15	42	11	277	45	165	67	3.4	2.7	3.2	5.3					ふるい1—2個のもの	ふるい3個のもの	ふるい4個とドラム	24
25	皮革製造業(小皮)	11	2	5	4	75	4	25	46	77,570	800	28,450	48,320	9	—	5	4	69	—	23	46									皮革500枚を製造	皮革5千〜1万枚を製造	皮革 1.8—2.3 万枚を製造	25
26	玩具製造業(金属製玩具)	16	6	5	5	117	10	38	69	56,400	3,800	18,600	34,000	13	3	5	5	94	3	32	59	1.2	0.6	2	1.2	25	—	20	60	労働者1—2人をもつもの	労働者6—9人をもつもの	労働者11—18人をもつもの	26
27	帽子製造業	54	16	20	18	450	35	113	302	127,650	8,950	32,500	86,200	45	7	20	18	372	9	83	280									〃1—3人 〃	〃4—9人 〃	〃 10人以上 〃	27
28	絵付け業	37	12	14	11	313	53	111	149	229,000	39,500	81,500	108,000	32	7	14	11	220	21	74	125									〃1—5人 〃	〃6—9人 〃	〃 10人以上 〃	28
	10 営業計 (No.No. 19—28)	804	425	270	109	4,893	1,220	1,795	1,878	2,013,918	395,926	739,130	878,862	519	153	257	109	2,990	305	1,059	1,626												
29	篩編業	10	5	3	2	115	26	28	61	69,300	7,300	15,000	47,000	7	2	3	2	58	3	12	43	1.8	1	2.3	3	60	20	100	100	篩の目編を行なうもの	篩の目編と目織を行なうもの	同，より大規模のもの	29
30	盆製造業	29	7	12	10	340	15	67	258	102,530	4,130	22,400	76,000	23	2	11	10	284	2	44	238									労働者1—3人をもつもの	労働者4—8人をもつもの	労働者9人以上をもつもの	30
31	角細工業(ドミトロフ郡)	22	12	5	5	345	52	76	217	201,400	24,400	44,000	133,000	15	5	5	5	302	31	66	205									〃5—11人 〃	〃12—19人 〃	〃 20人以上 〃	31
32	ピン製造業	10	6	3	1	163	53	35	75	54,800	16,900	9,900	28,000	10	6	3	1	134	35	26	73									〃7—10人 〃	〃11—13人 〃	〃 13人以上 〃	32
33	角細工業(ボゴロドスク郡)	31	9	11	11	553	80	164	309	149,900	22,100	43,100	84,700	31	9	11	11	518	66	150	302										No.31 と 同 じ		33
	5 営業計 (No.No. 29—33)	102	39	34	29	1,510	226	370	920	577,930	74,830	134,400	368,700	86	24	33	29	1,296	137	298	861												
	33 営業合計	**2,085**	**1,100**	**673**	**312**	**9,427**	**2,448**	**3,256**	**3,723**	**3,466,006**	**716,434**	**1,180,246**	**1,569,326**	**846**	**227**	**388**	**231**	**4,822**	**499**	**1,506**	**2,817**												
34	そろばん製造業	91	55	29	7	171(?)	82	42	38	46,670	13,750	16,470	16,450	?				9				1.1	0.9	1.1	2.8	2.2	—	—	28	ろくろ師	指物師	組立職人	34
35	ふさ製造業	39	16	15	8	88	16	34	38	?				14	—	8	6	30	—	8	22	1.2	1.2	1.1	1.2					織機1台をもつもの	織機2—3台をもつもの	織機4台以上をもつもの	35
36	仕立業	43	18	17	8	286	62	123	101	?				34	9	17	8	191	20	89	82	1.3	1	1.2	2	28	5.5	29.4	75	労働者2—5人 〃	労働者6—9人 〃	労働者10—16人 〃	36
37	磁器製造業	20	6	9	5	1,861	108	621	1,132	1,399,000	69,000	435,000	895,000	20	6	9	5	1,817	96	601	1,120									〃 30人以下 〃	〃 31—104人 〃	〃 120人以上 〃	37

付　録 II （第7章，361ページへの）*

ヨーロッパ・ロシアの工場工業の統計資料の集成

年次	いろいろな時期についての情報がある，異なる数の生産業にかんする資料			34の生産業にかんする資料		
	工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数	工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数
1863	11,810	247,614	357,835	—	—	—
1864	11,984	274,519	353,968	5,782	201,458	272,385
1865	13,686	286,842	380,638	6,175	210,825	290,222
1866	6,891	276,211	342,473	5,775	239,453	310,918
1867	7,082	239,350	315,759	6,934	235,757	313,759
1868	7,238	253,229	331,027	7,091	249,310	329,219
1869	7,488	287,565	343,308	7,325	283,452	341,425
1870	7,853	318,525	356,184	7,691	313,517	354,063
1871	8,149	334,605	374,769	8,005	329,051	372,608
1872	8,194	357,145	402,365	8,047	352,087	400,325
1873	8,245	351,530	406,964	8,103	346,434	405,050
1874	7,612	357,699	411,057	7,465	352,036	399,376
1875	7,555	368,767	424,131	7,408	362,931	412,291
1876	7,419	361,616	412,181	7,270	354,376	400,749
1877	7,671	379,451	419,414	7,523	371,077	405,799
1878	8,261	461,558	447,858	8,122	450,520	432,728
1879	8,628	541,602	482,276	8,471	530,287	466,515
1885	17,014	864,736	615,598	6,232	479,028	436,775
1886	16,590	866,804	634,822	6,088	464,103	442,241
1887	16,723	910,472	656,932	6,103	514,498	472,575
1888	17,156	999,109	706,820	6,089	580,451	505,157
1889	17,382	1,025,056	716,396	6,148	574,471	481,527
1890	17,946	1,033,296	719,634	5,969	577,861	493,407
1891	16,770	1,108,770	738,146	—	—	—

* 本訳書では404ページ

注——

（一） ここに総括したのは、農民改革後の時代のヨーロッパ・ロシアの工場工業にかんする資料であるが、それらの資料をわれわれは次のような官庁出版物のうちに見いだすことができた。——『ロシア帝国統計時報』、サンクト－ペテルブルグ、一八六六年、第一巻。——『大蔵省報告・資料集』。一八六六年第四号、四月、および一八六七年第六号、六月。——『大蔵省年報』。第一、第八、第一〇および第一二冊。——『ロシア工場統計資料集成』、商工省刊行、一八八五—一八九一年。これらの資料はすべて同一の典拠、すなわち、工場主が大蔵省に提出する報告にもとづいている。これらの資料の意義と利点については、本文でくわしくしめしてある。

（二） 一八六四—一八七九年および一八八五—一八九〇年の情報があげてある三四の生産業は次のとおり。綿紡績業、綿織物業、亜麻紡績業、サラサ捺染業、大麻紡績および大綱製造業、毛紡績、ラシャ製造、毛織物、絹織物および紐製造、金襴織物および組紐製造、金糸紡績および金属打延ばし、編物製品製造、染物、仕上げ、塗油加工および塗物、文房用紙製造、壁紙製造、ゴム製造、化学製品および染料製造、化粧品製造、酢製造、ミネラル水製造、マッチ製造、封蠟およびラック製造、皮革・セーム皮および山羊皮製造、膠製造、ステアリン製造、石けんおよび蠟燭脂製造、蠟燭製造、ガラス・カットグラスおよび鏡製造、陶磁器製造、機械製作、鋳物、銅および青銅製品ならびに針金・釘および若干の小金物製造。

付 録 III (第7章，409ページへの)*

ヨーロッパ・ロシアにおける工場工業の最も重要な中心地

県	郡	市または村落	1879年 工場数	1879年 生産額(1000ルーブリ)	1879年 労働者数	1890年 工場数	1890年 生産額(1000ルーブリ)	1890年 労働者数	1897年の人口調査による住民数
モスクワ	モスクワ	モスクワ市	618	95,403	61,931	806	114,788	67,213	1,035,664
	〃	ダニロフスカヤ自由村	3	2,502	1,837	6	10,370	3,910	3,958
	〃	チェルキゾヴォ村	1	53	125	12	449	322	?
	〃	イズマイロヴォ村	—	—	—	1	1,604	1,104	3,416
	〃	プーシキノ村	2	3,060	1,281	1	620	1,076	3,151
	〃	バラシハ町	1	1,050	905	1	3,045	2,687	?
	〃	レウトヴォ村	1	2,900	2,235	1	2,180	2,134	3,256
	ヴェレーヤ	ナラーフォミンスコエ村	3	2,690	1,955	3	2,445	1,133	?
	ブロンニツィ	トロイツコエ－ラメンスコエ村	1	3,573	2,893	1	4,773	5,098	6,865
	クリン	ソルネーチナヤ・ゴラ村	1	60	304	2	1,384	1,073	?
	〃	ネクラシナ部落	1	1,300	538	1	3,212	2,794	?
	コロムナ	オーゼルィ村	4	214	1,163	5	4,950	5,574	11,166
	〃	サドキ町	3	1,775	1,865	1	1,598	1,850	?
	〃	ボブロヴォ村	1	4,558	2,556	1	4,608	3,396	5,116
	ドミートロフ	ドミートロフ市とその近郊	2	3,600	3,462	3	4,167	3,565	
	〃	ムロムツェヴォ村	1	1,774	2,371	1	2,076	1,816	?
	セルプホフ	セルプホフ市とその近郊	21	18,537	9,780	23	11,265	5,885	?
	〃	ネフェドヴァ部落	—	—	—	1	2,735	2,000	?
	ボゴローツク	ボゴロドスク市とその付近のグルホヴォ村	16	3,870	9,548	16	8,880	10,405	9,309
	〃	パヴロフスキー外廓地帯	15	2,623	2,751	13	1,760	2,071	9,991
	〃	イストムキノ村	1	2,006	1,426	1	2,007	1,651	2,085
	〃	クレストヴォズドヴィジェンスコエ村	4	740	935	5	1,415	1,670	?
	〃	ズーエヴォ村	10	3,216	2,059	9	5,876	2,054	9,908
		モスクワ市を除いた県計	92	60,101	49,989	108	81,419	63,268	—

注：「県計」は県内の列挙された中心地の合計を意味する．

第2版の注：対照のために住民数にかんする 1897 年の人口調査の数字をつけくわえておく．残念なことに，中央統計委員会の刊行物『2,000 人以上の住民をもつ郡における都市と村落』には詳細な資料がなにもない．

* 本訳書では 458 ページ

県	郡	市または村落	1879年			1890年			1897年の人口調査による住民数
			工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数	工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数	
トヴェーリ	トヴェーリ	トヴェーリ市とその近郊	23	6,440	8,404	26	8,720	6,875	53,477
	ヴィシネーヴォロチョーク	ヴィシネーヴォロチョーク市とその近郊	1	1,780	1,221	2	3,584	2,393	16,722
	〃	ザヴァロヴォ村	1	1,130	2,003	1	1,020	2,186	?
	コルチェヴァ	クズネツォヴォ村	1	400	861	1	500	1,220	2,503
	ルジョーフ	ルジョーフ市	15	1,894	3,533	6	411	765	21,397
	県計		41	11,644	16,022	36	14,235	13,439	—
リャザン	エゴーリエフスク	エゴーリエフスク市	20	4,126	3,532	15	5,598	5,697	19,241
ニジェゴロド	アルザマス	アルザマス市	24	394	380	18	255	366	10,591
	ゴルバートフ	ボゴロツコエ村	41	315	219	58	547	392	12,342
	〃	パヴロヴォ村	21	235	272	26	240	589	12,431
	〃	ヴォルスマ村	3	116	303	4	181	894	4,674
	バラフナ	ソルモヴォ村	1	2,890	1,911	1	1,500	1,000	2,963
	県計		90	3,950	3,085	107	2,723	3,241	—
グロドノ	ベロストーク	ベロストーク市	59	2,122	1,619	98	2,734	3,072	63,927
	〃	スプラスリ町	7	938	854	5	447	585	2,459
カザン	カザン	カザン市	66	8,083	3,967	78	7,663	4,787	131,508
タンボフ	タンボフ	ラスカゾヴォ村	19	1,067	2,128	13	940	2,058	8,283
チェルニーゴフ	スラージ	クリンツィ外廓地帯	15	1,892	2,456	27	1,548	1,836	12,166
スモレンスク	ドゥホフシチナ	ヤルツェヴォ村	1	2,731	2,523	1	4,000	3,106	5,761

県	郡	市または村落	1879年			1890年			1897年の人口調査による住民数
			工場数	生産額(1000ルーブリ)	労働者数	工場数	生産額(1000ルーブリ)	労働者数	
カルーガ	ジズドラ	リュヂノヴォ村	1	2,488	3,118	1	529	1,050	7,784
	メドィニ	トロイツコエ村とコンドロヴォ村	1	1,047	1,019	1	1,330	1,285	?
オリョール	ブリャンスク	ベジェツク駅付近	1	6,970	3,265	1	8,485	4,500	19,054
		セルギエヴォ－ラヂツコエ村	1	1,000	1,012	1	257	400	2,808
トゥーラ	トゥーラ	トゥーラ市	95	3,671	3,661	248	8,648	6,418	111,048
ウラヂーミル	ポクロフ	オレホヴォ駅付近のニコリスコエ町	2	7,316	10,946	3	22,160	26,852	25,233 7,219
	〃	ドゥレヴォ村	1	425	1,100	1	600	1,400	3,412
	〃	リキナ部落	1	317	389	2	1,184	1,155	?
	〃	キルジャチ市	11	1,025	1,437	9	628	825	?
	シューヤ	シューヤ市	38	5,161	4,879*	32	6,857	5,473	4,799
	〃	イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク市	49	20,867	9,943	52	26,403	15,387	53,949
	〃	テイコヴォ村	4	5,913	3,524*	4	4,642	3,581	5,780
	〃	コフマ村	9	3,232	2,413	6	2,769	1,666*	3,337
	メレンキ	メレンキ市	16	1,597	2,769	15	2,509	2,498	8,904
	〃	グーシ村	2	2,284	3,438	2	3,748	5,241	12,007
	ヴャズニキ	ヴャズニキ市とその付近のヤルツェヴォ部落	8	2,879	3,017	6	3,012	3,331	7,398
	〃	ユジャ市	1	—	—	1	2,390	1,961	3,378
	アレクサンドロフ	カラバノヴォ村	1	5,530	4,248	1	5,000	3,879	?
	〃	ストルニノ村	2	3,522	1,688	1	4,950	2,771	
	ペレヤスラヴリ	ペレヤスラヴリ市	8	2,671	2,154	6	2,703	2,157	8,662
	コヴロフ	コヴロフ市とその近郊	4	1,760	1,723	5	1,940	2,062	14,570
	〃	ゴルキ村	1	1,350	838	1	1,632	1,332	?
	〃	コロボヴォ村	1	676	575	2	895	885	?
	ウラヂーミル	ソビノ村	1	2,200	1,819	1	—	2,000	5,486
	〃	スタヴロヴォ村	3	1,834	1,335	2	567	871	?
	ムロム	ムロム市	26	1,406	1,407*	27	943	1,274*	12,589
	ユリエフ－ポリスキー	ユリエフ－ポリスキー市	12	1,062	1,138*	7	1,183	1,126*	5,637
県計			201	73,027	60,780	186	96,715	87,727	—

注：＊印は，工場労働者からよそではたらく労働者が除外されていることを意味する．

県	郡	市または村落	1879年 工場数	1879年 生産額(1000ルーブリ)	1879年 労働者数	1890年 工場数	1890年 生産額(1000ルーブリ)	1890年 労働者数	1897年の人口調査による住民数
サンクト－ペテルブルグ	サンクト－ペテルブルグ	サンクト－ペテルブルグ市	538	117,500	48,888	490	126,645	51,760	1,267,023
	〃	サンクト－ペテルブルグの郊外地	84	40,085	24,943	51	35,927	18,939	
	ナルヴァ	ナルヴァ市とその近郊＊	7	12,361	6,484	6	15,288	7,566	16,577
	ツァールスコエ・セロ	コルピノ外廓地帯	1	3,148	1,872	1	2,906	1,930	12,241
県計			630	173,094	82,187	548	180,766	80,195	—
キエフ	キエフ	キエフ市	76	3,279	1,858	125	16,186	5,901	247,432
	チェルカッスィ	スメラ町	9	4,070	1,434	8	4,715	1,238	15,187
コストロマ	コストロマ	コストロマ市	32	3,899	5,181	24	5,220	4,907	41,268
	キネシマ	キネシマ市とその近郊	4	421	157	9	1,737	1,748	7,564
	〃	テジノ村	3	768	950	3	1,866	2,420	?
	〃	ボニャチキ村	3	1,865	2,365	3	1,331	1,495	3,158
	〃	ナヴォロキ村	—	—	—	1	1,314	1,305	?
	〃	ヴィチューガ村	1	940	800	2	684	1,138	?
	〃	ノーヴァヤ・ゴリチハ村	4	389	265	4	260	686*	?
	ネレフタ	ネレフタ市	1	883	1,204	—	—	—	3,002
	〃	キセレヴォ村	2	1,189	1,196	3	2,855	2,368	?
	〃	ヤコヴレフスコエ村	5	1,041	1,095*	5	1,378	2,177*	?
	〃	ピスツォヴォ村	4	1,634	417	5	923	1,773	2,668
	〃	フロロフカ村	1	1,700	1,300	1	1,750	1,530	?
	ユリエヴェツ	ユリエヴェツ市	2	383	569	1	750	830	4,778
	〃	ロドニキ村	4	1,154	776	3	2,188	2,792	3,225
県計			66	16,266	16,275	64	22,256	25,169	—

＊　ここにはエストランド県も一部分はいる（クレンホルム・マニュファクチュア）．

県	郡	市または村落	1879年			1890年			1897年の人口調査による住民数
			工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数	工場数	生産額（1000ルーブリ）	労働者数	
リフランド	リガ	リガ市	151	19,094	11,962	226	26,568	16,306	256,197
ヤロスラヴリ	ヤロスラヴリ	ヤロスラヴリ市とその近郊	49	5,245	4,206	47	12,996	9,779	70,610
		ノルスキー外廓地帯	1	2,500	2,304	2	1,980	1,639	2,134
		ヴェリーコエ・セロ郷	1	910	956	6	2,169	2,992	4,534
県計			51	8,655	7,466	55	17,145	14,410	—
ハリコフ	ハリコフ	ハリコフ市	102	4,225	2,171	122	5,494	3,406	174,846
サラトフ	サラトフ	サラトフ市	103	4,495	1,983	89	7,447	2,224	137,109
	ツァリーツィン	ツァリーツィン市	25	272	218	57	1,086	751	55,967
	〃	ドゥボフカ居住地	21	157	110	26	221	270	16,255
県計			149	4,924	2,311	172	8,754	3,245	—
サマラ	サマラ	サマラ市	(?)1	18	10	48	4,560	1,377	91,672
ヘルソン	オデッサ	オデッサ市	159	13,750	3,763	306	29,407	8,634	405,041
ドン	ナヒチェヴァニ	ナヒチェヴァニ市	34	873	732	45	3,472	3,098	29,312
	ノヴォチェルカスク	ノヴォチェルカスク市	15	278	128	28	965	467	52,005
	ロストフ	ロストフ－ナ－ドヌ市	26	4,898	2,750	92	13,605	5,756	119,886
エカテリノスラフ	エカテリノスラフ	エカテリノスラフ市	33	1,003	469	63	4,841	3,628	121,216
	バフムト	ユーゾフカ町	1	2,000	1,300	3	8,988	6,332	28,076
	エカテリノスラフ	カーメンスコエ村	—	—	—	1	7,200	2,400	16,878
両県計			109	9,052	5,379	232	39,071	21,681	—
列挙された103の中心地の総計			2,831	536,687	355,777	3,638	706,981	451,244	—

事項注

（一） 著書『ロシアにおける資本主義の発展』は、三年以上にわたる膨大な研究活動の成果である。レーニンはペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」事件で逮捕されてのちまもなく、獄内でこの著書のための仕事をはじめ、そしてシュシェンスコエ村の流刑地でその仕事を終えた。

一八九六年一月二日の獄中からの最初の手紙に、レーニンはこう書いている。「逮捕されたときから強く私の心をひいており、時がたてばたつほどますます強くなる一つの計画が、私にはあります。私は長いことある経済学上の問題（国内加工工業の製品の販路にかんする）を研究し、いくつかの文献をあつめ、それを仕あげる計画をたて、すこしばかりのものを書きさえしました。そして、もし雑誌論文の大きさを越えるようであれば、この著作を単行本として出版するつもりでした。この著作を放棄するようなことはとてもしたくないのですが、いまや、どうやら、それをここで書くか、すっかりやめるか、どちらかにしなければならないようです」（全集第三七巻、二一ページ）。

レーニンは『ロシアにおける資本主義の発展』を、合法的に出版する予定で準備した。そこでレーニンは、ツァーリの検閲のために出版がおくれるようなことがないように、著書の形式をととのえ、表題のつけかたを考えなければならなかった。「表題はもっと控え目で、もっと重々しいもののほうが、検閲のことを考えれば適当でしょう」（前掲書、一五七ページ）と、レーニンは流刑地からの手紙に書いている。

レーニンは、『ロシアにおける資本主義の発展』の著述にとりかかるにあたって、この著書には綿密な調査活動、膨大な事実資料の研究と整理が必要であると考えた。彼は将来の著書の計画あるいは設計を要約して、次のように書いている。

「図書のリストは二つの部分に分けられ、私の著書も同じ部分に分けられます。Aは一般理論の部分。この部分はあまり本を必要としないので、いずれにしても私はそれを書きたいとおもいますが、――しかし準備活動がもっと必要です。Bは、理論的命題をロシアの実情へ適用することです。この部分は非常に多くの本を必要とします。おもな困難を呈しているのは次のものです。（一）ゼムストヴォ刊行物。しかし、この一部分は私のところにあり、一部分はとりよせることができるでしょう（小さな特殊研究論文）、また一部分は知合いの統計学者を通じて手に入れることができるでしょう。（二）政府刊行物――委員会の紀要、大会の報告と議事録など。これは重要なものですが、手に入れるのはより困難でしょう。一部分は自由経済学会（注二〇を参照）の図書室にあります。おそらく、大部分があるでしょう」（前掲書、二三ページ）。

著述の仕事のおもな区切りや情況は、近親者へのレーニンの手紙、近親者や同志の回想文で、明らかにされている。

レーニンは流刑地への道中においてさえ仕事をした。そして流刑地で、レーニンは本書の著述に精を傾けた。流刑地についたそのときから、彼は著作に必要な書物の入手と送付について大いに気をつかった。彼はそのことを近親者や知人への手紙に何度も書いている。一八九七年の秋以後、レーニンは必要な資料をきちんと受けとるようになり、新しい資料、とくに多数の統計集を利用して仕事を発展

させた。一八九八年の春には、流刑を受けてウファからシュシェンスコエ村に移されたエヌ・カ・クルプスカヤが、多数の書物をレーニンのところに運んできた。

本書の著述にあてられた三年間に、レーニンはロシア経済にかんするあらゆる文献を研究し批判的に検討した。本書のなかでは、五〇〇種以上のさまざまな文献類、すなわち、単行本、論集、調査報告、視察報告、論文がとりあげられたり、引用されたりしている。レーニンがとりあげている資料のリストにはふくまれていないが、実際には研究し利用した文献は、リストの何倍にものぼるが、このリストからでも、レーニンがロシア資本主義の発展を研究する過程でなしとげた膨大な仕事について、表象を得ることができる。

本書は一八九八年八月にあらかた完成した。しかし、その後もレーニンは本書の仕事を熱心につづけた。手稿の最終的な仕上げにはかなりの時間がかかった。手稿を書く仕事が終わったのは一八九九年一月末である。

レーニンは、本書をまだ手稿のうちに読んだ同志や近親者の意見に注意深く耳を傾けた。本書の各章は個々の小さなノートに複写され、エヌ・カ・クルプスカヤのほかに当時ミヌシンスク管区の流刑地にいた社会民主主義者たちが、それを読んで討議した。シュシェンスコエ村の近くに流刑になっていたゲ・エム・クルジジャノフスキーは、次のように回想している。「われわれは『ロシアにおける資本主義の発展』のいわば『最初の読者』であったが、送られてきたものをていねいに読み、自分の意見を書きそえて、ウラヂーミル・イリイチに送りかえした。彼はこのような意見によく耳を傾けた。

『ロシアにおける資本主義の発展』は、一八九九年三月末、「ウラヂーミル・イリイン」という筆名で出版された。

レーニンが本書を受けとったのは五月はじめであった。「本の外観には非常に満足しています。……みごとな出版になりました。」このようにレーニンは手紙に書いている。

本書の初版は二、四〇〇部発行されたが、それはたちまち売り切れた。本書は主として社会民主主義者のインテリゲンツィア、若い学生たちのあいだにひろまったが、さらに宣伝活動家を通じて労働者のサークルにもひろまっていった。

ブルジョア出版界はレーニンの科学的労作を黙殺しようとした。やっと一八九九年秋になって、最初の書評が現われた。レーニンは書評のうちの一つにたいして、『非批判的批判』という論文で仮借ない反論をしたが、この論文は雑誌『ナウーチノエ・オボズレーニエ』一九〇〇年五―六月号に掲載された（全集第三巻に収録）。

一九〇八年には『ロシアにおける資本主義の発展』の第二版が出版された（注三〇を見よ）。

レーニンが『ロシアにおける資本主義の発展』の著述を準備する過程でおこなった研究活動の規模や方法をしめす準備資料の一部は、はじめ一九〇四年に『レーニンスキー・ズボールニク』第三三巻に発表され、その後一九七〇年に、『著書「ロシアにおける資本主義の発展」の準備資料』という表題の単行本の形で発表された。

本訳書が底本としたレーニン全集第五版、第三巻の原文は、レーニンがみずから目をとおして補足を加えた第二版（一九〇八年）によって印刷されているが、そのさい、一八九九年の第一版にかんするレーニンの注意はすべて考慮に入れられている。三

（三）ナロードニキ――一八六〇年代からロシアのインテリゲンツィアのあいだに現われた社会思想の一潮流に属する人々。「ヴ・

ナロード」（「人民のなかへ」）ということを標語にしていたので、この名がある。ナロードニキ主義は、本質的には農民に依拠する小ブルジョア的潮流である。

ロシアに資本主義が発展せず、半封建的地主にたいする農民の闘争がロシアにおける階級闘争の主要な形態であった時代には、ナロードニキたちも革命的役割を演じたが、八〇年代以降ロシアに資本主義が発達しはじめ、プロレタリアートが新しい時代の闘争の主要な担い手になると、、あくまで農民の立場を固執するこの一派は、プロレタリアートの解放運動に対立する、一種の反動勢力をなすようになった。

レーニンの著述活動の最初期の一八九〇年代には、彼は、ロシアで最も有力な反マルクス主義的潮流となったナロードニキ主義の批判に、大きな力をそそいだ。二五

(三)　**農民改革**（一八六一年の）――一九世紀の三〇年代以降、ツァーリ政府は「農奴制度の廃止」をよぎなくされたが、ツァーリ政府はこれを上からおこなうことによって、農奴主的地主の利益をまもろうとした。こうしてツァーリ、アレクサンドル二世は一八六一年二月一九日に、農奴制度を廃止する条令を公布した。これによって農民は形式的には農奴的隷属から解放されたが、実質的にはそれはなお維持され、ロシア農民はそれ以後もながく半封建的搾取のもとで苦しんだ。それにもかかわらず、「農民改革」後、ロシアでも資本主義的関係がしだいに急速に発展するようになった。なお、注六三、注二九を参照。二五

(四)　**ゼムストヴォ統計**――ロシアで農民改革後につくられた地方自治機関ゼムストヴォの参事会に所属する統計機関のおこなった統計調査資料。ゼムストヴォの調査は、主として徴税の便宜のためにおこなわれたものであり、またナロードニキ主義の誤った理論に立脚していたが、それでもなお、それはロシア経済の科学的分析のための貴重な材料を提供した。レーニンはこれをさまざまな場合にひろく利用している。二六

(五)　レーニンは一八九九年二月あるいは三月初めに流刑地で、カウツキーの著書『農業問題』を手に入れた。そのころ『ロシアにおける資本主義の発展』の本文の組版はだいたい完了していたので、レーニンは序文でカウツキーのこの著書に言及することにした。なお、この「追記」は検閲を受けて修正されたとつたえられるが、どの程度修正されたかは、レーニンの初めの手稿が残っていないので、わからない。二六

(六)　マルクスの『資本論』第三巻は一八九四年にドイツ語で出版された（第三巻にたいするエンゲルスの序文は一八九四年一〇月四日付になっている）。なお、ロシア語訳ははやくも一八九六年にエヌ・エフ・ダニエリソン（ニコライーオン）の訳によって出版された。二六

(七)　邦訳、岩波文庫版、上巻、一五ページ。二六

(八)　前掲書、上巻、一九四ページ、下巻、一四八および一五三ページ。二七

(九)　『ロシアにおける資本主義の発展』第二版（一九〇八年）では、章節の番号が変えられたが、それはレーニンが一連の補足をおこなったからである。レーニンがここで参照を求めている部分は、この版では第二章、第一二節（C）、（本訳書一五三―一五四ページ）にある。二七

(一〇)　邦訳、上巻、三二五ページ。二七

(一一) 同、下巻、一九一ページ。二七
(一二) 同、上巻、三一四ページ。二七
(一三) 同、下巻、一〇九ページ。二七
(一四) 同、二五六ページ。二七
(一五) 同、一八二ページ。二七
(一六) 同、一七五ページ。二七
(一七) 同、上巻、二八〇ページ。二七
(一八) 同、三一二ページ。二八
(一九) 一八九九年二月一七日にロシア商工業育成協会で、「ナロードニキ主義とマルクス主義とは和解できないか」というテーマで報告と討論がおこなわれた。この討論に参加したのは、自由主義的ナロードニキ主義の代表者と「合法マルクス主義者」、すなわち、ヴェ・ペ・ヴォロンツォフ、ペ・ベ・ストルーヴェ、ア・ア・イサーエフ、エム・エム・フィリッポフ、ア・シュタンゲ、エム・イ・トゥガン-バラノフスキー、エヌ・ヴェ・レヴィツキーであった。ヴォロンツォフはその発言のなかで、「西欧のマルクス主義の最新の潮流」の代表者は、ロシアのマルクス主義者にではなくむしろナロードニキに近い、と主張した。この討論会の簡単な報告は、ペテルブルグの反動的な新聞『ノーヴォエ・ヴレーミャ』の一八九九年二月一九日（三月三日）号に掲載された。二八
(二〇) 『ロシアにおける資本主義の発展』第二版は、一九〇八年に刊行された。
　レーニンは第二版のためにあらためて原文を検討し、誤植を訂正し、多くの補足をし、また一九〇七年七月の日付で第二版への序文を書いた。第二版では、レーニンは「弟子」、「勤労者の味方」という検閲用の表現をやめて、マルクス主義者、社会主義者という本来の名称にした。「新しい理論」に言及した部分は、直接マルクスおよびマルクス主義文献からの引用に変えられた。
　レーニンはこの版で、新しい統計資料にもとづくかなり多くの補足をしている。一八九六―一九〇〇年の軍馬調査の結果を分析するために、第二章の新しい節（第一一節）がもうけられた。レーニンは、ロシアにおける資本主義の発展にかんする自分の従来の結論を確証する新しい事実、とくに、工場統計の新しい資料を引いている。また、一八九七年の国勢調査の結果を分析してロシアの階級構造をよりいっそうはっきりさせている（第七章第五節、本訳書四四―四九ページ「第二版への補遺」を見よ）。二八
　また第二版では、本書でとりあげられている基本的諸問題にかんする「合法マルクス主義者」との論争の総括もおこなわれている。
(二一) マルクスは、ハイネが自分の受売り屋たちについて言ったこのことばを、『ドイツ・イデオロギー』、第二巻Ⅳで引用している。全集第三巻、五五四ページを参照。二九
(二二) ユンカー――本来は東ドイツの土地貴族で、農民の賦役によって大土地経営をおこなっていたもののことであるが、一九世紀中葉からはもっと広く、残存する古い諸関係を利用しながら利潤のために大農場経営をおこなう大土地所有者一般をさすようになった。ユンカーはとくにプロイセンの反動勢力の支配の基盤であった。二九
(二三) カデット――ロシアの帝国主義的ブルジョアジーの主要な政党である立憲民主党の党員のこと。カデット党は一九〇五年一〇月に創立された。そのメンバーとしては、自由主義的君主主義派のブルジョアジーの代表者たち、地主のなかのゼムストヴォ活動家、ブルジョア・インテリゲンツィアがあげられるが、彼らは農民を味方にするために偽りの「民主主義」的空文句でかざりたてていた。

カデットは君主制度の擁護者であり、革命運動にたいする闘争を主要な目的とし、ツァーリおよび農奴主的地主と権力を分かちあうことをねらっていた。三〇

(二四)　オクチャブリスト（あるいは「一〇月一七日同盟」）――一九〇五年の革命におびえたツァーリが人民にたいして、「市民的自由の確固たる基礎」をあたえることを約束した、同年一〇月一七日の宣言が公布されたのちに、ロシアに登場した政党。この党は、資本主義的経営をおこなう大産業家と地主との利益を代表し、擁護するものであった。オクチャブリストはツァーリ政府の内外政策を完全に支持し、一九〇六年秋以後は与党になった。三〇

(二五)　一九〇七年六月三日のクーデタ――この日、第二国会は解散され、ツァーリ政府は、地主と資本家に国会での多数を保障する第三国会の新選挙法を公布した。ツァーリ政府は自分が出した一九〇五年一〇月一七日の宣言を破るという背信を犯し、わずかな憲法上の権利まで廃棄し、第二国会の社会民主党議員団を裁判にかけて、懲役に処した。三〇

(二六)　「人民社会主義者」（あるいは「エヌ・エス」）――一九〇六年に社会革命党（エス・エル）の右派から分かれた勤労人民社会主義党に属する人々のこと。彼らは富農層の利益を代表し、地主からの土地買取りによる土地の部分的国有化と、いわゆる勤労基準にもとづく農民への土地分配を主張した。エヌ・エスはカデットと連合した。レーニンは彼らを、カデットとエス・エルとのあいだで動揺するものとして、「社会カデット」、「エス・エルのメンシェヴィキ」などとよんだ。三一

(二七)　トルドヴィキ（「勤労派」）――ロシア国会における小ブルジョア民主主義者のグループで、ナロードニキ派の農民やインテリゲンツィアから構成されていた。トルドヴィキ議員団は第一国会の農民議員でつくられた。

トルドヴィキはあらゆる身分的、民族的制限の撤廃、ゼムストヴォや都市自治体の民主化、普通選挙の実施を要求した。トルドヴィキの農業綱領は、土地利用の平等というナロードニキ的原則にもとづいていた。

国会ではトルドヴィキは、カデットとボリシェヴィキの中間で動揺していた。この動揺は、小所有者である農民の階級的性格そのものにもとづいていた。とはいえ、トルドヴィキはやはり農民大衆を代表するものであったから、ボリシェヴィキは国会内で、カデットやツァーリ専制との全般的闘争のために、個々の問題についてはトルドヴィキと協定する戦術をとった。三一

(二八)　モルチャリン――ア・エス・グリボエードフの喜劇『知恵の悲しみ』のなかの、おべっかつかいの登場人物。三一

(二九)　一八九九年の初版では、この章の表題は「理論との照合」となっていた。三三

(三〇)　第三七章、マルクス＝エンゲルス全集版、原書六五〇ページ、旧ディーツ版、六八七ページ。

マルクスの『資本論』の邦訳は数ヵ所の出版所から出ており、そのおのおのがかなり普及しているが、さいわいにもほとんどすべての版が、底本とした原書のページを欄外につけているので、読者の便宜を考え、注では全集版と旧ディーツ版のページをしめすことにした。なお、原書ページを付していない版の所有者の便宜をも考えて、章節の番号をしめしておくことにした。

なお、レーニンは本書で『資本論』を引用する場合に、第一巻は一八七二年の第二版を、第二巻は一八八五年の版を、第三巻は一八

九四年の版をもちい、すべて自分で翻訳している。三四

(三一) 第三七章、全集版、六五〇ページ、旧ディーツ版、六八七ページ。三五

(三二) これはレーニンが一八九七年に、カ・トゥーンという筆名で雑誌『ノーヴォエ・スローヴォ』(『新しいことば』)に発表したもので、全集第二巻に収録されている。レーニンはその第一章第一―六節で、本章で考察していると同じ問題を論じている。三六

(三三) 第二四章第五節、全集版、七七三ページ、旧ディーツ版、七八五ページ。三七

(三四) 同、全集版、七七五ページ、旧ディーツ版、七八七ページ。三七

(三五) 第二〇章第一二節、全集版、四六六ページ、旧ディーツ版、四七五ページ。四一

(三六) 大内兵衛、松川七郎訳『諸国民の富』、I、第一篇第六章、一三六ページ。四二

(三七) 前掲書、一三九ページ。四二

(三八) 前掲書、一三六ページ。ただしスミスの原文では、最後の部分は、「地代、賃金、利潤ではなく、地代、労働、利潤」になっている。四二

(三九) 『資本論』、第二巻、第一九章第二節三、全集版、三七三ページ、旧ディーツ版、三七六ページ。四二

(四〇) 『資本論』、第一巻、第二二章第二節、全集版、六一六ページ、旧ディーツ版、六一九ページ。

「ポンティウスからピラトゥスへ引きまわす」というのは、同じことの繰りかえしを意味する。この二つの名前は同一人物のものだからである。ポンティウス・ピラトゥス (Pontius Pilatus) は、紀元二六―三六年にローマのユダヤ総督(太守)であった。四二

(四一) レーニンが引用したこの箇所は、現行版では、(第二二章第二節) 全集版の六一七ページ、旧ディーツ版の六二〇ページにあたるが、レーニンの利用した第二版にあったこの文章は現行版(エンゲルスの編集した第四版)では削除され、新しく同節の最後の二つのパラグラフが書きたされている。なおカウツキー版は、「この現実の関連の分析は第二巻第三篇でおこなうであろう」という一句のあとに、第二版にあったがエンゲルス版では削除された文章――「そこでは、……〔以下はレーニンが引用したとおり〕」という一句が挿入されている(カウツキー版、五二六ページを参照)。四三

(四二) 第二篇第二章、前掲邦訳書、四六〇ページ。四三

(四三) 第一九章第二節一、全集版、三六四ページ、旧ディーツ版、三六五―三六六ページ。四四

(四四) 前掲邦訳書、四六〇―四六一ページ。四四

(四五) 第二六章、邦訳、リカードウ全集、第一巻、三九八―三九九ページ。四五

(四六) 第二〇章第一節、全集版、三九三ページ、旧ディーツ版、三九七ページ。四六

(四七) 第一八章、全集版、三一六―三一七ページ、旧ディーツ版、三三六ページ。四八

(四八) 第二〇章第一〇節、全集版、四三六ページ、旧ディーツ版、四四二―四四三ページ。四九

(四九) 第一六章第三節、注三、全集版、三一八ページ、旧ディーツ版、三一六ページ。四九

(五〇) 第一五章第一節、全集版、二五四―二五五ページ、旧ディーツ版、二七二―二七三ページ。四九

(五一) 第一五章第二節、全集版、二六〇ページ、旧ディーツ版、二七八—二七九ページ。五〇

(五二) 第三〇章、全集版、五〇一ページ、旧ディーツ版、五二八ページ。五〇

(五三) エドゥアルト・ベルンシュタインの『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』は、一八九九年に出版され、『ロシアにおける資本主義の発展』第一版の発行後に、流刑地にいたレーニンの手にはいった。レーニンはこれを読んで、第二版でベルンシュタインの日和見主義的諸命題にかんする批判的発言を挿入した。

レーニンは、ベルンシュタインを「ヘロストラトス的に有名な」とよんでいるが、ヘロストラトスは小アジアの古代都市エフェソスの住人で、紀元前三五六年、自分の名まえを不朽のものにしたいばかりに、「世界七不思議」の一つにかぞえられていたエフェソスのアルテミス神殿に火をつけたとつたえられている。以来、ヘロストラトスの名は、どんな手段に訴えても名声を得ようという野心家をさすのにもちいられる。五一

(五四) 第一八章、全集版、三一六ページ、旧ディーツ版、三三六ページ。五〇

(五五) 第四九章、全集版、八五一ページ、注三三、旧ディーツ版、八九八ページ、注一四八(あるいは一九五三年の版では、注五八)。なお、レーニンが指摘している誤訳は、ダニエリソンの翻訳した版のもの。以下同様。五三

(五六) 全集版、二五ページ、旧ディーツ版、一八ページ。五四

(五七) 『資本論』、第七篇第四九章、全集版、八四七—八四八ページ、旧ディーツ版、八九四—八九五ページ。五六

(五八) 同、全集版、八五三ページ、旧ディーツ版、九〇〇ページ。五六

(五九) 同、全集版、八五一—八五四ページ、旧ディーツ版、八九八—九〇一ページ。五六

(六〇) ヴェ・イ・ポストニコフのこの著書は、レーニンの最初期の労作の一つ『農民生活における新しい経済的動向』(全集第一巻所収)で詳しく検討されている。六一

(六一) 原典には表に番号はつけられていないが、邦訳では便宜上全巻をとおしての追番号をつけた。六二

(六二) 雇農——「バトラーク」の訳。農業労働者ではあるが、当時のバトラークは分与地をもっていたりして、純然たるプロレタリアートではなかったので、後者と区別して雇農と訳した。六二

(六三) 分与地——一八六一年のロシアにおける農奴制度の廃止後に、農民が利用するため残された土地。これは共同体が保有していて、農民のあいだに分配されて利用されたが、定期的に割替えがおこなわれた。この分与地の「買取り」については、注二九を参照。六四

(六四) 購入地——農民改革にあたって農民が買いとらされた分与地とはべつに、農民がその後自由に買いいれた土地。六四

(六五) ラズノチーネツ——一九世紀中葉のロシアにおける聖職者、官吏、町人もしくは農民などの雑多な階層の出身者で、貴族には属さない、平民のインテリゲンツィア。六九

(六六) 「チャグロ」——歴史的には、国家の課税対象調査のさいに単位とされる農業経営または手工業経営のことであるが、ここでは、家族(夫婦)と一定数の労働能力者、および一定数の家畜ならびに農具からなる一組をさす。つまり、共同畜耕や家畜、農具の借入れをしないでやってゆける、独立の農業経営単位のこと。七〇

(六七) フートル——マジャール語の határ に由来する語で、元

来は、所有者の屋敷や庭や農業用建物をもふくむ特別の土地のこと。これは、農村共同体の解体につれて形成された、個人的土地所有にもとづく私的所有地である。フートルをもつことができたのは富裕な農民にかぎられた。一九〇六年のストルィピン改革（注六八を参照）は、このフートル農民を多数つくりだして、農業における資本主義の発展をうながした。七五

（六八）登録農奴人口（レヴィースカヤ・ドゥシャ）——農奴制下のロシアの男子住民で、年齢および労働能力にかかわりなく人頭税を課せられていたもの（おもに農民と町人）。その人数は通称「レヴィージヤ」といわれる特別の人口調査によって算定された。この調査は一七一八年から実施され、一八五七—一八五九年に最後の第一〇回調査がおこなわれた。多くの地方では、農村共同体内での土地の割替えはこの登録農奴人口にしたがってなされた。九一

（六九）ニジェゴロドはニジニー・ノヴゴロドの略称。一〇八

（七〇）メーラ——一般的には測定単位のことであるが、ここでは、粒状のものの体積をあらわすのにロシアの民衆がもちいていた、厳密に規定されていない単位のことで、一プードの穀物のそれにほぼ等しい、とされている。一二〇

（七一）『ルースコエ・ボガーツトヴォ』（『ロシアの富』）——一八七六年から一九一八年なかごろまでロシアで出版されていた合法月刊誌。一八九〇年代はじめから自由主義的ナロードニキの機関誌となり、ツァーリ政府と妥協してツァーリ政府にたいする革命闘争をいっさい放棄すべきことを宣伝し、マルクス主義にはげしく敵対した。一二六

（七二）軍馬調査——帝政ロシアで、動員のさいに軍隊として役だつ馬匹数を把握するために、通常六年ごとにおこなわれた。一八七六年におこなわれた第一回調査の分を除き、一八八二年の第二回調査からは、毎回その結果が公式に発表された。

この軍馬調査は農民経営の全面的調査という性格のものであって、レーニンは、農民層の分解を研究するにあたってこの調査資料を利用している。一二八

（七三）『ロシア・クスターリ工業調査委員会報告書』——一八七九年から一八八七年にかけて刊行された全一六巻の出版物。「クスターリ委員会」と略称されるこの委員会は、一八七〇年にひらかれた第一回全ロシア工場主大会の請願によって、一八七四年に商工会議所に付属して設置された。その構成員となったのは、大蔵省、内務省、国有財産省、ロシア地理学会、自由経済学会、モスクワ農業学会、ロシア技術学会およびロシア商工業助成協会の代表たちである。この委員会の『報告書』に発表された資料をあつめたのは、おもに地方の協力者たちであった。レーニンはこれらの『報告書』を詳細に研究し、そこから、クスターリ工業のなかで資本主義的関係が発展していることをしめす多数の資料や事実を引きだした。

なお、クスターリというのは、市場めあての家内仕事に従事している手工業的小生産者であって、なにもロシアに特有のものではない。一三六

（七四）レーニンはこの欄に果樹栽培および畜産からの収入をもふくめている。一三八

（七五）第四七章、全集版、八二〇ページ、旧ディーツ版、八六四ページ。一四一

（七六）レーニンがここで念頭においているのは、一八九七年三月一日に自由経済協会でア・イ・チュプロフ教授がおこなった『経済生活のいくつかの側面におよぼす収穫と穀物価格の影響』という題

の報告にかんする討論のことである。自由経済学会は、一七六五年に設立された特権的な学会であって、自由主義的な貴族やブルジョアジー出身の学者によって構成されていた。一四三

(七七) **連帯責任**――国家および地主にたいするいっさいの納付金の支払いやあらゆる種類の義務(年貢、土地買取賦金、徴兵その他)の遂行を農民が期限内に完全に果たすことを各農村共同体が負った、強制的な集団的責任のこと。この形態の農民隷属化は、農奴制廃止ののちもなお残され、やっと一九〇六年に廃止された。一四三

(七八) **ストルィピンによる共同体の破壊(一九〇六年一一月)**――農村にクラークという強固な支柱をつくりだすことを目的として、首相ストルィピンのおこなった土地改革のこと。ツァーリ政府は一九〇六年一一月に、農民を共同体から脱退させ分与地(注八三を参照)を個人所有とする手続きについての指令を発した。それは、国会と国家評議会によって若干変更のうえ承認されたのち、「一九一〇年六月一四日付法律」とよばれるようになった。この法律によって、農民は共同体から脱退すること、自分の分与地を個人的所有とすること、それを売却することができるようになった。共同体から脱退する農民にたいして、農村自治体は一箇所にまとまった土地(フートル、オートルプ)を割譲しなければならない、とされた。このストルィピン改革によって、農業における資本主義の発展と農民の階層分化の過程は強まり、農村における階級闘争が激化した。この改革の特徴づけと評価は、レーニンの幾多の著作のなかで、とりわけ『一九〇五―一九〇七年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』(本選集、第四巻所収)のなかであたえられている。一四三

(七九) **黒百人組**――極反動的な暴力団体(ロシア国民同盟、ミハイル天使長同盟)がこうよばれていた。一九〇五年に生まれ、構成員にはルンペン、小商人、小手工業者が多かった。大地主、大商人に指導され、官憲の支持を得て、解放運動の弾圧やユダヤ人の虐殺、革命家の暗殺などの暴力行為をおこなった。そのことから、極右翼を総称して黒百人組といった。一四三

(八〇) **「四分の一の馬」、「統計上の生きている分数」**――作家グレブ・ウスペンスキー(一八四三―一九〇二年)が小品『生きている数字』のなかでもちいた表現。一四四

(八一) レーニンは、一九〇七年に書いた『農業問題とマルクス「批判者」』の第一一章「小経営と大経営とにおける畜産業」(全集第一三巻所収)で、この計画を実現した。一四五

(八二) **一八九一年の飢饉**――ロシアの東部および南東部の諸県をとくにはげしくおそい、その規模の点でそれ以前のどの同様な天災をもしのぐものであった。それは多数の農民の零落をもたらしたが、それとともにロシアにおいて国内市場がつくりだされ、資本主義が発展する過程を促進した。そのことについてはエンゲルスが論文『ドイツにおける社会主義』のなかで書いている。エンゲルスはまた、一八九一年一〇月二九日付、一八九二年三月一五日付および同年六月一八日付のニコライ―オンあての手紙のなかでも、このことにふれている。一五一

(八三) ナロードニキの「人民的生産」の理論を、レーニンはすでにその著書『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか?』の「第三分冊」(全集第一巻所収)のなかで批判している。一五三

(八四) **『ノーヴォエ・スローヴォ』(『新しいことば』)**――一八九四年からペテルブルグで発行されていた、科学、文学および政治雑

誌。はじめは自由主義的ナロードニキが、一八九七年からは「合法マルクス主義者」が編集した。レーニンは、非合法文書とならんで合法出版物をも利用し、シベリア流刑中にこの雑誌に二つの論文――『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』と『ある新聞記事にかんして』――を書いた。この雑誌にはプレハーノフの論文やゴーリキーの小説ものせられた。一八九七年一二月、ツァーリ政府はこの雑誌の発行を禁止した。一三三

(八五) 第一三章一〇節、全集版、五二八ページ、旧ディーツ版、五三〇―五三一ページ。一五八

(八六) **ヴァルーエフ委員会**――ツァーリ政府の大臣ペ・ア・ヴァルーエフを長とする「ロシアにおける農業状態調査委員会」のこと。一八七二―一八七三年に委員会は、農民改革後のロシアにおける農業の状態についての膨大な資料をあつめた。それは県知事の報告や、地主、貴族団団長、ゼムストヴォ参事会、郷役場、穀物商、農村の僧侶、クラーク、統計団体、農業団体、その他農業に関係あるさまざまな機関の申告および供述からなっている。これらの資料は、『ロシアにおける農業および農業生産性の現状調査のための、勅令による委員会報告』(ペテルブルグ、一八七三年)という書物として発表された。一五八

(八七) 第四七章第二節、全集版、七九八ページ、旧ディーツ版、八四〇ページ。一五九

(八八) 同、第三節、全集版、八〇四ページ、旧ディーツ版、八四六ページ。一五九

(八九) 同、第四節、全集版、八〇五ページ、旧ディーツ版、八四八ページ。一五九

(九〇) 同、全集版、八〇七ページ、旧ディーツ版、八五〇ページ。一六〇

(九一) **小百姓、住込百姓、小屋住農夫**は、ドイツ語の Kätner, Häusler, Instleute の訳。この注のなかでは、農民の種類についてレーニンがあたえたロシア語訳をそのまま日本語にすることはできなかった。

なお、ロシアの贈与地農民というのは、一八六一年の農民改革のときに、地主との「合意」によってごくわずかな分与地をただで(買取りをせずに)もらった、一部の以前の地主領農民のこと。この分与地の大きさは、その地方のいわゆる「最高の」もしくは「法定の」、すなわち法律できめられた、農民分与地の大きさの、わずか四分の一にしかあたらなかった。残りの部分の農民分与地はすべて地主が強奪し、地主は、暴力的に土地をうばわれた自分の「贈与地農民」を、農奴制廃止後も債務奴隷の状態においた。この「贈与」分与地は、人民のあいだでは「四半分」分与地、「みなしご」分与地、「猫皮」分与地、「ガガーリン」分与地(法案提出者ペ・ペ・ガガーリン公爵の名をとって)などとよばれた。一六四

(九二) 「三日雇い」――農業賃金労働者のカテゴリーの一つで、分与地をもち、貧農経営をいとなんでもいた。これは日雇労働者であって、債務奴隷的条件のもとにおかれていて、穀物あるいは二〇―三〇ルーブリの貨幣を得るために夏のあいだ週に三日ずつ、富農または地主の経営ではたらかなければならなかった。分与地をもつこの種の農村労働者は、帝政ロシアの北西部諸県にとくに多かった。一六四

(九三) 第三節、全集版、一七八―一七九ページ、旧ディーツ版、一七一―一七二ページ。一六六

(九四) 第二〇章、全集版、三四〇―三四四ページ、旧ディーツ版、

二五九—三六四ページ。第三六章、全集版、六〇七—六一一、六二二—六二三ページ、旧ディーツ版、六四一—六四六、六五七—六五八ページ。一六七

(九五)　第三六章、全集版、六〇八ページ、旧ディーツ版、六四二ページ。一六七

(九六)　第二〇章、全集版、三四四ページ、旧ディーツ版、三六四ページ。一六七

(九七)　同、全集版、三四一ページ、旧ディーツ版、三六〇—三六一ページ。一六七

(九八)　本章の初めの六つのパラグラフは、はじめ雑誌『ナチャーロ』(『始源』)、第三号、一八九九年三月(九六—一一七ページ)に、「現代のロシア農業における資本主義経済による賦役経済の駆逐」という表題の論文として掲載された。この論文には編集者の次のような注がつけられていた。「この論文は、ロシアにおける資本主義の発展にかんする著者の膨大な研究の一部である。」一七〇

(九九)　第四七章二節、全集版、七九八—七九九ページ、旧ディーツ版、八四〇—八四一ページ。一七一

(一〇〇)　マルクス=エンゲルス全集、第二巻、六五九ページ。一七三

(一〇一)　「切取地」——一八六一年の農民改革にさいして、法定の分与地以上の土地は農民から取りあげられて、地主に割りあてられた。これらの土地の大部分はいままで農民が用益していたものなので、農民はそれらの土地のことを、「切り取られた土地」あるいは「切取地」とよんだ。一七三

(一〇二)　**一時義務負担農民**——一八六一年の農民改革後も、分与地を利用するのに地主のために一定の義務(年貢または賦役)を果たさなければならなかったかつての地主領農民。「一時義務負担身分は、農民が地主の同意を得て身分を「買いとり」、分与地を自分の所有物とするまでつづいた。一八八三年からは、地主は「買取り」に応じなければならなくなった。一七三

(一〇三)　論集『ロシア国民経済のいくつかの側面にたいする収穫および穀物価格の影響』(二巻)を、レーニンは一八九七年に流刑地のシュシェンスコエ村で手に入れ、その資料を本書の著述のために綿密に研究した。そのさいレーニンは、農民層の分解をあいまいにする統計的「平均」という方法がまったく根拠のないものであることを明らかにしながら、この統計集にある具体的資料を綿密に点検し利用した。一七四

(一〇四)　「輪耕地」耕作——農民改革後のロシアにおける雇役の形態の一つ、また地主所有地の農民への債務奴隷的な貸与形態の一つ。雇役のこの形態の場合には、農民は貨幣の代償として、また冬期貸付あるいは土地の賃貸の代償として、自分の農具と馬で「輪耕地」——すなわち、春播き一デシャチーナ、秋播き一デシャチーナ、またときには草刈場一デシャチーナも——を、地主のために耕す義務を負った。一七六

(一〇五)　コプナ——乾草や穀物の束の堆積のことで、穀物の収穫の度量単位としては、一コプナは六〇—一〇〇束である。一七七

(一〇六)　スコープシチナ——刈分小作の一種で、ロシアの南部地方でこの名称でよばれたのは、借地農が収穫一コプナについて一定割合(半分か、ときにはそれ以上)を地主に支払い、普通はそのうえになお、さまざまな「雇役」の形で自分の労働の一部を地主に引きわたすものであった。一七九

(一〇七)　**truck-system**(トラック・システム)——工場主の所有する工場内売店の商品や製品で、労働者に賃金を支払う制度。経

50 県 の 収 穫 量

じゃがいも (1000チェトヴェルチ)								人口1人あたり純収量 (チェトヴェルチ)		
作付量				純収量				穀粒	じゃがいも	合計
(チェトヴェルチ)	対前期比 (%)			(チェトヴェルチ)	対前期比 (%)					
6,918	100			16,996	100			2.21	0.27	2.48
8,757	126	100		30,379	178	100		2.59	0.43	3.02
10,847	156	123	100	36,164	212	119	100	2.68	0.44	3.12
16,552	239	187	152	44,348	260	146	123	2.57	0.50	3.07

営主は、貨幣賃金のかわりにこれらの消費資料を高い価格で受けとるように、労働者に強制するのである。この制度は労働者搾取の補足的手段であって、ロシアではクスターリ営業の地方にとくに普及していた。一〇〇

(一〇八) ルーシー——ロシアの古名。一〇三

(一〇九) 『ルースカヤ・プラウダ』——一一—一二世紀の古代ルーシの法律や諸侯の法令をはじめて文書にまとめたもの。『ルースカヤ・プラウダ』の条文のねらいは領主の封建的所有と生活とを守ることにあった。一〇三

スメルド——古代ルーシ（九—一三世紀）の封建的隷属農民。諸侯あるいはその他の封建領主の農場や寺領の農場で賦役をつとめ、年貢を納めていた。一〇三

(一一〇) 一八九七年三月一日および二日の討論会の速記録は、『自由経済学会報告集』、一八九七年、第四号に掲載された。

自由経済学会——ロシア最初の科学的な経済学会で一七六五年にペテルブルグに創立された。規約によると、その目的は「農業および工業にとって有用な知識を国内に普及すること」であった。学会には、㈠農業、㈡工業原料の農業生産と農業工学、㈢農業統計と経済学理論、の三つの部会があった。学会には自由主義的な貴族やブルジョアジー出身の学者があつまった。学会は国民経済の諸部門や国の諸地方を研究するためのアンケート調査、学術探険をおこなった。『自由経済学会報告集』が定期的に刊行され、それには学会の各部門の研究結果や報告・討論の速記録が発表された。一〇九

(一一一) オブローモフ——イ・ア・ゴンチャローフの同名の小説の主人公の名で、無為で優柔不断な夢想家の典型。一〇四

(一一二) ピンダロス——古代ギリシアの抒情詩人。運動競技の著名な勝利者たちをその詩で賛美した。ピンダロスの名はゆきすぎた「賛美者」の代名詞となった。マルクスは資本主義の弁護者のユア博士を資本主義的工場のピンダロスとよんでいる（『資本論』、第一巻、第一三章第四節、全集版、四四一ページ、旧ディーツ版、四四〇ページおよび第三巻、第二三章、全集版、四〇〇ページ、旧ディーツ版、四二二ページ、注七五、注七六）。二〇八

(一一三) ズヴェギンツェフ委員会——一八九四年に内務省ゼムストヴォ部に所属して、「出稼ぎの整理と農業労働者の移動の規制」にかんする方策をつくるために設置された。二二五

(一一四) マルクス＝エンゲルス全集、第一八巻、六六〇—六六九ペ

ヨーロッパ・ロシアの

期間	人口				全穀類すなわち粒穀プラスじゃがいも（1000チェトヴェルチ）							
					作付量				純収量			
	人数（1000人）	対前期比（%）			（チェトヴェルチ）	対前期比（%）			（チェトヴェルチ）	対前期比（%）		
1864—66年	61,400	100			72,225	100			152,851	100		
1870—79年	69,853	114	100		75,620	104	100		211,325	138	100	
1883—87年	81,725	132	117	100	80,293	111	106	100	255,178	166	120	100
1885—94年	86,282	140	123	105	92,616	128	122	115	265,254	173	126	104

ージ。二二八

（二五）本書の初版（一八九九年）では、この表は上掲のようになっていた。二三四

（二六）第四五章、全集版、七六四ページ、旧ディーツ版、八〇五ページ。二三九

（二七）第三九章、全集版、六八三ページ、旧ディーツ版、七二一ページ。二三九

（二八）「代替可能物」〈res fungibilis〉──すでにローマ法にある古い法律用語。「代替可能な物」といわれるのは、契約において、たんなる数とか尺度によってとりきめられる物（「何プードのライ麦」、「何個の煉瓦」）のことである。二三六

（二九）分与地買取金（分与地買取賦金）──一八六一年にツァーリ政府は農民の要求に押されて農奴制度の廃止をよぎなくされたが、そのさい、「農奴制的従属から離脱した農民による買取りにかんする条令」を発布した。この規程により、農民は彼に分与される土地を買いとるさいに、現実価格より二─三倍も高い代金を地主に支払うことをしいられた。土地代金は政府が地主に立替払いし、農民はその代金を年利六％、四九年年賦で支払うこととされた。しかし一九〇五年の第一次ロシア革命における農民のたたかいの結果、ツァーリ政府は一九〇七年一月から買取賦金の残額を帳消しにすることをよぎなくされた。なお、注三を参照。二三四

（三〇）チェトヴェルチ──ロシアの古い容積単位。もともとは四分の一を意味するが、メートル法に換算すると、一チェトヴェルチは、粒状物の場合は二〇九・二一リットル、液体の場合は三・〇七四八リットルに相当する。二五七

（三一）ベルコヴェツ──ロシアの古い重量単位。一〇プードにあたる。二五八

（三二）『ペルミ県における一八九四─一八九五年のクスターリ調査と「クスターリ」工業の一般的諸問題』──全集第二巻、三八一ページ。二六五

（三三）首都のある両県──帝政ロシア時代にはペテルブルグとモスクワの両都市が首府あるいは首都とされていた。二七三

（三四）アダム・スミス『諸国民の富』、第一篇第一一章第一節、前掲邦訳書、二八四ページ。二七五

（三五）第二章第四節、マルクス＝エンゲルス全集、第四巻、一七八ページ。二七八

（三六）第七節、マルクス＝エンゲルス全集、第八巻、一九四ページ。二八〇

（一二七）　レーニン『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』——全集第二巻、二三六ページ注。二八〇

（一二八）　全集版、二四四ページ、ディーツ版、二三八ページ。二八四

（一二九）　第二三章第五節c、全集版、六九三ページ、旧ディーツ版、七〇〇ページ。レーニンが利用している第二版では、前段の文章が現行版とすこしちがっている。ここでは第二版にしたがって訳出した。二八五

（一三〇）　第一六章第三節、全集版、三一七—三一八ページ、旧ディーツ版、三一五ページ。二八五

（一三一）　第二三章第五節、全集版、七二一ページ、旧ディーツ版、七三一ページ。二八五

（一三二）　第二三章第四節、全集版、六七一ページ、旧ディーツ版、六七七ページ。ここでも、レーニンの利用している第二版と現行版とのあいだには若干の相違がある。なお、マルクスはこの文章のあとに、パーレンでかこって、「マニュファクチュアとは、ここではすべての非農業的産業のことである」と説明している。二八五

（一三三）　第二巻、第一三章、全集版、二四五ページ、旧ディーツ版、二四〇ページ。二八六

（一三四）　第三七章、全集版、六三〇ページ、旧ディーツ版、六六五ページ。二八七

（一三五）　第四七章第五節、全集版、八一五ページ、旧ディーツ版、八五九ページ。二八七

（一三六）　第六章第二節、全集版、一三一ページ、旧ディーツ版、一四三ページ。二八八

（一三七）　第一章第二節、マルクス＝エンゲルス全集、第四巻、九六ページ。二八九

（一三八）　ここでレーニンが念頭においているのは、一八九四／九五年度の『ノイエ・ツァイト』第一〇号に掲載されたエンゲルスの論文、『フランスとドイツにおける農民問題』（マルクス＝エンゲルス全集、第二二巻所収）である。フランスの「弟子たち」とは、マルクス主義者（あるいは、右の論文でエンゲルスがよんでいるように「フランスのマルクス主義的傾向の社会主義者」）の検閲むけの呼び名である。二八九

（一三九）　第四七章第五節、全集版、八一五—八一六ページ、旧ディーツ版、八五九ページ。二八九

（一四〇）　同、全集版、八二二ページ、旧ディーツ版、八六五ページ。二八九

（一四一）　第三七章、全集版、六三一ページ、旧ディーツ版、六六五—六六六ページ。二九〇

（一四二）　第四章、全集版、七三四ページ。旧ディーツ版、七七三—七七四ページ。なお、この章の冒頭の十数ページはエンゲルスが編集にさいして書いたものである。二九一

（一四三）　第四三章、全集版、七三五—七三六ページ、旧ディーツ版、七七四—七七五ページ。二九一

（一四四）　**Antrag Kanitz**〔カニッツ提案〕（ドイツにおける）——地主党の代表者カニッツが、一八九四—九五年にドイツ国会に提案したもの。それによると、外国からの輸入穀物はすべて政府が買いあげ、そのうえで、それを平均価格で販売するようにせよというのであった。この提案はドイツ国会で否決された。二九二

（一四五）　レーニン『わが国の工場統計の問題によせて』、全集第四巻、一二一—一三ページ。二九五

（一四六）　レーニン『ペルミ県における一八九四—九五年のクスタ

ーリ調査と「クスターリ」工業の一般的諸問題』、全集第二巻、三四七—四五四ページ。二九五

(二四七)　前掲書、三六四—三六六ページ。三一〇

(二四八)　前掲書、三九九ページ以下。三一三

(二四九)　全集第四巻、七—八および一二ページ。三一三

(二五〇)　マニーロフ——エヌ・ヴェ・ゴーゴリの小説『死せる魂』に登場する人物で、優柔不断の夢想家、空虚な空想家、活動しない饒舌家。三二三

(二五一)　第一一章、全集版、三四一ページ、旧ディーツ版、三三七ページ。三二四

(二五二)　同、全集版、三四二ページ、旧ディーツ版、三三八ページ。ただし、レーニンがもちいた『資本論』第二版では、この部分は現行版とすこしちがっている。本訳書では第二版どおりに訳してある。三二五

(二五三)　同、全集版、三五四—三五五ページ、旧ディーツ版、三五〇—三五一ページ。三二六

(二五四)　アルテリ——協同組合のことであるが、とくにロシアで、種々の経済活動を各人の平等の原則にもとづいておこなうことを目的とする、主として勤労者から成る共同団体の協同組合をさす。三二七

(二五五)　全集第二巻、四〇六—四一二ページ。三二七

(二五六)　第一六章、全集版、二八〇—二八一ページ、旧ディーツ版、三〇〇—三〇一ページ。——同、全集版、二八六—二八七ページ、旧ディーツ版、三〇六—三〇七ページ。——第一七章、全集版、三〇四—三〇六ページ、旧ディーツ版、三二五—三二六ページ。——第二〇章、全集版、三三七および三三八—三三九ページ、旧ディーツ版、三五六および三五七—三五九ページ。三二九

(二五七)　全集第二巻、四一六ページ。三二九

(二五八)　経営主＝営業者と労働者＝営業者——第二章第三節で明らかにされたように、ゼムストヴォ統計は「営業」という項目のもとに、分与地外での農民のありとあらゆる職業をふくめている。したがって、分与地外で自立した経営をいとなむものも、他人にやとわれてはたらくものも、「営業者」としてとらえられている。レーニンはここで、「営業者」(「工業者」とも訳せる)ということばをつかいながらも、それがどういう性格のものであるかを明らかにするために、表記のような表現をもちいたのである。三三六

(二五九)　賦払金滞納額——農民が分与地買取賦金(注二一九を参照)を納付できないで滞納した額。三三七

(二六〇)　全集第二巻、三七九ページ。三三三

(二六一)　自由耕作農民——一八〇三年二月二〇日付の法律によって、農奴制的従属から自由になった農民。この法律は、地主がもうける条件で農民を土地から解放することを、地主にゆるした。三三七

(二六二)　第二〇章、全集版、三四七—三四九ページ、旧ディーツ版、三六六—三六九ページ。三三九

(二六三)　第二章第二節、マルクス＝エンゲルス全集第四巻、一五七ページ。三四〇

(二六四)　全集第二巻、四二八ページ。三四〇

(二六五)　第一二章第五節、全集版、三九〇ページ、旧ディーツ版、三八七ページ。三四〇

(二六六)　下請人——建物をもっていて、手織りの機台を据えるためにそれを工場主に賃貸し、自分もその機小屋ではたらいている機小屋持ちが、こうよばれることがあった。下請人あるいは機小屋持ちは、工場主との契約にもとづいて、機小屋を暖め、それを修繕し、

紡糸をつくるための原料を織工にとどけ、製品を経営主へ送り、ときには管理人として労働者の監督をすることもあった。三四一

（一六七）『資本論』、第一巻、第一二章第三節を参照。三四〇

（一六八）全集第二巻、三七八―三七九ページ。三四〇

（一六九）第一巻、第一二章第二節を参照。三五一

（一七〇）同、第三節を参照。三五一

（一七一）全集第二巻、四二四―四二五ページ。三五一

（一七二）前掲書、四二六―四二七ページ。三五三

（一七三）全集第二巻、四一九ページ以下。三五九

（一七四）土地台帳――都市、村、農村の住民にたいする課税のための基本書類で、土地の質や住民の収入が記入され、また道路、自由村、修道院、要塞、等々がしるされていた。記帳は、中央から送られた特別の委員会の「記帳人」によって、現地でおこなわれた。最も古い土地台帳は一五世紀末のものであるが、最も多く残っていたのは一七世紀のものであった。三六七

（一七五）一八九七年六月二日の法律によって、工業企業と鉄道作業場にたいして、一一時間半（夜間作業には一〇時間）という労働日が制定された。この法律以前には、ロシアにおける労働日は無制限で、一四―一五時間またはそれ以上におよんでいた。ツァーリ政府は、「労働者階級解放闘争同盟」によって指導される労働運動の圧力により、この法律を発布することをよぎなくされた。レーニンは、小冊子『新工場法』（全集第二巻所収）のなかで、この法律の詳細な検討と批判をおこなっている。三六九

（一七六）全集第二巻、三五九―三六一ページ。三六二

（一七七）第二四章第五節、全集版、七七五―七七七ページ、旧ディーツ版、七八七―七八九ページ。三六四

（一七八）第三巻、第二〇章、全集版、三四一ページ、旧ディーツ版、三六〇ページ。三六九

（一七九）第一二章第三節、全集版、三六三ページ、旧ディーツ版、三五九ページ。三九一

（一八〇）Sweating system（スウェティング・システム）――sweat（汗）からきたことばで、ふつう「苦汗制度」と訳されている。これは一般的な用語であって、とくに厳密な科学的規定はないが、大体において、下請制度と関連して、（一）極度の低賃金、（二）過度な労働時間、（三）異常な労働強度、（四）不衛生な仕事場、等々の劣悪な条件のもとでの、苛酷な資本主義的搾取の方法と形態をさす。なお、マルクス『資本論』、第一巻、第一九章、全集版、五七七ページ、旧ディーツ版、五七九―五八〇ページを参照。三九二

（一八一）第一三章第八節（e）、全集版、五〇二ページ以下、旧ディーツ版、五〇三ページ以下。第二三章第四節、六七二ページ以下、旧ディーツ版、六七七ページ以下。三九六

（一八二）全集第二巻、四三一―四三二および三五九ページ。三九九

（一八三）第二版で新しくつけくわえられたのは、「一八九七年の人口調査によると……」以下の最後の一句だけで、そのまえの文章はすでに第一版にあった。三九九

（一八四）全集第二巻、四二九ページ以下。四〇〇

（一八五）第一三章第八節e、全集版、四九八ページ、旧ディーツ版、四九九ページ。四〇二

（一八六）レーニンはポストロンニーの見解を、「『人民の友』とはなにか？」のなかで、くわしく批判している。本選集、第一巻、九〇―九二ページを参照。四〇三

（一八七）全集第四巻、一一三―一一四、一一九ページ。四〇七

年度	銑鉄精錬高（1000プード）						帝国の全石炭採掘高（100万プード）
	帝国総計	%	ウラル	%	南部	%	
1890年	56,560	100	28,174	49.7	13,418	23.7	367.2
1896〃	98,414	100	35,457	36.6	39,169	39.7	547.2
1897〃	113,982	100	40,850	35.8	46,350	40.6	—

（一八八）　前掲書、一八―一九ページ。四一〇

（一八九）　前掲書、一六ページ。四一四

（一九〇）　全集第二巻、四〇〇ページ。四二〇

（一九一）　全集第二巻、四〇一ページ、および第四巻、一三ページ。四二〇

（一九二）　全集第二巻、四〇二―四〇三ページ。四二三

（一九三）　同、第四巻、九―一一および三二ページ。四二四

（一九四）　同、第二巻、四四六―四四八ページ。四二三

（一九五）　レーニンが念頭においているのは、『ペルミ県クラスノウフィムスク郡統計の材料』、第五冊、第一部（工場地区）、カザン、一八九四年、である。この書物の六五ページに、『一八九二年にアルチンスク工場の職場の仕事で借金を負った労働者班にかんする情報』という表題の表がのっていた。四二三

（一九六）　本書の第一版では、第二版で省略された一八九〇年と一八九六年の資料が表にはいっていた。そのほか、第一版の一八九七年についての情報は、第二版で引用された同じ年の資料と若干異なっている。表のこれらの部分は第一版では上掲のようになっている。

第一版の一八九七年の情報には、これも第二版では省略された次のような脚注がついていた。『一八九八年には、帝国の銑鉄精錬高は一億三三〇〇万プードで、そのうち六〇〇〇万プードは南部、四三〇〇万プードはウラルのものである（『ルースキエ・ヴェードモスチ』、一八九九年、第一号）』。四二三

（一九七）「近年……」ということばではじまる最後の二つの段落は、本書の第二版（一九〇八年）でつけくわえられたものである。その後、この版の自蔵本の欄外に、レーニンは次のような内容の書込みをした。〔 〕でかこったのは、本文中の表の表側の部分。レーニンの書込みはその左になされたのである。

1908年（ロシアの66県）

事業所数	労働者数	〔工場経営グループ〕
5,403	63,954	〔労働者数20人以下〕
4,569	152,408	〔〃 21—50人〕
2,112	150,888	〔〃 51—100人〕
2,169	496,329	〔〃 101—500人〕
433	280,639	〔〃 501—1000人〕
299	663,891	〔〃 1001人以上〕
14,985	1,808,109	〔総数〕

100人以上の労働者をもつ工場

	経営数	労働者数
1908年	2,901	1,440,859
1903年	2,737	1,261,363

レーニンの書きこんだ数字は、一九一〇年に刊行された『一九〇

八年工場監督官報告集成』(五〇—五一ページ)からとったものである。したがって、レーニンの補足は一九一〇年か一九一一年のものである。このことは、レーニンが当時もなお本書の改善のための仕事をつづけていたことをものがたっている。四三五

(一九八) 全集第四巻、二〇—二一ページ。四三五

(一九九) 第二三章第四節、全集版、六七二ページ、旧ディーツ版、六七七ページ。四六八

(二〇〇) シュシェンスコエ村での流刑中に、レーニンはクループスカヤとともに、S・ウェッブとB・ウェッブの著書『イギリス労働組合主義の理論と実践』第一巻を英語から翻訳し、第二巻の翻訳を校訂した。ウェッブ夫妻の著書の第一巻のレーニンによる翻訳は、一九〇〇年にペテルブルグのオ・エヌ・ポポワ出版社から発行された。第二巻は一九〇一年に出た。四六九

(二〇一) 第二四章第五節、全集版、七七六ページ、旧ディーツ版、七八八ページ。四七四

(二〇二) ラスト——ロシアの商船について二〇世紀初めまでもちいられていた排水量の単位。一ラストは、排水容積としては五・六六三立方メートル、排水重量としては約二トンに相当する。四八六

(二〇三) マルクス『資本論』、第三巻、第三七章、全集版、六五〇ページ、旧ディーツ版、六八七ページ。四九四

(二〇四) この著作の第一版には、このあとに次のような脚注があった。「第二〇表、この『集成』(ヴォロネジ、一八九七年)を、私は本書の大半がすでに印刷にまわされたあとで手に入れた」。四九九

(二〇五) 全集第二巻、一六二—一六九ページ。五一四

(二〇六) レーニンはドイツ語訳を利用しているが、本訳書では、レーニン全集の英語版を利用して、〔 〕内にウェッブ夫妻の英語版の原書から翻訳しておいた。五二七

(二〇七) ソバケーヴィチ——エヌ・ヴェ・ゴーゴリの小説『死せる魂』に出てくる、粗野で貪欲な地主。五三〇

(二〇八) 第五節の表題、全集版、七七三ページ、旧ディーツ版、七八四ページ。五三〇

(二〇九) クーポン氏——グレブ・ウスペンスキーがルポルタージュ『重い罪業』(一八八八年に雑誌『ルースカヤ・ムィスリ』に発表)のなかではじめてつかったことばであるが、その後、一九世紀の八〇—九〇年代の文献で、資本および資本家を表示するための表現としてひろくもちいられた。五三三

(二一〇) 「ポクルート」——ロシアの北部で、海獣の狩猟あるいは漁業に従事していたアルテリ内での人々の経済関係の一形態。このことばそのものは、これらの営業に人々がやとわれること、あるいは各アルテリ成員の獲物の分け前を意味する。このアルテリでは、必要な生産用具は経営主のものであって、労働者は経営主に債務によって従属させられていた。獲物の配分率はふつう経営主が2/3、労働者が1/8であって、そのうえ労働者はその分け前を安い値段で経営主に引きわたし、その代金を商品で受けとることをしいられていた。五三八

(二一一) 全集第二巻、二一九ページ、四五二—四五三ページ。五三八

(二一二) レーニンはここで、マルクス『資本論』第一巻、第一版「序文」のなかの次のことばを念頭においていたと考えられる。——イギリスとくらべると、「……われわれは、のこりの大陸西ヨーロッパ全体と同様に、資本主義的生産の発展によってだけでなく、その発展の欠如によっても苦しめられている」(全集版、一二ページ、旧ディーツ版、六ページ)。五三九

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名をしめす）

アヴィロフ、ベ・ヴェ（一八七四―一九三八）――ロシアの社会民主主義者。雑誌『オブラゾヴァーニエ』（『教育』）、一八九九年一〇月号に、レーニンの著書『ロシアにおける資本主義の発展』の書評を書いた。

アヴダコフ、エヌ・エス（一八四七―一九一五）――工業家、鉱山技師。一九〇六年以後は産業界から出た参議院議員。

アスモロフ、ヴェ・イ（一八二八―一八八一）――タバコ工場主。彼が一八五七年に工場を設立したときには、たった七人の労働者しかいなかったが、彼の死後まもない九〇年代には、すでに二、〇〇〇人以上がはたらいていた。

アントゥフィエフ、エヌ・デ（一六五六―一七二五）――ピョートル時代の有名な兵器製造工業家。トゥーラ県パヴシナ村の一農民の息子として生まれ、トゥーラの兵器工場で鍛冶職人となり、のちにはトゥリツァ河口に自分自身の大鉄工場を建てるまでになった。さらにウラルに進出して、ヴェルホトゥルスク官有工場などを手に入れてデミドフ家の富をつくりあげた。

アンドレーエフ、イエ・エヌ（一八二九―一八八九）――工学教授。「ロシア・クスターリ工業調査委員会」の議長。

アンネンスキー、エヌ・エフ（一八四三―一九一二）――一八九〇年代および一九〇〇年代の最も著名なナロードニキのひとり。政論家で統計学者。カザンおよびニジェゴロドのゼムストヴォの統計活動を指導した。

イサーエフ、ア・ア（一八五一―一九二四）――ナロードニキ派の統計学者、経済学者。ペテルブルグ大学教授。モスクワ県のクスターリ経営の研究に従事（著書『モスクワ県の営業』）。経済学にかんする多くの著作がある。古典派経済学の支持者。

イリイン、ウラヂーミル――レーニンの筆名。

イロドフ家――一八八〇年代におけるヤロスラヴリ郡ヴェリーコエ村近辺の工場主。ナプキンの製造で有名。

ヴァグナー、アドルフ（一八三五―一九一七）――ドイツの経済学者。講壇社会主義の代表者のひとり。「国家社会主義」の追随者、（反ユダヤ主義的な）キリスト教社会党の創立者（一八七八年）。八〇年代にはビスマルクの政策の支持者であった。

ヴァシーリチコフ、ア・イ（一八一八―一八八一）――政論家で社会活動家。地方自治、小額の土地信用、農業および土地所有の問題について著述し、共同体的土地所有の維持を主張した。「ヴァルーエフ委員会」に参加。

ヴァルィパーエフ、エフ・エム（一八一八―一九〇〇）――ニジェゴロド県パヴロヴォ村の工場主。農民出身で、彼の工場は一八九〇年には、工場内ではたらくものと工場外ではたらくものをあわせて、約二〇〇人の労働者をつかっていた。

ヴァルーエフ、ペ・ア（一八一四―一八九〇）――アレクサンドル二世治下（一八五五―一八八一）の主要な政治家のひとり。内務大臣、国有財産大臣、内閣委員会議長を歴任。理論的には自由主義者であったが、実践のうえでは伝統的な弾圧方法をとりつづけた。彼の提唱によって、ロシア農業状態研究のための委員会（「ヴァルーエフ委員会」）がつくられ、その議長をつとめた。

ヴァルゼル、ヴェ・イェ（ヴァルザル）（一八五一―一九四〇）――統計家で経済学者。一八七五年チェルニーゴフ県ゼムストヴォ参事会の統計部を組織した。のちには治安裁判所判事、チェルニーゴフ郡ゼムストヴォ参事会議長を歴任し、ソ連邦になってから最高国民経済会議および中央統計局ではたらいた。

ヴィーザー、フリードリヒ（一八五一―一九二六）――ウィーンの経済学教授、「オーストリア学派」の代表者のひとり。

ヴィニウス、ア・デ（一六五二没）――オランダの商人、工場主。一六二七年にロシアに移り、はじめ穀物取引に従事、一六三七年にトゥーラ付近に精錬・鋳鉄工場を設立。一六四六年にロシアに帰化した。

ヴィフリャーエフ、ペ・ア（一八六九―一九二八）――統計家、農学者、モスクワ県ゼムストヴォ統計局を指導。一九一七年には臨時政府の農務次官、二〇年代には第一モスクワ国立大学の教授であった。

ヴェ・ヴェ（ヴェ・ペ・ヴォロンツォフ）（一八四七―一九一八）――一八八〇―一八九〇年代のナロードニキの主要な理論家のひとり。九〇年代初めからは自由主義的な『ヴェーストニク・エヴロープィ』に執筆した。マルクス主義の徹底的な敵で、ロシアにおける初期のほとんどすべてのマルクス主義者の批判の対象とされた。主著は『ロシアにおける資本主義の運命』（一八八二年）。

ヴェシニャコフ、ヴェ・イ（一八三〇―一九〇六）――経済学者で行政官、一八八三年以来国有財産省次官、その後参議院議員。ロシアの各地における農業の状態にかんする資料を収集した。国有財産省の代表者として「ロシア・クスターリ工業調査委員会」に参加。

ウェッブ、シドニー（一八五九―一九四七）およびビアトリス（一八五八―一九四三）――夫妻、著述家、イギリスの「フェビアン協会」の活動家。主著『イギリス労働組合史』（一八九四年）はイギリスの労働組合史の最もよくまとめられた体系的な概観である（レーニンのロシア語訳は一九〇〇―一九〇一年に発行）。ウェッブ夫妻のすべての著作には資本主義の枠内で労働問題を解決しようとする傾向が一貫している。夫妻の共著による著書が多数ある。

ヴェルネル、カ・ア（一八五〇―一九〇二）――ナロードニキ派の統計家、農学者。一八八四年からタヴリーダ県ゼムストヴォの統計部の主任、一八九五年以後はモスクワ農業研究所の農業経済学の教授。

ヴェレサーエフ、ヴェ（ヴェ・ヴェ・スミドヴィチ）（一八六七―一九四五）――著述家、最初は医師であったが、九〇年代から文筆活動に従事。その著作は、社会問題を内容として注目をひいた。十月革命後は全ロシア作家同盟の議長。

ヴォイノフ、エリ・イ（一八五三―一九〇五）――一八八〇年代におけるペテルブルグ郡のゼムストヴォ医師。多くの著述をのこしている。

ヴォルギン、ア――ゲ・ヴェ・プレハーノフの筆名。

ウスペンスキー、ゲ・イ（一八四〇―一九〇二）――ナロードニキの作家。農民改革後の時代の風俗の描写に専念した。彼の芸術作品の中心は、崩壊しつつある旧制度と台頭しつつある貪欲な資本主義との対照である。

エグーノフ、ア・エヌ（一八二四―一八九七）――法律学を学んだが、経済学者、統計学者として活動。

エルマコフ、ヴェ・イ――農民出身で、カニノ村に農業機械組立工場を設立。九〇年代には鋳鉄工場をつくった。

エローヒン、ア・ヴェ——亜麻織工場主。カルーガ県メドィニ郡ポロトニャーヌィ・ザヴォード村にある工場は一八五一年に設立された。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇—一八九五）。

エンゲリガルト、ア・エヌ（一八三二—一八九三）——ナロードニキ派の政論家。その社会的、農学者的活動とスモレンスク県バシチェヴォ農場に合理的経営を組織しようとした実験とで有名になった。

オフシャンニコフ、エヌ・エヌ（一八三四—一九一二）——著述家、教育家。ニジェゴロド地方の活動家。ヴォルガ沿岸地方史にかんする著書が多い。

オサドチー、テ・イ——九〇年代の農民的土地所有問題の著述家。

オストリャコフ、ペ——民族誌学者、「ロシア・クスターリ工業調査委員会」の委嘱によって活動したクスターリ営業の調査者。

オルロフ、ヴェ・イ（一八四八—一八八五）——ロシアにおけるゼムストヴォ統計の創始者。一八七五年以来モスクワ県のゼムストヴォ統計局を指導。広範な調査要綱にもとづき、現地にいって全面的な戸別調査をする方法をとりいれた。『モスクワ県統計報告集』第一—九巻は、大部分オルロフの仕事である。彼はまたタンボフ、クルスク、ヴォロネジおよびサマラの諸県における統計活動をも指導した。マルクスとレーニンは彼の資料を高く評価して利用した。

オルロフ、ペ・ア（一八三四—一九一二）——『ヨーロッパ・ロシアの工場案内』（一八八一年、一八八七年、一八九四年）の編者。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八）——ドイツの社会民主主義者。第二インタナショナルの著名な理論家。八〇年代の初めからマルクス主義に接近しはじめ、九〇年代にはベルンシュタインの修正主義と闘争したが、その後動揺をはじめ、第一次大戦中は、国際主義者と祖国防衛論者とのあいだに動揺的立場をとった。十月革命後は「純粋」民主主義の旗にかくれて、マルクス＝レーニン主義にたいする闘争の旗頭のひとりとなった。

カスペロフ、ヴェ・イ（一八六二生）——経済学者、統計家。一八九〇年代におけるハリコフ県統計委員会の書記。主として国際市場における穀物貿易と穀物価格との問題を研究した。

ガツィスキー、ア・エス（一八三八—一八九三）——ニジェゴロドのすぐれた活動家。統計家、歴史家、民族誌学者。

カニッツ、ハンス・ヴィルヘルム伯爵（一八四一—一九一三）——一九世紀末のドイツの政治家。大地主。プロイセン保守党の代表的人物のひとり。

カブルーコフ、エヌ・ア（一八四九—一九一九）——ナロードニキ派の経済学者で統計家。モスクワ大学教授。モスクワ・ゼムストヴォの統計部主任。モスクワ県の経済生活を研究調査し、農業における小経営の優越性を証明しようと試みた。『モスクワ県の統計報告集、経済統計篇』（一八七七—一八七九年）第二巻、第三巻および第五巻第一部、『農業経済学講義』（一八九七年）、等多くの著書がある。一九一七年に臨時政府の中央統計委員会の活動に参加、十月革命後はソヴェト政府の中央統計局ではたらいた。

ガリャージン、ア・エリ（一八六九生）——九〇年代におけるオロネッツ県知事の特別嘱託官史、『オロネッツ県におけるクスターリ工業』の執筆者のひとり。

カルィシェフ、エヌ・ア（一八五五—一九〇五）——モスクワ農業専門学校の経済学および統計学教授。モスクワ・ゼムストヴォの経済部主任。借地問題について一連の労作がある。ナロードニキ主

義的見解を展開した。
カルポフ、ア・ヴェ――クスターリ営業の研究家。『ロシアにおけるクスターリ工業調査委員会報告書』に掲載された論文のいくつかは、彼の筆による。
カーレフ、ペ・ペ（一九〇九没）――リャザン県サポジョーク郡カニノ村の農民、はじめこの村の工場に大工としてやとわれていたが、その後エルマコフと共同して企業をおこし、一八九四年には自分の鋳造工場と機械製作工場を設立した。
ガレーリン、イ・エヌ（一八八四没）――イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクの工場主。彼の織物工場はすでに一八世紀のなかごろ設立されていたが、一八三二年に手労働から蒸気機械へ移行した。
カント、イマヌエル（一七二四－一八〇四）――ドイツの哲学者、ケーニヒスベルヒ大学教授。主著『純粋理性批判』（一七八一年）。
キッタルイ、エム・ヤ（一八二五－一八八〇）――工学教授。ロシアにおける工場工業の合理化にかんする実際的活動家。著書もいくつかある。
キルヒマン、ユリウス・ゲルマン（一八〇二－一八八四）――ドイツの哲学者で政論家。基本的にはロードベルトゥスと同一意見をもち、「国家社会主義」の理論家のひとりであった。
クヴァエフ家――イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク地区の工場主。ヤ・イ・クヴァエフはこの地区の最大商会のひとつ「クヴァエフ・サラサ製造会社」の創立者であった。この会社は一八一七年に小さな捺染工場として発生し、最初はもっぱら家族労働によって経営されていた。やがて仕事場は拡張されたが、一八四五年には馬力利用の捺染機械が、また一八五四年には最初の蒸気機械が設備された。
クーテ――「クーテ式柔麻機」の製作者。この機械は一八八〇年代にロシアでかなり普及した。
クドリャフツェフ、ペ・エフ（一八六三－一九三五）――保健医師、労働問題にかんする著述家。革命的地下活動家のひとり。カザン、モスクワ、その他の県の保健医師として活動。多くの会議（医師、統計家、自然科学者の）に参加し、社会医学にかんする多くの著作を出した。一九二一年には「労働英雄」の称号をあたえられ、保健局リャザン県支部衛生予防部を指導した。
グラトコフ、エヌ・ペ――サラトフ県ヴォルスク郡ノヴォ－ジュコフキ村の所有者（六〇年代）。彼の領地にあった工場では農奴的農民がはたらいていた。
グリゴリエフ、ヴェ・エヌ（一八五二－一九二五）――ナロードニキ派の統計家、政論家、社会活動家。ヴェ・ゲ・コロレンコおよびカ・ア・ヴェルネルと親交をむすんだ。
グリーヴス、ジョン・エドワード――一八八〇年タヴリーダ県ベルヂャンスク市に農業機械工場を設立したイギリス人。一八九〇年には同工場に五五人の労働者が就業していたが、一八九七年には約三五〇人、一九〇九年には約八〇〇人がはたらいていた。
グールヴィチ、イ・ア（一八六〇－一九二四）――ロシアの初期のマルクス主義者のひとり。アメリカに移住、教授の職についたが、その見解のために職をうばわれた。主著『農民のシベリア移住』（一八八八年）、『ロシア農村経済』（一八九二年、ニューヨーク）。これらの著書は多くの賛否両様の反響を呼びおこした。レーニンはこの二労作を高く評価して、彼と文通をつづけた。
ケイスレル、イ・ア（一八四三－一八九六）――ロシアの経済学者。その著作の大部分をドイツ語で書いた。
ゲルツェンシュテイン、エム・ヤ（一八五九－一九〇六）――経

済学者、国会議員。理論上はロードベルトゥスに近く、金融、信用、農業の諸問題について書いた。カデット党の綱領作成に積極的に努力、第一国会の議員。

コヴァレフスキー、ヴェ・イ（一八四四生）――大蔵省次官で、農業にかんする専門的著書がある。しばらくのあいだナロードニキのグループに属していた。

コクシキン家――イヴァノヴォ-ヴォズネセンスクの工場主。一八九〇年代にはその工場では約一、五〇〇人の労働者がはたらき、一五〇万ルーブリの生産額をあげていた。

コスチンスカヤ、ヴェ・ヴェ――モスクワ県ポドリスク郡の女地主。彼女の農場の収益性は、一方では、合理的経営（六圃式農法、「プロプシュタイン」種のライ麦の播種、人造肥料、等々）によってもたらされたものであるが、他方では一八六一年の農民解放によって牧場や採草地を失った農民の隷属化によってもたらされたものであった。彼女は農民に「労働とひきかえに」麦粉、等々を前貸して、農民の隷属状態をいっそう強化した。

コペリャツキー、ア・イ（一八六二―一九〇七）――工場立法にかんする便覧の著者。

ゴリコフ、ア・イエ――一八九〇年代におけるリャザン県サポジヨーク郡カニノ村の鋳物工場の所有者（コチェトフと共有）。工場ではたらく労働者は一五人で、その他に家内労働者であった。農業機械および器具を製造していた。

コルサック、ア・カ（一八三二―一八七四）――『西ヨーロッパおよびロシアの工業形態について』（一八六一年）の著者。この書は、当時唯一の科学的なロシア工業史であり、レーニンはこの書の科学的意義を評価した。

ゴルツ、テオドル・アレクサンドル（一八三六―一九〇五）――ドイツの経済学者で農業経営家。一八六九年以来ケーニヒスベルヒ、イェナ、ボンで農政学の教授。農業にかんする多くの著書がある。

ゴルブーノヴァ、エム・カ（一八四〇―一九三一）――ナロードニキ的傾向の統計家で著述家。数年間外国で婦人の職業教育を研究。

コロレンコ、エス・ア――経済学者、統計学者。彼の著書『私有地経営における自由な賃労働と労働者の移動――農業と工業の面でのヨーロッパ・ロシアの統計的=経済的概観との関連で』（略称『自由な賃労働』）（一八九二年）を、レーニンは本書でひろく利用している。

コロレンコ、ヴェ・ゲ（一八五三―一九二一）――ロシアの進歩的な著述家。ことに晩年の著作で、強制的な労働をさせられている人々の苦しい生活をえがき、ロシアにおける封建的=農奴制的遺物を摘発することにつとめた。

コンドラトフ、デ・デ――ウラヂーミル県ムロム郡およびニジェゴロド県ゴルバートフ郡で活動した工業家。一八九〇年代にコンドラトフ工場には約五〇〇人の労働者がやとわれていた。

コンラッド、ヨハネス（一八三九―一九一五）――ドイツの経済学者。八巻よりなる『社会科学辞典』（教授レキシス、エルスターおよびレニングと共同出版）の編集出版者として著名。『辞典』のなかの彼の個々の論文（『土地所有と農業』、『工業』）はロシア語に翻訳された。

ザヴィヤーロフ家――ニジェゴロド県ゴルバートフ郡ヴォルスマ村の金属製品工場（一八二七年設立）の所有者。一八九七年には家内労働者をもふくめて約八〇〇人の労働者を雇用していた。

サーニン、ア・ア（一八六九生）――九〇年代におけるマルクス

主義的著述家。グールヴィチの著書『ロシア農村の経済状態』(一八九六年)を翻訳。

サルトィコフ、エム・イエ(筆名、エヌ・シチェードリン)(一八二六—一八八九)ロシアのすぐれた諷刺作家。独特の「イソップ的」用語で書いた作品で、反動および沈滞とたたかい、貴族的君主制の風俗習慣を攻撃した。

シェレメテフ家——伯爵家、ピョートル大帝につかえたべ・ペ・シェレメテフ元帥の子孫。農奴制時代にはロシアにおける最大級の農奴所有者。農民改革後も三〇万デシャチーナの土地をもっていた。一家は二〇〇年にわたり宮廷と政府の要職につらなっていた。

シェレメテフ家——貴族、伯爵家と一門。六〇年代にはニジェゴロド県ゴルバートフ郡ボゴローツコエ村、ヴァシーリエフスク郡ユリノ村、等々の工業村を所有した。

シスモンディ、シモン・ド(一七七三—一八四二)——スイスの歴史家、経済学者。経済学的ロマン主義の立場から古典派経済学を批判した。反動的な小ブルジョア社会主義の主要な代表者で資本主義体制の最も初期の批判者のひとり。

シチェルビーナ、エフ・ア(一八四九—一九三六)——ヴォロネジ・ゼムストヴォの統計家。ロシアの農民経営にかんする一連の労作のなかで、「人民的生産」と共同体を理想化した。第二国会における人民社会党員。ソヴェト政権成立後は亡命。

シーニア、ウィリアム・ナッソー(一七九〇—一八六四)——イギリスの経済学者。「現存するもののたんなる擁護者」(したがって俗流経済学者)、「教養あるブルジョアの代弁者」(マルクス)。マンチェスターの綿業資本家の要請にこたえて、一〇時間労働日制に反対するための「論拠」を提供した。

ジバンコフ、デ・エヌ(一八五三生)——医師、著述家、社会医学の著名な活動家。その文筆的活動はゼムストヴォ衛生事業、伝染病学の方面や、統計や、出稼ぎと人口にたいするその文化的および衛生的影響の問題にささげられている。

ジーベル、エヌ・イ(一八四七—一八八八)——ロシアにおけるマルクス経済学説の最初の解説者で宣伝者のひとり。実践にはたずさわらなかったが、経済学理論ではすぐれていた。その著『価値および資本にかんするD・リカードの理論』(一八七一年)を、マルクスは高く評価している。

シャホフスコイ、エヌ・ヴェ(一八五六—一九〇六)——モスクワの検閲官、公爵。主著『農業的出稼営業』(モスクワ、一八九六年)、「農民の農業出稼ぎ」(サンクト・ペテルブルグ、一九〇三年)。後者の資料目録にはレーニンの『発展』の名があげられている。

シュミット兄弟——コヴノ県コヴノ郡シャンツィ村の工場主。工場では、錠前や種々の金具を製造していた。九〇年代には約六〇〇人、一九〇〇年代には約一、二〇〇人の労働者を使用していた。

ジョージ、ヘンリー(一八三九—一八九七)——アメリカの経済学者で評論家。主著『進歩と貧困』(一八七九年)で、国民大衆の貧困の主要な原因は地代の独占にあるとしている。彼は労働と資本との利害の対立を認めない。彼の意見によれば、剰余価値は土地および自然一般の自然的生産力の結果である。すべての社会的害悪を除去する主要な手段として、土地国有を主張した。

ジンツハイマー、ルートヴィヒ——ドイツのミュンヘン大学の経済学および財政学教授。

スヴィルスキー、ヴェ・エフ——九〇年代におけるウラヂーミル県ゼムストヴォ参事会の技師。

ズヴェギンツェフ、イ・ア（一八四〇—一九一三）——一八九〇年代における内務省評議会の一員。一八九四年五月に設立されたこの省のゼムストヴォ部特別委員会の議長。

スカリコフスキー、カ・ア（一八四三生）——鉱山技師で著述家。

スクヴォルツォフ、ア・イ（一八四八—一九一四）——経済学者。ノヴォアレクサンドル農業専門学校の教授。まったくブルジョア経済学者であったにもかかわらず、多くの人によってマルクス主義者とみなされ、とりわけストルーヴェは、マルクスの経済学理論の若干の基本的命題を厳密に科学的に発展させた経済学界のユニークな代表者として、彼を推賞した。主著『農業にたいする蒸気運輸の影響』（一八九〇年）、『経済学原理』その他。

スクヴォルツォフ、ペ・エヌ——統計家、八〇年代および九〇年代には『ユリヂーチェスキー・ヴェーストニク』に、のちにはマルクス主義的出版物にその著作を発表した。論文『わが国の経済的発展の特徴づけのための材料』（一八九五年）の共同執筆者で、それには彼の労作『ゼムストヴォ統計調査による農民経済の総括』が掲載された。

ステブート、イ・ア（一八三三—一九二三）——教授、ロシアにおける農学の著名な代表者。雑誌『ロシアの農業』を編集した。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇—一九四〇）——一八九〇年代には社会民主主義者。九〇年代には「合法マルクス主義」の最も有力な代表者。二〇世紀初めに、マルクス主義および社会民主党と決定的に手を切り、自由主義者の陣営に移行した。カデット（立憲民主党）の創立とともにその中央委員。十月革命後亡命。

ストルィピン、ペ・ア（一八六二—一九一一）——一九〇六年内相、同年首相（一一年まで）。ロシアの第一次革命の成果を一掃して暗黒な反動時代をつくりだしたので、その時期はストルィピン反動期といわれている。農業改革にかんする一九〇六年一一月九日の法律によって、クラークを育成してブルジョア君主制の支柱をつくりだそうとした。地主と大ブルジョアジーの同盟の利益の代表者。

ストルピャンスキー、エヌ・ペ（一八三四生）——教育家、六〇年代の初めに日曜学校の組織者のひとり。多くの文学的=教育学的著作を刊行した。

ズブコフ家——一八二〇年代に創立されたイヴァノヴォ=ヴォズネセンスク地方の織物工場主。五〇年代に蒸気機関をすえつけ、九〇年代には工場で約一、〇〇〇人の労働者がはたらいていた。

スミス、アダム（一七二三—一七九〇）——イギリスの経済学者、古典派経済学の創始者。一七五一年から一七六四年まではグラスゴー大学の哲学および論理学教授であった。経済学におけるスミスの最も主要な功績は、労働価値説の基礎をきずいたことにあるが、しかし労働の二重性を見ぬけなかったため、たとえば商品の価値構成における不変資本部分を見失うような大きな誤りもおかした。

セー、ジャン・バティスト（一七六七—一八三二）——フランスの経済学者。古典派経済学の俗流解説者、資本主義の弁護者であった。

ゼニン家——モスクワ県の家具製造家。製材所をもっていた（一八四五年に創立）。

セミョーノフ、デ・デ（一八三四—一九〇二）——進歩的な教育家で著述家。中学校の地理および歴史の教師。

セミョーノフ、ペ・ペ（一八二七—一九一四）——地理学者、統計家で政治家。チャン=シャンの地滑りの調査者として有名。

セメフスキー、ヴェ・イ（一八四八—一九一六）——ナロードニ

キ的傾向の歴史家。農民共同体を理想化した。

ゼーリング、マックス（一八五七―一九三九）――ドイツの経済学者。主として穀物貿易と農業経済学を研究し、一八八三年には北アメリカで農業を研究した。

ソローキン家――商人、一八六一年まではコストロマ県クラースノエ村の農奴であったが、宝石業で富をつんだ。農奴制の廃止後商人身分へ転じた。クラースノエ村における経営およびその近在の若干の小農場（約二〇〇デシャチーナ）のほかに、八〇年代にはペテルブルグに商館をもち、多量の製品をクラースノエ村からそこへおくった。

チエルネンコフ、エヌ・エヌ（一八六三生）――オリョール、モスクワ、サラトフ、トヴェーリのゼムストヴォではたらいた統計家。

チミリャーゼフ、デ・ア（一八三七―一九〇三）――統計学者、長いあいだ『大蔵省年報』および『ヴェーストニク・フィナンソフ』の編集者であり、種々の統計的活動を指導した。自由経済学会の準会員。彼の編集のもとに『ロシア工業の歴史的=統計的概観』（一八八三年）が刊行された

チョーマース、トマス（一七八〇―一八四七）――イギリスの経済学者で神学者、僧侶。「熱狂的なマルサス主義者のひとり」（マルクス）。著書『社会の道徳状態および道徳的展望との関連における経済学について』（一八三二年）がある。

チュプロフ、ア・イ（一八四二―一九〇八）――経済学者、評論家、ナロードニキ。自由主義的およびナロードニキ的学者グループの二巻の調査『ロシア国民経済のいくつかの側面にたいする収穫および穀物価格の影響』の編集にあたった。

チュルコフ家――商人、一八六一年まではコストロマ県クラースノエ村の農奴であった。宝石業で富をつみ、農奴制の廃止後は商人身分になった。

ディール、カール（一八六四―一九四三）――ドイツの経済学者、教授。講壇社会主義者のひとり。

ティロー、ア・ア（一八四九生）――コストロマの県庁顧問、コストロマのクスターリ工業の調査者。

テジャコフ、エヌ・イ（一八五九―一九二五）――社会医学の偉大な活動家。ウラルの冶金工場地方の農家出身。すでに学生時代に研究活動をはじめた。臨床医師として活動を開始したが、まもなく保健医師になった。一八八九年以来ヘルソン・ゼムストヴォで活動し、ロシアの南部地方における賃金労働者の研究をおこなった。その成果が『農業労働者と彼らにたいするヘルソン県の衛生監督の組織』（一八九六年）である。のちヴォロネジおよびサラトフのゼムストヴォで活動、サラトフ大学の設立に熱心に参加した。十月革命後も、一九二〇年三月以来、衛生人民委員会で療養地主務庁長官代理として活動した。

デミドフ家――工業家の家族、ピョートル一世の軍隊への兵器の納入で富裕になったトゥーラの鍛冶工、ニキータ・デミドヴィチ・アントゥフィエフの子孫（アントゥフィエフを見よ）。デミドフ家はその手中にウラルおよびシベリアの鉱山をにぎり、多くの新工場を設立した。

デメンチエフ、イエ・エム（一八五〇―一九一八）――保健医師で統計学者。彼のおこなったモスクワ県内諸郡の調査の資料によって、ロシアには土地との結びつきを失った工場労働者階級は存在しない、というナロードニキの当時の通念が反論された。主著『ロシアの工場、それは住民になにをあたえ、なにをうばうか』（一八九

三年）。

テレンチエフ、イ・エム――工場主。シューヤ市にある彼の工場は一八七二年に設立され、キャラコ、綿織物などを製造していた。一八九〇年代に工場には一、一六〇人の労働者がおり、生産額は一八〇万ルーブリに達した。

トゥガン-バラノフスキー、エム・イ（一八六五―一九一九）――「合法マルクス主義」の著名な代表者のひとりで、ストルーヴェの僚友。まもなく「マルクス批判家」の隊列に、のち自由主義者の陣営に転落。国内戦時代は白系のウクライナ中央ラーダ政府に参加。著書『近代イギリスにおける産業恐慌、その原因と国民生活にたいする影響』（一八九四年）、『過去および現在におけるロシアの工場』（一八九八年）。

トリロゴフ、ヴェ・ゲー――統計学者。八〇年代にサラトフ県統計委員会の副議長。著書『共同体と租税』（一八八二年）。

ドルグーシン、イ・ヴェ（一八一六生）――ヴャトカ県プラスチン郷オレホヴォ村の皮革工場の所有者（一八三九年設立）。一八九〇年の末にはこの工場に八〇人の労働者がはたらいていた。

ドレクスラー、グスタフ（一八三三―一八九〇）――ドイツのゲッティンゲンの農業研究所の教授で所長。一八八七年国会議員に選出された。著書『農業の静態学』（一八七三年）『収奪された土地の賠償価格』その他。

ニコライ―オン（エヌ・エフ・ダニエリソン）（一八八四―一九一八）――経済学者。八〇―九〇年代の自由主義的ナロードニキの最も著名な代表者のひとり。マルクスの『資本論』の最初のロシア語訳を完成した。この翻訳にかんして彼とマルクスおよびエンゲルスとのあいだに活発な文通があった。そのため、彼は長いあいだロシアにおけるマルクス主義の代表者とみなされていた。一八九三年刊行の著書『農民改革後のわが国社会経済の概要』は、ヴェ・ヴェの労作とともに、ナロードニキ主義の主要な経済学的基礎づけとなった。

ニッセロヴィチ、エリ・エヌ（一八五八生）――弁護士、経済学者で評論家。大蔵省に勤務し、のち国立銀行につとめた。第三国会の議員、カデット。著書『ロシア帝国工場立法史』、その他。

ハイネ、ハインリヒ（一七九七―一八五六）――ドイツの偉大な詩人。

バターリン、エフ・ア（一八二三―一八九五）――農業問題にかんする著述家。モスクワ農業学校講師（一八四七―一八五九年）。一八六〇年以来『国有財産省雑誌』（のちに『農業と林業』と改題）を編集、一八七九年からは『ロシア農業家年中行事一覧および便覧』（略称『バターリン・カレンダー』）を刊行した。

ハリゾメノフ、エス・ア（一八五四―一九一七）――ゼムストヴォ統計家。タヴリーダ県の農家調査、ウラヂーミル県のクスターリ経営の調査について一連の労作を著わし、サラトフ、トゥーラ、トヴェーリの各県ゼムストヴォの統計的調査を指導した。七〇年代には「土地と自由」団の有力な一員でもあった。

ビュッヒャー、カール（一八四七―一九三〇）――ドイツの経済学者、経済学および統計学の教授。経済史の研究に人種誌的および言語学的方法を応用した。国民経済の発展にかんする独自の理論をつくりだし、種々の経済段階を規定するための標識として「生産物が生産者から消費者へいたる道程の長さ」をとりあげた。こうして生産手段の所有形態と生産関係の階級的内容が見失われた。主著『国民経済の成立』（一八九三年）。

ピョートル大帝（一六七二―一七二五）――一六八二年から一七二五年までのツァーリ。全ロシア的な最初の皇帝。

ピンダロス（紀元前五二二―四四八）――ギリシアの抒情詩人。彼の作品のなかでは遊技の勝利者が賛美されている。ピンダロスの名は、あらゆる過度の『賛美者』の代名詞となっている。

プィチコフ、ゲ・エヌ――統計家、ノヴゴロド県の調査者。

フォーキン家――イヴァノヴォ―ヴォズネセンスク地方の工場主。企業は一八三八年に設立され、九〇年代には工場には四〇〇〇―五〇〇〇人の労働者がおり、生産額は二二〇万ルーブリに達した。

フォルカード、ユージェーヌ（一八二〇―一八六九）――フランスの経済学者で評論家。穏健自由主義者に属した。マルクスはフォルカードを俗流経済学者として特徴づけている。

フォルトゥナトフ、ア・エフ（一八五六―一九二五）――ナロードニキ的傾向の統計家、教授。農業経済にかんする多くの著書がある。

プシロフ家――コストロマ県クラースノエ村の工業家。すでに六〇年代に「ヴァシーリー・プシロフ父子」商会は六万ルーブリの資本をもっていた。八〇年代にはクラースノエ村の経営のほかに、モスクワ、ニジニーノヴゴロドその他で商業をおこなった。

ブーシェン、ア・ベ・フォン（一八三一―一八七六）――統計家。六冊の『大蔵省年報』（一八六九年以後）を刊行、その他、多くの統計的研究をロシア語、ドイツ語およびフランス語で発表。

プラゴヴェシチェンスキー、イ・イ（一九二四没）――オロネッツ県の調査者、九〇年代にペトロザヴォーツク市の統計委員会の書記。

プラゴヴェシチェンスキー、エヌ・ア（一八五九生）――クルスク県のゼムストヴォ統計家。多くの著作がある。十月革命後はクルスク県統計局ではたらいた。

プラージン、エヌ・エフ（一八六一―一九二一）――農学者、酪農業にかんする専門家。外国で専門の酪農教育を受けた。ロシアにおける酪農場の組織についてブランドフらと協力した。

ブランドフ、ヴェ・イ（一八四四―一九〇六）――有名な酪農場主。六〇―七〇年代には酪農アルテリの組織を開始した。ブランドフ商会は九〇年代には「ヴェおよびエヌ・ブランドフ兄弟商会、アルテリ酪農集積所」とよばれた。

プリーマク、ゲ・ア――統計家、移住問題にかんする報告の編者。

プルガーヴィン、ヴェ・エス（一八五八―一八九六）――経済学者、ゼムストヴォ統計家、自由主義的ナロードニキ派に属す。

ブルガーコフ、エス・エヌ（一八七一―一九四四）――経済学者で哲学者。最初は「合法マルクス主義者」、のちに「マルクス批判家」に移行し、とりわけ、二巻にわたる『資本主義と農業』において、完全に修正主義的な見地からマルクス主義理論一般、とくにその農業理論を反論しようと試みた。ついで完全な観念論に移り、政治的にはカデットに属するにいたった。

プルードン、ピエール・ジョゼフ（一八〇九―一八六五）――フランスの経済学者、社会学者で、小ブルジョアの思想的代表者。無政府主義理論家のひとり。彼の著書『経済的矛盾の体系』（副題『貧困の哲学』）は、マルクスの鋭い批判をまねいた（マルクスの『哲学の貧困』を見よ）。

プレトネフ、ヴェ・ア（一八三七―一九一五）――一八七〇年代にトヴェーリ県衛生委員会書記、のちに県庁の最古参の参事官。県のクスターリ営業にかんするいくつかの著作がある。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六—一九一八）——ロシアのマルクス主義の創始者で、その重要な理論家のひとり。第二回党大会後、はじめはボリシェヴィキに、その後メンシェヴィキに属したが、まもなくメンシェヴィキから去った。その後一時ボリシェヴィキに接近したが、第一次大戦中は祖国防衛派の最右翼の先頭に立った。十月革命後はソヴェト権力に反対したが、積極的な反対行動はしなかった。

フレロフスキー、エヌ（一八二九—一九一八）——ベルヴィ、ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチの匿名。評論家で社会学者。著書『ロシアにおける労働者階級の状態』（一八六九年）を、マルクスとエンゲルスは高く評価した。

プロトニコフ、エム・ア（一九〇三没）——ナロードニキ的傾向のゼムストヴォ統計家で評論家。ニジニーノヴゴロド県ゼムストヴォの統計局につとめていた。

ヘルクナー・ハインリヒ（一八六三—一九三二）——ドイツの経済学者、教授、「社会政策学会」副会長。

ヘルド、アドルフ（一八四四—一八八〇）——ドイツの経済学者、ボン、ベルリンにおける経済学教授。「社会政策学会」に属した。

ベルンシュタイン、エドウアルト（一八五〇—一九三二）——ドイツの社会民主主義者、修正主義者。一八八〇年以後エンゲルスの指導のもとに党中央機関紙『ゾツィアルデモクラート』（『社会民主主義者』）の編集者。エンゲルスの死後、公然と改良主義にはしり、一八九八年にはその著『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』（一八九九年）のなかでマルクス主義の理論的基礎の全面的な日和見主義的改訂を試みた。

ベローフ、ヴェ・デー——統計家。「ロシア商工助成協会」の代表者として、「ロシア・クスターリ工業調査委員会」の一員。

ポクロフスキー、ヴェ・イ（一八三八—一九一五）——経済学者、ゼムストヴォ統計家。一八九五年以来自由経済学会の統計委員会の代表者、一九〇二年以来学士院の準会員。

ポゴジェフ、ア・ヴェ（一八五三—一九一三）——保健医で、労働者の生活および労働立法の諸問題の評論家。工場衛生および労働者の衛生状態にかんする数多くの価値ある労作によって知られている。

ポゴリュプスキー、イ・エス——鉱山技師、シベリアのアムール辺境地方、サハリン州その他の諸州の多くの調査の著者。

ポストニコフ、ヴェ・イエ（一八四四—一九〇八）——『南部ロシアの農民経済』の著者。タヴリーダ県のゼムストヴォ統計資料を収集、研究し、農民の分化の事実を指摘した。レーニンは彼の見解を評価した。

ボーク、イ・イ（一八四八—一九一六）——統計家、七〇年代には内務省の中央統計委員会の出版物編集者。

ポトレソフ、ア・エヌ（一八六九—一九三四）——メンシェヴィキの指導者、ストルィピン、反動期には解党派の指導者となった。第一次世界大戦中は社会愛国主義者。

ボブロフ家——イヴァノヴォ-ヴォズネセンスク地方の工場主。一九世紀の初めに、経営をウラヂーミル県ストゥピノ村からシューヤ市へ移した。経営は、初めのころは賃金労働者をもたなかったが、一八九〇年代の終りには工場に七六人の労働者がはたらいていた。

ボリソフ、ヴェ・エム——トゥーラ県統計委員会の書記、『クスターリ工業調査委員会報告書』所載のトゥーラ県のクスターリ営業にかんする多くの調査の著者。

マイヤー、ロベルト（一八五五—一九一四）——オーストリアの経済学者、ウィーン大学教授。主著『所得の本質』（一八八七年）。

マイコフ、エリ・エヌ（一八三九—一九〇〇）——ロシア文学および民族誌の著名な研究者、学士院会員。大蔵省勤務からはじめて、一八六四年には統計委員会へ移り、一時はクスターリ調査委員会にも籍をおいた。

マゾフ家——商人、一八六一年まではコストロマ県クラースノエ村の農奴的農民。八〇年代には、クラースノエ村の宝石工場のほかに、シベリアその他の地方に商業をもっていた。

マノーヒン、ゲ——「クスターリ工業調査委員会」の委嘱によって活動したクスターリ営業の調査者。

マミン－シビリャーク、デ・エヌ（一八五二—一九一二）——ロシアの作家。主としてウラルの生活を描写した。

マルクス、カール（一八一八—一八八三）。

マルサス、ロバート（一七六六—一八三四）——イギリスの経済学者、僧侶。古典経済学における弁護論の代表者。その著『人口論』において、勤労階級の貧困の必然性を論証しようとつとめた。

マレッス、エリ・エヌ——ナロードニキ経済学者、統計家。論文集『ロシア国民経済のいくつかの側面にたいする収穫と穀物価格の影響』に掲載された論文「農民経済における穀物の生産と消費」の筆者。

ミハイロフスキー、エヌ・カ（一八四二—一九〇四）——ナロードニキ主義の最も著名な理論家。八〇—九〇年代のロシア・インテリゲンツィアの「思想上の支配者」。九〇年代には『ルースコエ・ボガーツトヴォ』誌を編集し、その誌上でマルクス主義者と激烈な論争をおこなった。

ミハイロフスキー、ヤ・テ（一八三四生）——一八八三年から一八九四年にいたるペテルブルグ地方の首席工場監督官。国民教育および労働問題にかんする著作がある。

ミハイロフスキー、ヴェ・ゲ（一八七一生）——統計家、マルクス主義者。一八九四年に地理学者として文筆生活に入る。一八九六年統計活動に移り、モスクワ県の農業統計を指導、一八九七年からはモスクワの都市統計を指導した。十月革命後もひきつづき統計活動に従事、中央統計局ではたらいた。

ミル、ジョン・ステュアート（一八〇六—一八七三）——イギリスの経済学者で実証主義的哲学者、折衷主義者。古典経済学の末流で、彼においてリカード学派の解体が完成する。『経済学原理』ほか、非常に多くの著書がある。

メンシチコフ、ヴェ・ア——モスクワ県クリン郡の地主、公爵。「クルゴスカヤ・エコノミヤ」（二三、〇〇〇デシャチーナ）という名の農場を所有していた。

モルドヴィノフ——タヴリーダ県の大地主。八万デシャチーナをもっていた。

モロゾフ、サッヴァ・ヴァシーリエヴィチ（一七七〇—一八六二）——工場主。有名な百万長者モロゾフ家の先祖。はじめ隷農、牧夫、馭者、のち絹織物工場で賃金労働者。一七九七年以来独立してはたらきはじめた。のちに絹織物業から毛織物業へ移り、一八四七年には綿織物業をはじめた。すでに一八二〇年には非常に富裕になり、一七、〇〇〇紙幣ルーブリを支払って領主リューミンから自由を買いとった。九〇年代にはモロゾフの諸企業で約四万人の労働者がはたらいていた。

モロゾフ家——工場主。エス・ヴェ・モロゾフの子孫。

ヤンソン、ユ・エ（一八三五―一八九三）――経済学者で統計家、ペテルブルグ大学教授（一八七六―一八八八年）。自由経済学会の代表者としてクスターリ工業調査委員会へ参加。

ユア、アンドリュー（一七七八―一八五七）――イギリスの化学者で経済学者、資本と大工業の擁護者。

ラウ、カール・ハインリヒ（一七九二―一八七〇）――ドイツの経済学者、統計家。アダム・スミス、リカードの追随者。

ラプジン、エヌ・エフ（一八三七―一九二七）――技師＝工学者、教授。一八六六年に、大蔵省からゴルバートフ郡およびムローム郡へ派遣されて、クスターリ工業の調査に従事した。

リカード、デイヴィド（一七七二―一八二三）――イギリスの経済学者。古典派経済学の最後の偉大な代表者。スミスの労働価値説を発展させたが、労働の二重性をも価値の形態をも見いだすことができなかった。著書『経済学および課税の原理』、その他多数。

リボピエール、ゲ・イ――オリョール県クロム郡の地主、伯爵。彼の農場は、多数の賃金労働者をつかい改良された技術を有する資本家的企業として経営されていた。

ルジェフスキー、ヴェ・ア（一八六六生）――技師、モスクワ郡ゼムストヴォ参事会議長、第四国会の議員、進歩派に参加していた。

レーニン、エス・エヌ（一八六〇生）――農学者、自由経済学会の活動家。

レメゾフ、エヌ・ヴェ（一八五七生）――著作家、ウファ県の測量家。一八八六年に刊行した著書『野蛮なバシキール人の生活の描写』で、当時ウファおよび隣接の諸県で流行していた土地略奪の実態を明らかにした。

ロシツキー、ア・イェ（一八六九生）――経済学者、統計家。農民経済にかんする一連の労作を書いた。十月革命後、ソ連邦中央統計局ではたらいていた。

ロッシャー、ヴィルヘルム・フリードリヒ（一八一七―一八九四）――ドイツの経済学者、ライプツィヒ大学教授。経済学における「歴史学派」の首領。「社会政策学会」の創始者で、「講壇社会主義者」のひとり。

ロードベルトゥス-ヤゲッツォフ、カール（一八〇五―一八七五）――ドイツの経済学者。「国家社会主義」の主要理論家のひとり。彼の地代論は、ポンメルンの大地主である彼自身の社会的地位を反映している。

ロマネンコ――医師、ハリコフ県の第七回医師会議における報告者のひとり。

レーニン10巻選集　別巻 1

1972年10月26日第 1 刷発行
1980年11月 6 日第 9 刷発行

定価 1500円

訳　者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者　平　智　亨

発行所　株式会社　大　月　書　店

印刷　三晃印刷
製本　関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話 (813) 4651 振替東京 3-16387

レーニン
10巻選集

大月書店